

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第250集

山ノ内Ⅲ遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道(山田道路)関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団

埋蔵文化財センター

やま うち
山ノ内III遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道(山田道路)関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600箇所
に及ぶ遺跡が確認されております。これらの先人の残した文化遺産を保存し、後世
に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の
充実も重要な一施策であります。特に幹線道路網の整備は、産業経済開発の大動脈
として、多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県
文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整
のもとに開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する
措置をとってまいりました。

本報告書の山ノ内Ⅲ遺跡は、東側に船越湾を望む山麓斜面上に立地し、平成5・6
年の発掘調査によって縄文時代の集落跡と、製鉄関連の遺構群が発見されました。調
査に引き続き出土資料の整理を進め、ここに報告書として発刊するはこびとなりまし
た。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助
となれば幸いです。

最後になりましたが、これまで発掘調査に及び報告書作成にご協力、ご援助を賜り
ました建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所、山田町教育委員会をはじめとする
関係各位に衷心より謝意を表します。

平成9年3月

財団法人岩手県文化振興事業団
理事長 船越 昭治

例 言

1. 本報告書は、岩手県下閉伊郡山田町船越第2地割18番地ほかに所在する山ノ内Ⅲ遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、三陸縦貫自動車道（山田道路）の建設に伴い遺跡の一部が消滅するため、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。調査は建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所と岩手県教育委員会文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 岩手県遺跡台帳に登録されている遺跡番号はMG18-0281、調査略号はYUⅢ-93、92である。
4. 調査面積・野外調査期間及び担当者は次のとおりである。

平成5年度 5,500㎡ 平成5年7月26日～10月28日 神敏明・渡辺洋一・稲垣雅宏
平成6年度 3,500㎡ 平成6年4月5日～8月12日 高橋佐知子・渡辺洋一・千葉孝雄
5. 室内整理期間と整理担当者（執筆者）は次のとおりである。なお、I章は工藤利幸が、平成5年度調査の遺構についての事実記載は主に神敏明が、平成6年度調査の遺構と遺物全般についての記載は高橋佐知子が行ったが、執筆責任は本章文末に記した。

平成5年11月1日～平成6年3月31日 神敏明・稲垣雅宏
平成6年11月1日～平成7年3月31日 高橋佐知子
6. 検出された遺構の種類と数は以下のとおりである。

縄文時代
竪穴住居跡21棟 竪穴状遺構2棟 土坑11基 炉跡2基 集石1基 焼土遺構37基

古代
竪穴住居跡3棟 土坑2基 製鉄炉8基 炭窯17基 炭置き場1か所
羽口捨て場1か所 焼土遺構4基
7. 分析・鑑定は次の方々、機関に依頼した。（敬称略）

考古地磁気調査 西谷忠師（秋田大学鉱山学部）
砂鉄・鉄滓分析 田口勇（専修大学）
砂鉄・木炭・鉄滓・炉壁分析 川鉄テクノリサーチ株式会社 分析・評価センター
石質鑑定 佐藤二郎（長内水源工業株式会社）
炭化材樹種同定 早坂松次郎（岩手県木炭協会）
8. 本報告書では、国土地理院発行の50,000分の1の地形図、建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所作成の1,000分の1の用地図を使用した。
9. 土層の色調観察には、農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」を用いた。
10. 発掘調査及び室内整理に際しては、次の方々、機関のご協力とご教示、ご指導を賜った。（敬称略）

穴澤義功 尾崎保博 熊谷常正 佐々木健 佐藤嘉広 田口勇 竹下将男
建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所 仙台市立根白石中学校 山田町教育委員会
11. 調査にかかわる諸記録及び遺物等の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

序
例言

[本 文]

I. 調査に至る経過	1	2. 古代	
II. 遺跡の立地と環境		(1) 竪穴住居跡	71
1. 遺跡の立地	1	(2) 土坑	79
2. 地形	1	(3) 製鉄炉群	80
3. 周辺の遺跡	7	(4) 炭窯	90
4. 基本土層	12	(5) 炭置き場	103
III. 調査方法と整理方法		(6) 羽口捨て場	104
1. 野外調査		(7) 焼土遺構	104
(1) 調査区の設定と遺構の呼称	14	V. 遺構外の出土遺物	
(2) 粗掘り	14	1. 土器、土製品	
(3) 精査と実測	14	(1) 縄文時代の土器	131
(4) 写真撮影	15	(2) 縄文時代の土製品	137
2. 室内整理		(3) 古代の土器	137
(1) 遺物の処理	15	2. 縄文時代の石器、石製品	137
(2) 遺物図版	15	3. 銭	143
(3) 遺構図面の処理	15	4. 鉄製品	143
(4) 遺構図版	16	5. 鉄滓	143
(5) 写真図版	16	VI. まとめ	
IV. 検出された遺構と遺物		1. 遺構	198
1. 縄文時代		(1) 縄文時代	198
(1) 住居跡	17	(2) 古代(平安時代)	200
(2) 竪穴状遺構	48	2. 遺物	202
(3) 土坑	49	付編 1 山ノ内III遺跡考古地磁気調査報告	204
(4) 柱穴状土坑	56	2 山田町山ノ内III遺跡出土 砂鉄、木炭、鉄滓 および炉壁の分析・調査	208
(5) 炉跡	56	3 山ノ内III遺跡鉄資料検討結果	255
(6) 集石	57	報告書抄録	
(7) 焼土遺構	57		
(8) 廃棄土	70		

[図 版]

第1図 岩手県全図	2	第8図 遺構全体図(2)飛び地 I、II区	21
第2図 遺跡位置図	3	第9図 VIB 0 j 住居跡	23
第3図 地形分類図	4	第10図 VIC 7 a 住居跡	24
第4図 周辺の地形	5	第11図 VIC 7 d 住居跡	25
第5図 周辺の遺跡位置図	9	第12図 VIC 0 a - 1 住居跡	27
第6図 VIB 8 j 住居跡	18	第13図 VIC 0 a - 2 住居跡(1)	28
第7図 遺構配置図	19	第14図 VIC 0 a - 2 住居跡(2)	29

第15図	VIC 0 b住居跡……………30	VIC 7 d住居跡、VIC 7 a住居跡、VIC 0 a - 1住居跡(1) ……107	
第16図	VII A 1 e - 1住居跡(1)……………31	第59図	遺構内出土遺物3 VIC 0 a - 1住居跡(2) ……108
第17図	VII A 1 e - 1住居跡(2)、- 2住居跡 ……32	第60図	遺構内出土遺物4 VIC 0 a - 2住居跡、VIC 0 b住居跡、VII A 1 e - 1住居跡(1) ……109
第18図	VII A 3 i住居跡……………34	第61図	遺構内出土遺物5 VII A 1 e - 1住居跡(2)、VII A 1 e - 2住居跡、VII A 3 i住居跡、VII A 8 i住居跡(1)……………110
第19図	VII A 8 i住居跡……………35	第62図	遺構内出土遺物6 VII A 8 i住居跡(2)、VII A 0 c住居跡 ……111
第20図	VII A 0 c住居跡……………36	第63図	遺構内出土遺物7 VII A 0 d住居跡、VII B 2 a - 1住居跡、VII B 3 a住居跡、VII B 8 b住居跡、VII B 0 b住居跡、VII C 1 b住居跡 ……112
第21図	VII A 0 d住居跡……………37	第64図	遺構内出土遺物8 VII C 3 f住居跡、VII C 5 f住居跡、VIC 7 b竪穴状遺構、VII B 1 c竪穴状遺構(1) ……113
第22図	VII B 2 a - 1住居跡、VII B 2 a - 2住居跡 ……40	第65図	遺構内出土遺物9 VII B 1 c竪穴状遺構(2) ……114
第23図	VII B 3 a住居跡……………41	第66図	遺構内出土遺物10 VII B 1 c竪穴状遺構(3)、VIC 9 b土坑、VII C 1 c土坑、VIII A 1 e - 1土坑、VII B 2 b - 2土坑……………115
第24図	VII B 8 b住居跡……………42	第67図	遺構内出土遺物11 焼土遺構 ……116
第25図	VII B 0 b住居跡……………44	第68図	遺構内出土遺物12 II B 4 h住居跡、VII A 3 b住居跡(1) ……117
第26図	VII C 1 b住居跡……………45	第69図	遺構内出土遺物13 VII A 3 b住居跡(2) ……118
第27図	VII C 3 f住居跡……………46	第70図	遺構内出土遺物14 VIII A 1 d住居跡 ……119
第28図	VII C 5 f住居跡……………48	第71図	遺構内出土遺物15 II C 1 f炭窯、II C 2 e製鉄炉群、II C 1 d羽口捨て場2 ……120
第29図	竪穴状遺構……………49	第72図	遺構外鉄滓出土状況(1)飛び地 ……140
第30図	土坑(1)……………51	第73図	遺構外鉄滓出土状況(2)遺跡全体 ……141
第31図	土坑(2)……………54	第74図	遺構外出土遺物 土器1 ……144
第32図	炉跡……………57	第75図	遺構外出土遺物 土器2 ……145
第33図	VII B 1 d集石……………58	第76図	遺構外出土遺物 土器3 ……146
第34図	焼土遺構(縄文時代)(1)……………59	第77図	遺構外出土遺物 土器4 ……147
第35図	焼土遺構(縄文時代)(2)……………61	第78図	遺構外出土遺物 土器5 ……148
第36図	焼土遺構(縄文時代)(3)……………63	第79図	遺構外出土遺物 土器6 ……149
第37図	焼土遺構(縄文時代)(4)、柱穴状土坑群 ……68	第80図	遺構外出土遺物 土器7 ……150
第38図	VII A 2 d廃棄土……………70	第81図	遺構外出土遺物 土器8 ……151
第39図	II B 4 h住居跡(1)……………72	第82図	遺構外出土遺物 土器9 ……152
第40図	II B 4 h住居跡(2)、カマド ……73	第83図	遺構外出土遺物 土器10 ……153
第41図	VII A 3 b住居跡(1)……………75	第84図	遺構外出土遺物 土器11 ……154
第42図	VII A 3 b住居跡(2)、カマド ……76	第85図	遺構外出土遺物 土器12 ……155
第43図	VIII A 1 d住居跡(1)……………78	第86図	遺構外出土遺物 土器13 ……156
第44図	VIII A 1 d住居跡(2)、カマド ……79	第87図	遺構外出土遺物 土器14 ……157
第45図	土坑(古代) ……80	第88図	遺構外出土遺物 土器15 ……158
第46図	II C 2 e製鉄炉群(1) a炉……………81	第89図	遺構外出土遺物 土器16 ……159
第47図	II C 2 e製鉄炉群(2) b炉、c炉、f炉…84	第90図	遺構外出土遺物 土器17 ……160
第48図	II C 2 e製鉄炉群(3) d炉、e炉 ……86		
第49図	II C 2 e製鉄炉群(4) g炉、1~3号土坑 ……89		
第50図	II C 2 e製鉄炉群鉄滓出土状況……………91		
第51図	II C 2 e製鉄炉群砂鉄出土状況……………92		
第52図	炭窯(1)……………94		
第53図	炭窯(2)……………97		
第54図	炭窯(3)……………99		
第55図	炭窯(4)、II B 5 h炭置き場、II C 1 e羽口捨て場1、2 ……102		
第56図	焼土遺構(古代) ……105		
第57図	遺構内出土遺物1 VII B 8 j住居跡、VII B 0 j住居跡(1) ……106		
第58図	遺構内出土遺物2 VII B 0 j住居跡(2)、		

第91図	遺構外出土遺物	土器18	161	第103図	遺構外出土遺物	石器11	173
第92図	遺構外出土遺物	土器19	162	第104図	遺構外出土遺物	石器12	174
第93図	遺構外出土遺物	石器1	163	第105図	遺構外出土遺物	石器13	175
第94図	遺構外出土遺物	石器2	164	第106図	遺構外出土遺物	石器14	176
第95図	遺構外出土遺物	石器3	165	第107図	遺構外出土遺物	石器15	177
第96図	遺構外出土遺物	石器4	166	第108図	遺構外出土遺物	石器16	178
第97図	遺構外出土遺物	石器5	167	第109図	遺構外出土遺物	石器17	179
第98図	遺構外出土遺物	石器6	168	第110図	遺構外出土遺物	石器18	180
第99図	遺構外出土遺物	石器7	169	第111図	遺構外出土遺物	石器19	181
第100図	遺構外出土遺物	石器8	170	第112図	遺構外出土遺物	石器20	182
第101図	遺構外出土遺物	石器9	171	第113図	遺構外出土遺物	石器21、石製品、銭	183
第102図	遺構外出土遺物	石器10	172	付図	遺構全体図(1)		

[写真図版]

写真図版1	調査区全景(航空写真)	265	写真図版32	焼土遺構(縄文時代)(3)	296
写真図版2	遺跡遠景、遺跡土層	266	写真図版33	焼土遺構(縄文時代)(4)	297
写真図版3	VIB 8 j 住居跡	267	写真図版34	焼土遺構(縄文時代)(5)	298
写真図版4	VIB 0 j 住居跡	268	写真図版35	焼土遺構(縄文時代)(6)	299
写真図版5	VIC 7 a 住居跡	269	写真図版36	焼土遺構(縄文時代)(7)	300
写真図版6	VIC 7 d 住居跡	270	写真図版37	焼土遺構(縄文時代)(8)、VII B 1 d 集石、VII A 2 d 廃棄土	301
写真図版7	VIC 0 a - 1 住居跡	271	写真図版38	II B 4 h 住居跡(1)	302
写真図版8	VIC 0 a - 2 住居跡	272	写真図版39	II B 4 h 住居跡(2)	303
写真図版9	VIC 0 b 住居跡	273	写真図版40	VII A 3 b 住居跡	304
写真図版10	VII A 1 e - 1 住居跡	274	写真図版41	VIII A 1 d 住居跡(1)	305
写真図版11	VII A 1 e - 2 住居跡	275	写真図版42	VIII A 1 d 住居跡(2)	306
写真図版12	VII A 3 i 住居跡	276	写真図版43	VIII A 1 d 住居跡(3)、土坑(古代)	307
写真図版13	VII A 8 i 住居跡	277	写真図版44	II C 2 e 製鉄炉群(1) a 炉、b 炉	308
写真図版14	VII A 0 c 住居跡	278	写真図版45	II C 2 e 製鉄炉群(2) c 炉、d 炉、e 炉	309
写真図版15	VII A 0 d 住居跡	279	写真図版46	II C 2 e 製鉄炉群(3) f 炉、g 炉、1 ~ 2 号土坑	310
写真図版16	VII B 2 a - 1 住居跡	280	写真図版47	II C 2 e 製鉄炉群(4) 羽口捨て場、炭置き場、遺構外遺物出土状況	310
写真図版17	VII B 2 a - 2 住居跡	281	写真図版48	炭窯(1)	312
写真図版18	VII B 3 a 住居跡	282	写真図版49	炭窯(2)	313
写真図版19	VII B 8 b 住居跡	283	写真図版50	炭窯(3)	314
写真図版20	VII B 0 b 住居跡	284	写真図版51	炭窯(4)	315
写真図版21	VII C 1 b 住居跡	285	写真図版52	焼土遺構(古代)	316
写真図版22	VII C 3 f 住居跡	286	写真図版53	遺構内出土遺物 VIB 8 j 住居跡、VIB 0 j 住居跡、VIC 7 a 住居跡、VIC 7 d 住居跡、VIC 0 a - 1 住居跡(1)	317
写真図版23	VII C 5 f 住居跡	287	写真図版54	遺構内出土遺物 VIC 0 a - 1 住居跡(2)、VIC 0 a - 2 住居跡、VIC 0 b 住居跡、VII A 1 e - 1 住居跡	318
写真図版24	VIC 7 b 竪穴状遺構	288	写真図版55	遺構内出土遺物 VII A 1 e - 2 住居	
写真図版25	VII B 1 c 竪穴状遺構	289			
写真図版26	土坑(縄文時代)(1)	290			
写真図版27	土坑(縄文時代)(2)	291			
写真図版28	土坑(縄文時代)(3)	292			
写真図版29	炉跡	293			
写真図版30	焼土遺構(縄文時代)(1)	294			
写真図版31	焼土遺構(縄文時代)(2)	295			

	跡、VII A 3 i 住居跡、VII A 8 i 住居跡、VII A 0 c 住居跡、VII A 0 d 住居跡、VII B 2 a - 1 住居跡、VII B 3 a 住居跡、VII B 8 b 住居跡 ……………319	写真図版67	遺構外出土遺物	土器 3	……………331
写真図版56	遺構内出土遺物 VII B 0 b 住居跡、VII C 1 b 住居跡、VII C 3 f 住居跡、VII C 5 f 住居跡、VIC 7 b 竪穴状遺構、VII B 1 c 竪穴状遺構(1) ……………320	写真図版68	遺構外出土遺物	土器 4	……………332
写真図版57	遺構内出土遺物 VII B 1 c 竪穴状遺構(2)、IV C 9 c 土坑、VIC 1 c 土坑、VII A 1 e - 1 土坑、VII A 1 e - 2 土坑、VII B 7 b - 2 土坑、焼土遺構(1) ……321	写真図版69	遺構外出土遺物	土器 5	……………333
写真図版58	遺構内出土遺物 焼土遺構(2)、II B 4 h 住居跡、VII A 3 b 住居跡(1) ……322	写真図版70	遺構外出土遺物	土器 6	……………334
写真図版59	遺構内出土遺物 VII A 3 b 住居跡(2)、VIII A 1 d 住居跡(1) ……………323	写真図版71	遺構外出土遺物	土器 7	……………335
写真図版60	遺構内出土遺物 VIII A 1 d 住居跡(2)、II C 1 f 炭窯、II C 2 e 製鉄炉群、羽口捨て場 ……………324	写真図版72	遺構外出土遺物	土器 8	……………336
写真図版61	遺構内出土遺物 VIII A 1 d 住居跡(3) 325	写真図版73	遺構外出土遺物	土器 9	……………337
写真図版62	遺構内出土遺物 II C 2 e 製鉄炉群製鉄関連遺物(1) ……………326	写真図版74	遺構外出土遺物	土器10	……………338
写真図版63	遺構内出土遺物 II C 2 e 製鉄炉群製鉄関連遺物(2) ……………327	写真図版75	遺構外出土遺物	土器11	……………339
写真図版64	遺構内出土遺物 II C 2 e 製鉄炉群製鉄関連遺物(3) ……………328	写真図版76	遺構外出土遺物	土器12	……………340
写真図版65	遺構外出土遺物 土器 1 ……………329	写真図版77	遺構外出土遺物	土器13、土製品	…341
写真図版66	遺構外出土遺物 土器 2 ……………330	写真図版78	遺構外出土遺物	石器 1	……………342
		写真図版79	遺構外出土遺物	石器 2	……………343
		写真図版80	遺構外出土遺物	石器 3	……………344
		写真図版81	遺構外出土遺物	石器 4	……………345
		写真図版82	遺構外出土遺物	石器 5	……………346
		写真図版83	遺構外出土遺物	石器 6	……………347
		写真図版84	遺構外出土遺物	石器 7	……………348
		写真図版85	遺構外出土遺物	石器 8	……………349
		写真図版86	遺構外出土遺物	石器 9	……………350
		写真図版87	遺構外出土遺物	石器10	……………351
		写真図版88	遺構外出土遺物	石器11	……………352
		写真図版89	遺構外出土遺物	石器12	……………353
		写真図版90	遺構外出土遺物	石器13	……………354
		写真図版91	遺構外出土遺物	石器14	……………355
		写真図版92	遺構外出土遺物	石器15	……………356
		写真図版93	遺構外出土遺物	石器16、銭、鉄製品	…357

[表]

第1表	周辺の遺跡(1)縄文時代中期後葉~末葉 ……10	第12表	炭化物樹種同定結果 ……………126
第2表	周辺の遺跡(2)平安時代 ……………10	第13表	鉄滓、鉄塊系遺物計測表 ……………127
第3表	周辺の遺跡(3)製鉄関連遺跡 ……………10	第14表	石鏃の分類概念 ……………138
第4表	周辺の遺跡一覧 ……………11	第15表	石匙の分類概念 ……………138
第5表	遺構内出土遺物観察表(1)土器(縄文時代) ……121	第16表	遺構外出土遺物観察表(1)土器(縄文時代) ……184
第6表	遺構内出土遺物観察表(2)石器、石製品 ……123	第17表	遺構外出土遺物観察表(2)土製品(縄文時代) ……191
第7表	遺構内出土遺物観察表(3)土師器 ……124	第18表	遺構外出土遺物観察表(3)土師器 ……191
第8表	遺構内出土遺物観察表(4)須恵器 ……124	第19表	遺構外出土遺物観察表(4)須恵器 ……191
第9表	遺構内出土遺物観察表(5)土製品(羽口を除く) ……………124	第20表	遺構外出土遺物観察表(5)石器、石製品 ……192
第10表	遺構内出土遺物観察表(6)羽口 ……124	第21表	遺構外出土遺物観察表(6)銭 ……………197
第11表	遺構内出土遺物観察表(7)鉄滓、砂鉄、鉄塊系遺物 ……………126	第22表	遺構外出土遺物観察表(7)鉄製品 ……197

I 調査に至る経過

三陸縦貫自動車道は、宮城県仙台市と岩手県宮古市を結ぶ延長約220kmの一般国道の自動車専用道路であり、八戸、久慈自動車道とともに、昭和62年6月指定された全国約14,000kmの高規格幹線道路網の一部をなすものである。

山田道路は、山田町関谷と山田町船越の間7,800mの区間であり、国道45号の市街地での増大する交通需要や隘路の解消を目的に一部を昭和62年に三陸縦貫自動車道として事業化されたものであるが、昭和63年には新たに南側延長部を合わせて高規格道路として事業の促進が図られた。

この間の埋蔵文化財包蔵地については岩手県教育委員会が昭和62年度に分布調査と試掘調査を実施し、平成元年9月5日付「教文第415号」で事業について照会し、9月25日付「建東陸調第111号」の回答を受けて建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これを受けて当埋蔵文化財センターは、平成5年6月29日の委託契約に基づいて山ノ内Ⅲ遺跡の調査に着手することとなり、平成5年7月26日から10月28日まで5,500㎡の調査を行った。翌平成6年には残る3,500㎡について4月1日に契約を締結し、4月5日から6月30日までの予定で調査を実施したが、検出された遺構が多かったことから同年8月12日まで調査期間を延長して実施し、8月12日に調査を終えて現場を撤収した。(工藤利幸)

II 遺跡の環境と立地

1. 遺跡の立地 (第1、2図)

山ノ内Ⅲ遺跡は東日本旅客鉄道山田線岩手船越駅の南方約1kmの距離に位置している。遺跡の所在する山田町は、県都盛岡市から東南東に直線距離で73km、太平洋に面した陸中海岸のほぼ中ほどに位置している。町の東方を海岸線に沿って山田線と国道45号が南北に縦断する。東側は太平洋に面し、北側は宮古市、南側は大槌町、西側は川井村及び大槌町と隣接し、総面積は、263.54km²である。

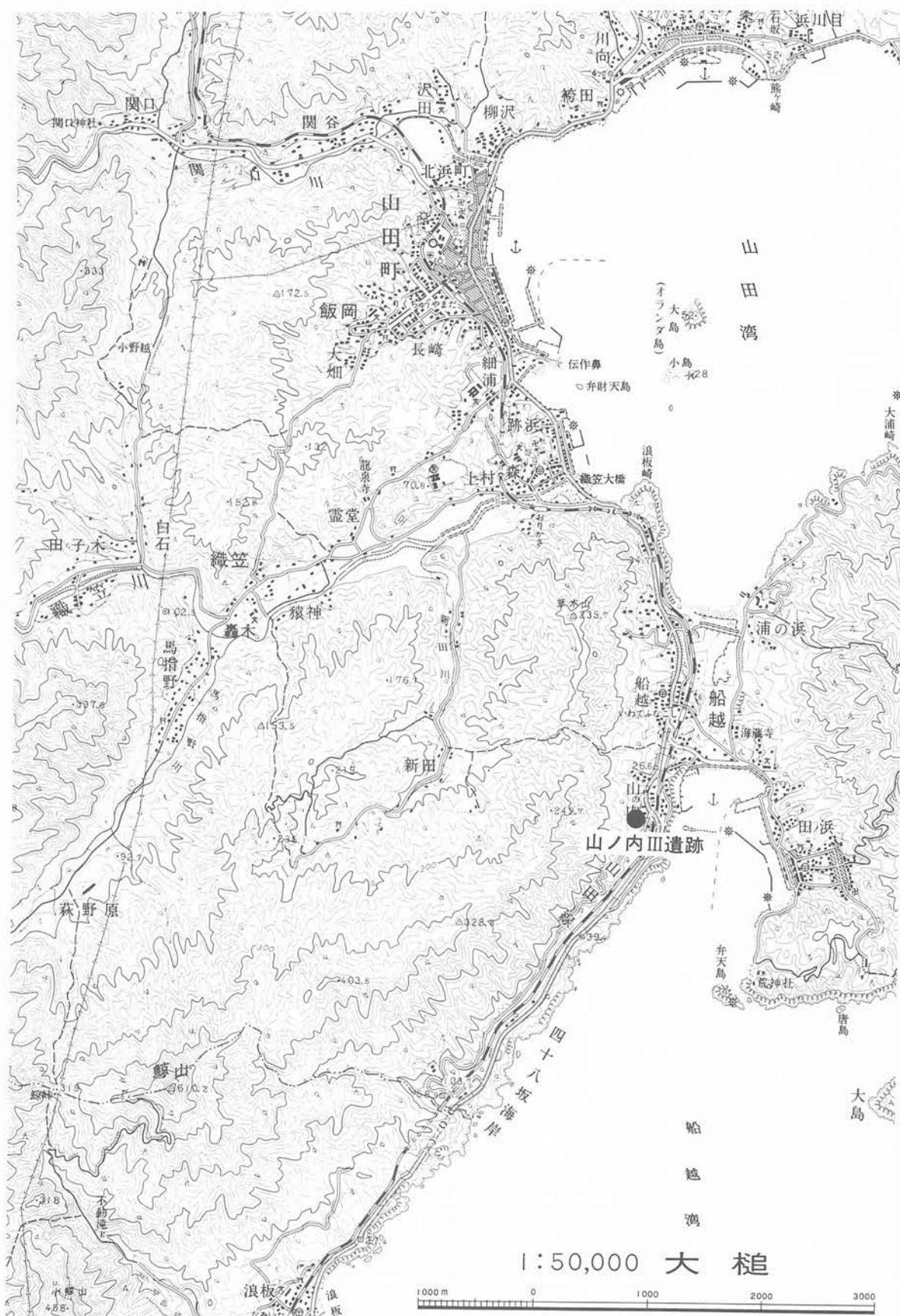
本遺跡は、国土地理院発行の5万分の1地形図「大槌」(NJ-54-13-4)、及び2万5千分の1地形図「陸中山田」(NJ-54-13-4-1)の図幅に含まれ、北緯39度29分11秒、東経141度58分21秒付近にある。

2. 地形 (第3、4図、写真図版1、2)

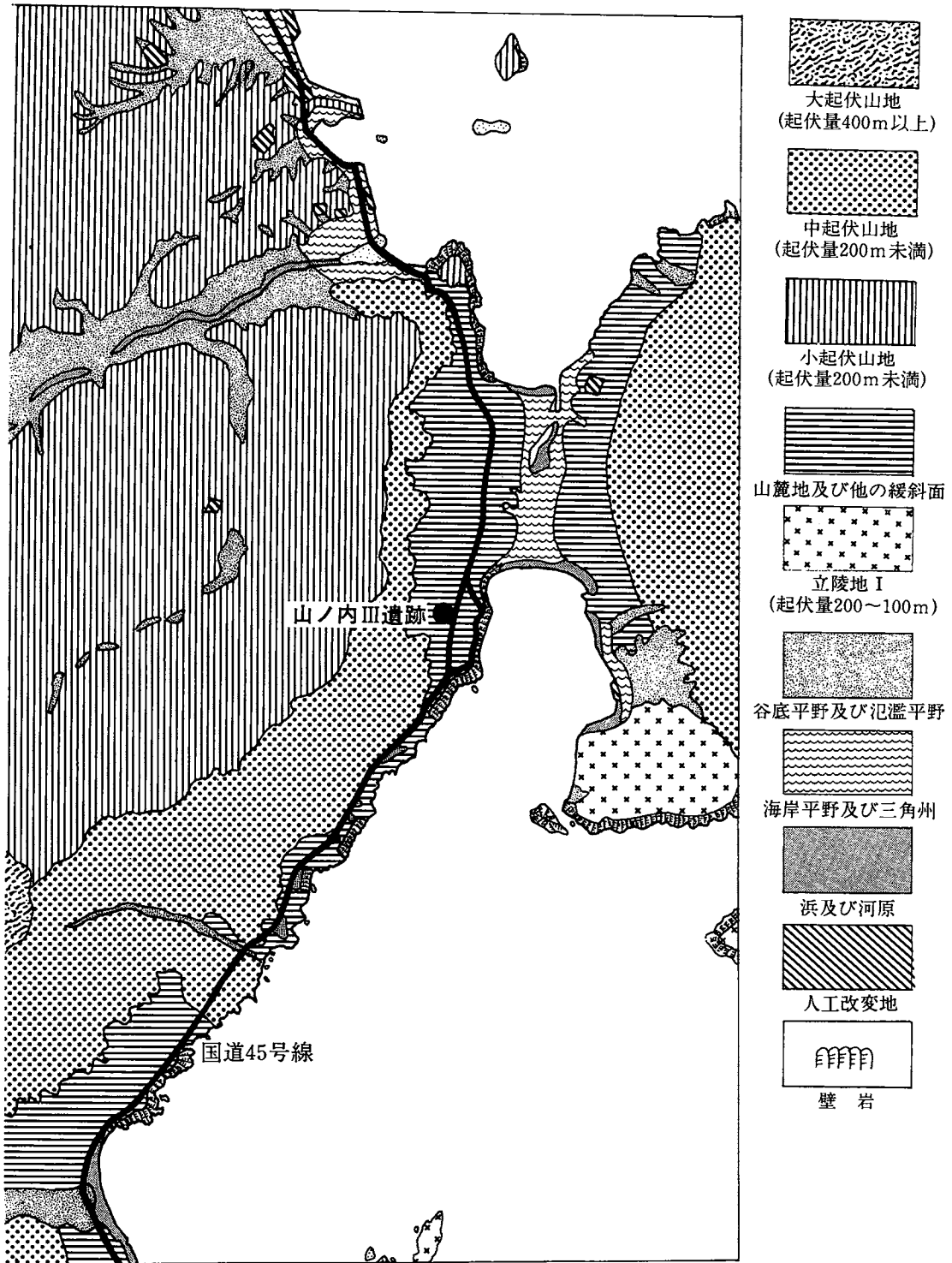
遺跡が位置する山田町の東側は太平洋に面し、湾と岬が入り組んだ屈曲の多いリアス式海岸特有の海岸線を呈している。したがって平坦面は少なく、山地が海に張り出す地形が大部分を占める。町内の大部分を占める山地は北上山地の中部東端にあたり、太平洋岸沿いに丘陵地や海岸段丘を伴っている。標高300~800mの山地が海岸まで迫る地形のため、低地は河川の流域



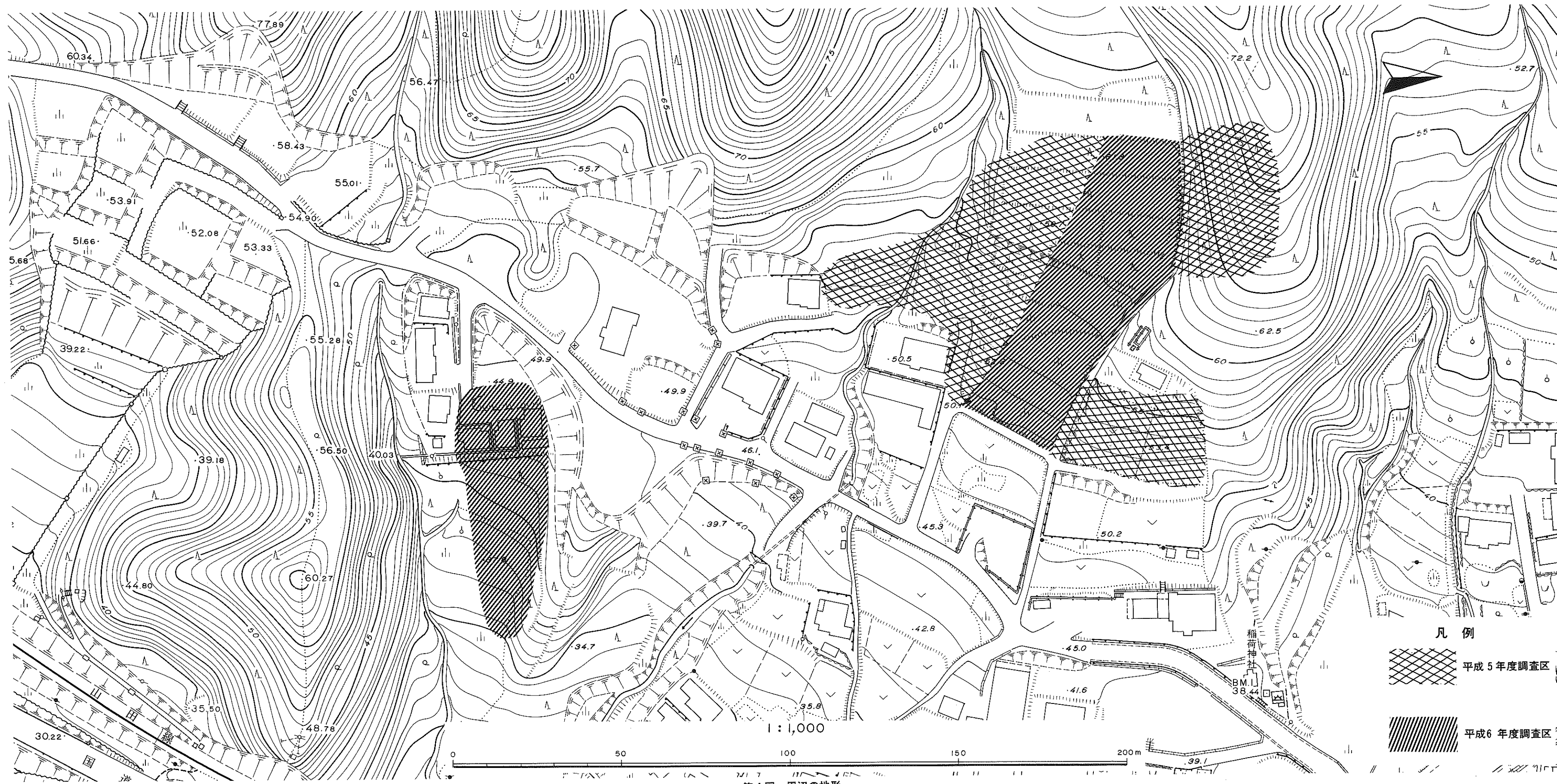
第1図 岩手県全図



第2図 遺跡位置図



第3図 地形分類図



第4図 周辺の地形

や山田湾、船越湾に面する比較的狭い範囲に限定される。大槌町と北西部の高滝森(1,160m)から水呑場山(948m)、鳥古山(850m)、山母森(806m)を経て鯨山(610m)に至る尾根は高く険しい。

町内の主な河川は山田湾の湾奥に注ぎ込む関口川と織笠川である。他に宮古湾に注ぐ津軽石川や織笠川の支流の馬指野川、新田川等がある。これらの川は水呑場山から鯨山に至る尾根の東側を源流部として深いV字谷を刻みながら東流を続ける。上流域で侵食、運搬された土砂は中・下流域で堆積し、小規模な平地を形成している。この平地は、大部分が山地である山田町にとって貴重なものであり、主に農耕地として利用されている。

地形と地質の関連を見ると、豊間根から船越に至る国道45号線沿いの細長い地域が、比較的なだらかな丘陵状の地形を示すのに対して、田子ノ木、関口、日当を結ぶ南北線の西側は高く険しい尾根を連ねている。また東側の半島部の十二神山(731m)、大沢山(673m)、霞露ヶ岳(504m)も中央の丘陵状の地域から比べると目立って高く突き出ている。これらの相違は中央の南北に細長い地域が風化の進んだ花崗岩からなり、西部や東部の急峻な地域は粘板岩・チャート・原地山層からなっているためである。

山ノ内III遺跡は山麓地の緩斜面に位置し、標高は55~72mで、遺跡の現況は山林及び原野であるが原野の一部は水田として利用されていた時期がある。(神 敏明)

3. 周辺の遺跡 (第5図)

山田町内の遺跡は、岩手県教育委員会文化課が作成した「岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧」によると150か所余りが登録されている。遺跡の分布は主に山田湾を囲む小規模な平地を見下ろす尾根の鞍部(特に大沢、飯岡、織笠などの山田湾北岸及び西岸)、関口川、織笠川、新田川が形成した河岸段丘上、船越湾を望む尾根の鞍部や同湾に注ぐ小河川の谷筋などに多く見られる。

山ノ内III遺跡の周辺には周知の遺跡が多数存在する。また、当埋蔵文化財センターでは平成2年以来、三陸縦貫自動車道路の建設にともなう遺跡の発掘調査を毎年行い、平成8年度現在発掘遺跡数は12遺跡にのぼっている。それらの調査成果も上がっているため、以下本遺跡と関連の深い遺跡について述べる。

今回の調査で出土した遺物には、縄文時代早期後半、前期初頭、前期前葉~中葉、中期前葉~末葉、後期、晩期、平安時代のものがある。これらの中で、中期前葉、後期、晩期の遺物は少数であり、遺構のほとんどが中期後葉~末葉、平安時代のものであるため、主に早期、前期、中期後葉~末葉、平安時代、及び製鉄関連の遺跡について概観することとする。

早期の遺跡としては、大沢の浜川目遺跡(42~44)、図中にはないが豊間根の宇名田遺跡があげられる。いずれも未調査であるが、貝殻条痕文、貝殻腹縁文の土器が出土している。

前期に入ると遺跡数は増大する。周知の遺跡だけでも、早川遺跡(図外)、猿神遺跡(86)、沢田I遺跡(18)、馬田遺跡(図外)、浜川目遺跡(42~44)、多門遺跡(45)、関口遺跡(2、3)、上野台遺跡(5~7)、後山II遺跡(70)、馬子沢遺跡(図外)、鹿渡遺跡、馬鞍遺跡、宇名田遺跡(図外)、上野遺跡(図外)、新田遺跡(100、101)、天王平遺跡(102)、田茂沢遺跡(78)、日当II遺跡(80)である。これらの遺跡からは不整然り糸文や網目状然り糸文、斜縄文を施した繊維を含む土器片が出土しているが、いずれも未調査である。

中期後葉～末葉の遺跡としては、大沢川遺跡、上台遺跡、大洞遺跡(125)、猿神遺跡、廻立遺跡、間木戸遺跡、沢田III遺跡、房の沢遺跡、馬田遺跡、上野畑遺跡、浜川目遺跡、多門遺跡、上野台遺跡、越田遺跡など多くの遺跡がある。そのほか当埋蔵文化財センターが調査した遺跡は第1表のとおりである。船越湾や山田湾を望む尾根の鞍部に同時期の集落が形成される傾向がある。

次に平安時代の遺跡として、坊主山遺跡、轟木遺跡、沢田III遺跡、関口遺跡、後山I遺跡、小谷鳥遺跡、船石遺跡、羽々ノ下遺跡、下田部II遺跡、日当沢遺跡、田茂沢遺跡がある。埋蔵文化財センターが調査した遺跡は第2表にあげられるが、住居跡が検出されたか否かにかかわらず、鍛冶や製鉄などの製鉄関連遺構が検出されている例が多い。また、遺構が検出されていなくても、鉄滓や羽口が出土している遺跡があり、調査区外に製鉄関連の遺構の存在を伺わせる。これらの遺跡は船越湾や山田湾に注ぐ中小河川の谷筋や尾根上に立地している。

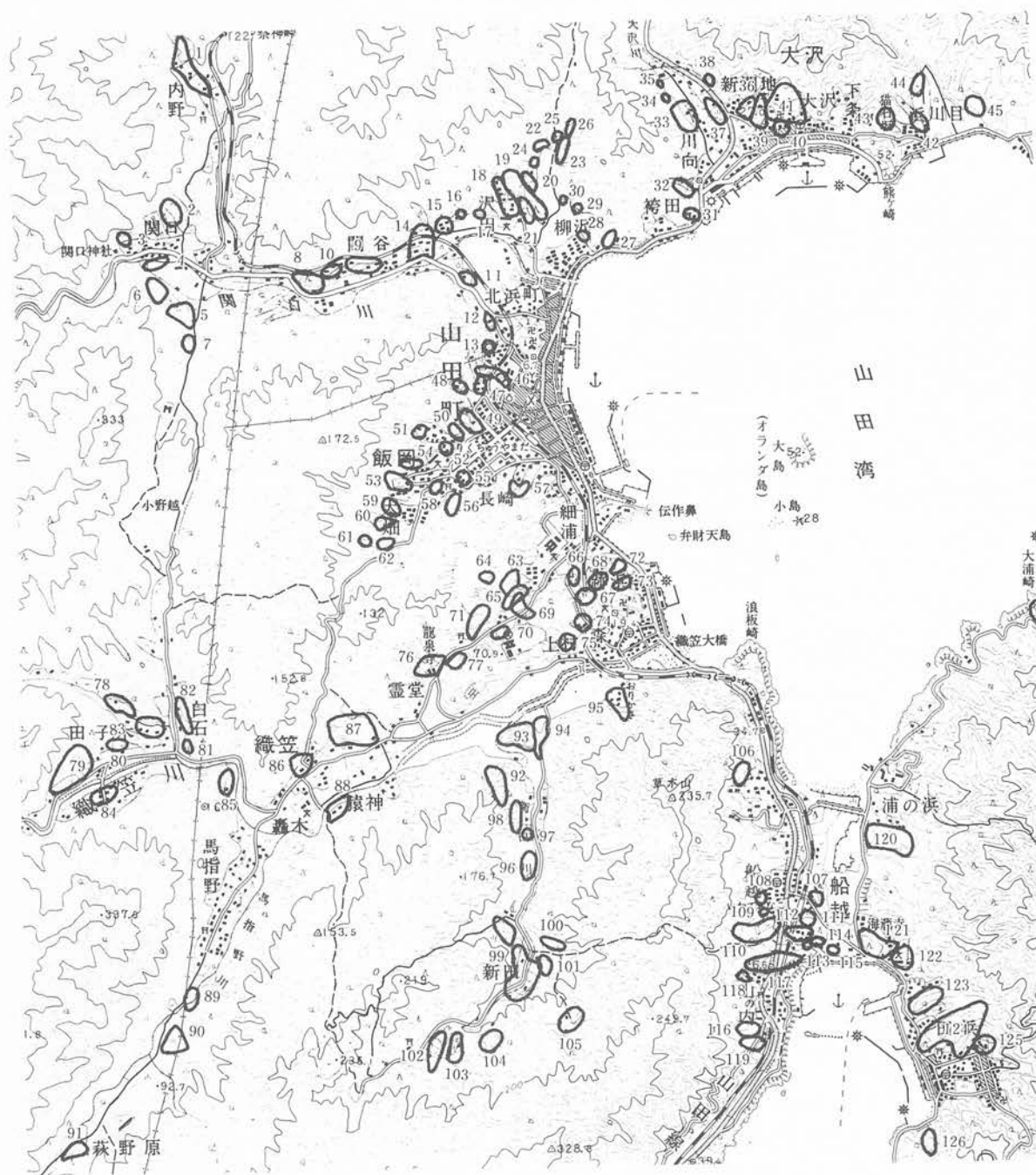
**平安時代の
鍛冶工房** また、表にはないが本遺跡から南方へ約8.8km離れた大槌湾に面する夏本遺跡では平安時代の鍛冶工房が検出されている。

最後に製鉄関連遺跡について述べる。当埋蔵文化財センターで調査した遺跡で、時代が特定できない遺跡、及び奈良時代と推定される遺跡は第3表のとおりである。湾台II遺跡、大畑I遺跡は出土した遺物から製鉄関連の遺構の存在を伺わせる。また、上村遺跡では奈良時代に属すると考えられる沿岸では最も古い製鉄炉のほか鍛冶炉や炭窯を検出しており、特筆される遺跡である。この他に小谷鳥遺跡など、未調査だが鉄滓が表土で採集できる遺跡も数多くある。山ノ内III遺跡周辺の地元住民によれば、「かなくそ(鉄滓)なんかはどこの沢でも拾える。」というくらい山田町では多く目にするものがある遺物であるらしい。このことは、現在までの調査結果は言うに及ばず、この地域で古代から盛んに鉄生産が行われていたことを物語っている。

(高橋佐知子)

参考文献

- 山田町教育委員会 1986『山田町史 上巻』
文化庁文化財保護課 1984『全国遺跡地図 岩手県』
岩手県立博物館 1990『北の鉄文化』
佐々木清文 1990「岩手県の製鉄遺跡(1)」『岩手県立博物館研究報告』第8号
1994「岩手県の製鉄遺跡(2)」『紀要』14岩手県埋蔵文化財センター
岩手県埋蔵文化財センター 1989『夏本遺跡発掘調査報告書(第134集)』
1992『細浦I遺跡・細浦II遺跡発掘調査報告書(第169集)』
1993『湾台II・湾台III遺跡発掘調査報告書(第186集)』
1994『上村遺跡発掘調査報告書(第202集)』
1995『大畑I遺跡・大畑II遺跡発掘調査報告書(第218集)』
1995『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(第229集)』
1996『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(第246集)』
1996『山ノ内II遺跡発掘調査報告書(第249集)』



第5図 周辺の遺跡位置図

第1表 周辺の遺跡(1)縄文時代中期後葉～末葉

遺跡No	遺跡名	調査年度	所在地	遺跡の概要・遺物等	報告書名
64	細浦II	平成元	山田町織笠第14地割内	遺構なし 後葉の土器片少量	岩手埋文第169集(1992)
112	湾台II	平成3	山田町織笠第14地割内	末葉の住居跡1棟・遺構外末葉の土器片	岩手埋文第186集(1993)
113	湾台III	平成2	山田町織笠第14地割内	中期後葉～末葉の土器片少量	岩手埋文第218集(1995)
53	大畑I	平成5	山田町飯岡第7地割内	後葉～末葉の土器片少量	岩手埋文第218集(1995)
54	大畑II	平成4～5	山田町飯岡第7地割内	集落跡(中期後葉～末葉の住居跡15棟、土坑50基、廃棄土)	岩手埋文第218集(1995)
118	山ノ内II	平成7	山田町船越第4地割	集落跡(中期後葉～末葉13棟、土坑17基、焼土遺構4基)	岩手埋文第249集(1996)
18	沢田I	平成6～8	山田町山田3-8	集落跡(中期後葉、住居跡、土坑)	岩手埋文第246集 平成7年度略報(1996)
19	沢田II	平成8	山田町山田第3地割	中期の住居跡	現地説明会資料

第2表 周辺の遺跡(2)平安時代

遺跡No	遺跡名	調査年度	所在地	遺跡の概要・遺物等	報告書名
63	細浦I	平成2	山田町織笠第14地割内	土師器甕の破片	岩手埋文第169集(1992)
113	湾台III	平成2	山田町織笠第14地割内	住居跡1棟、住居状遺構2棟のうち1棟は製鉄関連炉を伴う工房跡。鉄滓、羽口、土師器片、須恵器片、鉄製品出土	岩手埋文第186集(1993)
54	大畑II	平成4～5	山田町飯岡第7地割内	集落跡・住居跡4棟、工房跡6棟、鍛冶炉3基、溝4条、炭窯1基。土師器、須恵器、赤焼き土器などの破片、鉄滓、羽口、鉄製品	岩手埋文第218集(1995)
118	山ノ内II	平成7	山田町船越第4地割内	竪穴状遺構1棟、土坑4基、焼土1基、製鉄炉2基、排滓場、鍛冶炉6基、炭窯9基、土師器破片、羽口、鉄滓、鉄製品	岩手埋文第249集(1996)
18	沢田I	平成6～8	山田町山田3-8	集落跡(住居跡、土坑、鍛冶炉)土師器破片、須恵器破片、羽口、鉄滓、鍛造剝片、鉄製品	岩手埋文第229集 平成6年度調査略報(1995) 岩手埋文第246集 平成7年度調査略報(1996)

第3表 周辺の遺跡(3)製鉄関連遺跡

遺跡No	遺跡名	調査年度	所在地	遺跡の概要・遺物等	報告書名
112	湾台II	平成3	山田町織笠第14地割内	鉄滓	岩手埋文第186集(1993)
75	上村	平成4	山田町織笠第9地割内	奈良時代と推定される鍛冶場2か所、製鉄炉8基、木炭窯11基、竪穴状遺構1基、土坑9基、土師器、鉄製品、砂鉄、鍛造剝片	岩手埋文第202集(1994)
53	大畑I	平成5	山田町飯岡第7地割内	椀型滓、羽口	岩手埋文第218集(1995)
19	沢田II	平成8	山田町山田第3地割	奈良時代の工房跡(製鉄炉、大鍛冶炉、小鍛冶炉)、排滓場など、土師器、鉄滓、鍛造剝片、鉄製品	現地説明会資料
17	房の沢IV	平成8	山田町山田第14地割	奈良時代後半の須恵器、土師器、鉄滓、蕨手刀など	現地説明会資料

第4表 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物
1	内野	集落跡・製鉄跡	縄文土器・土師器・羽口・鉄滓
2	関口 I	集落跡	縄文土器・土師器
3	関口 II	散布地	縄文土器
4	上野畑	散布地	縄文土器(中・後期)
5	上野台 I	散布地	縄文土器
6	上野台 II	散布地	縄文土器・土師器・須恵器・磨製石斧
7	上野台 III	散布地	縄文土器
8	山田館	城館跡	郭・堀
9	関谷 I	散布地	縄文土器
10	関谷 II	散布地	縄文土器
11	関谷 III	散布地	縄文土器
12	関谷 IV	散布地	縄文土器
13	関谷 V	散布地	縄文土器
14	房の沢 I	散布地	縄文土器
15	房の沢 II	散布地	縄文土器
16	房の沢 III	散布地	縄文土器
17	房の沢 IV	散布地	縄文土器
18	沢田 I	集落跡	縄文土器・土師器
19	沢田 II	散布地	縄文土器
20	沢田 III	散布地	縄文土器
21	沢田 IV	城館跡	縄文土器
22	間木戸 I	散布地	縄文土器
23	間木戸 II	散布地	縄文土器
24	間木戸 III	散布地	
25	間木戸 IV	集落跡・一里塚	縄文土器・一里塚
26	間木戸 V	散布地	縄文土器
27	柳沢 I	散布地	縄文土器
28	柳沢 II	散布地	縄文土器
29	柳沢 III	散布地	縄文土器
30	柳沢 IV	散布地	縄文土器
31	袴田 I	散布地	縄文土器
32	袴田 II	散布地	縄文土器
33	川向 I	散布地	縄文土器
34	川向 II	散布地	縄文土器
35	川向 III	散布地	縄文土器
36	新開地	散布地	縄文土器・石鏃
37	新開地 I	散布地	縄文土器

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物
38	新開地 II	散布地	縄文土器
39	大沢館	城館跡	堀
40	紅山 A	散布地	縄文土器(前～晩期)・石槍・石鏃・石斧
41	紅山 B	集落跡	縄文土器
42	浜川目沢田 I	沢田	縄文土器(前～晩期)
43	浜川目沢田 II	集落跡	縄文土器
44	浜川目沢田 III	集落跡	縄文土器
45	多門	製鉄跡	鉄滓・縄文土器
46	八幡館	城館跡	
47	長崎 I	散布地	縄文土器
48	長崎 II	散布地	縄文土器
49	長崎 III	城館跡	
50	長崎 IV	城館跡	
51	小沢 I	散布地	縄文土器
52	小沢 II	散布地	縄文土器
53	大畑 I	散布地	縄文土器
54	大畑 II	散布地	
55	飯岡 I	城館跡	
56	飯岡 II	城館跡	
57	飯岡 III	散布地	
58	飯岡 IV	散布地	
59	長野 I	散布地	
60	長野 II	散布地	
61	赤松 I	散布地	
62	赤松 II	散布地	
63	細浦 I	散布地	縄文土器・弥生土器・鉄滓
64	細浦 II	散布地	縄文土器
65	細浦 III	散布地	縄文土器
66	細浦 IV	散布地	縄文土器
67	細浦 V	散布地	縄文土器
68	細浦 VI	散布地	縄文土器
69	後山 I	散布地	縄文土器・土師器・石斧・フレーク
70	後山 II	散布地	縄文土器
71	後山 III	集落跡	縄文土器・弥生土器・土師器・鉄滓
72	後浜 I	散布地	縄文土器
73	後浜 II	散布地	縄文土器
74	上	集落跡	縄文土器・弥生土器

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物
75	上村	散布地	縄文土器
76	礼堂	散布地	縄文土器
77	竜泉寺一里塚	一里塚	
78	田茂沢	集落跡	縄文土器・土師器・灰釉
79	日当Ⅰ	集落跡	縄文土器・弥生土器・鉄滓
80	日当Ⅱ	散布地	縄文土器
81	白石Ⅰ	集落跡	縄文土器
82	白石Ⅱ	散布地	縄文土器
83	白石Ⅲ	散布地	縄文土器
84	日陰	散布地	縄文土器
85	廻立	集落跡	縄文土器・鉄滓
86	猿神	集落跡	縄文土器(前期初頭)・土師器
87	織笠館	城館跡	郭・堀
88	轟	集落跡	縄文土器(中期)・土師器
89	萩野平Ⅰ	集落跡	縄文土器・弥生土器
90	萩野平Ⅱ	集落跡	縄文土器
91	萩野平Ⅲ	集落跡	縄文土器(後期)
92	坊主山Ⅰ	集落跡	縄文土器
93	坊主山Ⅱ	城館跡	郭・堀
94	越田	城館跡	縄文土器・土師器
95	草木	散布地	縄文土器
96	根井沢Ⅰ	散布地	縄文土器
97	根井沢Ⅱ	散布地	縄文土器
98	根井沢Ⅲ	散布地	縄文土器・土師器
99	山波	散布地	縄文土器(早期末)
100	新田Ⅰ	集落跡	縄文土器・土師器・中世陶器・鉄器

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物
101	新田Ⅱ	散布地	縄文土器・土師器
102	天工平	集落跡	縄文土器・弥生土器・鉄滓
103	猿喰沢	散布地	縄文土器
104	大石平	散布地	縄文土器(後期)・石斧
105	豊面沢	散布地	縄文土器
106	長林	散布地	縄文土器
107	船越館	城館跡	縄文土器
108	船越Ⅰ	散布地	縄文土器
109	船越Ⅱ	散布地	縄文土器
110	船越(西)館	散布地	縄文土器
111	湾台Ⅰ	集落跡	縄文土器
112	湾台Ⅱ	散布地	縄文土器(中・後期)
113	湾台Ⅲ	散布地	縄文土器
114	湾台Ⅳ	散布地	縄文土器
115	湾台Ⅴ	散布地	縄文土器
116	山ノ内	散布地	縄文土器
117	山ノ内Ⅰ	城館跡	
118	山ノ内Ⅱ	散布地	縄文土器
119	山ノ内Ⅲ	散布地	縄文土器
120	新道貝塚	貝塚	縄文土器・鉄滓
121	船越御所	城館跡	郭・堀
122	岩ヶ沢	集落跡	縄文土器
123	早川	集落跡	縄文土器
124	田の浜館	城館跡	郭
125	大洞貝塚	貝塚・集落跡	縄文土器
126	小田の御所	城館跡	郭

4. 基本土層（写真図版2）

本遺跡の調査区は地形的に尾根部分と尾根斜面下方の緩斜面、飛び地の緩斜面に分けられ、北東の尾根は土取りのために削平されている。尾根斜面下方の緩斜面は水田として利用されて削平といた時期があり、削平と盛り土がなされている。また、この部分には沢跡と思われる黒色土の盛り土堆積も見られる。また、飛び地でも同様に削平と盛り土がなされ、風化花崗岩の斜面堆積土が見られるなど、遺跡の土層は一様ではない。さらに、飛び地は他の調査区と距離があり、遺跡基本層序の全体をひとつの層序で調査することは困難だったため、飛び地とその他の部分とは基本層序を区分別している。（高橋佐知子）

- I a 層 黒褐色土 (10Y R3/2) シルト 表土層で草根が多数混入する。層厚10～20cm。
- I b 層 黒褐色土 (10Y R2/3) シルト 草根が多数混入する。層厚 0～40cm。
- II 層 暗褐色土 (10Y R3/3) シルト 尾根の頂部付近では薄い。層厚 5～30cm。
- III a 層 黄褐色土 (10Y R5/6) 粘土質 旧水田の床土。調査区中央部付近にのみ存在する。層厚 0～15cm。
- III b 層 砂層 VII B 1 a ポイント付近から西側に見られる。水の流れた部分に堆積したと考えられる。層厚 0～15cm。
- IV 層 黒色土 (10Y R2/1) シルト 調査区中央部の斜面下方に沢状に堆積する。遺物を含む。層厚 0～120cm。平安時代の遺構検出面。
- V 層 暗褐色土 (10Y R3/3) シルト 主に尾根斜面下方の緩斜面に堆積する。遺構検出面。層厚 0～40 c m。
- VI 層 褐色土 (7.5Y R4/3) シルト 主に斜面に堆積する。遺構検出面。層厚 0～50cm。
- VII 層 黒褐色土 (10Y R2/3) シルト 主に斜面下方の緩斜面に堆積する。上面が遺構検出面。層厚0～70 c m。
- VIII a 層 褐色土 (10Y R4/4) シルト 斜面に堆積する。層厚 0～30cm。
- VIII b 層 黒褐色土 (10Y R2/3) シルト 褐色土ブロックをしみ状に含む。斜面に堆積する。層厚0～35 c m。
- VIII c 層 褐色土 (10Y R4/4) シルト 斜面に堆積する。層厚 0～15cm。
- IX 層 褐色土 (10Y R4/6) 10層への漸移層 粘性、締まりあり 層厚 5～25cm。尾根部では褐色土 (10Y R3/4) となり、遺構検出面である。層厚 0～50cm。
- X 層 黄褐色土 (10Y R5/8) シルト 礫が多数混入する。主に尾根部に堆積する。
- XI 層 明黄褐色土 (10Y R6/8) 粘性、締まりあり 花崗岩礫を多量に含む。層厚は確認していない。

飛び地 (I 区、II 区) 基本土層

- T 0 層 盛り土 簡易宿泊施設を建設する際に造成した盛り土。谷頭を埋めている。層厚 0～2.3m
- T I a 層 暗赤褐色土 (5Y R3/2) 表土 層厚40～78cm
- T I b 層 黒色土 (5Y R1.7/1) 1mm大の炭を多量に含む 層厚 0～40cm
- T II 層 黒色土 (7.5Y R2/1) シルト 締まりあり 遺構検出面 層厚 0～40cm
- T III 層 黒褐色土 (5Y R2/2) シルト質 締まりあり 風化花崗岩粒 3% 層厚60～100cm
- T IV a 層 黒褐色土 (7.5Y R3/2) シルト質 締まりあり 風化花崗岩粒 5% 層厚40～100cm
- T IV b 層 極暗褐色土 (7.5Y R2/3) シルト質 締まりあり 風化花崗岩粒 3% 層厚 0～30cm
- T V 層 黒褐色土 (7.5Y R2/2) シルト質 締まりあり 風化花崗岩粒 5% 層厚40～70cm
- T VI 層 暗褐色土 (7.5Y R3/4) 締まりなし 風化花崗岩粒 3% 層厚20～60cm
- T VII 層 黄褐色土 (10Y R5/6) 締まりなし 厚層は確認していない。

III 調査方法と整理方法

1. 野外調査

(1)調査区の設定と遺構の呼称

本遺跡のグリッドの設定においては基準点測量を依頼し、調査区域内の任意の2点の公共座標値を求めた。この2点の成果値は以下のとおりである。

基準点1 X=-63,716.737 Y=98,077.310 H=71.932m

基準点2 X=-63,786.041 Y=98,098.075 H=58.829m

次にこの2点からX=-63,800.000、Y=98,100.000の点Aと、X=-63,760.000、Y=98,100.000の点Bを求め、このA・Bを結ぶ直線を基準線とした。基準線上をAから南に200m進み、さらに基準点に直交する線上を西に40m進んだ点を原点として調査区全体をカバーするように40m単位でメッシュを組み大グリッドとした。大グリッドは南側から北側にⅠ～Ⅷ、西側から東側にA～Dの名称を付した。さらに大グリッド内を4m単位で区画し、南側から北側に1～0、西側から東側にa～jの名称を付した。1調査区はこれらの組み合わせでⅠA1aやⅡB3dと呼ぶことにした。

遺構名は調査区と遺構の種類を組み合わせ、ⅢB6d住居跡、ⅣC5b土坑等と呼称した。遺構が2つの調査区にまたがっている場合は南西側の調査区名を使用した。必ずしも厳密ではない。1調査区内に同種の遺構がある場合はⅦC2e-1住居跡・ⅦC2e-2住居跡等と枝番号を付して呼び区別した。

枝番号
製鉄炉の
名称を
つけ直し

報告では枝番号が抜けている場合があるが、調査時に付した番号を遺構でないことがわかり、抹消することがあったためである。整理時での混乱を避けるためにあえて番号をつけ直さず、そのまま載せた。また、製鉄炉群は調査時に付した名称は炉のとらえ方で誤りがあったため、報告ではアルファベットでつけ直している。

(2)粗掘り

本調査区域は、現況が山林と原野に分かれ、原野の一部は水田として利用されていた時期があるため地形に段差と傾斜が見られる。そこで調査区内の数か所に幅約1.5mの試掘トレンチを設定して試掘を行ったところ、炉跡と遺構の埋土と思われる暗褐色土が検出され、土器等の遺物が出土した。そこで遺構検出面までの深さや層序を確認した後、重機及び人力によって表土除去を行い、その後人力や遺構、遺物の検出されない箇所では重機による掘り下げを行った。

(3)精査と実測

斜面下方が
流 失

遺構の精査は、住居跡は4分法、土坑は2分法を原則としたが、斜面で斜面下方が流失している住居や、検出段階で平面形が不明だったもの、人為的な削平を受けている遺構についてはこの限りではない。遺構の実測は簡易遣り方測量で行った。平面図は、調査区区画線を基準とした1m間隔の水糸を遺構全面に張り、それを測量基線として実測した。土層断面図は水平水糸を張って、それを実測基線とした。

実測図の縮尺は平面図、断面図とも20分の1を原則としたが、細部や炉、焼土遺構、カマドの実測は、10分の1で行った。基本層序の層位はローマ数字、遺構埋土の土層は算用数字で表した。

(4)写真撮影

野外での写真撮影は、35mm判2台（モノクロ、カラーリバーサル）と6×7判（モノクロ）1台を使用し、遺構の平面・断面と遺物の出土状況を中心に撮影した。（神 敏明）

2. 室内整理

(1)遺物の処理

遺物は水洗、ラベルの記入、接合復元、土器拓影図作成、実測、トレース、計測、写真撮影、遺物図版作成の順に行った。

石器の計測値については最大長・最大幅・最大厚を測定し、欠損している石器の数値はカッコ内に記した。

遺物のうち鉄滓については、水を高速で吹きつけるハイウォッシャーで洗浄後、重量を計測し、磁着するものと、しないものとに分類した。炉内及び炉群の土坑内から出土した鉄滓のうち磁着するものについては、以下の方法で、磁着度分析、及びメタルチェッカーでメタル反応を測定し、第11、13表に示した。なお、第13表は報告の遺構名のほかに検索の際のために調査段階での遺構名も付している。

鉄 滓 の
洗 浄 法
磁 着 度 分 析
メ タ ル 反 応

磁着度分析

標準磁石（TK-4、フェライト磁石、東北金属（株）製 30×17×5.2ミリ）を用い、35cmの高さから釣り糸で釣り下げた状態で使用する。資料を徐々に接近させることにより標準磁石が動き始める距離（6mmを1単位とする1～8の段階）を評価台紙上で読み取り、数値化する。磁石に最も近い距離が1、遠い距離が8である。

メタル反応測定

金属鉄の量を測定するもの。メタルチェッカー（金属探知機、MR-50、基準設定者 穴澤 義功）により資料各面の1cm以内にかざし、左右方向に動かす。略号○はレベルH（最高感度で、ごく小さな金属鉄を残留する。）、略号●はレベルM（標準感度で、ごく一般の金属鉄を残留する）、略号◎はレベルL（やや大きな金属鉄を残留する）を示す。これらの略号が付された遺物は鉄塊系遺物として分類される。

羽口の装着角度の推定は次の図のように先端の熱変色範囲をもとに測定した。観察表中に20～35°と記載しているのは変色範囲の垂直線に対する角度が左右でまちまちなためである。

羽 口 の
装 着 角 度

炉壁も鉄滓と同様に洗浄し、抽出して胎土の観察を行ったが、整理期間の都合上数値化する作業は行っていない。

(2)遺物図版

図版は遺構から出土したものは遺構別に、遺構外出土遺物は種類別に掲載した。縮尺は土器が4分の1・3分の1、土器拓影図3分の1、土製品2分の1、剝片石器2分の1、礫石器2分の1・4分の1、石製品3分の1、羽口4分の1を原則としたが、適宜縮尺を変えて掲載した。図中には縮尺比をあらわすスケールを用いた。土師器、須恵器器面調整については次の図のような呼称と表現方法を用いた。また、土器の黒色処理、羽口の溶着滓の範囲は次の図のようなスクリーントーンを用いた。

(3)遺構図面の処理

図面は第1原図の点検、修正、合成、トレース、遺構図版の作成の順に整理した。

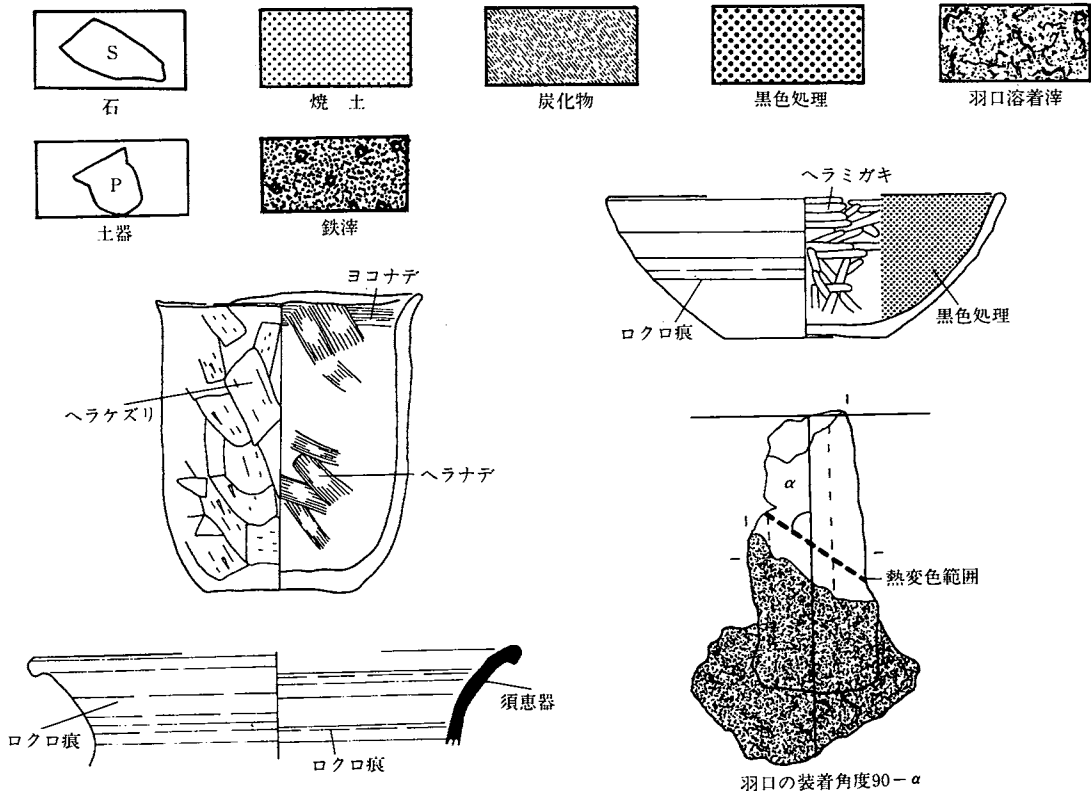
(4)遺構図版

図版の縮尺は、住居跡、土坑50分の1、その他40分の1を原則としたが、遺構の大きさにより適宜縮尺を変えて掲載した。縮尺を変更した場合は、各図版に縮尺を明記した。図中の焼土、炭化物の散布範囲には次の図のようなスクリーントーンを使用した。図中の石、土器は次の図のように表現した。

(5)写真図版

野外調査時に撮影した写真と遺物の写真で、写真図版を作成した。

写真図版の個々の遺物番号は、遺物図版の番号と一致している。縮尺は、各写真とも不定縮尺である。(高橋佐知子)



IV 検出された遺構と遺物

山ノ内III遺跡の発掘調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡21棟、竪穴状遺構2基、土坑11基、柱穴状土坑6基、炉跡2基、集石1基、焼土遺構37基、廃棄土2か所、古代の竪穴住居跡3棟、土坑2基、製鉄炉8基、炭窯17基、炭置き場1か所、羽口捨て場1か所、焼土遺構4基である。

以下大きく時代別に報告する形をとっているが、縄文時代の遺構には早期末～前期初頭か、**時期不明の中期か**判然としない遺構も多い。特に焼土遺構はそのことが言えるのであらかじめ述べておく。**の遺構**

1. 縄文時代

(1)住居跡

VIB 8 j 住居跡出土遺物（第6図、写真図版3）

本住居跡は調査区東側の尾根上に位置している。この地点は旧地権者が盛り土をするための土採り場となっていたため、人為的な削平を受けているところである。本住居跡の北側にはVIB 0 j 住居跡が、東側にはVIC 7 a 住居跡が存在している。検出は試掘トレンチによって石囲炉を検出したことによる。検出面はIX層上面である。

平面形は人為的な削平と住居跡の南東側にあたる斜面下方の流失のため不明な点が多いが、残存部分から円形を呈すると推定される。

規模は開口部径が残存部分で4.63mを測る。壁はIX層中にあり、床面から急角度で外傾して立ち上がる。壁高は残存する西壁が5.3cm、南壁が10.9cm、北壁が34.5cmである。

埋土は表土を含め5層に細分され、黒褐色土と暗褐色土が主体で、下位に一部黄褐色土と褐色土が見られる。床面はIX層中に形成され、やや斜面下方に傾斜するものの、ほぼ平坦で堅くしまっている。東壁際の床面からは67×63cm程の焼土の散布が確認された。柱穴は壁際から4基検出されている。柱穴は円形あるいは楕円形の掘り方を有し、径は37～52cm、深さは11～42cmを測る。柱痕の径は不詳である。

炉は床面中央部と思われる地点から石囲炉が検出された。平面形は楕円形を呈し、規模が77×楕円形の58cm程で、7～26cmの花崗岩を使用している。東側の石を一部欠いているが石の抜き取り痕は**石囲炉**確認できなかった。焼土はあまり発達しておらず、明赤褐色の焼土が層厚4cm程で存在する。

（神 敏明）

出土遺物（第57図、写真図版53）

床面炉の近辺から1が出土している。2は埋設土器である。そのほかは埋土から出土した遺物である。

本遺構は形態や床面の出土遺物から縄文時代中期末葉の住居跡と考えられる。（高橋佐知子）

VIB 0 j 住居跡（第9図、写真図版4）

本住居跡は調査区東側の尾根状に位置し、VIB 8 j 住居跡と同様に人為的な削平を受けている。本住居跡の南側にはVIB 8 j 住居跡が、東側にはVIC 0 a - 1 住居跡が存在する。検出は人力による表土除去後のIX層上面における褐色土の円形の広がりによる。

平面形は削平と斜面下方の流失によって不明な点が多いが、残存部分から円形を呈すると思われる。

規模は開口部径が残存部で2.38mを測り、検出された住居跡の中では最も小さい。壁はIX層中にあり、床面からほぼ直に立ち上がる。壁高は残存する北壁が25cm、西壁が24.4cmである。

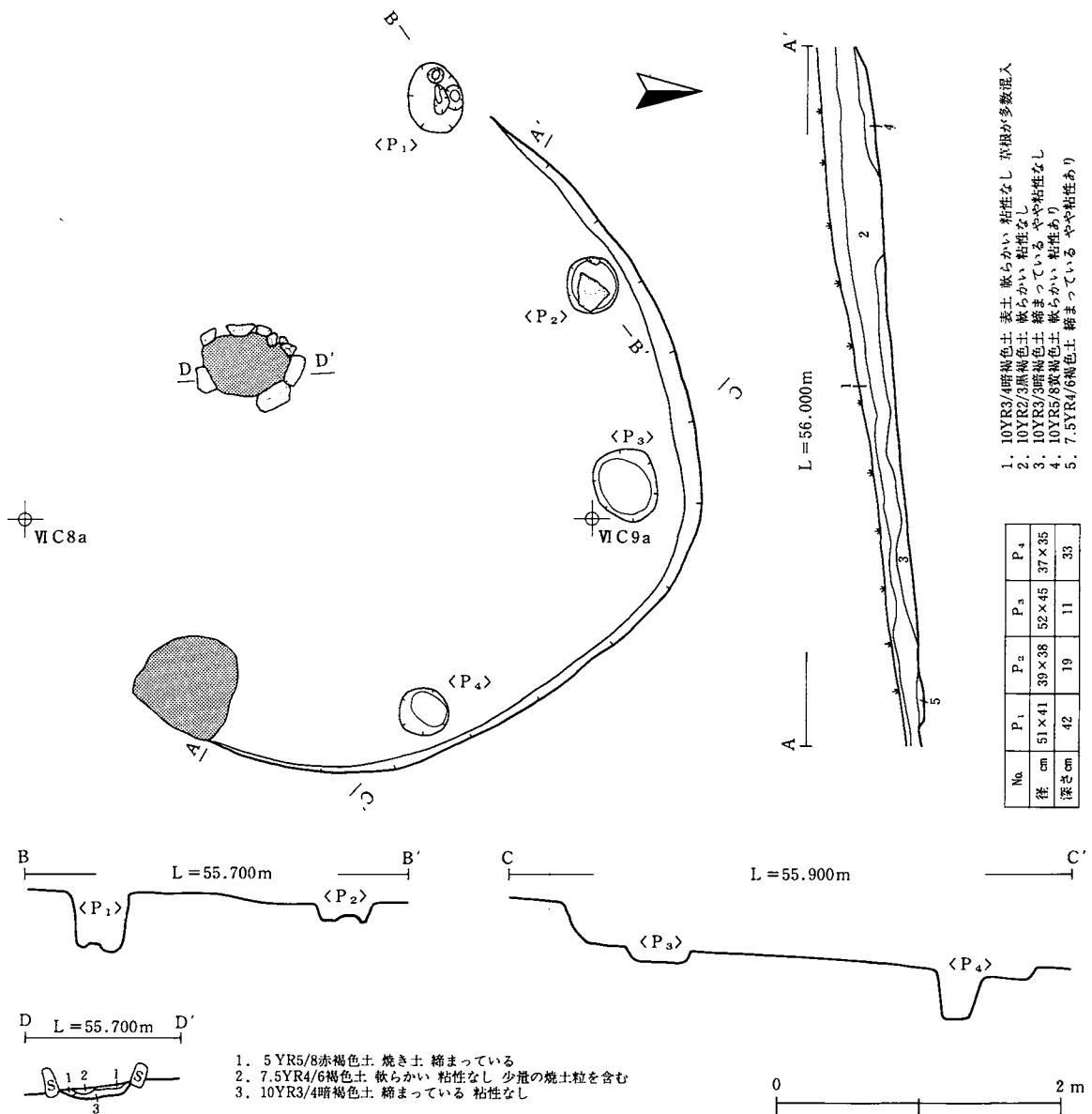
埋土は3層に細分され、上位は褐色のシルト質土、中位から下位は微小な炭化材が混入する暗褐色土が主体である。床面はIX層中に形成され、ほぼ平坦でしまっている。北西壁際の床面からほぼ完形に近い土器が直立状態で出土したほか、北西壁に沿って土器が散乱していた。また床面中央から北東に寄った地点で炭化材の散布が確認され、埋土にも炭化材が含まれること

焼失住居

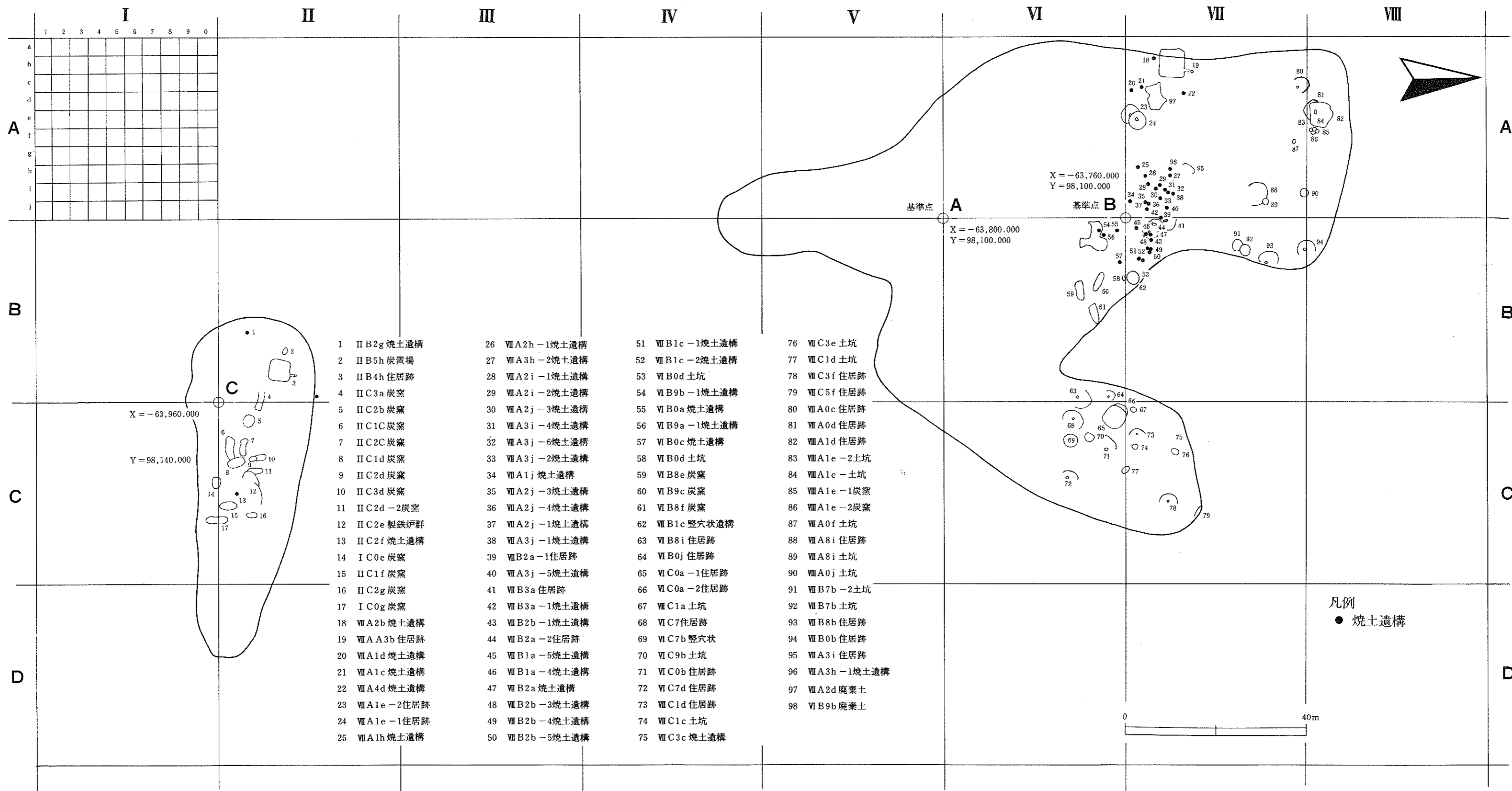
から、焼失住居跡と推定される。柱穴は検出されなかった。

石囲炉

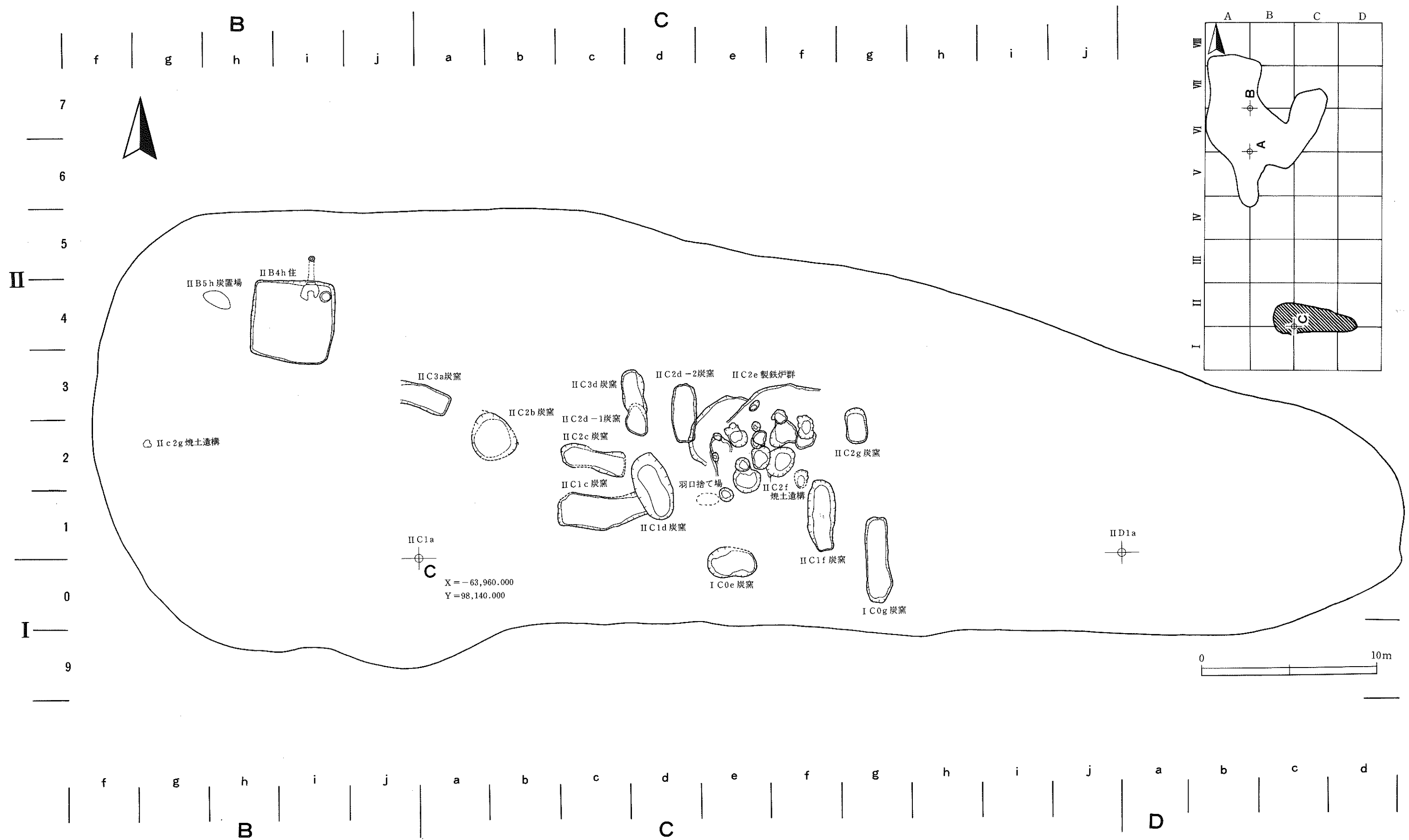
炉は床面中央部と思われる地点から石囲炉が検出された。北側と東側の石を欠いているが、



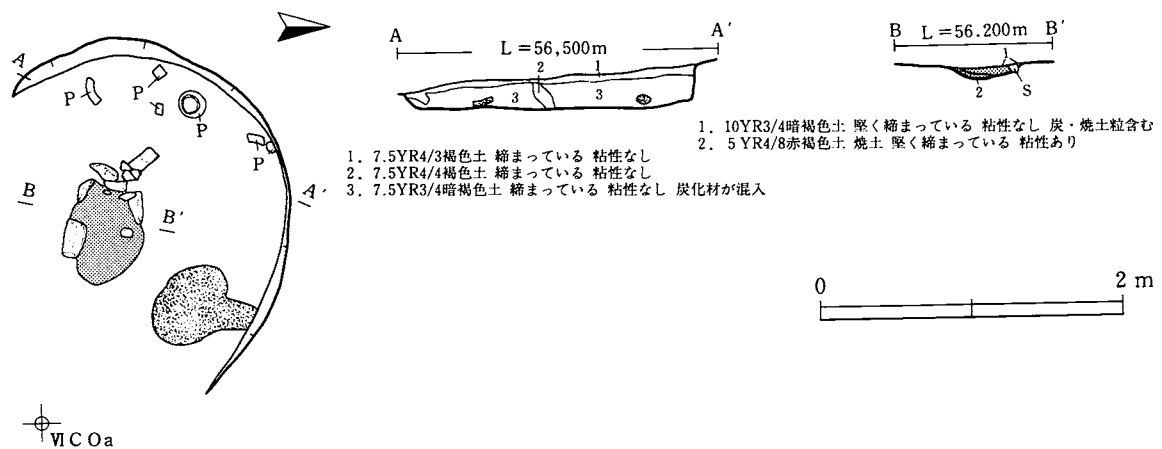
第6図 VIB 8 j 住居跡



第7図 遺構配置図



第8図 遺構全体図(2)飛び地 I、II区



第9図 VIB 0 j 住居跡

焼土の広がりから炉の平面形は楕円形と考えられる。石の抜き取り痕は確認されなかった。規模は68×51cmである。燃焼部は若干掘り込まれ、赤褐色の焼土が厚さ6cm程発達しており、その上部に炭化材と焼土粒を含む暗褐色土が堆積している。(神 敏明)

出土遺物 (第57、58図、写真図版53)

13、14、19は住居の炉から出土した土器である。そのほかは埋土から出土した土器で、縄文時代中期後葉から末葉の土器である。

本遺構は形態や出土遺物から縄文時代中期末葉の住居跡と考えられる。(高橋佐知子)

VIC 7 a 住居跡 (第10図、写真図版5)

本住居跡は調査区東側の尾根上に位置している。本住居跡の北側にはVIC 0 a - 1 住居跡が、西側にはVIB 8 j 住居跡が、東側にはVIC 7 b 竪穴状遺構が存在する。検出は人力による表土除去後のIX層上面において暗褐色土の円形の広がりを確認したことによる。

平面形は、人為的な削平と住居跡の南東側にあたる斜面下方の流失により不明な点が多いが、残存部分から楕円形と推定される。

規模は開口部径が4.82mを測る。壁はIX層中にあり、床面から急角度で外傾して立ち上がる。壁高は残存する西壁が33.5cm、南壁が10.5cm、北壁が12.3cmである。

埋土は9層に細分されるが、シルト質の暗褐色土が主体で、所々に黄褐色土・褐色土・にぶい褐色土が小ブロックで混入する。床面はIX層中に形成され、わずかに斜面下方に傾斜するものの、ほぼ平坦でしまっている。床面中央部から北側に5～30cmほどの礫が散在する。また、南東部の床面に187×54cmの不整形な焼土粒の散布が認められた。柱穴は壁際から2基、壁かやや離れて8基検出された。円形あるいは楕円形の掘り方を有し、径は27～49cm、深さは9～53cmを測る。柱痕の径は不詳である。

炉は床面中央部と思われる地点から石囲炉が検出された。平面形は長方形を呈し、規模は54×52cmで、20cm前後の花崗岩を使用している。焼土は発達しておらず、燃焼部に少量の焼土粒が見られる程度である。西側の石を欠いているが、石の抜き取り痕は確認できなかった。

(神 敏明)

出土遺物 (第58図、写真図版53)

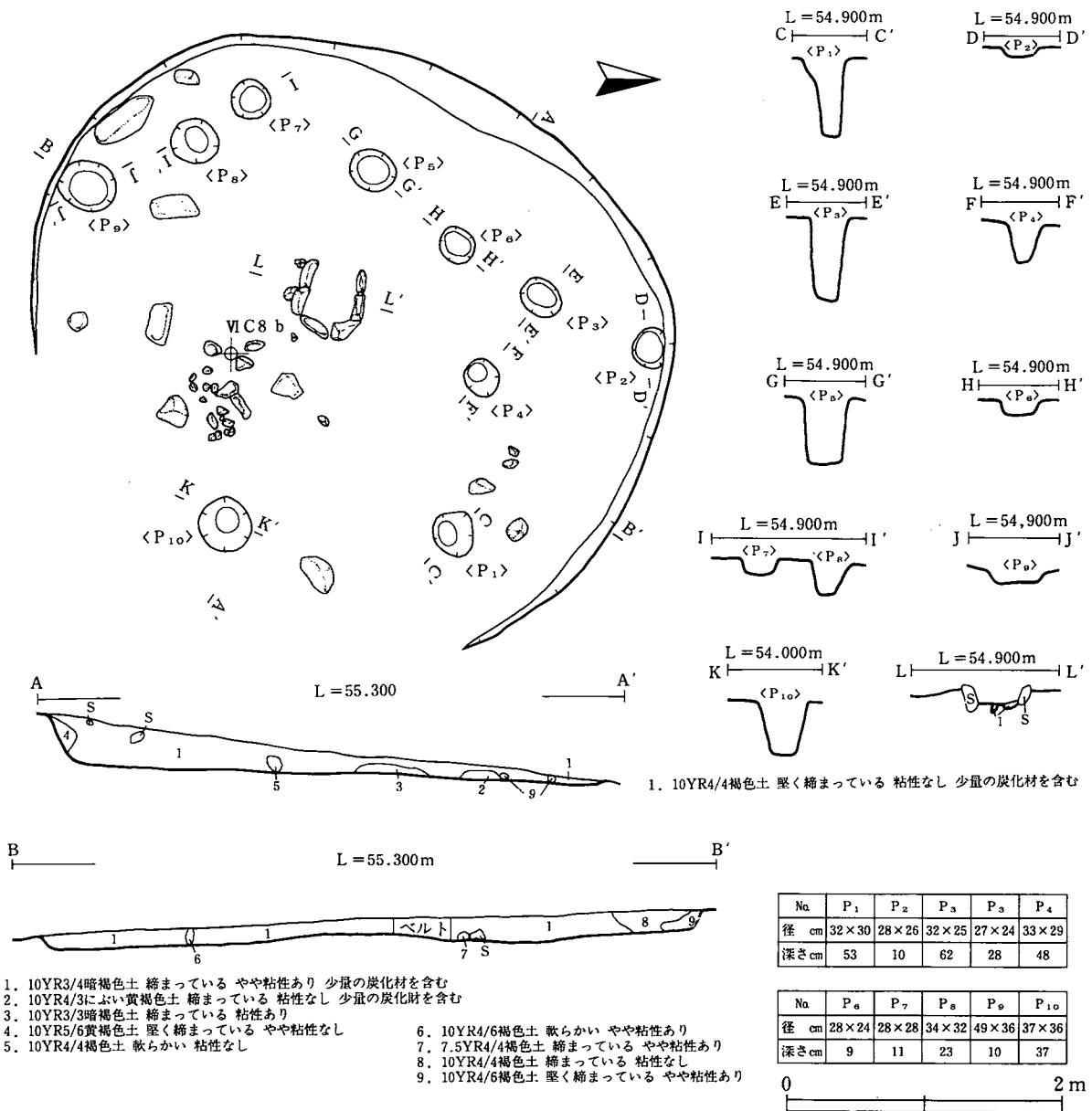
埋土から縄文時代中期中葉の土器、磨石が出土した。

本遺構は縄文時代中期中葉から末葉住居跡と考えられる。(高橋 佐知子)

VIC 7 d 住居跡 (第11図、写真図版6)

本住居跡は調査区東側の尾根上に位置している。本住居跡の西側にはVIC 7 d 竪穴状遺構が存在する。検出は入力による表土除去後のVI層上面において暗褐色土の半円状の広がりを確認したことによる。

平面形は、人為的な削平と住居跡の東側にあたる斜面下方の流失により不明な点が多いが、残存部分及び柱穴配置から円形と思われる。規模は4m前後と推定され、壁高は残存する西壁



第10図 VIC 7 a 住居跡

が13cmである。壁はVI層中にあり、急角度で外傾して立ち上がる。

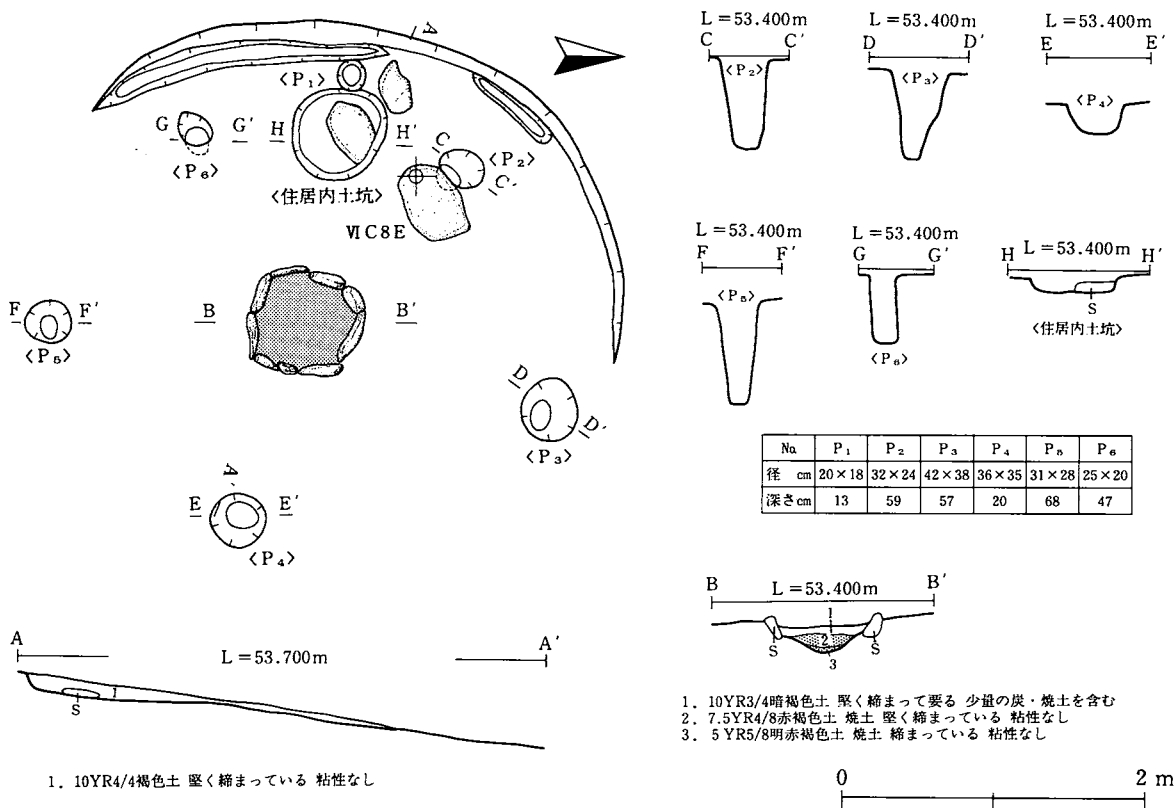
埋土は褐色のシルト質土の単層で、堅くしまっている。床面はVI層中に形成され、斜面下方に若干傾斜するもののほぼ平坦で堅くしまっている。床面の中央から西に寄った地点には55×39cmと35×21cmの偏平な礫が置かれていた。西壁際の床面からは幅20cm、深さ10cm程の周溝が検出された。また、床面西側からは平面形が不整楕円形を呈する土坑が1基検出されている。断面形はピーカー状で、規模は開口部径が67×60cm、深さは10cmである。底部北側には40×28cmの花崗岩の礫が存在した。柱穴は壁からやや離れた地点から6基検出されている。柱穴は円形あるいは楕円形の掘り方を有し、径は20～42cm、深さは10～68cmを測る。柱痕の径は確認できなかった。

炉は床面中央部と思われる地点から石囲炉が検出されている。平面形は方形で、規模は78×72cmで、14～35cmの花崗岩の礫を使用している。燃烧部は若干掘り窪められ、赤褐色及び明赤褐色の焼土が厚さ12cm程に発達しており、焼土の上には微小な炭化材と焼土粒を含む暗褐色土が堆積している。(神 敏明)

出土遺物 (第58図、写真図版53)

埋土から縄文時代中期中葉の土器が出土した。

床面から出土した土器がないため、断定はできないが形態や出土遺物から縄文時代中期中葉から末葉の住居跡と考えられる。(高橋佐知子)



第11図 VIC 7 d 住居跡

重複 VIC 0 a - 1 住居跡 (第12図、写真図版7)

あるいは 本住居跡は調査区東側の尾根上に位置している。本住居跡はVIC 0 a - 2 住居跡と重複ある
建て替え いは建て替え関係にあり、西側にはVIB 0 j 住居跡が、南側にはVIC 7 a 住居跡が、東側にはVIC 0 b 住居跡が存在する。検出は人力による表土除去後のVI層上面において暗褐色土の楕円形の広がりを確認したことによる。

平面形は楕円形を呈し、規模は開口部径が5.44×4.29mを測る。壁はVI層中にあり、壁高は東壁が12.1cm、西壁が44.0cm、南壁が29.2cm、北壁が32.8cmである。

埋土は10層に細分される。埋土上位はシルト質の暗褐色土及び黒褐色土が主体で、埋土中位から下位にかけては暗褐色土と褐色土が堆積している。また、西壁際の一部に粘土質の黄褐色土が見られる。床面は西壁沿いが10cm程高くなり、段差をもっている。床面の大部分は重複するVIC 0 a - 2 住居跡の埋土である褐色土上に形成されているが、1段高くなる部分の床面は**1段高い床** VI層中に形成され、堅くしまっている。この部分からは微小な炭化材と焼土粒が混じる暗褐色土の広がりが見られる。周囲に石が5個配されており、火を使用した痕跡が見られるが、**火を使用** 詳細は不明である。炉を含む床面は平坦でしまっている。柱穴は1段高くなる西壁際から2基、低い面から4基検出されている。柱穴は円形あるいは楕円形の掘り方を有し、径は23~39cm、深さは10~38cmを測る。柱痕の径は不詳である。

石囲炉 炉は床面中央部付近から石囲炉が検出された。炉の平面形は長方形を呈すると思われるが、北側と西側の石を欠いているため詳細は不明である。規模は85×60cm程度と推定され、20~53cmの花崗岩の礫が使用されている。焼土の発達は良く、炉内の東に寄った地点に明赤褐色の焼土が厚さ10cm程形成されている。また、東側の石の外側でも赤褐色の焼土が検出されている。焼土の発達は良く、厚さは5cm程である。(神 敏明)

出土遺物 (第58、59図、写真図版53、54図)

37は床面の炉の付近から出土した土器である。30~31は埋土炉の付近からの出土である。33、51は埋土下位から出土した。そのほかに埋土から縄文時代中期中葉、末葉の土器が出土している。石器類は62の石皿が柱穴の埋土から出土したほか、石錐、石匙、磨製石斧、不定形石器、磨石が埋土から出土した。

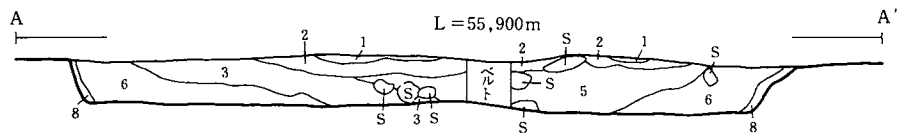
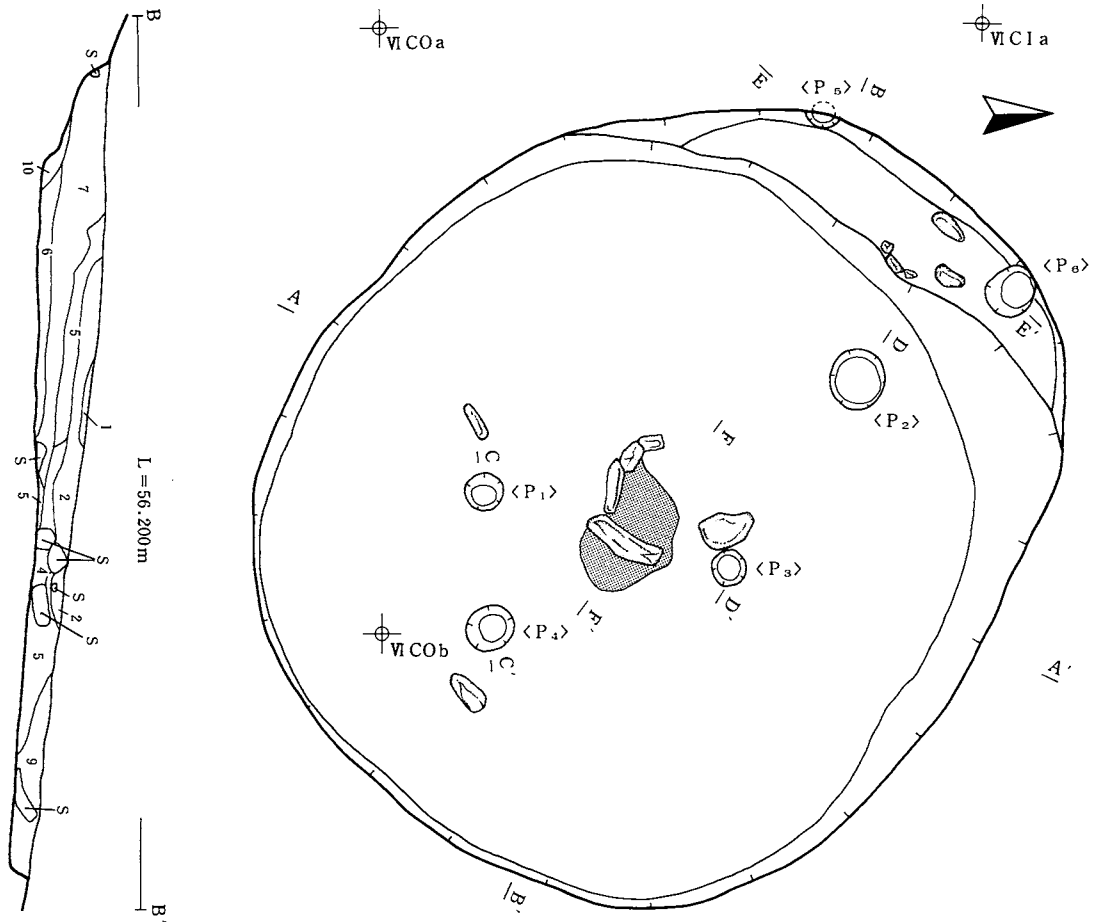
本遺構は出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期末葉の住居跡と考えられる。(高橋佐知子)

VIC 0 a - 2 住居跡 (第13、14図、写真図版8)

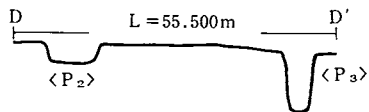
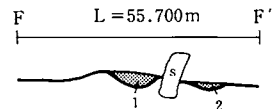
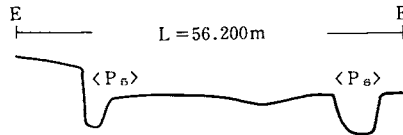
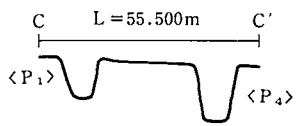
重複 本住居跡は調査区東側の尾根上に位置している。本住居跡はVIC 0 a - 1 住居跡と重複関係
あるいは にあり、西側にはVIB 0 j 住居跡が、南側にはVIC 7 a 住居跡が、東側にはVIC 0 b 住居跡が
建て替え 存在する。検出はVIC 0 a - 1 住居跡の炉断面精査中に本住居跡の炉が発見されたことによる。

平面形は円形を呈し、規模は開口部径が5.14×5.13mを測る。壁はVI層中にあり、一部がVIC 0 a - 1 住居跡の壁と重複する。壁高はVIC 0 a 住居跡の検出面からの高さで、東壁が8cm、西壁が65.8cm、南壁が12.1cm、北壁が14.9cmである。

埋土はVIC 0 a 住居跡の床面の土で、シルト質の堅くしまった褐色土の単層である。床面は**二重** VI層中に形成され、平坦で堅くしまっている。床面からは周溝・柱穴・炉・焼土が検出された。
周溝 周溝は東壁の一部を除いて壁沿いに掘られている。西側の一部では周溝が二重になる部分もある

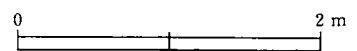


1. 10YR3/4暗褐色土 非常に堅く締まっている 粘性あり 攪乱土
2. 10YR2/3黒褐色土 堅く締まっている 粘性なし
3. 10YR4/4褐色土 締まっている やや粘性あり 少量の炭化材を含む
4. 7.5YR3/4暗褐色土 締まっている 少量の炭化材を含む
5. 10YR3/4暗褐色土 締まっている やや粘性あり 少量の炭化材を含む
6. 10YR4/4褐色土 締まっている やや粘性あり
7. 10YR3/3暗褐色土 締まっている やや粘性あり
8. 10YR4/6褐色土 締まっている 粘性あり
9. 10YR4/6褐色土 堅く締まっている やや粘性あり
10. 10YR5/6黄褐色土 堅く締まっている 粘性あり

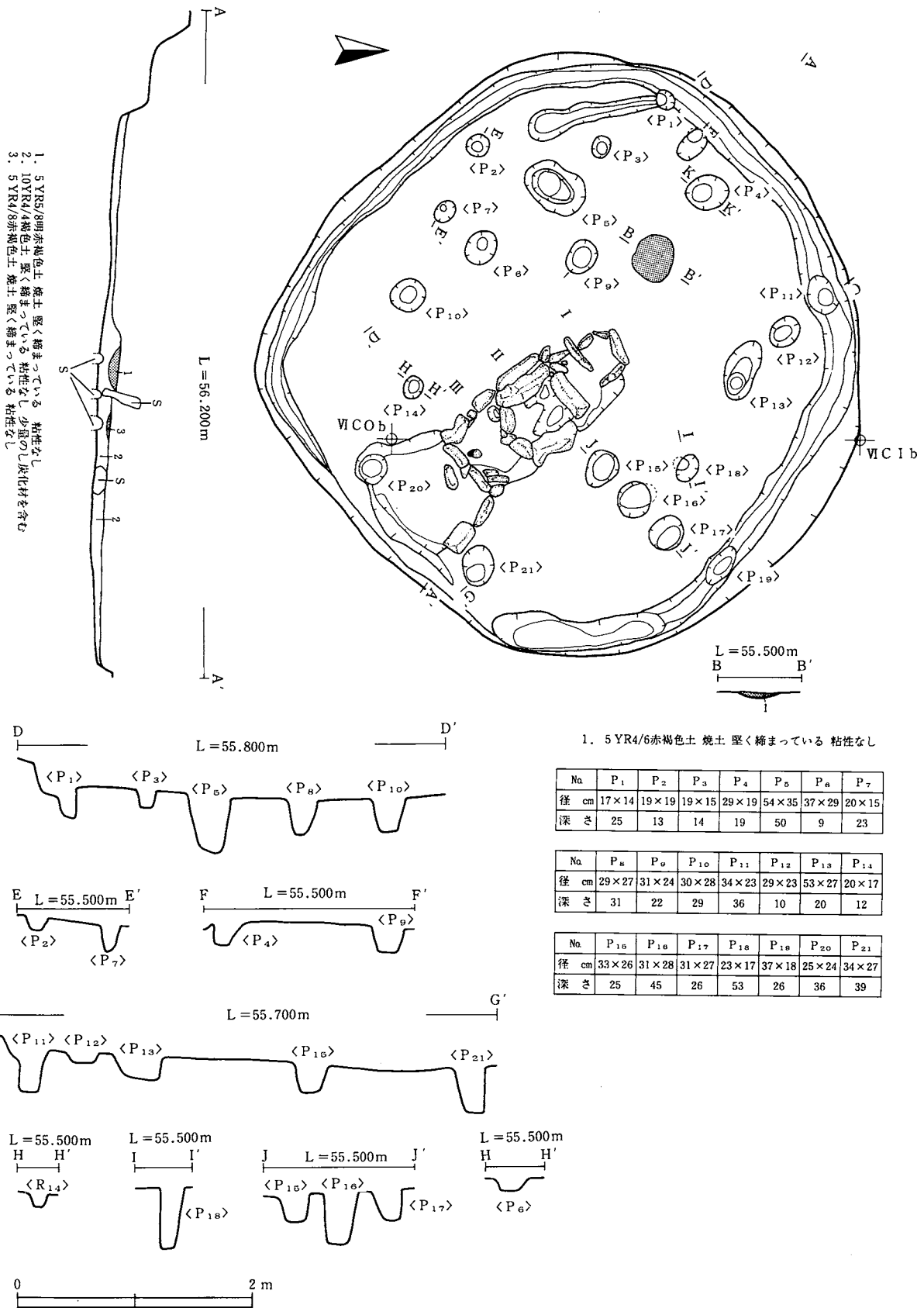


1. 5 YR5/8明赤褐色土 焼土 堅く締まっている 粘性なし
2. 5 YR4/8赤褐色土 焼土 締まっている 粘性なし

Na	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
径 cm	25×25	39×37	24×22	33×29	23×10	35×30
深さ cm	27	10	38	37	18	25



第12図 VIC 0 a - 1 住居跡



第13図 VIC 0 a - 2 住居跡(1)

り、作り替えもあったと推定される。規模は幅が12~35cm、深さは20cm前後である。柱穴は21基検出されているが、この中にはVIC 0 a 住居跡の柱穴も含まれると思われる。柱穴は円形あるいは楕円形の掘り方を有し、径は17~54cm、深さは9~53cmである。柱痕の径は確認できなかった。

炉は南東壁際から床面中央部付近までの部分で石組複式炉が検出されている。炉の規模は石組部分だけで1.75m、前庭部を加えると2.58mと非常に大きい。幅は最大85cmである。石組部分はI~IIIに分割されるが、Iはさらに二つに分けられていた可能性がある。石の組み方を見ると、IとIIIの部分はIIの部分に付け加えたように見える。前庭部は住居跡の壁に向かってやや広がり、壁の手前で閉じている。掘込みはそれほど深くなく、浅い窪み状になっていて壁も緩やかである。炉内からは焼土がほとんど検出されず、埋土に焼土粒が混入する程度である。

石組複式炉

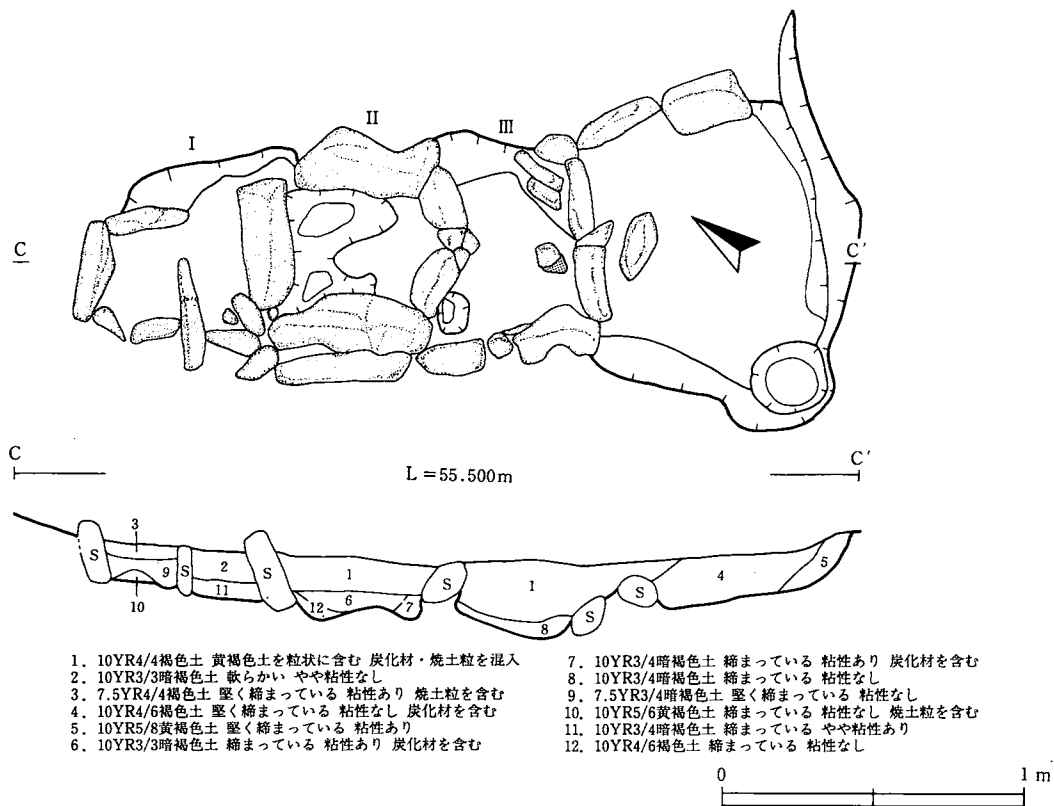
焼土は床面中央部から北西に寄った地点で検出された。平面形は楕円形で、規模は39×31cmを測る。焼土の厚さは最大4cm程で比較的良く発達しており、堅く焼き締まっている。本住居跡に伴うもので、地床炉の可能性もある。(神 敏明)

地床炉か

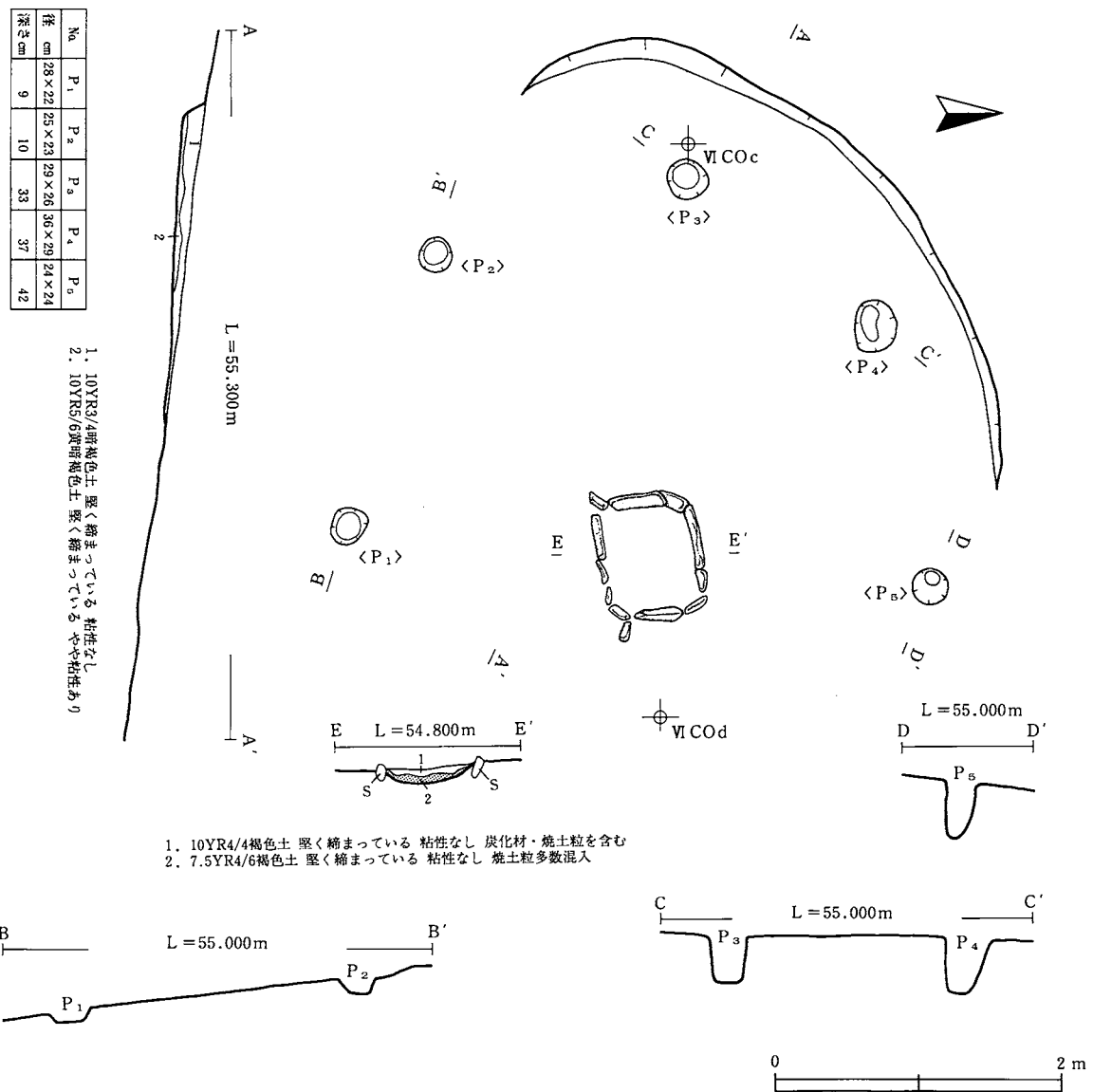
出土遺物 (第60図、写真図版54)

埋土から土器片が出土している。縄文時代中期後葉から末葉の土器である。石器は埋土から石皿が出土した。

床面から出土した遺物がないため、断定はできないが本遺構は出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期末葉の住居跡と考えられる。(高橋佐知子)



第14図 VIC 0 a - 2 住居跡(2)



VIC 0 b 住居跡 (第15図、写真図版9)

本住居跡は調査区東側の尾根上に位置している。西側にはVIC 0 a 住居跡が、南側にはVIC 9 b 土坑が、北側にはVIC 1 b 住居跡及びVIC 1 c 土坑が存在する。検出は人力による表土除去後のVI層上面において炉跡を確認したことによる。なお、本住居跡は人為的な削平を受けており、表土直下がすぐ住居跡の床面となっている。そのため壁の残存状態も不良である。

平面形は残存する壁及び柱穴の配置から円形あるいは楕円形と考えられる。規模は径が5m前後と推定され、壁高は残存する西壁が21cmである。壁はVI層中にあり、外傾して立ち上がる。

埋土は2層に分けられ、上位はシルト質の暗褐色土、下位は粘土質の黄褐色土で、堅く締まっている。床面はVI層中に形成され、やや斜面下方の東側に傾斜するものの平坦でしまっている。東側の床面は人為的な削平と斜面下方の流失によって失われている。

柱穴は壁からやや離れて5基検出されている。柱穴は円形あるいは楕円形の掘り方を有し、

径は24～36cm、深さは9～42cmを測る。柱痕の径は確認できなかった。

炉は床面中央部からやや東に寄るとされる地点から石囲炉が検出されている。炉の平面形は石囲炉は長方形を呈し、南西角と南東角の礫が外側を向いて斜めに配されている。規模は91×72cmで、12～40cmの花崗岩の礫が使用されている。炉内の焼土は発達しておらず、赤褐色の焼土粒を含む褐色土が見られる程度である。(神 敏明)

出土遺物 (第60図、写真図版54)

69、70は炉から出土した縄文時代中期後葉の土器である。

本遺構は出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期後葉の住居跡と考えられる。(高橋佐知子)

VIIA 1 e - 1 住居跡 (第16、17図、写真図版10)

本住居跡は調査区西側の谷に位置している。VIIA 1 e - 2 住居跡と重複関係にあり、本住居跡が新しい。西側にはVIIA 1 c 焼土遺構が存在する。人力での掘り下げ後、V層中位から下位で、濁った黒褐色土の広がりをとらえたが、この付近は土石流などがあったらしく、礫が多いため住居跡として検出できなかった。そこで、ベルトを残して掘り下げたところVIIA 1 e - 2 住居跡の西壁の立ち上がりをとらえた。当初は、ベルトの観察によっても重複関係がつかめなかったが、古い住居跡の炉と見られる焼土を新しい住居跡の柱穴が切っていることから、新旧二つの住居として報告するものである。明確な壁の立ち上がりをとらえられなかったことから、本住居跡とVIIA 1 e - 2 住居跡は、長楕円を呈するひとつの住居である可能性もある。

本住居跡の平面形はゆがんだ円形を呈し、開口部径が推定で4.0m、壁高は北壁が最大で36cmを図る。

埋土は2層に別れ、暗褐色土主体で炭を含んでいる。また、埋土の一部には床面から30cm程度絶後の上に5cmの厚さの黄褐色土が、38×35cmくらいの範囲で検出されている。住居廃絶後、土石流にみまわれたと考えられ、花崗岩の礫混じりの土で覆われている。

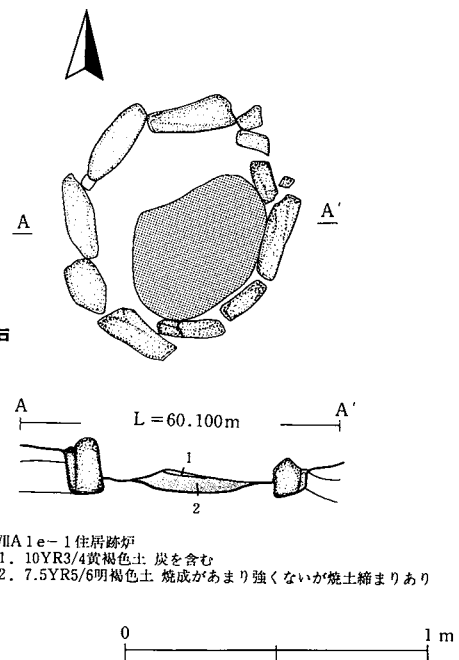
床面は11層上面に形成されているため、花崗岩の礫が露出しており、多少の凹凸があるものの固く締まっている。また、床面上には炭の薄い分布が見られる。

柱穴は9基検出されている。いずれも円形あるいは楕円形を呈し、径は48～94cm、深さは14～56cmを図る。柱痕は確認できなかった。

炉は床面のほぼ中央に石囲炉が検出されている。炉の規模は86cm×76cmで、ほぼ円形を呈する。厚さ6～8cmの花崗岩の板状の礫を円形に立て並べている。礫は垂直かやや外側に開くように据えられている。焼土の形成は薄く、使用面が火を受けて硬化している程度である。

周溝は検出されなかった。

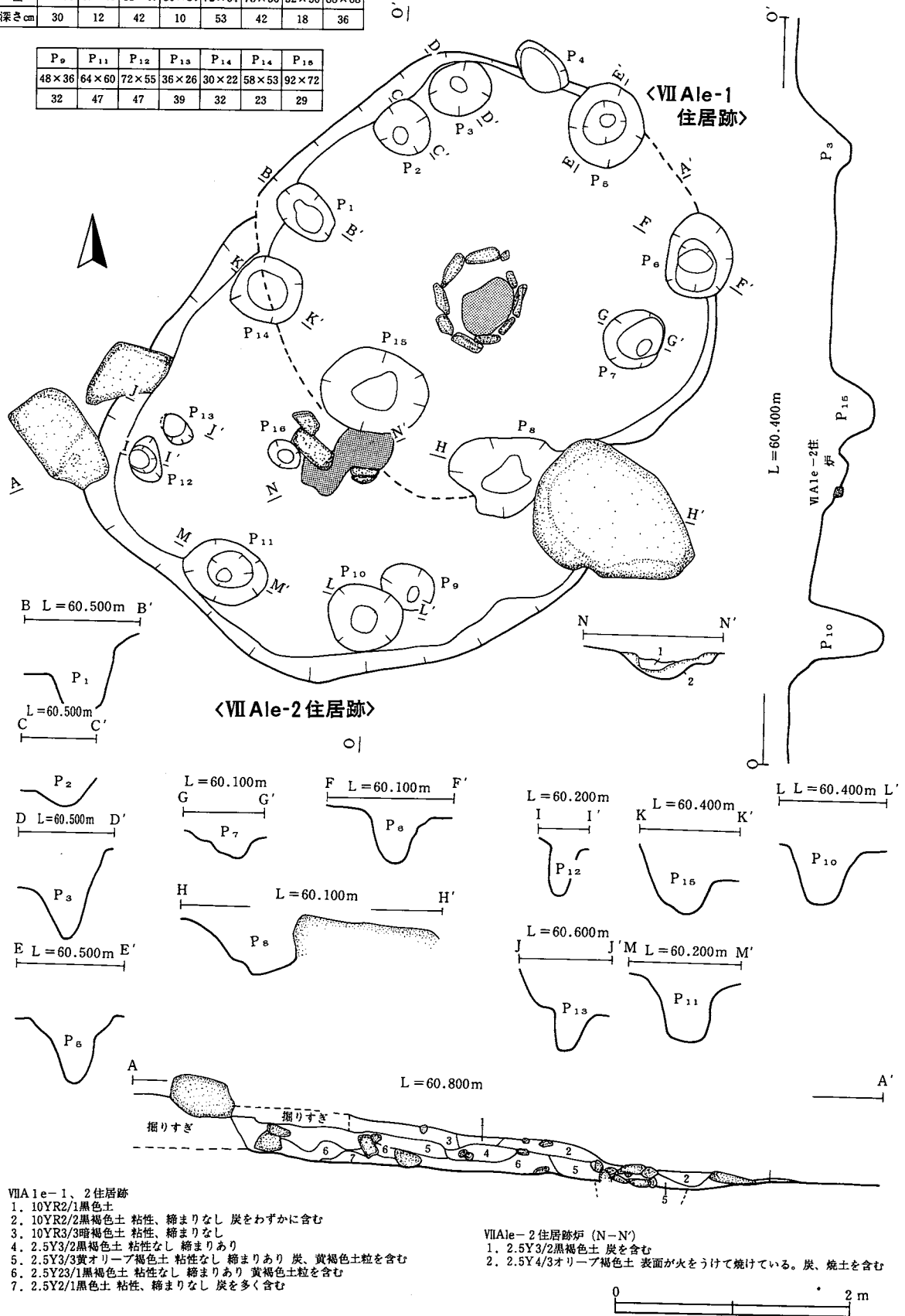
出土遺物 (第60、61図、写真図版54)



第16図 VIIA 1 e - 1 住居跡(1)

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径	55×38	47×45	52×47	50×34	72×64	73×56	52×50	88×68
深さcm	30	12	42	10	53	42	18	36

P ₉	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₄	P ₁₅
48×36	64×60	72×55	36×26	30×22	58×53	92×72
32	47	47	39	32	23	29



ⅦA 1e-1、2住居跡

1. 10YR2/1黒色土
2. 10YR2/2黒褐色土 粘性、締まりなし 炭をわずかに含む
3. 10YR3/3暗褐色土 粘性、締まりなし
4. 2.5Y3/2黒褐色土 粘性なし 締まりあり
5. 2.5Y3/3黄オリーブ褐色土 粘性なし 締まりあり 炭、黄褐色土粒を含む
6. 2.5Y2/1黒褐色土 粘性なし 締まりあり 黄褐色土粒を含む
7. 2.5Y2/1黒色土 粘性、締まりなし 炭を多く含む

ⅦA 1e-2住居跡炉 (N-N')

1. 2.5Y3/2黒褐色土 炭を含む
2. 2.5Y4/3オリーブ褐色土 表面が火をうけて焼けている。炭、焼土を含む

第17図 ⅦA 1e-1住居跡(2)、-2住居跡

本住居跡からは縄文時代中期後葉の深鉢が出土した。73は炉から出土した。縄文時代中期中葉の土器片である。75は埋土の上層から出土した深鉢の口縁部で、住居廃絶後の土石流などで流れ込んだものと考えられる。

本遺構は出土遺物から縄文時代中期中葉～後葉の住居跡と推察される。(高橋佐知子)

VII A 1 e - 2 住居跡 (第17図、写真図版11)

本住居跡は調査区西側の谷に位置している。VII A 1 e - 1 住居跡と重複関係にあり、本住居 **重複関係**の方が古い。検出はVII A 1 e - 1 住居跡の項で前述したとおりである。

平面形はやや角ばってはいるが円形を基調とする。規模は開口部径が4.16mで、壁高は西壁が最大で40cm、南壁が20cmである。壁は急な角度でやや外傾しながら立ち上がる。

埋土は2層に大別され、炭を含む黒色土が主体である。下層には黄褐色土粒を含む。床の直上には炭がみられる。廃絶後、花崗岩礫が多数住居内に入り込んでいる。

床面は11層上面に形成されているため花崗岩の礫が露出しており、多少の起伏はあるものの平坦で固く締まっている。貼り床、周溝はない。

柱穴は6基確認された。しかし、VII A 1 e - 1 住居跡との重複部にある柱穴はどちらのものか判別できないものもあるので、さらに増える可能性もある。円形あるいは楕円形の掘り方を有し、径は20～80cm、深さ40～50cmである。柱痕は確認できなかった。

炉は、床面のほぼ中央に位置する。一部をVII A 1 e - 2 住居跡に切られている。残存部の径は70cmである。炉石と思われる花崗岩の板状の礫が残存しており、この炉は石囲炉であった可 **石囲炉か**可能性がある。焼土の厚さは最大6cmで比較的発達しており、固く締まっている。

出土遺物 (第61図、写真図版55)

76～78はいずれも床直上から出土した土器片である。

遺構の形態から縄文時代中期後葉の住居跡と推定される。(高橋 佐知子)

VII A 3 i 住居跡 (第18図、写真図版12)

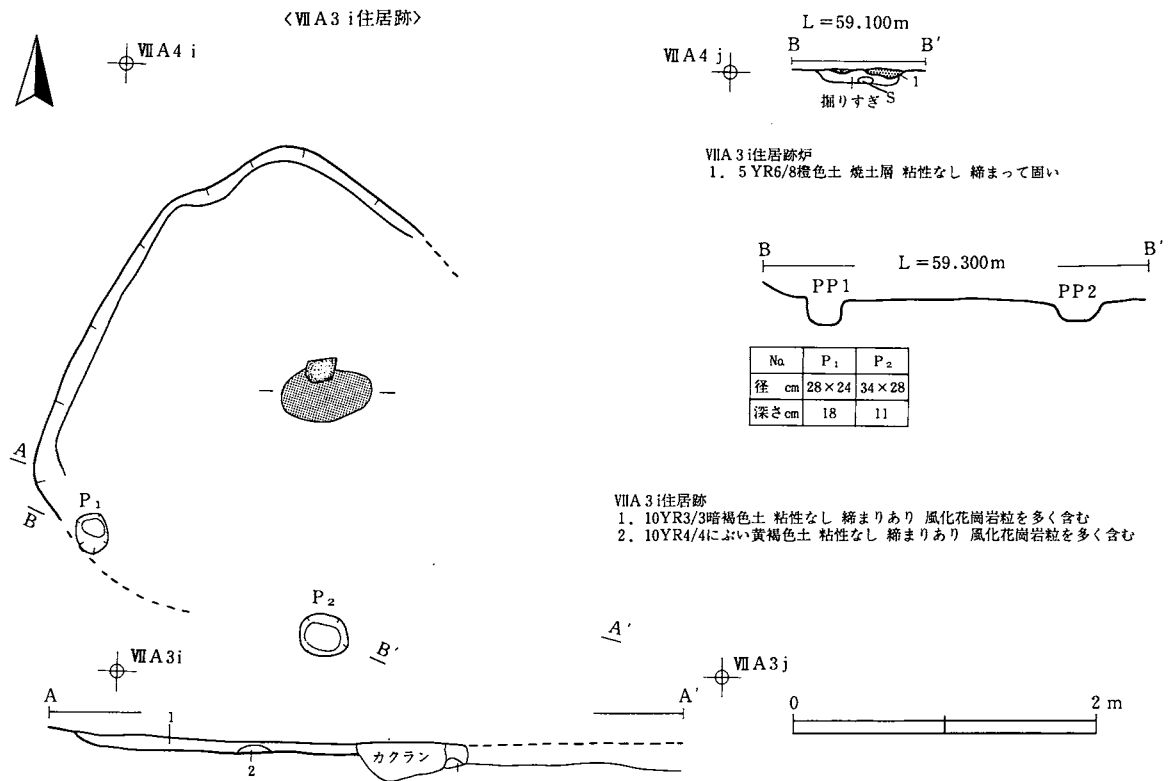
本住居跡は調査区北側の尾根から中央の谷に至る緩斜面に位置している。2m南にはVII A 3 h - 1 焼土が存在する。検出は水田の床土を除去後、斜面堆積のVI層を掘り下げる途中で、壁の一部を確認したことによる。水田造成時に上面をかなり削平されていることと、斜面上部からの流れ込みの土が入っていたため、検出は困難であった。また、検出時に壁の一部を削ってしまい、全体像をつかむことができなかった。

平面形は、やや角ばっているが、方形か円形か判然としない。残存部の径は2.94mである。 **不明瞭な壁**壁高は北壁及び西壁で8cmである。

埋土は炭を少量含んだ暗褐色土である。床面及び壁はVI層中に形成され、床面は固く締まっている。貼床はない。床面あるいは埋土中に流れ込みと思われるこぶし大～30cm大の花崗岩礫が多数存在する。貼床と周溝はない。

柱穴は2基検出されたのみである。いずれも楕円形を呈し、径は26～32cm、深さ10～16cmである。住居の上屋構造を支えるための柱としてはたいへん浅いように思われる。

炉は地床炉が1か所検出された。規模は60×36cmである。焼土は最大で5cm程堆積している。 **地床炉**



第18図 VII A 3 i 住居跡

また、炉の付近には移地性と思われる焼土が堆積している。

出土遺物 (第61図、写真図版55)

79は埋土から、80、81は床直上から出土した。

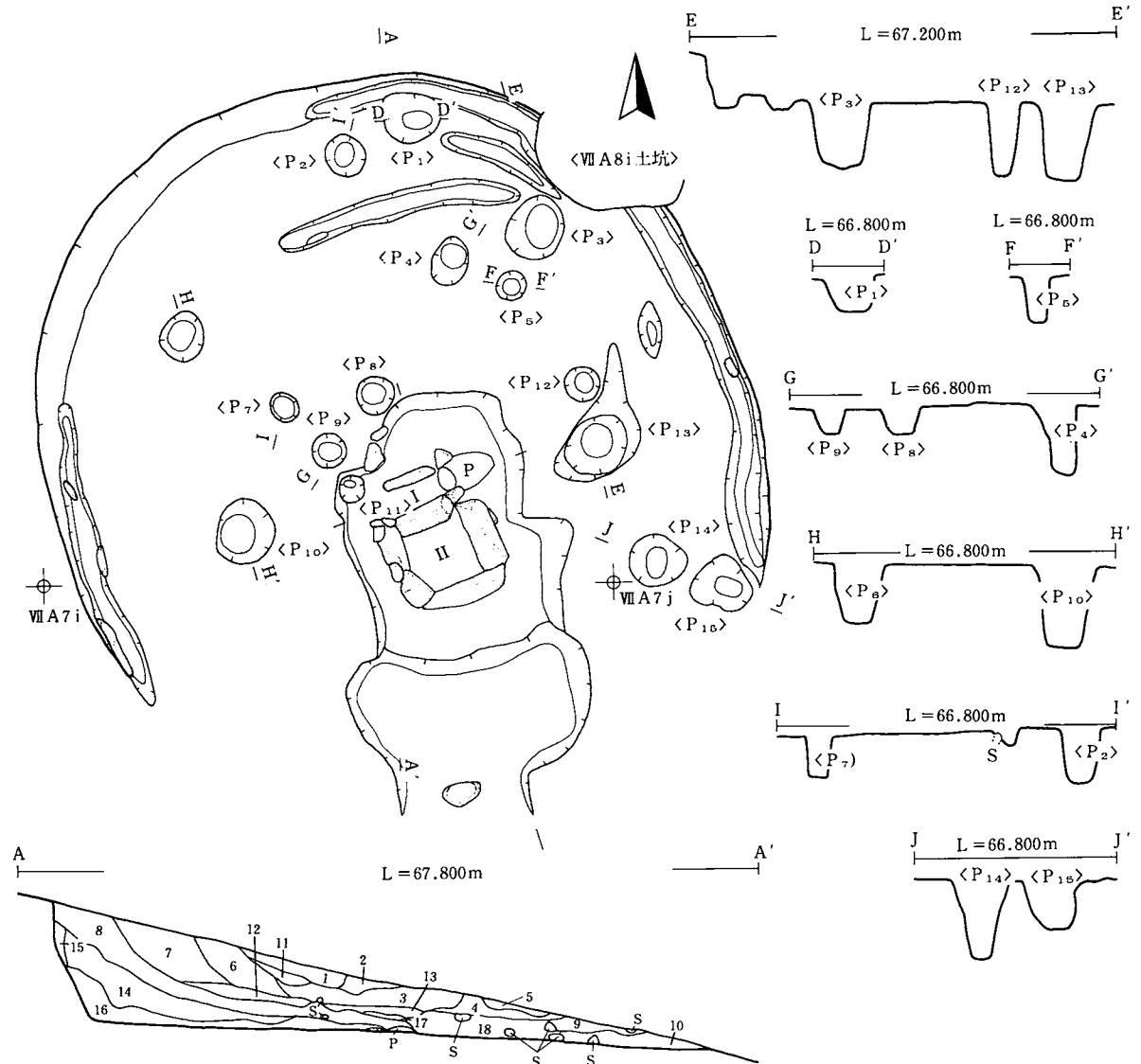
本遺構は不明な点が多く、確定できないが出土遺物から縄文時代前期前葉の住居跡の可能性
がある。(高橋佐知子)

VII A 8 i 住居跡 (第19図、写真図版13)

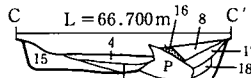
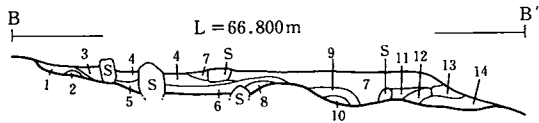
本住居跡は調査区北西の尾根の頂部付近に位置している。住居跡の北東側の一部はVII A 8 i
重複関係 土坑と重複関係にあり、本住居跡を土坑が切る形になっているため構築時期は住居跡の方が古
い。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところ、VI層上面において微
小な炭化材を含む褐色土と黄褐色土の広がりを確認したことによる。

平面形は、斜面下方にあたる東側が流失しているため不明な点が多いが、残存する壁や周溝
から楕円形を呈すると推定される。開口部の残存する部分の最大径は5.03cmで、長径は6 m前
後と考えられる。壁はVI層がVII層にかけて形成され、急角度で外傾して立ち上がる。壁高は最
大で84cmである。なお、壁については調査の不便から土層観察用のベルトを除き削平してし
まったため残存状態は不良である。

埋土は18層に細分されるが、シルト質の褐色土、黄褐色土、にぶい黄褐色土が主体で、微小
な炭化材が含まれる。床面はVII層中に形成され、細かな凹凸があるものの、ほぼ平坦で堅くし
まっている。



1. 10YR4/3黄褐色土 強く締まっている 粘性なし 炭化材を含む
2. 10YR4/4褐色土 強く締まっている 粘性なし 炭化材を含む
3. 10YR5/4に黄褐色土 締まっている 粘性なし 炭化材を含む
4. 10YR4/3に黄褐色土 強く締まっている 粘性なし 炭化材を含む
5. 10YR5/3に黄褐色土 強く締まっている 粘性なし 炭化材を含む
6. 10YR4/6褐色土 強く締まっている 粘性なし 炭化材を含む
7. 10YR5/8黄褐色土 締まっている 粘性なし 炭化材を含む
8. 10YR5/8黄褐色土 締まっている 粘性なし 炭化材を含む
9. 10YR5/6黄褐色土 強く締まっている 粘性なし 炭化材を含む
10. 10YR4/6褐色土 締まっている 粘性なし 炭化材を含む
11. 10YR4/3に黄褐色土 強く締まっている 粘性なし 炭化材を含む
12. 10YR5/8黄褐色土 締まっている 粘性なし 炭化材を含む
13. 10YR5/6黄褐色土 強く締まっている 粘性なし 炭化材を含む
14. 10YR4/4褐色土 締まっている やや粘性あり 炭化材を含む
15. 10YR4/6褐色土 締まっている やや粘性あり
16. 10YR4/6褐色土 締まっている やや粘性あり 炭化材を含む
17. 10YR6/6明黄褐色土 締まっている やや粘性あり
18. 10YR4/4褐色土 締まっている 粘性なし 炭化材を含む



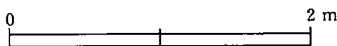
No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
径 cm	42×36	31×27	44×40	34×25	21×20
深さ cm	24	40	47	49	31

No	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀
径 cm	35×32	22×18	27×27	24×24	47×42
深さ cm	42	29	19	17	58

No	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅
径 cm	19×18	25×24	47×42	41×36	40×38
深さ cm	28	51	54	54	32

1. 10YR4/4褐色土 締まっている 粘性なし
2. 10YR3/4暗褐色土 軟らかい やや粘性あり
3. 10YR4/6褐色土 締まっている やや粘性あり 炭化材を含む
4. 10YR4/6褐色土 軟らかい やや粘性あり 炭化材を含む
5. 10YR3/2黒褐色土 締まっている 粘性なし
6. 10YR4/4褐色土 締まっている やや粘性あり
7. 10YR5/8黄褐色土 強く締まっている 粘性なし
8. 10YR5/6黄褐色土 締まっている やや粘性あり 炭化材を含む
9. 10YR5/6黄褐色土 締まっている 粘性なし
10. 10YR4/6褐色土 軟らかい やや粘性あり

11. 10YR5/8黄褐色土 締まっている 粘性なし
12. 10YR7/6明黄褐色土 締まっている 粘性なし
13. 10YR5/8黄褐色土 強く締まっている 粘性なし
14. 10YR6/8明褐色土 強く締まっている 粘性なし
15. 10YR5/4に黄褐色土 軟らかい 粘性なし
16. 5YR4/8赤褐色土 焼土 締まっている 粘性なし
17. 10YR4/2灰黄褐色土 強く締まっている 粘性なし
18. 10YR6/4に黄褐色土 軟らかい やや粘性あり
19. 10YR7/6明黄褐色土 締まっている やや粘性あり



第19図 VII A 8 i 住居跡

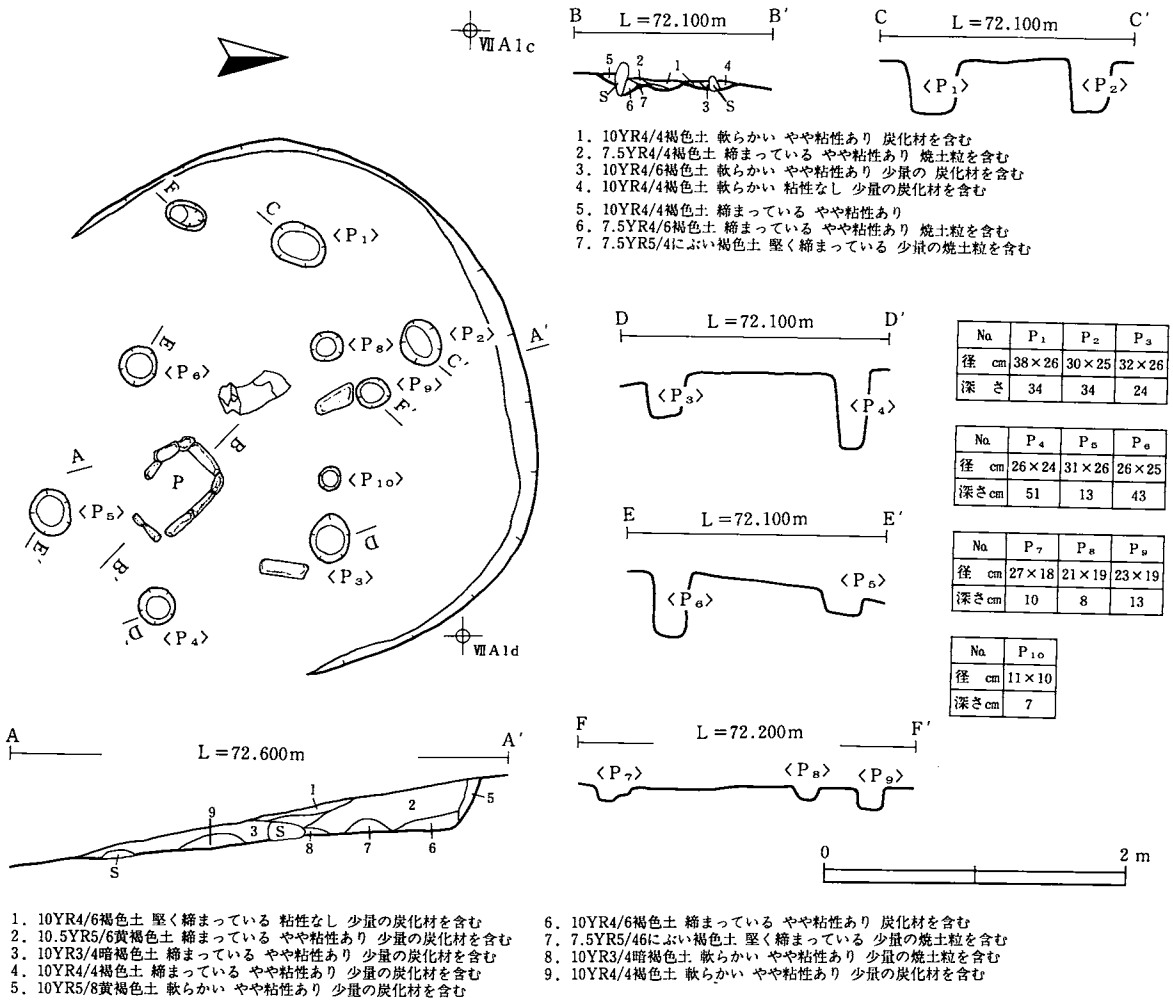
床面からは周溝、柱穴、炉が検出されている。周溝は流失部分と北西側を除き壁際から検出されている。北側の一部では三重になる部分もあり、作り替えもあつたと推定される。規模は作り替え幅が10~30cm、深さは10cm前後である。柱穴は壁際から2基、壁からやや離れて13基検出されている。柱穴は円形あるいは楕円形の掘り方を有し、径は19×47cm、深さは17~58cmである。P13には柱の抜き取り痕らしき溝が確認された。柱痕の径は確認できなかった。

複式炉 炉は床面中央部付近から南側の部分で複式炉が検出されている。炉は全体が掘り窪められており、石組みの部分だけの大きさは1.0×0.8mで、前庭部及び掘込み部分まで含めると3m程になる。石組み部分はI・IIの部分に分けられ、Iの部分はIIの部分に付け加えたように見える。Iの部分の東側には土器が斜めに埋設されていた。炉を構成する礫はすべて花崗岩で、大きさは11~67cmである。前庭部は浅い窪み状になっていて、壁も緩やかである。炉内からはほとんど焼土が検出されず、埋設された土器の周囲に少量見られるだけである。(神 敏明)

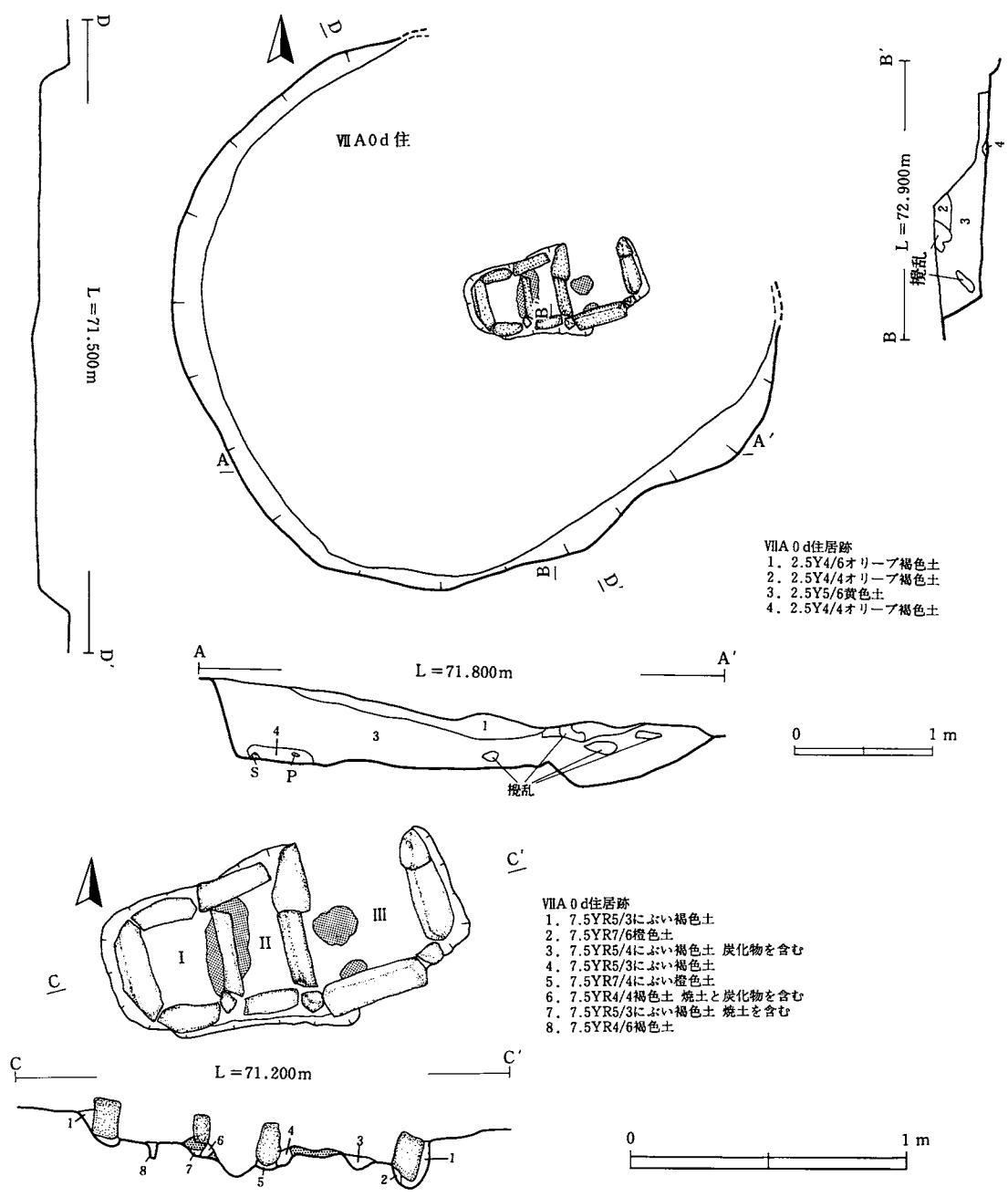
出土遺物 (第61、62図、写真図版55)

83は炉に斜めに埋設された土器である。82は床面から出土した。埋土から磨石が1個と石皿が3個出土している。

本遺構は出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期末葉の住居跡と考えられる。(高橋佐知子)



第20図 VII A 0 c 住居跡



第21図 VIIA 0 d住居跡

VIIA 0 c住居跡 (第20図、写真図版14)

本住居跡は調査区北西の尾根の頂部付近に位置している。本住居跡の東側には平安時代のVIII A 1 d住居跡が存在する。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところVI層上面において暗褐色土の半円状の広がりを確認したことによる。

平面形は、斜面下方にあたる南東側が流出しているため不明な点が多いが、残存する壁や柱穴の配置から楕円形を呈すると推定される。開口部の残存する部分の最大径は3.49mで、長径は4m前後と考えられる。壁はVI層中にあり、急角度で外傾して立ち上がる。壁高は東壁が6

cm、西壁が21.5cm、北壁が32.7cmである。

埋土は9層に細分されるが、暗褐色土と黄褐色土が主体で、褐色土がブロック状に混入する。
焼失住居 埋土全体に微小な炭化材を含み、床面から炭化材から出土していることから本住居跡は焼土住居と考えられる。炭化材の樹種はほとんどがクリで、ナラが少量見られる。

床面はVI層中に形成され、斜面下方にやや傾斜するもののほぼ平坦で堅くしまっている。床面中央部付近からは土器がまとまって出土している。

柱穴は壁から中央に寄った地点から10基検出されている。柱穴は円形あるいは楕円形の掘り方を有し、径は11～38cm、深さは7～51cmである。柱痕の径は確認できなかった。

炉は床面中央部から石囲炉が検出された。炉の平面形は長方形であるが南側の石を一部欠いている。石の抜き取り痕は確認できなかった。規模は66×46cmで、10～25cm程の花崗岩の礫が使用されている。炉内の焼土は発達しておらず、微小な炭化材と焼土粒を含む褐色土が堆積しているのみである。(神 敏明)

出土遺物 (第62図、写真図版55)

88～91は埋土から出土した縄文時代中期末葉かと考えられる土器片である。

本遺構は出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期末葉の住居跡と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 0 d 住居跡 (第21図、写真図版15)

重複関係 本住居跡は調査区北西側の尾根の頂部に位置している。VIII A 1 d 住居跡と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。検出はVIII A 1 d 住居跡の鍛冶炉を断ち割ったところ、複式炉を構成する礫を検出し、IX層上面において濁った褐色土の広がりをとらえたことによる。

平面形は、北壁から東壁をVIII A 1 d 住居に切られているため、全容は不明であるが、残存部からややゆがんだ円形を呈していることが推測される。規模は、開口部径が4.0m×4.16mで、壁高は西壁で56cm、南壁で32cmである。壁はIX層中にあり、急角度で外傾して立ち上がる。

埋土は2層に大別され、濁った黄褐色土が主体である。床面はIX層中に形成され、平坦であるが、東よりはやや凹凸がある。全般に固く締まっている。

柱穴は確認できなかった。

石組複式炉 炉は床面中央部よりわずかに東寄りから石組みの複式炉が検出された。炉の規模は1.34m、最大幅は0.86mである。炉はI～IIIに分割される。IIIの部分の北側の石を欠く。炉の使用面はIの部分からやや傾斜してIIIの部分に至っている。焼土の堆積は薄く、IとIIを仕切る石の周辺とIIIの部分に薄く見られるのみであるが、焼土の部分以外でも火を受けて固く締まっている。炉を構成する石は花崗岩の板状の礫で、表面は火を受けてやや赤化している。

出土遺物 (第63図、写真図版55)

埋土から縄文時代中期後葉の土器片が出土した。94は床面から出土した磨石である。

遺構の形態から、本住居跡は縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と推定される。(高橋佐知子)

VII B 2 a - 1 住居跡 (第22図、写真図版16)

本住居跡は調査区中央の谷に位置する。VII B 3 a 住居跡、VII B 3 a - 1 焼土遺構と重複関係にあり、VII B 3 a 住居跡より古く、VII B 3 a - 1 焼土遺構より新しい。さらに、本住居跡とVII B 2 a - 2 住居跡は重複関係にあると推定される。水田造成時に本住居の東半とVII B 2 a - 2 住居跡の壁が削平されているため、断面によって新旧を明らかにすることはできないが、床面の標高差により、本住居の方が新しいと考えられる。

検出は石組みの複式炉が、水田造成時にカッティングされて表出しており、北壁の立ち上がりが確認されたことによる。検出面はV層の上面より20cmほど下がる。遺構の残存は水田の造成により50%程度である。

平面形はほぼ円形を呈すると考えられる。規模は残存部で開口部の径が3.68m、壁高が北壁で28cm、南壁で18cmである。壁は外傾しながらゆるやかに立ち上がる。

埋土は4層に分かれ、焼土粒、炭化物粒、風化花崗岩粒を含む黒褐色土及び暗オリーブ褐色土が主体である。

床面はV層中に形成され、平坦であるが西半分しか残存していない。残存部の南半分が固く締まっているわりには北側は締まりがない。周溝はない。柱穴と考えられる小穴は炉の東側に1期検出された。楕円形を呈し、深さは30cmである。東半分が水田に切られているため、真に本住居跡に伴うものか明らかでないが、位置やVII B 2 a - 2 住居跡の炉を囲む柱穴を切っているため、ここでは本住居のものとして報告する。楕円形を呈し、深さは33cmを測る。柱痕は確認できなかった。

炉は床面のほぼ中央に石組みの複式炉が検出されている。水田で削平されているため全体の規模は明らかではないが、残存部の長さが1.02m、幅が最大で1.08mである。石組みはIとIIの部分に分かれ、4.5～8cmの厚さの石を上方がやや開くように設置している。一部は石組みを2段に構築する。Iはほぼ住居の中心部にあると思われるが削平を受けている。焼土がcm程残存している。IIは住居の西方向に開く。本遺跡で検出された複式炉は本住居を除き斜面の下方に開いているが、本住居の炉のみは上方に開いている。焼土は3cm程堆積している。炉から西壁に至る部分は、床面が固く締まっている。掘り込みや窪みなどの施設は検出できなかったが、前庭部と推測される。

石組複式炉
斜面上方に開く炉
部分的に固く締まる床

出土遺物 (第63図、写真図版55)

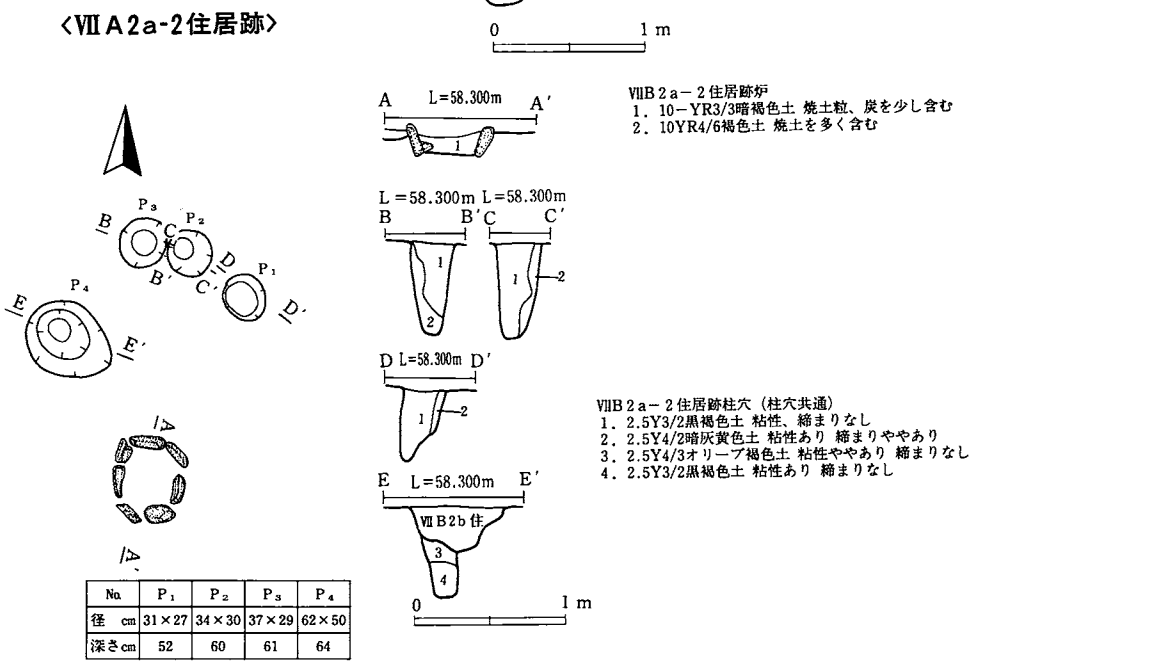
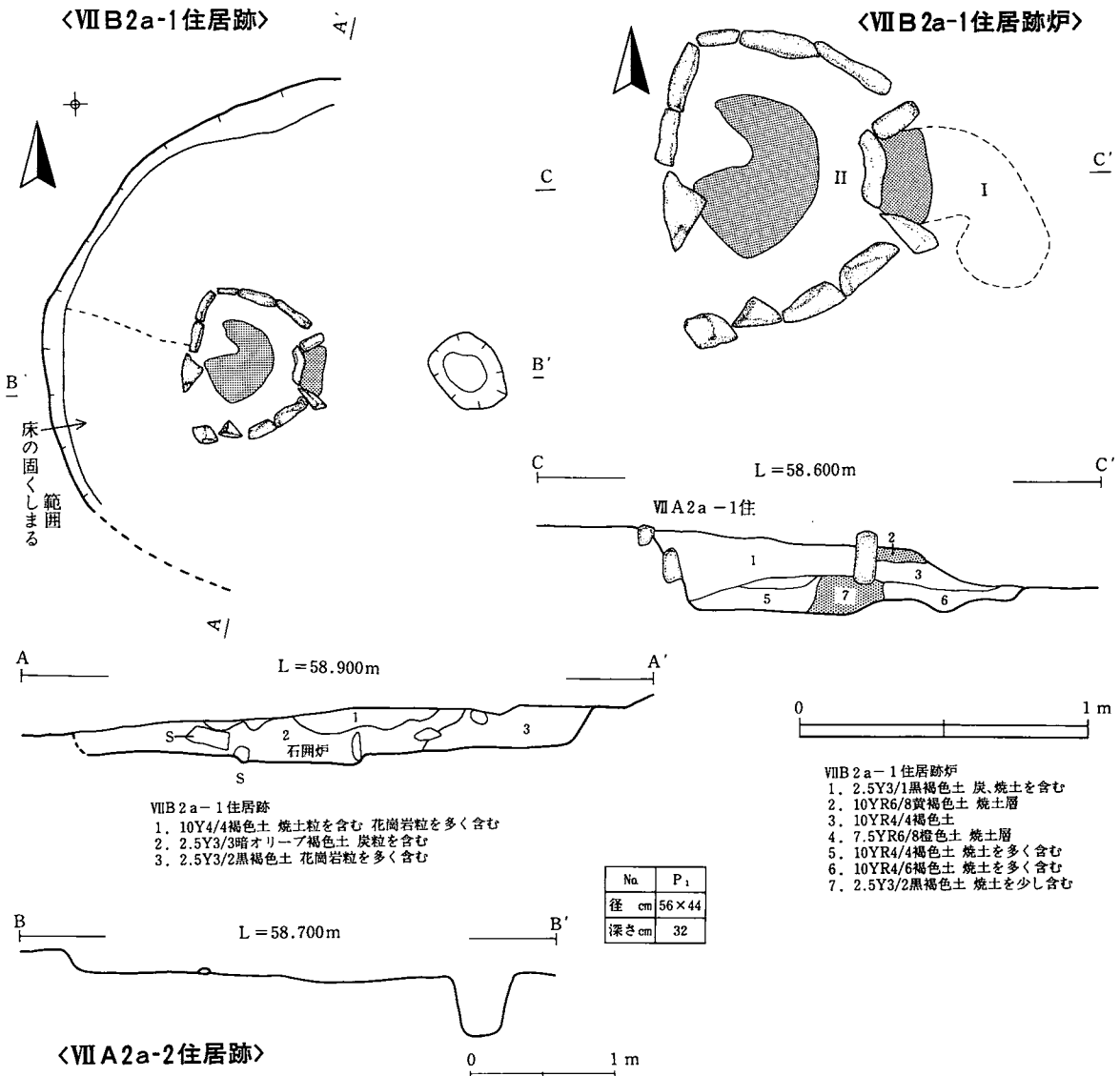
95は炉の直上から得られた縄文時代中期中葉の土器片である。96も同様に炉の直上から得られた土器で、縄文時代前期の土器片である。いずれも流れ込みと考えられる。

出土遺物の数が少量であるため確定できないが、本遺構は形態から縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と考えられる。(高橋佐知子)

VII B 2 a - 2 住居跡 (第22図、写真図版17)

本住居跡は調査区中央の谷に至る緩斜面に位置する。西側にVII B 2 a - 1 住居跡が存在し、本住居の石囲炉が、VII B 2 a 焼土遺構を切っている。検出はIII層水田床土を除去したところ、V層中で石囲炉が表出したことによる。壁は水田の造成で削平されている。従って全体の規模等は不明であるが、炉の周辺から柱穴が検出されたことにより、住居跡として報告することと

壁が削平



第22図 VII B 2 a-1 住居跡、VII B 2 a-2 住居跡

した。床はV層中に形成され、平坦でやや縮まっているが、床面の縮まりぐあい、遺構の規模を推定することはできなかつた。

炉の規模は58cm×52cmで、平坦な石を上方がやや外へ開くような角度で設置している。石はすべて花崗岩で、厚さ10cm程度、長さ20cm程度である。焼土はほとんど形成されておらず、炉の埋土に焼土粒が含まれる程度である。

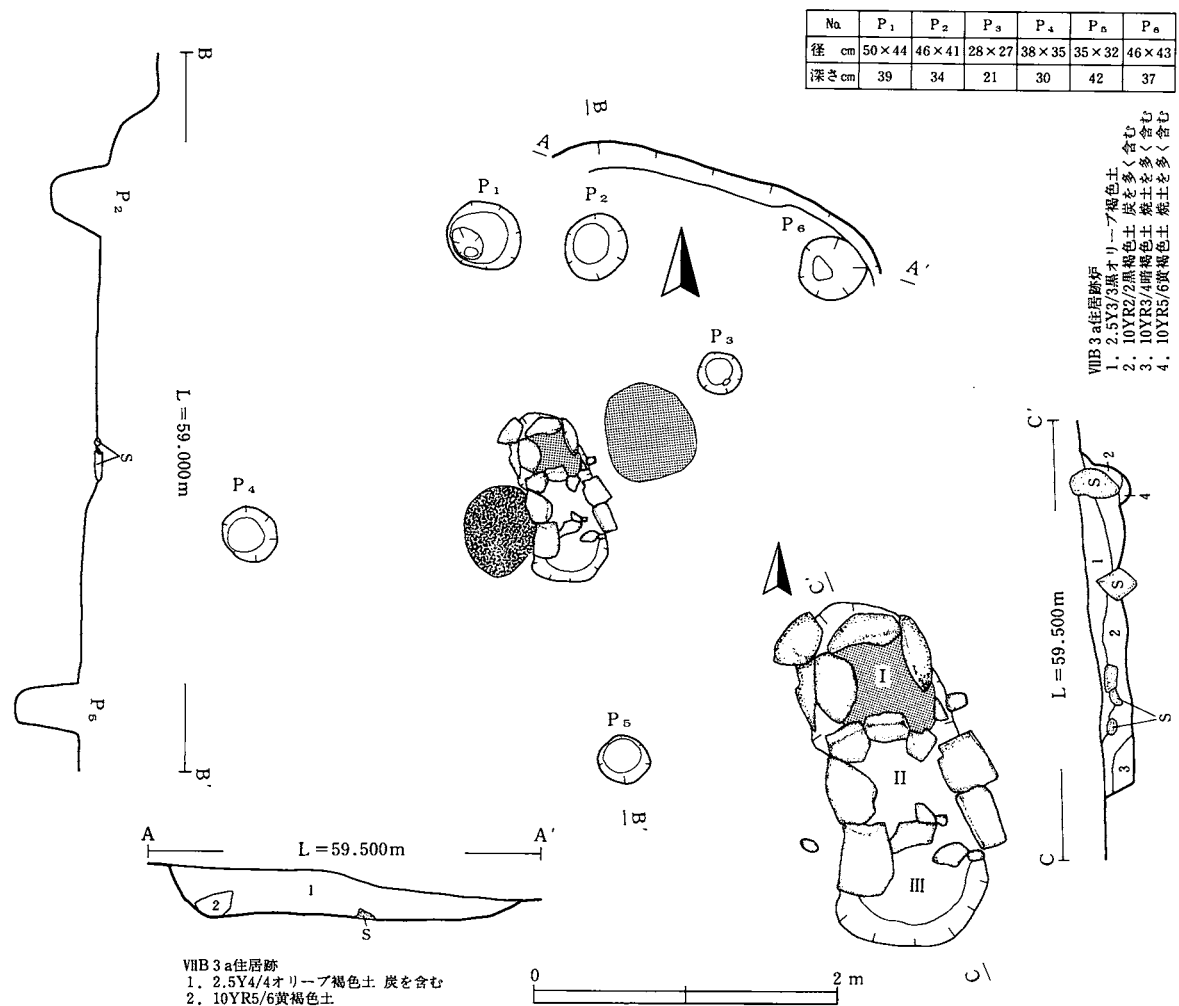
炉の北側から柱穴が4基検出された。平面形は円形もしくは楕円形で、深さは50～64cmである。P1はVII B 2 a - 1 住居跡の柱穴に切られている。柱痕はP2～P4の3基から検出され、その直径は24～30cmである。

出土遺物は埋土、壁が削平されているため得られなかつたが、遺構の形態から縄文時代中期中葉から末葉にかけての住居跡と推定される。

石 囲 炉

VII B 3 a 住居跡 (第23図、写真図版18)

本住居跡は調査区北側の尾根から中央の谷に至る緩斜面に位置している。VII B 2 a 住居跡、VII B 3 a - 1 焼土と上下に重なっており、本住居跡の方が新しい。検出はV層上面で炭を含む 重複関係



第23図 VII B 3 a 住居跡

暗オリーブ褐色土の広がりを確認したことによる。斜面から流れ込んだ風化花崗岩粒が多く堆積しており、明瞭に壁をとらえることができなかつたため、掘り下げたところ石組みの複式炉を検出した。したがって、壁は一部分しか確認できなかった。

平面形は円形を基調としていると思われる。規模は不明であるが、北側に残存する壁と炉、柱穴の位置から3m以上と推定される。壁高は30cmである。

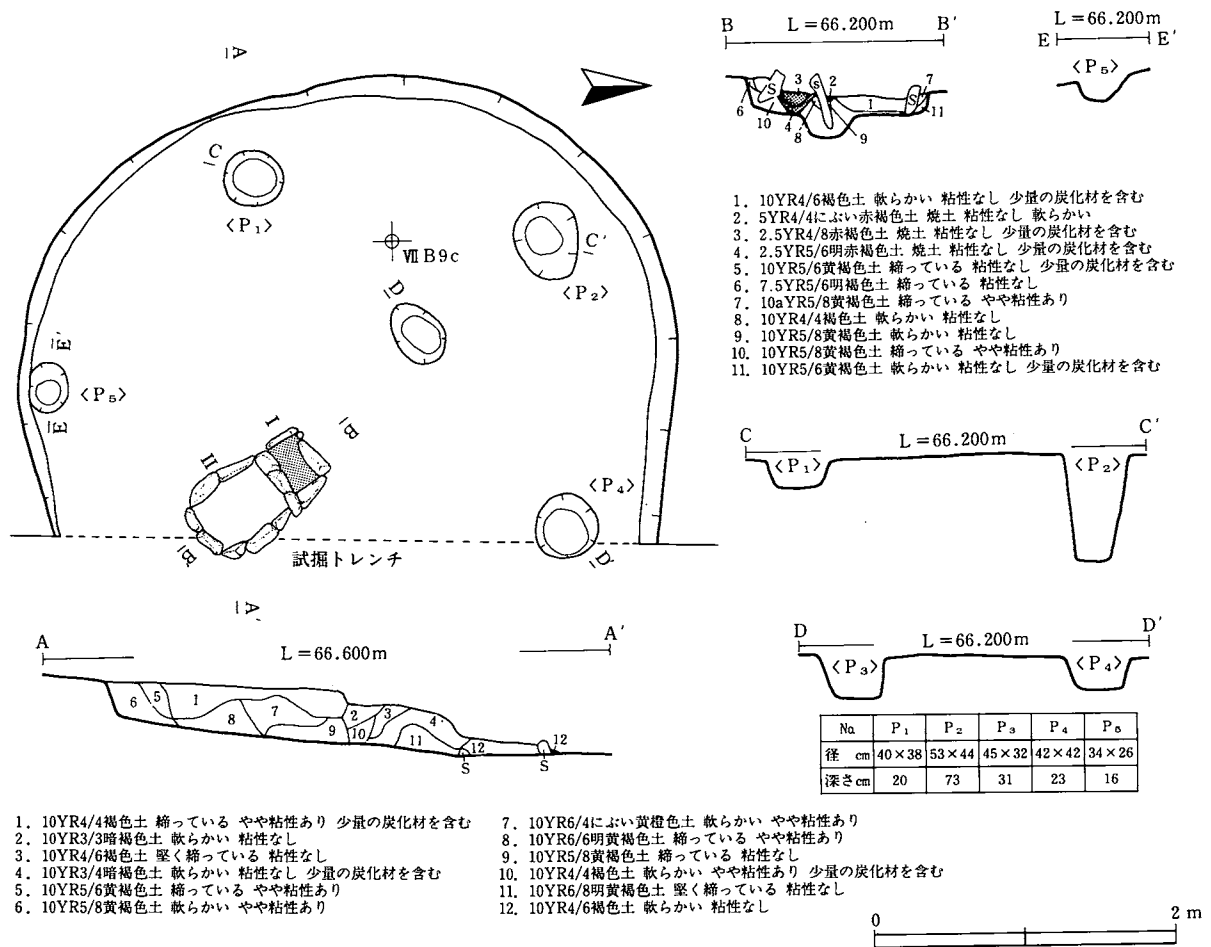
埋土は2層を確認している。炭を含む暗オリーブ褐色土が主体で上層には焼土を含む。床面はV層中に形成され、平坦で締まっている。床面からは柱穴が6基検出された。いずれも円形で、径が30~50cm、深さが28~43cmを測る。柱痕は確認できなかった。

石組複式炉

炉は石組みの複式炉である。規模は石組み部分が98cm、石組みを欠いた部分を含めると118cmで、最大幅は58cmである。炉はI~IIIに分割される。IIIの部分は石組みを欠いており、前庭部とみてよいのではないかと考えられる。焼土の堆積はIの部分にのみみられるが、たいへん薄く、炉の底面が赤く焼けている程度である。石組みの掘り方も赤く焼けている。石自体はそれほど焼けていないことから石の組み替えがあったことが考えられる。掘り込みはIで15cm、IIIで10cmである。

床面の焼土

この石囲炉の東側にブロック状の焼土の集中が検出された。厚さは10cm程で、本住居跡に伴うものと考えられる。また、炉の周辺には床面から焼土が検出されている。



第24図 VII B 8 b 住居跡

さらに炉の西側に、炉に接して厚さ2cmほどの炭の集中が検出されている。炉からかき出したものかと考えられる。

かき出した
炭 か

出土遺物 (第63図、写真図版55)

平面で遺構の検出ができなかったため、遺構内出土として取り上げた土器は小片のみで、図化に至らなかった。98は床面炉の付近から出土した磨石、99は炉の脇の床面に堆積した炭の広がりの中から出土した磨石である。

遺構の形態から縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と考えられる。(高橋佐知子)

VII B 8 b 住居跡 (第24図、写真図版19)

本住居跡は調査区北西の尾根上に位置している。住居跡の北側にはVII B 0 b 住居跡が、南側にはVII B 7 b 土坑が存在する。検出は人力によって試掘トレンチを掘り下げ中に炉を構成する礫を発見したことによる。

住居跡の東側は試掘トレンチによって失われ、それに続く部分は調査区域外に延びることから、平面形の詳細は不明な点が多いが、残存部分から円形を呈すると推定される。開口部の残存する部分の最大径は5.03mである。壁はVI層中にあり、急角度で外傾して立ち上がる。壁高は西壁が39cm、南壁が21cm、北壁が40cmである。

埋土は12層に細分され、上位は褐色土と暗褐色土が主体で、下位は黄褐色土が主体となる。埋土状況が自然堆積としては不自然なことから、人為的な埋め戻しと推定される。床面はVI層中に形成され、斜面下方にやや傾斜するもののほぼ平坦でしまっている。

人為的な
埋め戻し

柱穴は壁際から1基、壁から離れて4基検出されている。柱穴は円形あるいは楕円形の掘り方を有し、径は34~53cm、深さは16~73cmを測る。柱痕の径は確認できなかった。

炉は床面中央からやや南に寄った地点から複式炉が検出された。炉の平面形は楕円形で、規模は98×60cmで、17~28cm程の花崗岩の礫が使用されている。石組みはI・IIの部分に分けられ、Iの部分はIIの部分に付け加えられたように見える。炉内の焼土はIの部分からのみ検出されており、IIの部分は前庭部的なものと推定される。焼土は厚さ15cm程で、比較的良く発達している。(神 敏明)

複式炉

出土遺物 (第63図、写真図版55)

101~104は埋土から出土した縄文時代中期末葉の土器片である。

遺物が少ないため確定はできないが、本遺構は出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期末葉の住居跡と考えられる。(高橋佐知子)

VII B 0 b 住居跡 (第25図、写真図版20)

本住居跡は調査区北西の尾根上に位置している。本住居跡の南側にはVII B 8 b 住居跡が存在する。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところ、VI層上面において黒褐色土の円形の広がりを確認したことによる。

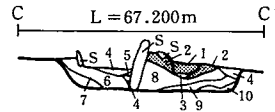
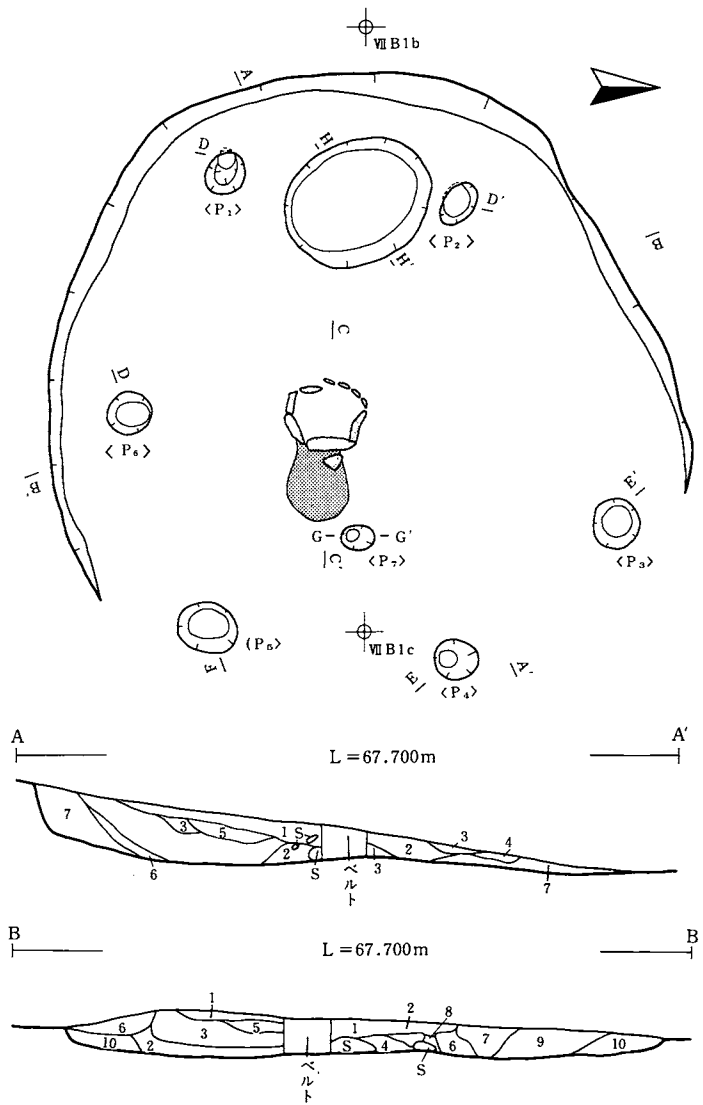
平面形は斜面下方が流失しているため不明な点が多いが、壁の残存部分と柱穴の配置から楕円形と推定される。

斜面下方
の流失

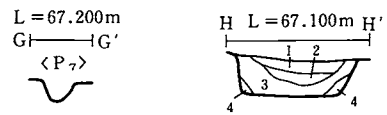
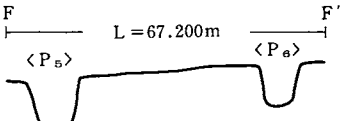
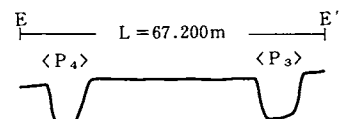
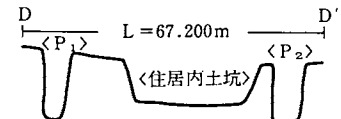
規模は開口部の残存部分の最大径が4.15mで、長径は4.5m前後と思われる。壁はVI層中にあ

り、急角度で外傾して立ち上がる。壁高は東壁が46cm、南壁が15cm、北壁が20cmである。なお、北側の壁は重機による表土剥ぎの際の抜根によって若干攪乱を受けている。

埋土は10層に細分され、上位はシルト質の黒褐色土、中位から下位にかけては暗褐色土が主体である。なお、一部に抜根による攪乱の黄褐色土が見られる。床面はVI層に形成され、ほぼ住居内土坑 平坦でしまっている。床面からは土坑、柱穴、炉が検出されている。土坑は平面形が楕円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は径が100×70cm、深さは28cmである。埋土は黒褐色土と暗褐色土が主体で、壁際に壁の崩落土である褐色土が見られる。柱穴は床面中央部付近から1基と壁からやや離れて6基検出されている。柱穴は円形あるいは楕円形の掘り方を有し、径は23~40



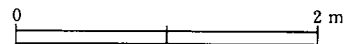
1. 2.5YR5/8明赤褐色 焼土 堅く締まっている
2. 2.5YR5/6明赤褐色 焼土 堅く締まっている
3. 7.5YR明褐色土 締まっている 粘性なし
4. 10YR4/4褐色土 締まっている 粘性なし 炭化材を少量含む
5. 10YR6/6明黄褐色土 締まっている 粘性なし
6. 10YR6/6明黄褐色土 堅く締まっている 粘性なし
7. 10YR褐色土 堅く締まっている 粘性なし 炭化材を少量含む
8. 10YR6/6明黄褐色土 堅く締まっている すなつぶを少量含む
9. 10YR5/6黄褐色土 堅く締まっている 粘性なし
10. 10YR6/8明黄褐色土 堅く締まっている 粘性なし



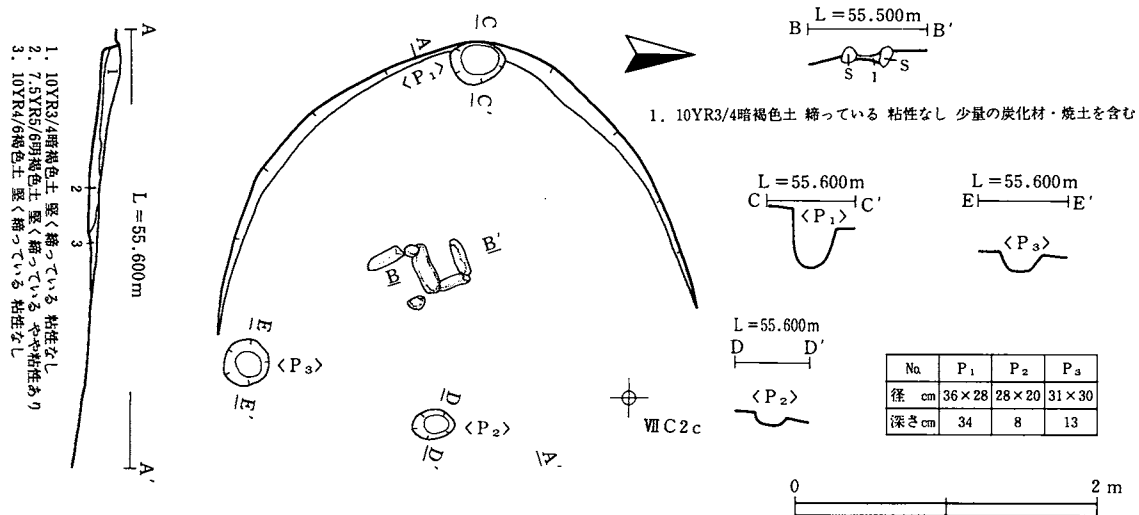
1. 10YR2/2黒褐色土 軟らかい 粘性なし
2. 10YR4/4褐色土 締まっている やや粘性あり
3. 10YR3/4暗褐色土 締まっている 粘性あり
4. 10YR4/4褐色土 軟らかい 粘性あり

1. 10YR2/3黒褐色土 軟らかい やや粘性あり
2. 10YR3/4暗褐色土 軟らかい やや粘性あり
3. 10YR4/3にふい黄褐色土 軟らかい 粘性なし
4. 10YR3/3暗褐色土 締まっている やや粘性あり 炭化材を少量含む
5. 7.5YR3/3暗褐色土 軟らかい 粘性なし 炭化材・焼土を少量含む
6. 10YR4/4褐色土 締まっている 粘性なし
7. 10YR5/6黄褐色土 堅く締まっている 粘性なし
8. 10YR2/2黒褐色土 軟らかい 粘性なし
9. 10YR5/4にふい黄褐色土 締まっている 粘性なし
10. 10YR4/6褐色土 締まっている やや粘性あり

Na	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
径 cm	29×25	32×19	33×31	30×27	40×33	30×29	23×16
深さ cm	47	40	30	30	34	27	14



第25図 VII B 0 b 住居跡



第26図 VII C 1 b 住居跡

cm、深さは14～47cmである。柱痕の径は確認できなかった。

炉は床面中央部付近で石囲炉が検出されている。平面形は円形で規模は55×47cmで、8～34cmの花崗岩の礫が使用されている。石組みの内部からは焼土はほとんど検出されず、東側の石 石 囲 炉 組みの外部に焼土が広がっていた。東側の礫は炉を構成する礫のうち最大のものである。焼土は厚さ9cm程で良く発達している。(神 敏明)

出土遺物 (第63図、写真図版56)

105、106、108、109は埋土から出土した後期初頭の土器片であるが流れ込みの可能性がある。本遺構は遺構の形態から縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と考えられる。(高橋佐知子)

VII C 1 b 住居跡 (第26図、写真図版21)

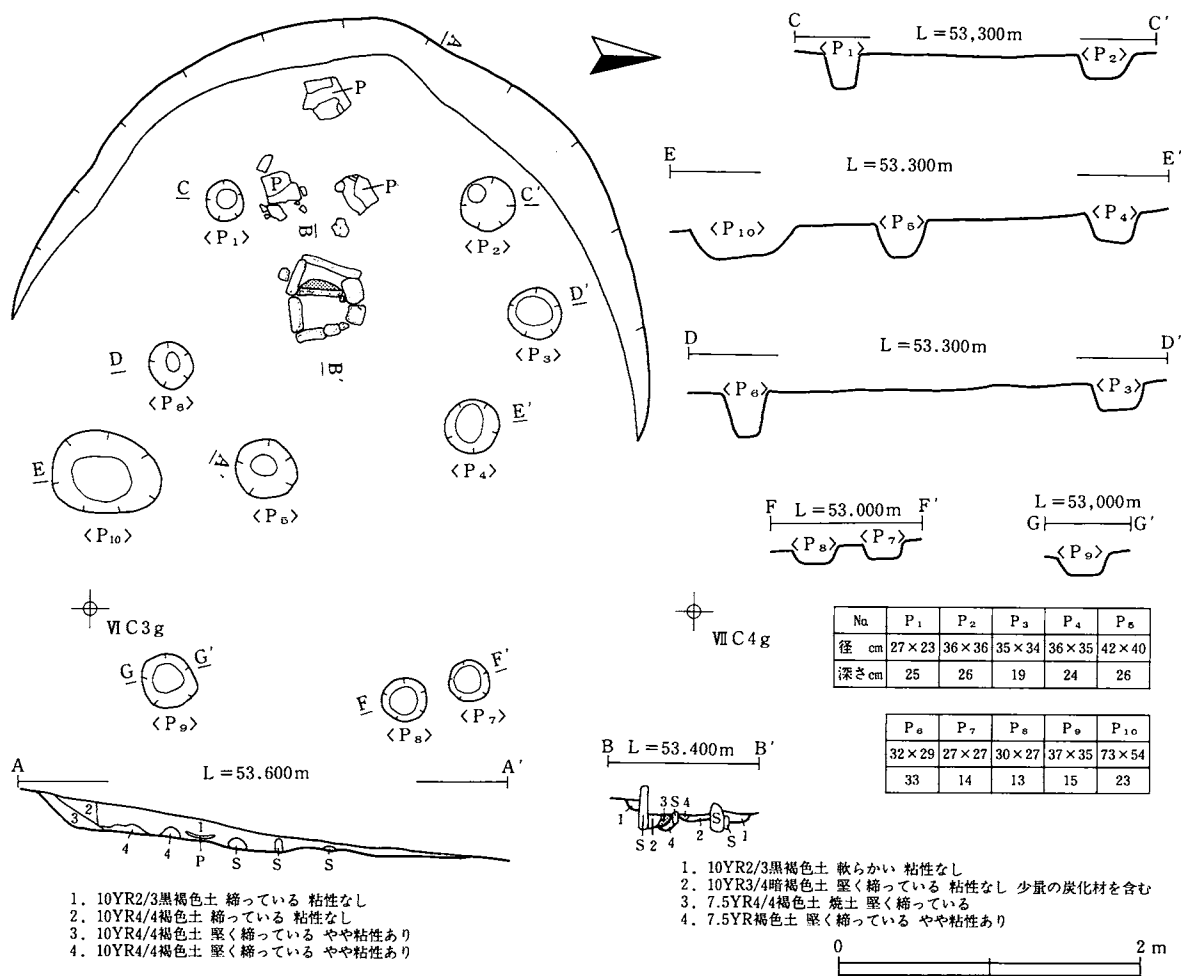
本住居跡は調査区東側の尾根上に位置している。本住居跡の南西側にはVIC 0 a - 1 住居跡、VIC 0 a - 2 住居跡が、南側にはVIC 0 b 住居跡が、東側にはVII C 1 c 土坑が隣接して存在する。検出は人力による表土除去後のVI層上面において暗褐色土の半円状の広がりを確認したことによる。

平面形は人為的な削平と住居跡の東側にあたる斜面下方の流失により不明な点が多いが、残 斜面下方 存する部分から円形あるいは楕円形を呈すると考えられる。 の 流 失

規模は残存する開口部の最大径が3.07mである。壁は上部が削平されている。残存する壁はVI層中にあり、西壁は急角度で外傾して立ち上がり、北壁と南壁は緩やかに外傾して立ち上がる。壁高は西壁が24.2cm、南壁が10.6cm、北壁が3.8cmである。

埋土は3層に細分され、西側の上位は暗褐色土、斜面下方にあたる東側は褐色土、下位は粘土質の明褐色土が主体である。床面はVI層中に形成され、ほぼ平坦でしまっている。床面からは柱穴と炉が検出されている。柱穴は壁際から2基、中央部に寄った地点から1基検出され、円形及び楕円形の掘り方を有する。規模は径が28～36cm、深さは8～34cmである。柱痕の径は確認できなかった。

炉は床面ほぼ中央付近から石囲炉が検出されている。平面形は方形を呈すると思われるが、石 囲 炉



第27図 VII C 3 f 住居跡

西側の礫を欠くため詳細は不明である。また、炉外南側に南北方向に長い礫が存在するが、抜き取られた礫か前庭部を構成する礫かは確認できなかった。炉の規模は34×34cmで、20～35cmの花崗岩の礫が使用されている。炉内の焼土はあまり発達しておらず、少量の炭化材と焼土粒を含む暗褐色土が存在するのみである。(神 敏明)

出土遺物 (第63図、写真図版56)

112は埋土から出土した縄文時代中期末葉の土器片である。

本遺構は出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期末葉の住居跡の可能性がある。

(高橋佐知子)

VII C 3 f 住居跡 (第27図、写真図版22)

本住居跡は調査区東側の尾根上に位置し、北側にはVII C 5 f 住居跡が隣接する。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところVI層上面において黒褐色土の半円状の斜面下方

の流失

平面形は人為的削平と住居跡の東側にあたる斜面下方の流失により不明な点が多いが、残存

する壁と柱穴の配置から円形あるいは楕円形と推定される。

規模は残存する開口部の最大径が4.26mである。壁は上部が削平されており、壁高は西壁が23cm、南壁が7cm、北壁が14cmである。壁はVI層中にあり、床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

埋土は4層に細分されるが、シルト質の黒褐色土が主体で、壁際と下位に粘土質の褐色土が見られる。床面はVI層中に形成され、斜面下方にやや傾斜し若干の凹凸が見られるものの、堅くしまっている。床面の西壁に寄った地点には土器が散乱していた。床面からは炉と柱穴が検出されている。

柱穴は壁からやや離れて10基存在する。掘り方の平面形は円形あるいは楕円形で、規模は径が27～73cm、深さは13～33cmである。柱痕の径は確認できなかった。P₁～P₆の柱穴は炉を取り巻くように円形に配置されているが、P₇～P₁₀はその東側に配置されており、住居跡が拡張された可能性がある。

炉は床面中央部と思われる地点からやや西に寄った地点で複式炉を検出している。平面形はややいびつな方形で、規模は58×52cmを測り、7～40cmの花崗岩の礫が使用されている。炉は中央部が礫によって東西方向に二分される形の複式炉で、焼土は西側の部分で確認されている。焼土の厚さは7cm程で、中央寄りで検出されている。東側の部分では少量の炭化材を含む暗褐色土が堆積しており、焼土は確認されなかった。(神 敏明)

複式炉

出土遺物 (第64図、写真図版56)

床面直上から縄文時代中期後葉かあるいは末葉の土器が出土している。

本遺構は出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期末葉から後葉にかけての住居跡と考えられる。(高橋佐知子)

VII C 5 f 住居跡 (第28図、写真図版23)

本住居跡は調査区東側の尾根上に位置し、南側にはVII C 3 f 住居跡が存在する。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところVI層上面において暗褐色土の広がりを確認したことによる。本住居跡は遺構の大半が調査区域外に続いているため詳細は不明な点が多い。

調査区外
に伸びる

平面形は検出された南壁と西壁の一部から円形あるいは楕円形と推定される。規模は検出部分から5m前後と考えられる。壁はVI層中に形成され、急角度で外傾して立ち上がる。壁高は西壁が35cm、南壁が16cmである。

埋土は暗褐色土が主体で、西壁際に褐色土が見られる。床面はVI層に形成され、やや斜面下方に傾斜するもののほぼ平坦でしまっている。床面からは柱穴が2基検出されている。柱穴は円形及び楕円形の掘り方を有し、規模は径が43cm、深さは24～27cmである。柱痕の径は確認できなかった。(神 敏明)

出土遺物 (第64図、写真図版56)

埋土から縄文時代中期後葉かあるいは中葉の土器片が出土している。

本住居跡は出土遺物が少なく、遺構の形態も不明な点が多いことから構築時期の特定は難しいが、占地及び検出面から他の住居跡同様縄文時代中期の遺構と推定される。(高橋佐知子)

(2) 竪穴状遺構

VIC 7 b 竪穴状遺構 (第29図、写真図版24)

本遺構は調査区東側の尾根上に位置している。西側にはVIC 7 a 住居跡が、北側にはVIC 9 b 土坑が、東側にはVIC 7 d 住居跡が存在する。検出は人力による表土除去後のVI層上面において暗褐色土の円形の広がりを確認したことによる。

斜面下方 本遺構は人為的な削平と斜面下方の流失により残存状態は不良で、遺構の詳細も不明な点が多い。**流失** 平面形は残存部分から円形と推定され、規模は開口部径が3.01×2.76mである。壁はVI層中にあり、急角度で外傾して立ち上がる。壁高は東壁が9cm、西壁が41cm、南壁が14cm、北壁が32cmである。

埋土は10層に細分されるが、上位はシルト質の暗褐色土、中位から下位にかけてはシルト質の褐色土と明褐色土が堆積している。床面はVII層上面に形成され、基盤層の礫が見られるもののほぼ平坦でしまっている。(神 敏明)

出土遺物 (第64図、写真図版56)

埋土から縄文時代中期中葉の土器片と石皿が出土した。

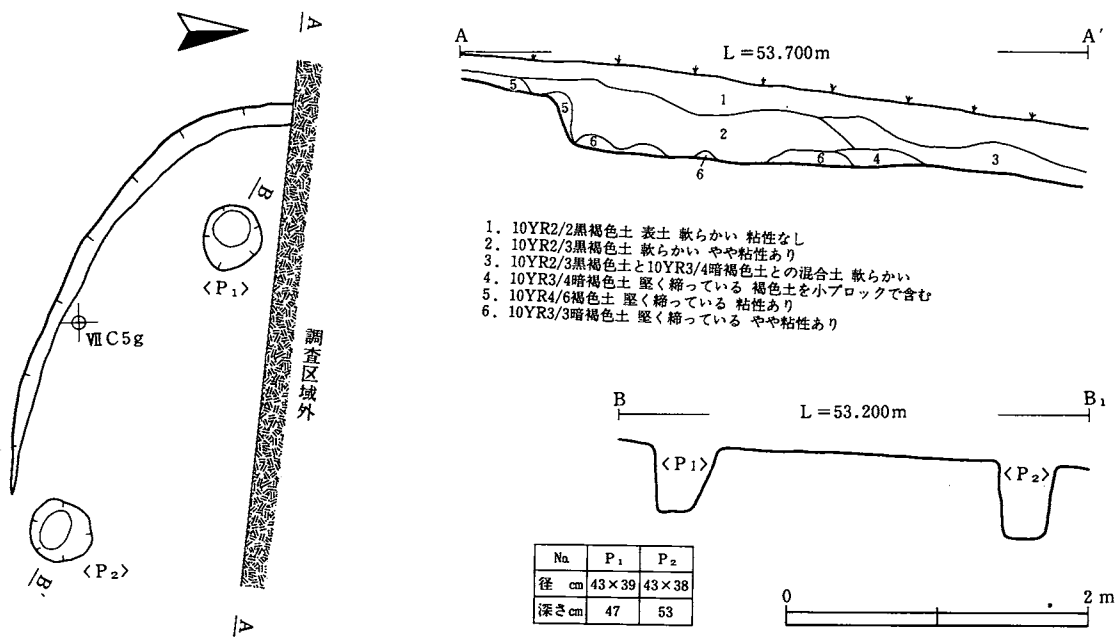
出土遺物が少ないので時期の確定は困難であるが、縄文時代中期の遺構と考えられる。

(高橋佐知子)

VIB 1 c 竪穴状遺構 (第29図、写真図版25)

本遺構は調査区北側の尾根から中央の谷に至る斜面上に位置する。南側にはVIB 0 d 土坑が存在する。検出は人力によって斜面堆積のVI層を掘り下げたところ、オリーブ褐色土の楕円形の広がりをとらえたことによる。

内湾した壁 平面形は楕円形を呈し、長径2.8m、短径2.7mを測る。壁及び床はVI層中に形成され底面が



第28図 VIC 5 f 住居跡

らやや内湾してゆるやかに立ち上がる。壁高は40cmである。

埋土は5層に別れ、オリブ褐色土が主体である。4層に多くの炭を含む。底部の西南より炭の多い層から焼土が検出されたが現地製ではなく、投げ込まれたものと考えられる。

出土遺物 (第64~66図、写真図版56、57)

本遺構から出土した土器は前期前葉に属し、繊維を含んでいる。121~126は底面から出土した土器である。127~136は埋土から出土した。石器は137、143が底面から、その他は埋土から出土している。埋土には非常に多くの土器を含み、量は大量コンテナにして半分ほどである。

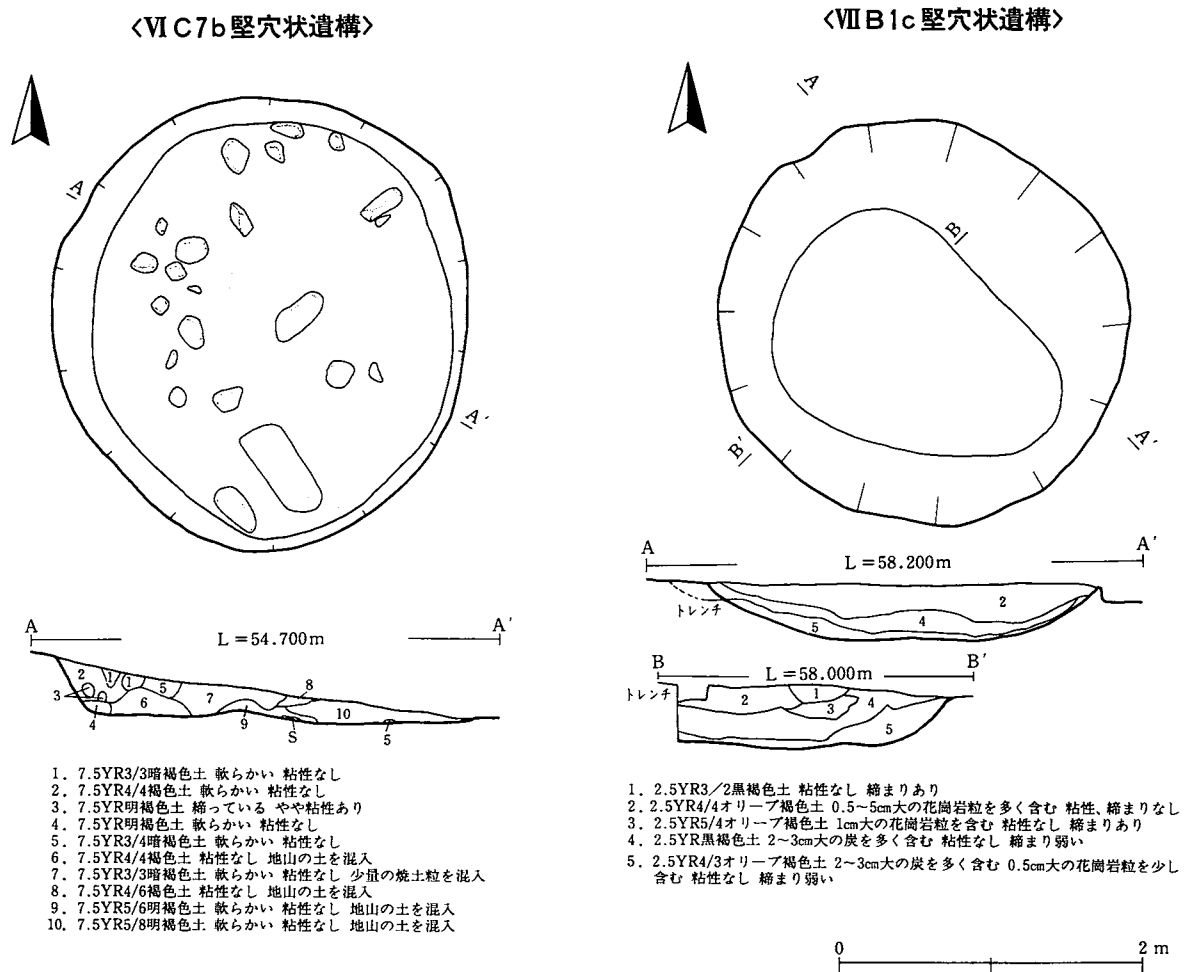
本遺構は出土した土器から縄文時代前期前葉の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

(3)土坑

VIB 0 d 土坑 (第30図、写真図版28)

本遺構は調査区北側から中央の谷に至る緩斜面に位置する。南約4mの地点にはVIB 9 c 炭窯が、西約2mにはVII B 1 c - 3 焼土遺構が存在する。検出はV層を掘り下げたところ、黒褐色土の広がりをとらえたことによる。

平面形は楕円形で、規模は長径1.99m、短径1.37mを測る。壁はV層中に形成され、外傾斜



第29図 堅穴状遺構

副 穴 して立ち上がる。底もV層で、平坦である。底部北壁際に副穴を有するが、深さは底面から約12cmである。

埋土は2層に細分され、細かい炭粒を含んでいる。

底部と壁際から15cm～人頭大の花崗岩の礫が検出されている。

出土遺物

出土遺物はない。

本遺構は出土遺物がないため、時期の確定はできないが、検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VIC 9 b 土坑 (第30図、写真図版26)

本遺構は調査区東側の尾根上に位置し、南側にはVIC 7 b 竪穴状遺構が、北側にはVIC 0 b 住居跡が存在する。検出は人力による表土除去後のVI層上面において暗褐色土の円形の広がりを確認したことによる。

平面形は不整な円形で、断面形は浅い皿状を呈する。規模は開口部径が2.09×1.83mで、底部径は1.50×1.37m、深さは45cmである。壁はVI層からVIIにかけて形成され、緩やかに外傾して立ち上がる。底部はVII層中にあり、平坦ではあるが15～50cm程の礫が散在する。

埋土は4層に細分され、上位は黄褐色土混じりの褐色土で攪乱土と思われる。中位は少量の微小な炭化材が含まれる暗褐色土で、下位には堅くしまった粘土質の褐色土が堆積している。

(神 敏明)

出土遺物 (第66図、写真図版57)

埋土から縄文時代中期後葉と考えられる土器片が出土している。

本遺構は出土遺物から縄文時代中期後葉の土坑と推定される。(高橋佐知子)

VII A 8 i 土坑 (第30図、写真図版26)

本遺構は調査区北西の尾根の斜面上に位置し、VII A 8 i 住居跡と重複関係にあり、本土坑が住居跡を截る形になっていることから、構築時期は本土坑の方が新しい。検出はVII A 8 i 住居跡精査中にいよいよ黄褐色土の円形の広がりを確認したことによる。なお、本遺構の上部は調査の下手際から若干削平されている。

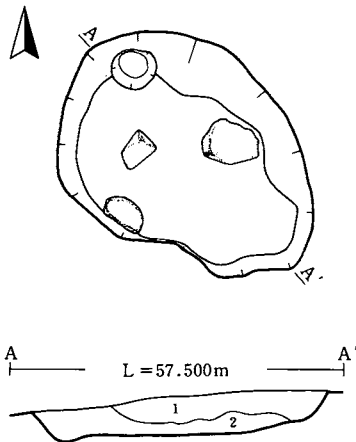
フラスコ状 平面形は不整な円形で、断面形はフラスコ状を呈する。規模は開口部径が1.28×1.21m、底部径は1.67×1.41m、深さは1.37mである。壁はVII層中に形成され、底部から1m程のところまでは内湾し、その後ほぼ直に立ち上がる。底部はVII層にあり、やや凹凸がみられ、堅くしまっている。

埋土は15層に細分され、上位はシルト質のいよいよ黄褐色土、中位はシルト質の黄褐色土、下位はシルト質の明褐色土と粘土質の黄褐色土が主体である。埋土の状況からは埋め戻しの可能性が認められる。(神 敏明)

出土遺物はない。

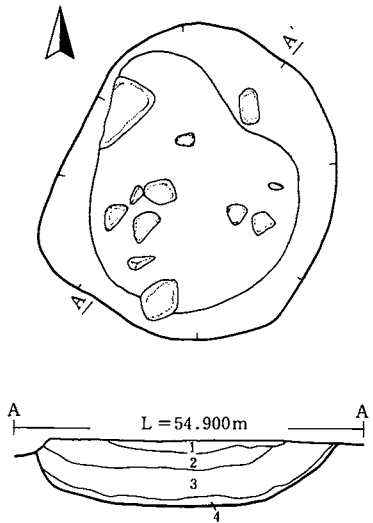
本遺構は出土遺物がないことから時期の特定はできないが、この付近の他の遺構と同様縄文時代中期に属すると推定される。(高橋佐知子)

<VI B0d 土坑>



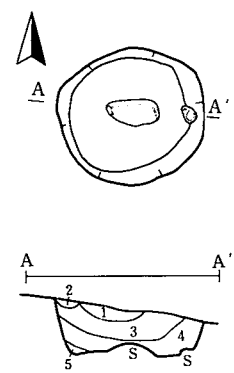
1. 10YR3/2黒褐色土 細かい炭、褐色土粒を含む
2. 10YR4/4褐色土 細かい炭、褐色土粒を含む

<VI C9b 土坑>



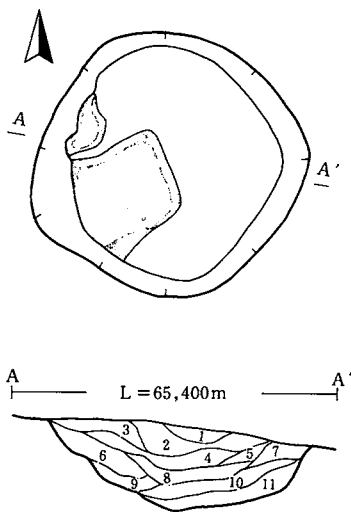
1. 7.5YR4/4褐色土 強く締っている 黄褐色土をブロック状にふい含む
2. 10YR3/4暗褐色土 強く締っている やや粘性あり
3. 10AYR3/4暗褐色土 強く締っている 少量の炭化材を含む
4. 7.5YR4/6褐色土 非常に強く締っている やや粘性あり

<VII A0f 土坑>



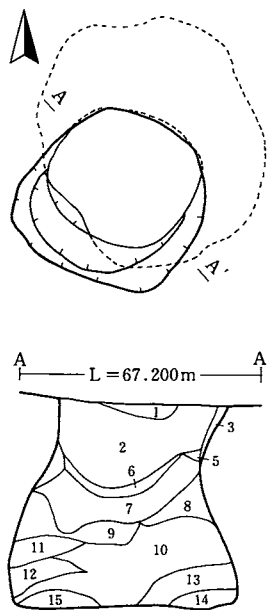
1. 10YR3/3暗褐色土 締っている 粘性なし
2. 10YR5/6黄褐色土 強く締っている 粘性なし
3. 10YR4/4褐色土 締っている 粘性なし
4. 10YR4/6褐色土 強く締っている やや粘性あり
5. 10YR6/6明黄褐色土 締っている やや粘性あり 砂粒を含む

<VII A0i 土坑>



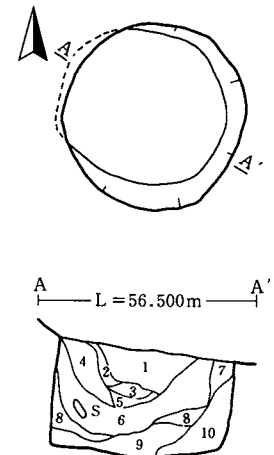
1. 10YR3/3暗褐色土 締っている 粘性なし
2. 10YR3/4暗褐色土 締っている 粘性なし
3. 10YR4/4褐色土 軟らかい 粘性なし
4. 10YR2/3黒褐色土 軟らかい 粘性なし
5. 10YR4/3にふい黄褐色土 締っている 粘性なし
6. 10YR4/6褐色土 締っている 粘性なし 砂粒を含む
7. 10YR5/6黄褐色土 強く締っている やや粘性あり
8. 10YR3/2黒褐色土 強く締っている やや粘性あり
9. 10YR5/8黄褐色土 強く締まっている やや粘性あり 砂粒を含む
10. 10YR4/6褐色土 締っている やや粘性あり
11. 10YR6/8明黄褐色土 強く締っている やや粘性あり

<VII A8i 土坑>

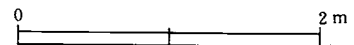


1. 10YR5/4にふい黄褐色土 締っている 粘性なし
2. 10YR5/6黄褐色土 締っている やや粘性あり
3. 10YR6/6明黄褐色土 軟らかい やや粘性あり
4. 10YR7/6明黄褐色土 軟らかい やや粘性あり
5. 10YR6/8明黄褐色土 軟らかい やや粘性あり
6. 10YR4/6褐色土 締っている 粘性あり
7. 10YR5/6黄褐色土 締っている やや粘性あり
8. 10YR5/8黄褐色土 締っている やや粘性あり 砂粒を含む
9. 10YR4/6褐色土 締まっている やや粘性あり 砂粒を含む
10. 7.5YR5/6明黄褐色土 締っている 粘性あり
11. 7.5YR6/8橙土 締っている やや粘性あり
12. 10YR6/6明黄褐色土 締っている やや粘性あり
13. 10YR7/6明黄褐色土 軟らかい やや粘性あり
14. 10YR5/8黄褐色土 軟らかい やや粘性あり
15. 110YR5/6黄褐色土 軟らかい 粘性あり

<VII C1a 土坑>



1. 10YR3/2黒褐色土 締っている やや粘性あり
2. 10YR3/4暗褐色土 締っている やや粘性あり
3. 10YR4/4褐色土 固く締っている やや粘性あり
4. 10YR3/3暗褐色土 締っている 粘性あり
5. 10YR3/4暗褐色土 軟らかい やや粘性あり
6. 10YR3/4暗褐色土 軟らかい やや粘性あり 少量の炭化材が混入する
7. 10YR4/6褐色土と10YR3/4暗褐色土の混合物 強く締っている
8. 10YR4/6褐色土 軟らかい やや粘性あり
9. 10YR4/3にふい黄褐色土 軟らかい 粘性あり
10. 7.5YR5/6黄褐色土 締っている 粘性あり



第30図 土坑(1)

VII A 0 f 土坑 (第30図、写真図版26)

本遺構は調査区北西の尾根の頂部付近に位置し、北西側にはVIII A 1 e - 1・2土坑、VIII A 1 e - 1・2炭窯、VIII A 1 d住居跡が占地している。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところ、VI層上面において暗褐色土の円形の広がりを確認したことによる。

ピーカー状 平面形は円形で、断面形は浅いピーカー状を呈する。規模は開口部径が98×89cm、底部径は81×72cm、深さが34cmである。壁はVI層からVII層にかけて形成され、ほぼ直に立ち上がる。底部はVII層中に形成され、堅くしまっている。底部中央にVII層に混入する礫が見られる。

埋土は5層に細分され、上位はシルト質の暗褐色土、中位から下位にかけてはシルト質の褐色土が主体である。(神 敏明)

出土遺物はない。

本遺構は出土遺物がないことから時期の特定はできないが、この付近の他の遺構と同様縄文時代中期に属すると推定される。(高橋佐知子)

VII A 0 i 土坑 (第30図、写真図版26)

本土坑は調査区北西の尾根の頂部付近に位置し、南側の斜面中腹にはVII A 8 i住居跡・VII A 8 i土坑が占地している。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところVI層上面において暗褐色土の円形の広がりを確認したことによる。

平面形は円形で、断面形は浅鉢状を呈する。規模は開口部径が1.87×1.76m、底部径は1.56×1.40m、深さが55cmである。壁はVI層からVII層にかけて形成され、緩やかに外傾して立ち上がる。底部はVII層中にあり、堅くしまっている。西側にはVII層に混入する礫が見られる。

埋土は11層に細分され、上位はシルト質の暗褐色土、中位はシルト質の褐色土と黒褐色土、下位は明黄褐色土が主体である。(神 敏明)

出土遺物はない。

本遺構は出土遺物がないことから時期の特定はできないが、この付近の他の遺構と同様縄文時代中期に属すると推定される。(高橋佐知子)

VII B 7 b - 1 土坑 (第31図、写真図版27)

本土坑は調査区北西の尾根の頂部付近に位置し、北側にはVII B 8 b住居跡が占地している。

重複関係 また、本土坑はVII B 7 b - 2土坑と重複関係にある。新旧関係は本土坑がVII B 7 b - 2土坑を截っており、本土坑の方が新しい。検出は尾根の斜面に設定した試掘トレンチの底部であるVI層上面において暗褐色土の広がりを確認したことによる。

ピーカー状 平面形は不整な断面形、断面形はピーカー状を呈するが、底部北側に円形の副穴を有する。

副 穴 副穴の断面形もピーカー状である。規模は開口部径が2.86×2.51m、底部径が2.49×2.37m、深さは58cmである。副穴の規模は開口部径が108×94cm、底部径が109×90cm、土坑底部からの深さが34cmで、検出面からの深さは111cmである。壁はVI層中にあり、東西の壁は急角度で外傾して立ち上がり、南北の壁はほぼ直に立ち上がる。副穴の壁はVI層からVII層にかけて形成され、北壁側がやや内湾して立ち上がるほかは、ほぼ直に立ち上がる。底部はVI層中にあり、南側にやや傾斜している。底部には凹凸が見られずしまっている。副穴の底部はVII層中にあり、ほぼ

平坦で堅くしまっている。

埋土は副穴も含め16層に細分される。上位は炭化材を少量含むシルト質の黒褐色土と暗褐色土、中位はシルト質の褐色土と暗褐色土、下位は堅くしまった褐色土が主体である。副穴の埋土は黄褐色土と明褐色土が主体である。(神 敏明)

出土遺物はない。

本遺構は出土遺物がないことから時期の特定はできないが、この付近の他の遺構と同様縄文時代中期に属すると推定される。(高橋佐知子)

VII B 7 b - 2 土坑 (第31図、写真図版27)

本土坑は調査区北西の尾根の頂部付近に位置し、VII B 7 b - 1 土坑とは重複関係にある。検出はVII B 7 b - 1 土坑と同様に試掘トレンチ底部のVI層上面において暗褐色土の広がりを検出したことによる。

形状・規模は重複関係により不明な点が多いが、平面形は不整な楕円形、断面形は浅い皿状 **重複関係**を呈すると推定される。規模は開口部径が2.81×1.92m、底部は2.51×1.68m、深さは27cmである。壁はVI層中にあり、西壁は緩やかに外傾して立ち上がり、他の壁は急角度で外傾して立ち上がる。底部はVI層中に形成され、しまっている。両側で段を持ち8cm程高くなる。

埋土は13層に細分され、黒褐色土・暗褐色土・褐色土・黄褐色土が混在し、人為的に埋め戻した可能性が高い。(神 敏明)

出土遺物 (第66図、写真図版57)

埋土から磨石 (156) が出土している。

本遺構は出土土器がないことから時期の特定はできないが、この付近の他の遺構と同様縄文時代中期に属すると推定される。(高橋佐知子)

VII C 1 a 土坑 (第30図、写真図版27)

本遺構は調査区東側の尾根上に位置し、南側にはVIC 0 a - 1 住居跡が、東側にはVII C 1 b 住居跡が占地している。検出は人力による表土除去後のVI層上面において黒褐色土の円形の広がりを確認したことによる。

平面形は円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径が1.23×1.20m、底部径は **ピーカー状**1.13×1.01m、深さが72cmである。壁はVI層中にあり、ほぼ直に立ち上がる。底部はVI層中に形成され、平坦でしまっている。

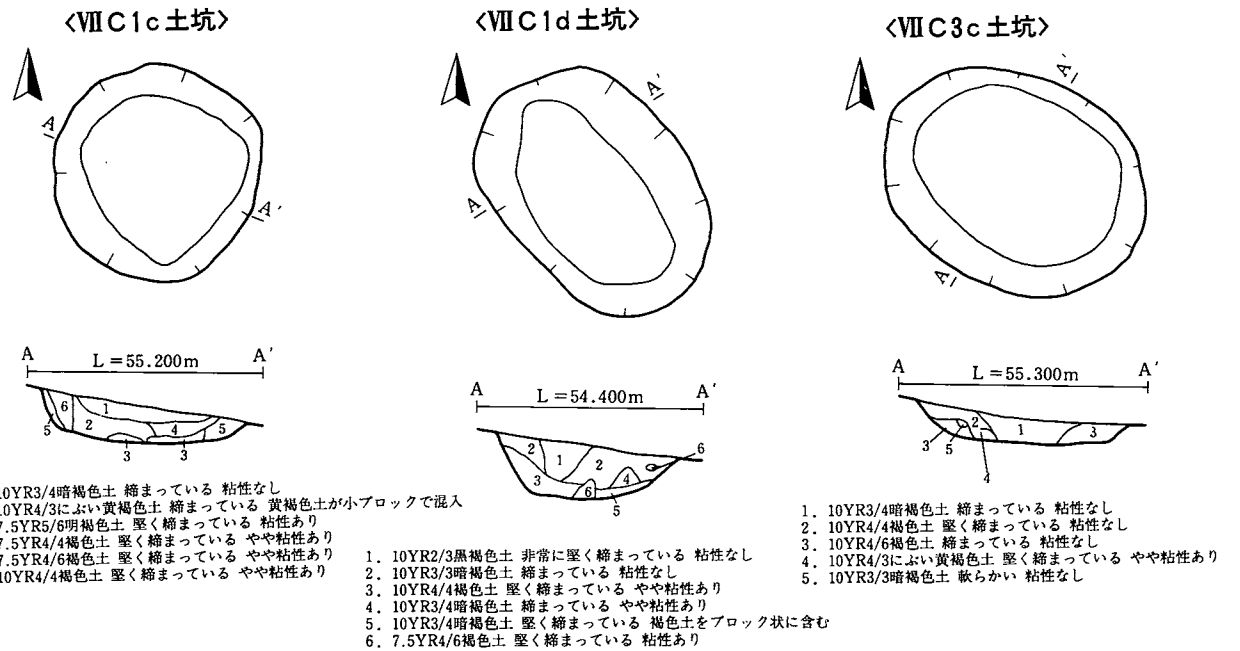
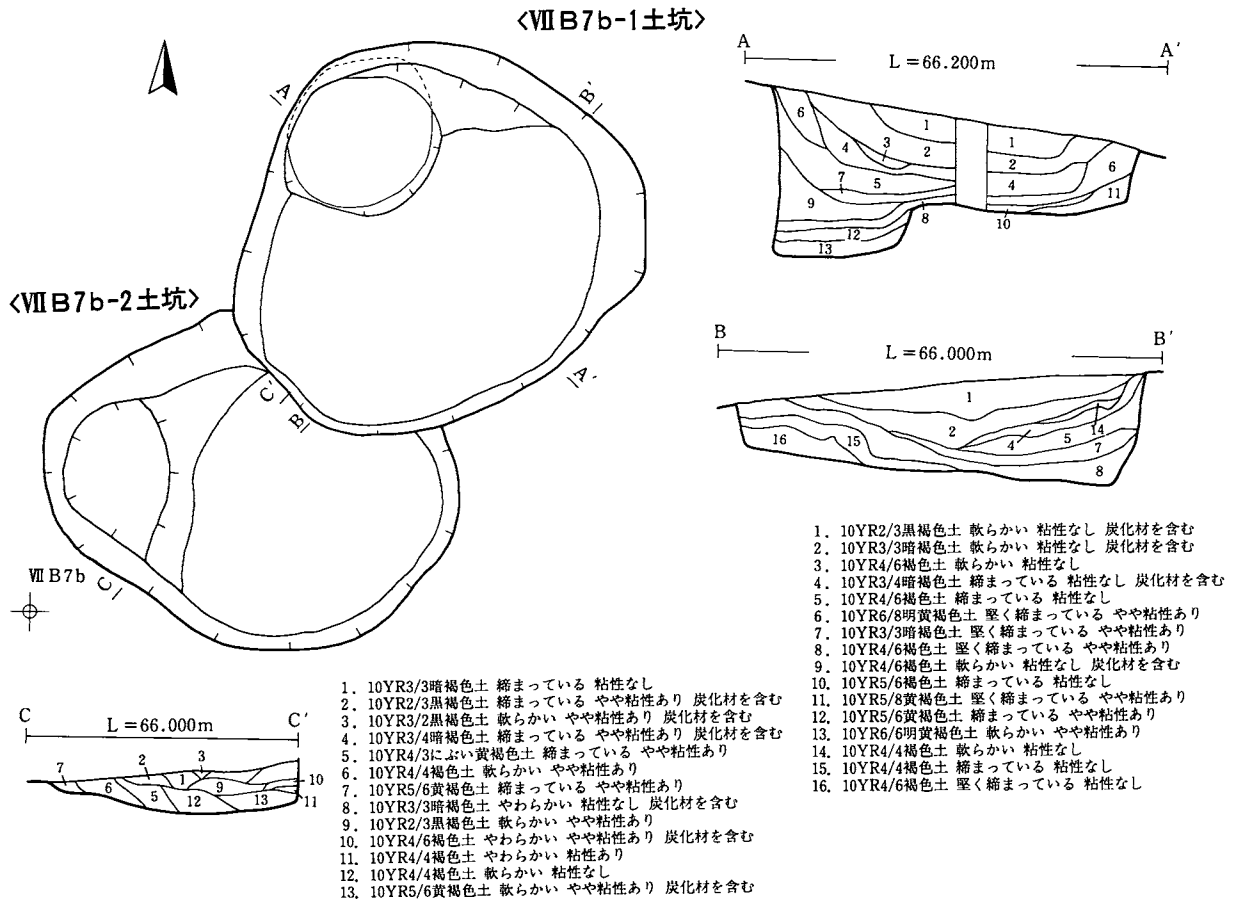
埋土は10層に細分され、上位から中位にかけてはシルト質の黒褐色土と暗褐色土が主体で、下位は粘性のあるにぶい黄褐色土と黄褐色土が主体である。(神 敏明)

出土遺物はない。

本遺構は出土遺物がないことから時期の特定はできないが、この付近の他の遺構と同様縄文時代中期に属すると推定される。(高橋佐知子)

VII C 1 c 土坑 (第31図、写真図版27)

本土坑は調査区東側の尾根上に位置している。西側にはVII C 1 b 住居跡、南側にはVIC 0 b



第31図 土坑(2)

住居跡、東側にはVII C 1 d 土坑、北側にはVII C 3 c 土坑が占地している。検出は人力による表土除去後のVI層上面において暗褐色土の円形の広がりを確認したことによる。

平面形は円形で、断面形は浅い皿状を呈する。規模は開口部径が1.44×1.39m、底部径は1.11×1.07m、深さが25cmである。壁はVI層中にあり、急角度で外傾して立ち上がる。底部はVI層中に形成され、平坦でしまっている。

埋土は6層に細分され、上位はシルト質の暗褐色土、下位は粘土質のにおい黄褐色土と褐色土が主体である。(神 敏明)

出土遺物 (第66図、写真図版57)

埋土から縄文時代中期の土器片が出土している。

本遺構は出土遺物が少ないことから時期の特定はできないが、この付近の他の遺構と同様縄文時代中期に属すると推定される。(高橋佐知子)

VII C 1 d 土坑 (第31図、写真図版28)

本土坑は調査区東側の尾根上に位置し、西側にはVII C 位置 c 土坑が占地している。検出は人力による表土除去後のVI層上面において暗褐色土の楕円形の広がりを確認したことによる。

平面形は不整な楕円形、楕円形は浅鉢状を呈する。規模は開口部径が1.77×1.23m、底部径は1.41×0.74m、深さは37cmを測る。壁はVI層中にあり、西壁はやや急角度で外傾して立ち上がり、他の壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底部はVI層中に形成され、ほぼ平坦で堅くしまっている。

埋土は6層に細分され、上位から中位にかけてはシルト質の黒褐色土と暗褐色土、下位は粘土質の褐色土が主体である。(神 敏明)

出土遺物はない。

本遺構は出土遺物がないことから時期の特定はできないが、この付近の他の遺構と同様縄文時代中期に属すると推定される。(高橋佐知子)

VII C 3 c 土坑 (第31図、写真図版28)

本土坑は調査区東側の尾根上に位置し、南側にはVII C 1 c 土坑が占地している。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところVI層上面において暗褐色土の楕円形の広がりを確認したことによる。

平面形は楕円形で、断面形は浅い皿状を呈する。規模は開口部径が1.83×1.40m、底部径が 皿 状
1.43×1.05m、深さは18cmである。壁はVI層中にあり、緩やかに外傾して立ち上がる。底部はVI層中に形成され、ほぼ平坦でしまっている。

埋土は5層に細分され、中央部にはシルト質の暗褐色土、壁に沿った部分にはシルト質の褐色土が存在する。(神 敏明)

出土遺物はない。

本遺構は出土遺物がないことから時期の特定はできないが、この付近の他の遺構と同様縄文時代中期に属すると推定される。(高橋佐知子)

(4)柱穴状土坑

焼土遺構と VIIA 2 i 柱穴状土坑群 (第37図)

重 複 調査区中央の谷筋から6基検出された。(P 1～P 6)これらのうちP 3はVIIA 2 j - 3 焼土遺構と重複している。また、VIIA 2 j - 2 焼土遺構とも近接しているが、これら焼土遺構との関係は確認できなかった。住居跡の可能性もあると考えて調査したが、壁は確認していない。個々の土坑の規模は以下のとおりである。

	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
規模 (cm)	43×30	40×36	42×36	46×42	27×27	26×25
深さ (cm)	36	32	17	24	30	22

出土遺物はない。これらの柱穴状土坑は検出された層位から縄文時代に属すると考えられる。(高橋佐知子)

(5)炉跡

VIC 7 e 炉跡 (第32図、写真図版29)

本遺構は調査区東側の尾根上に位置している。北西側にはVIC 7 d 住居跡が隣接する。検出は人力による表土除去後のVI層上面において炉石と思われる礫を確認したことによる。検出された炉は、焼土の北西側と南西側が花崗岩の礫によって囲まれており、北東および南東側の礫を欠くが石囲炉と推定される。平面形は焼土の広がりから長方形を呈すると考えられる。規模は82×45cmで、20～48cmの礫を使用している。

炉内の焼土は赤褐色土及び明赤褐色土で、厚さ4～7cmほどに発達しており、焼きしまっている。焼土の上部には少量の微小な炭化材と焼土粒を含む暗褐色土が堆積している。

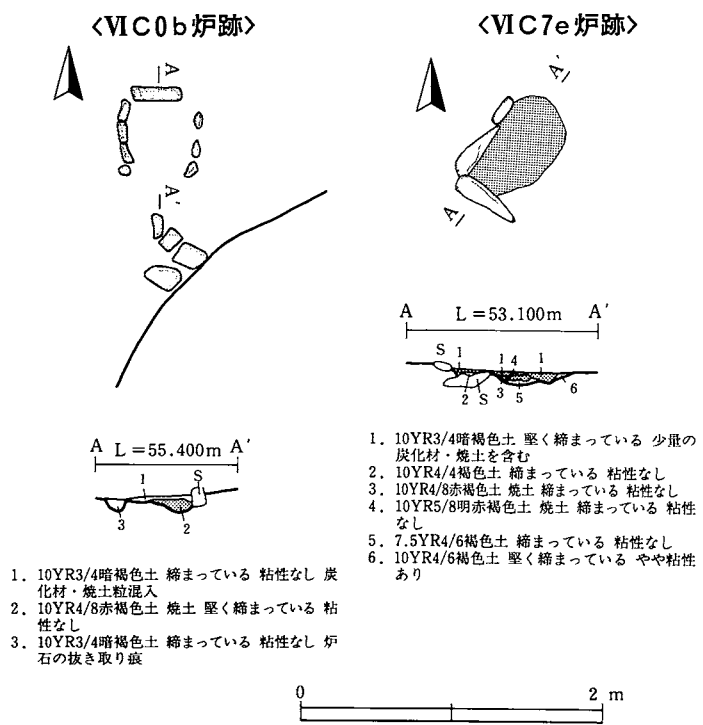
壁 の 斜面部に位置するため住居跡の一部が流失した可能性もある。そのため住居跡の壁や柱穴は検
流出か？ 出されなかった。

本遺構からは遺物が出土しておらず、時期を特定することはできないが、炉の形態や花崗岩の礫を使用していることなどから、付近に存在する縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と同時期の遺構と推定される。(神 敏明)

VIC 0 b 炉跡 (第32図、写真図版29)

本遺構は調査区東側の尾根上に位置し、西側にはVIC 0 a - 1 住居跡が、北側にはVIC 1 b 住居跡が、南東側にはVIC 0 b 住居跡が占地している。検出は人力による表土除去後のVI層上面において炉を構成する礫を検出したことによる。炉の形態は、南側を除いて礫で囲まれており、石囲炉と推定される。炉の南側には17～22cmの礫が散在している。炉の断面に炉石の抜き取り痕が見られることから、散在する礫は炉から抜き取られたものの可能性が高い。規模は60×56cmで、8～32cmの花崗岩の礫が使用されている。

炉内の焼土は主に北側に発達しており、赤褐色に堅く焼きしまっている。焼土の厚さは最大



第32図 炉跡

8 cmである。

本遺構は住居跡に伴う炉跡と推定されるが、占地場所は人為的な削平を受けており、また、斜面部に位置するため住居跡の一部かが流失した可能性もある。そのため住居跡の壁や柱穴は壁の流出か？ 検出されなかった。また、本遺構はVIC 0 b住居跡の壁から50cmしか離れておらず、VIC 0 b炉跡を伴う住居跡はVIC 0 b住居跡と重複関係？ 重複関係にあった可能性が高いが、その場合の新旧関係は削平を受けているため不明である。

本遺構からは遺物が出土

しておらず、時期を特定することはできないが、炉の形態から付近に存在する縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と同時期の遺構と推定される。(神 敏明)

(6)集石

VII B 1 d集石 (第33図、写真図版37)

本遺構は調査区中央の傾斜面に位置する。2 m北にVII B 2 a - 2 住居跡の炉が存在する。検出は暗褐色土層中に角礫の集中が認められたことによる。

50cm四方ぐらいの範囲に5~15cm角の花崗岩角礫が集中している。礫は27個で、土器片も5個含まれるが小片のため、時期は不明である。掘り込みは認められない。2個の礫は火を受けて焼けた形跡があるが、そのほかは明瞭ではない。礫の総重量は23.52kgである。

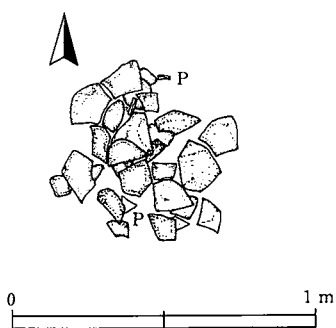
出土遺物

前述のとおり土器片が含まれるが、小片のため図化には至らなかった。出土層位等から縄文時代中期の後と推測される。(高橋佐知子)

(7)焼土遺構

VII B 9 a - 1 焼土遺構 (第34図、写真図版30)

本遺構は調査区中央の傾斜面に位置する。検出はV層を除去後VII層上面で、焼土を確認したことによる。平面形は楕円形で、規模は54×50cmである。焼土の厚さは最大で10cmである。焼土の周辺からは住居跡の存在を示す壁や柱穴は検出されなかった。周囲から縄文時代の土器が出土しているが、本遺構に伴うものかどうかは不明である。



第33図 VII B 1 d 集石

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構で、中期以前に遺されたと考えられる。(高橋佐知子)

VII B 9 b - 1 焼土遺構 (第34図、写真図版30)

本遺構は調査区中央の傾斜面に位置する。検出はV層を除去後VII層上面で、焼土を確認したことによる。平面形式は楕円形で、規模は62×54cmである。焼土の厚さは最大で、12cmある。焼土の周辺からは住居跡の存在を示す壁や柱穴は検出されなかった。周囲からは縄文時代の土器が出土しているが、本遺構に伴うものかどうかは不明である。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構で、中期以前に遺されたと考えられる。(高橋佐知子)

VII B 0 a - 1 焼土遺構 (第34図、写真図版30)

本遺構は調査区中央の傾斜面に位置する。検出面はVII層中である。平面形は不整形で、規模は48×35cmである。焼土の厚さは最大で10cmである。焼土の周辺からは住居跡の存在を示す壁や柱穴は検出されなかった。周囲からは縄文時代の土器が出土しているが、本遺構に伴うものかどうかは不明である。

出土遺物 (第67図、写真図版57)

縄文時代前期前葉の土器片が出土している。

本遺構は検出された層位と出土遺物から縄文時代前期の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII B 0 c 焼土遺構 (第34図、写真図版31)

本遺構は調査区中央の傾斜面に位置する。検出面はV層中である。平面形は楕円形で、規模は70×60cmである。焼土の厚さは最大で22cmで、非常によく発達している。焼土の周辺からは住居跡の存在を示す壁や柱穴は検出されなかった。周囲からは縄文時代の土器が出土しているが、本遺構に伴うものかどうかは不明である。

本遺構は検出された層位から縄文時代前期の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 1 c 焼土遺構 (第34図、写真図版31)

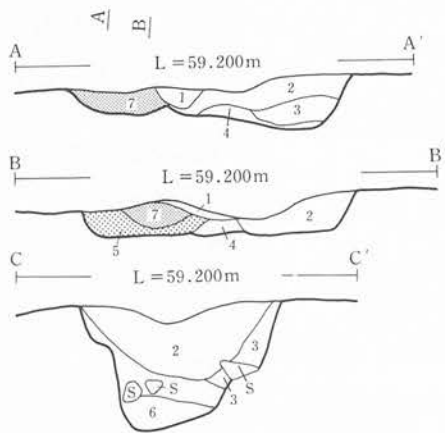
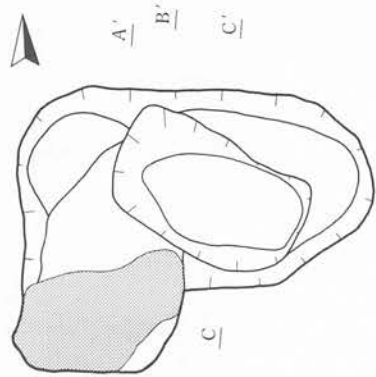
本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層中である。平面形は不整形で、64×53cmである。焼土の厚さは最大で、8cmである。焼土の周辺からは縄文時代の土器が出土しているが、本遺構に伴うものかどうかは不明である。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 1 h 焼土遺構 (第34図、写真図版30)

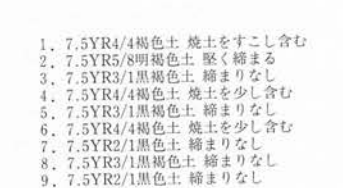
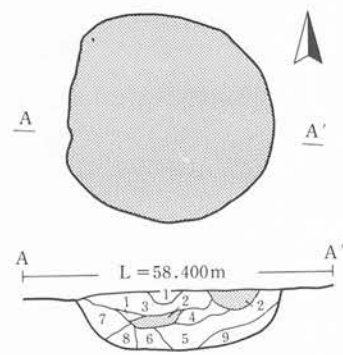
本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層中である。平面形は不整形で焼土は土坑と62×36cmの範囲に広がっている。本焼土は不整形の土坑と重複しているが、伴うかどうかは不明重複?らかでない。焼土の厚さは最大で10cmである。土坑の規模は長径1.1m、短径0.6mで、土坑の

<VIIA1h 焼土遺構>



1. 2.5Y3/2黒褐色土 焼土粒をわずかに含む
2. 2.5Y4/2暗灰黄色土
3. オリーブ褐色土 黄褐色土粒を含む
4. オリーブ褐色土
5. 2.5Y4/6オリーブ褐色土 焼土を多く含む 締まりやや有り
6. 2.5Y3/2黒褐色土 締まり有り

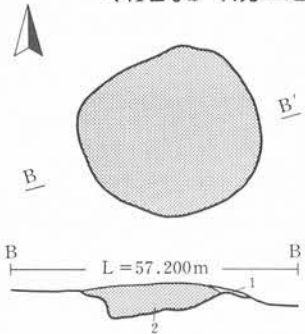
<VIIA1j 焼土遺構>



1. 7.5YR4/4褐色土 焼土をすこし含む
2. 7.5YR5/8明褐色土 堅く締まる
3. 7.5YR3/1黒褐色土 締まりなし
4. 7.5YR4/4褐色土 焼土を少し含む
5. 7.5YR3/1黒褐色土 締まりなし
6. 7.5YR4/4褐色土 焼土を少し含む
7. 7.5YR2/1黒色土 締まりなし
8. 7.5YR3/1黒褐色土 締まりなし
9. 7.5YR2/1黒色土 締まりなし

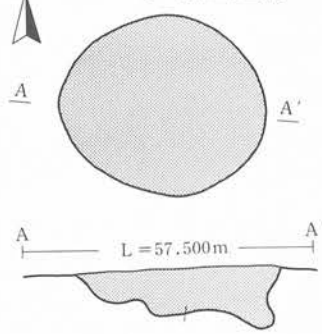


<VI B9b-1 焼土遺構>



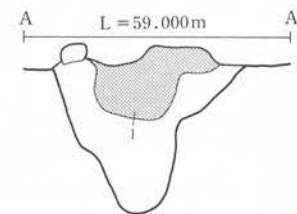
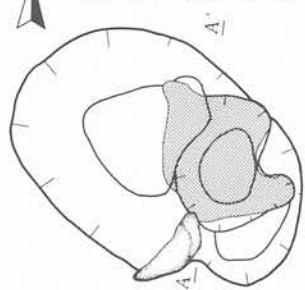
1. 5 YR3/1黒褐色土 焼成をややうけている しまりなし
2. 5 YR5/8明赤褐色土 焼土 堅く締まる 下位は漸移的に黒褐色土に変化

<VI B0c 焼土遺構>



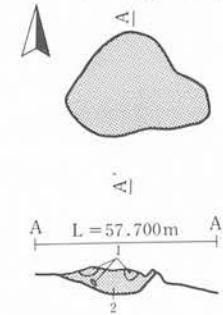
1. 5 YR6/8橙色 焼土

<VIIA2h-1 焼土遺構>



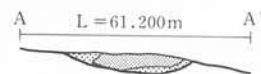
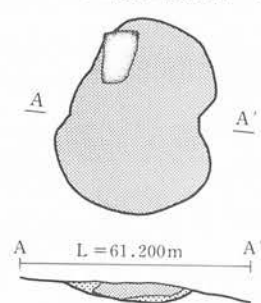
1. 10YR3/3暗褐色土 焼土 炭粒 黄褐色土粒を含む

<VI B0a-1 焼土遺構>

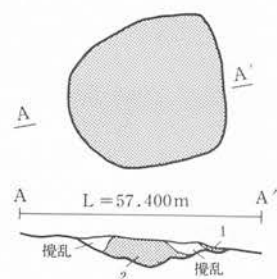


1. 5 YR6/8明赤褐色土 焼土 締まり有り
2. 7.5YR4/2灰褐色土 焼土 締まり有り
3. 7.5YR2/1黒色土 シルト

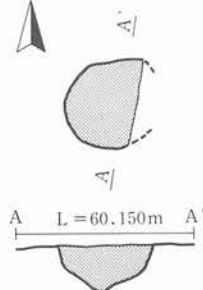
<VIIA1c 焼土遺構>



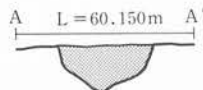
<VI B9a-1 焼土遺構>



1. 7.5YR3/3暗褐色土 焼土 締まり有り
2. 5 YR5/8明赤褐色土 焼土 締まり有り 下位漸移的に変化



<VIIA2i-1 焼土遺構>



第34図 焼土遺構(縄文時代)(1)

深さは42cmである。

出土遺物 (第67図、写真図版57)

土坑埋土から縄文時代早期末から前期初頭に属する土器片が出土した。(158)

本遺構は検出された層位や遺物、遺構の形態から縄文時代早期末から前期前葉に属する。(高橋佐知子)

VII A 1 j 焼土遺構 (第34図、写真図版31)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層中である。平面形はゆがんだ円形を呈し、焼土は68×70cmの範囲に広がっている。焼土の厚さは、最大で8cm程であるが、堆積は**ブロック状**の**焼土**であり、捨てられたものと考えられる。周辺からは縄文土器片が出土しているが、遺構との関係は明らかではない。

出土遺物 (第67図、写真図版57)

縄文時代前期及び中期の土器片、石鏃がブロック状の焼土及びその周辺の焼土を含む層から出土した。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 2 h - 1 焼土遺構 (第34図)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層中である。平面形はアメンバー状を呈する。柱穴状の土坑と重複関係にあり、本焼土の方が新しい。

柱穴状土坑と重複 **出土遺物** (第67図、写真図版57)

焼土内から繊維を少量含む縄文時代前期の土器片が出土した。(159)

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 2 i - 1 焼土遺構 (第34図、写真図版31)

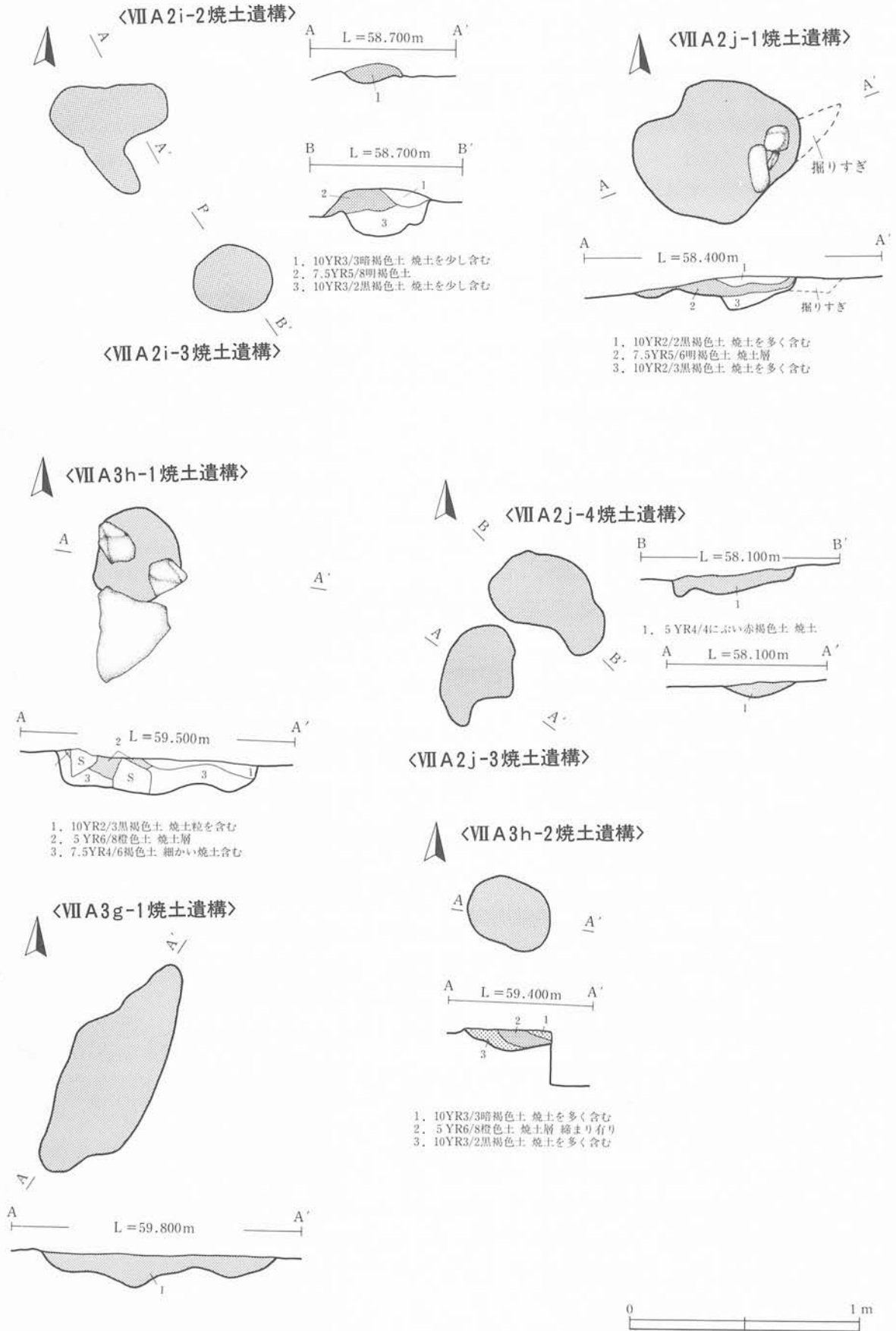
本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層中である。平面形は円形を呈するが、**周囲に**精査の際の不手際で、東側を失った。規模は32×25(現存値)cmで、焼土の厚さは最大16cmである。**柱穴状土坑**がある。周辺には柱穴などの施設は見られなかった。また、周囲からは縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかでない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 2 i - 2 焼土遺構 (第35図、写真図版32)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。約20cm南東にVII A 2 i - 3 焼土遺構が存在する。検出面はVII層である。平面形は不整形なアメンバー状で、規模は28×22cmである。焼土の厚さは4cmである。本遺構の南側や東側の周辺には柱穴状の小穴が存在するが、本遺構とのかかわりは確認できなかった。また、床と考えられる面も検出できず、本遺構を炉とするには焼土の形成が不十分であると思われる。従って本遺構に関しては、住居跡としてではなく、焼土として報告することとした。

周囲からは縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかでない。



第35図 焼土遺構(縄文時代)(2)

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 2 i - 3 焼土遺構 (第35図、写真図版32)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。約20cm北西にVII A 2 i - 2 焼土遺構が存在する。検出面はVII層である。平面形は円形で、規模は20×18cmである。焼土の厚さは4cmである。本柱穴状土坑遺構の直下には柱穴状の小穴が存在するが、本遺構の方が新しい。周辺に存在する小穴も直接的な関連はないと考えられる。

周辺からは縄文時代の土器片が出土しているが本遺構との関連は明らかでない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 2 j - 1 焼土遺構 (第35図、写真図版32)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層である。平面形は不整形で、76×63cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大8cmで、レンズ状に堆積している。

周辺からは住居の壁や柱穴は検出されなかった。また、周辺からは縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

本遺構は、検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 2 j - 3 焼土遺構 (第35図、写真図版32)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。北側に隣接してVII A 2 j - 4 焼土遺構が存在する。検出面はV層である。平面形は不整形で48×36cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大7cmで、レンズ状に堆積している。

周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

本遺構は、検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 2 j - 4 焼土遺構 (第35図)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。南側に隣接してVII A 2 j - 3 焼土遺構が存在する。検出面はV層である。平面形は不整形で、55×38cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大12cmである。

周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかでない。

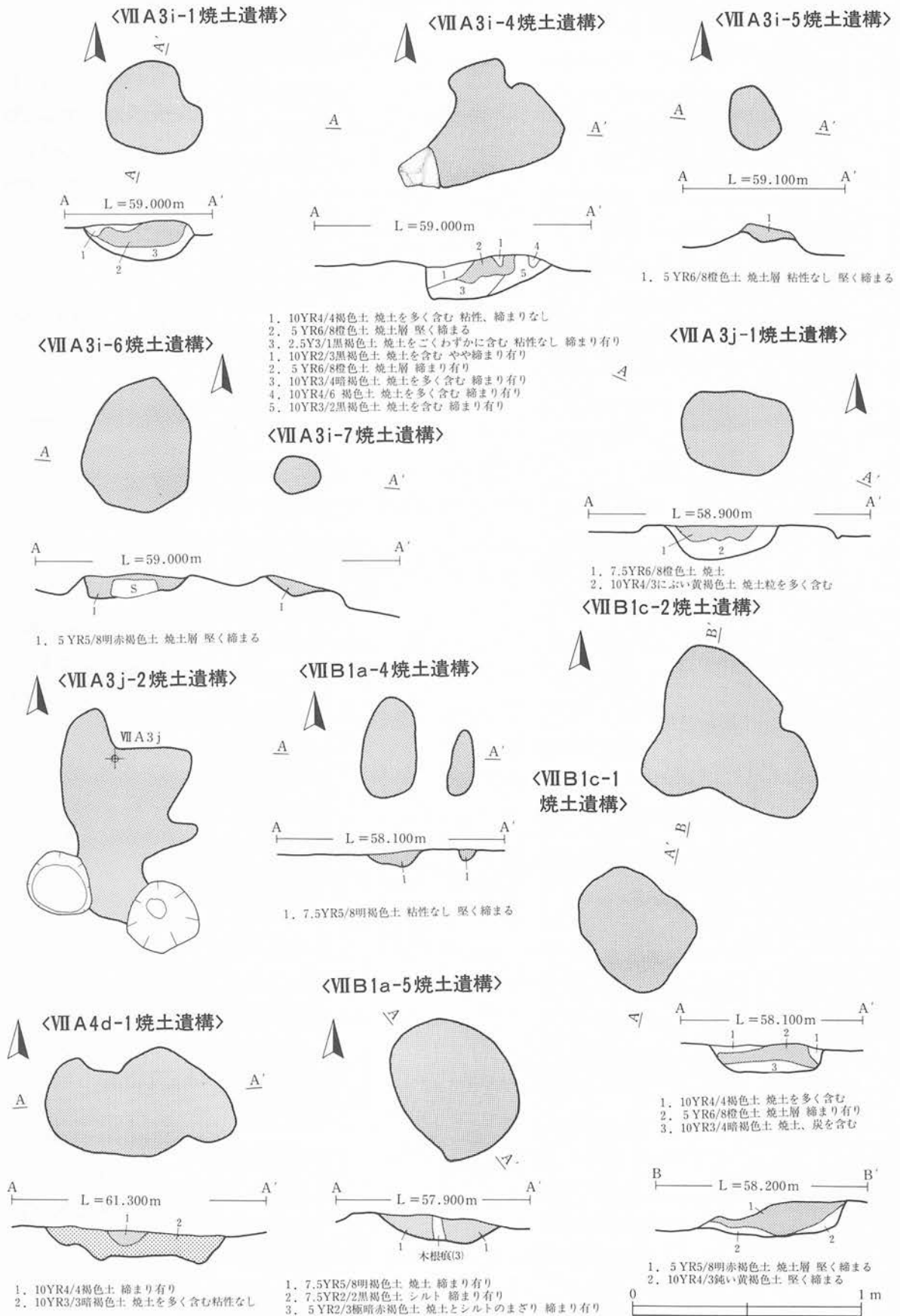
本遺構は、検出された層位から縄文時代の遺構で、VII A 2 j - 3 焼土遺構と同時期に形成されたものと考えられる。(高橋佐知子)

VII A 3 g - 1 焼土遺構 (第35図)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層である。平面形は不整形で、107×42cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大で16cmである。

周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかでない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)



第36図 焼土遺構(縄文時代)(3)

VII A 3 h - 1 焼土遺構 (第35図、写真図版32)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層である。平面形は不整形で、41×40cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大で10cmである。本遺構には花崗岩の角礫が伴う。手のひら大の礫が2個と人頭大の礫が1個である。周囲から石の抜き取り痕は検出されていない。本遺構が石囲炉などの炉であるとの確認はできなかったので、ここでは焼土遺構として報告する。

出土遺物 (第67図、写真図版57)

縄文時代前期前葉の土器片と石匙が出土した。

本遺構は出土した遺物から縄文時代早期末から前期前葉の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 3 h - 2 焼土遺構 (第35図、写真図版33)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層である。平面形は楕円形で、38×29cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大で9cmである。

周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 3 i - 1 焼土遺構 (第36図、写真図版33)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層下位である。隣にVII A 3 i 住居跡が存在する。平面形は不整形で、45×40cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大12cmで、レンズ状に堆積している。遺構内以外からも周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

出土遺物 (第67図、写真図版57)

遺構内から縄文時代前期前葉の土器片と石匙が出土した。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 3 i - 4 焼土遺構 (第36図、写真図版33)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層である。平面形は不整形で、58×49cmの範囲に焼土が形成されている。本遺構の南西端には花崗岩の角礫が1個伴っているが、そのほかの周囲に石の抜き取り痕などは検出されなかった。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 3 i - 5 焼土遺構 (第36図、写真図版33)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面は暗褐色土層である。平面形は楕円形で、28×22cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大8cmで、レンズ状に堆積し固く締まっている。周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 3 i - 6 焼土遺構 (第36図)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。約40cm東にVII A 3 i - 7 焼土遺構が存在する。検出面はV層中である。平面形は楕円形で、60×50cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大12cmで、皿状に堆積している。

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。

出土遺物 (第67図、写真図版58)

遺構内から縄文時代前期前葉の土器片が出土した。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 3 i - 7 焼土遺構 (第36図、写真図版34)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。約40cm西にVII A 3 i - 6 焼土遺構が存在する。検出面はV層中である。平面形は楕円形で、21×16cmの範囲に焼土が形成されている。本遺構は規模が小さく、また、VII A 3 i - 6 焼土遺構に隣接していることから、元々一体の遺構であった可能性もある。底面の標高もほぼ同様である。焼土の厚さは最大7cmである。

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 3 j - 1 焼土遺構 (第36図、写真図版34)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層上面である。平面形は東西に長い長円形で、50×36cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大8cmで、レンズ状に堆積している。

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。

出土遺物 (第67図、写真図版58)

焼土中から縄文時代前期前葉の土器片が出土している。

本遺構の出土遺物は縄文時代前期の土器片であるが、検出された層位から縄文時代中期の遺構である可能性が強い。(高橋佐知子)

VII A 3 j - 2 焼土遺構 (第36図、写真図版34)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層である。本遺構を2基の柱穴状の小穴が切っている。平面形は不整形で、96×60cmの範囲にアメンバー状に焼土が形成されている。焼土の厚さや断面は調査の際の不手際で不明である。

周囲から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構に伴うものかどうか不明である。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 4 d - 1 焼土遺構 (第36図、写真図版34)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層である。平面形は不整形で、85×48cmの範囲に焼土が広がっているが、半裁したところ真に純粋な焼土はごく一部であることがわ

移地性？ かった。したがって、この焼土は移地性かもしれない。焼土をごく多く含んだ暗褐色土は最大13cmの厚さに堆積している。

本焼土は検出された層位から縄文時代のものと考えられる。(高橋佐知子)

VII B 1 a - 4 焼土遺構 (第36図、写真図版34)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層である。本遺構の焼土は二つに分かれる。平面形は大小の楕円形で、西の大きい方が44×24cm、東の小さい方が29×11cmである。本遺構は位置や規模などからもととはひとつの焼土であった可能性が大きいのでここではひとつの遺構として報告する。焼土の厚さは最大9cmである。

周囲からは縄文時代の土器片が出土するが、本遺構との関わりは明らかではない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII B 1 a - 5 焼土遺構 (第36図、写真図版35)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はVII層上面である。平面形は楕円形で、63×50cmの範囲に焼土が形成されている。断面はレンズ状の堆積で、焼土は固く締まり、厚さは最大12cmである。

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII B 1 c - 1 焼土遺構 (第36図、写真図版35)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。南側にVII B 1 c - 2 焼土遺構が存在する。検出面はV層中である。平面形は楕円形で、53×46cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大12cmで、断面は皿を伏せたような形に堆積している。本遺構とVII B 1 c - 2 焼土遺構は検出面が同一で、近接していることからほぼ同時期に形成されものと考えられる。

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII B 1 c - 2 焼土遺構 (第36図、写真図版35)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層中である。平面形は不整形で、88×70cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大16cmで、よく発達しており、断面はレンズ状を呈している。前述したように、本遺構とVII B 1 c - 1 焼土遺構はほぼ同時期に形成されたものと考えられる。

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII B 1 c - 3 焼土遺構 (第37図、写真図版35)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層中である。遺構の東の一部が、水田造成時の削平によって失われている。平面形は楕円形を呈していたものと考えられる。規模は50×35(残存値)cmで、焼土の厚さは最大22cmである。

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

出土遺物 (第67図、写真図版58)

焼土上面から縄文時代前期前葉の土器片が出土している。(179)

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII B 2 a 焼土遺構 (第37図、写真図版35)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層下位で、焼土の最下層はVI層上面である。南西の一部をVII B 2 a - 2 住居跡の石囲炉に切られている。また、検出面はVII B 2 a - 2 住居跡より下がる。平面形は楕円形で、62×54cmの範囲に焼土が堆積している。焼土の厚さは最大21cmでよく発達しており、断面形は浅いすり鉢状である。

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII B 2 b - 1 焼土遺構 (第37図、写真図版36)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層である。平面形は楕円形で、73×47cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大14cmで、断面形はやや凹凸があるが、レンズ状である。

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

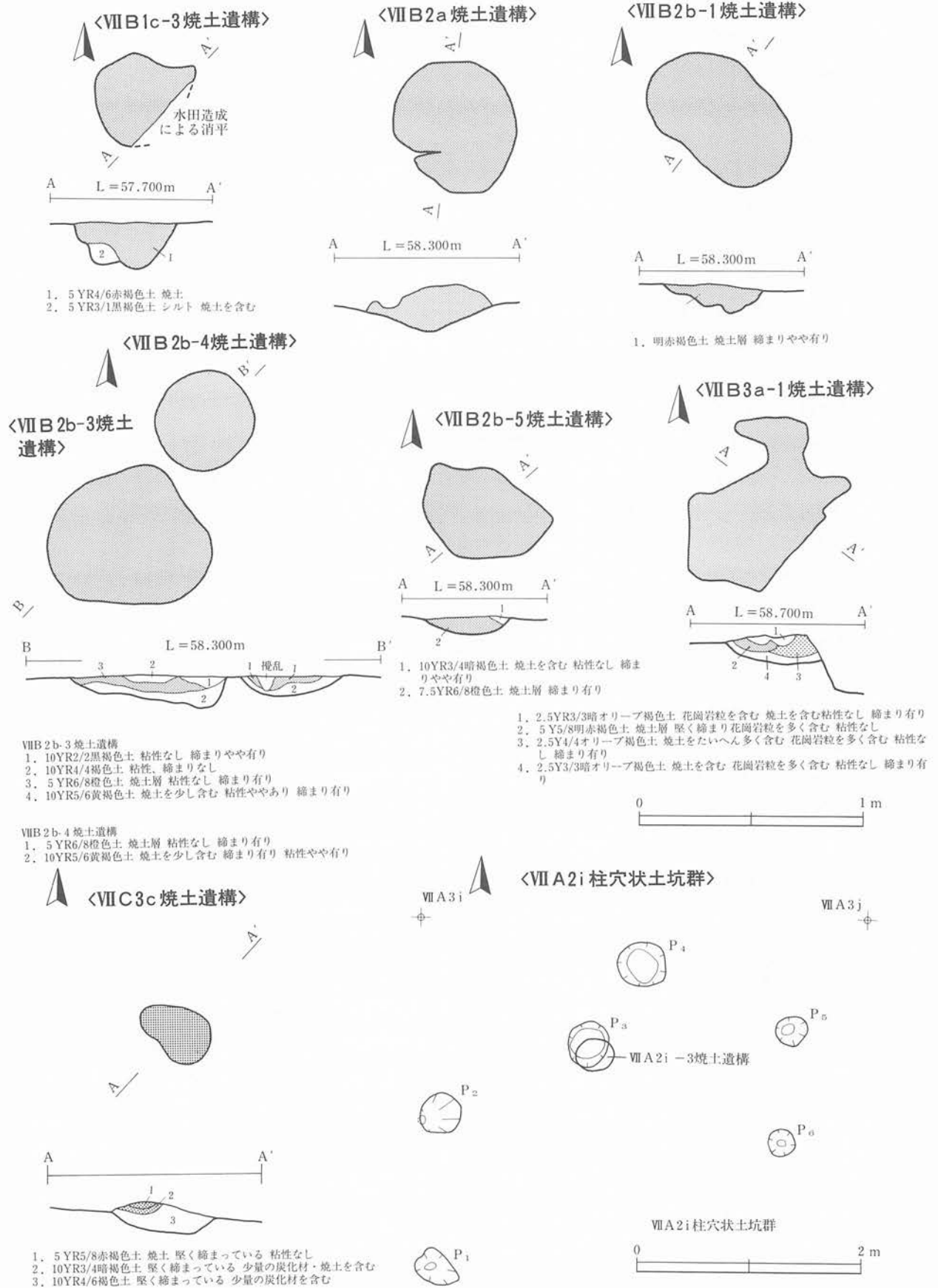
VII B 2 b - 3 焼土遺構 (第37図、写真図版36)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。北側に隣接してVII B 2 b - 4 焼土遺構が同一検出面で存在する。検出面はV層中である。平面形はゆがんだ楕円形で、75×64cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大8cmで、断面形はレンズ状である。VII B 2 b - 4 焼土遺構は本遺構と焼土の形成や検出面が似通っていることから、ほぼ同時期に形成されたものと考えられる。

VII B 2 b -
4 焼土と
同時期？

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)



第37図 焼土遺構(縄文時代)(4)、柱穴状土坑群

VII B 2 b - 4 焼土遺構 (第37図、写真図版36)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。南側に隣接してVII B 2 b - 3 焼土遺構が同一検出面で存在する。検出面はV層中である。平面形は円形で、46×46cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大8cmで、断面形はレンズ状である。VII B 2 b - 3 焼土遺構は前述の通り、ほぼ同時期に形成されたものと考えられる。

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII B 2 b - 5 焼土遺構 (第37図)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層中である。平面形は不整形で、60×42cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大8cmで、断面はレンズ状である。

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII B 3 a - 1 焼土遺構 (第37図、写真図版36)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。本遺構の南東をVII B 2 a - 1 住居跡が切っており、本遺構の上層にはVII B 3 a 住居跡が存在する。検出面はV層中である。平面形はアメーバー状の不整形で85×53(残存値)cmの範囲に焼土が形成されている。焼土は最大12cmで、レンズ状に堆積している。焼土内には風化花崗岩粒が多く含まれており、固く締まっている。

風化花崗
岩粒

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

本遺構は他の遺構の切り合い関係などから、縄文時代中期の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII C 3 c 焼土遺構 (第37図、写真図版37)

本遺構は調査区東側の尾根上に位置し、北東側にはVII C 3 c 土坑が、南側にはVII C 1 c 土坑が占地している。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところ、IX層上面において焼土を確認したことによる。平面形は不整形で、堅くしまった明赤褐色土の焼土が31×20cmの規模で広がっている。焼土の厚さは4cmほどである。焼土中及び焼土の周囲には少量の微小な炭化材が存在する。

焼土の周辺からは住居跡の存在を示す壁や柱穴は検出されなかった。周囲からは縄文時代中期の土器が少量出土しているが、本遺構に伴うものかどうかは不明である。(神敏明)

(8) 廃棄土

VII A 2 d 廃棄土 (付図、第38図、写真図版37)

本廃棄土は調査区中央より西側に存在する。VII A 2 c グリットの東半分からVII A 2 d の北半分、VII A 3 d グリットの南の一部にまたがる不整形の範囲において、VII層上に20cm大の黄褐色

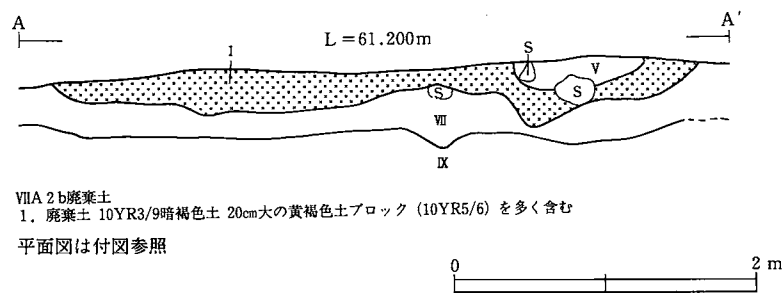
土のブロックを多く含むにごった暗褐色土層が堆積している。最大厚は32cmである。断面を観察すると明確な立ち上がりは認められず、住居など何らかの施設をつくった際の廃棄土が堆積した可能性がある。この暗褐色土層からは縄文土器が出土しており、前期の土器のほか中期後葉以後の土器も含まれる。

本廃棄土は縄文時代中期後葉以後に廃棄されたものと考えられる。

VIB 9 b 廃棄土 (付図)

本廃棄土は調査区中央の谷筋に位置する。VIB 9 b ポイントを中心に、VII層上に黄褐色土ブロックを多く含む濁った暗褐色土層が不整形に堆積している。調査の下手際のため断面で確認しなかったが、VII A 2 d 廃棄土より薄く、スコップで半分ぐらい掘り下げるとVII層に変わった。

VII A 2 d と 本廃棄土はVII A 2 d 廃棄土とよく似ており、出土層位も同じであることから縄文時代中期後葉以後に廃棄されたものと考えられる。(高橋 佐知子)



第38図 VII A 2 d 廃棄土

2. 古代

(1) 竪穴住居跡

II B 4 h 住居跡 (第39、40図、写真図版38、39)

本住居跡は、南側にやや離れてある調査区(以下飛び地という)の谷頭付近に存在する。西側には約1mほど離れてII B 5 h 炭置き場が、東側には約4mの地点にII C 3 a 炭窯が存在する。

検出は重機により盛り土を除去した後、T II層上面で炭を含む黒褐色土の広がりを確認したことによる。

平面形は南東の隅がややふくらむ隅丸方形を呈する。規模は東西方向の一辺が4.8m、南北方向の一辺が4.74mである。壁はT II層中にあり、床面から外傾して立ち上がる。壁高は北壁が最大で、52cm、東壁が20cmである。長軸はほぼ東西方向である。

埋土は12層に細分される。焼土や微細な炭化物を含む黒褐色土が主体で、壁際は風化花崗岩粒を含む壁の崩壊土である。

南東の隅とカマド前の床面から炭化材が検出された。カマド前の炭化材は直径6~10cmの丸材と思われ、残存状況は良好である。南東隅から出土した炭化材は断面を観察すると丸材を半分にしたものようで、残存状況は良好である。南東隅の炭化材の直下からは鉄滓が出土している。

貼り床は明瞭ではないが、断面を観察すると黒色土をブロック状に、粉状の炭をまばらに含む褐色土が貼られているようである。上面はほぼ平坦で固く締まっている。柱穴は検出されなかった。また、外柱と思われるような柱穴も見つかっていない。

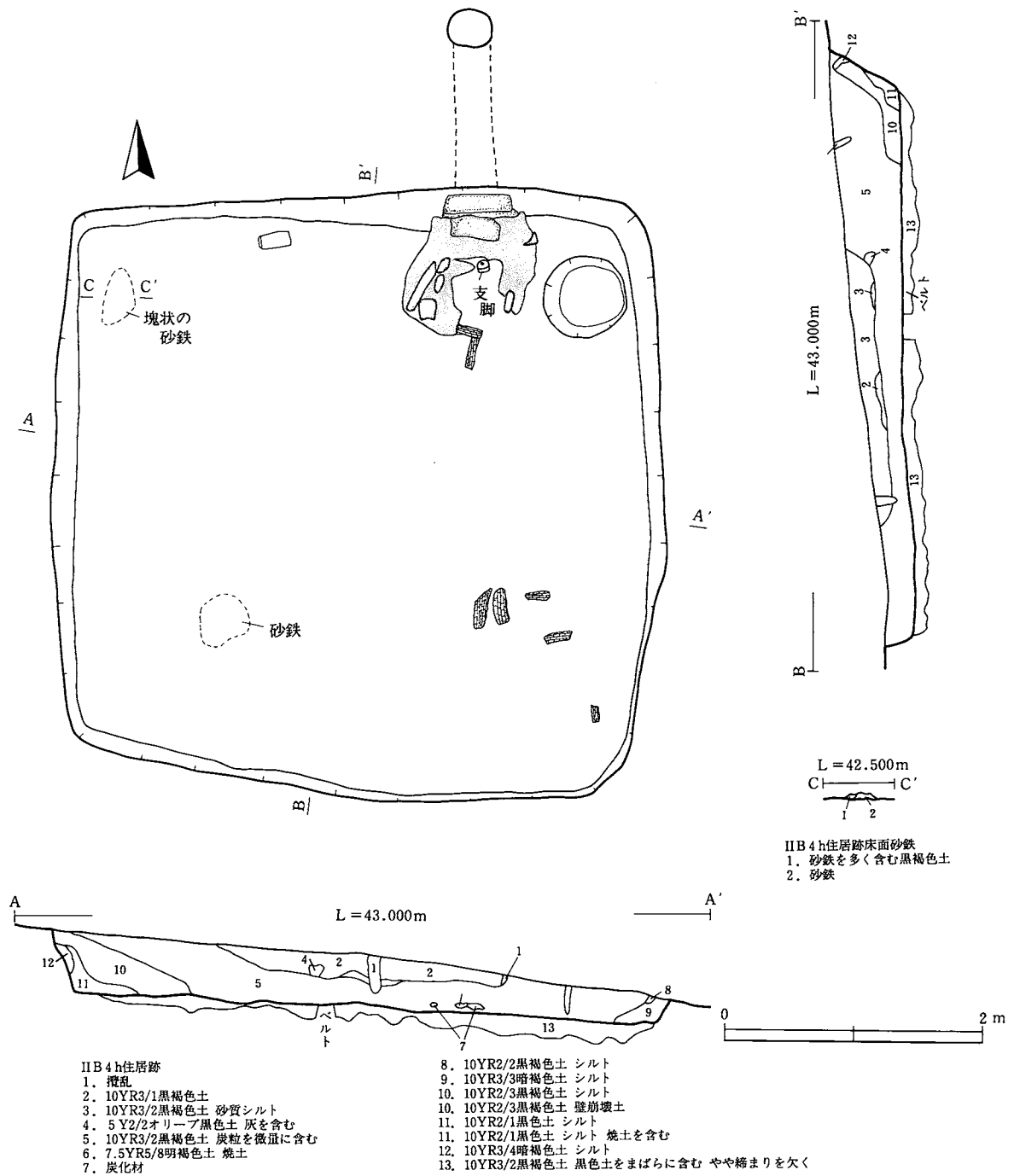
住居内土坑は北東隅から検出された。円形を呈し開口部の径は62cm、深さ34cmである。埋土は5層に細分され、上層は鉄滓を含む黒色土、下層は炭化物を含む黒褐色土が主体である。

カマドは北壁中央からやや東によった地点に構築されている。カマドの長軸方向はほぼ北方向である。残存状態は良好である。花崗岩などの角礫を4~6cmほどの浅い掘り込みに埋めて袖石とし、さらに板状の角礫を斜めに押しつけるように立てかけ、それらの上に天井石を渡している。次に粘土で袖や天井を固めている。燃烧部はかまど構築土と同様の褐色粘土を底面全体に5~6cmの厚さに敷きつめている。焼土は4~5cmの厚さに堆積し、がりがりに固い。固い焼土の上にはソフトな焼土が堆積している。支脚は鞆の羽口を固い焼土面の上と同じレベルに直立させているが、埋置したような置き方ではなかった。この支脚の位置はカマドと煙道の中軸線よりやや右によっている。また、ソフトな焼土の上から羽口の破片が出土したが、これも支脚として使用された可能性がある。

煙道は割り貫き式である。煙道につながる部分は壁の一部が15~20cmほど張り出しているが、当初からこのように掘ったものか、上部が削平された結果こうなったものか判然としない。煙道の横断面は楕円形である。煙出しに向かって非常にゆるやかに上がり、煙出し部に至っていったん下がった後急な角度で立ち上がる。煙り出しの平面は楕円形で、径は42cmである。

出土遺物 (第68図、写真図版58)

床面の北西よりから塊状の砂鉄が、南壁中央よりから砂鉄が薄く層状に出土した。同じく床面から砥石(182)、土師器の甕(180、181)、羽口片(185など)、鉄滓が出土している。また、

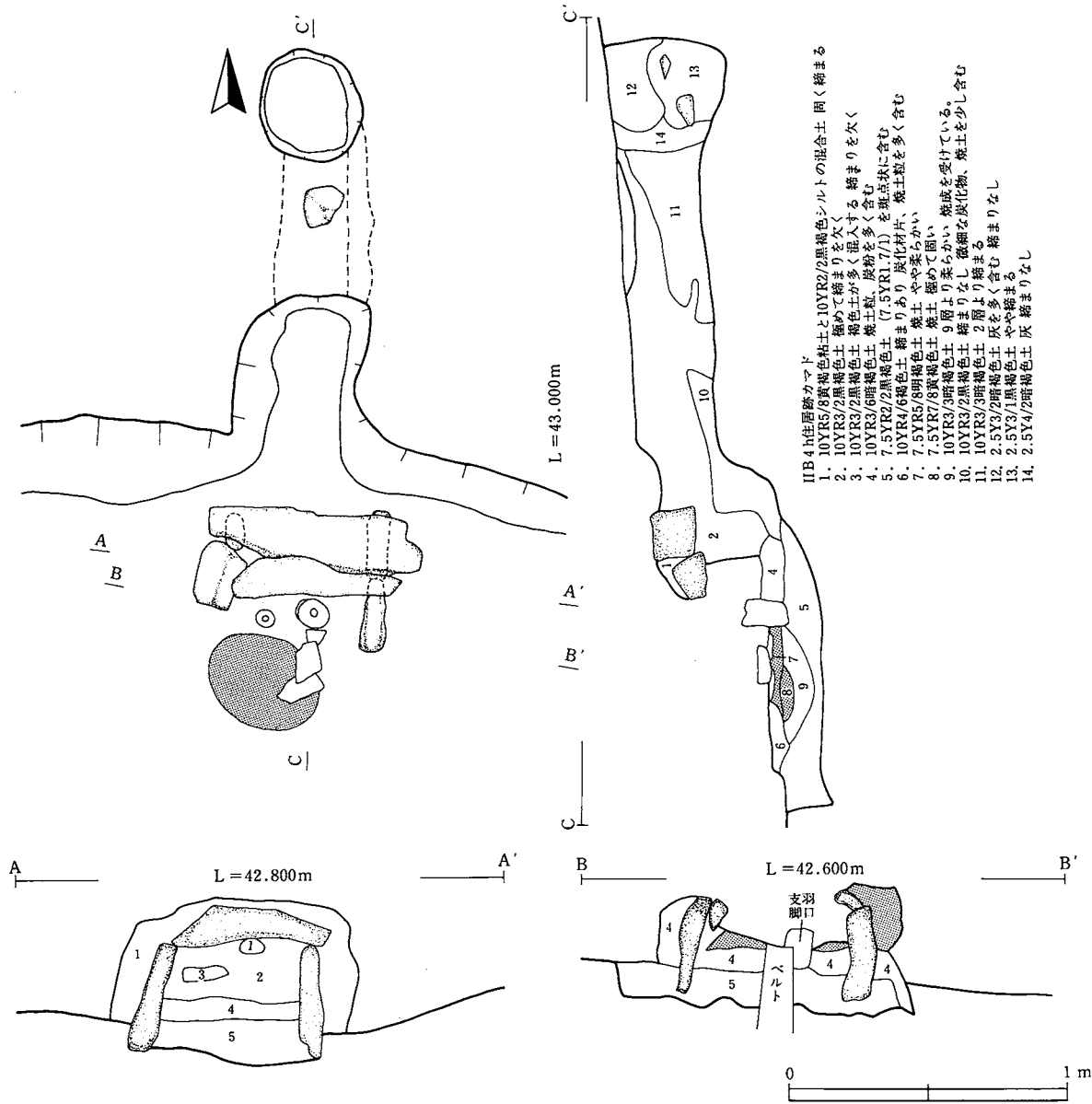


第39図 II B 4 h 住居跡(1)

埋土から須恵器甕小片、鉄滓、羽口片が得られている。床面から出土した木炭2本はクリと同定されている。

羽口 180、181は土師器カメで、底部から急に立ち上がり短い口縁部に至って外反する。ろくろは使用していない。本遺構からは坯は出土していない。183はカマドの袖材として出土した破片と輪積み痕の住居内土坑の前の床面から出土した破片を接合した土器である。外面に輪積み痕が明瞭に残る土器筒形の土器で、底は欠けている。熱を受け、器面は荒れる。184はカマドの支脚として用いられていた羽口である。182は砥石で、擦痕が明瞭に残る。

本遺構は出土した土師器、須恵器から平安時代の住居跡と考えられる。(高橋佐知子)



VII A 3 b住居跡 (第41、42図、写真図版40)

本遺構は調査区西端にあり、谷に至る緩斜面に位置している。住居の南約1.5mにはVII A 2 b 焼土遺構が存在する。

検出は重機による表土除去後、IV層上面及び斜面上方北側のIX層で炭を含んだ黒色土の広がりを検出したことによる。

平面形は東西径がやや長い隅丸の長方形を呈する。規模は東西方向の辺が6.56m、南北方向の辺が5.54mで、壁高は西壁が最も高く80cm、最も低い東壁で37cmを測る。

埋土は7層に細分される。炭や焼土を含んだ黒色土が主体で、埋土の壁際には炭化材や焼土の塊が検出された。また、埋土中には多くのこぶし大〜20cm大の花崗岩の角礫が多く含まれていた。このことは屋根や壁を構築する際に使われたことを想起させる。

不明瞭な床面 床面はV～VII層、IX層に形成されている。南側約3分の2は締まりがなく、床面と認識するのが困難であった。一方、北側の約3分の1は固く締まっており、この部分が他よりもやや高い部分。東壁付近は2m×0.8mの範囲が台形状に床が高くなっており、カマドの天井石と同じような花崗岩の板状の礫(70×18cm)が出土した。高まりの両わきの壁際には柱穴が1基ずつ検出された。楕円形の柱穴で、深さは40cmである。また、高まりの南端にはカマドの袖土と同様の粘土が置いてあった。この施設は住居の入口の可能性はある。

壁はIV～VII層、IX層に形成され、やや外傾して立ち上がる。北壁の西寄りとカマドの西脇に径15～18cm、深さ10～15cmの北に向かって穿たれた横穴が1基ずつ計2基検出された。南壁に対応するような穴はない。

浅い柱穴 柱穴は前述の東壁壁際の2基の他に4基検出された。平面形は円形で、径は34～44cm、深さは18～23cmである。上屋を支える柱としてはたいへん浅く、位置もランダムであるように思われる。外柱の可能性も考えたが、壁の外側からは検出されなかった。

周溝は東壁と南壁にめぐる。12～18cm幅の浅い溝である。

住居内土坑 住居内土坑は北東隅から検出された。平面は不整形な方形で、壁に添うように作られている。断面は逆台形状を呈する。規模は1.42×1.38m、深さ58cmである。埋土は3層に細分され、上層は花崗岩の角礫を含む黒褐色土、中層から下層は黄褐色土を含む黒褐色土が主体である。2層からは板状の炭化材が出土している。

残存状況の良好なカマド カマドは北壁中央からやや東によった地点に構築されている。カマドの長軸方向はN-12°-Eである。残存状況は良好で、袖石、天井石とも残っている。花崗岩の角礫を立てて袖石とし、それよりやや小型の礫をすき間を埋めるように設置して芯としている。天井石は壁際の袖の上に乗る。褐色の粘土が天井石の上や袖の壁寄りに残存しており、粘土を貼りつけたものと考えられる。

燃焼部には焼土が63×48cmの範囲に楕円形に形成されている。最大厚は12cmである。支脚と認められるものは出土しなかった。煙道はゆるやかに上がり、煙出しに至って約45°の角度で立ち上がる。煙出しの立ち上がりは70cmを測る。この部分の埋土には花崗岩の角礫が多く混入しており、煙り出しの地上の部分に使われた可能性もある。煙道内の埋土には焼土や粘土粒が多く含まれている。

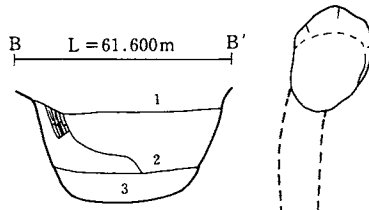
出土遺物 (第68、69図、写真図版58、59)

カマド焼土内から土師器甕の破片(193)が、カマドの埋土から土師器坏の破片(186、187、189)、須恵器甕の破片(435)が出土した。また、住居内土坑の埋土から土師器高台付坏(188)、土師器甕破片(196)、須恵器甕、口縁部破片(201)が出土した。埋土からはへら書きのあるろくろ整形の土師器小型壺(440)のほか、土師器坏、甕の破片、須恵器甕の破片、羽口、鉄滓が出土している。坏は底部が残るものはすべて回転糸切りである。187は糸切り後、調整を施しているが他は無調整である。189、192は内面黒色処理が施されていたと思われるが、おそらく火を受けて、とんだのであろう。196はろくろ整形の甕である。須恵器の破片はすべて甕である。

羽口クリ 203は羽口で、指頭痕が明瞭に残る。溶着滓などの付着物は認められない。羽口として使用していないかもしれない。埋土から出土した木炭1本はクリと同定された。

本遺構は出土遺物及び遺構の形態から平安時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
径 cm	35×35	36×36	45×38	47×42	34×27	35×30
深さ cm	20	23	23	17	35	23

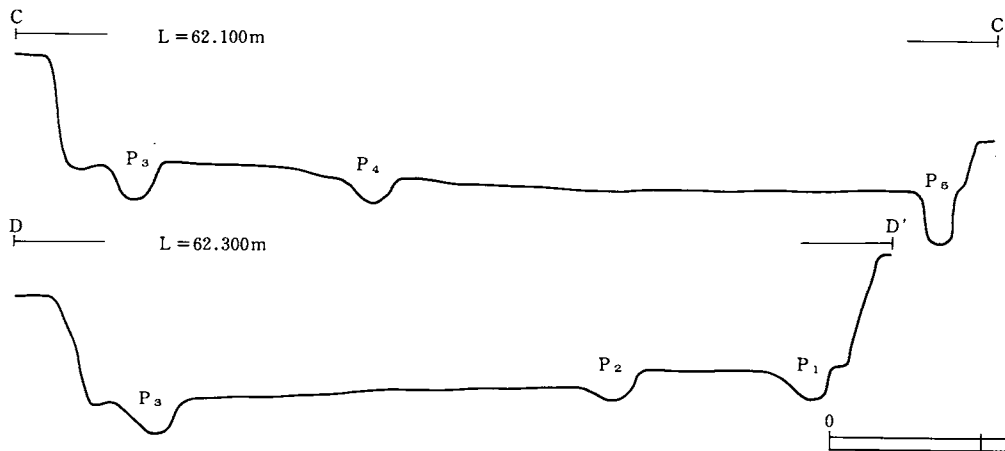
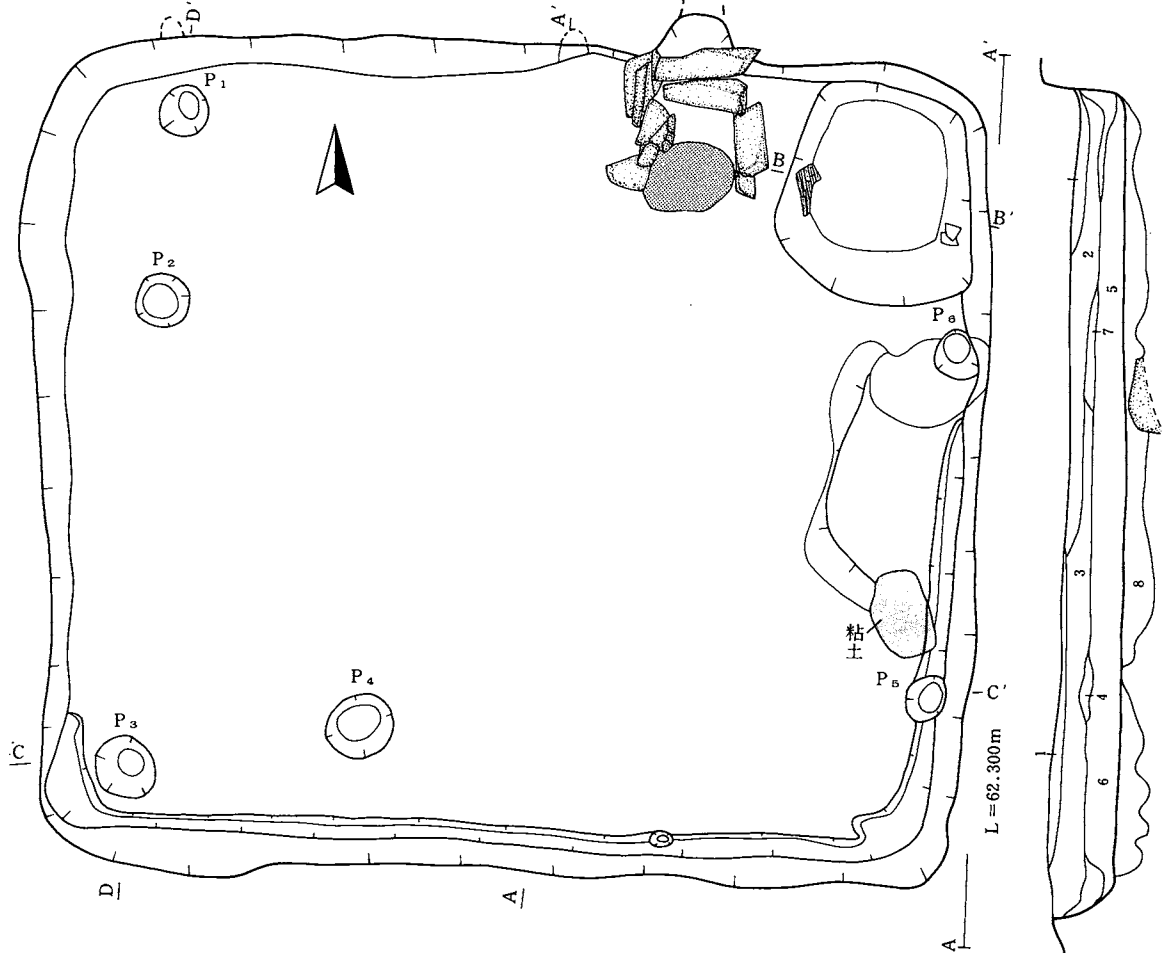


VIIA 3 b 住居跡

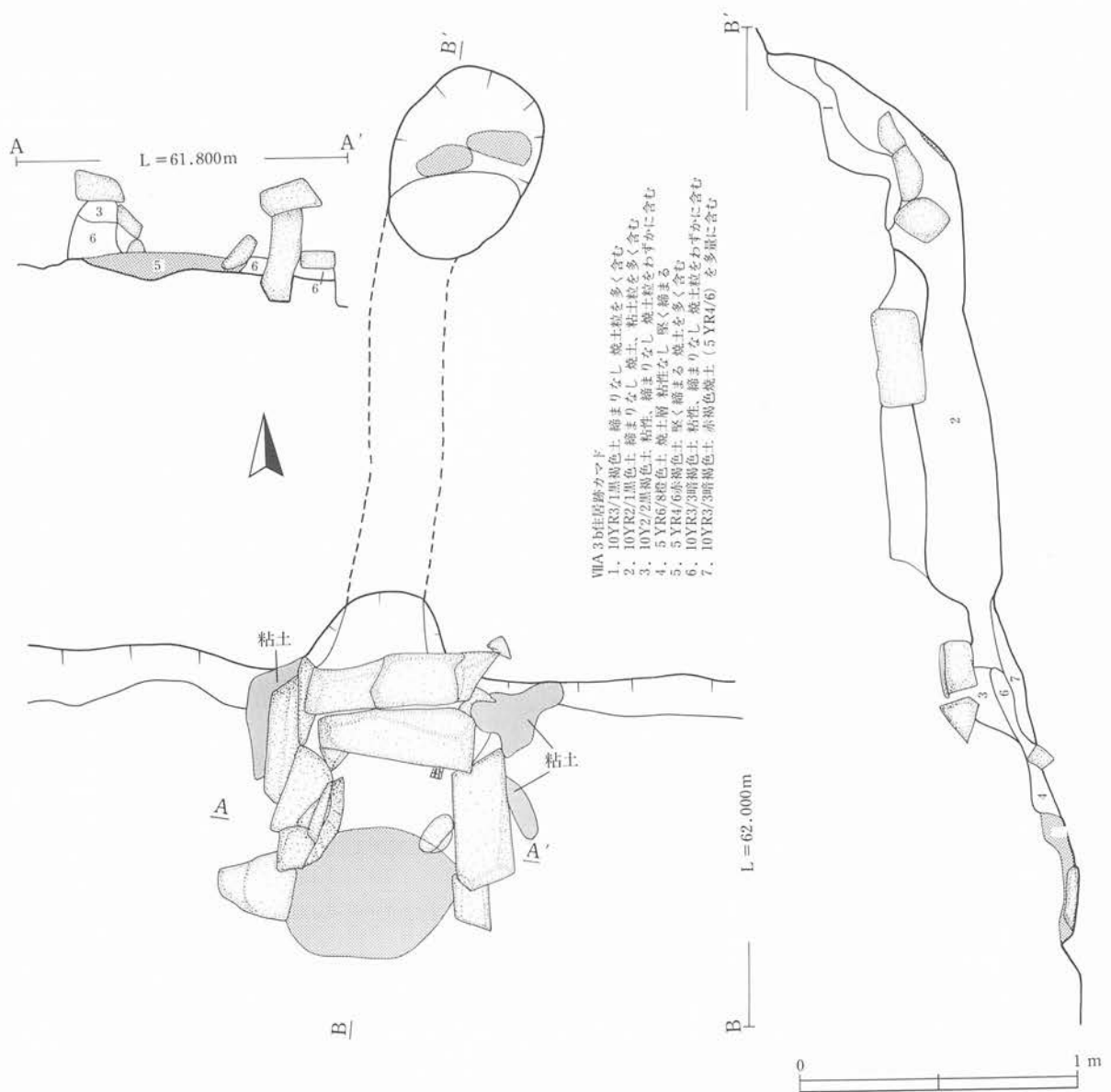
1. 7.5YR3/1黒褐色土 0.1~0.5mm大の白色粒を含む 焼土、炭を少量含む
2. 10YR2/1黒色土 0.1~0.7cm大の白色粒を少量含む
3. 2.5Y3/2黒褐色土 0.1~0.3cm大の白色粒、焼土粒をごくわずかに含む
4. 10YR2/2黒褐色 焼土粒を多く含む
5. 7.5YR1.7/1黒色土 0.7~1cmの白色粒を多く含む
6. 10YR1.7/1黒色土 0.1~0.7cmの白色粒を含む 焼土粒を多く含む
7. 10YR3/2黒色土 細かい焼土粒、0.5cm大の白色粒を少し含む
8. 10YR3/2黒褐色土 張り床か 粘性なし 縮まりややあり

VIIA 3 b 住居内土坑

1. 2.5Y3/1黒褐色土 5cm大の礫を少し含む
2. 2.5Y3/2黒褐色土 粘土粒を含む
3. 10YR2/2黒褐色土 カマドの袖の崩壊土とおもわれる粘土をブロック状に含む



第41図 VIIA 3 b 住居跡(1)



第42図 VIIA 3 b 住居跡(2)、カマド

VIIA 1 d 住居跡 (第43、44図、写真図版41~43)

本住居跡は調査区北西の尾根の頂部付近に位置している。北西側には縄文時代中期のVIIA 0 c 住居跡が、東側にはVIIA 1 e-1・2 土坑及びVIIA 1 e-1・2 炭窯が存在する。VIIA 1 e-1 炭窯とはカマドの煙出し部分が重複関係にあり、炭窯が煙出し部を截っているため構築時期は本住居跡の方が古い。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところVI層上面において黒褐色土の広がりを確認したことによる。

重複関係

平面形は不整な隅丸長方形を呈する。規模は東西方向の辺が5.34m、南北方向の辺が4.77mである。壁はVI層中にあり、床面から急角度で外傾して立ち上がる。壁高は東壁が17.4cm、西壁が55.8cm、南壁が34.2cm、北壁が34.1cmである。

埋土は29層に細分され、上位は炭化材を含むシルト質の黒色土が主体である。南壁から住居

跡中央部付近までの中位から下位にかけての埋土は、黒褐色土中に鉄滓が多量に含まれる。西壁際から中央部にかけては褐色土、黄褐色土、明褐色土等が見られる。下位は鉄滓・炭化材を含む褐色土が主体である。鉄滓を含む層は本住居の鍛冶炉から出た鉄滓が廃棄されたものであ
滓
る。床面はVI層中に形成され、ほぼ平坦で堅くしまっている。床面からは柱穴2基、住居内土坑7基、鍛冶炉1基が検出された。柱穴は床面中央から北西に寄った地点で検出され、楕円形の掘り方を有する。規模はP₁の開口部径が29×22cm、深さが19cmで、P₂の開口部径が28×21cm、7基の深さが18cmである。柱痕の径は確認できなかった。
住居内土坑

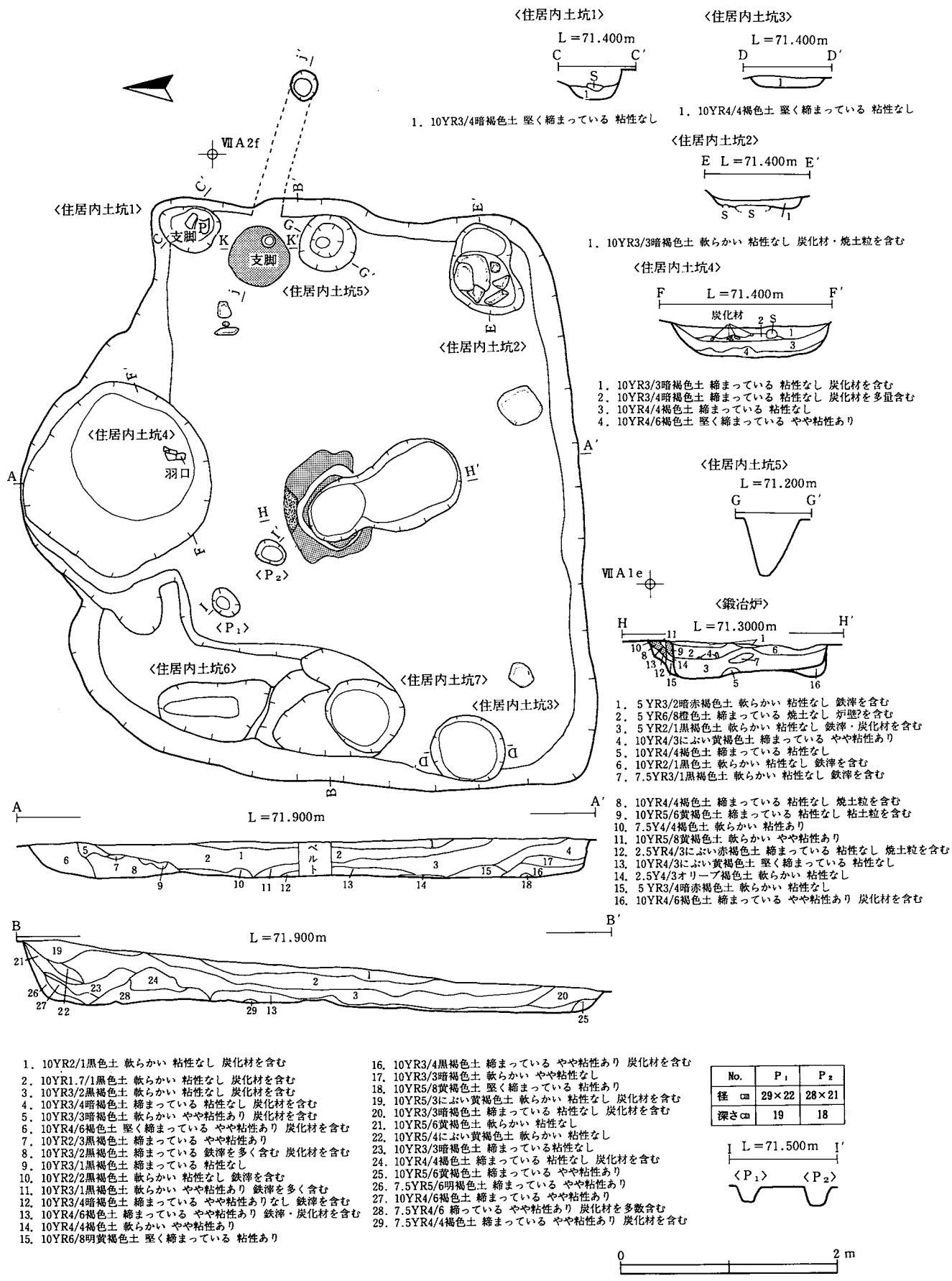
住居内土坑1は北東隅で検出され、平面形は不整な楕円形、断面形は皿状を呈する。規模は56×40cm、深さは12cmである。埋土は暗褐色のシルト質土で、埋土下位から支脚と土師器の破片が出土している。住居内土坑2は南西隅から検出され、平面形は不整形で、断面形は皿状を呈する。規模は84×59cm、深さは10cmを測る。埋土は暗褐色のシルト質土で、炭化材と焼土粒を少量含む。底部には10～41cmの大きさの礫が見られる。住居内土坑3は南西の壁際から検出され、平面形は円形、断面形は皿状を呈する。規模は61×69cm、深さは10cmである。埋土は褐色のシルト質土で堅くしまっている。住居内土坑4は北壁中央部付近で住居跡と重複するような形で検出されたが、住居跡の埋土観察用ベルトからは重複関係が見られず、住居跡に伴う土坑と考えられる。検出面は本住居跡の床面である。平面形は円形で、断面形は皿状を呈する。規模は本住居跡から検出された住居内土坑の中では最も大きく、開口部径が1.78×1.74m、深さは25cmを測る。埋土は4層に細分され、上位は炭化材を含む暗褐色土、下位は褐色のシルト質土が主体である。底部からは羽口が出土している。住居内土坑5は東壁際のカマド脇で検出され、平面形は円形、断面形はV字状を呈する。規模は開口部径が54×52cm、深さは52cmを測る。埋土はシルト質の暗褐色土が主体である。住居内土坑6は西壁際にあり、平面形が不整な楕円形、断面形が皿状を呈する。規模は開口部径が98×50cm、深さは18cmである。住居内土坑7は西壁際にあり、平面形は不整な円形、断面形は皿状を呈する。規模は開口部径が70×66cm、深さが12cmを測る。埋土は住居内土坑6・7とも褐色のシルト質土である。

鍛冶炉は床面ほぼ中央付近で検出されている。平面形は円形の部分と楕円形の部分が合体した形をしており、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径が1.48×0.74mで、深さは32cmである。埋土は黒褐色土が主体で、鉄滓が・羽口・炉壁が大量に含まれる。北側の円形部分の周囲には焼土粒と炭化材を含む褐色土と粘土質の黄褐色土が広がっている。
鍛冶炉

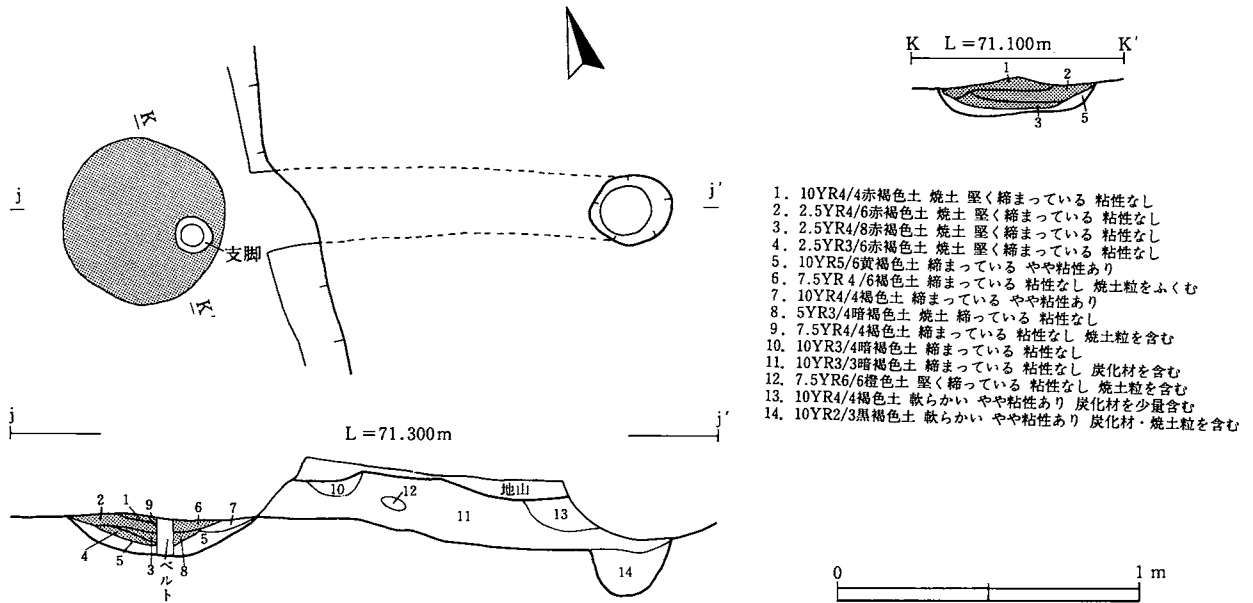
東壁中央からやや北に寄った地点に構築されている。カマドの長軸方向はE-20°-Sである。カマドの上部と左右の袖部は住居廃棄の際に破壊された可能性があり、残存状態は不良である。燃焼部の西側には袖部の芯材に使用されたと思われる礫が存在する。燃焼部には赤褐色の堅くしまった焼土が径55cmの規模で円形に存在し、断面は層厚20cmの浅い皿状になっている。燃焼部の東側の煙道部に近い地点から土製の支脚が出土している。煙道は割り貫き式で煙出し部に
支脚
向かって若干下っている。煙道の長さは1.2mである。煙出し部はVIIA 1 e-1 炭窯と重複関係にあり、煙出し部の上部が載られているため規模形状等の詳細は不明であるが、残存部分からは平面形が円形と推定され、規模は径が25cm程と思われる。(神 敏明)

出土遺物 (第70図、写真図版59～61)

207はカマドから出土した支脚である。208もカマドの支脚と考えられる。内外面ともに輪積



第43図 VIII A 1 d 住居跡(1)



第44図 VIII A 1 d 住居跡(2)、カマド

み痕が明瞭に残り、火熱を受けて色が変化している。住居内の土坑埋土から出土した。213、214は鍛冶炉前庭部の上面から出土したろくろ整形の甕である。住居内土坑から出土した217はろくろを使用していない甕で、外面に輪積み痕が明瞭である。坏(205、206)は内面に黒色処理が施され、回転糸切り無調整である。

210～212、215、218は羽口片である。215は内面まで熱で溶解した破片。210～212は外面のナデが明瞭に残る。装着角度はわかるもので、28～32である。

本遺構から出土した鉄滓は椀形滓及び餡状の形状のものがある。230、231は鉄滓の上面が**椀形滓**わゆる椀形滓の様に密で、下面が**餡状**を呈している。操業の過程によるものか。(高橋佐知子) **工 房**
 本遺構は出土遺物及び遺構の形状から平安時代の住居兼工房跡と推定される。(神敏明)

(2)土坑

VIII A 1 e - 1 土坑 (第45図、写真図版43)

本遺構は調査区北西の尾根の頂部付近に位置し、西側にはVIII A 1 d 住居跡が存在する。VIII A **重複関係** 1 e - 2 土坑及びVIII A 1 e - 1・2 炭窯とは重複関係にあり、新旧関係は本土坑が重複するすべての遺構を截っており、構築時期が新しい。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところ、VI層上面において黒褐色土の広がりを確認したことによる。

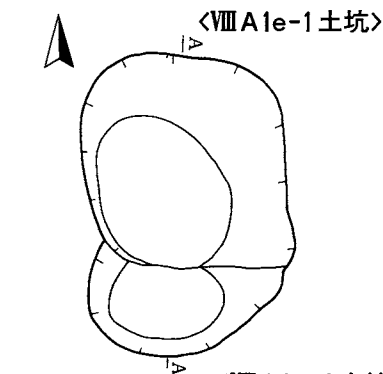
開口部の平面形は隅丸方形で、底部の平面形は不整な楕円形を呈するが、南壁側は重複関係により明確ではない。断面形は浅い皿状を呈する。規模は開口部径が1.44×1.33m、底部径が1.02×0.85m、深さは28cmである。壁はVI層中にあり、緩やかに外傾して立ち上がる。底部はVI層中に形成されほぼ平坦でしまっている。

埋土は4層に細分され、炭化材を含む黒褐色のシルト質土が主体である。(神 敏明)

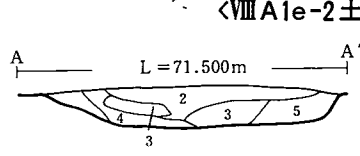
出土遺物 (第66図、写真図版57)

埋土から縄文時代中期の土器片が出土しているが流れ込みと考えられる。

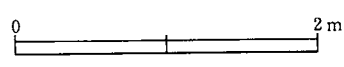
本遺構は重複関係から平安時代に属すると考えられる。(高橋佐知子)



ⅧA 1 e-1 土坑 ⅧA 1 e-2 土坑 (第45図、写真図版43)



1. 10YR3/3暗褐色土 軟らかい 粘性なし 炭化材を含む
2. 10YR3/1黒褐色土 軟らかい 粘性なし 炭化材を含む
3. 10YR2/3黒褐色土 軟らかい 粘性なし 炭化材を含む
4. 10YR3/2黒褐色土 軟らかい 粘性なし 炭化材を含む
5. 10YR3/4暗褐色土 締っている やや粘性あり 炭化材を含む



第45図 土坑 (古代)

本遺構は調査区北西の尾根の頂部付近に位置し、西側にはⅧA 1 d 住居跡が存在する。ⅧA 1 e-1 土坑及びⅧA 1 e-2 炭窯とは重複関係にある。新旧関係はⅧA 1 e-1 土坑により北側を截られており、ⅧA 1 e-1 土坑より古く、ⅧA 1 e-2 炭窯の西側を截るため炭窯より新しい。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところⅥ層上面においてⅧA 1 e-1 土坑と共に黒褐色土の広がりによって確認したものである。

平面形は重複関係にあるため不明な点が多いが、残存部分からは楕円形と推定され、断面形は浅い皿状と考えられる。規模は開口部の残存最大径が1.27m、底部残存最大径が0.75m、深さは18cmである。壁はⅥ層中にあり、緩やかに外傾して立ち上がる。底部はⅥ層中に形成され、ほぼ平坦でしまっている。

埋土は少量の微小な炭化材を含む暗褐色土の単層である。

(神 敏明)

出土遺物はない。

本遺構は重複関係から平安時代に属すると考えられる。

(高橋佐知子)

(3)製鉄炉群

ⅡC 2 e 製鉄炉群 (第46～51、71図、写真図版44～47、60、62～64)

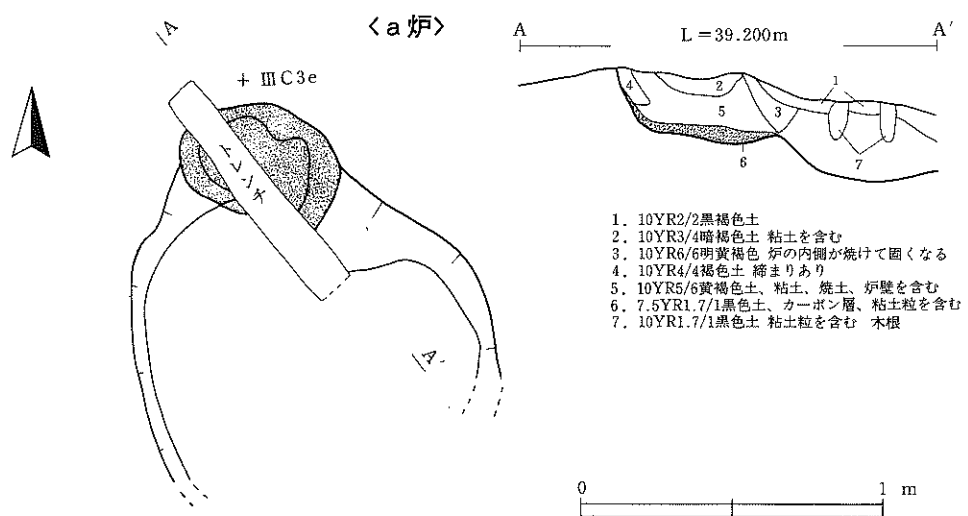
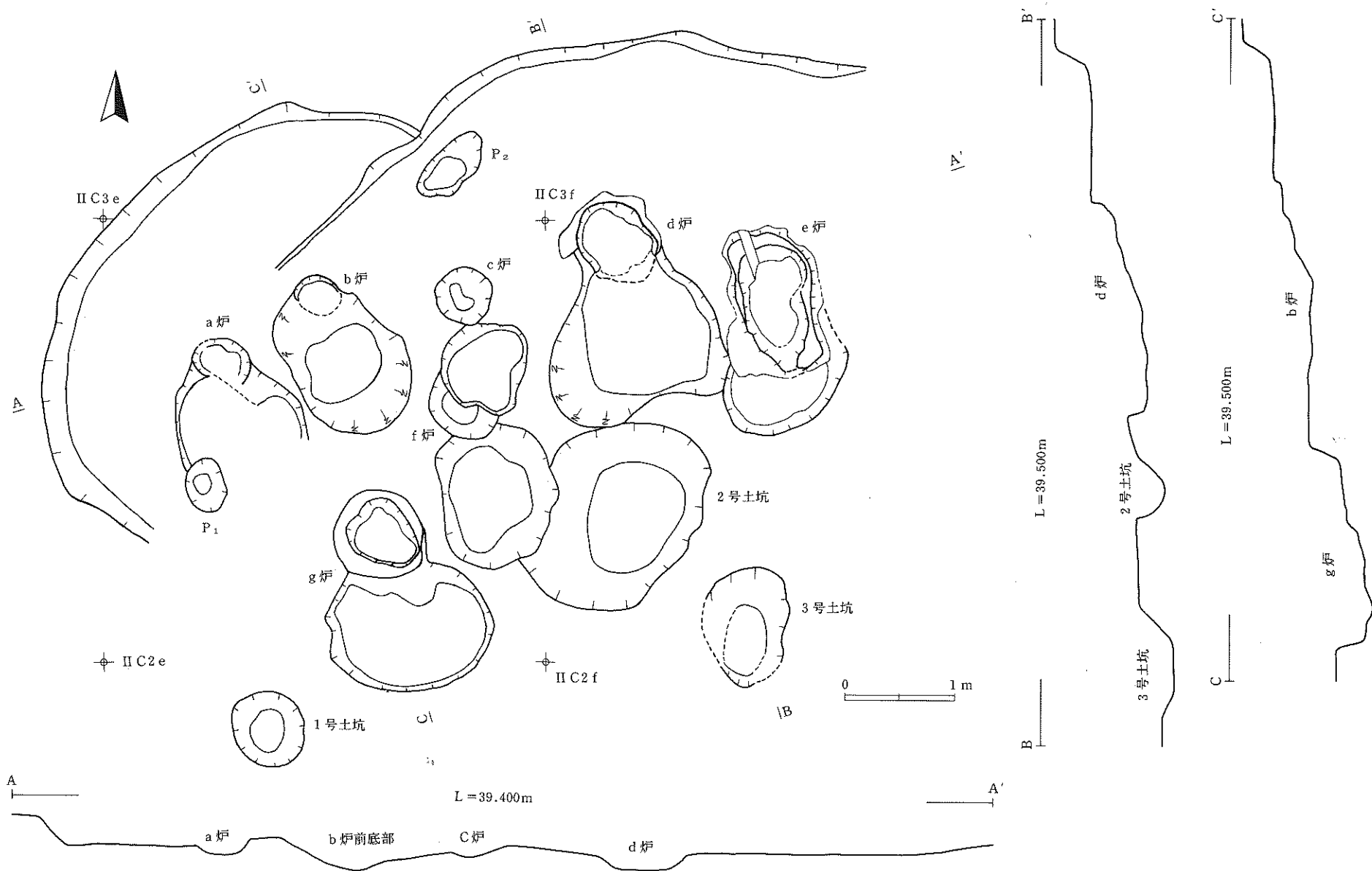
本遺構群は飛び地の緩斜面に立地している。炉群の周辺には、北側を除いて炭窯が多数存在する。

検出はⅡ層上面でおびただしい焼土、鉄滓、炉壁片の大きな広がりを確認したことによる。平坦面のこれらの焼土等を少しずつ除去したところ、斜面の上方を竪穴状に掘り込んで平坦面を作り、複数の炉を配置していることがわかった。平坦面は調査が進むにつれて、西側にももう1基存在することを確認したが、当初は1基だけだと認識していたので、新旧関係とどの炉が西側の平坦面に属するかを確認することができなかった。

また、炉は崩れたあるいは崩された炉壁が炉の周辺に集中して広がっていたこともあり、鉄滓や炉壁を取り除く段階で、どこまで取り除けば検出面、あるいは使用面が出るのか非常に迷いながらの調査であった。したがって、使用面の検出が当初はきちんとできなかったため、土層観察用のベルトを残さなかった箇所では炉同士の新旧関係も不明な個所がある。加えて、この段階の途中で本遺構の調査者が交代したため、前任者の認識とのずれなどが生じ、遺構の把握に手間取った。

さらに、調査段階では本遺跡の炉がどのような形態であるのか識別できなかったため、すべての土坑状の掘り込みや重複する使用面あるいは調査当時使用面と思われたカーボン層ごとに炉の番号をつけて調査した。本報告ではそれらを整理し、遺構名をつけ直している。

つけ替え 製鉄炉群は7基の炉と、土坑3基、ごく浅い小型の小穴が2基で構成される。いずれの平坦



第46図 IIC 2 e 製鉄炉群(1)、a 炉

面とも斜面上方のT II層を掘り込んでおり、斜面下方の壁は確認できない。おそらく住居のような竪穴ではなく、作業のための平坦面を造成するのが目的と考えられる。東側の平坦面には壁際に小穴P 1、P 2が存在するが、P 1が深さ5.5cm、P 2は7.5cmとごく浅いので土屋構造を支えるような柱穴とは考えにくい。壁高は最も深いところで、34cmを測る。一部西側平坦面と接する部分で壁がとぎれている。西側の平坦面には小穴は存在しない。壁高は最も深いところで31cmを測る。この平坦面の西側に重複してII C 2 d - 2 炭窯が存在するが、新旧関係は確認できなかった。

a 炉 (第46図、写真図版44、64)

最も西側に位置する。東側の平坦面の壁際から西側の平坦面にかけて構築されている。西側の平坦面に属している可能性がある。

本遺構は楕円形の炉の部分とそれより斜面下方の前庭部とで構成されている。平面は炉の部分がやや突出した不整形で、斜面下方の前庭部の壁は検出されなかった。規模は炉が53×37cm、深さ約25cm、前庭部は東西方向の径が120cm、深さ26cmである。炉は破壊されており、壁の立ち上がりは残存しない。炉の内部には最下層にカーボン層があり、それより上の層には粘土、焼土、炉壁が大量に含まれている。底部には焼けた面は検出されなかったが、前庭部との境にある3層の炉側は焼けて固く締まっている。3層は動いた層で、炉壁が崩落したものと考えられる。前庭部には粘土粒を含む黒色土が堆積していた。

鉄滓が0.8kg出土した。前庭部から出土した木炭はナラと同定されている。

ナ ラ

本遺構は形態や出土した鉄滓から製鉄炉と考えられる。

b 炉 (第47図、写真図版44、62)

本遺構は東側の掘り込みの西寄りの壁際に位置する。西側にはa 炉、東側にはc 炉、f 炉が存在する。本遺構は楕円形の土坑の北東隅に炉が構築されている。前庭部と炉の区画は明瞭でないが、炉の最下層のカーボン層が壁際に一部明瞭に残存しており、推定径は少なくとも40cm程度と思われる。炉を含めた土坑の規模は151×105cmで、深さは25cmを測る。炉壁の立ち上がり及び前庭部との境は残存していない。

炉の部分は最下層にカーボン層があり、その上に厚さ2～4cmの黄褐色土が存在する。この層は上面が焼けている。埋土は炭化物、鉄滓を多く含む。

前庭部は最下層に鉄滓を多量に含み、炉に近い部分には炉から流れ出た鉄滓が溜っていた。鉄滓は全部で8.7kg出土した。前庭部埋土中層には炉壁を多く含む。羽口片も出土している。また、本遺構の南脇から砂鉄が90g出土した。

流れ出た
鉄滓の
砂鉄の
出土

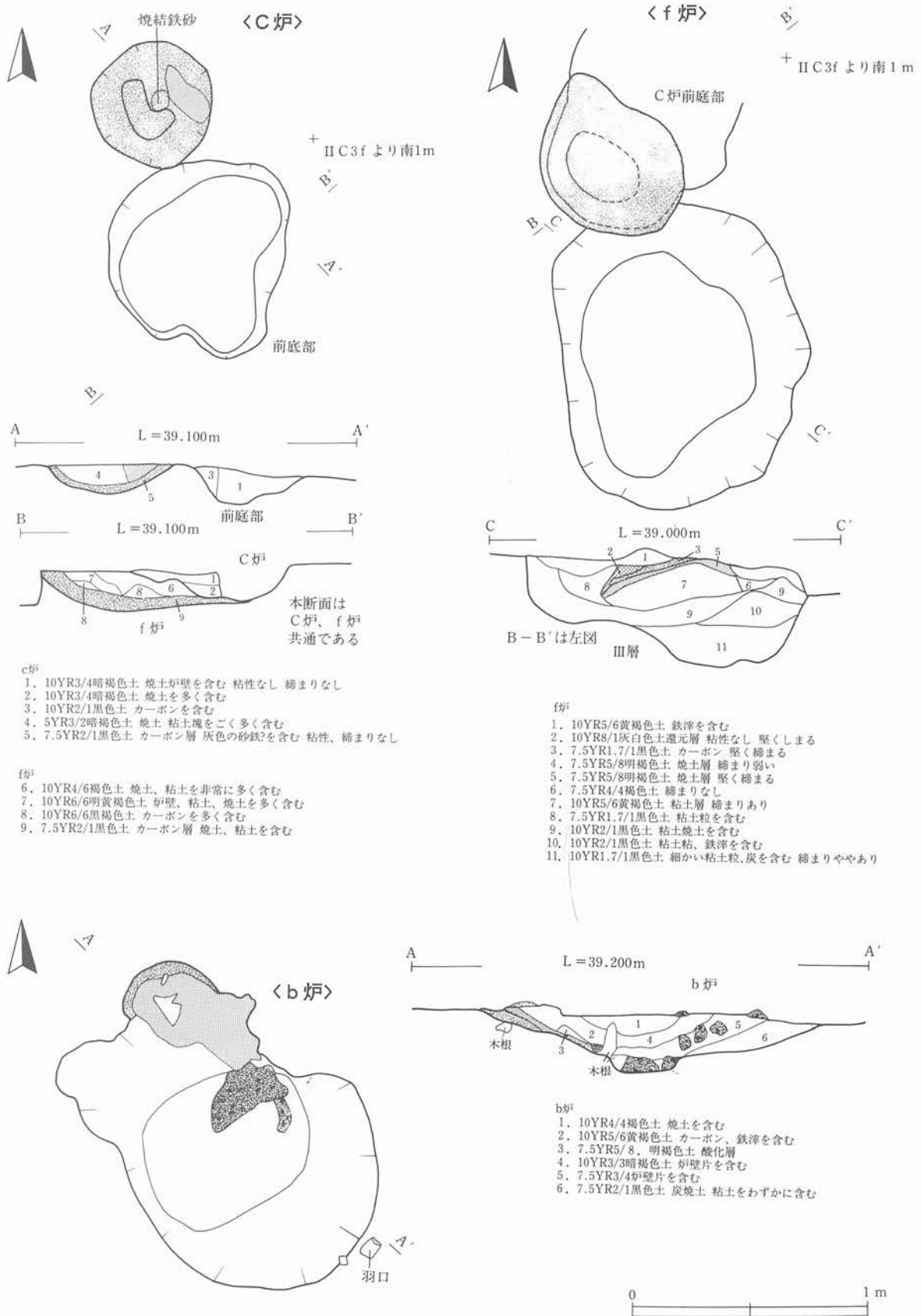
本遺構は形態や出土した鉄滓から製鉄炉と考えられる。

c 炉 (第47図、写真図版45、63、64)

本遺構はb号炉の東側に位置する。f号炉と重複関係にあり、本遺構の方が新しい。円形の炉と楕円形の前庭部で構成されており、平面形は8の字形を呈している。

8の字形

炉は径が55×53cm、深さ15cmを測る。前庭部は85×85cm、深さ15cmである。



第47図 II C 2 e 製鉄炉群(2) b 炉、c 炉、f 炉

炉壁の立ち上がりは残存しない。最下層にはカーボンの層があり、その上の壁は焼けて一部が焼土化している。炉の中央には焼結砂鉄が見られる。埋土には、焼土、炉壁、鉄滓が含まれる。 **焼結砂鉄**

前庭部からは鉄滓が出土している。また、より炉に近い部分からはカーボンも多く検出された。鉄滓は前庭部より1.5kg出土した。

本遺構は形態や出土した鉄滓から製鉄炉と考えられる。

d 炉 (第48図、写真図版45)

本遺構は東側の掘り込みの中央よりやや東寄りに位置する。東にはe 炉、西にはc 炉が存在する。e 炉と本遺構の前庭部は一部重複しているが、新旧関係は明らかにできなかった。楕円形を呈する炉と、不整な前庭部で構成されており、平面形はいびつな8の字形である。 **8の字形**

炉壁の立ち上がりは残存していない。規模は88×75cm、深さ32cmである。炉の底面には2層のカーボン層が認められることから、本遺構は2度にわたって使用された可能性がある。上位のカーボン層の上には上面に火熱を受け、薄く焼土化した黄褐色土及び黒褐色土があり、最終の操業時の使用面と考えられる。下位のカーボン層の上にはにぶい黄褐色土がのっている。埋土からは崩れた炉壁や羽口が検出された。炉の周囲からは崩れた炉壁が検出されている。 **2度の使用**

前庭部の規模は160×115cm、深さ47cmで、炉の底面よりも深く掘り込まれている。埋土からは鉄滓が多く検出された。埋土上層の炉に近い部分からは崩れたような黄褐色の粘土が検出された。また、崩れた炉壁状の焼土もこの付近に広がっている。

出土遺物 (第71図、写真図版60、62～64)

出土した鉄滓は56.0kgである。本遺構は形態や出土した鉄滓から製鉄炉と考えられる。

e 炉 (第48図、写真図版45)

本遺構は東側の掘り込みの最も東寄りに位置している。西にd 炉が存在し前庭部の一部が重複関係にあるが、新旧を明らかにできなかった。 **重複関係は不明**

本遺構は長円形の炉と、楕円形の前庭部とで構成されており、平面形は南北に長い不整形である。

炉の規模は140×80cm、深さ22cmで、壁の立ち上がりがわずかに残存している。それぞれ北壁4cm、東壁8cm、西壁7cmである。炉の底部にはカーボン層があり、北壁と南よりの壁の一部ではその上に固く締まった焼土層がのっている。炉の中央では焼土層は形成されない。炉内からは崩壊した炉壁が多く出土した。また、炉の周辺からも炉壁が出土している。

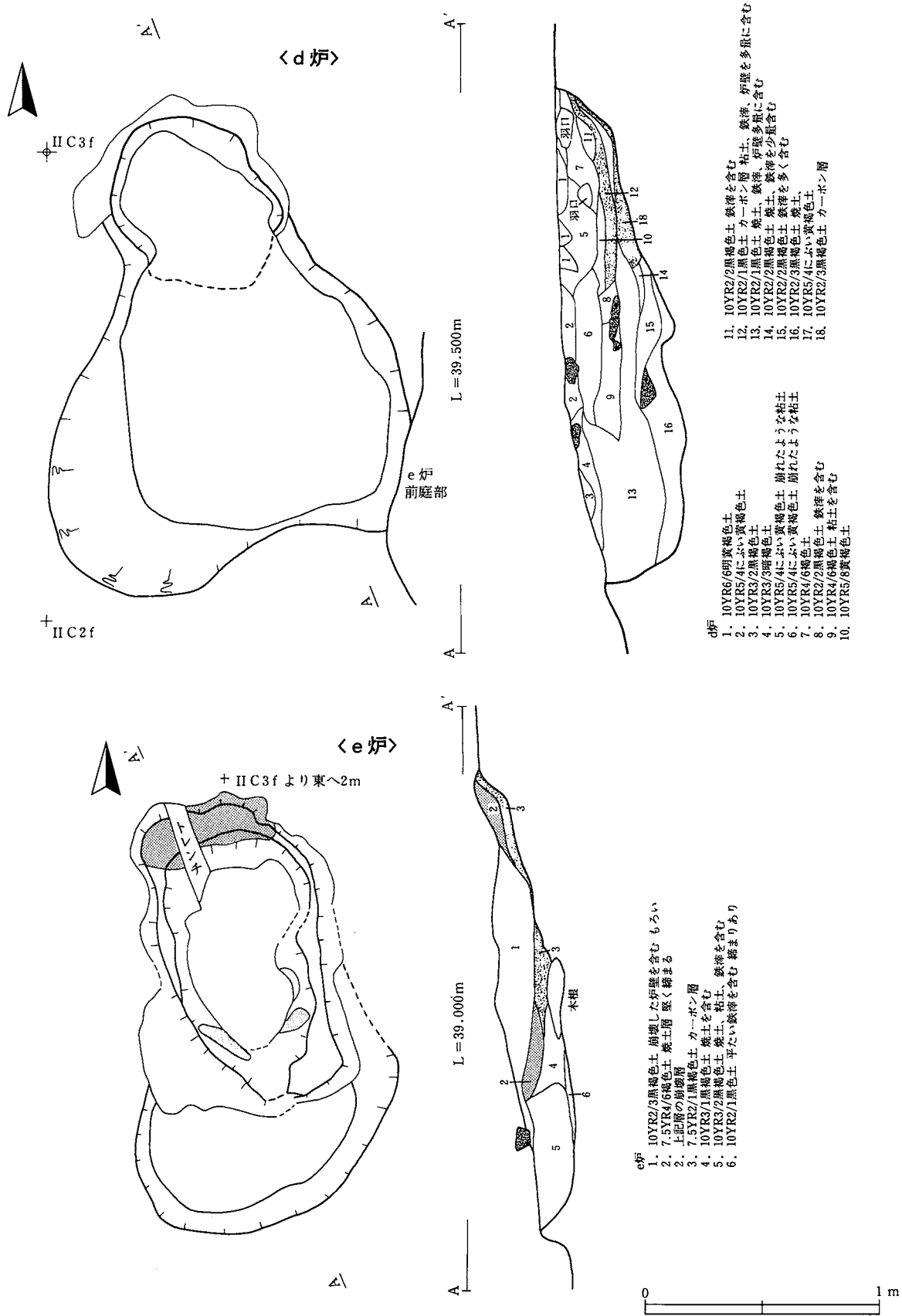
前庭部の規模は122×75cm、深さ23cmである。底部は炉の底面よりなだらかに低くなっている。

埋土上層には崩壊した炉壁を多く含み、その下に崩れた焼土層、焼土、粘土、鉄滓を多く含む黒褐色土が堆積している。底部には平たい、炉から流出した鉄滓が溜っている。 **流出した鉄滓**

出土遺物 (第71図、写真図版60、62)

出土した鉄滓は33.1kgである。前庭部から出土した木炭のうち1点はカツラと同定された。埋土から羽口も出土している。

本遺構は形態や出土した鉄滓から製鉄炉と考えられる。



第48図 II C 2 e 製鉄炉群 (3) d 炉、e 炉

f 炉 (第47図、写真図版46、62、63)

本遺構は4号炉の前庭部に切られ、本遺構の前庭部が2号土坑を切っている。西側にはg炉、東側にはe炉が存在する。

楕円形の炉と、前庭部で構成されており、平面形は8の字形を呈している。

8の字形

炉はc炉の前庭部によって約半分を破壊されているため、全容は明らかではないが、規模は75×57cm、深さ16cmを測る。前庭部は130×128cm、深さ45cmである。

炉壁の立ち上がりは残存しない。再下層には焼土や粘土を含むカーボンの層があるが、その上に焼土層は検出されなかった。炉内の埋土には焼土、粘土、炉壁が非常に多く含まれている。

前庭部の埋土は下層が粘土や焼土、鉄滓を含む黒色土が主体であるが、中層には黄褐色の粘土が堆積している。また、上層は焼土や炉壁と考えられる締まった焼土層、カーボン層、還元層が見られる。おそらく、上記の黄褐色粘土層は炉壁の補強や羽口を差し込む時の固定に使用された粘土と考えられる。また、炉壁は壊されて、前庭部に入ったものであろう。

粘土の堆積

鉄滓は炉内から1.5kg、前庭部から3.7kg出土した。

本遺構は形態や出土した鉄滓から製鉄炉と考えられる。

g 炉 (第49図、写真図版46)

本遺構は検出された製錬炉の中で、最も南側に位置する。北東側にはf炉が、南西側には1号土坑が存在する。

本遺構は円形の炉と斜面下方の長円形の前庭部で構成されており、平面形は8の字形を呈する。

8の字形

炉の規模は83×83cm、深さ20cmである。底部は少し凹凸があるが、壁は外傾して立ち上がる。炉壁の立ち上がりは残存していないが、前庭部との境の部分は残っている。厚さは16～30cmで炉内部に面した部分は還元され、青味がかっている。境の壁の下部は、上下2層に別れた焼土層があり、この部分が掻き出し口と考えられる。熱い鉄滓や炭を掻き出した際に、焼土化したのではないだろうか。炉の底面と壁にはカーボン層があり、その上に焼土層、還元層の順に堆積している。還元層と焼土層は固く締まっている。埋土には粘土、焼土、カーボン、及び鉄滓が多く含まれる。また、埋土の最下層からは砂鉄が多く検出された。

還元部分

砂鉄の出土

前庭部は152×104cm、深さ44cmで、炉よりも深く掘り込まれる。底部はやや凹凸があり、壁も、段を持って立ち上がる。炉に近い底部には最下層に焼土を含んだ黒色土が堆積し、その上に還元された砂鉄の層、焼土の層が堆積する。

出土遺物 (第71図、写真図版60、62、63)

埋土底部や中層からは鉄滓が多く出土している。また、前庭部から羽口片も出土した。鉄滓は56.5kg出土した。

本遺構は形態や出土した鉄滓から製鉄炉と考えられる。

1号土坑 (第49図、写真図版46)

本遺構は工房の南西に位置する。北東には11号炉が存在する。平面形は楕円形で、規模は82×72cm、深さ17cmである。調査時には、本遺跡の製鉄炉の形態がつかめていなかったため、底面

にカーボン層があることと、埋土に焼土、羽口片を含んでいることから、炉として調査したが、カーボン層に縮まりがないこと、火熱を受けたような形跡が明確でないこと、炉に必ず伴うらしい前庭部がないことから土坑として報告する。

底は内湾しており、壁もやや内湾気味にゆるやかに立ち上がる。埋土は2層に別れ、上層は焼土、羽口片を含んだ縮まりのない褐色土である。下層は炭片を含むカーボン層で、縮まりはない。用途は不明であるが、検出された位置から、炉に対する送風装置を設置するための穴である可能性はないと考える。

2号土坑（第49図、写真図版46）

本遺構は工房の南寄りに位置する。西側を13号土坑の前庭部に切られている。北に5号炉、南東に3号土坑が存在する。平面形は楕円形で、規模は192×150cm、深さ30cmである。本遺構には粘土や焼土、鉄滓が含まれることと土坑内の南東よりに炉壁と思われる焼土層、粘土層、還元層が見られたことから、当初は二つの炉の切り合いとして調査した。しかし、炉底と思われる面がなく、炉壁がまわらないこと、当初前庭部と考えた3号土坑内に炉壁や鉄滓、焼土が一切含まれていないことなどから、大型の土坑であり、前述の炉壁は原位置から動いていて、本遺構内に投入されたものと考えた方が適当と思われる。

底は凹凸があり、壁はやや内湾して立ち上がる。埋土は11層に細分される。土坑の斜面下方よりに投入された炉壁がある。また、斜面上方には崩れた粘土や焼土を含む黒褐色土が堆積している。

出土遺物（第71図、写真図版60、62～64）

出土した鉄滓は21.4kgである。埋土から羽口が出土している。

本遺構の用途は不明であるが、結果として、炉壁や粘土、鉄滓が廃棄されたと考えられる。

3号土坑（第49図）

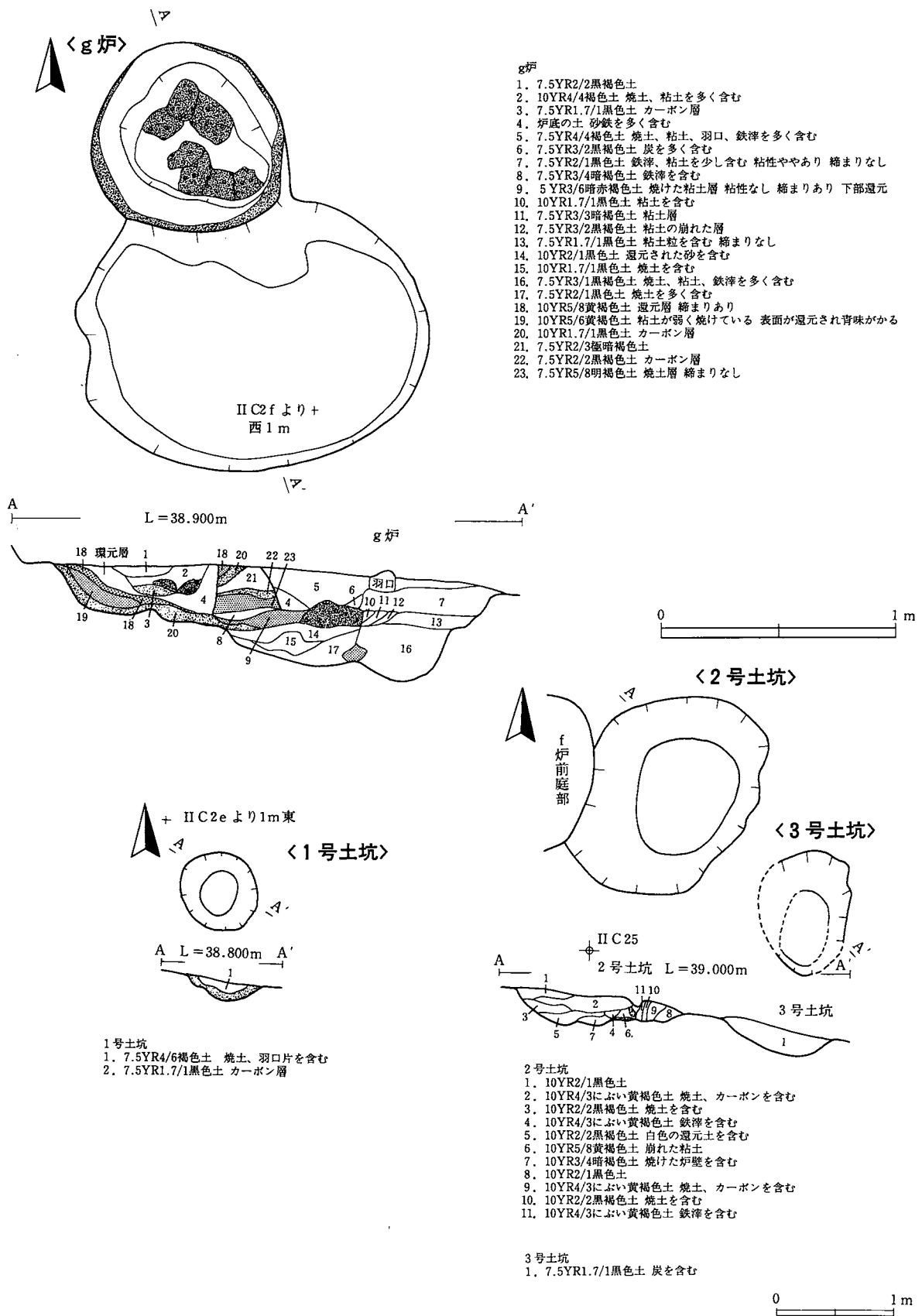
本遺構は工房の最も南東に位置する。北西には2号土坑が存在する。平面形は楕円形で、規模は108×80（推定値）cm、深さ24cmである。底面はやや内湾し、壁は内湾気味にゆるやかに立ち上がる。

焼土や砂鉄を含まない 埋土は炭を含んだ黒色土で、単層である。焼土や炉壁、鉄滓を全く含まない点が、他の土坑と異なる。

出土遺物

鉄滓（第50図、写真図版62～64）

本製鉄炉群の平坦面の埋土から出土した鉄滓は187.6kgで、個々の炉や土坑の埋土から出土した鉄滓183.2kgを加えると370.8kgに及ぶ。第49図は製鉄炉群の位置する区域に50cmのメッシュを組み、出土状況を表した図である。炉や土坑の埋土に含まれていた鉄滓は除いて示した。遺構にかかっている部分は遺構検出面より上で出土した鉄滓の量である。なお、このような鉄滓の取り上げを行ったのは平成6年8月2日以降調査終了時までであるので、それ以前に出土した鉄滓については不明であることをお断りしておく。上段アは鉄滓の総量を示す。最も多くの



第49図 II C 2 e 製鉄炉群(4) g 炉、1～3号土坑

鉄滓はg炉付近に集中しているが、このことはg炉がもっとも斜面の下位にあることとも関係しているように思われる。下段イはそのうち磁着する鉄滓のみを示している。全体的な傾向はアと変わらないが、d炉と2号土坑との境付近にも多いのが注目される。

また、ア、イともにe炉の東1m付近に他とやや離れて鉄滓の出土が見られる。

鉄滓の種類は鍛冶滓と考えられるもの、製錬滓（炉内滓、流出滓）がある。写真図版62～64は焼結砂鉄、鉄滓、鉄塊系遺物のいくつかを掲載したものである。257、258は棒状の流出孔滓である。流出滓はほとんどが磁着度が弱く灰色を呈しており、メタル反応はない。鍛冶滓と考えられるものは褐色、または橙色を呈する。磁着度は高くメタル反応もある。底面に白色粒が付着する。本遺構では、鍛造剝片が見られないことから、製鉄と大鍛冶的な作業を行った可能性がある。本遺構出土の鉄滓で磁着するものは第11、13表に磁着度及びメタル反応を示した。

鉄塊系遺物（第11、13表）

遺構内で得られた鉄滓の中からメタル反応を示したものを鉄塊系遺物とした。245～247はその中から掲載したものである。褐色～暗赤褐色、褐灰色を呈する。磁着度は高い。

砂鉄（第51図）

本遺構の炉内及び周辺から砂鉄が出土している。第50図のグラフは各炉、及び地点ごとの砂鉄の出土量を示している。スクリーントーンの部分は焼結した砂鉄で、そのほかは生砂鉄である。これらの砂鉄は調査中に砂鉄が肉眼で認められた時点で、土ごと取り上げ、バケツに水とともに入れて汚れた上澄みを捨てる作業を何回か繰り返し、水が濁らなくなってから乾燥させて、磁着し、回収した。

a炉を除くすべての炉から砂鉄が出土している。特にd炉、e炉、g炉が突出して、1,000gを超えており、焼結した砂鉄も300g前後と共通している。また、e炉の東1m付近から2,445gもの砂鉄が出土していることが注目される。この地点からは鉄滓も他の集中部分からやや離れて出土しており、炉に砂鉄を投入したり、取り出した鉄滓を置いた作業場所と考えられる。

（高橋佐知子）

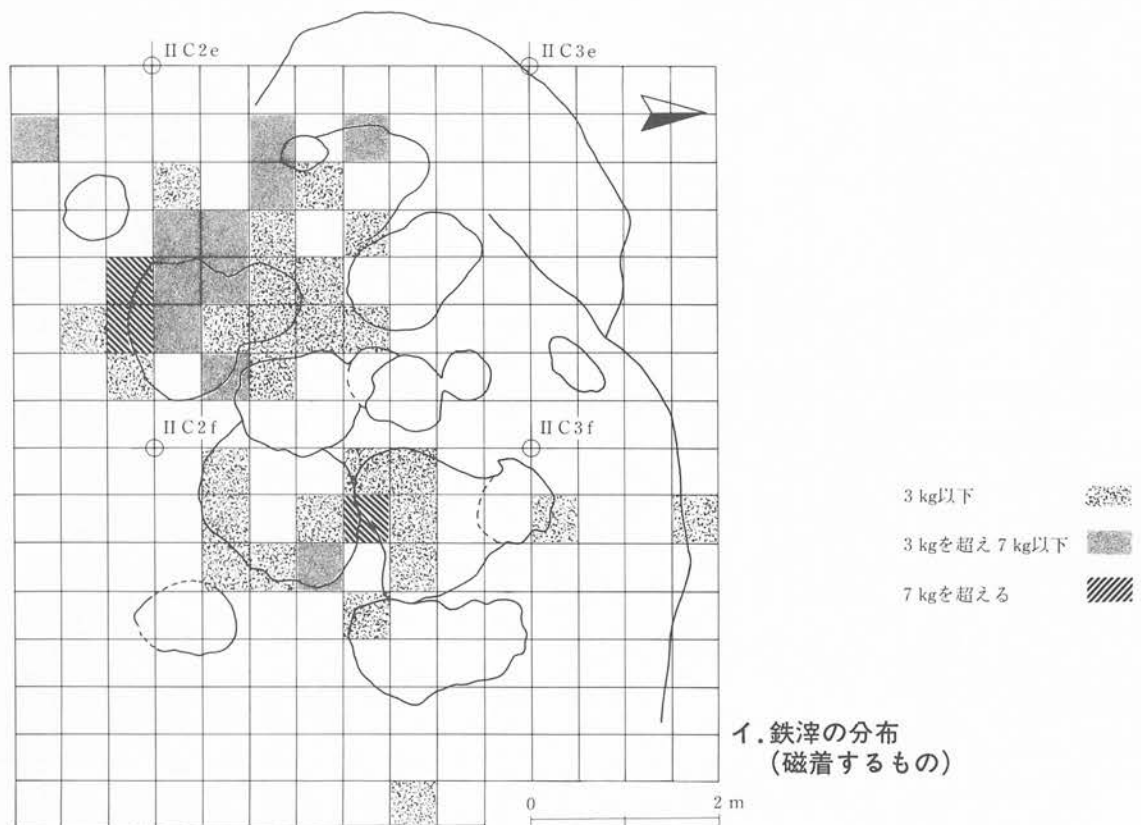
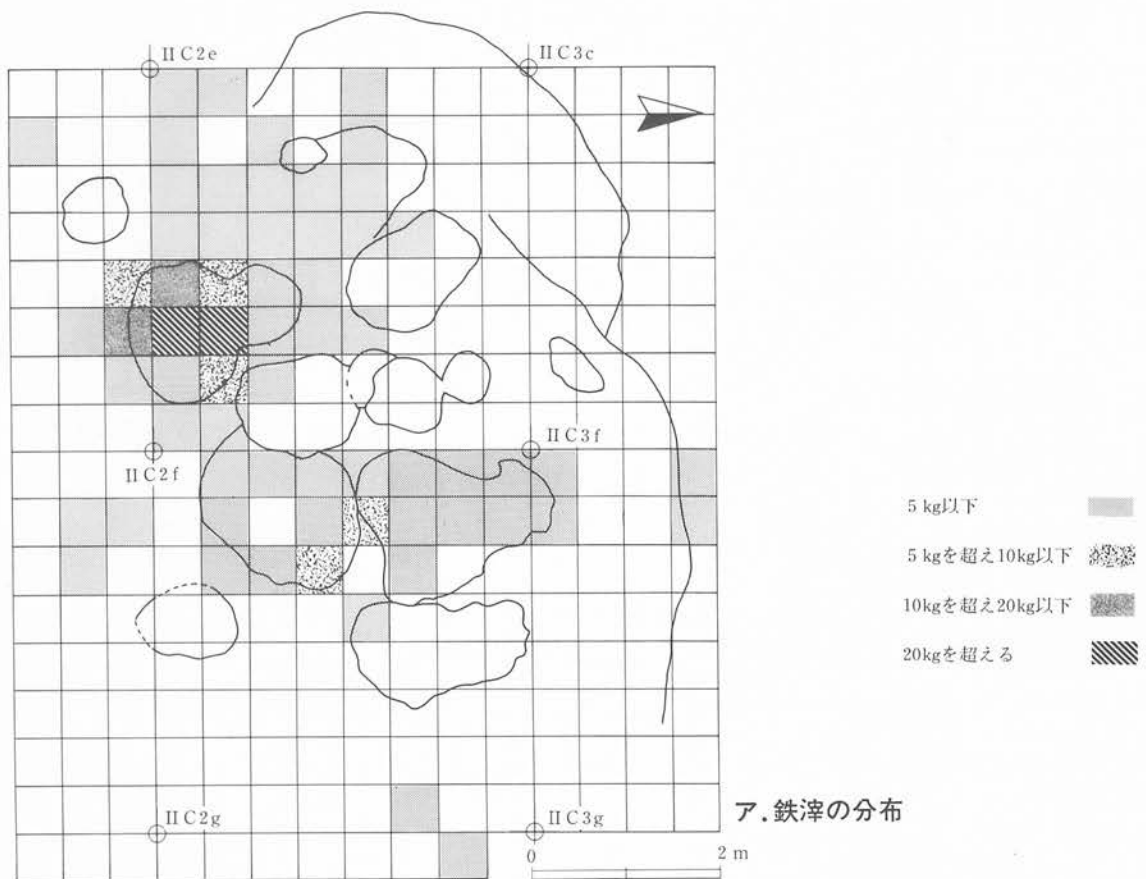
(4)炭窯

I C 0 e 炭窯（第52図、写真図版48）

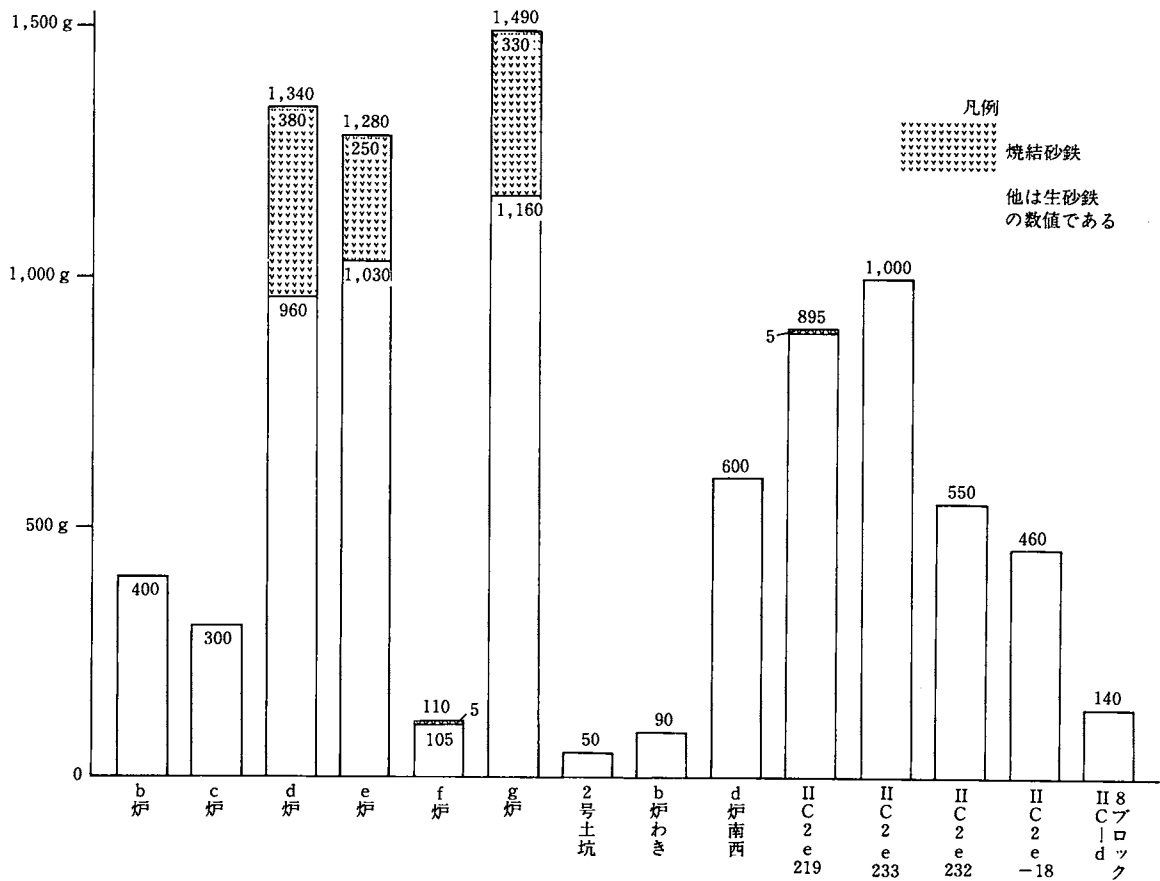
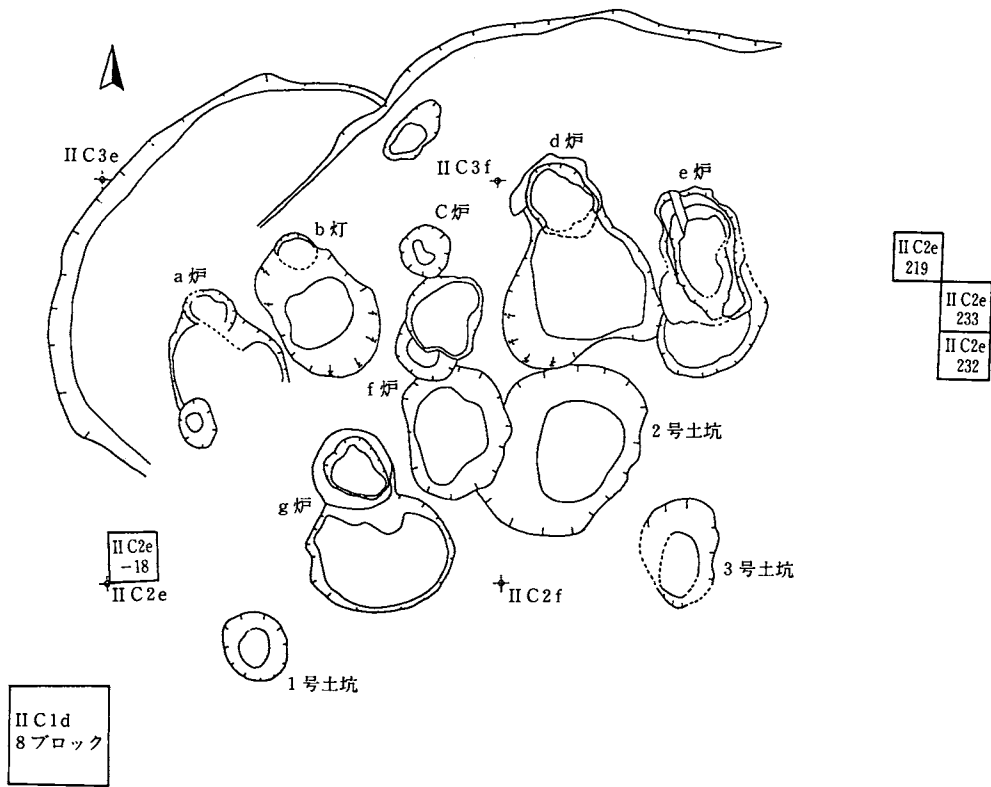
本遺構はI C区の沢沿いの緩斜面に位置する。4m北には2 C 2 e 製鉄工房が、6m東にはI C 0 g 炭窯が存在する。検出はT II層下面において、遺構の東壁の炭を多く含んだ黒色土の広がりを確認したことによるが、掘り込み面はII層上面にある。平面では遺構の範囲が明確ではなく、ベルトを残して掘り下げて、壁の立ち上がりを確認した。平面形は楕円形である。規模は開口部が2.76×1.96m、深さが50cmである。長軸方向はほぼ東西方向である。

壁はT II中に形成され、わずかに外傾して急に立ちあがる。東壁は斜面下方にあり、14cm程度しか残っていない。底部はT II層中にあり、平坦で水平である。底部の中心からやや西寄りに焼土層は焼土が堆積し、最大の厚さは22cmを測る。焼土の下は炭片の層である。

埋土は3層に細分され、多量の炭化物と焼土を少量含む黒色土が主体である。



第50図 II C 2 e 製鉄炉群鉄滓出土状況



第51図 II C 2 e 製鉄炉群砂鉄出土状況

出土遺物 (第10、12表)

西南の底部から炭化材、斜面上方の西壁付近の埋土から多くの鉄滓、羽口破片、炉壁破片が出土した。これらの鉄滓、羽口はII C 2 e 製鉄工房で産出したり、使用されたりしたものと考えられる。炉壁は同工房のいずれかの炉のものであろう。羽口片はいずれも小片で図化には至らなかった。鉄滓の総量は16.51kgである。出土した炭化材のうちサンプルとして取り上げた1点はクリと同定されている。

以上のことから、本遺構はII C 2 e 製鉄炉群と関連の深い炭窯である。(高橋佐知子)

I C 0 g 炭窯 (第53図、写真図版48)

本遺構はI C 区の沢沿いの緩斜面に位置する。本遺構の2 m西にはII C 1 f 炭窯が存在する。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところ、II層中で、炭を多く含む黒色土の長円形の広がりをとらえたことによる。当初は2基の切り合いと考えたが、断面観察によって1基であることがわかった。

平面形はゆがんだ長円形で、断面は浅い皿状を呈する。規模は開口部で4.84×1.46m、深さが26cmである。長軸方向はN-20°-Wである。

壁はT II層中にあり、ゆるやかに外傾して立ち上がる。底部はT II層中に形成され、斜面下方にわずかに傾斜するものの平坦である。底面に焼土は形成されない。

埋土は炭化物が多量に混入する黒色土で単層である。炭化物は最大のもので径5 cmで、多量に混入する部分と少量の部分があるが、分層することはできない。

出土遺物

埋土から鉄滓、羽口破片、炉壁が出土している。鉄滓は流出滓である。羽口はいずれも小片で図化、計測に至らなかった。これらのことから本遺構は斜面上方に存在する2 C 2 e 製鉄炉群に関連する遺構と考えられる。(高橋佐知子)

II C 1 c 炭窯 (第52図、写真図版48)

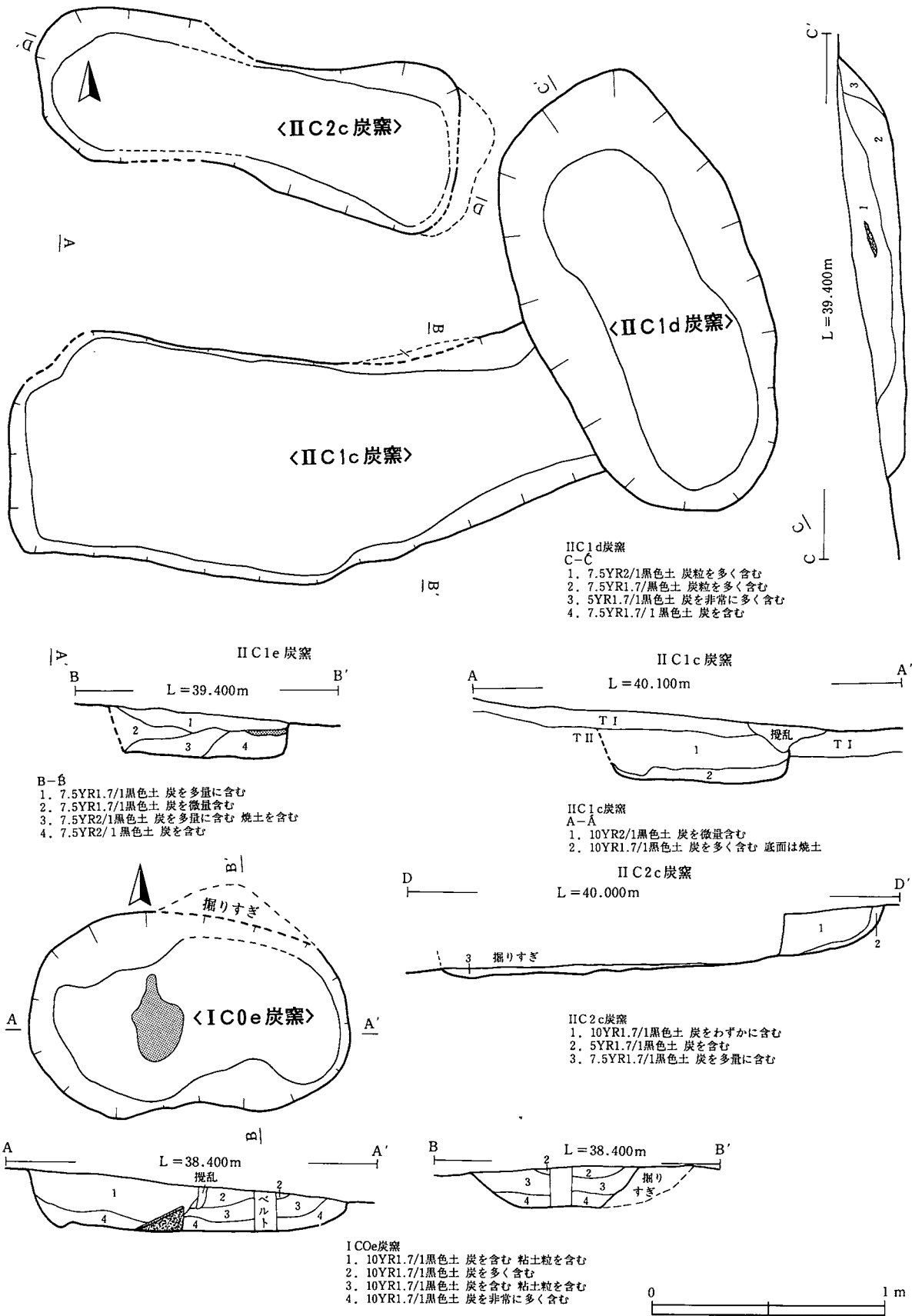
本遺構はII C 区の沢沿いの緩斜面に位置する。遺構の東側はII C 1 d 炭窯に切られている。約1.5m北にはII C 2 c 炭窯が存在する。検出はT II層中で、炭や焼土粒の広がりをとらえたがT II層上面から水が湧く場所ということもあって、平面形を確認できず、ベルトを残して底面の炭の層を追って壁の立ち上がりを確認した。その際、1基であると想定したため、東西方向のベルトを残さなかった。掘り上がった時の平面形はややくの字形に屈曲しており、2基の炭窯であった可能性がある。

平面形は前述のとおり、くの字形に屈曲した隅丸の長方形である。規模は開口部で、4.91(残存部)×1.93m、深さは西壁で約41cmである。本遺構の長軸は屈曲しているが、東西に伸びている。壁はT II層中にあり、直に立ち上がる。北壁は、立ち上がりがはっきりしない。底部は北壁が平坦でやや南東に傾斜する。底面の一部には焼土が堆積している。不明瞭

埋土は4層に細分される。最下層は炭を多く含む黒色土である。

出土遺物 (第10、12表)

埋土から、羽口破片、炉壁破片、鉄滓が出土した。羽口片はいずれも小片で図化には至らな



第52図 炭窯(1)

かった。鉄滓の総量は5.93kgである。出土した炭化材のうちサンプルとして取り上げた1点はク
クリと同定されている。

本遺構は遺構の形態及び出土遺物からII C 2 e 製鉄炉群と関連の深い炭窯と考えられる。(高
橋佐知子)

II C 1 d 炭窯 (第52図、写真図版48)

本遺構はII C 区の沢沿いの緩斜面に位置する。遺構の西側はII C 1 c 炭窯を切っている。

40cm西側にII C 2 c 炭窯が存在する。

検出はT II層中で、炭を多量に含む黒色土の広がりを確認したことによる。

平面形は楕円形で、規模は開口部で3.88×2.10m、深さは最も残りの良い北壁で41cmである。
長軸方向はN-23°-Wである。壁はT II層中にあり、ゆるやかに外傾して立ち上がる。底部は
平坦で、やや南側に傾斜するものの平坦である。底部には焼土も形成される。

埋土は炭化物を含む黒色土が主体で3層に細分される。底面直上には炭化物が極めて多量に
含まれる。

出土遺物 (第12表)

埋土から、鉄滓、羽口片、炭化材が検出された。羽口片はいずれも小片で図化には至らなかつ
た。出土した炭化材のうちサンプルとして取り上げた1点はク
クリと同定された。これらのこと
から本遺構はII C 2 e 製鉄炉群に炭を供給した炭窯と考えられる。(高橋佐知子)

II C 1 f 炭窯 (第53図、写真図版49)

本遺構は調査区南を東西に流れる沢に至る緩斜面に位置する。北西にはII C 2 e 製鉄工房が、
南東にはI C 0 g 炭窯が存在する。

検出はII層上面よりやや下位で、炭化物を含んだ黒褐色の広がりを確認したことによる。

平面形は長楕円で、南側がやや角ばっている。規模は開口部で4.05×1.62m、深さは北壁が
最大で40cm、南壁が最も浅い8cmである。長軸方向はN-2°-Wである。底部は船底状を呈す
る。

埋土は3層に細分される。底部直上の主に南半には炭を非常に多く含む黒色土が堆積し、埋
土中層から上層の主に北半には炉壁、焼土、鉄滓、炭などが詰まった状態で検出された。これ
らの埋土の検出状況からある程度窯が埋まって窪地状になった時点で、製錬作業の際の不要に
なった炉壁や鉄滓を投げ入れたものと考えられる。

出土遺物 (第71図、写真図版60、第10表)

埋土から上述のような状態で鉄滓、炉壁、鉄滓、羽口が出土した。鉄滓の総量は61.84kgに及
ぶ。219は羽口で、先端部が溶けているが、ほぼ完形である。

これらのことから本遺構はII C 2 e 製鉄炉群に炭を供給するための炭窯と考えられる。(高橋
佐知子)

II C 2 b 炭窯 (第53、写真図版49)

本遺構は飛び地の南を流れる沢に至る緩斜面に位置する。遺構の北西2mにはII C 3 a 炭窯

が、東4mにはIIC2c炭窯が存在する。検出はTII層中であるが、平面では遺構の範囲が確認できなかったので、ベルトを残して掘り上げ、壁の立ち上がりを探した。その結果、炭を少量含んだ層の下の底面と思われる面を追っていくと、ゆるやかな立ち上がりとなった。従って、不明瞭な壁平面形は明瞭ではないが、楕円形を呈すると考えられる。規模は開口部で、2.85×2.45m、深さは25cmを測る。

壁はTII層中にあり、外傾して立ち上がる。底部は平坦である。

不明瞭な底部 埋土は炭を含む締まりのない黒褐色土が主体である。埋土の上層は炭化材が多く混入するが、下層はまばらに混入する程度である。上層の炭化物集中層の直下には焼土が少量混入する層があり、この面が底部となる可能性もあるが、明確には判断できなかった。

本遺跡で検出されている炭窯は埋土の最下層に炭を多く含むのが通常であること、本遺構は平面形が他の炭窯よりかなり円形に近いことなどからも、不明な点が多い炭窯であるが、出土層位等からIIC2e製鉄炉群に関連する炭窯と考えられる。

出土遺物 (第12表)

埋土に炭化物が多く混入するほかは流れ込みと見られる縄文土器や磨石が出土したのみである。出土した炭化材のうちサンプルとして取り上げた2点はいずれもクリと同定された。(高橋佐知子)

IIC2c炭窯 (第52図、写真図版49)

炭を含まない埋土上層 本遺構は飛び地の南側を流れる沢に至る緩斜面に位置する。東側に隣接して、IIC1d炭窯、南側約1.5mにIIC1c炭窯が存在する。検出はTII層中であるが、埋土上層には炭をほとんど含まない黒色土が堆積していたので、炭窯の存在に気づかないまま掘り下げ、最下の炭の集中層で炭窯と確認した。

平面形は東側が角ばる長円形で、規模は開口部で3.99×1.43m、深さが西壁で35cmである。壁はTII層中にあり、内湾して立ち上がる。底部は平坦で、西壁付近からは焼土が少量検出された。長軸方向はN-78°-Wである。

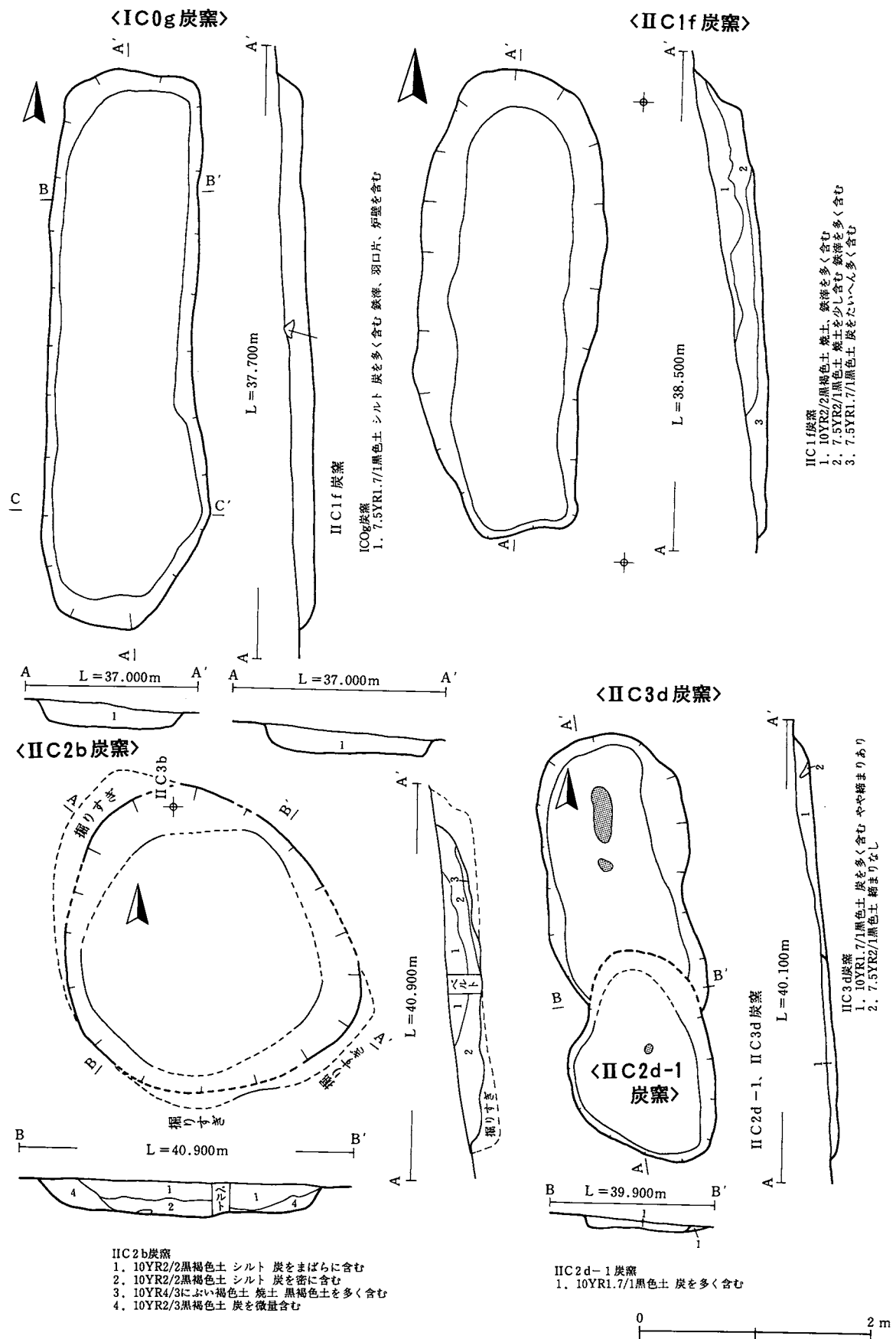
埋土は3層に細分され、炭をほとんど含まない黒色土が主体である。最下層は薄く、炭を多く含む層である。

埋土の西よりから土のう袋にして2袋ほどの大量の鉄滓(25.9kg)が出土した。また、炉壁破片も出土したが、小片で図化に至らなかった。本遺構は、層位及び出土遺物からIIC2e製鉄炉群に関連する遺構と考えられる。(高橋佐知子)

IIC2d-1炭窯 (第53図、写真図版50)

重複関係 本遺構は飛び地の南を流れる沢に至る緩斜面に位置する。IIC3d炭窯と重複関係にあり、こちらの方が新しい。TII層中で存在を知ったが、埋土上層は炭をほとんど含んでいなかったため平面形を確認できず、TIII層まで下げた段階で、炭を多く含む黒色土の広がりから、明確なプランをつかむことができた。

小判形 平面形はゆがんだ小判形で、断面は浅い皿状を呈する。規模は開口部で、1.40×1.26m、深さは11cmである。長軸方向はN-5°-Wである。



〈IC0g 炭窯〉

〈IIC1f 炭窯〉

〈IIC2b 炭窯〉

〈IIC3d 炭窯〉

- IIC2b 炭窯
1. 10YR2/2 黒褐色土 シルト 炭をまばらに含む
 2. 10YR2/2 黒褐色土 シルト 炭を密に含む
 3. 10YR4/3 におい褐色土 焼土 黒褐色土を多く含む
 4. 10YR2/3 黒褐色土 炭を微量含む

- IIC2d-1 炭窯
1. 10YR1.7/1 黒色土 炭を多く含む

- IIC1f 炭窯
1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土 鉄滓を多く含む
 2. 7.5YR2/1 黒色土 焼土を少し含む 鉄滓を多く含む
 3. 7.5YR1.7/1 黒色土 炭をたいへん多く含む

第53図 炭窯(2)

壁はTⅢ層中にあり、内湾して立ち上がる。底部は南にやや傾斜するものの平坦で、一部に焼土が形成されている。埋土は上層を削ったため、最下層のみ残存しているが、炭を多く含む黒色土である。

埋土に炭化物が含まれるほかは、出土遺物はない。

本遺構はII C 2 e 製鉄炉群に炭を供給するための炭窯と考えられる。(高橋佐知子)

II C 2 d - 2 炭窯 (第54図、写真図版49)

重復関係
不明瞭な壁

本遺構は飛び地の南を流れる沢に至る緩斜面に位置する。遺構の南東隅は、II C 2 e 製鉄工房の西の掘り込みと重複している。本遺構の方が古いと考えられるが、断面で観察できなかったため、確かではない。検出はTⅡ層であるが、北半は明確であったものの、南半は不明瞭であったため、TⅢ層まで下げて検出した。

平面形は隅丸でやや胴が張る長方形である。断面は南北方向で浅い皿型、東西方向で逆台形状を呈する。規模は開口部で3.56×1.43m、深さ14cmである。長軸方向は北を向いている。

壁はTⅢ層～TⅡ層中にあり、壁は外傾して立ち上がる。底部はTⅢ層中に形成され、平坦である。

埋土は2層に細分され、炭を多く含む黒色土が主体である。特に北壁よりに炭を多く含んでいる。

出土遺物

埋土から羽口片、鉄滓が出土した。

これらのことから、本遺構はII C 2 e 製鉄炉群に炭を供給するための炭窯と考えられる。(高橋佐知子)

II C 2 g 炭窯 (第54図、写真図版50)

本遺構は飛び地の緩斜面に位置する。約2.5m西にはII C 2 e 製鉄工房が存在する。検出面はTⅡ層である。

平面形はやや角ばった長円形を呈する。検出の際遺構上面を削平したため、明らかではないが、断面は逆台形を呈していたと考えられる。規模は開口部で、2.03×1.2m、深さ36cmである。長軸方向はN-4°-Wである。

壁はTⅡ層中にあり、底部から外傾して立ち上がる。底部はTⅡ層中に形成され、ほぼ平坦である。底面には焼土が形成される。

埋土は4層に細分され、斜面下方側は炭を多く含む黒色土、斜面上方の北側は炭をごく少量含む黒色土である。

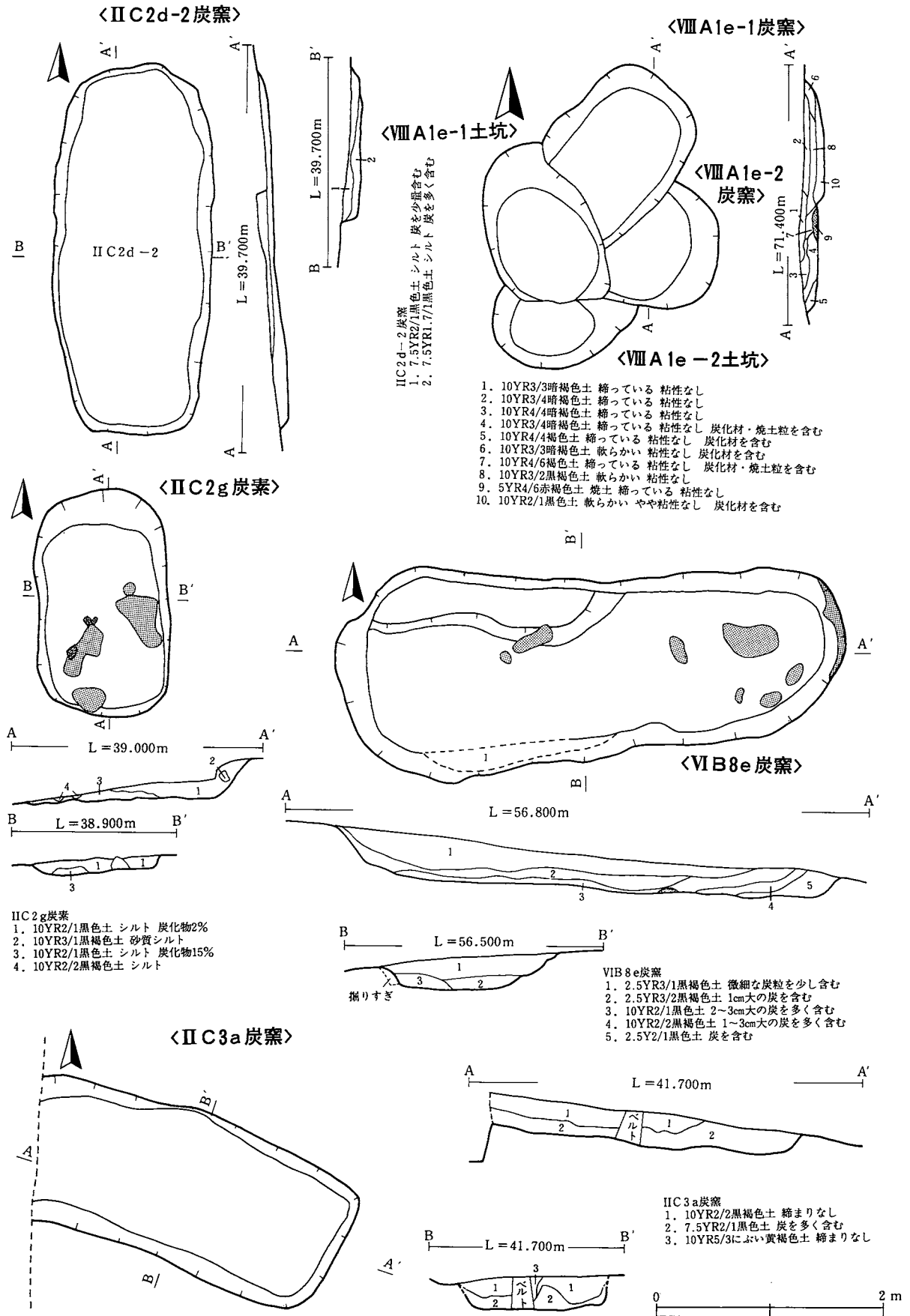
出土遺物 (第10、12表)

ク リ

埋土から羽口と鉄滓が、底面から羽口が出土している。出土した炭化材のうちサンプルとして取り上げた3点はいずれもクリと同定された。

本遺構は出土遺物、検出面からII C 2 e 製鉄炉群と関連の深い遺構と考えられる。

(高橋佐知子)



第54図 炭窯(3)

II C 3 a 炭窯 (第54図、写真図版50)

本遺構は飛び地の南側を流れる沢に至る緩斜面に位置する。2 m南東にはII C 2 b 炭窯、4 m北西にはII B 4 h 住居跡が存在する。本遺構は西側がコンクリートの擁壁によって破壊されている。検出面はT II層上面であるが、平面ではプランを確認できず、東西、南北方向にトレンチを入れて、炭化材の分布と立ち上がりで、遺構を検出した。

平面形は隅丸の長方形で、断面は逆台形状を呈する。規模は開口部で3.0(残存地)×1.36m、深さ58cmである。長軸方向はN-70°-Wである。

壁はT II層中にあり、外傾して立ち上がる。底部はT II層中に形成されゆるやかに東に傾斜している。底面に焼土は形成されない。

埋土は2層に大別され、上層は炭をほとんど含まない黒色土で、下層は炭を多く含む黒色土である。

出土遺物 (第12表)

イ タ ヤ 埋土に炭化物が含まれるほかは出土遺物はない。サンプルとして取り上げた1点はイタヤと同等された。

これらのことから本遺構は製鉄に関連する炭窯で、II C 2 e 製鉄炉群に炭を供給していたと考えられる。(高橋佐知子)

II C 3 d 炭窯 (第53図、写真図版50)

本遺構は飛び地の南を流れる沢に至る緩斜面に位置する。遺構の南側をII C 2 d-1 炭窯に切られている。

T II層で、遺構の存在を知ったが、明確に検出できず、T III層までおとして炭を多く含む黒色土の広がりからプランをつかむことができた。

平面形は長円形で、断面は浅い皿状を呈する。規模は開口部で2.5(残存値)×1.30m、深さ10cmである。長軸方向はN-11°-Wである。壁はT III層中にあり、ゆるやかに外傾して立ち上がる。底部はT III層中に形成され、平坦である。

焼土層 埋土下層は炭を多く含む黒色土である。遺構の北壁よりで、底部直上の薄い炭の上に焼土の層が形成されていた。

出土遺物

埋土から羽口破片が出土したが、小片で図化には至らなかった。

これらのことから、本遺構はII C 2 e 製鉄炉群に炭を供給するための炭窯と考えられる。(高橋佐知子)

VIB 8 e 炭窯 (第54図、写真図版51)

本遺構は調査区北側の尾根から中央を流れる沢に至る斜面に位置する。検出はIV層で、炭を含んだ黒色土の広がりをとらえたことによる。

平面形は長円形で、断面形は浅い逆台形状を呈する。北西部に段を有する。規模は開口部で4.53×1.44m、深さが30cmである。長軸方向はN-84°-Eである。

固い焼け面 壁はIV~V層中にあり、外傾して立ち上がる。東壁は固く焼けており、焼土が形成される。

底部はV層に形成され、斜面下方にわずかに傾斜するものの平坦である。底部の一部には焼土が形成される。

埋土は炭を多く含む黒色土が主体で、5層に細分される。底面の第3層～4層には炭が多量に含まれる。

出土遺物 (第12表)

東壁付近の埋土からは鉄滓がまとまって出土した。その他は羽口片が出土しているが、小片である。炭化材のうちサンプルとして取り上げた1点はナラと同定された。また、埋土から縄文土器の小片が出土したが流れ込みと考えられる。

これらのことから本遺構は製鉄に関連する炭窯と考えられる。(高橋佐知子)

VII B 8 f 炭窯 (第55図、写真図版51)

本遺構は調査区北側の尾根から中央を流れる沢に至る斜面に位置する。検出はIV層で、炭を多く含んだ黒色土の広がりをとらえたことによる。

平面形は西側が角ばる長円形で、断面形は浅い皿状を呈する。規模は開口部で4.40×1.61m、深さは西壁が最大で14cmである。長軸方向はN-75°-Eである。

壁はIV～V層中にあり、ゆるやかに外傾して立ち上がる。底部はV層に形成され、平坦で、火をうけて一部に焼土が形成される。

埋土は6層に細分され、炭を多く含む黒褐色土が主体である。底部直上には炭を極めて多く含む黒色土が堆積しており、その上に一部焼土が堆積する。

出土遺物 (第12表)

埋土より、鉄滓、羽口片、炭化材、炉壁片が出土したが、小片である。炭化材のうちサンプルとして取り上げた3点はクリと同定された。これらのことから、本遺構は製鉄に関連する炭窯で、周辺の遺構から推定しておそらく平安時代に属すると考えられる。(高橋佐知子)

VII B 9 c 炭窯 (第55図、写真図版51)

本遺構は調査区北側の中央部付近に位置している。占地場所は尾根の斜面が終わり、平坦になる部分で、以前は水田として利用されていたところである。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところ、IV層中において炭化材を多量に含む黒褐色土の広がりを確認したことによる。平面形は長楕円形で、断面形は浅い皿状を呈する。規模は開口部径が4.50×1.35m、底部径が4.19×1.10m、深さは16cmである。

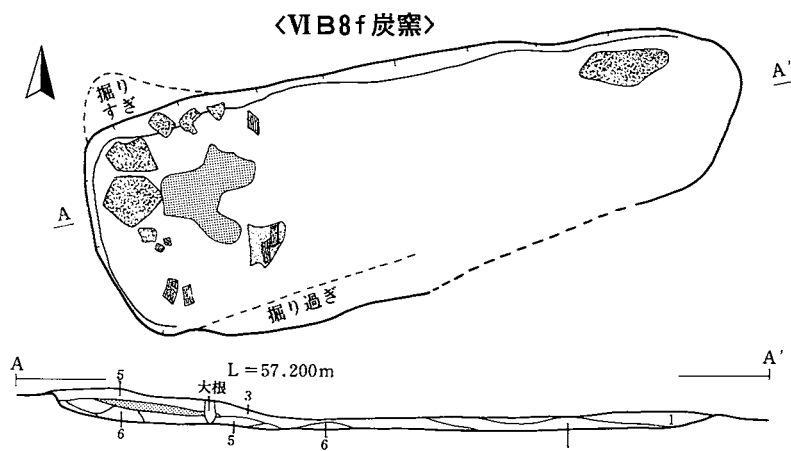
壁はIV層中にあり、緩やかに外傾して立ち上がる。東壁は斜面下方にあり、流失している。底部はIV層中に形成され、斜面下方に傾斜するもののほぼ平坦でしまっている。

埋土は多量に炭化材を含む黒褐色土の単層である。(神 敏明)

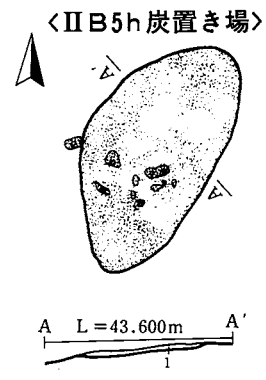
出土遺物

本遺構は出土遺物から製鉄に関連する炭窯で、周辺の遺構から推定しておそらく平安時代に属すると考えられる。(高橋佐知子)

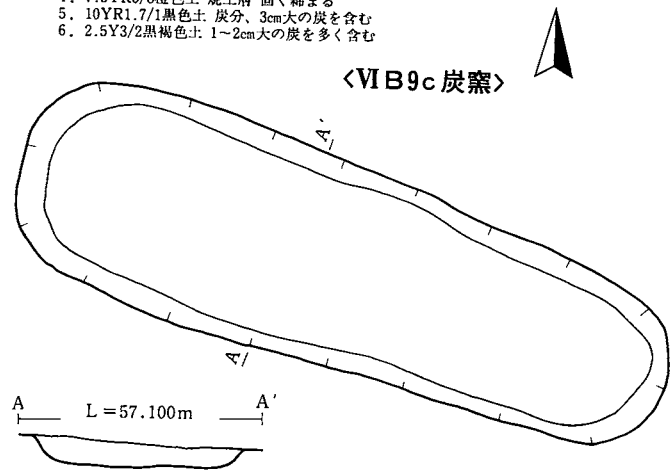
VIII A 1 e - 1 炭窯 (第54図、写真図版51)



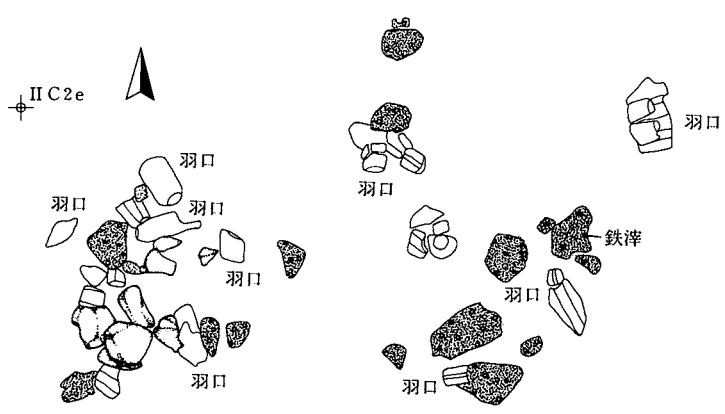
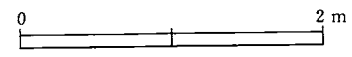
- VI B 8 f 炭窯
1. 10YR3/2黒褐色土 焼土、炭粒を含む
 2. 2.5YR3/2黒褐色土 1~2cm大の炭を多く含む
 3. 10YR3/2黒褐色土 焼土、炭粒を含む
 4. 7.5YR6/8橙色土 焼土層 固く締まる
 5. 10YR1.7/1黒色土 炭分、3cm大の炭を含む
 6. 2.5Y3/2黒褐色土 1~2cm大の炭を多く含む



- II B 5 h 炭置き場
1. 10YR2/2黒色炭の細片の層

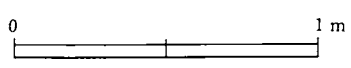


- VI B 9 c 炭窯
1. 10YR2/2黒褐色土 堅く締っている、粘性なし、多量の炭が混入する



<II C 1 e 羽口捨て場1>

<II C 1 e 羽口捨て場2>



第55図 炭窯(4)、II B 5 h 炭置き場、II C 1 e 羽口捨て場1、2

本遺構は調査区北西の尾根の頂部付近に位置し、ⅧA 1 e - 2 炭窯・ⅧA 1 e - 1 土坑及びⅧA 1 d 住居跡の煙出し部と重複関係にある。新旧関係は本遺構がⅧA 1 e - 2 炭窯を載り、**重複関係**ⅧA 1 e - 1 土坑に載られているためⅧA 1 e - 2 炭窯より新しく、ⅧA 1 e - 1 土坑より古い。また、ⅧA 1 d 住居跡の煙出し部が本遺構の底部から検出されていることから構築時期は本遺構の方が新しい。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところ、Ⅵ層上面において暗褐色土の広がりや焼土を検出したことによる。

平面形の詳細は重複関係にあるため不明であるが、残存部分からは楕円形を呈すると推定さ**楕円形**れる。規模は開口部の残存最大径で1.38×1.15m、底部残存最大径が1.18×0.85m、深さは18cmである。壁はⅥ層中にあり、緩やかに外傾して立ち上がる。底部はⅥ層中に形成され、ほぼ平坦でしまっている。

埋土は5層に細分され、上位はシルト質の暗褐色土、中位はシルト質の黒褐色土、下方は炭化材を含む黒色土が主体である。(神 敏明)

本遺構は切り合い関係からⅧA 1 d 住居跡より新しいが、形態がⅧA 1 e - 2 炭窯と類似していることから、平安時代の炭窯である可能性が強い。(高橋佐知子)

ⅧA 1 e - 2 炭窯 (第54図、写真図版51)

本遺構は調査区北西の頂部付近に位置し、ⅦA 1 e - 1・2 土坑、ⅦA 1 e - 1 炭窯と重複関係にある。新旧関係は本遺構が重複関係にあるすべての遺構に載られており、構築時期が最も古い。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところⅥ層上面において暗褐色土の広がりを確認したことによる。検出面からは重複関係にあるため平面形を確定する**重複関係**には至らなかったため埋土断面より平面形を確定した。

平面形は残存部分から楕円形を呈すると推定される。断面形は浅い皿状である。規模は開口部の残存最大径が1.14×1.0m、底部の残存最大径が1.0×0.68m、深さは15cmである。壁はⅥ層中にあり、緩やかに外傾して立ち上がる。底部はⅥ層中に形成され、平坦でしまっている。

埋土は5層に細分され、上位はシルト質の暗褐色土と褐色土、下方は炭化材を含む暗褐色土と褐色土が主体である。また、底部上面に赤褐色の焼土が見られる。(神 敏明)

本遺構は切り合い関係からⅧA 1 d 住居より古いが、平安時代の遺構と考えられる。

(高橋佐知子)

(5)炭置き場

ⅡB 5 h 炭置き場 (第55図、写真図版47)

本遺構は飛び地北西部の緩斜面に位置する。約1.5m東にはⅡB 4 h 住居跡が存在する。検出はⅡ層上で、炭の小片の集中をとらえたことによる。

平面形は楕円形で、規模は1.66×0.9mである。掘り込みなどは特になく、炭の堆積は最大厚で3cm程である。火を受けた形跡はない。このように特に炭窯とは考えられず、炭の小片が集**炭の小片の**中していることから、炭を置いた場所と考えられる。**集中**

出土遺物

炭の集中から鉄滓が出土している。総量は3.7kgである。

以上のことから本遺構は製鉄に関連しており住居との関連も想定されることから平安時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

(6)羽口捨て場

II C 1 e 羽口捨て場 1、2 (第55図、写真図版47)

II C 2 e 製鉄炉群の南側に位置する。T II 層上に羽口が集中して捨てられている。掘り込みは持たない。西側の羽口の集中ブロックを1、東側の集中ブロックを2とした。

羽口の集中 羽口は工房内からも出土しているが、これほどの集中は他に例をみない。図化した羽口は3本であるが、このほかにも破片が多く出土した。II C 2 e 製鉄炉群で使用されたこれらの羽口はもっぱら掘り込みの外に投げ捨てられたものと考えられる。

また、炉壁の破片や鉄滓、10個ほどの花崗岩の角礫(5~10cm大)も見られた。角礫は酸化して赤化しているものがあるが、火を受けた結果かどうかは不明である。

出土遺物 (第71図、写真図版60、第10表)

223、224、227が出土した羽口である。この他に羽口の小片、鉄滓が出土した。図化しなかった羽口のうち計測可能なものは計測値を載せた。(第10表) (高橋佐知子)

(7)焼土遺構

II B 2 g 焼土遺構 (第56図、写真図版52)

本遺構は飛び地の緩斜面に位置する。検出面はT II 層である。平面形はアメーバー状の不整形で、45×43cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大8cmで、断面形はレンズ状である。

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。本遺構は検出された面から、古代に属する。平安時代の可能性が高いが、付近で奈良時代の土器も出土していることから断定はできない。

II C 2 f 焼土遺構 (第56図、写真図版52)

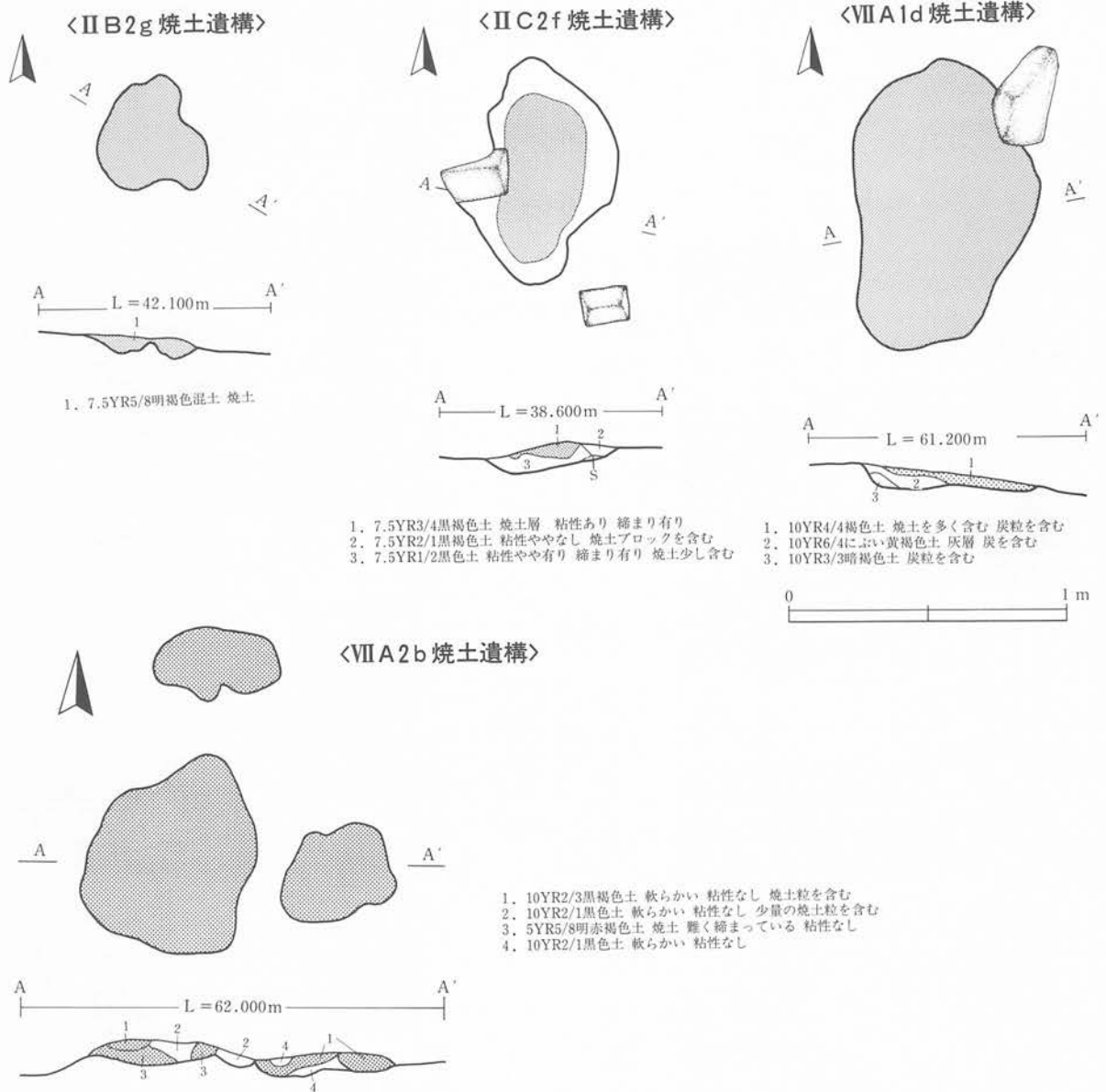
本遺構は飛び地の緩斜面に位置する。本遺構はII C 2 e 製鉄炉群内の2号土坑に切られている。検出面はT II 層下面で、2号土坑の検出面よりやや下がった標高である。したがって、本遺構の方が古い。平面形は長円形で、62×30cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大6cmで、断面形はレンズ状である。遺構内に花崗岩の角礫が存在する。

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。本遺構は検出された面から、古代に属すると考えられ、平安時代の遺構の可能性はある。

VII A 1 d 焼土遺構 (第56図、写真図版52)

灰の層 本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はIV層である。平面形は不整形で、106×7cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大で4cmである。焼土の下には炭を含む灰の層が堆積している。

周囲からは柱穴などは検出されなかった。本遺構は検出された面から、平安時代の遺構と考



第56図 焼土遺構（古代）

えられる。（高橋佐知子）

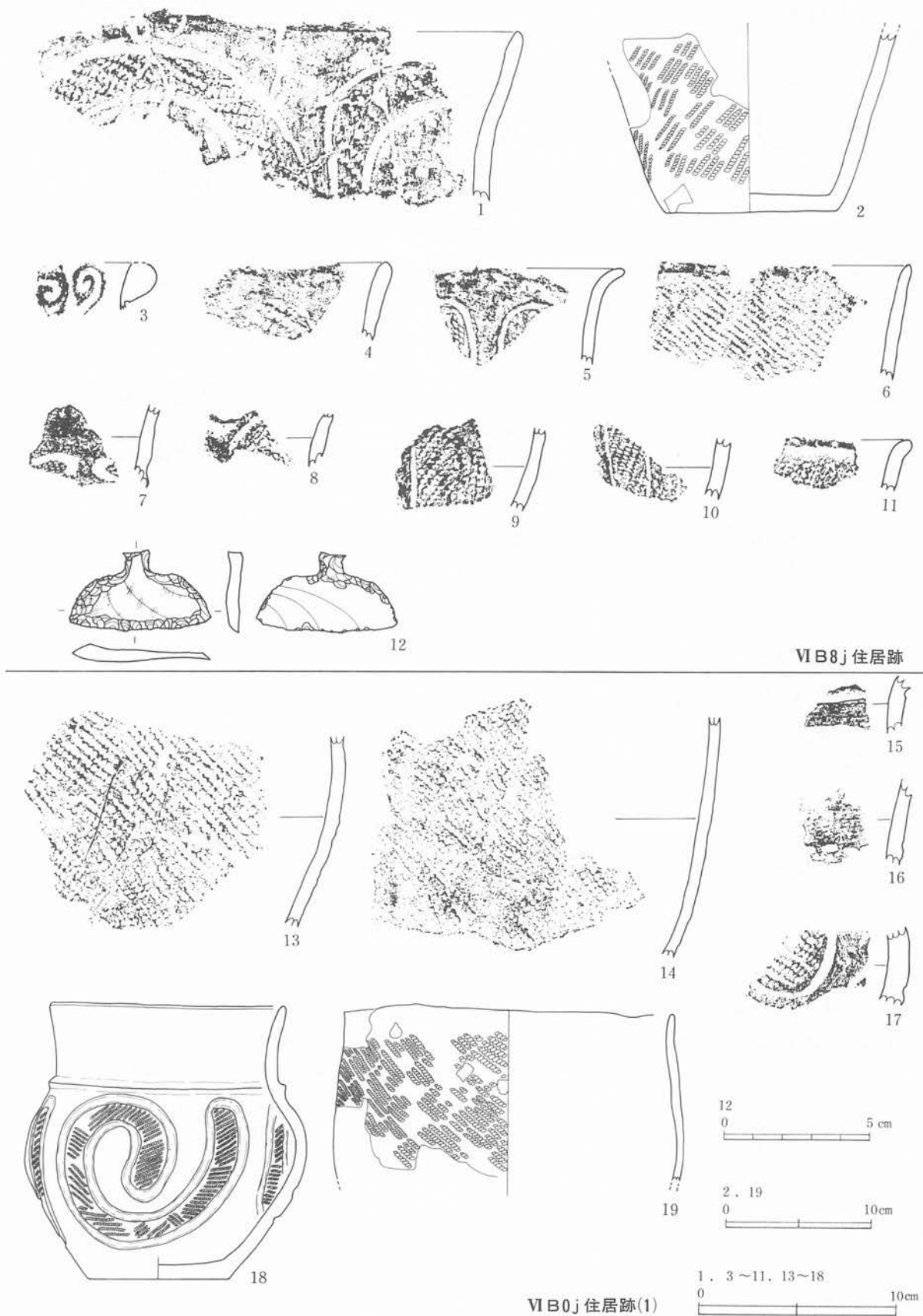
VII A 2 b 焼土遺構（第56図、写真図版52）

本遺構は調査区西側の平坦地に位置している。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところIV層上面において焼土を確認したことによる。平面形は不整形で、焼土の発達している部分によって3つに分かれる。規模は3つのうち最大のものが72×58cm、次に大きいものが42×31cm、最小のものが43×25cmで、すべてが半径60cmの円内に収まる。

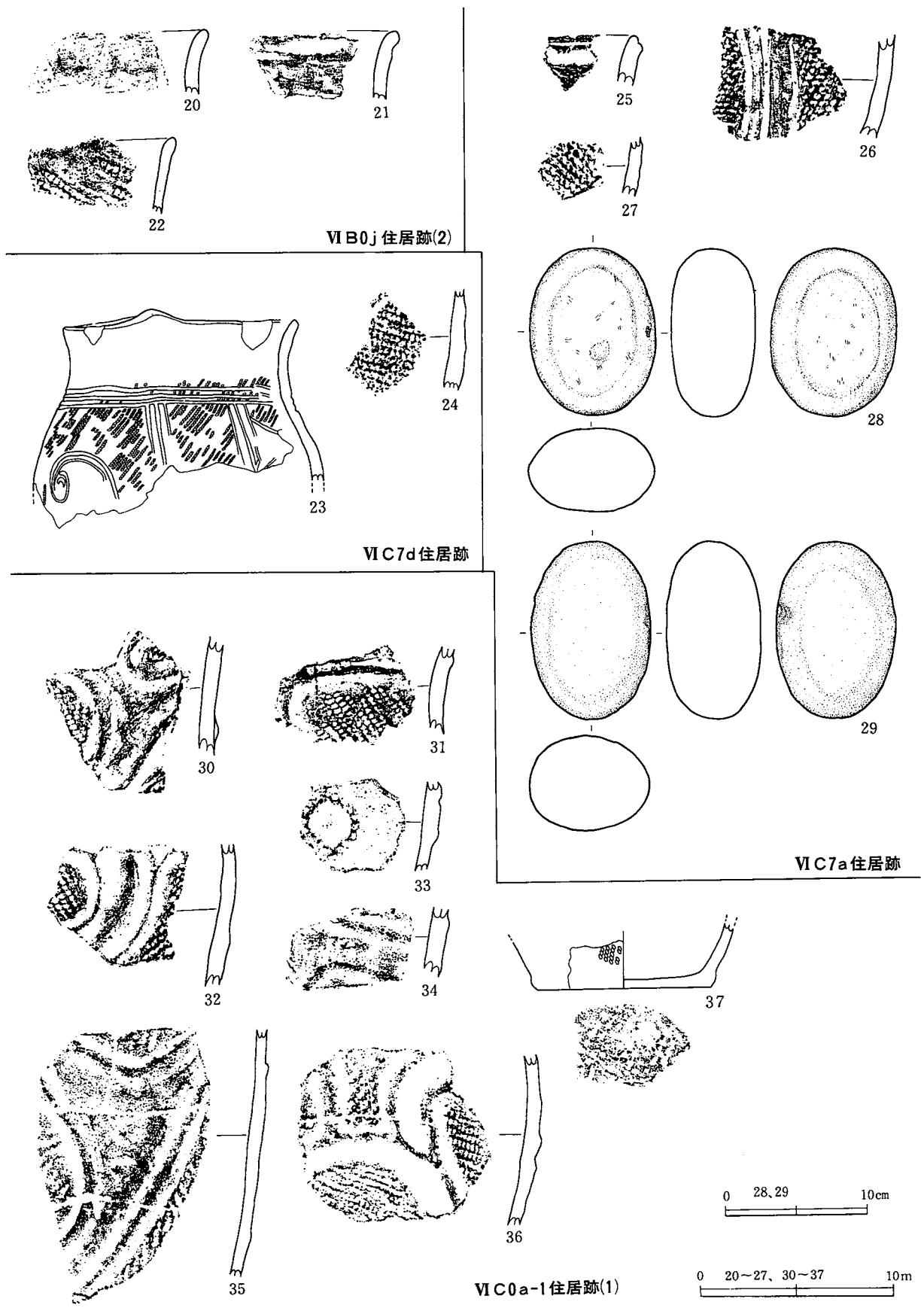
3つの焼土のうち最大のものが最も発達しており、暗赤褐色の焼土が5cmほどの厚さで広がっている。他の2つは黒褐色土に焼土粒が多量に含まれる。（神 敏明）

焼土の周辺からは捨てられたと思われる焼土ブロックも検出されており、本遺構がVII A 3 b 住居跡と関わりのあるものと思われる。

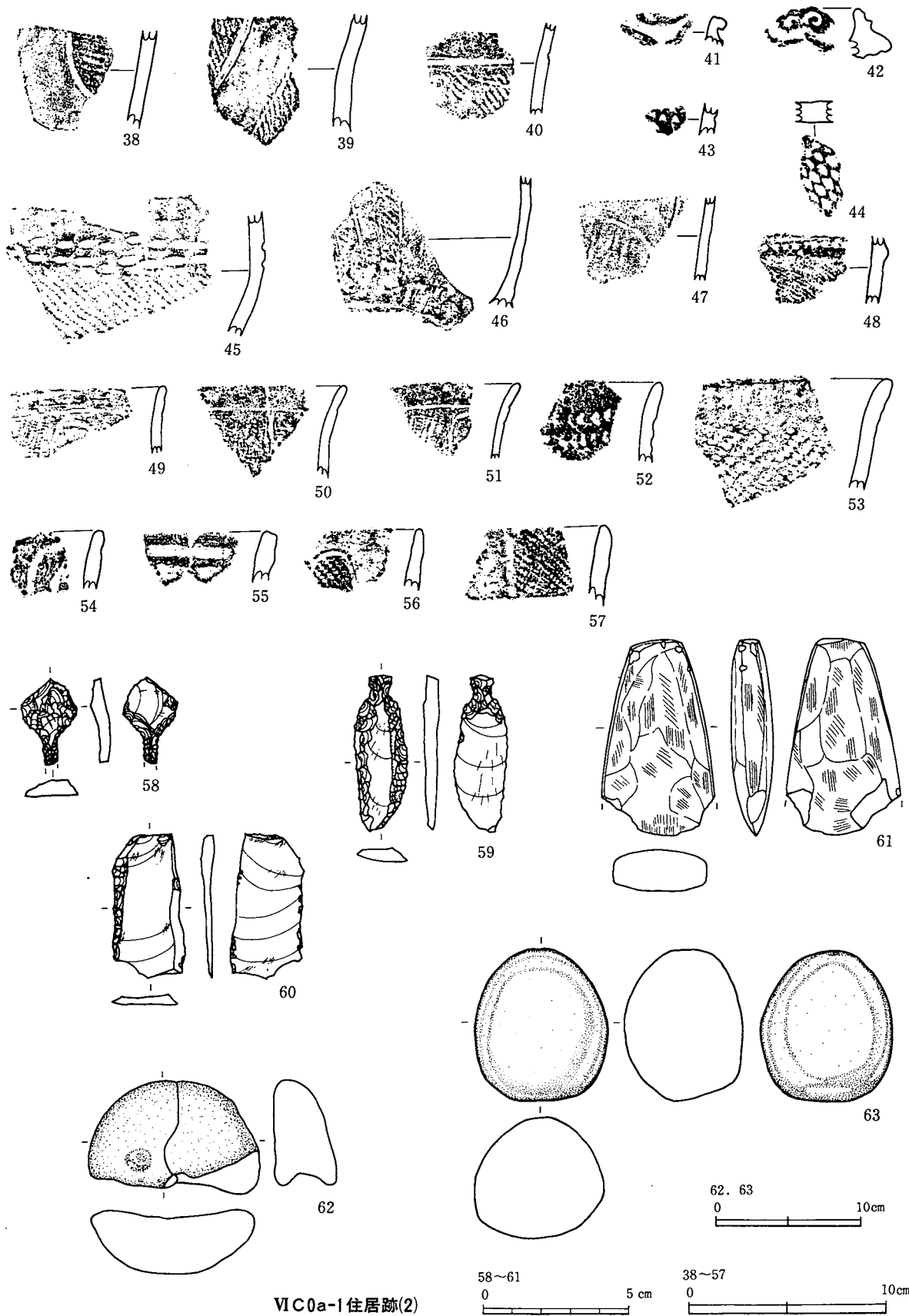
本遺構は検出された層位から平安時代の遺構と考えられる。（高橋佐知子）



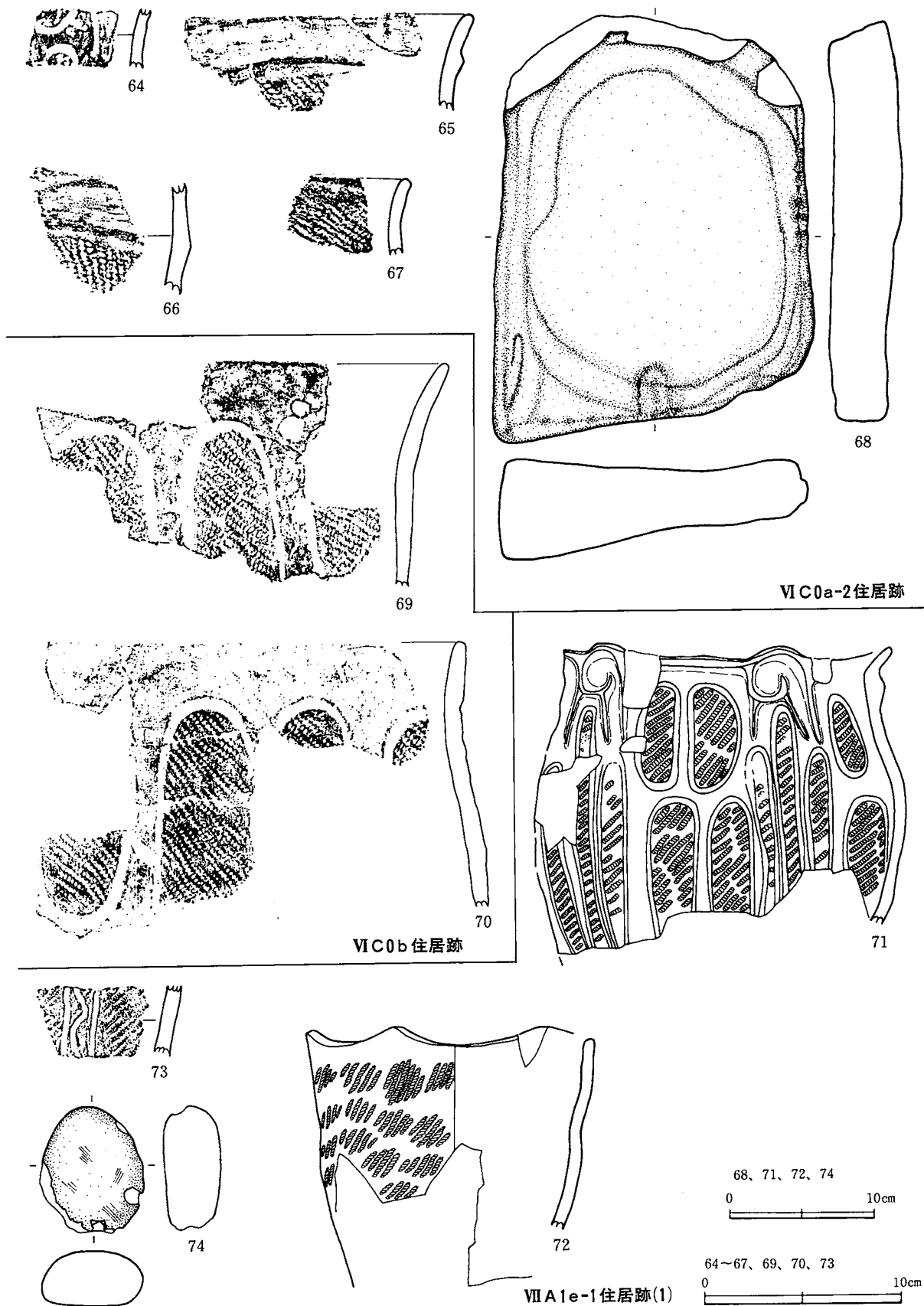
第57図 遺構内出土遺物 1 VIB 8 j 住居跡、VIB 0 j 住居跡(1)



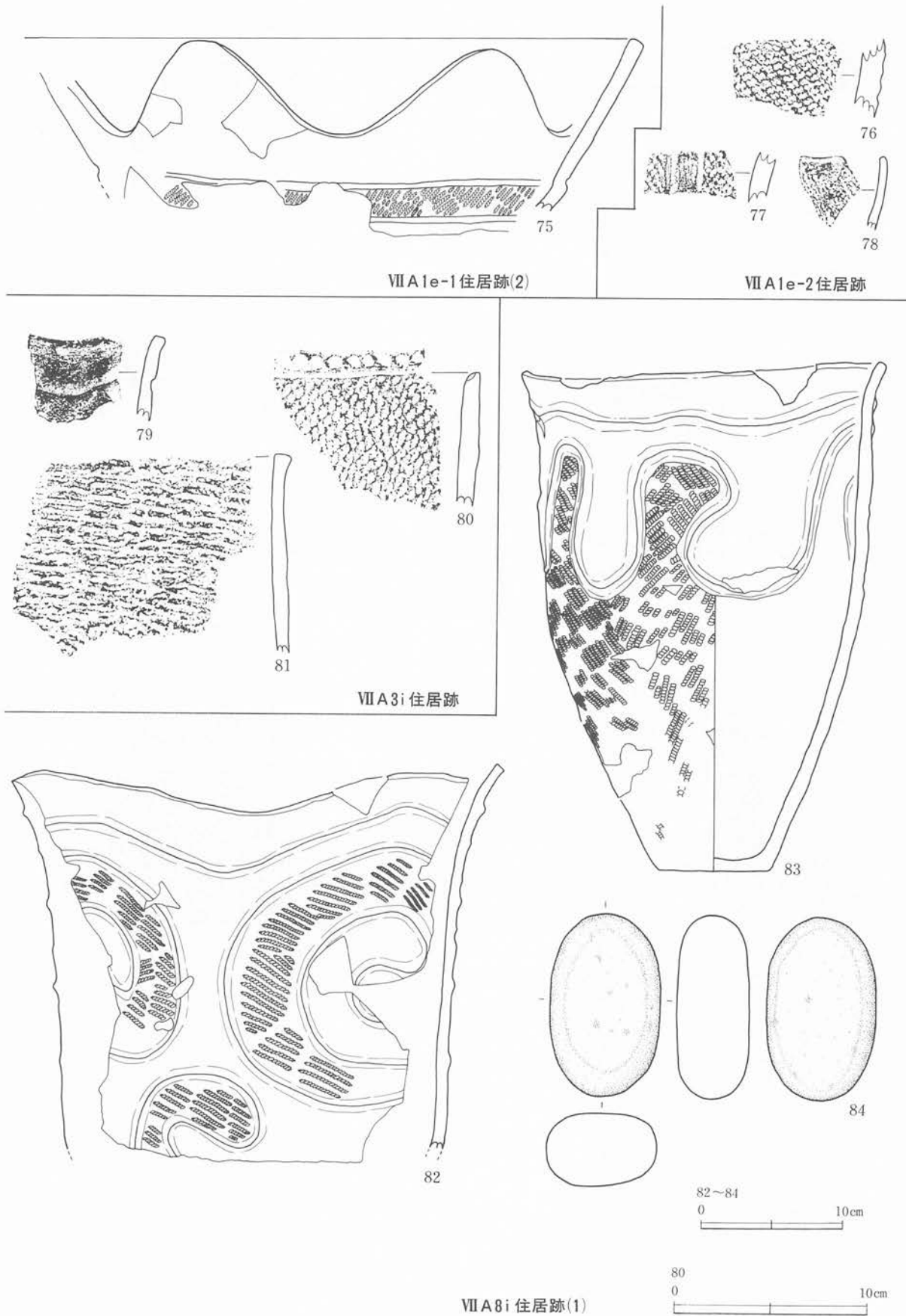
第58図 遺構内出土遺物 2 VIB0j 住居跡(2)、VIC7d 住居跡、VIC7a 住居跡、VIC0a-1 住居跡(1)



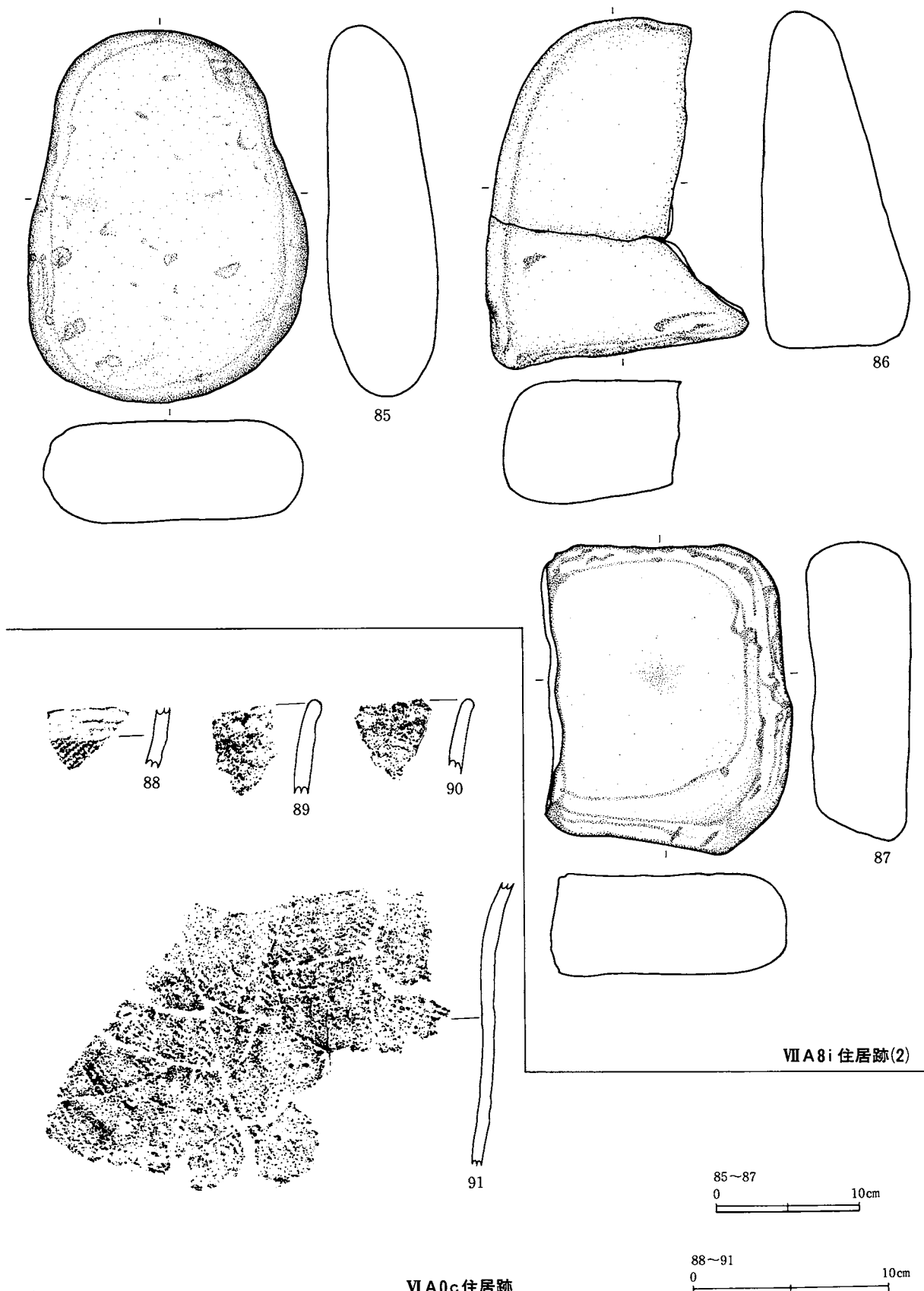
VIC0a-1住居跡(2)
第59図 遺構内出土遺物3 VIC 0 a - 1住居跡(2)



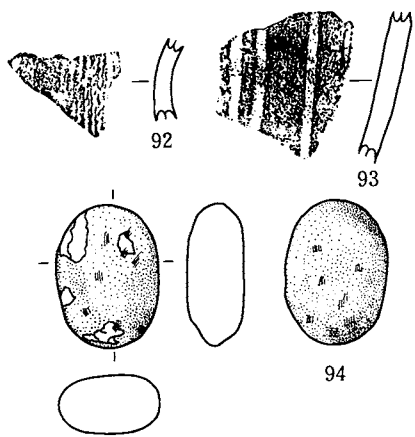
第60図 遺構内出土遺物4 VIC0a-2住居跡、VIC0b住居跡、VIA1e-1住居跡(1)



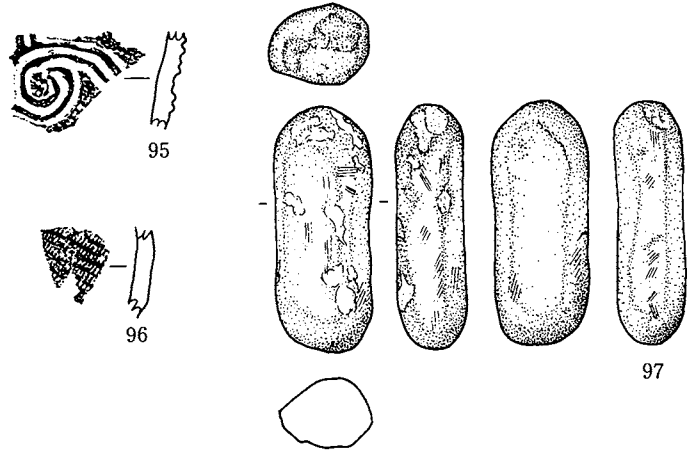
第61図 遺構内出土遺物 5 VII A 1 e - 1 住居跡(2)、VII A 1 e - 2 住居跡、VII A 3 i 住居跡、VII A 8 i 住居跡(1)



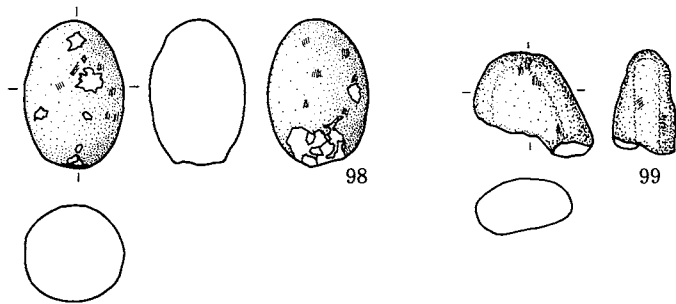
第62図 遺構内出土遺物 6 VII A 8 i 住居跡(2)、VII A 0 c 住居跡



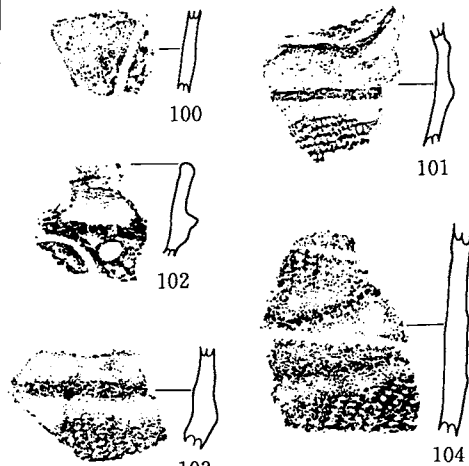
VII A 0 d 住居跡



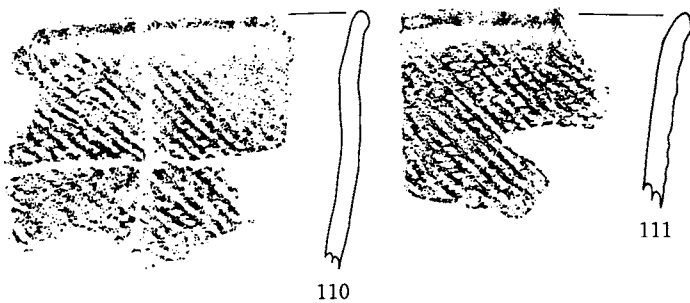
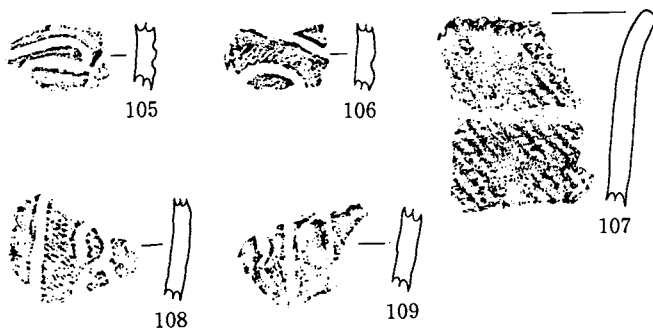
VII B 2 a-1 住居跡



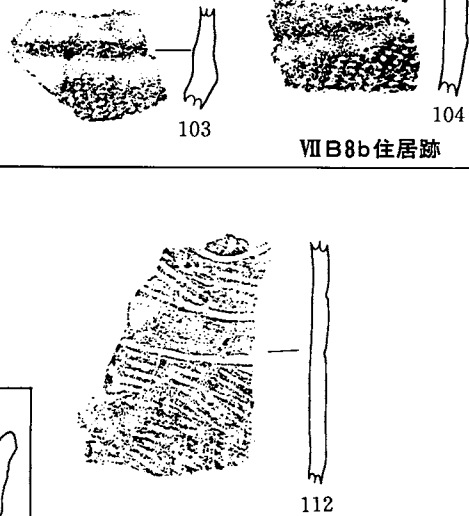
VII B 3 a 住居跡



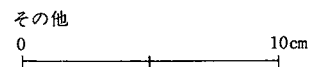
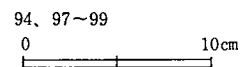
VII B 8 b 住居跡



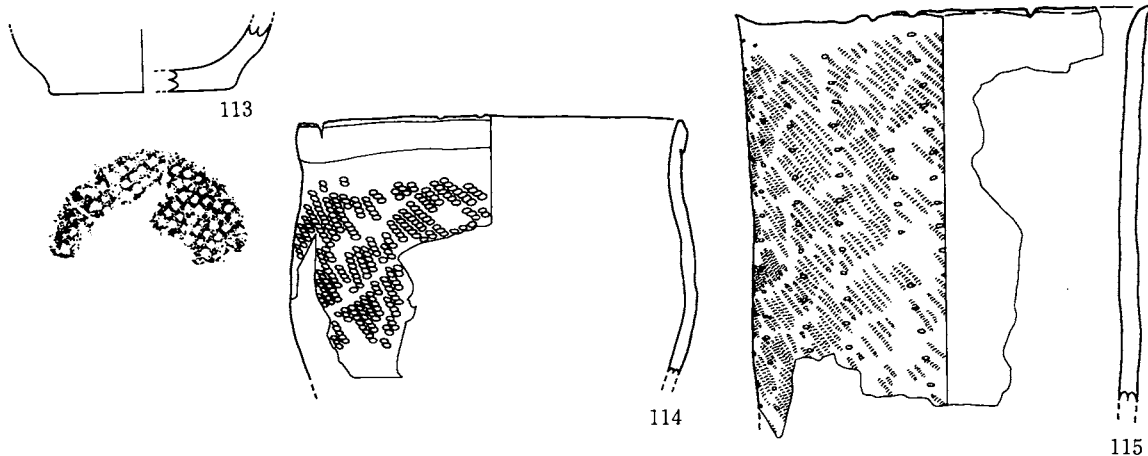
VII B 0 b 住居跡



VII C 1 b 住居跡



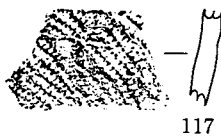
第63図 遺構内出土遺物 7 VII A 0 d 住居跡、VII B 2 a-1 住居跡、VII B 3 a 住居跡、VII B 8 b 住居跡、VII B 0 b 住居跡、VII C 1 b 住居跡



VII C 3 f 住居跡



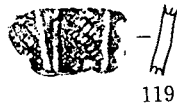
116



117

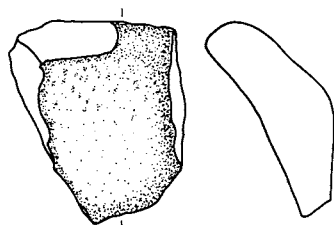


118



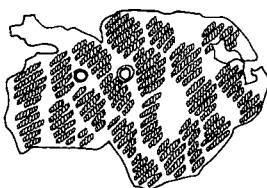
119

VII C 5 f 住居跡



120

VII C 7 b 豎穴状遺構



124



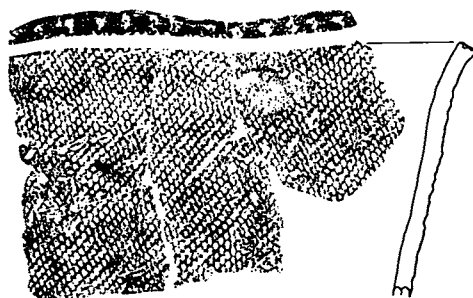
125



126



121

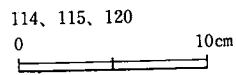


123

VII B 1 c 豎穴状遺構(1)

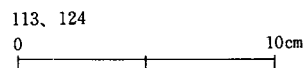


122



114、115、120

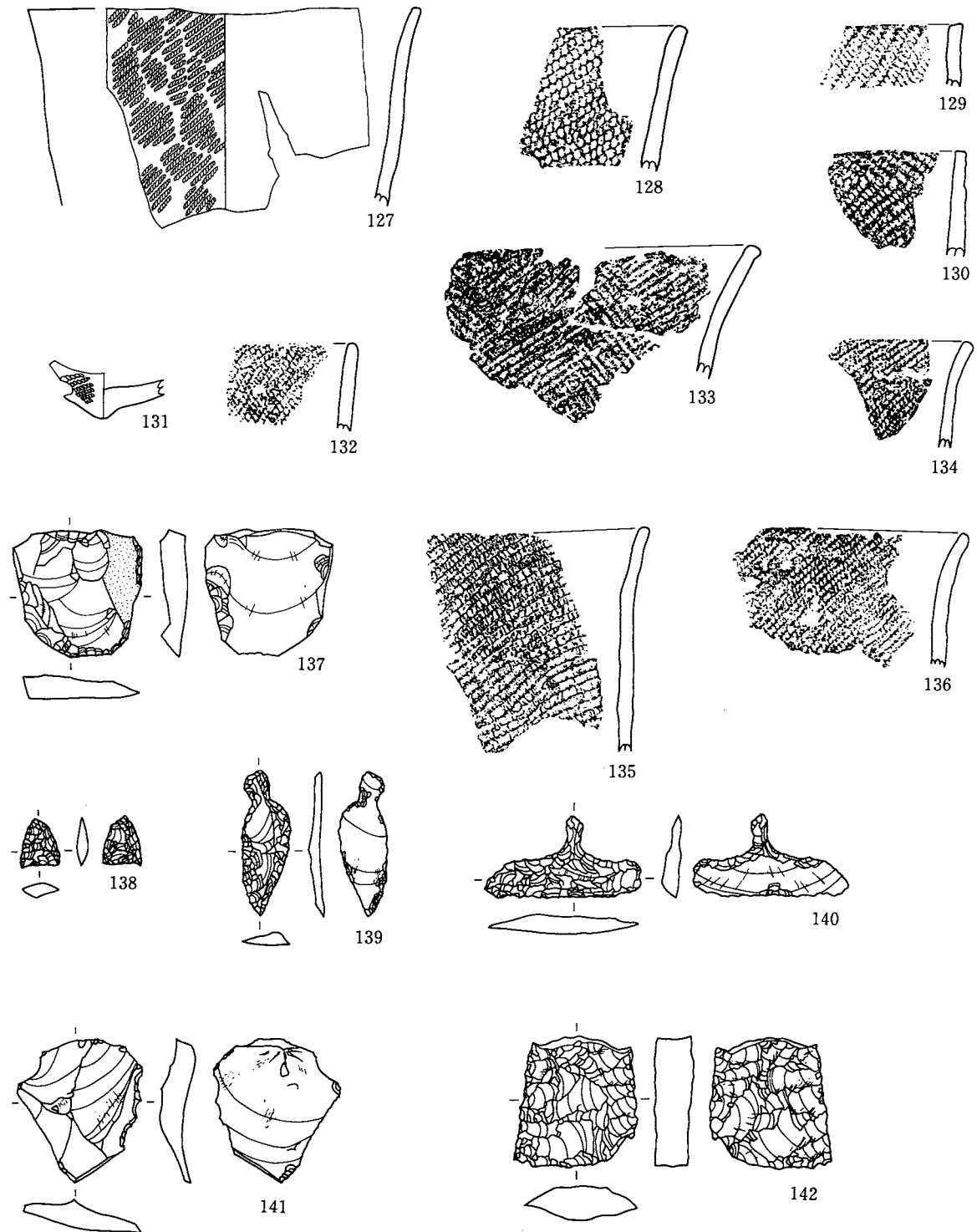
0 10cm



113、124

0 10cm

第64図 遺構内出土遺物 8 VII C 3 f 住居跡、VII C 5 f 住居跡、VII C 7 b 豎穴状遺構、VII B 1 c 豎穴状遺構(1)



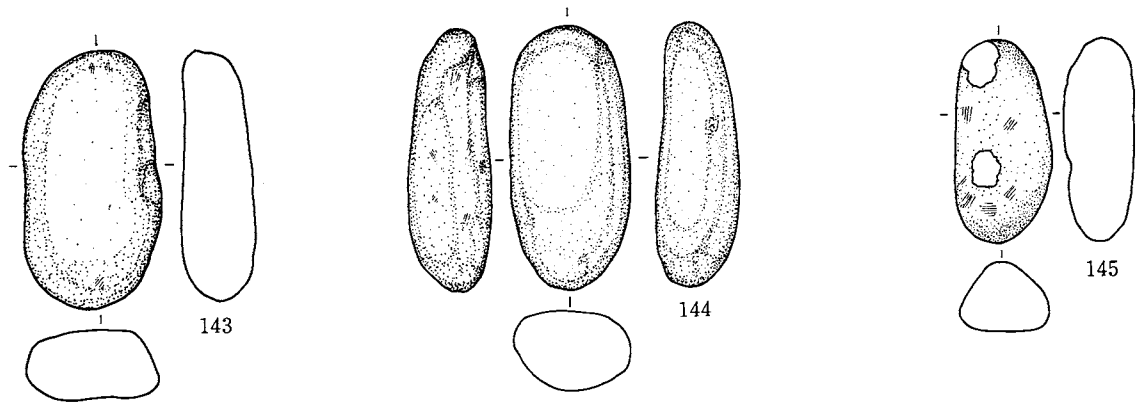
127
0 10cm

131, 135, 138~142
0 5cm

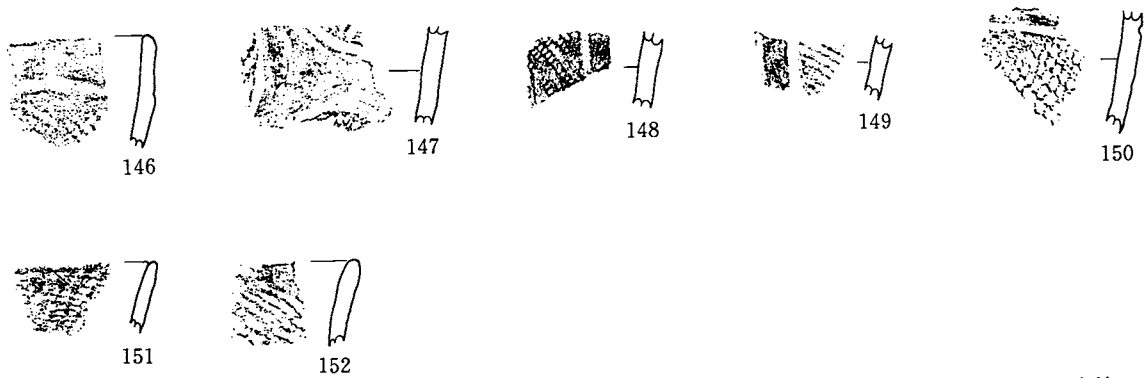
128~130, 132~134, 136, 137
0 10cm

VII B 1 c 豎穴状遺構(2)

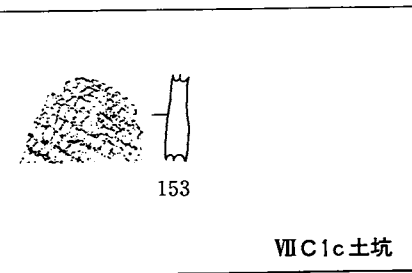
第65図 遺構内出土遺物 9 VII B 1 c 豎穴状遺構(2)



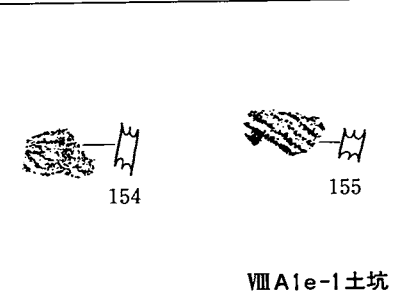
VII B 1 c 竖穴状遗构(3)



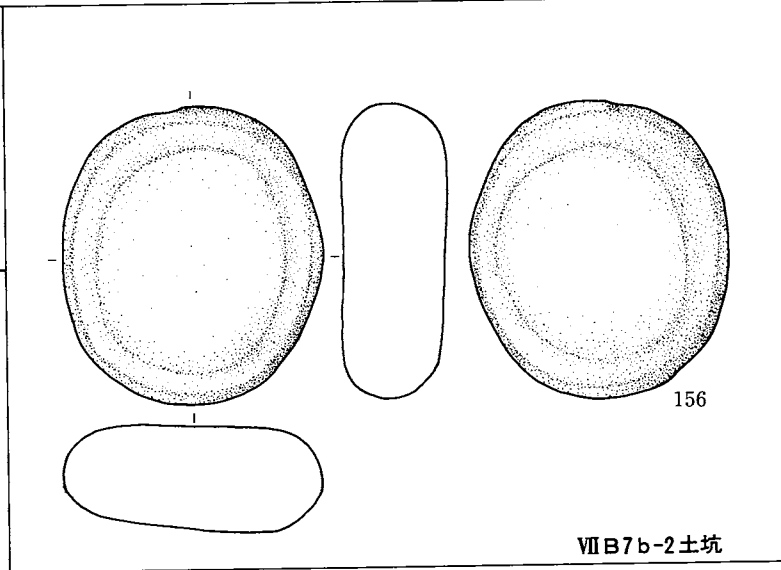
VIC 9 b 土坑



VII C 1 c 土坑



VIII A 1 e-1 土坑

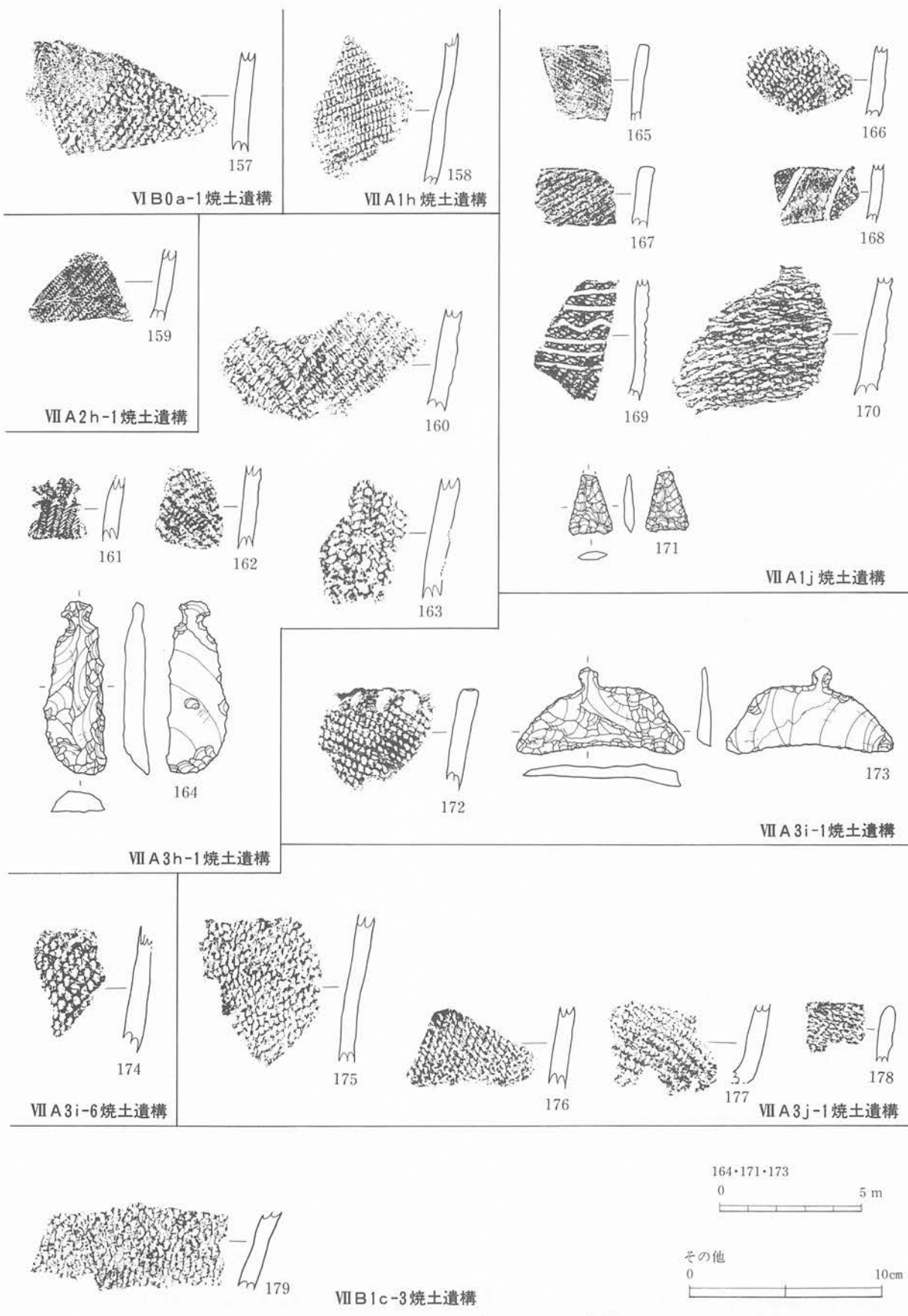


VII B 7 b-2 土坑

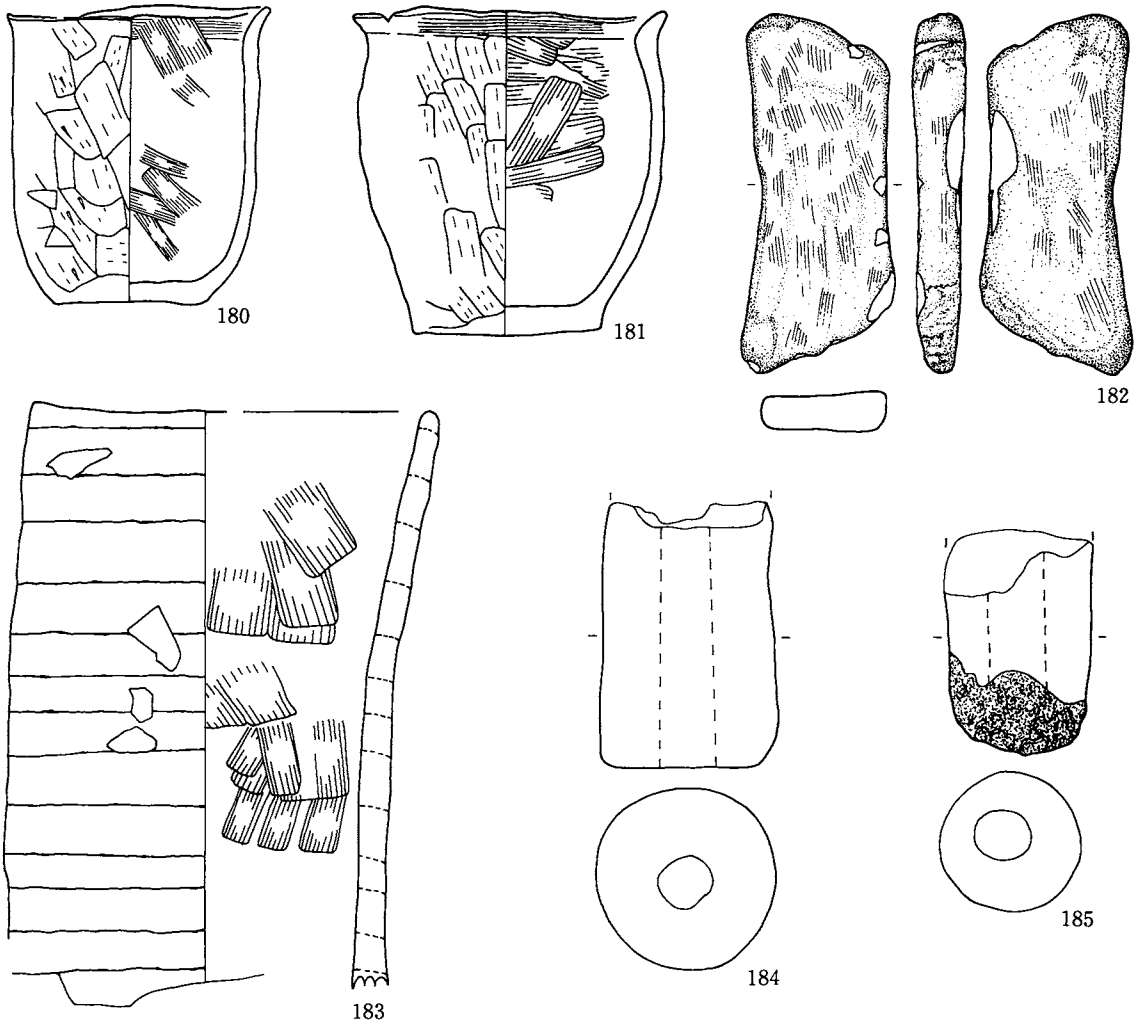
143~145、156
0 10cm

0 10cm

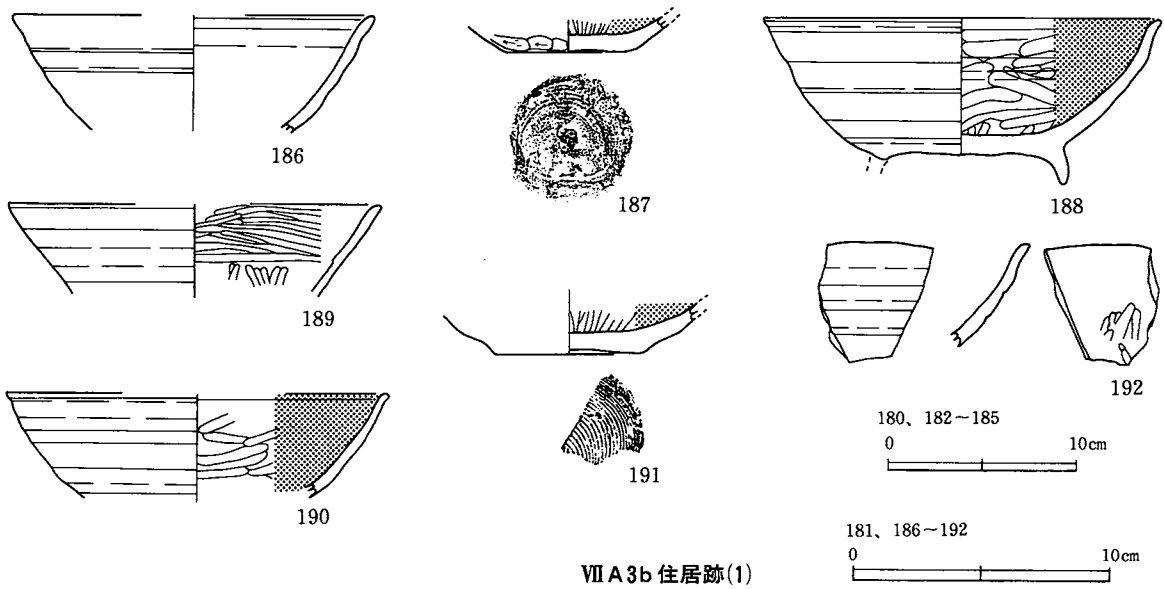
第66图 遺構内出土遺物 10 VII B 1 c 竖穴状遺構(3)、VIC 9 b 土坑、VII C 1 c 土坑、VIII A 1 e-1 土坑、VII B 2 b-2 土坑



第67図 遺構内出土遺物11 焼土遺構

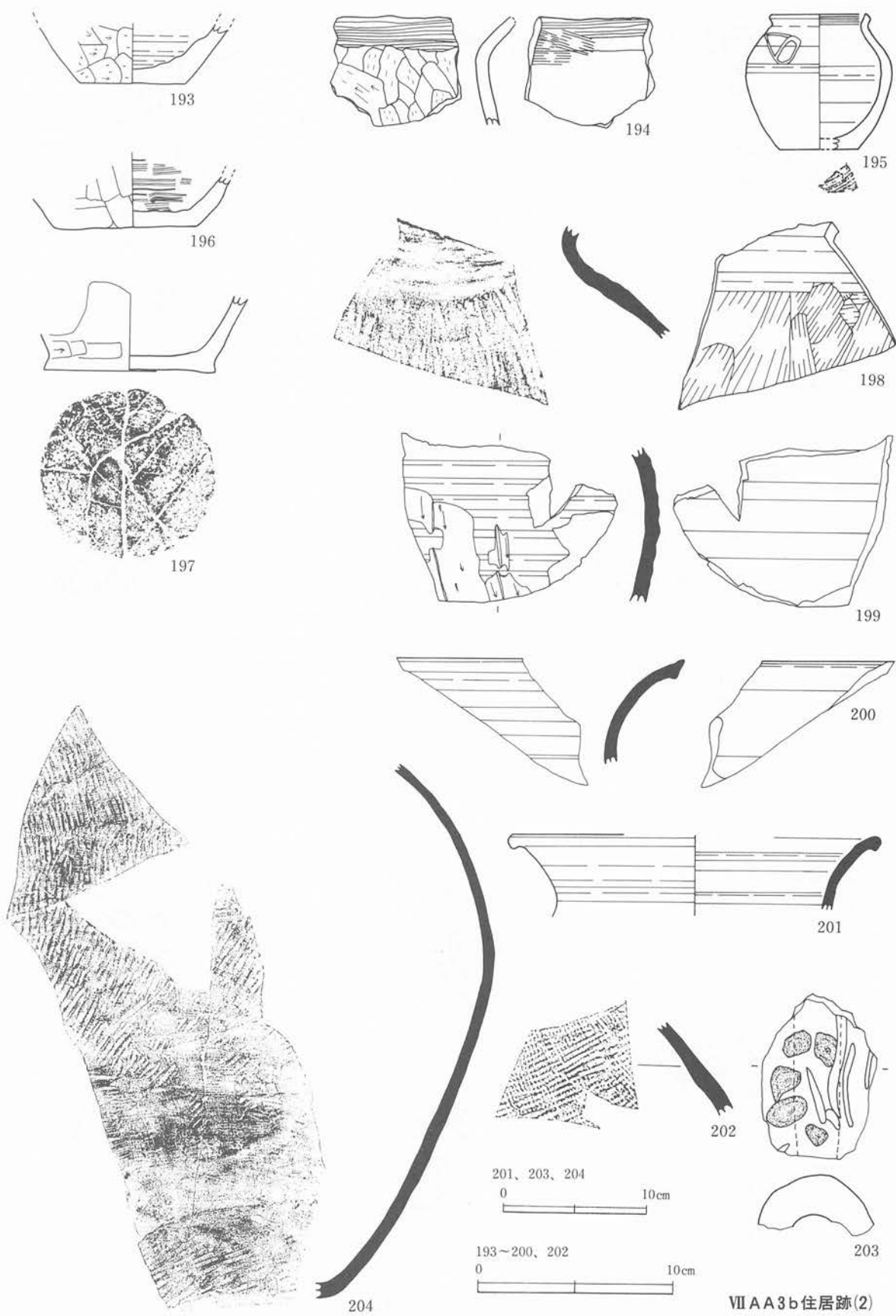


II B4h 住居跡

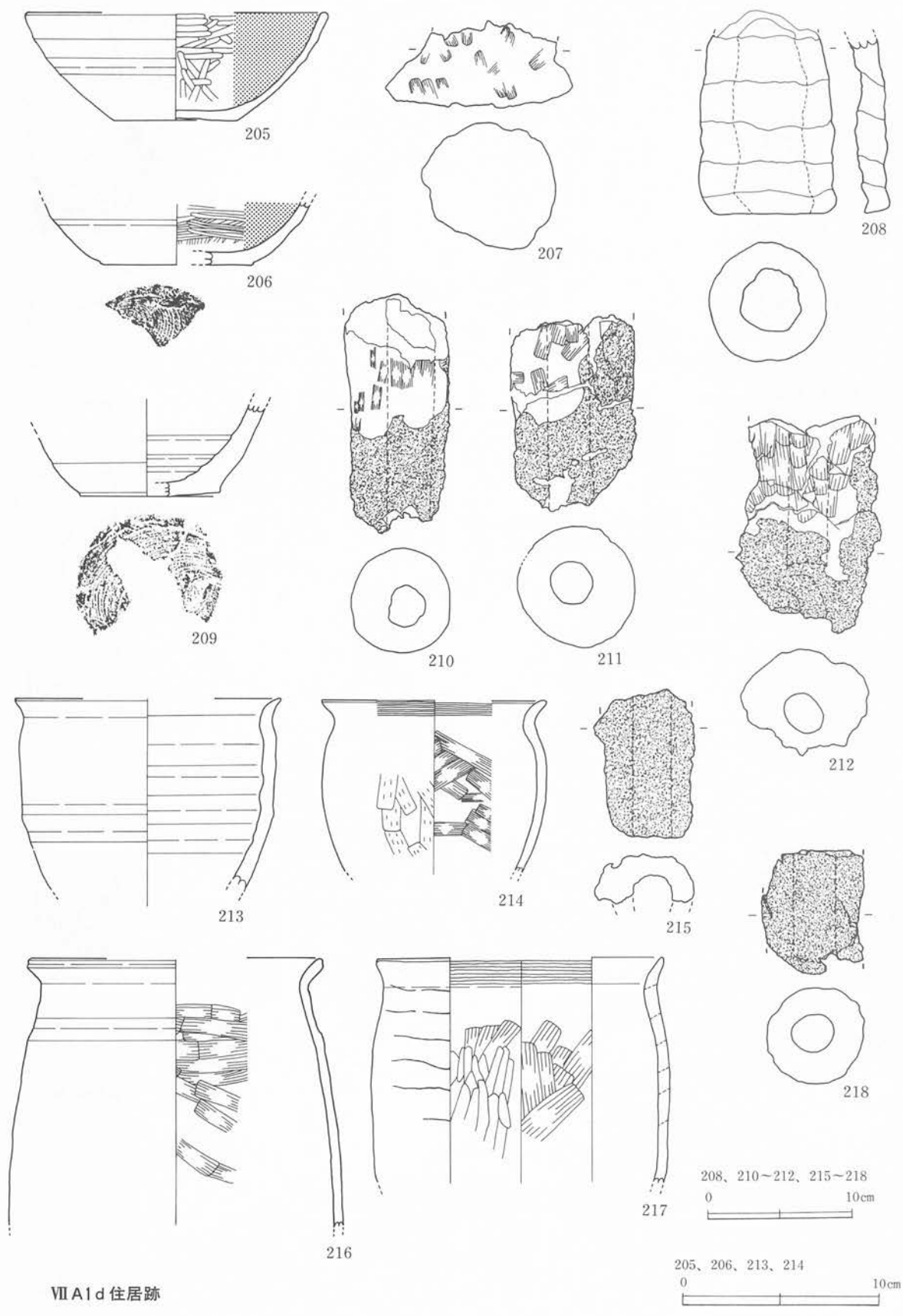


VII A3b 住居跡(1)

第68図 遺構内出土遺物12 II B 4 h 住居跡、VII A 3 b 住居跡(1)

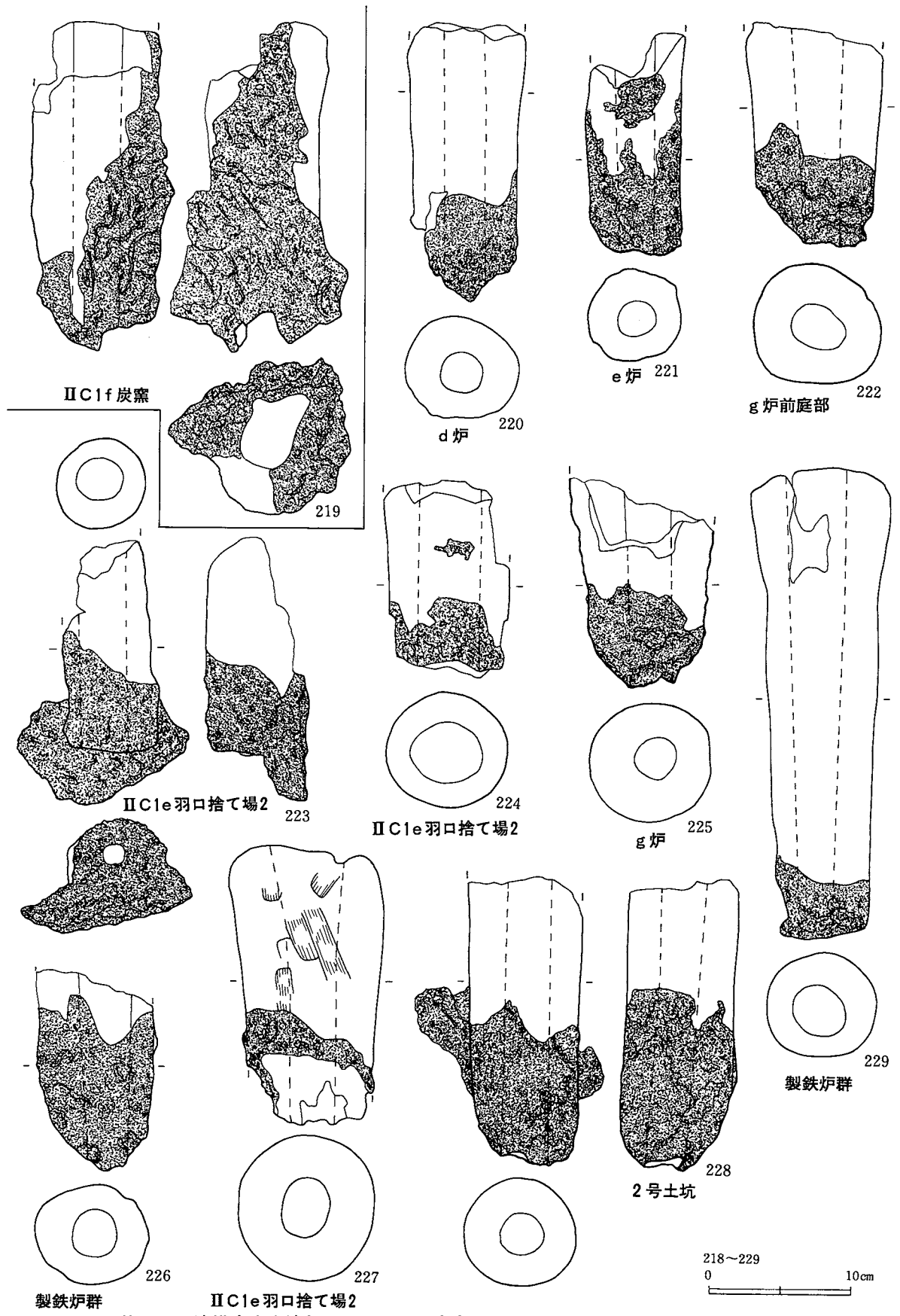


第69図 遺構内出土遺物13 VII A 3 b住居跡(2)



VII A 1 d 住居跡

第70図 遺構内出土遺物14 VIII A 1 d 住居跡



第71図 遺構内出土遺物15 II C 1 f 炭窯、II C 2 e 製鉄炉群、II C 1 d 羽口捨て場2

第5表 遺構内出土遺物観察表(1) 土器(縄文時代)

図版No	出土地点	層位等	器種	文様・胎土等	分類
1	VIB 8 j 住居跡	床面	深鉢	LR 沈線による区画 刺突	IV 4 a
2	VIB 8 j 住居跡	埋設	深鉢	RL縦 底部 網代痕	IV 5
3	VIB 8 j 住居跡	埋土	深鉢	渦巻状突起	IV
4	VIB 8 j 住居跡	埋土	深鉢	LR縦 浅い沈線 波状口縁	IV 3 b
5	VIB 8 j 住居跡	埋土	深鉢	LR斜め 浅い沈線による口縁部外反	IV 3 b
6	VIB 8 j 住居跡	埋土	深鉢	LR L 0 段多条縦	IV 5
7	VIB 8 j 住居跡	埋土	深鉢	RL沈線	IV 3
8	VIB 8 j 住居跡	埋土	深鉢	波状口縁	IV 3 か
9	VIB 8 j 住居跡	埋土	深鉢	RL R縦 斜め 沈線	IV 3
10	VIB 8 j 住居跡	埋土	深鉢	RL縦 縦方向の沈線による区画	IV 3
11	VIB 8 j 住居跡	埋土	深鉢	RL R縦 口縁部外反	IV 5
13	VIB 0 j 住居跡	床面 炉	深鉢	LR縦 粗製91と同一個体	IV 5
14	VIB 0 j 住居跡	床面 炉	深鉢	LR縦 90と同一個体 粗製	IV 5
15	VIB 0 j 住居跡	埋土	深鉢	沈線	IV 4 a か
16	VIB 0 j 住居跡	埋土	深鉢	無文帯に刺突	IV 4
17	VIB 0 j 住居跡	埋土	深鉢	LR 沈線による区画内を充填	IV 3
18	VIB 0 j 住居跡	埋土	浅鉢	頸部に隆帯 口唇部無文磨き 沈線による区画内をLRで充填	IV 4 a
19	VIB 0 j 住居跡	炉	深鉢	粗製 LR縦 口縁部で少しすぼまる	IV 5
20	VIB 0 j 住居跡	埋土	深鉢	口縁部無文帯	IV 4 か
21	VIB 0 j 住居跡	埋土	深鉢	口縁部無文帯	IV 4 か
22	VIB 0 j 住居跡	埋土	深鉢	LR縦 口唇部やや外反	IV 5
23	VIC 7 d 住居跡	埋土	深鉢	3本単位の沈線 RL縦 2本単位の波状口縁	IV 2 b
24	VIC 7 d 住居跡	埋土	深鉢	RL 繊維	IV
25	VIC 7 a 住居跡	埋土	深鉢	口縁部に断面三角形の隆帯	IV 4
26	VIC 7 a 住居跡	埋土	深鉢	RL Rと沈線	IV 3 か 4
27	VIC 7 a 住居跡	埋土	深鉢	RL Rと沈線	IV
30	VIC 0 a-1 住居跡	埋土 炉跡付近	深鉢	断面三角形の隆帯による区画内をLRで充填	IV 4 b
31	VIC 0 a-1 住居跡	埋土 炉跡付近	深鉢	断面三角形の隆帯による区画内 LRで施文	IV 4 b
32	VIC 0 a-1 住居跡	埋土 炉跡付近	深鉢	断面三角形の隆帯による区画内 LRで施文	IV 4 b
33	VIC 0 a-1 住居跡	埋土 下位	深鉢	隆帯による円文に円形刺突	IV 4 b
34	VIC 0 a-1 住居跡	埋土 炉跡付近	深鉢	断面三角形の隆帯による区画	IV 4 b
35	VIC 0 a-1 住居跡	埋土	深鉢	断面三角形の隆帯	IV 4 b
36	VIC 0 a-1 住居跡	埋土	深鉢	断面三角形の隆帯と無文帯で区画 LRで充填	IV 4 b
37	VIC 0 a-1 住居跡	炉跡付近	深鉢	網代痕	IV
38	VIC 0 a-1 住居跡	埋土	深鉢	LR 沈線による区画内を充填	IV 3 か 4
39	VIC 0 a-1 住居跡	埋土	深鉢	LR縦 沈線	IV 3 か
40	VIC 0 a-1 住居跡	埋土 南北ベルト	深鉢	LR 0 段多条 浅い沈線	IV 4
41	VIC 0 a-1 住居跡	埋土	深鉢		IV 3 か
42	VIC 0 a-1 住居跡	埋土	深鉢	渦巻状突起	IV
43	VIC 0 a-1 住居跡	埋土	深鉢	刺突	IV
44	VIC 0 a-1 住居跡	埋土	深鉢	網代痕	IV
45	VIC 0 a-1 住居跡	埋土	深鉢	LR縦 無文帯との境に刺突文	IV 4
46	VIC 0 a-1 住居跡	埋土	深鉢	LR縦 沈線	IV 3
47	VIC 0 a-1 住居跡	埋土 下位	深鉢	RL浅い沈線による区画内を充填	IV 4 a
48	VIC 0 a-1 住居跡	埋土	深鉢	L無筋か 断面三角形の隆帯上に刺突	IV 4 b
49	VIC 0 a-1 住居跡	埋土 南北ベルト	深鉢	RL縦 口縁部に横位沈線 浅い沈線による区画	IV 4 a
50	VIC 0 a-1 住居跡	埋土 南北ベルト	深鉢	RL縦 口縁部に横位沈線 浅い沈線による区画	IV 4 a
51	VIC 0 a-1 住居跡	埋土 下位	深鉢	RL縦 沈線	IV 4 a
52	VIC 0 a-1 住居跡	埋土	深鉢	連続刺突	IV 4
53	VIC 0 a-1 住居跡	埋土	深鉢	RL縦 口縁部やや外反	IV 5
54	VIC 0 a-1 住居跡	埋土	深鉢	沈線	IV 3
55	VIC 0 a-1 住居跡	埋土	深鉢	断面三角形の隆帯	IV 4 か
56	VIC 0 a-1 住居跡	埋土	深鉢	LR 沈線による区画内を施文	IV 3
57	VIC 0 a-1 住居跡	埋土	深鉢	LR縦 沈線	IV 4 a
64	VIC 0 a-2 住居跡	埋土	深鉢	浅い沈線	IVか
65	VIC 0 a-2 住居跡	埋土	深鉢	LR縦 断面三角形の隆帯	IV 4 b
66	VIC 0 a-2 住居跡	埋土	深鉢	LR縦 断面三角形の隆帯	IV 4 b

図版No	出土地点	層位等	器種	文 様 ・ 胎 土 等	分 類
67	VIC 0 a - 2 住居跡	埋土	深鉢	L R 縦 口縁部無文やや外反	IV 5
69	VIC 0 b 住居跡	炉跡	深鉢	L R 縦 沈線による区画内充填	IV 3 b
70	VIC 0 b 住居跡	炉跡	深鉢	L R 縦 沈線による区画	IV 3 b
71	VII A 1 e - 1 住居跡	埋土	深鉢	R L 縦 施文後沈線で区画隆帯による渦巻文が口縁の上に突出5単位か	IV 3 a
72	VII A 1 e - 1 住居跡	埋土	深鉢	R L R 縦 波状口縁 粗製	IV 5
73	VII A 1 e - 1 住居跡	IV層	深鉢	R L 縦 沈線文	IV 2
75	VII A 1 e - 1 住居跡	埋土上層	深鉢	波状口縁5単位 L R 横 口縁部磨き	V
76	VII A 1 e - 2 住居跡	床面	深鉢	L R L 縦	IV
77	VII A 1 e - 2 住居跡	床面	深鉢	L R 縦 沈線	IV 3 か 4
78	VII A 1 e - 2 住居跡	床面	深鉢	L R 縦 内湾	IV
79	VII A 3 i 住居跡	埋土	深鉢	口縁部無文帯 沈線による区画 波状口縁	IV 4 か
80	VII A 3 i 住居跡	床面	深鉢	組縄 B L 回り 複節 口唇部内側に爪形状刺突 繊維	II 2 か
81	VII A 3 i 住居跡	床面	深鉢	口縁部文様帯に瓦ぶき状捺糸文 体部 R L R 横回転 繊維	II 18 a
82	VII A 8 i 住居跡	床面	深鉢	断面三角形の隆帯による区画ないを L R で充填	IV 4 b
83	VII A 8 i 住居跡	炉跡埋設	深鉢	断面三角形の隆帯とそれに伴う沈線で区画 R L で充填	IV 4 b
88	VII A 0 C 住居跡	埋土	深鉢	L R 縦 浅い沈線と磨きによる無文帯	IV 4 か
89	VII A 0 C 住居跡	埋土	深鉢	口縁部無文帯	IV
90	VII A 0 C 住居跡	埋土	深鉢	口縁部無文帯	IV
91	VII A 0 C 住居跡	埋土 一括	深鉢	L R 縦 粗製	IV 5
92	VII A 0 d 住居跡	埋土	深鉢	捺糸文	
93	VII A 0 d 住居跡	埋土	深鉢	沈線による区画	IV 3
95	VII B 2 a - 1 住居跡	埋土	深鉢	L R 縦 浅い隆沈線	IV 2
96	VII B 2 a - 1 住居跡	埋土	深鉢	L R 横 0 段多条 繊維	II 9
100	VII B 8 b 住居跡	埋土	深鉢		IV
101	VII B 8 b 住居跡	埋土	深鉢	L R 充填 断面三角形の隆帯	IV 4 b
102	VII B 8 b 住居跡	埋土	深鉢	隆帯上に刺突	IV 4
103	VII B 8 b 住居跡	埋土	深鉢	R L 断面三角形の隆帯	IV 4 b
104	VII B 8 b 住居跡	埋土	深鉢	R L 縦 断面三角形の隆帯	IV 4 b
105	VII B 0 b 住居跡	埋土	深鉢		V
106	VII B 0 b 住居跡	埋土	深鉢		V
107	VII B 0 b 住居跡	埋土	深鉢	L 無筋か? 粗製	IV 5 か
108	VII B 0 b 住居跡	埋土	深鉢		V
109	VII B 0 b 住居跡	埋土	深鉢		V
110	VII B 0 b 住居跡	埋土	深鉢	L 無筋か? 粗製	IV 5 か
111	VII B 0 b 住居跡	埋土	深鉢	L 無筋か? 粗製	IV 5 か
112	VII C 1 b 住居跡	埋土	深鉢	浅い沈線による区画 無筋 L で施文	IV 4 a
113	VII C 3 f 住居跡	床面	深鉢	底部に網代痕	IV か
114	VII C 3 f 住居跡	床面	深鉢	L R 縦 口縁部折り返し	IV
115	VII C 3 f 住居跡	床面	深鉢	体部下半に最大径 L 無筋縦	IV
116	VIC 7 b 竪穴状遺構	埋土	深鉢	キャリバー型 渦巻状文 隆帯 R L 横	IV 2 c
117	VII C 5 f 住居跡	埋土	深鉢	L R 縦	IV
118	VII C 5 f 住居跡	埋土	深鉢	L R 縦	IV
119	VII C 5 f 住居跡	埋土	深鉢	L R 縦 縦方向の沈線による区画	IV
121	VII B 1 c 竪穴状遺構	床面	深鉢	組縄 B 複節 L 回り 口唇部原体押圧 0 r 回転 繊維極多	II 2
122	VII B 1 c 竪穴状遺構	床面	深鉢	L R 横 口唇部原体回転 繊維多	II 9
123	VII B 1 c 竪穴状遺構	床面	深鉢	組縄 B 口唇部原体末端圧痕 繊維多	II 2
124	VII B 1 c 竪穴状遺構	埋土	深鉢	組縄 B 単節 L 回り 補修孔 繊維多	II 2
125	VII B 1 c 竪穴状遺構	床面	深鉢	組縄 B L 回り複節 繊維 低い山形口縁か?	II 2
126	VII B 1 c 竪穴状遺構	床面	深鉢	結束のある羽状 L R, R L の縦回転か? 金雲母 繊維	II 12
127	VII B 1 c 竪穴状遺構	埋土	深鉢	組縄 B 複節 L 回り 繊維多	II 2
128	VII B 1 c 竪穴状遺構	埋土	深鉢	組縄 B 単節 L 回り 繊維	II 2
129	VII B 1 c 竪穴状遺構	埋土	深鉢	L R 横 0 段多条 繊維	II 9
130	VII B 1 c 竪穴状遺構	埋土	深鉢	結束ある羽状 (R L + L R) 横回転 繊維多 0 段多条か?	II 12
131	VII B 1 c 竪穴状遺構	埋土	深鉢	組縄 B 単節 L 回り 尖底 繊維	II 2
132	VII B 1 c 竪穴状遺構	埋土	深鉢	L R 横 繊維少	II 9
133	VII B 1 c 竪穴状遺構	埋土	深鉢	結束のない羽状 L R 横 + R L 横 繊維多	II 11
134	VII B 1 c 竪穴状遺構	埋土	深鉢	L R 横 繊維多	II 9
135	VII B 1 c 竪穴状遺構	埋土	深鉢	前々段反捺 L R R 繊維多	II 8
136	VII B 1 c 竪穴状遺構	埋土	深鉢	L R 横 繊維多	II 9

図版No	出土地点	層位等	器種	文 様 ・ 胎 土 等	分 類
146	VIC 9 b 土坑	埋土	深鉢	L R 縦 口縁部無文帯	IV 4 a
147	VIC 9 b 土坑	埋土	深鉢	R L R 沈線	IV 3 か
148	VIC 9 b 土坑	埋土	深鉢	L R 縦 沈線	IV 3
149	VIC 9 b 土坑	埋土	深鉢	R L 0 段多条 沈線	IV 3
150	VIC 9 b 土坑	埋土	深鉢	R L R 縦 沈線	IV 3
151	VIC 9 b 土坑	埋土	深鉢	R L 縦	IV 5
152	VIC 9 b 土坑	埋土	深鉢	無節 L	IV 5
153	VIC 1 c 土坑	埋土	深鉢	L R 縦 粗製	IV か
154	VII A 1 e - 1 土坑	埋土	深鉢	L R	IV
155	VII A 1 e - 1 土坑	埋土	深鉢	L R	IV
157	VIB 0 a - 1 焼土遺構	焼土	深鉢	組紐 B 複節か L 回転 繊維	II 2
158	VII A 1 h 焼土遺構	焼土	深鉢	L R 横回転 O 段多条 繊維多	II 9
159	VII A 2 h - 1 焼土遺構	焼土	深鉢	L R 0 段多条横回転か? (開いた端の結束) の線織り 繊維少	II 9
160	VII A 3 h - 1 焼土遺構	焼土	深鉢	結束のない羽状菱形か? L R (0 段多条) R L (0 段多条) 横回転 繊維	II 11
161	VII A 3 h - 1 焼土遺構	焼土	深鉢	縄の束 R と L 0 段多条 繊維多	II 4
162	VII A 3 h - 1 焼土遺構	焼土	深鉢	結束のない羽状 R L 横 + 縦回転 0 段多条 繊維	II 11
163	VII A 3 h - 1 焼土遺構	焼土	深鉢	組紐? 横回転 繊維	II 3 か
165	VII A 1 j 焼土遺構	焼土	深鉢	表裏に条痕文 金雲母含む	I 2 a
166	VII A 1 j 焼土遺構 床直	焼土	深鉢	L R 横 繊維	II 9
167	VII A 1 j 焼土遺構	焼土	深鉢	L R 0 段多条 横回転 繊維	II 9
168	VII A 1 j 焼土遺構	焼土	深鉢	沈線による区画 L R 縦	IV 3
169	VII A 1 j 焼土遺構	焼土	深鉢	R L 縦 沈線	IV 2
170	VII A 1 j 焼土遺構	焼土	深鉢	不整然糸 体部まで広がる 繊維	II 14
172	VII A 3 i - 1 焼土遺構	焼土	深鉢	R L R 横 口唇部外側爪形の丘痕 繊維	II 10
174	VII A 3 i - 6 焼土遺構	焼土	深鉢	組紐 B 複節 L 回転 繊維	II 2
175	VII A 3 j - 1 焼土遺構	焼土	深鉢	組紐 A 複節 L 回転 繊維多	II 2
176	VII A 3 j - 1 焼土遺構	焼土	深鉢	L R 横 0 段多条 繊維多	II 9
177	VII A 3 j - 1 焼土遺構	焼土	深鉢	R L 横回転 繊維多	II 9
178	VII A 3 j - 1 焼土遺構	焼土	深鉢	口縁部 擦糸 L 繊維	II 18 b
179	VII B 1 C - 3 焼土遺構	焼土	深鉢	組紐 B L 回り 単節 繊維	II 2

第 6 表 遺構内出土遺物観察表(2) 石器、石製品

図版No	出土地点	層位	器種	長さ	幅	厚さ	質量	石 質	産地、生成年代	特 徴	分類
12	VII B 8 j 住居跡	埋土	石匙	2.7	4.8	0.5	5.7	流紋岩質細粒凝灰岩	北上山地 古生界		B1a
28	VIC 7 a 住居跡	不明	磨石	11.8	8.9	5.9	925	花崗閃緑岩	山田・重茂 中世界		
29	VIC 7 a 住居跡	不明	磨石	12.5	8.4	6.7	1120	閃緑岩	山田・重茂 中世界		
58	VIC 0 a - 1 住居跡	埋土	石錐	2.9	1.9	0.6	2.3	粘板岩	北上山地 古生界		A1b4
60	VIC 0 a - 1 住居跡	埋土	不定形石器	5	2.5	0.4	6.3	流紋岩質細粒凝灰岩	北上山地 古生界		
61	VIC 0 a - 1 住居跡	埋土	石斧	6.7	3.7	1.4	57.7	玄武岩質凝灰岩	北上山地 古生界		
62	VIC 0 a - 1 住居跡	柱穴埋土	石皿	7.4	10.8	5.3	280	輝石安山岩熔岩	岩手火山 第四期		
63	VIC 0 a - 1 住居跡	埋土	磨石	10.5	9.2	8.4	1110	花崗閃緑岩	山田・重茂 中世界		
68	VIC 0 a - 2 住居跡	埋土	石皿	28.6	22	6.9	5130	凝灰質砂岩	三陸海岸 古生界		
74	VII A 1 e - 1 住居跡	埋土	磨石	(8.7)	7.2	3.9	(332)	花崗閃緑岩	周辺 中生界	欠損	
84	VII A 8 i 住居跡	埋土	磨石	12.9	7.9	5.1	830	花崗閃緑岩	山田・重茂 中世界		
85	VII A 8 i 住居跡	埋土	石皿	26.1	19.5	7.7	5120	花崗閃緑岩	山田・重茂 中世界		
86	VII A 8 i 住居跡	埋土	石皿	5.2	2	9.8	5960	閃緑岩	山田・重茂 中世界		
87	VII A 8 i 住居跡	埋土	石皿	21.6	16.9	6.7	5000	花崗閃緑岩	山田・重茂 中世界		
94	VII A 0 d 住居跡	床面	磨石	7.6	5.5	3	185	花崗閃緑岩	北上山地 中生界		
97	VII B 2 a - 1 住居跡	埋土	磨石、敲石	12.8	5.3	3.5	380	花崗閃緑岩	周辺 中生界	一部に敲打痕	
98	VII B 3 a 住居跡 炉付近	床面	磨石	7.7	5.3	5.1	278	花崗閃緑岩	北上山地 中生界		
99	VII B 3 a 住居跡 炉わき炭	床面	敲石	(5.4)	(5.1)	(3.4)	(90)	花崗閃緑岩	周辺 中生界	欠損	
120	VII C 7 b 竪穴状遺構	埋土	石皿	10.7	8.9	4.4	510	凝灰質砂岩	三陸海岸 古生界		
137	VII B 1 c 竪穴状遺構	床面	擲器	4	4.2	0.8	16.4	粘板岩	北上山地 中生界	自然面残る	
138	VII B 1 c 竪穴状遺構	埋土	石錐	1.6	1.3	0.5	0.5	凝灰質粘板岩	北上山地 古生界	先欠浅い凹基	0Ab
139	VII B 1 c 竪穴状遺構	埋土	石匙	4.6	1.6	0.5	2.9	凝灰質粘板岩	北上山地 古生界		A1b7
140	VII B 1 c 竪穴状遺構	埋土	石匙	2.4	4.9	0.6	5.3	粘板岩	北上山地 古生界		B2a

141	VII B 1 c 竪穴状遺構	埋土	不定形	4,5	3,9	1,1	10,8	泥灰質粘板岩	北上山地 古生界	1 側縁を加工	
142	VII B 1 c 竪穴状遺構	埋土	尖頭器か	(4,2)	4,4	1,3	(23,7)	チャート質粘板岩	北上山地 古生界	基部、先端欠損	
143	VII B 1 c 竪穴状遺構	床面	磨石	13,5	7,2	4,2	630	花崗閃緑岩	周辺 中生界		
144	VII B 1 c 竪穴状遺構	埋土	磨石	14	6,3	4,3	555	花崗閃緑岩	北上山地 古生界	側縁の磨痕が最も顕著、ほぼ全面使用	
145	VII B 1 c 竪穴状遺構	埋土	磨石	10,7	5,2	4,8	278	花崗閃緑岩	周辺 中生界		
156	VII B 7 b - 2 土坑	不明	磨石	15,6	13,9	5,5	2030	花崗閃緑岩	山田・重茂 中世界		
164	VII A 3 h - 1 焼土遺構	埋土	石匙	(6,1)	2,2	0,9	9,9	粘板岩	北上山地 古生界		A2
171	VII A 1 j 焼土遺構	焼土	石匙	2,2	1,6	0,4	(1)	粘板岩	北上山地 古生界	先端欠基部両端欠浅い凹基	0Ab
173	VII A 3 i 焼土遺構	VI層	石匙	3,1	5,9	0,8	8	粘板岩	北上山地 古生界	打点はつまみに直交	B2c
182	II B 4 h 住居跡	床面	砥石	19,8	8,3	1,8	440		北上山地 古世界		

第7表 遺構内出土遺物観察表(3) 土師器

図版No.	出土位置	属位	器種	外面調整		内面調整		法 量 (cm)			備考	
				口縁部	体部	口縁部	体部	口径	底径	器高		
180	II B 4 h 住居跡	床面	甕	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	15,1	8,2	15,3	無	胎土に砂粒を多く含む
181	II B 4 h 住居跡	床面	甕	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ナデ	11,8~12,6	7,4	13,2	無	底部木葉痕の上からナデ、口縁部外面積み痕、胎土に砂粒を多く含む
183	II B 4 h 住居跡	床面カマド袖	製塩土器か			ナデ	ナデ	21,8	-	(30,8)	無	外面に輪積み痕が明瞭に残る
186	VII A 3 b 住居跡	カマド	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	推14,0	-	-	有	
187	VII A 3 b 住居跡	カマド	坏	-	-	-	底部ヘラミガキ	-	5,2	-	有	回転糸切り後、体部下端へ底部縁辺を手持ちヘラケズリ再調整
188	VII A 3 b 住居内土坑	埋土	高台付坏	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ	15,6	高台径7,9	6,7	有	回転ヘラ切り
189	VII A 3 b 住居跡	カマド	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	推14,7	-	-	有	被熱して赤化
190	VII A 3 b 住居内土坑	埋土	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	ヨコナデ	ヘラミガキ	推15,4	-	-	有	
191	VII A 3 b 住居跡	埋土	-	-	ロクロナデ	-	底部ヘラミガキ	-	推6,0	-	有	回転糸切り後無調整
192	VII A 3 b 住居跡	埋土	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ?	ヘラミガキ	-	-	-	有	内面黒色処理
193	VII A 3 b 住居跡	カマド焼土層	甕	-	ヘラケズリ	-	ロクロナデ	-	推5,4	-	有	
194	VII A 3 b 住居跡	埋土	甕	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	-	-	-	無	胎土に砂粒を多く含む
195	VII A 3 b 住居跡	埋土	小型甕	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	推4,9	4,1	推7,0	有	回転糸切り肩部にヘラ書きス(?)内外面上半に付着
196	VII A 3 b 住居内土坑	埋土	甕	-	ヘラケズリ	-	ハケ目	-	7,5	-	無	胎土に砂粒を多く含む
197	VII A 3 b 住居跡	埋土	甕	-	ヘラケズリ	-	ナデ	-	9,0	-	無	胎土に砂粒を多く含む
205	VII A 1 d 住居内土坑	埋土	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	推15,8	推6,4	5,7	有	回転糸切り無調整
206	VII A 1 d 住居跡	埋土	坏	-	ロクロナデ	-	ヘラミガキ	-	7,9	-	有	回転糸切り無調整
209	VII A 1 d 住居跡	埋土	甕	-	ロクロナデ	-	ロクロナデ	-	7,2	-	有	回転糸切り
213	VII A 1 d 住居 鍛冶炉前庭部	上面	甕	ロクロナデ	ロクロナデ	ヨコナデ	ロクロナデ	推13,8	-	-	有	体部中程に最大径
214	VII A 1 d 住居 鍛冶炉前庭部	上面	甕	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	推11,6	-	-	無	
216	VII A 1 d 住居跡	埋土	甕	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラナデ	推20,6	-	-	有	体部中程に最大径
217	VII A 1 d 住居内土坑	埋土	甕	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	推20,0	-	-	無	外面に輪積み痕が明瞭に残る

第8表 遺構内出土遺物観察表(4) 須恵器

図版No.	出土位置	属位	器種	外面調整		内面調整		法 量 (cm)			備考
				口縁部	体部	口縁部	体部	口径	底径	器高	
198	VII A 3 b 住居跡	床面	甕	ロクロナデ	平行タタキ目	ロクロナデ	-	-	-	-	口縁部~体部
199	VII A 3 b 住居跡	埋土	甕	-	ロクロナデカキメ	-	ロクロナデ	-	-	-	体部破片
200	VII A 3 b 住居跡	埋土	甕	ロクロナデ	-	ロクロナデ	-	-	-	-	口縁部
201	VII A 3 b 住居内土坑	埋土	甕	ロクロナデ	-	ロクロナデ	-	推26,2	-	-	口縁部
202	VII A 3 b 住居跡	埋土	-	-	平行タタキ目	-	-	-	-	-	体部
204	VII A 3 b 住居跡	カマド	甕	-	平行タタキ目カキメ	-	カキメ	-	-	-	タタキ目は体部上半と下端に施される

第9表 遺構内出土遺物観察表(5) 土製品(羽口を除く)

図版No.	出土位置	属位	種類	計 測 地 (cm)				調 整		備考
				残存長	幅	最大内径	最小内径	外面	内面	
184	II B 4 h 住居跡	カマド内	支脚	14,2	9,6	2,9	2,2	ナデ、オサエ	棒状工具痕	
207	VII A 1 d 住居跡	カマド内	支脚か	6,0	13,0	-	-	ナデ	-	
208	VII A 1 d 住居内土坑	埋土	支脚	14,2	9,6	5,3	4,0	ナデ、オサエ	ナデ、オサエ	内外面ともに輪積み痕が明瞭に残る

第10表 遺構内出土遺物観察表(6) 羽口

No.	出土地点	層位	残存部外径	残存長	最大内径	最小内径	外面調整	内面調整	残存位置	装着角度	備考
185	II B 4 h 住居跡	床面	7,9	12,0	3,2×3,0	3,0	ナデ	棒状工具痕	先端部	20°	熱変色、先端部溶着層下面平坦

203	VII A 3 b 住居跡	埋土	(8, 0)	11.4	—	—	棒状工具痕指頭痕	—	先端部	—	熱変色なし
210	VIII A 1 d 住居跡	不明	5.8~7.8	16.3	3.2×3.0	3.0	ナデ指頭痕	心棒引き抜き痕	先端部	30~32°	厚さ1.1~3.2cm 溶着滓、上面に木炭付着
211	VIII A 1 d 住居跡	不明	8.0~8.5	13.5	3.1	2.9×2.6	ナデ	心棒引き抜き痕	先端部	28~30°	先端部溶解、垂れ下がる。 下面に白色粒付着。 溶着滓、厚さ2.6~3.1cm
212	VIII A 1 d 住居跡	不明	8.2~8.8	21.0	—	2.7×2.4	ナデ	—	先端部	—	溶解して先端閉塞、上面に 木炭付着。溶着滓
215	VIII A 1 d 住居跡	不明	5.8~6.1	10.2	—	2.7	—	—	先端部破片	—	溶解した先端部上面に付着物
235	VIII A 1 d 住居跡	不明	—	4.2	—	—	—	—	先端部破片	—	先端部の溶解部分
219	II C 1 f 炭窯	埋土	7.9~8.0	22.1	4.0×2.9 (吸気部)	2.9×2.7 (先端部)	ナデ 指頭痕	太い(径0.8cm) の棒状工具痕1条	ほぼ完形	57°	溶着滓一部炉壁をかみ込む、 焼結砂鉄多量に付着、下面 となった面が2面うち1面に 焼結砂鉄
220	d 炉	埋土	7.0~7.5	19.5	3.0	3.0	ナデ	棒状工具痕1条	先端部	60°	溶着滓、上面焼結砂鉄付着、熱変色
221	e 炉	埋土	6.3~6.7	15.7	2.8	2.6	短い繊維 (スサカ)痕	心棒引き抜き痕	先端部破片	62°か	溶着滓、白色粒付着面1面そ の他平坦面(下面が2面 ある)焼結砂鉄付着面2面、2 回使用か
222	g 炉前庭部	埋土	7.9~8.9	15.5	3.7×2.9	—	ナデ 指頭痕3か所	棒状工具痕	先端部破片	20~35°	溶着滓、先端溶解し垂れる、 上面焼結砂鉄、下面白色粒 付着、熱変色
223	II C 1 e 羽口捨て場 2		6.5~6.9	18.1(14.6)	3.3×2.8	1.7×2.0	短い繊維 (スサカ)痕	心棒引き抜き痕	先端部破片	30°か	炉内流動滓付着、上面焼結 砂鉄、下面白色粒付着
224	II C 1 e 羽口捨て場 2		8.1~8.8	12.8	3.8	3.8	ナデ	心棒引き抜き痕	先端部付近破片	—	溶着滓、熱変色
225	g 炉前庭部	埋土	7.9~9.6	15.6	3.2×3.2	3.0×2.8	ナデ	心棒引き抜き痕	先端部破片	20°	溶着滓、上~側面に焼結砂 鉄、下面に白色粒付着
226	製鉄炉群 d 号炉北側	埋土	6.8~8.0	13.8	3.5×3.2	3.0	ナデ	心棒引き抜き痕	先端部破片	40°	溶着滓、上面焼結砂鉄付着、 下面に白色粒付着
227	II C 1 e 羽口捨て場 2		8.6~10.8	19.8	4.4(吸気部)	3.1×2.8(先端部)	ナデ	心棒引き抜き痕	ほぼ完形	27°	溶着滓、上面焼結砂鉄付着
228	2号土坑	埋土上層	7.3~7.8	20.4	3.2×2.9	3.1×2.6	ナデ	心棒引き抜き痕	先端部破片	50°	溶着滓、一部炉壁をかみ込む、 上面焼結砂鉄付着
229	製鉄炉群	掘込埋土	6.5~9.7	33.0	3.9(吸気部)	3.3×3.2	ナデ	心棒引き抜き痕	ほぼ完形	—	溶着滓、一部ガラス化、熱変色
	b 炉	埋土	7.0	9.4	2.9	—	—	—	先端部破片	—	焼結砂鉄付着、全体に還元色
229	c 炉	埋土	—	8.8	2.1	—	ナデ	心棒引き抜き痕	破片	—	厚い羽口、器厚3.9cm
	a 炉	埋土	—	8.4	2.6	2.5	—	棒状工具痕か	先端部上面破片	—	焼結砂鉄付着
	g 炉	埋土	7.7~8.5	18.2	3.1	3.1	—	心棒引き抜き痕	先端部破片	48°	溶着滓、上面焼結砂鉄付着、熱変色
	g 炉前庭部	埋土	6.3	9.8	2.9	2.8	ナデ	心棒引き抜き痕	破片	—	—
	g 炉前庭部	埋土	7.7~9.2	11.8	3.8	2.5×2.9	ナデ	棒状工具痕	先端部破片	40~55°	溶着滓、一部ガラス化、熱変色
	製鉄炉群	掘込埋土	—	8.0	3.0	2.8	ナデ	心棒引き抜き痕	先端部付近破片	—	熱変色
	製鉄炉群	掘込埋土	7.4~7.6	10.7	3.0	3.0	ナデ指頭痕1か所	心棒引き抜き痕	先端部付近破片	—	内面熱変色
	II C 1 e 羽口捨て場 1		6.1~7.5	16.0	3.0×2.6	3.2×3.0	—	棒状工具痕1条	先端部は辺	35~57°	溶着滓、下面に焼結砂鉄付 着、複数回使用か
	II C 1 e 羽口捨て場 1		7.1~8.4	11.9	4.1×3.6	1.8	—	—	先端部破片	22°か	上面と下面の厚さが極端に 異なる。上面厚3.7cm、下面 厚1.7cm、溶着滓、上面焼結 砂鉄付着、混入物なくきめ細 かい胎土
	II C 1 e 羽口捨て場 1		8.1	12.2	3.8	3.2×3.1	—	—	先端部破片	—	溶着滓、上面焼結砂鉄付着、 きめ細かい胎土
	II C 1 e 羽口捨て場 2		8.6~9.2	10.5	4.2×3.5	3.4×3.2	指頭痕	心棒引き抜き痕	破片	—	—
	II C 1 e 羽口捨て場 2		8.2~8.8	15.8	2.6	2.9	ナデ	心棒引き抜き痕	先端部付近破片	60~68°	熱変色、焼成良、やや硬質
	II C 1 e 羽口捨て場 2		8.6~9.1	18.0	2.9×2.5	3.1×2.9	ナデ	心棒引き抜き痕	先端部	32~45°	溶着滓、熱変色
	II C 1 e 羽口捨て場 2		8.1~8.6	14.2	3.7	3.6	—	—	先端部破片	—	細かい胎土、ひび割れ激しい
	I C 0 e 炭窯	埋土	8.3~8.5	9.3	3.6	3.6	—	—	先端部破片	—	溶着滓、一部ガラス化、軟質
	II C 1 c 炭窯	埋土	6.7~7.7	10.3(9.6)	3.5×3.3	3.7×3.5	—	棒状工具痕	先端部破片	38°	下面に溶着滓、一部ガラス 化、上面に焼結砂鉄付着、下 面平坦
	II C 1 c 炭窯	埋土	—	9.5	3.5	3.0	ナデか	棒状工具痕	先端部破片	—	溶着滓、下面平坦
	II C 1 f 炭窯	埋土	7.7	9.0	3.5	3.1	—	—	先端部破片	55°	溶着滓、一部炉壁をかみ込む、 焼結砂鉄付着
	II C 1 f 炭窯	埋土	7.0	7.5	3.8	2.5	短い繊維 (スサカ) 指頭痕1か所	太い棒状工具 (径1.1cm)痕	破片	—	—
	II C 2 g 炭窯	埋土	7.5	11.6	2.7	2.4	ナデ	心棒引き抜き痕	先端部破片	—	溶着滓、上面焼結砂鉄付着、熱変色
	II C 1 f 3 ブロック		7.8	10.0	3.4	3.7×3.6	—	棒状工具痕	先端部破片	—	上面~先端に焼結砂鉄、断 面は底面を頂点とする隅丸 三角形
	II C 1 f 6 ブロック		7.1~8.5	12.3	3.7×3.6	3.2	ナデ	棒状工具痕	先端部破片	42~48°	溶着滓、上面焼結砂鉄付着、下面平坦

第11表 遺構内出土遺物観察表(7) 鉄滓、砂鉄、鉄碑系遺物

製鉄関連遺物一覧表

△は鉄塊系遺物の酸化物

No	出土地点	層位	種類	長径	短径	厚さ	重量	磁石	メタル度	色調	その他
230	VII A 1 d 住居跡	不明	胎状鉄滓か 碗形滓	16.8	16.7	10.0	1,716 g	3	-	黒褐～暗赤褐	炉壁一部付着、上面(か)か碗形下面(か)が胎状、木炭かみこむ
231	VII A 1 d 住居跡	不明	胎状鉄滓か	17.6	16.7	10.5	1,641 g	3	-	黒褐～暗赤褐	炉壁か炉底の粘土付着、上面か荒い発泡、下面が胎状、木炭かみこむ
232	VII A 1 d 住居跡	不明	碗形滓	13.1	6.5	6.7	376 g	4	-	褐	下面が胎～流動状、発泡あり
233	VII A 1 d 住居跡	不明	碗形滓	11.2	8.4	6.0	397 g	4～5	-	灰褐～褐	炉底付着、発泡あり、上面磁着強
234	VII A 1 d 住居跡	不明	鏡形砂鉄片か	9.5	7.5	3.7	165 g	4	-	暗赤褐	炉壁付着(におい赤褐)
236	g 炉	埋土	焼結砂鉄か	14.0	12.0	4.4	610 g	8	◎	灰	炉壁付着(あるいは炉底)鍛冶滓の可能性もある
237	2号土坑	埋土	鍛冶滓か	12.9	9.4	8.8	930 g	7	○	褐	炉壁、炉底付着
238	g 炉	埋土	鍛冶滓か	6.5	5.2	5.1	206 g	7	○	橙	底面白色粒付着
239	2号土坑	埋土	鍛冶滓か	9.5	7.8	5.2	184 g	6	○	におい黄褐	底面白色粒付着
240	b 炉	埋土	炉底滓か 鉄塊系遺物	7.4	7.0	3.6	107 g	6	●	褐色	底面白色粒付着
241	e 炉前庭部	埋土	鉄塊系遺物	6.7	6.7	3.9	116 g	7	△●	褐色	炭の細片付着
242	f 炉前庭部	埋土	焼結砂鉄か	5.1	4.6	1.3	29 g	7	○	褐灰	炉壁付着
243	d 炉	埋土	焼結砂鉄か	6.9	5.2	1.8	63 g	7	◎	暗褐	炉壁付着、鍛冶滓の可能性もあり
244	d 炉	埋土	焼結砂鉄か	5.9	5.5	1.8	70 g	6	○	褐灰	炉壁付着か炉底、鍛冶滓の可能性もあり
245	g 炉	埋土	鉄塊系遺物	3.8	2.6	1.8	19 g	6	◎	暗赤褐	
246	f 炉	埋土	鉄塊系遺物	6.1	3.7	2.4	41 g	7	○	褐	炭の細片、焼結砂鉄付着
247	g 炉	埋土	鉄塊系遺物か	7.0	3.9	4.5	66 g	7	△○	褐	焼結砂鉄付着
248	f 炉前庭部	埋土 埋土	} 流出滓	48.3	17.6	6.5	2,895 g	2	-	灰 灰	表面なめらかでもち状、下面に白色粒付着、破断面多孔質
249	d 炉	埋土									
250	2号土坑	埋土	炉内滓	13.1	10.1	6.4	389 g	3		暗褐	白色粒付着、位置部ガラス化
251	g 炉	埋土	炉内滓	18.6	14.7	8.7	625 g	4			底面白色粒付着
252	g 炉	埋土	流出滓	16.1	9.5	2.6	421 g	2～3		灰	底面白色粒付着、破断面多孔質、表面胎状
253	f 炉前庭部	埋土	流出滓	13.6	4.3	2.2	130 g	2		灰	
254	c 炉前庭部	埋土	流出滓	17.9	15.0	3.3	641 g	3	-	灰	
255	f 炉前庭部	埋土	炉内滓	7.4	5.3	4.2	66 g	3			焼結砂鉄(か)少量付着、底面白色粒付着
256	2号土坑	埋土	流出滓	10.6	7.3	3.6	266 g	2～3	-	灰	
257	d 炉	埋土	流出孔滓	17.2	3.9	4.4	296 g	3		灰	棒状、全面に白色粒付着、多孔質
258	a 炉	埋土	流出孔滓	25.5	4.4	5.0	683 g	3	-	灰	棒状、表面胎状、先端底面白色粒付着
259	c 炉前庭部	埋土	流出滓	5.4	4.5	1.5	70 g	4	-	灰	底面白色粒少量付着、上面しわ状
260	d 炉前庭部	埋土	流動滓か	7.3	5.2	2.9	185 g	3		褐灰	もち状
260	d 炉前庭部	埋土	炉内滓	8.0	4.3	3.6	97 g	7	-	暗褐	木炭かみ込み、赤さび付着、底面白色粒付着

第12表 炭化材樹種同定結果

No	遺構	樹種	備考	No	遺構	樹種	備考
1	VII A 3 b 住	クリ		10	II C 2 b 炭窯	クリ	
2	II B 4 h 住	クリ	実Na12	11	VII B 8 f 炭窯	クリ	
3	II B 4 h 住	クリ	実Na13	12	VII B 8 f 炭窯	クリ	
4	II C 3 a 炭窯	イタヤ		13	VII B 8 f 炭窯	クリ	
5	II C 2 g 炭窯	クリ	実Na13～15	14	VII B 8 e 炭窯	ナラ	埋土Na334
6	II C 1 d 炭窯	クリ		15	II C 2 e 製鉄炉群 a 炉前庭部	ナラ	
7	II C 1 c 炭窯	クリ		16	II C 2 e 製鉄炉群 d 炉	ナラ	
8	II C 0 e 炭窯	クリ		17	II C 2 e 製鉄炉群 e 炉前庭部	カツラ	
9	II C 2 b 炭窯	クリ					

第13表 鉄滓、鉄塊系遺物計測表

No	遺構名	重量	磁着度	メタル反応	色調	旧遺構名No	No	遺構名	重量	磁着度	メタル反応	色調	旧遺構名No
1	a 炉	19.54	5	-		9号炉ア 1	57		24.47	6	-		ク 1
2		36.18	6	-		2	58	b 炉	6.90	5	-		1号炉ケ 1
3	b 炉	8.35	4	-		1号炉ア 1	59		20.12	7	-		2
4		6.70	5	-		2	60		31.72	7	-		3
5		22.50	4	-		3	61		28.13	5	-		4
6		7.25	4	-		4		65.51	7	-			5
7		8.05	5	-		5	62	c 炉前庭部	27.08	6	-		8号炉ア 1
8		4.95	4	-		6	63	d 炉	8.94	6	-		5号炉ア 1
9		22.69	5	-		7	64		18.18	7	◎	暗褐	2
10		16.04	4	-		8	65		8.25	6	-		3
11		12.83	5	-		9	66		11.13	6	-		4
12		9.75	5	-		10	67		14.34	6	◎	褐	5
13		7.61	5	-		11	68		8.30	6	-		6
14		6.15	4	-		12	69		20.22	7	-		7
15		34.45	6	-		13	70		10.34	6	-		8
16		35.98	5	-		14	71		13.15	5	-		9
17		11.83	6	-		14	72		15.98	5	-		10
18		10.70	6	-		イ 1	73		14.01	5	-		11
19		6.35	5	-		2	74		8.28	6	-		12
20		13.00	5	-		3	75		29.19	6	-		13
21		14.40	5	-		4	76		62.82	7	◎	暗褐	イ 1
22		19.75	4	-		5	77		55.70	5	-		2
23		7.25	5	-		6	78		8.00	6	-		7号炉ア 1
24		17.83	5	-		7	79		11.15	5	-		2
25		11.58	5	-		8	80		16.74	6	-		3
26		35.30	7	○	暗褐	9	81		13.31	5	-		4
27		30.94	7	-		10	82		11.46	5	-		5
28		11.87	5	-		11	83	d 炉	21.60	6	-		7号炉 6
29		23.62	6	-		12	84		32.02	6	-		7
30		39.51	5	-		13	85		20.00	6	-		イ 1
31		59.74	4	-		14	86		19.56	6	-		2
32		177.64	5	-		15	87		15.59	5	-		3
33		21.07	5	-		16	88		22.60	5	-		4
34		14.80	6	-		1号炉ウ 1	89		17.69	5	-		5
35		4.84	4	-		2	90		16.24	6	-		6
36		31.11	5	-		3	91		18.48	5	-		7
37		18.35	6	-		エ 1	92		19.56	6	-		8
38		12.10	6	-		2	93		22.33	7	-		9
39		8.19	5	-		3	94		27.74	6	-		10
40		6.11	5	-		4	95		51.29	4	-		11
41		4.50	3	-		5	96		23.05	7	-		12
42		7.45	5	-		6	97		49.91	6	-		13
43		8.57	5	-		オ 1	98		48.30	6	-		14
44		10.26	5	-		2	99		79.93	7	◎◎	橙	15
45		9.19	4	-		3	100		16.43	6	-		16
46		9.94	4	-		4	101		12.37	5	-		17
47		14.24	5	-		5	102		12.69	5	-		18
48		31.36	6	○	暗褐	6	103		13.40	5	-		ウ 1
49		31.65	5	-		7	104		15.93	6	-		2
50		107.75	5	L●	橙	8	105		15.50	6	-		3
51		5.70	5	-		9	106		19.17	7	-		4
52		17.86	6	-		カ 1	107		43.31	6	-		5
53		28.19	6	-		2	108		45.29	7	-		6
54		49.44	6	-		3	109		30.82	6	-		7
55		4.18	5	-		4	110		27.63	5	-		8
56						キ 1	111		279.27	7	-		9

No	遺構名	重量	磁着度	メタル反応	色調	旧遺構名No	No	遺構名	重量	磁着度	メタル反応	色調	旧遺構名No
112	d 炉	8.02	5	-		7号炉エ 1	170		10.25	7	-		2
113		11.23	5	-		2	171		15.14	6	-		3
114		52.73	7	-		3	172		21.84	5	-		4
115		10.87	5	-		カ 1	173		31.07	7	-		5
116		9.46	7	-		2	174		24.31	7	-	エ	1
117		9.67	5	-		3	175		44.56	6	-		2
118		13.95	5	-		4	176	e 炉	11.03	5	-		6号炉ア 1
119		11.27	6	-		5	177		56.23	7	○◎	暗褐	2
120		18.87	6	-		6	178		9.87	5	-		イ 1
121		12.54	6	-		7	179		19.87	5	-		ウ 1
122		19.72	5	-		8	180		8.32	5	-		エ 1
123		11.39	5	-		9	181		24.11	5	-		2
124		17.90	5	-		10	182		13.69	5	-		オ 1
125		14.91	5	-		11	183		13.75	5	-		2
126		14.27	6	-		12	184		6.55	5	-		カ 1
127		16.54	6	-		13	185		6.91	3	-		2
128		16.92	6	-		14	186		9.43	5	-		3
129		27.80	5	-		15	187		11.83	6	-		4
130		122.61	6	-		16	188		8.61	5	-		5
131		12.87	5	-		キ 1	189		9.04	3	-		6
132		142.81	6	-		2	190		12.17	5	-		7
133		5.36	5	-		ク 1	191		8.11	6	-		8
134		8.83	5	-		ケ 1	192		45.27	6	○◎◎	暗褐	9
135		9.66	5	-		2	193		35.22	5	-		キ 1
136		19.09	6	-		3	194		9.84	5	-		ケ 1
137		13.38	6	-		4	195		20.67	5	-		サ 1
138		16.38	6	-		5	196		12.94	6	-		シ 1
139		28.38	6	-		6	197		34.94	7	-		2
140		20.24	5	-		7	198	e 炉前庭部	17.89	6	-		16号炉ア 1
141		52.39	6	-		8	199		15.84	5	-		2
142		16.43	5	-		ス 1	200		12.83	6	-		3
143		14.97	6	-		2	201		14.41	6	-		4
144		26.37	7	-		3	202		21.39	5	-		5
145		11.89	5	-		4	203		13.45	6	-		6
146		12.63	5	-		5	204		17.06	7	-		7
147		34.03	6	○	橙	6	205		16.65	6	-		8
148		18.23	5	-		7	206		18.00	5	-		9
149		27.49	6	-		8	207		28.69	6	-		10
150		23.88	5	-		9	208		19.06	5	-		11
151		17.11	6	-		ヌ・セ 1	209		21.12	6	-		12
152		19.50	6	○	褐	2	210		19.63	5	-		13
153		26.53	6	-		3	211		24.01	5	-		14
154		23.18	5	○	褐灰	4	212		19.91	5	-		15
155		16.52	5	-		5	213		12.05	5	-		16
156		24.98	5	-		6	214		25.76	5	-		17
157		47.15	6	-		7	215		45.27	5	-		18
158		51.76	6	●	褐	8	216		39.44	7	-		19
159		42.38	7	○	明褐	9	217		66.50	7	-		20
160		42.19	6	-		10	218		115.03	7	○	褐	21
161		29.39	6	-		11	219		91.75	6	-		22
162		54.81	6	-		12	220		239.22	6	-		23
163		105.46	8	○	褐	13	221		12.27	7	-		イ 1
164		36.08	5	-		14	222		13.92	5	-		2
165		69.81	6	○	褐灰	15	223		14.69	5	-		3
166		24.59	6	-		ソ 1	224		20.69	5	-		4
167	d 炉前庭部	10.58	5	-		15号炉 1	225		16.55	5	-		5
168		346.00	7	-		2	226		20.03	6	-		6
169		15.79	7	-		ウ 1							

No	遺構名	重量	磁着度	メタル底	色調	旧遺構名No	No	遺構名	重量	磁着度	メタル底	色調	旧遺構名No
227	e 炉前庭部	37.38	6	-		イ 7	284		11.19	5	-		2
228		45.27	6	-		8	285		32.82	7	-		3
229		14.81	5	-		ウ 1	286		43.38	6	-		4
230		17.97	5	-		2	287		32.71	7	-		5
231		16.34	6	-		3	288		16.56	7	○	暗褐	オ 1
232		17.66	5	-		4	289		8.86	5	-		カ 1
233		11.89	4	-		5	290		11.61	4	-		2
234		16.61	6	-		6	291		11.78	5	-		3
235		26.99	7	-		7	292		15.30	6	-		4
236		12.56	5	-		8	293		18.42	6	◎	褐	5
237		18.61	5	-		9	294		21.06	6	-		6
238		19.99	6	-		10	295		28.99	7	○	褐灰	7
239		29.97	5	-		11	296		22.11	6	-		8
240		29.76	5	-		12	297		70.51	6	●	褐	9
241		34.25	6	-		13	298		6.87	5	-		キ 1
242		28.83	5	-		14	299		6.82	4	-		2
243		44.91	6	-		15	300		8.95	5	-		3
244		8.08	5	-		エ 1	301		14.05	5	-		4
245		16.40	6	-		2	302		78.23	7	-		5
246		19.32	5	-		3	303 f 炉前庭部		8.22	5	-		2号炉ク 1
247		24.26	5	-		4	304		15.41	5	-		2
248		98.35	6	-		5	305		16.10	5	-		コ 1
249		16.34	5	-		オ 1	306		6.78	5	-		シ 1
250	f 炉	12.98	6	-		13号炉ア 1	307		7.59	5	-		2
251		18.01	6	-		2	308		12.94	6	-		3
252		16.25	5	-		3	309 g 炉		15.40	6	-		
253		22.47	6	-		4	310		14.53	4	-		11号炉ア 1
254		15.24	6	-		5	311		18.55	6	◎	暗赤褐	2
255		14.63	6	-		6	312		22.62	6	○	暗褐	3
256		19.12	5	-		7	313		16.05	6	-		4
257		28.35	7	-		8	314		26.07	6	●	暗褐	5
258		45.84	6	-		9	315		14.20	4	-		6
259		78.57	6	-		10	316		14.72	5	-		7
260		73.86	7	-		11	317		17.60	6	-		8
261		52.29	6	◎◎	暗褐	イ 1	318		28.02	6	-		9
262		8.85	5	-		ウ 1	319		14.61	5	-		10
263		13.64	5	-		2	320		19.96	5	-		11
264	f 炉前庭部	32.92	7	-		2号炉ア 1	321		22.39	6	-		12
265		7.76	5	-		ウ 1	322		29.02	6	-		13
266		9.81	5	-		2	323		34.25	7	●	暗褐	14
267		11.33	5	-		3	324		38.30	7	-		15
268		9.32	5	-		4	325		25.97	6	-		16
269		13.27	5	-		5	326		33.13	6	○	褐	17
270		11.56	5	-		6	327		39.20	4	-		18
271		8.61	4	-		7	328		58.64	7	-		19
272		11.24	5	-		8	329		150.83	6	○	褐	20
273		22.16	6	-		9	330 g 炉		32.70	7	-		11号炉イ 1
274		22.51	5	-		10	331		61.89	6	-		2
275	f 炉前庭部	32.88	6	-		2号炉 11	332		205.81	7	○	橙	3
276		20.12	5	-		12	333		157.51	7	-		4
277		22.90	6	○	橙	13	334		640.00	7	-		5
278		8.31	5	-		14	335		23.12	5	-		ウ 1
279		25.51	6	-		15	336		33.37	7	◎	暗褐	2
280		16.29	4	-		16	337		54.80	7	○	褐	3
281		40.91	7	○	褐	17	338		34.53	7	-		4
282		60.36	7	-		18	339		27.34	6	-		5
283		12.78	6	-		エ 1	340		28.32	7	-		6
							341		31.51	6	-		7

No	遺構名	重量	磁着度	メタル反応	色調	旧遺構名No	No	遺構名	重量	磁着度	メタル反応	色調	旧遺構名No
342		35.43	6	-		8	400		34.15	7	-		9
343		69.73	7	-		9	401		31.87	5	-		10
344		43.29	5	-		10	402		24.10	7	-		11
345		57.63	6	-		11	403		26.80	7	-		12
346		70.16	7	-		12	404		38.17	7	-		13
347		82.32	7	-		13	405		24.03	7	-		14
348		87.12	6	-		14	406		22.72	6	-		15
349		65.65	7	○	褐	15	407		33.12	6	-		16
350		88.31	6	-		16	408		42.56	6	-		17
351		405.00	6	-		○17	409		28.72	6	-		18
352		15.80	7	-		エ 1	410		36.82	7	-		19
353		16.59	6	-		2	411		24.07	5	-		20
354		15.04	5	-		3	412		40.61	6	-		21
355		15.69	6	-		4	413		84.09	6	-		22
356		17.27	6	-		5	414		114.19	6	-		23
357		17.87	6	-		6	415		865.00	6	-		24
358		46.44	7	●	褐	7							
359	g 炉	39.03	6	-		11号炉エ 8	416	2号土坑	50.83	6	-		10号炉ア 1
360		38.17	6	-		9	417		46.87	7	-		2
361		52.33	5	-		10	418		20.40	5	-		イ 1
362		49.22	6	-		11	419		25.90	7	-		ウ 1
363		67.71	6	-		12	420		40.01	6	-		2
364		115.25	7	-		エ 13	421		61.46	6	-		3
365		197.30	7	-		14	422		16.45	6	-		エ 1
366		610.00	8	◎	灰	オ 1	423		13.28	6	-		2
367		249.89	6	-		キ 1	424		17.50	5	-		3
368		13.23	6	-		ク 1	425		22.30	6	○	橙	4
369		9.02	5	-		2	426		22.42	6	-		5
370		12.49	5	-		3	427		28.24	6	-		6
							428		40.25	6	-		7
371	g 炉前庭部	17.97	6	-		14号炉ア 1	429		37.58	6	-		8
372		18.61	5	-		2	430		35.55	6	-		9
373		25.54	5	-		3	431		25.53	6	○	明褐	10
374		36.14	5	-		4	432		27.79	7	-		11
375		1185.00	6	○○	褐	イ 01	433		42.48	7	-		12
376		60.81	6	-		2	434		55.33	6	○	明褐	13
377		17.26	6	-		ウ 1	435	2号土坑	43.06	6	-		10号炉14
378		20.16	6	-		2	436		61.24	6	-		15
379		21.25	6	-		3	437		126.96	6	○○	明褐	16
380		88.34	6	-		4	438		100.94	5	-		17
381	g 炉前庭部	22.13	6	-		14号炉エ 1	439		118.26	6	-		18
382		21.09	5	-		2	440		184.15	6	○	にぶい黄褐	19
383		15.99	5	-		3	441		168.25	6	-		20
384		19.79	4	-		4	442		400.00	5	-		21
385		19.33	4	-		5	443		930.00	7	○	褐	22
386		27.75	4	-		6	444		15.89	6	-		オ 1
387		390.00	6	-		07	445		28.74	6	-		2
388		13.93	5	-		キ 1	446		22.74	4	-		3
389		13.30	4	-		2	447		23.64	5	-		4
390		17.34	5	-		3	448		46.74	6	●	明褐	5
391		23.45	5	-		4	449		55.14	6	◎	褐	6
392		31.56	6	-		コ 1	450		75.03	6	-		7
393		27.63	6	-		2	451		52.55	6	-		カ 1
394		18.34	6	-		3	452		12.57	6	-		3号炉ア 1
395		14.83	5	-		4	453		62.70	6	-		2
396		15.39	6	-		コ 5	454		18.15	5	◎	褐	イ 1
397		15.92	5	-		6	455		25.02	6	-		2
398		35.04	6	-		7							
399		19.73	6	-		8							

V 遺構外の出土遺物

平成5年度と6年度調査で出土した遺物は土器、石器類がコンテナ(41.5×31.5×29.0cm大)で約60箱、羽口、炉壁が約2箱、鉄滓が約1.5tである。遺構外の遺物も土器、石器などは圧倒的に縄文時代に属するものが多い。そのほか土師器、須恵器がある。土製品は縄文時代に属する3点が出土している。鉄滓は飛び地で1006.1kg、調査区中央の谷筋から16.5kgで、計1022.6kg出土した。銭は2点、鉄製品は小片も含めると4点の出土であるが、1点のみ掲載した。

1. 土器、土製品

土器の中では、縄文時代前期の土器が多数を占め、次いで縄文時代中期、土師器、須恵器、縄文時代早期、縄文時代後期、晩期の土器となっている。

(1) 縄文時代の土器

縄文時代中期の住居跡が多く検出されている調査区北側の尾根の上では、中期の土器が数多く出土し、谷筋では前期の土器が多かった。また、飛び地であるI区、II区では土器の出土量はごく少ない。

土器の分類は遺構内、遺構外を問わず同一とし次のように分類した。遺構外出土遺物は分類に沿って掲載した。

- 第I群土器 細隆起線文、条痕文を有する縄文時代早期末の土器
- 第II群土器 胎土に繊維を含む縄文時代早期末から前期前葉の土器
- 第III群土器 胎土に繊維を含まない縄文時代前期の土器
- 第IV群土器 縄文時代中期の土器
- 第V群土器 縄文時代後期の土器
- 第VI群土器 縄文時代晩期の土器
- 第VII群土器 土師器
- 第VIII群土器 須恵器

第I群土器 細隆起線文、条痕文を有する縄文時代早期後半の土器

縄文時代早期後半に位置づけられる土器群である。内外面につけられる文様で次のとおり細分した。本群の土器の器厚は薄く、4～7mm程度である。胎土に繊維は含まない。細かい砂粒を含むものと含まないものがある。砂粒をほとんど含まない土器は内外面共に鈍い黄褐色を呈する。焼成はII群土器に比すれば一般に良い方であるが、胎土に砂粒を含まないものはやや軟質である。

I群1類 外面にミミズ腫れのような細い隆起線文で幾何学的な文様を施す土器である。

細い隆起
線文

本類はさらにa～cに分けられる。

I群1類a(第74図1～13) 外面に細隆起線文、内面に条痕文が顕著な土器

4～13は細隆起線文を施す前に施文された条痕文が顕著にあらわれている。1～3は口縁部であるが、外面の条痕文は4～13ほど顕著ではない。色調は1、7、12は内外面ともにに

黄褐色を呈する。6、11は内外面とも灰黄褐である。3、4は外面が褐灰、内面が黒褐色を呈する。5、10、2、9は外面がにぶい黄褐あるいは灰黄褐で、内面は黒褐色である。8、13は内外面とも黒褐色である。

これらの土器はおそらく口縁部付近か体部上半の破片が多いと考えられる。

I群1類b（第74図16～21）外面に細隆起線文が施され、内面に条痕文が施されるが、条痕文が顕著にあらわれないもの。

これらの土器の内面には条痕文が施されるが、凹凸があまりなくナデ程度にしか見えないものと、条痕文が認められないものがある。色調は裏面がやや黒褐色を帯びる土器16、19、20と、にぶい黄褐色を帯びる土器17、18、21がある。

I群1類c（第74図14、15）外面に細隆起線文が施され、口縁部上端に浅い刺突が施されるもの。いずれも口縁部破片で、非常に浅い刺突が規則的に並ぶ。

I群2類外面に条痕文を有する土器群である。内面の施文の状況によってさらに分けられる。

I群2類a（第74図22～30）内外面とも条痕文が顕著なもの。

24、27は薄手で、内外面とも褐灰である。23、26は胎土にガラス質で光沢のある混入物がある。22は口縁部上端に縦方向の微妙な細隆起線文状の凸部があるが、ごくわずかであったため、本群に含めた。25、29、30は外面がやや赤みを帯びた褐色で、内面は褐色あるいは黒褐色である。これらの土器と26はやや厚手で、他の繊細な印象の土器とは一線を画する。

I群2類b（第74図、31）外面の条痕文は顕著であるが、内面に施された条痕文は顕著にあらわれないもの。

31は内面の条痕は認められないものの、胎土、焼成、色調、器厚、外面条痕の状態などの点でI群2類aの25、29、30と共通する点の多い土器である。同一個体で異なる部位の破片かもしれない。外面は赤みを帯びた褐色、内面は黒褐～褐色である。

第II群土器 胎土に繊維を含む縄文時代早期末から前期前葉の土器

本群は胎土に繊維を含む土器を一括した。早期末から～前期前葉に位置づけられる土器群であるが、ほとんど破片の資料でもあり、この時代幅の中での時期を決定することは困難な土器も含まれている。そこで、施文の原体、口縁部文様体の有無などによって18類に分類したが、時期の異なる土器が同じ分類に含まれている可能性もあると思われる。

II群1類 表裏に縄文を有する土器（第75図、32）

ランダムな施文 本遺跡での出土は1点のみである。外面、内面共に単節斜縄文を横方向にややランダムに施文する。内面は口縁部のみの施文である。内面の文様帯より下の体部には指頭痕が明瞭である。
指頭痕 口唇部には原体の回転が施される。胎土には繊維を極めて多く含む。早期末に位置づけられる土器と考えられる。

組 縄 II群2類 組縄縄文が施される土器（第75図33～第76図66、68～第77図97）

組縄縄文（高橋亜1992）が施される土器を一括した。単節の組縄A、B、複節のA、Bに大別されるが、A、Bどちらの組み方が判然としないものも多々ある。

33は乳頭状の底部である。34～47は単節の組縄Aと思われる土器片である。口唇部に刺突、指頭状押圧などを施すもの（34～39）、施文しないもの（40～43）、口唇部の外面に施文するも

の(45、46)がある。44は施文せず、口唇部を若干外側に折り返したような形状を呈する。40～43は焼成が良好で、口唇部が平坦に整えられている。45、46は口唇部がやや丸みを帯びる。

48～66は、節の縦方向の列がやや乱れる傾向のあるもので、単節の組縄Bと思われる。口唇部の施文は刺突、指頭状圧痕のほかに、縄の回転もある。(48、56)口唇部に施文されないもの(62～64)の中には、上面がきわめて平坦に整えられているもの(63)がある。66は組縄縄文と単節斜縄文の2種の原体を用いて施文された土器である。

68～71は複節の組縄Aと考えられる土器片である。70は他の土器片と断面形が異なり、胴部に膨らみを持ち、やや外反して立ち上がる、本遺跡内では他に類を見ない土器片である。口唇部は棒状工具の斜め圧痕(68)、指頭状圧痕(69)が施される。

72～97は複節の組縄Bと考えられる土器片であるが、83、84は組縄Aの可能性もある。74、75は同一個体である。97は複節の組縄Bに単節斜縄文を組み合わせた土器片である。口唇部には棒状工具による斜め方向からの刺突、指頭状圧痕、縄の回転、棒状工具の側縁を口唇部に直角に押し当てた例(74、75)がある。

II群3類 組紐を回転して施文した土器(第77図98～101)

組紐

組紐の回転を施していると考えられる土器片である。いずれも繊維を含むが他に比してやや繊維の量が少ないようである。口縁部は2例のみであるが、口唇部に施文は認められない。

II群4類 縄の束を回転して施文した土器(第78図102～107)

撚りの異なる縄を束にして施文した土器かと思われる。いずれも単節の縄であるが、0段多 縄の束か?
条か2条のRとLを2本か4本使用している。原体の長さは2cm～3cmである。103はRのみ0
段多条か。104～107は繊維が極めて多い。102の口唇部は平坦に整えられている。

II群5類 前々段反撚(非撚り戻し)の縄文原体を施文した土器(高橋亜1992)(第78図108～116)

110～112、115は組縄の可能性もあるが、区別できなかった。前々段で同方向の縄を撚り戻さ
ずに同じ方向に撚り合わせ、直前段で逆方向に撚り合わせた原体である。108～114は最終の撚 前々段
りがL方向で、大勢がこの方向である。115～116は最終の撚りがR方向の土器片である。109は 反撚か
繊維が少量である。110、114、115は多量の繊維を含む。口唇部の施文は刺突、縄の回転である。

II群6類 前々段合撚の縄文原体を施文した土器(第78図117、118)

2点の出土であるが、いずれも繊維を多く含む。118は口唇部に指頭状圧痕が施される。

II群7類 直前段反撚の縄文原体を施文した土器(第78図119)

繊維を含み、口唇部には原体の回転が施される。

II群8類 前々段反撚(撚り戻し)の縄文原体を施文した土器(第78図120～124)

すべて繊維を多く含む。123は口唇部に原体の回転が施される。

II群9類 単節斜縄文を施文した土器(第76図67、第78図125～第79図147)

125～127、130～132は口唇部に施文を持つ、原体LRを横方向に施文した土器の口縁部である。
口唇部には縄の回転、刺突、指頭状の圧痕が施される。135も原体LRを横方向に施文した土器
片であるが、ごく太い原体を使用している。144は同様の体部破片である。141は口唇部に施文
されないもの。145も原体LRを横方向に回転した底部破片で、底面にも同様に施文している。
繊維を多く含む。146、147はLRを横方向に施文した尖底の底部破片。134は原体RLを縦に施
文した時の口縁部である。

137、142は原体RLを横方向に施文した土器の口縁部で、137は口唇部に縄の回転が施される。128、129、143は0段多条の原体RLを横方向に施文した口縁部土器片である。128は口唇部に棒状工具の側面圧痕を有する。129は口唇部に原体を回転施文している。

136、138～140は0段多条の原体LRを横方向に施文した口縁部土器片で、繊維を多く含む。136は口唇部に斜め方向から刺突が施される。138～140は口唇部に施文されないもの。

II群10類 複節斜縄文を施文した土器 (第79図148～第80図163)

148～156、159は口唇部に施文した口縁部破片である。148～151はいずれも繊維を多く含む。152は口唇部外面に原体の末端を刺突している。154、159は0段多条の複節で、繊維が極めて多い。158、160は口唇部に施文されない口縁部破片。161、162は胴部破片である。163は尖底の底部で、原体はLRLかと思われるが、前々段の撚りが不整である。

II群11類 結束のない羽状縄文を施文した土器 (第80図164～178)

164～171、173は単節の羽状縄文を施した土器である。165、167、169、170、173は一つの原体を回転方向を変えて施文している。164～168、171、174は0段多条と思われる。170は口縁部平坦な

口唇部 172、175～178は複節の羽状縄文である。

本類の土器は繊維を非常に多く含む。

II群12類 結束のある羽状縄文を施文した土器 (第80図179～第81図197)

繊維を多く含む土器が多いが、189は少量しか含まない。196は底部にも施文が施される。179、181、193、196、197は0段多条か。192は非常に繊細な原体が使用されている。195の原体は194と似ているが、施文の幅が狭く、結束部のみが目立つ。192、193、197は不規則に施文される。

II群13類 ループ文が施文される土器 (第81図198～第82図216)

ア。口縁部破片。198～210、212～214が該当する。本グループはループ文が施される口縁部文様帯を持つと考えられるが、205、214はループ文が幅広く展開しており、体部にまで広がる可能性もある。口唇部に施文される土器はなく、202が口唇部外面に原体末端で刺突されるのみである。口唇部の形状は丸みを帯びて、やや外反するものが多い。ループ文と組み合わせられる地文は、複節の組縄文(組縄Bか)(198～200)、単節斜縄文(201～206、214)、複節斜縄文(207～210、212、213)である。本グループは繊維の含有量が多く、特に単節の原体RLのループ文の土器(204、205、214)に非常に多い。ループは1段から7段までである。

イ。胴部破片。211、215、216である。215は口縁部文様帯にループ文が施され、地文には複節の斜縄文(原体LRL)が施文される。211は崩れたようなループ文である。216はループ文が胴部に広がる。

II群14類 綾織り文又は綾織り状の文様が口縁部に施文される土器 (第82図217～第83図237、241～243)

口縁部の形態は平縁と波状とがある。口唇部は丸味を帯び、直立気味あるいはやや内湾するもの(217～219)と平坦に整えられ、外反気味のもの(220、224～229)に大別される。230、231の口縁部形態は他とやや様相を異にする。口唇部の外側をそいだような形に整えられている。

本類の原体は、単軸絡条体か結束によるものか不明な土器片が多いが、土器に表われる文様によって一括した。226～229は小片のため地文の部分がないが、おそらく口縁部にのみ綾織り

文が施文されていると考えられる。217～221は地文が結束のない羽状縄文の土器片である。217、218、221は0段多条の原体で施文された羽状縄文。219は複節の羽状である。222～224は0段多条の単節斜縄文。225は複節。232は口縁部にランダムに施文される土器で、口唇部の形状なども他と様相を異にするが、便宜上ここに含めた。

233、237は口唇部外側に軸の圧痕が表出している。繊維を多く含み、口唇部は平坦に整形される。

II群15類 口縁部に縄の側面圧痕が施される土器 (第83図238、239)

いずれも組み合わせられる地文は複節の組縄か。

II群16類 口縁部に直前段合捺り(か?)の原体が施文される土器 (第83図240) 1点のみの出土である。組み合わせられる地文は0段多条である。

II群17類 綾織り文が胴部に広がる土器 (第83図262～265)

264の繊維の量はわずかである。

II群18類 単軸絡条体を施文される土器 (第83図244～261)

綾織り文又は綾織り状の文様を除く単軸絡条体が施文される土器である。

- a. 葺瓦状捺糸文が施されるグループ。(244～247)
- b. 口縁部文様体に施文されるグループ。(248～251)口縁部に細い捺り糸文が施文される、薄手の土器である。繊維が多く含まれる。
- c. 菱形のモチーフを施文されるグループ。(252、253)
- d. 網目状捺り糸文を施文されるグループ。(254～258、260)257を除く土器は、細かい網目状の捺り糸文がランダムに施文される。
- e. その他の捺り糸文(259、261)。横方向(259)、縦方向(261)の捺り糸文が胴部全体に施文される。259は繊維を多く含む。

第III群 胎土に繊維を含まない縄文時代前期の土器 (第84図266、267)

本群の土器は2点のみで、いずれも飛び地T II層からの出土である。胎土はたいへん似通っているが、266は大木3式か、267は大木4式かと思われる。267の原体は一つ一つの節が長方形 長方形の節を呈し、特徴的である。

第IV群 縄文時代中期の土器

縄文時代中期前葉から末葉までの土器群である。時期、施文方法の違いにより、4類に分類した。

IV群1類 縄文時代中期前葉に属する土器 (第84図268～272)

大木7式に相当する。268は口縁部に貼りつけた隆帯と口唇部との間に刻み目を施される土器である。269～271は綾織り文が縦に施される土器であるが、他の時期に相当する可能性も高い。272は沈線と交互刺突文が施される。

IV群2類 縄文時代中期中葉に属する土器 (第84図273～第86図333)

器形は深鉢で、キャリパー形、口縁部が外反する器形がある。時期や施文方法によって次のように細分した。大木8式に相当する土器である。

a. 粘土紐貼りつけによって横S字状文、渦巻文、刺状文、懸垂文が描かれるグループ。(273～287)
273～284は粘土紐を貼りつけた後、特に調整を行わない。285～287は貼りつけ後、ていねいに紐の両側をなでている。

b. 口唇部の隆沈線を除き、主に沈線で渦巻文、波形文が描かれるグループ。(288～293、296～300)
器形は口縁部が外反する土器が多い。主に3本組の沈線によってモチーフが描かれる。

c. 主に隆沈線によって、渦巻文、横S字状文、懸垂文、波形文が描かれるグループ。(301～328)

d. 橋状把手を有するグループ。(329～333)

口縁部に橋状の把手を有するもの、及びそれに類するものを集めた。331は把手はないが、形状がこれに類するのでここに報告する。中期中葉に属すると考えられるが、一部は末葉に属するものもあるかもしれない。

IV群3類 中期中葉に属する土器 (第85図294、295、第86図334～第88図371)

大木9式に相当する土器を一括した。

a. 口縁部にわらび手状文をもつグループ。(第85図294、295、第86図334～339、第87図342、343)口縁部に沈線、または隆帯によって、わらび手状文が施される土器である。わらび手状のモチーフ部分の口縁が、突出した波状口縁を呈することが多い。器形は口縁部がやや外半するものが多い。

b. 楕円形、及び逆U字状の区画をもつグループ。(第87図340、341、344～第88図371)

主に沈線で、楕円形と逆U字状文、あるいは逆U字状文のみで区画された土器群である。340、341、344、346、350は口縁部の楕円形の区画内に刺突を施される土器である。345は末葉まで下るかもしれない。本グループはキャリパー型あるいは口縁部で外反する器形を呈する。

IV群4類 中期末葉に属する土器 (第88図372～第89図399)

本類の土器の器形は波状か平縁の口縁で、胴部下半に最大径をもち、口縁部にいたって外反する例が多い。大木10式に相当する。文様帯の区画方法によって次の2種に細分した。

a. 沈線により区画するグループ。(第88図372～第89図388、398、399)

沈線により、C字状か、あるいはJ字状、L字状に区画しているグループである。378～388は沈線ににそって刺突が施される。

b. 隆帯により区画するグループ。(第89図389～397)

397は口縁部の突起に刺突が施される。

IV群5類 中期に属する粗製の土器 (第89図400～404、406第90図433)

中期に属すると思われる粗製の土器を一括した。ほとんどが中期中葉から末葉の土器片と考えられる。400は台付の深鉢の台部である。中期後葉か末葉に属すると思われる。

連続的な 第V群 縄文時代後期の土器 (第89図405、第91図434～444)

刻み目 後期に属する土器群である。434～436、444は後期初頭、そのほかは後期中葉の土器片である。439、440は縄文ではなく、刻み目を連続的に施した後、沈線によって区画する。前期、中期の土器に比して出土数は少ない。

第VI群縄文時代晩期の土器 (第91図444～449)

晩期に属する土器群である。前葉から中葉にかけての土器が少量出土している。

(2)縄文時代の土製品 (第91図450～452)

円盤状土製品が3点出土している。451を除き繊維を含む。

(3)古代の土器 (第92図453～462)

453と454は飛び地の同一地点から出土した土師器の甕と坏である。453の甕は外面がハケ目調整され、内面はヘラナデとハケ目が施される。454は内外面共にミガキが顕著に施されている。外面は主に横方向に、内面は縦方向と横方向にみがかれる。底部からの立ち上がり部分はヘラ削りされ、口縁部で内湾して全体に丸みを感じられる器形である。458は飛び地のT II層から出土した底部破片で、内面が丸みをもつ器形である。以上の土師器は奈良時代末から平安時代初頭に属すると考えられる。

455、456はろくろを使用した坏の破片である。457、459は甕の底部～胴部破片である。以上の土師器は平安時代に属すると考えられる。

460～462は須恵器で、甕の小片であろう。

2. 縄文時代の石器、石製品

今回の調査では、主に調査区中央の谷筋から多くの石器が出土した。北側の尾根からは、住居跡が多く検出されているにもかかわらず、石器は少ない。表土除去を重機で行っていることと、遺物を包含する層が尾根には堆積していないことに起因すると思われる。石鏃は無茎族が圧倒的に多く、石匙はいわゆる縦形、横形両方とも多く出土している。磨石類は横断面が三角形の礫の側縁を主に使用しているものが目立った。そのほか円礫を打ち欠いた礫器が数点出土している。

石鏃 (第93図1～第94図78)

基部形態から第14表のように分類した。1～12までは比較的基部のえぐりの深い凹基の無茎鏃(0 A a)、13～55は基部のえぐりの浅い凹基の無茎鏃(0 A b)、56～70は基部が直線的な無茎鏃(0 B)、71は無茎鏃であるが、基部がやや尖る(0 C)、72～76は有茎鏃か(1)、77、78は有茎無茎の分類が不可能なもの(2)である。

尖頭器 (第94図79～84)

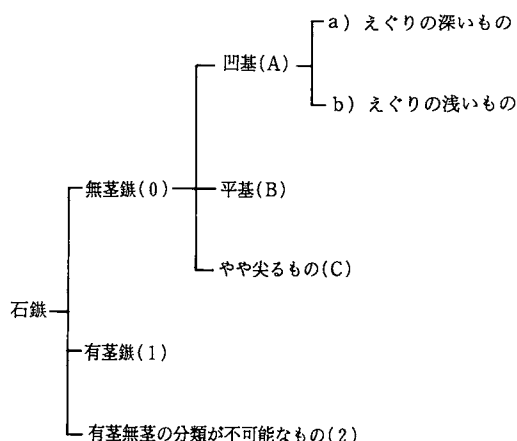
6点出土している。82、84はほぼ完形。他は上半部が欠損している。

石匙・削搔器 (第94図85～第103図235、241)

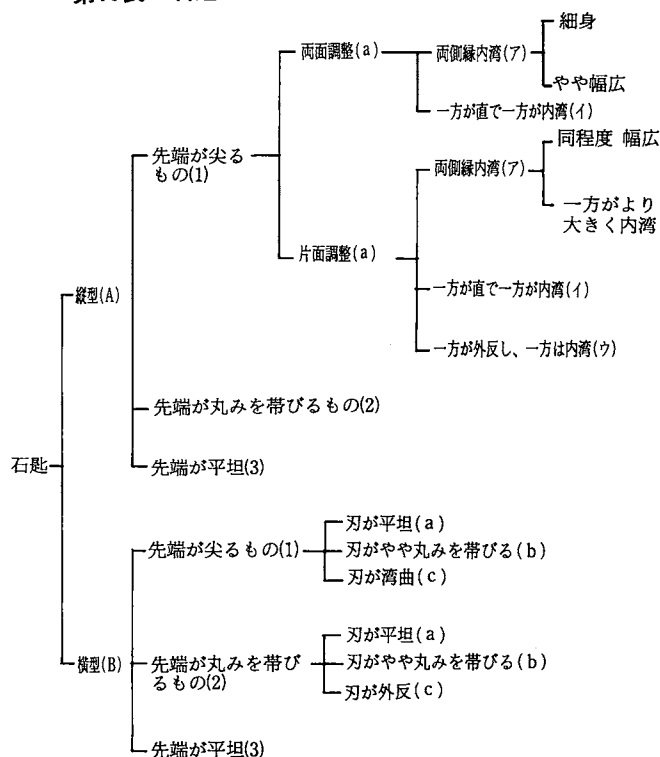
石匙は欠損品も含めると多数出土しているが、紙面の都合上ほぼ完形のもののみ147点掲載した。いわゆる縦形と横形、加工と側縁の形態で第15表のように分類した。

縦型は85～169であるが、中でも86～95は長身で、細身であり、両面加工が施されるグループである。断面形は凸レンズ状を示し、他の縦形石匙に比し特徴的な形態を持つ。両面加工とい

第14表 石鏃の分類概念



第15表 石匙の分類概念



う点では110は同様であるが、両側縁の形態及び側面からの調整が一方に偏っているという点で、116、117は側縁の形態が異なる点で、上述のグループとは一線を画する。169は先端が折れているが、このグループに属するであろう。

103、119は主要剥離面の打点が下方にある点が特徴的である。

141は石匙に分類されない可能性もある。167はつまみの部分に調整が施されるのみで、他は調整のない粗製の石匙である。

横型は170～229である。調整は主に背面に施され、腹面はつまみの部分やその周辺の側縁にのみ施されることが多いが、189は両面とも同様に精密な調整を施している。229は主要剥離面の打点が刃部の方にある。

230、231は刃部やつまみが欠損した石匙である。

232～236、241は削搔器と思われるグループである。

石錐 (第103図237～240)

4点出土した。

240は断面が扁平な部分もあるが、錐部の剥離が磨かれたように滑らかに摩耗していることから本類に含めた。

石篋 (第103図242～第104図245)

4点出土した。242は最大厚が基部よりある。刃部は背面の剥離によってのみ作り出される。

243、245は最大厚が刃部よりにあり、そこから急な角度で刃部が作り出される。刃部は腹面からも調整されている。244は腹面の調整が側縁の一部と刃部に限られ、腹面の主要剥離面を残している。

ピエス・エスキーユ（第104図246～248）

3点出土した。いずれも剝片を利用したものである。246の断面形は扁平であるが、247、248は三角形に近い形態を示す。

不定形石器（第104図249～第105図276）

調整痕、あるいは使用痕のある石器である。削搔器として使用されたと考えられるものも多い。253、260は使用痕のある剝片で、特に260はタール状の付着物がある。276は尖頭器の基部の可能性もある。タール状付着物

縁辺のどこに調整が施されるかによって次のとおり分類した。

- 1類 側縁に調整のある剝片（249～252、254～259）
- 2類 主要剥離面の打点と対面する縁辺に調整のある剝片（261～263）
- 3類 主要剥離面の打点のある方向に調整のある剝片（264）
- 4類 打点から見て側縁と端にわたって2縁辺に加工のある剝片（265～273）
- 5類 上記に分類されない剝片（253、260、274～276）

石核（第105図277）

1点出土した。自然面の残る残核と考えられる。

磨製石斧（第106図278～第108図295）

ほとんどが基部または刃部を欠損しており、完形は283のみである。石材は淡緑色や緑色の凝灰岩が多い。タール状の付着物が認められるものが3点ある（282、286、294）。279、283は斧身が平たいものである。側縁に稜のあるものがほとんどであるが、279、280は特に稜が明瞭である。294は斧身に稜がなく、基部と刃部に剥離が認められる。剥離で刃部を作り出しているのかもしれない。295は剥離によって斧身を形成した後磨いており、剥離の稜がつぶれている。未製品か。280は小型で細身である。タール状付着物

磨石類（第108図296～第112図340）

自然石の一部に磨面、敲打痕などを有する石器である。

296～312は細長く、断面が三角形あるいは扁平な形状を示し、側面を使用しているグループで従来特殊磨石と呼ばれてきたものである。296、297、300、302は断面が扁平である。このグループの中には敲打痕を持つもの（296、297、298）がある。

313～340は円形や長円形の自然石に、磨面、敲打痕、凹面を持つものである。313、314は自然石の2面に凹面を持つ。316、317は球形に近い円礫で全体が磨面である。321～327はやや細長い形状である。340は石皿の可能性もある。

鈍角の礫器 (第112図341~345)

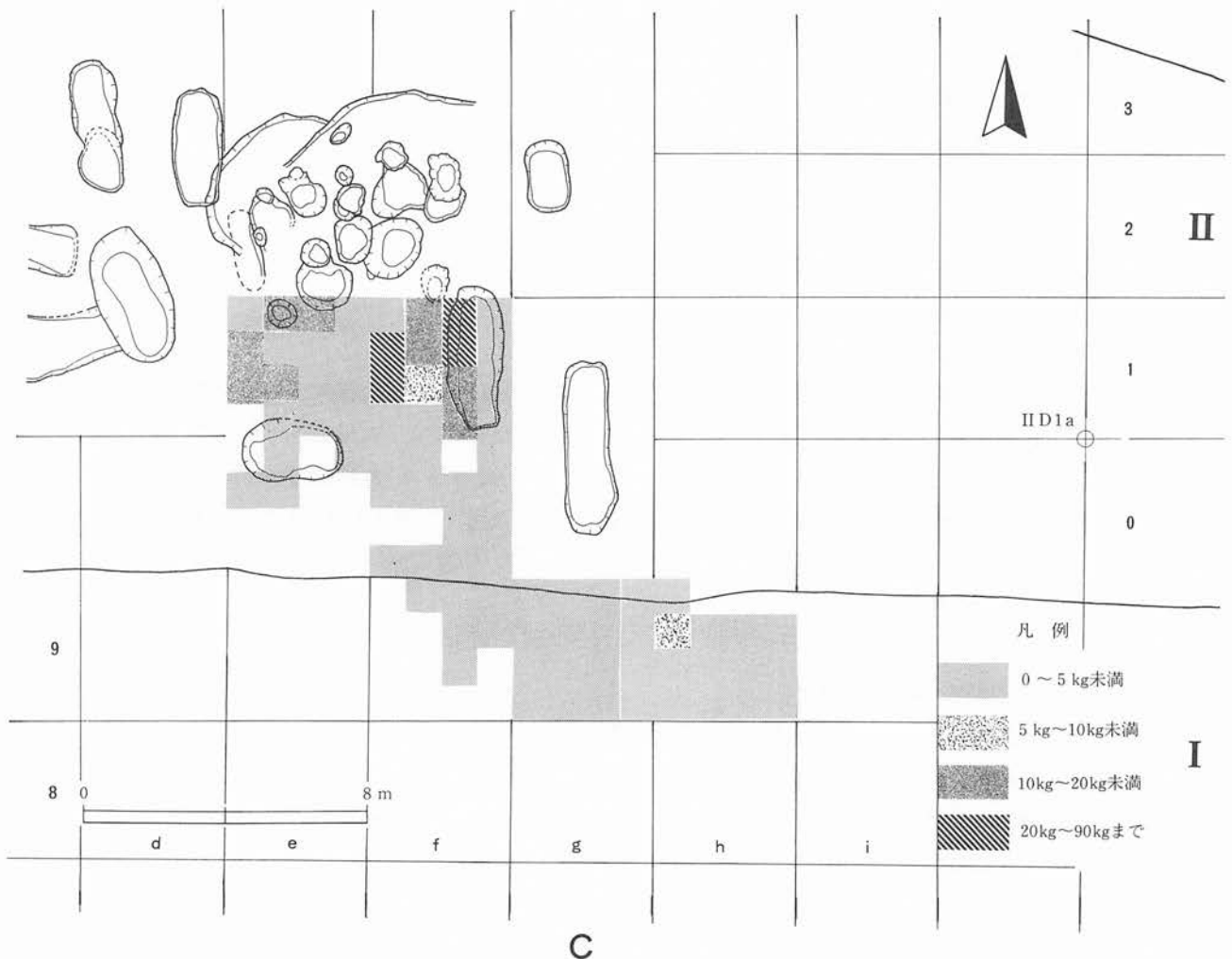
刀部? 長円形の自然石に粗い剝離を施している一群である。打ち欠いて作られる刃部(か)はそれほど鋭利ではなく105~140°である。両面から均等に打ち欠いているのではなく、主に一方方向から、角度を変えて剝離している。

石皿 (第112図346)

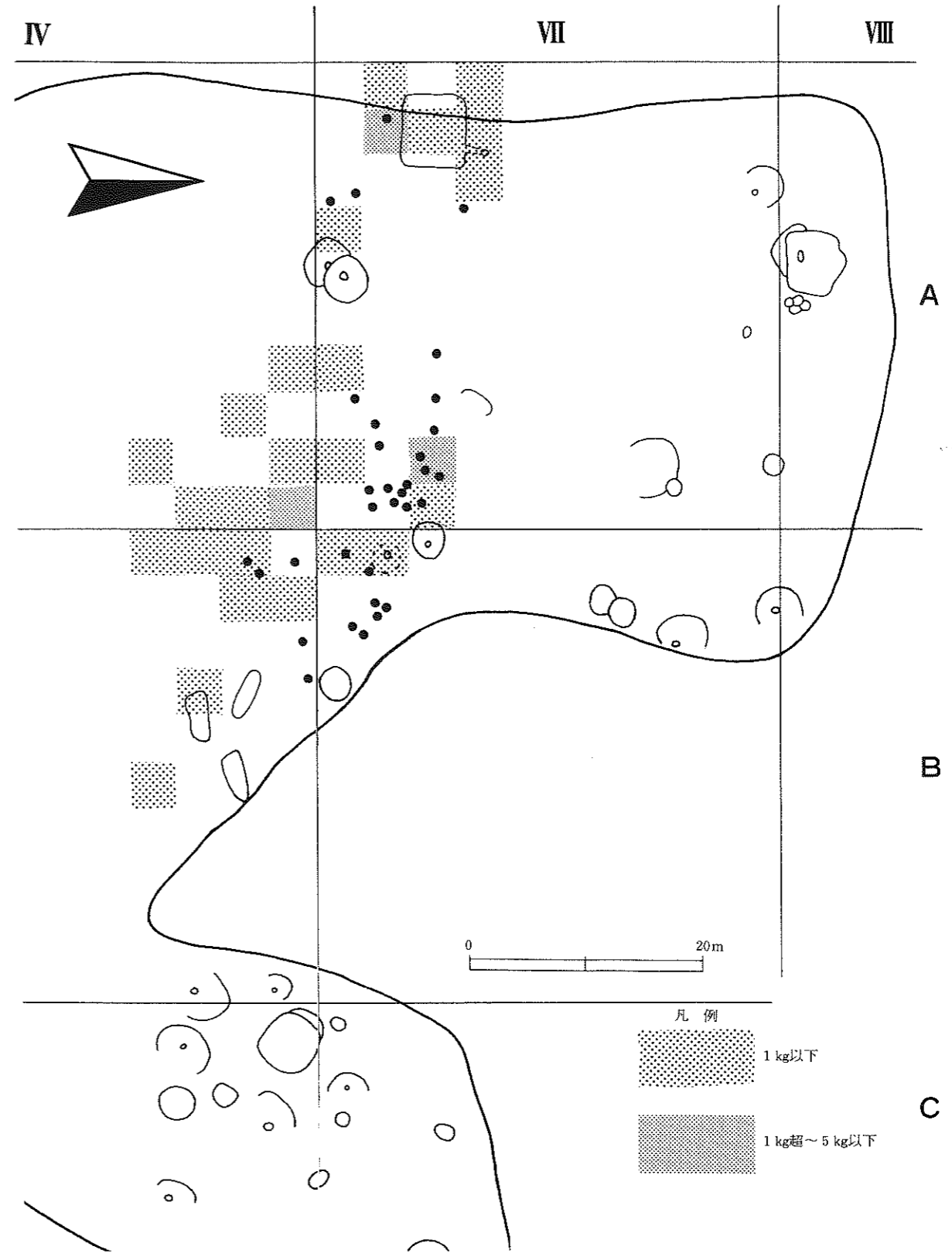
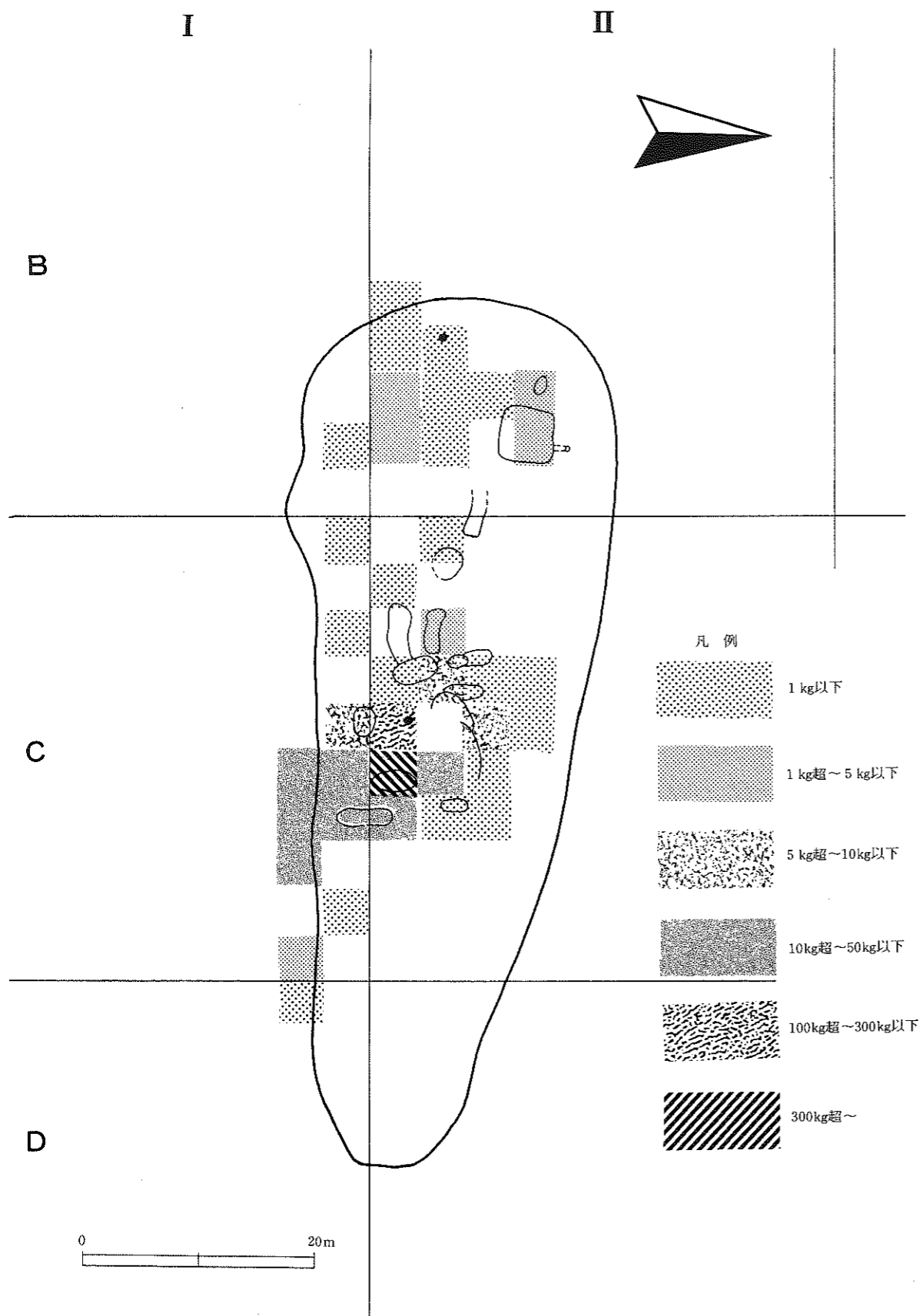
1点のみ出土した。主に縦方向の擦痕が認められる。

石製品 (第113図347~349)

石棒、砥石、不明の石製品がそれぞれ1点出土した。347は石棒か。断面形は長方形を呈し、無頭である。加工痕は不明瞭である。348は砥石と思われる。349は磨製の石製品で装飾品かあるいは下端が刃部だとすれば磨製石斧かもしれない。



第72図 遺構外鉄滓出土状況(1)飛び地



第73図 遺構外鉄滓出土状況(2)遺跡全体

3. 銭 (第113図350、351)

寛永通寶が2点出土している。いずれも一文銭の銅銭で、寛永通寶1期(1636~1659)の銭である。(兵庫埋1996)

4. 鉄製品 (写真図版93)

鉄製品は遺構外から4点出土しているが、小片がほとんどであるためここでは1点のみ掲載した。製品と思われるが、機種は不明である。

5. 鉄滓 (第72、73図)

第72図は、II C 2 e 製鉄炉群付近の遺構外の鉄滓の出土状況である。鉄滓は取り上げる際にグリット内を1㎡のブロックに分割して位置を記録した。製鉄炉群の南のII C 1 f グリットとII C 1 e グリットから多く出土していることがわかる。特にII C 1 f グリットは製鉄炉群から斜面下位にあたり鉄滓は廃棄されたかあるいは流れたかしたものであろう。I C 0 g グリットから北のグリットからの出土がないのは上の方法で記録しなかったため、グリット全体の出土量は第73図を参照されたい。

第73図は遺跡全体の遺構外の鉄滓の出土状況を示した。ただし、平成5年度調査の調査区北側及び東側の尾根の部分の記録はとっていないため図示されていない。

飛び地では前述したように製鉄炉群の斜面下位に分布しているほか、炭窯の周辺に少量と、II B 4 h 住居跡の周辺及び南側に分布している。

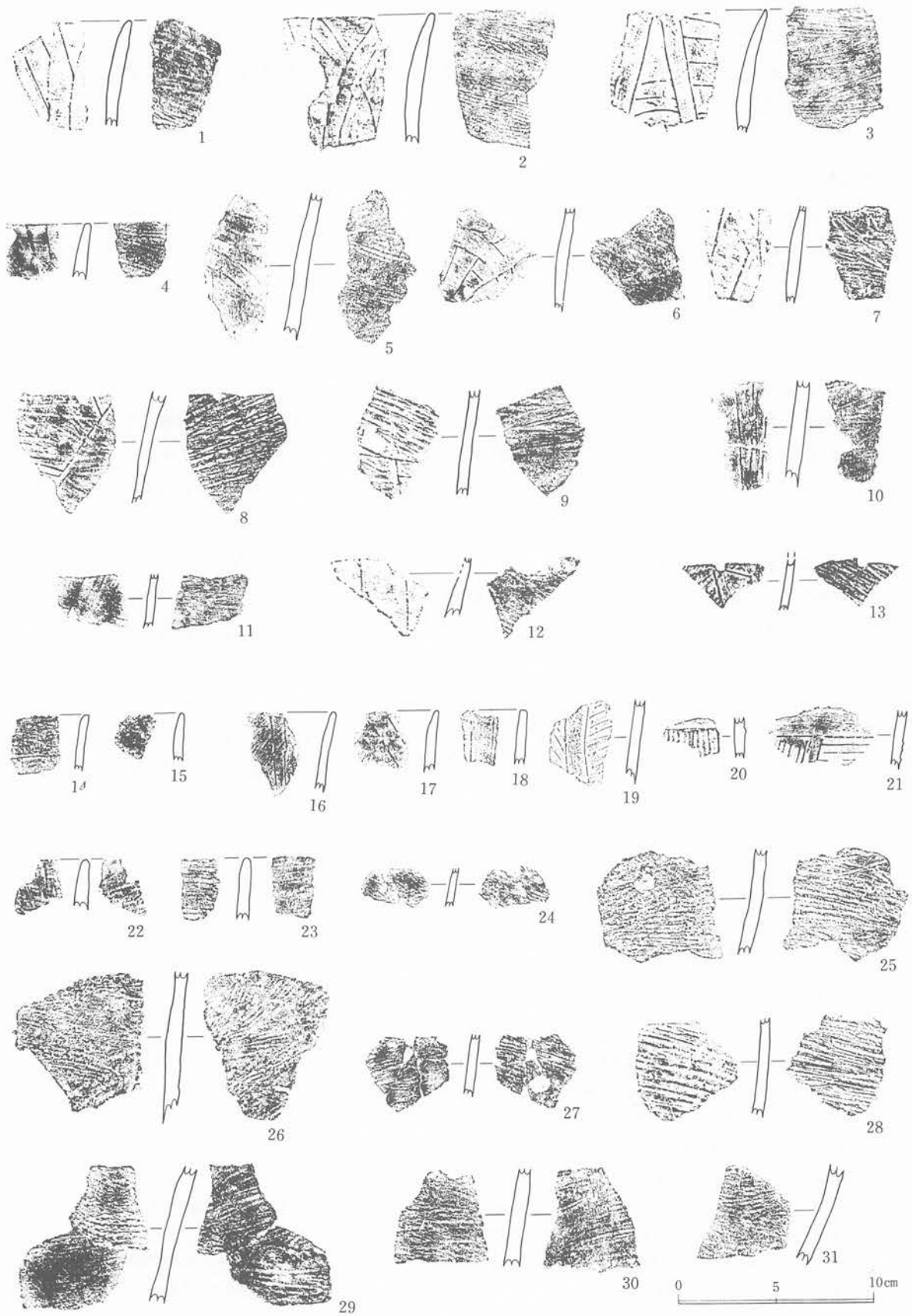
また、調査区中央の谷筋からは少量ずつではあるが、広い範囲に鉄滓が分布する。顕著な集中が見られないことからおそらく西方の谷頭方向か北側の尾根筋から流れてきたものであろう。また、調査区中央の分布とはやや離れた西端のVII A 3 b 住居跡付近からも鉄滓が出土している。

飛び地から出土した遺構外の鉄滓の総量は1,006.1kg、調査区中央の谷筋からの出土総量は16.5kg、計1,022.6kgである。(高橋佐知子)

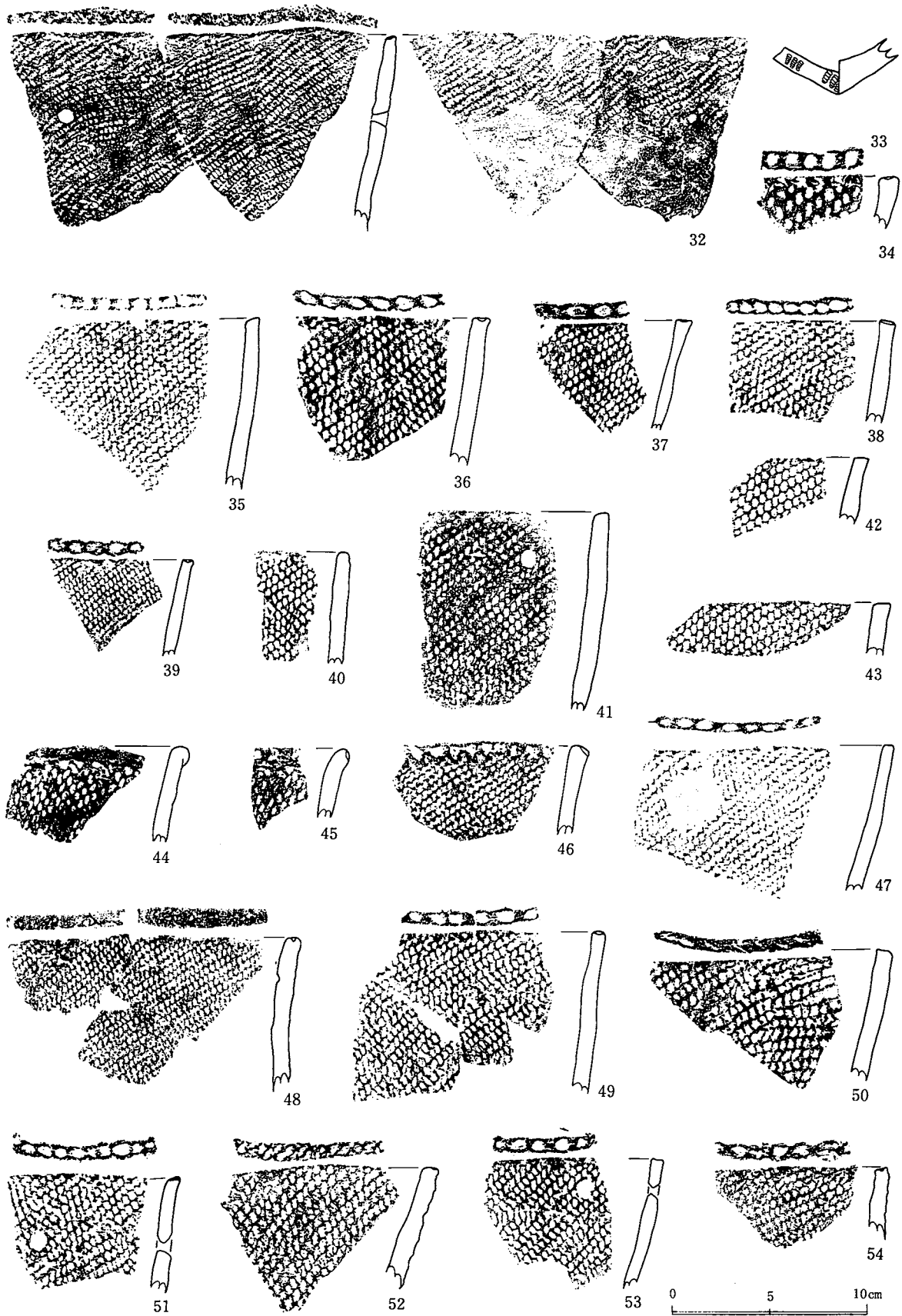
1 t の
鉄 滓

引用参考文献

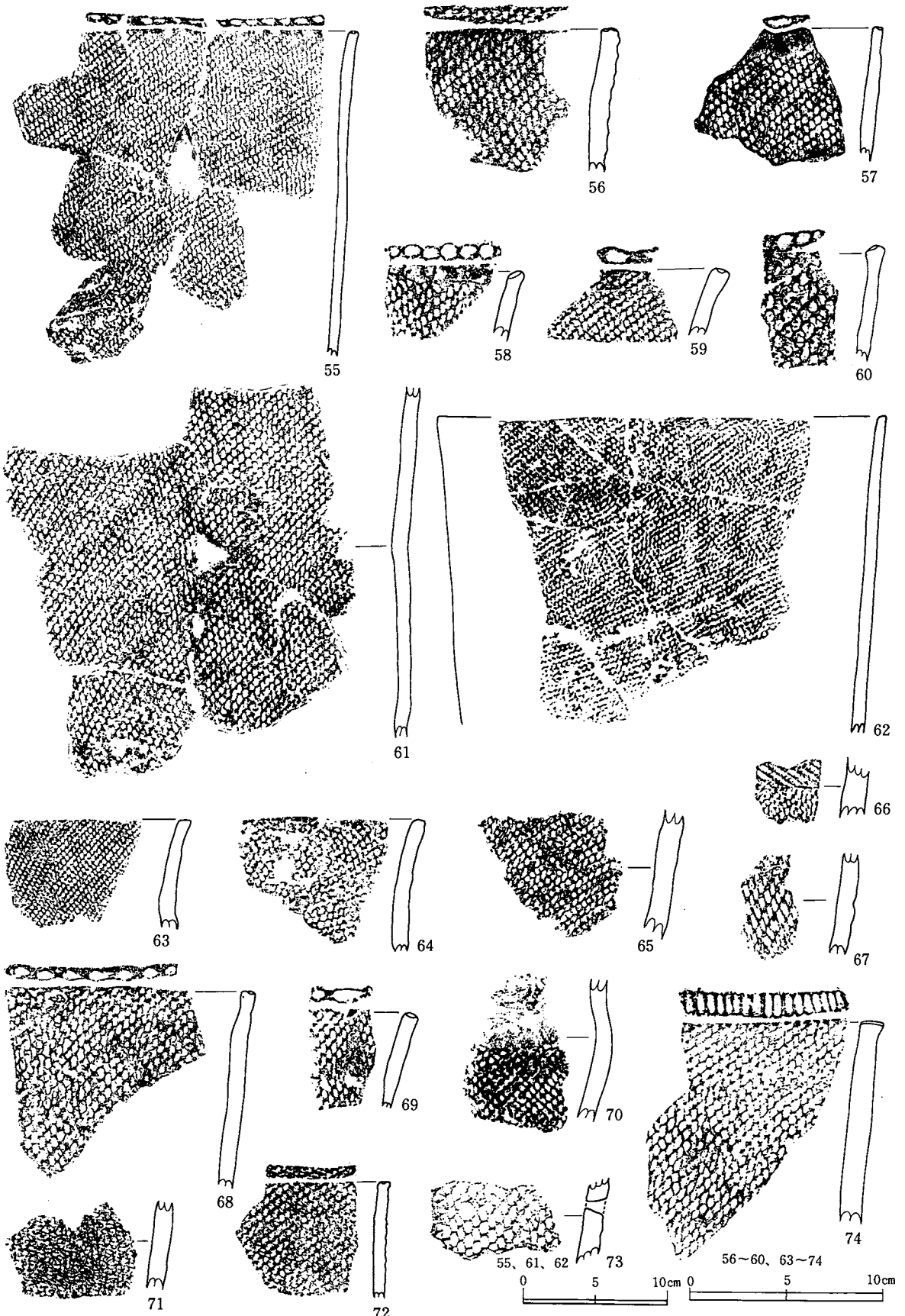
- 青森県教育委員会1980「長七谷地貝塚」(第57集)
1985「表館遺跡発掘調査報告書」(第91集)
兵庫埋蔵銭調査会1996「日本出土銭総覧」
(助岩手県埋蔵文化財センター)1983「上里遺跡発掘調査報告書」(第55集)
1992「経塚長根遺跡・経塚森発掘調査報告書」(第174集)
1995「柳上遺跡発掘調査報告書」(第213号)
青森県階上町教育委員会1989「白座遺跡野場遺跡発掘調査報告書」
水沢市教育委員会1982「駆上遺跡」(第7集)
大迫町教育委員会1986「観音堂遺跡」(第11集)
滝沢村教育委員会1987「仏沢III遺跡」(第5集)
相原淳一 1989「奥北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年」『考古学雑誌』76-1
熊谷常正 1983「岩手県における縄文時代前期土器群の成立」『岩手県立博物館研究報告』第1号
1989「岩手県の早期後半から前期初頭の土器群について」第4回縄文文化検討会シンポジウム発表資料
高橋亜貴子 1992「東北地方縄文時代前期前葉組縄文について」『東北文化論のための先史学歴史学論集』
興野義一 1967~1969「大木式土器理解のために(I)~(V)」『考古学ジャーナル』13、16、18、24、32



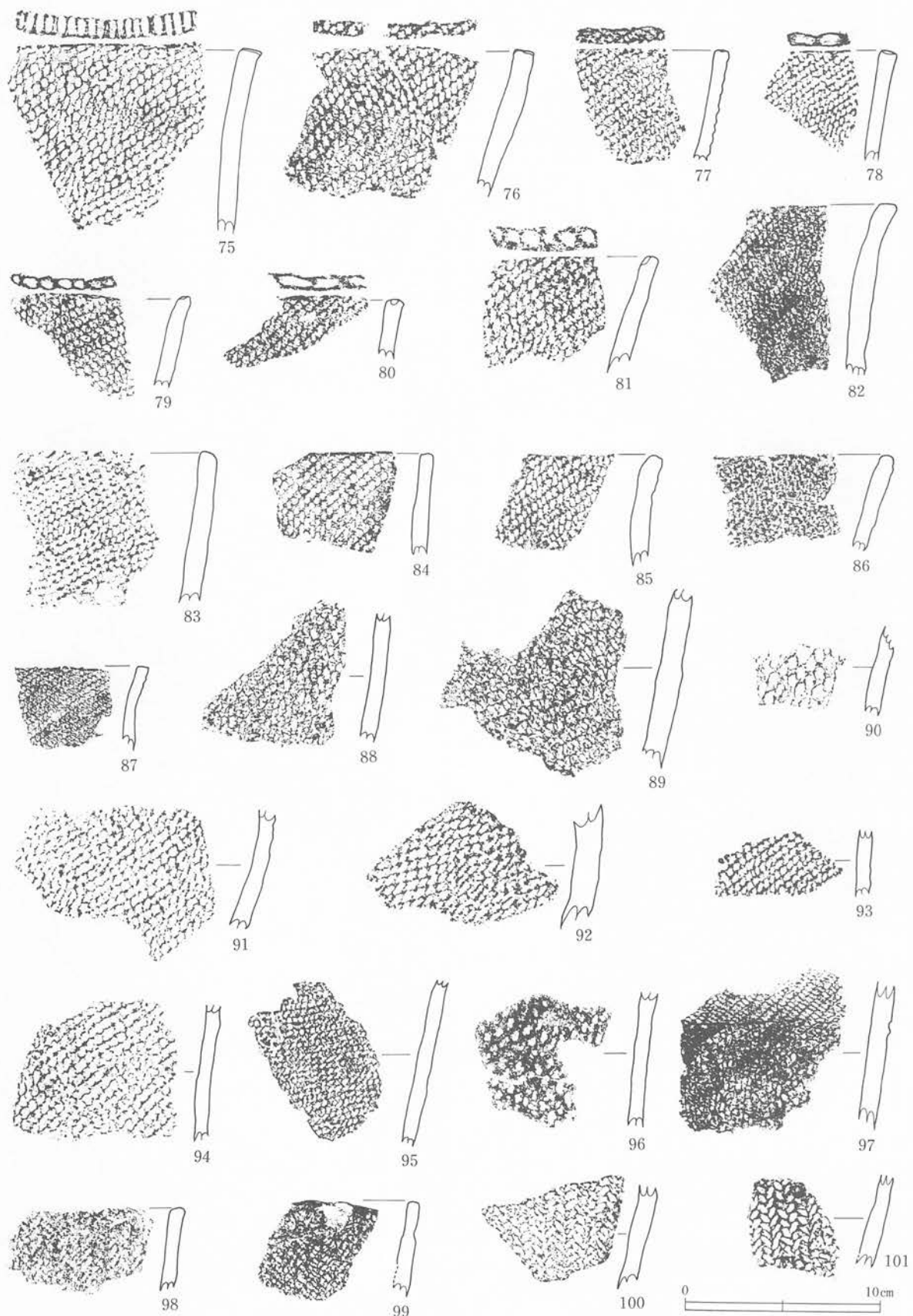
第74図 遺構外出土遺物 土器 1



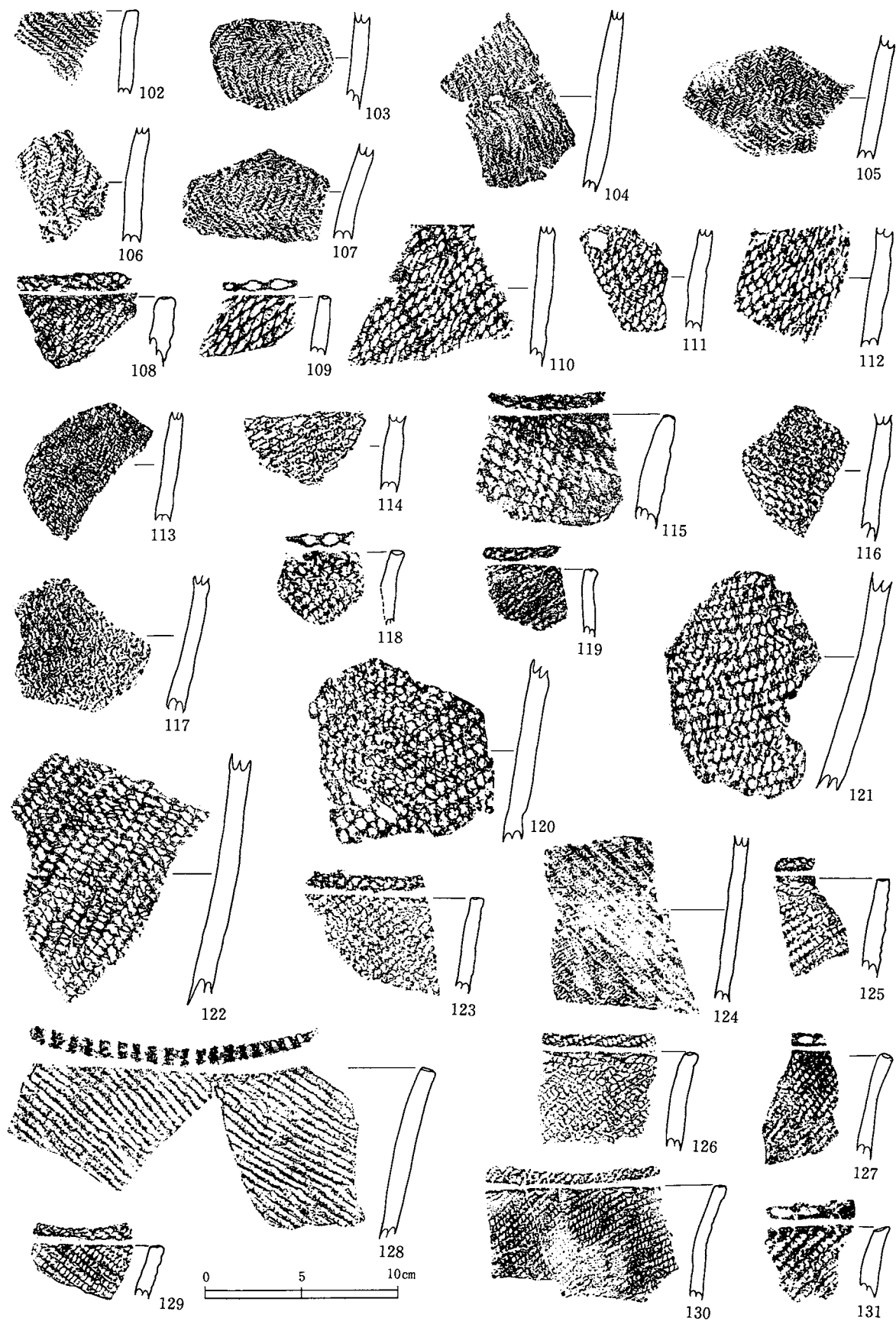
第75圖 遺構外出土遺物 土器 2



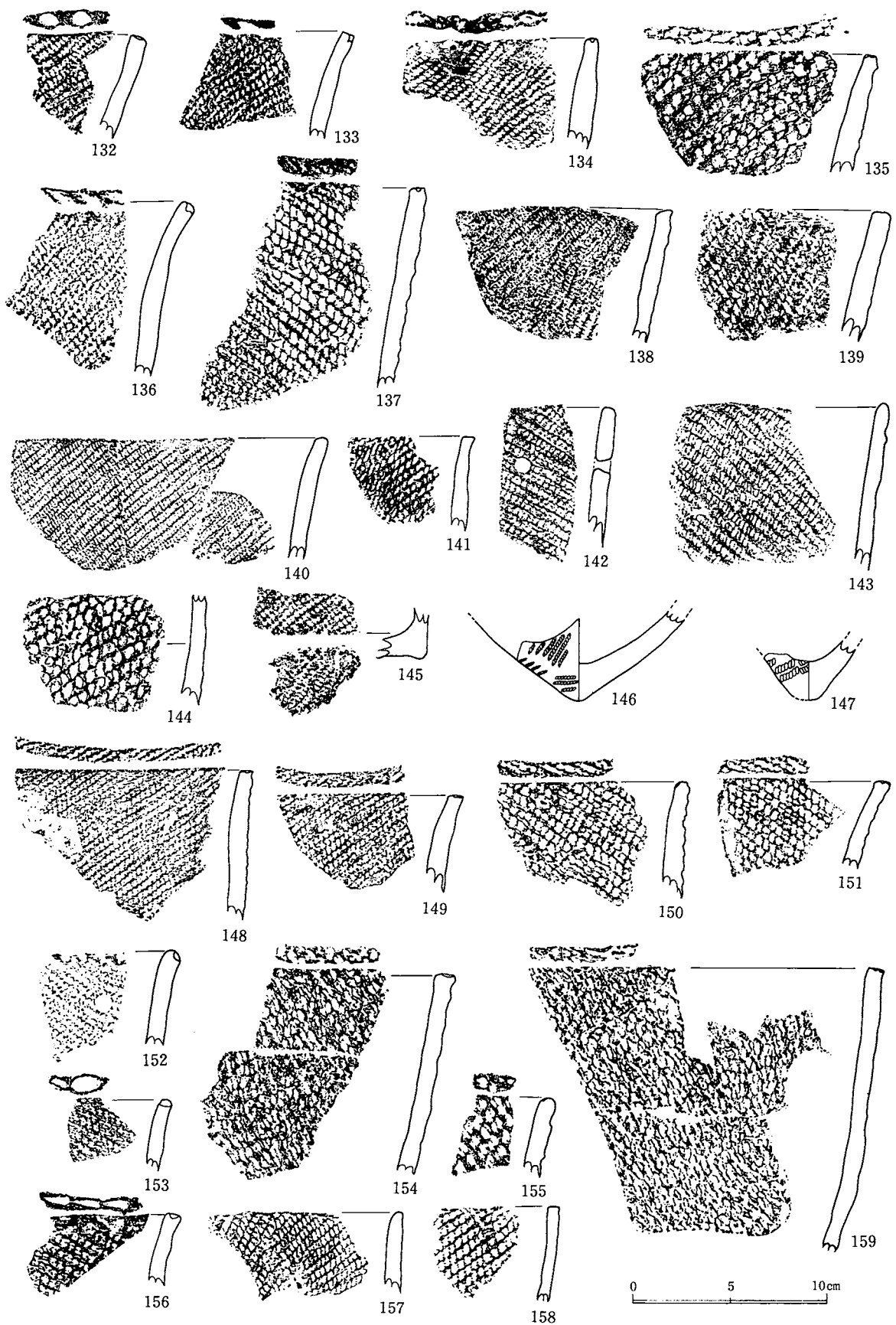
第76图 遺構外出土遺物 土器 3



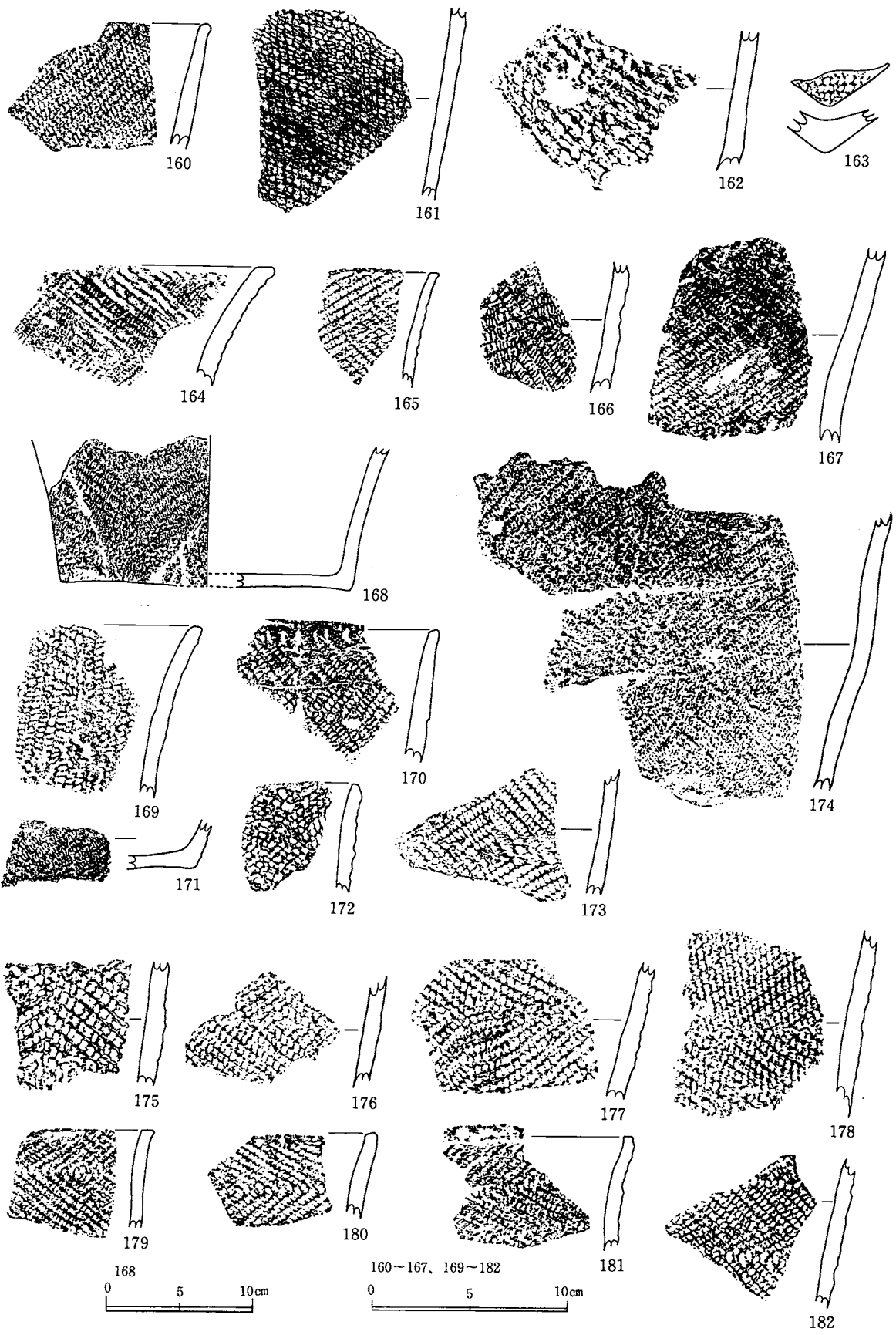
第77图 遺構外出土遺物 土器 4



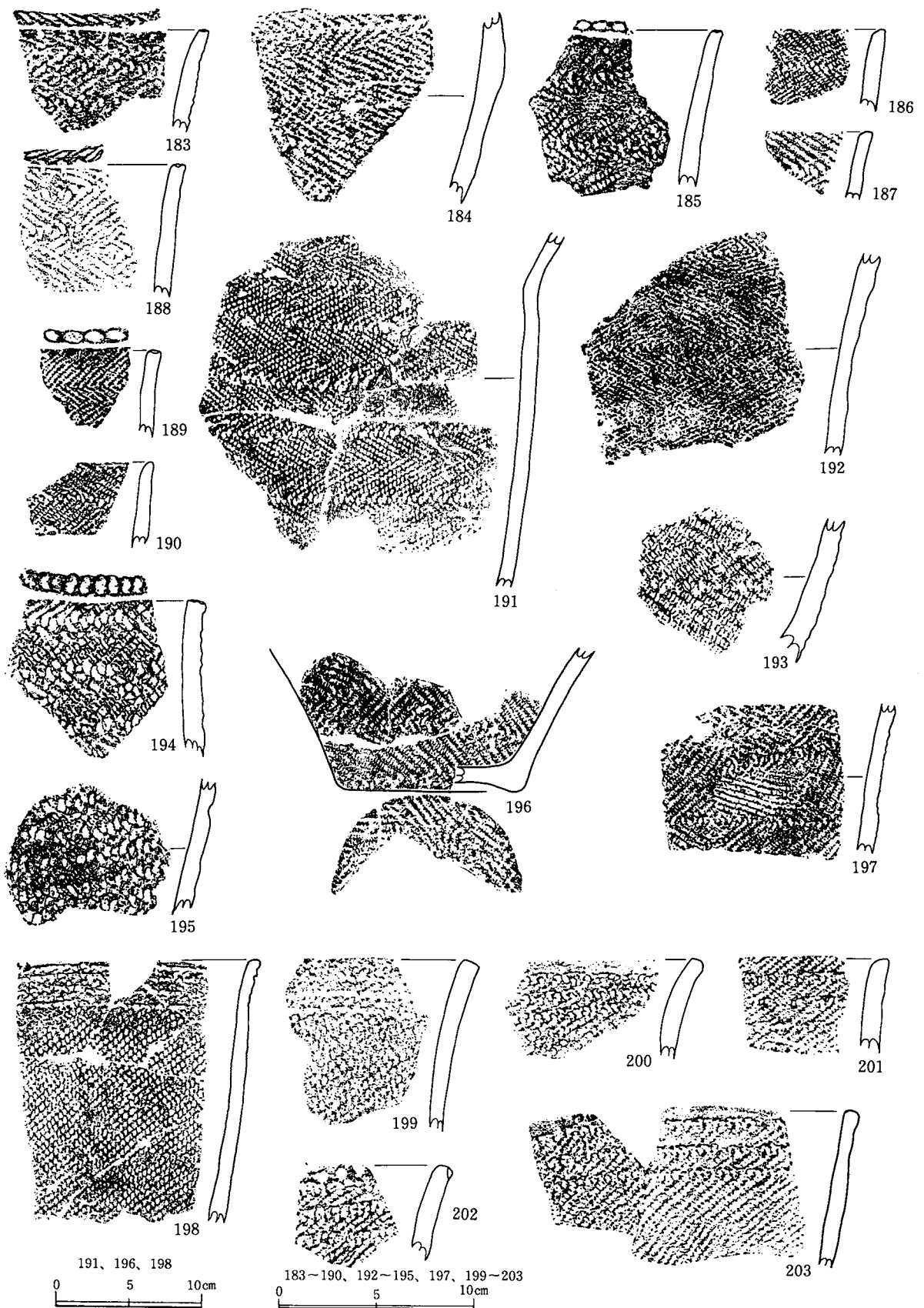
第78图 遺構外出土遺物 土器 5



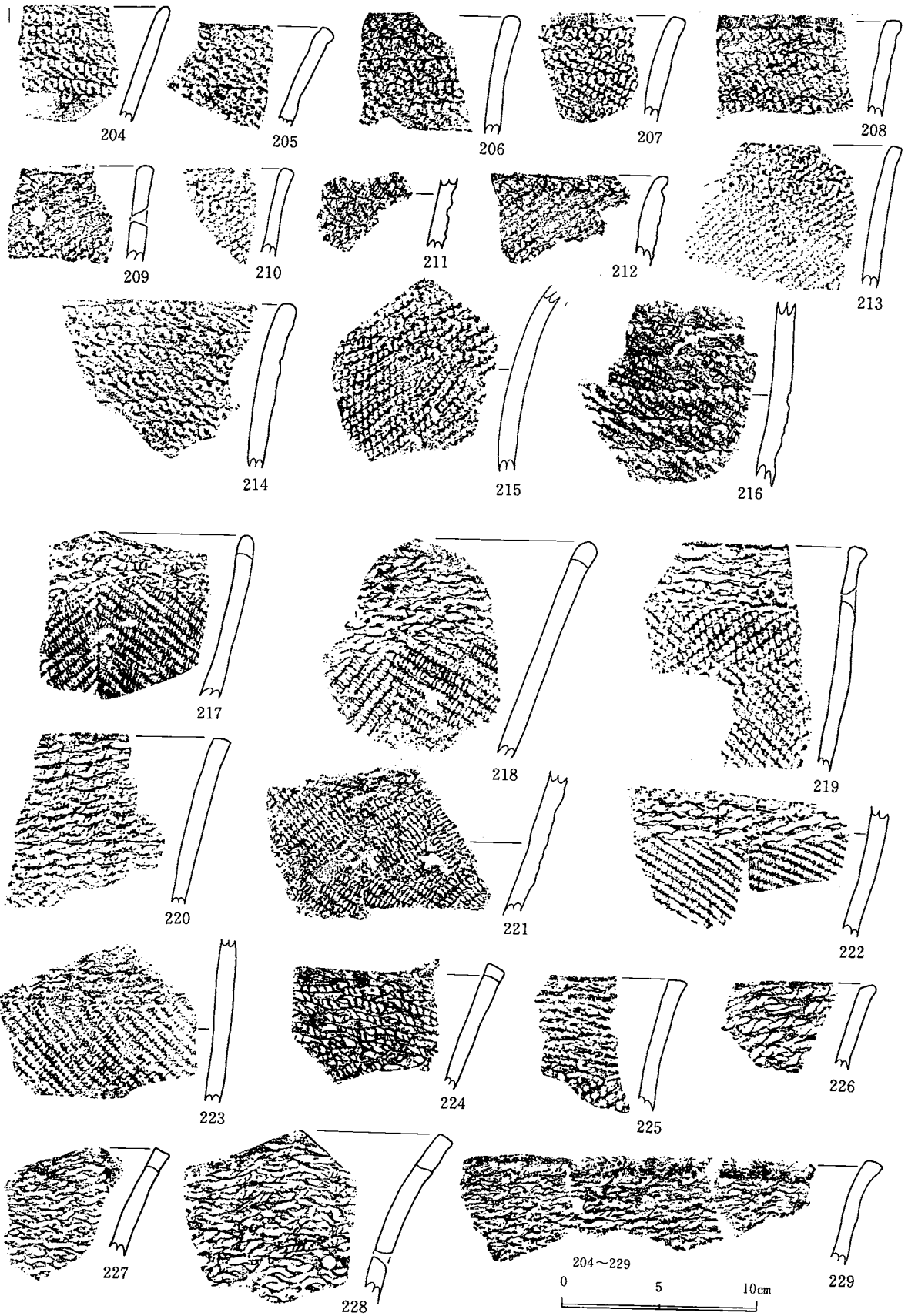
第79图 遺構外出土遺物 土器 6



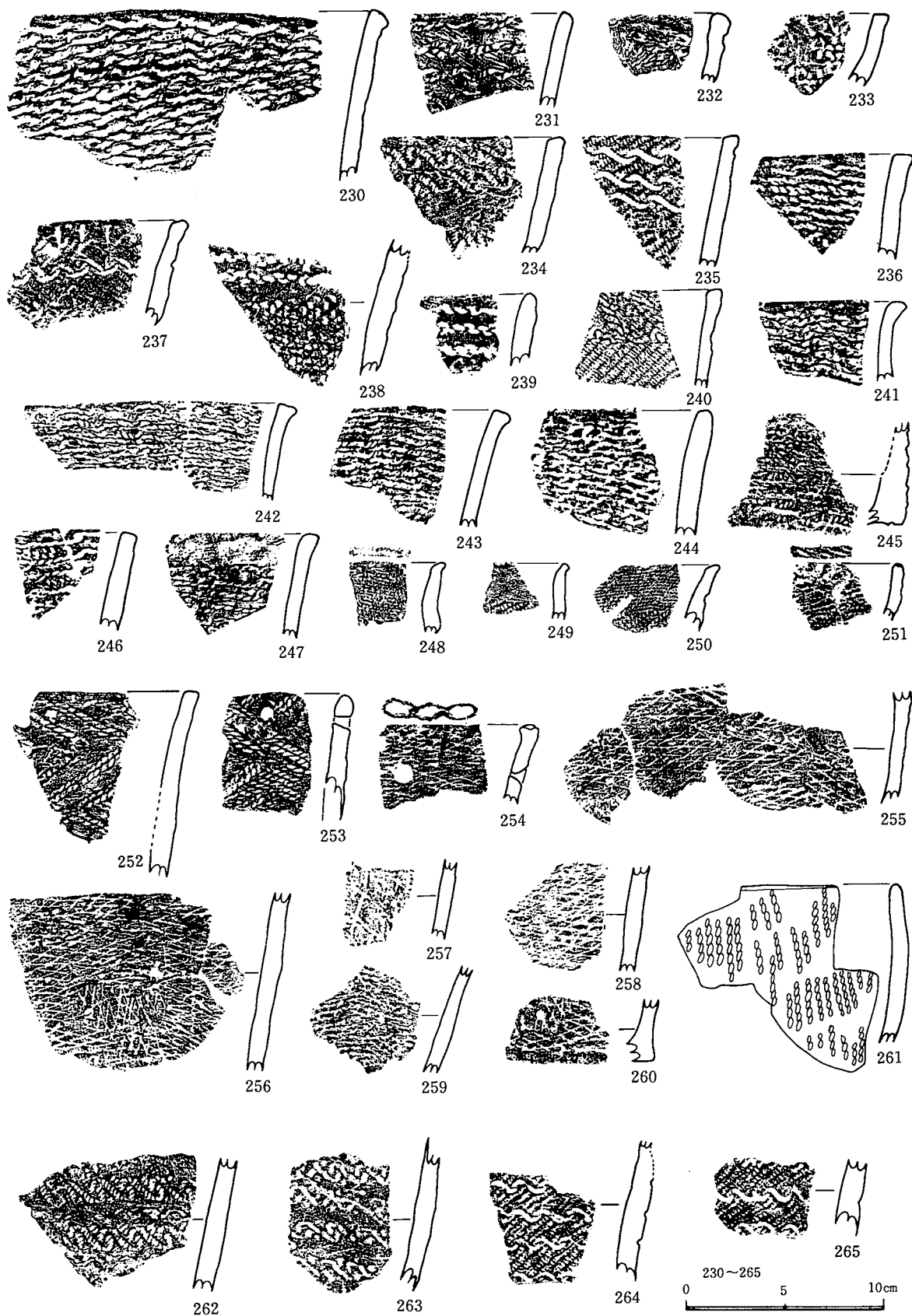
第80图 遺構外出土遺物 土器 7



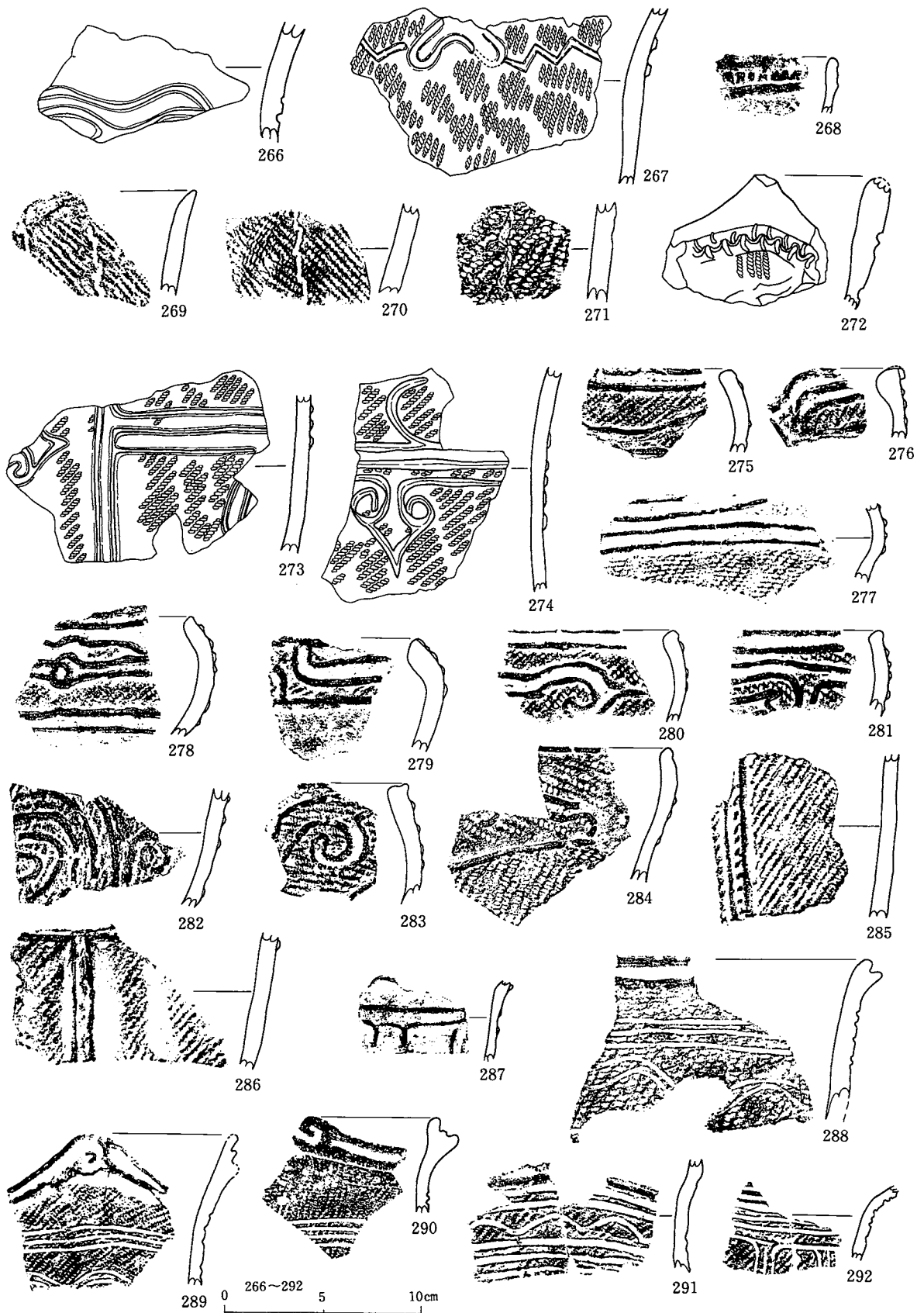
第81图 遺構外出土遺物 土器 8



第82図 遺構外出土遺物 土器 9



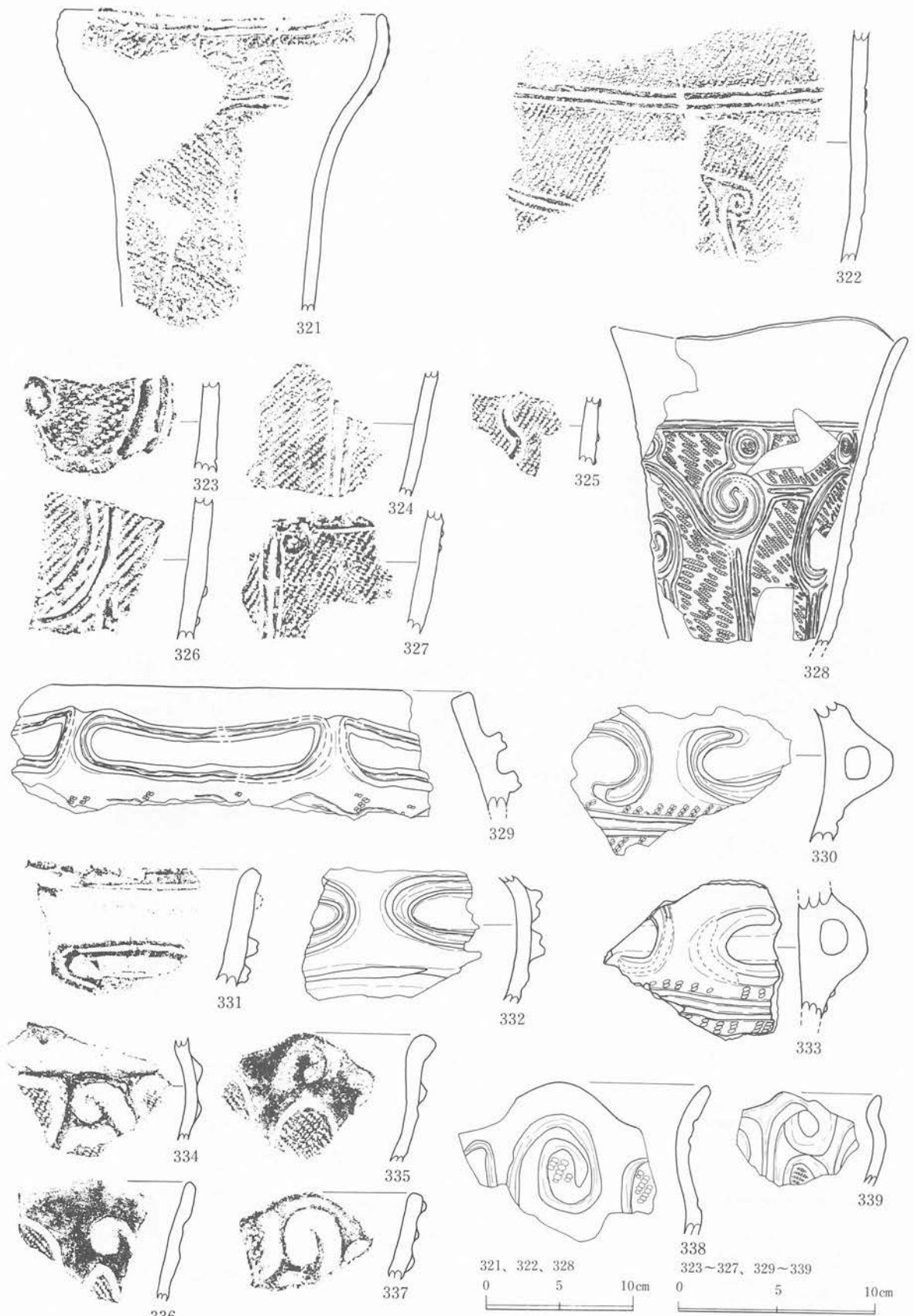
第83图 遺構外出土遺物 土器10



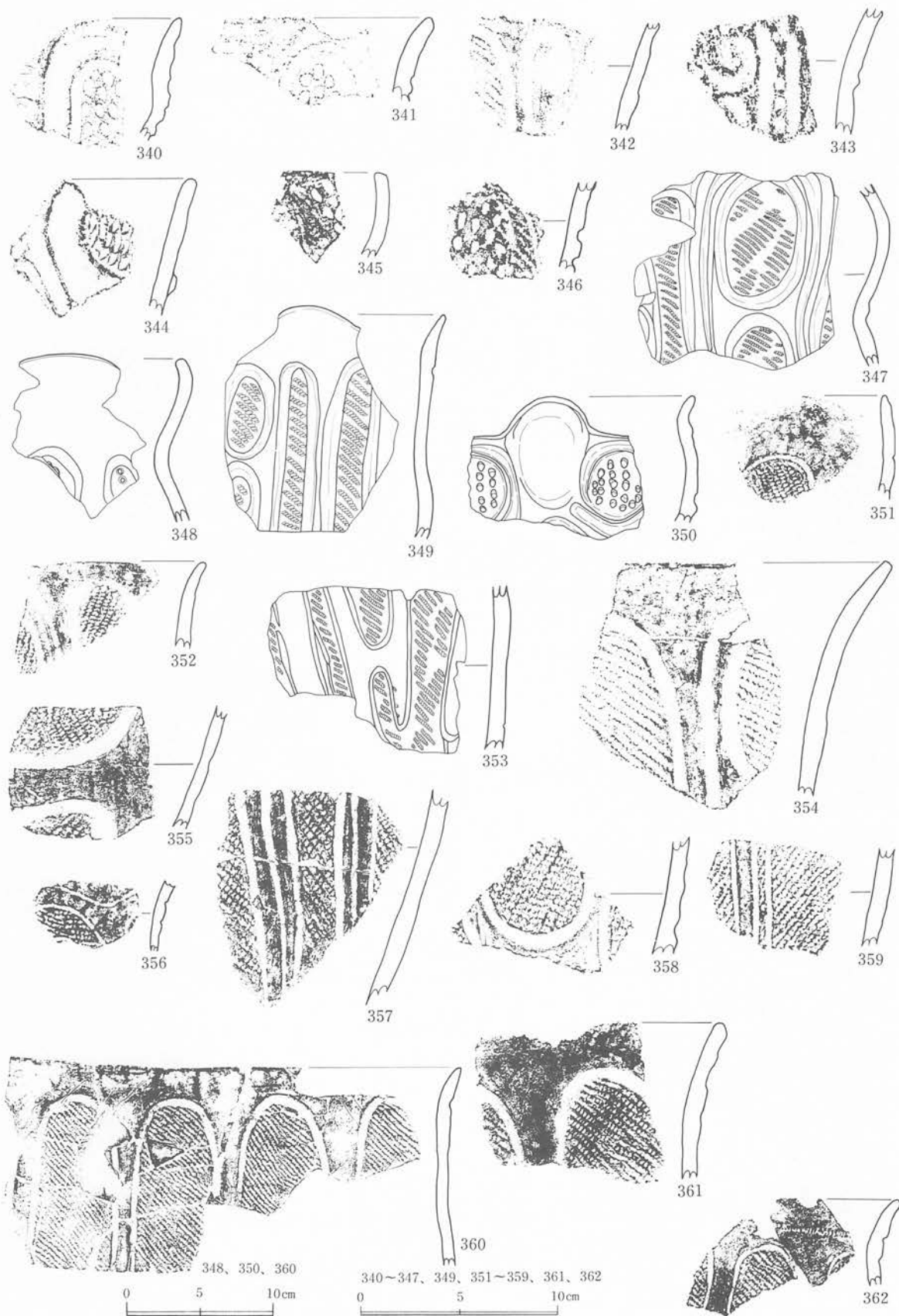
第84图 遺構外出土遺物 土器11



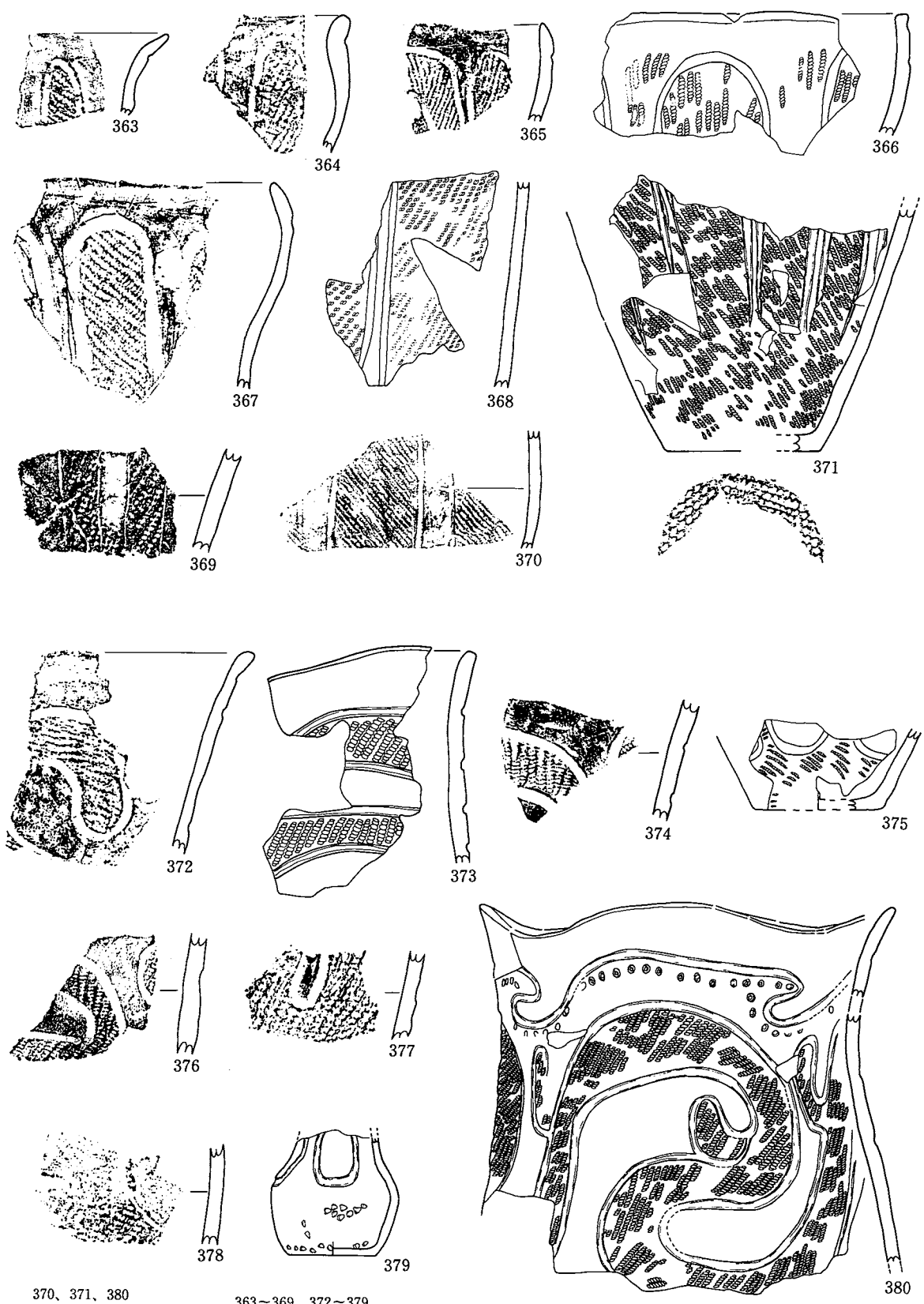
第85図 遺構外出土遺物 土器12



第86図 遺構外出土遺物 土器13



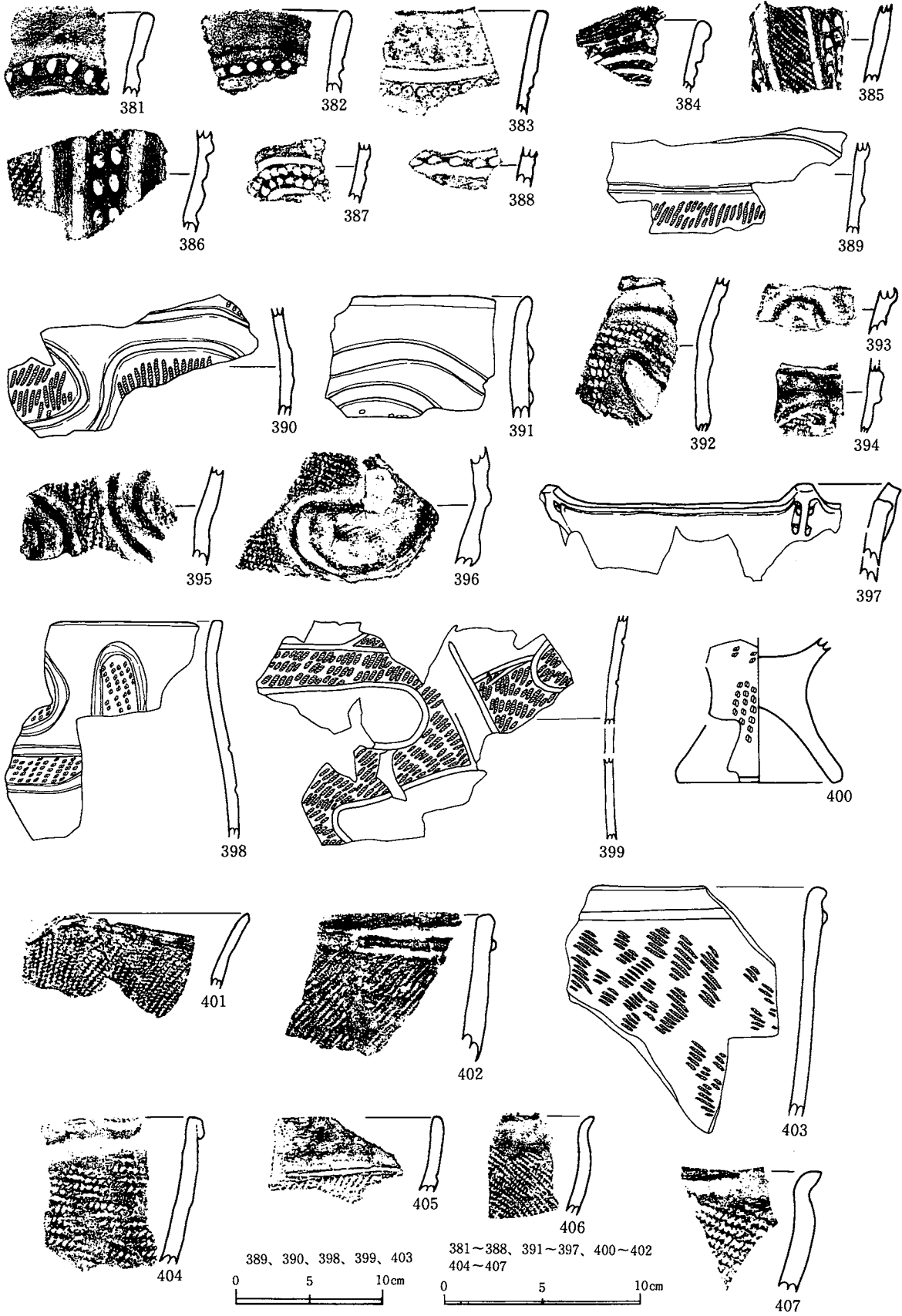
第87図 遺構外出土遺物 土器14



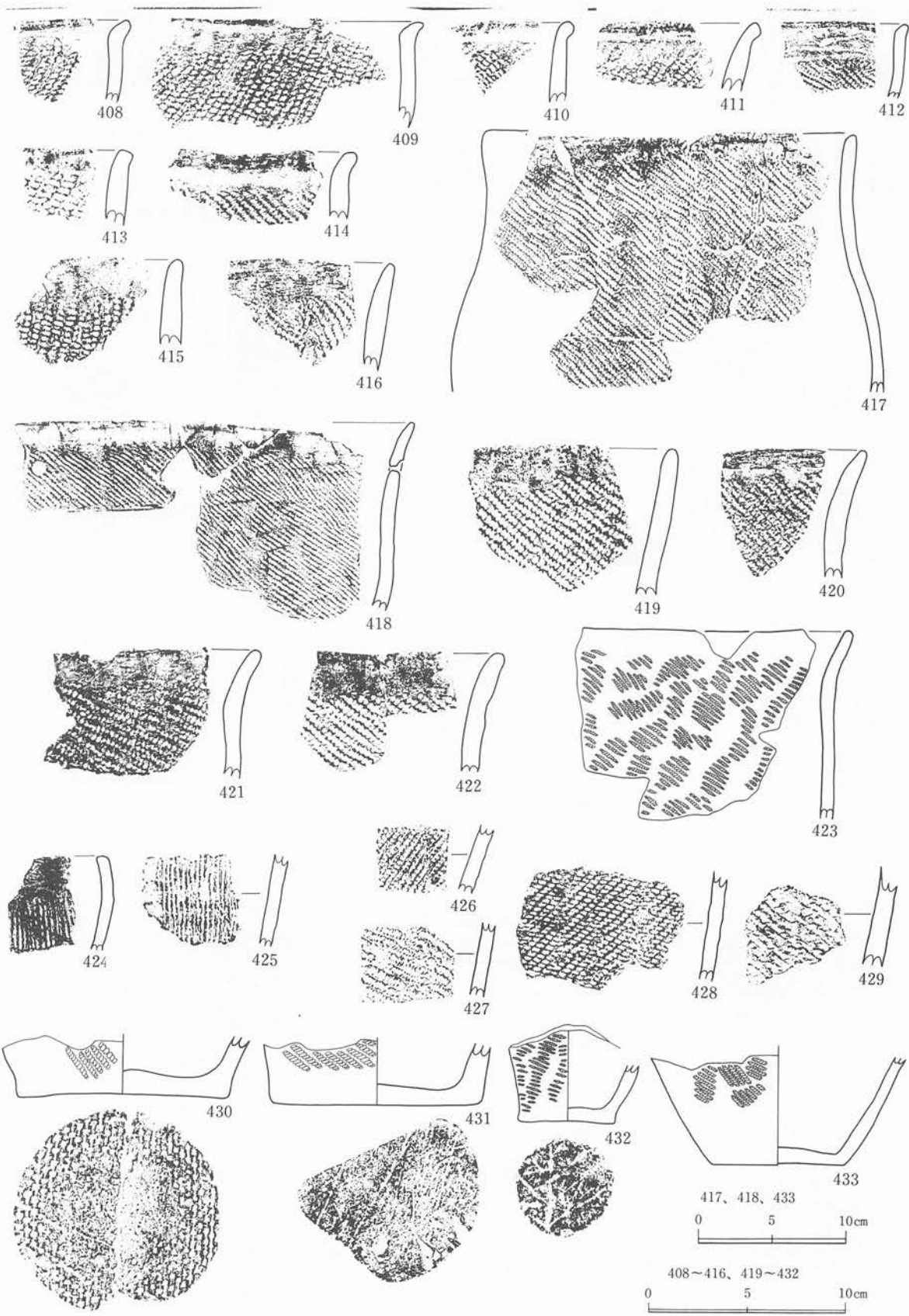
370、371、380
0 5 10cm

363~369、372~379
0 5 10cm

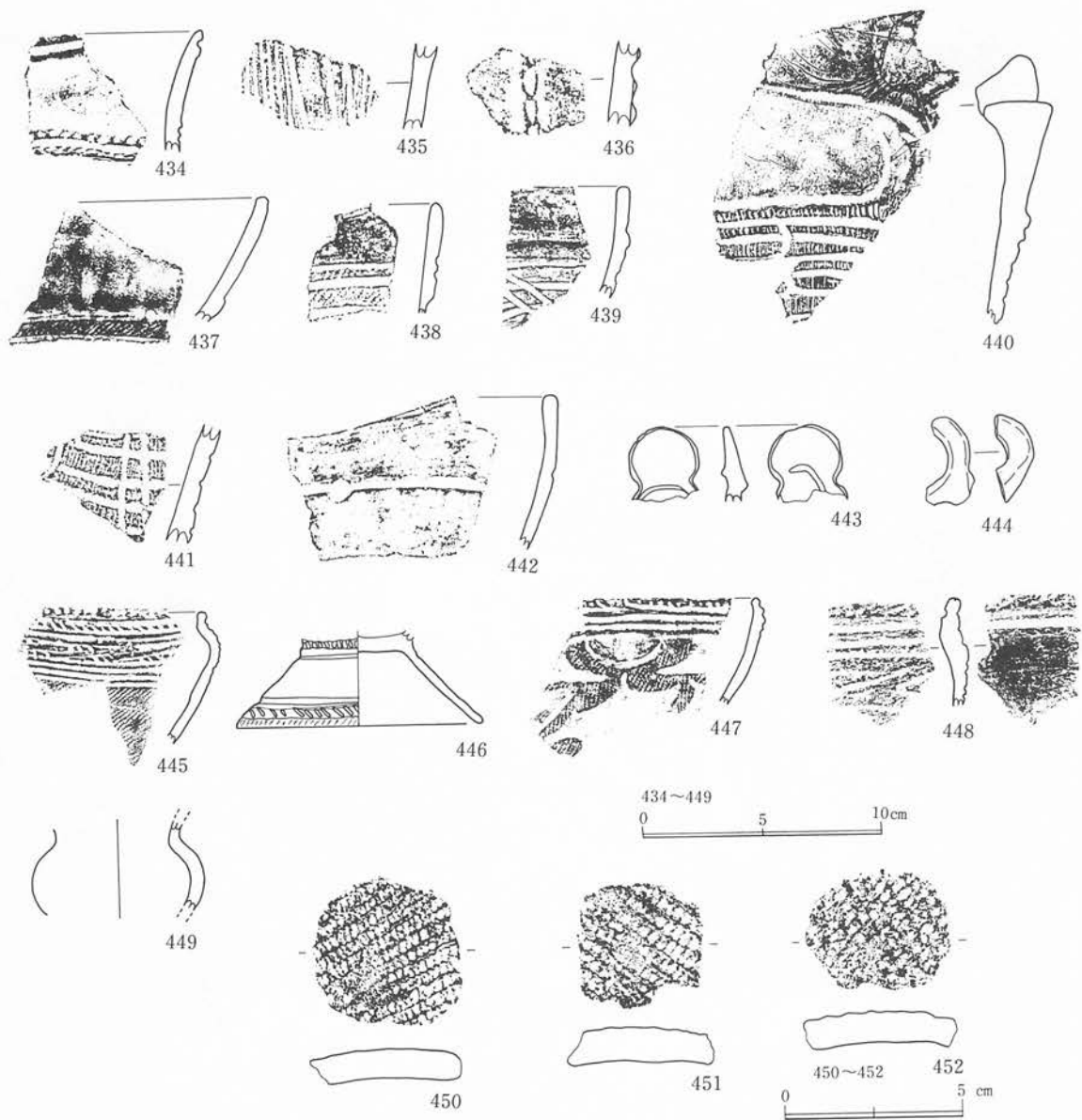
第88図 遺構外出土遺物 土器15



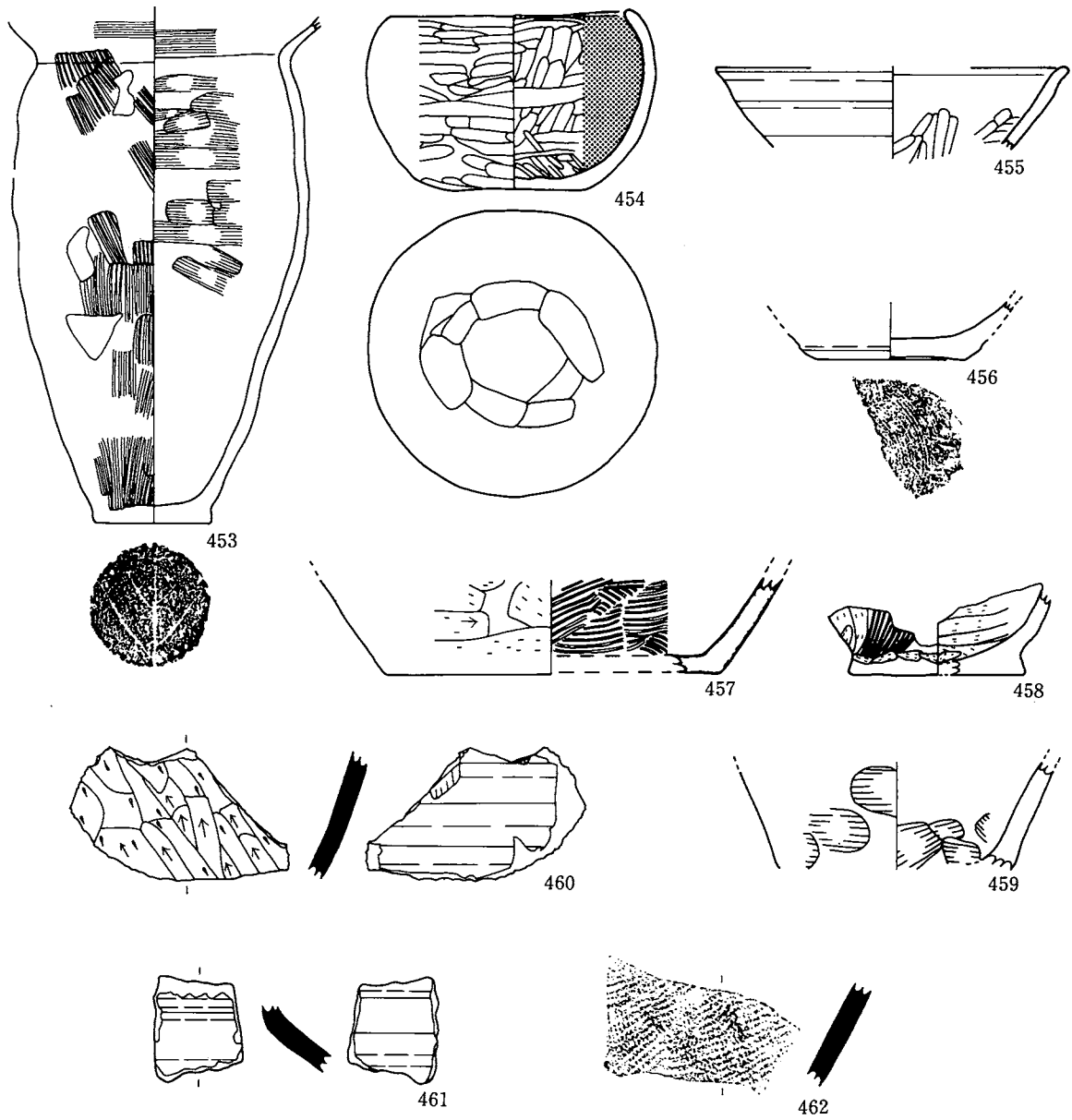
第89图 遺構外出土遺物 土器16



第90図 遺構外出土遺物 土器17



第91図 遺構外出土遺物 土器18

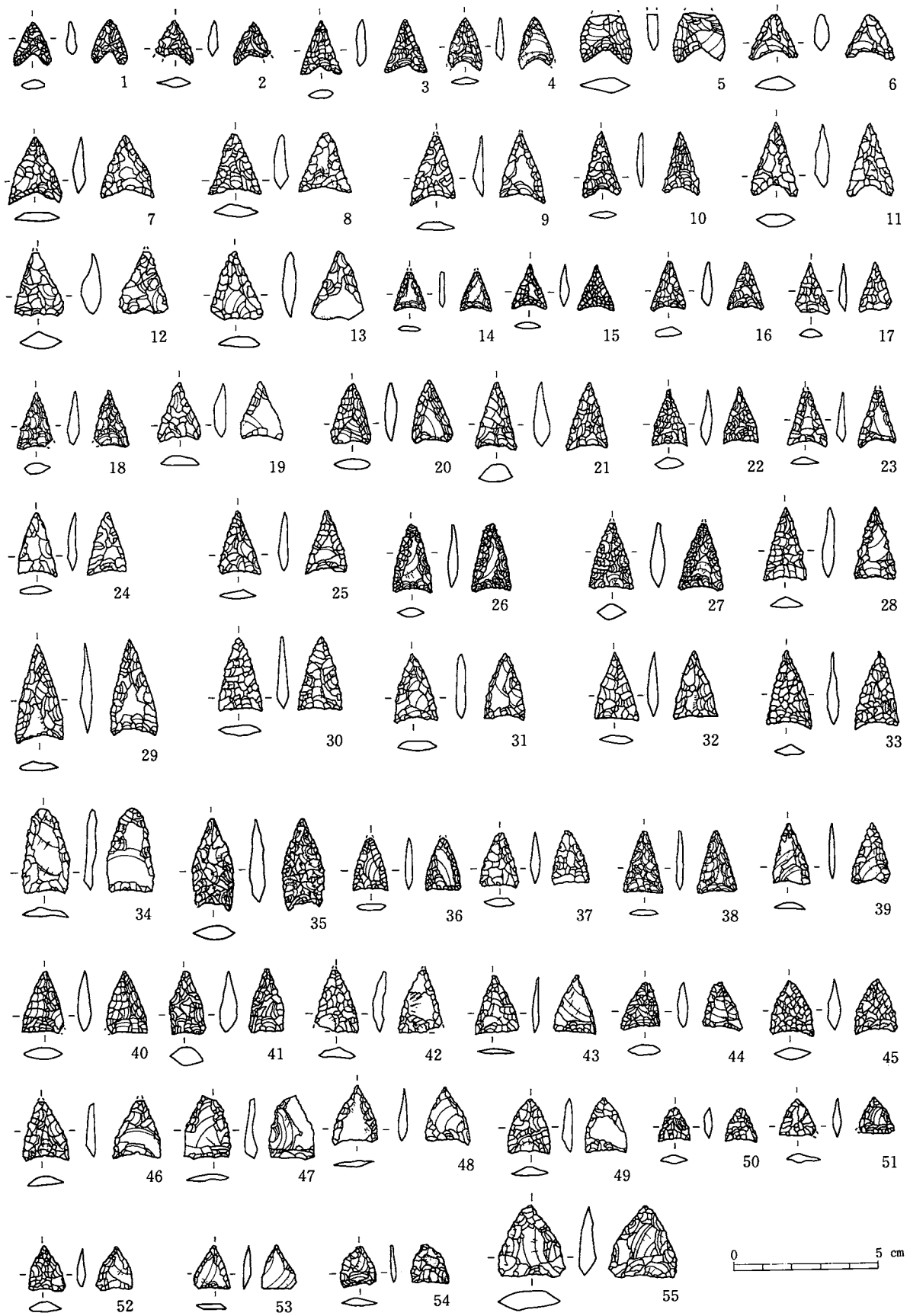


453
0 5 10cm

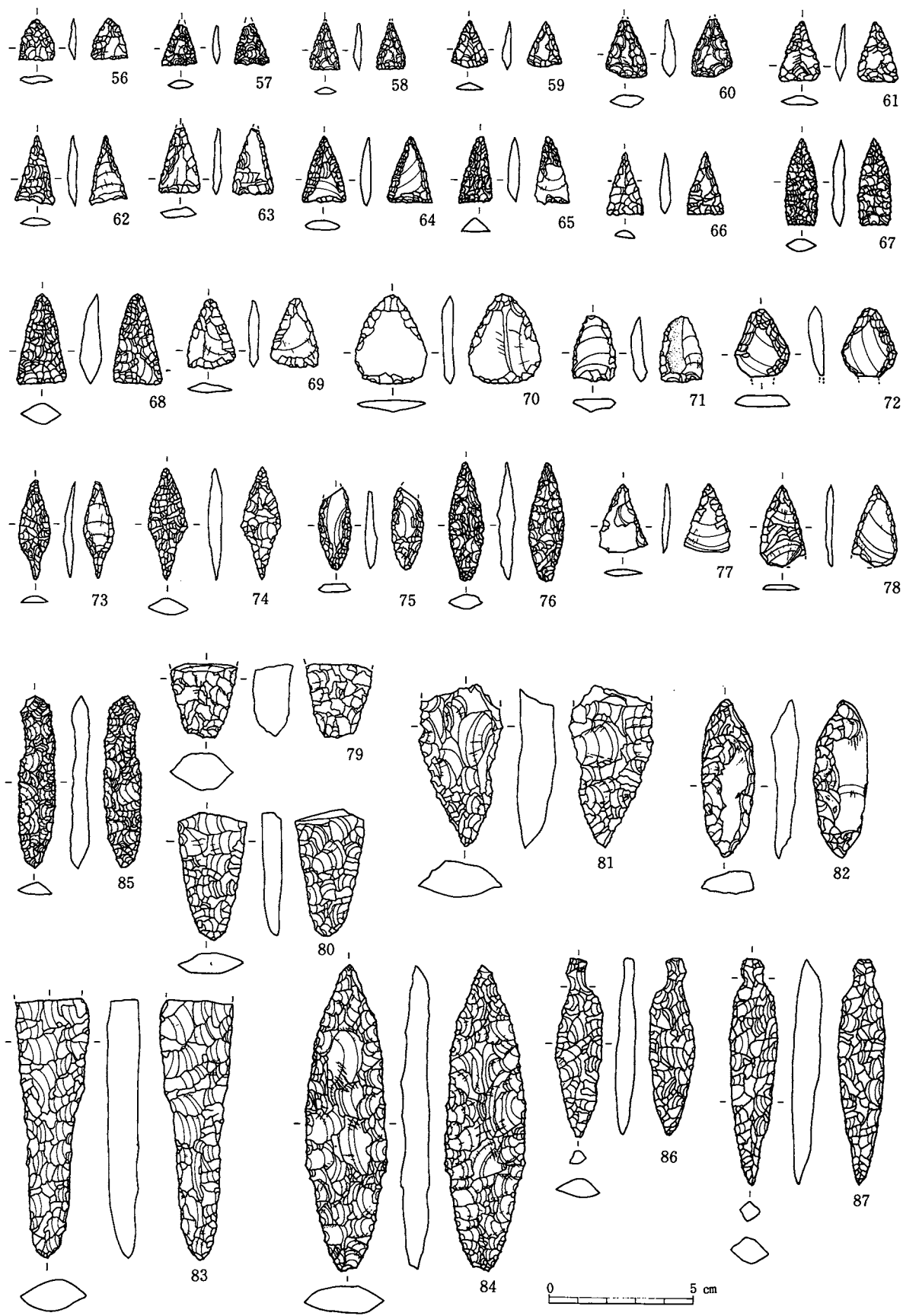
454~462
0 5 10cm

464
0 5 cm

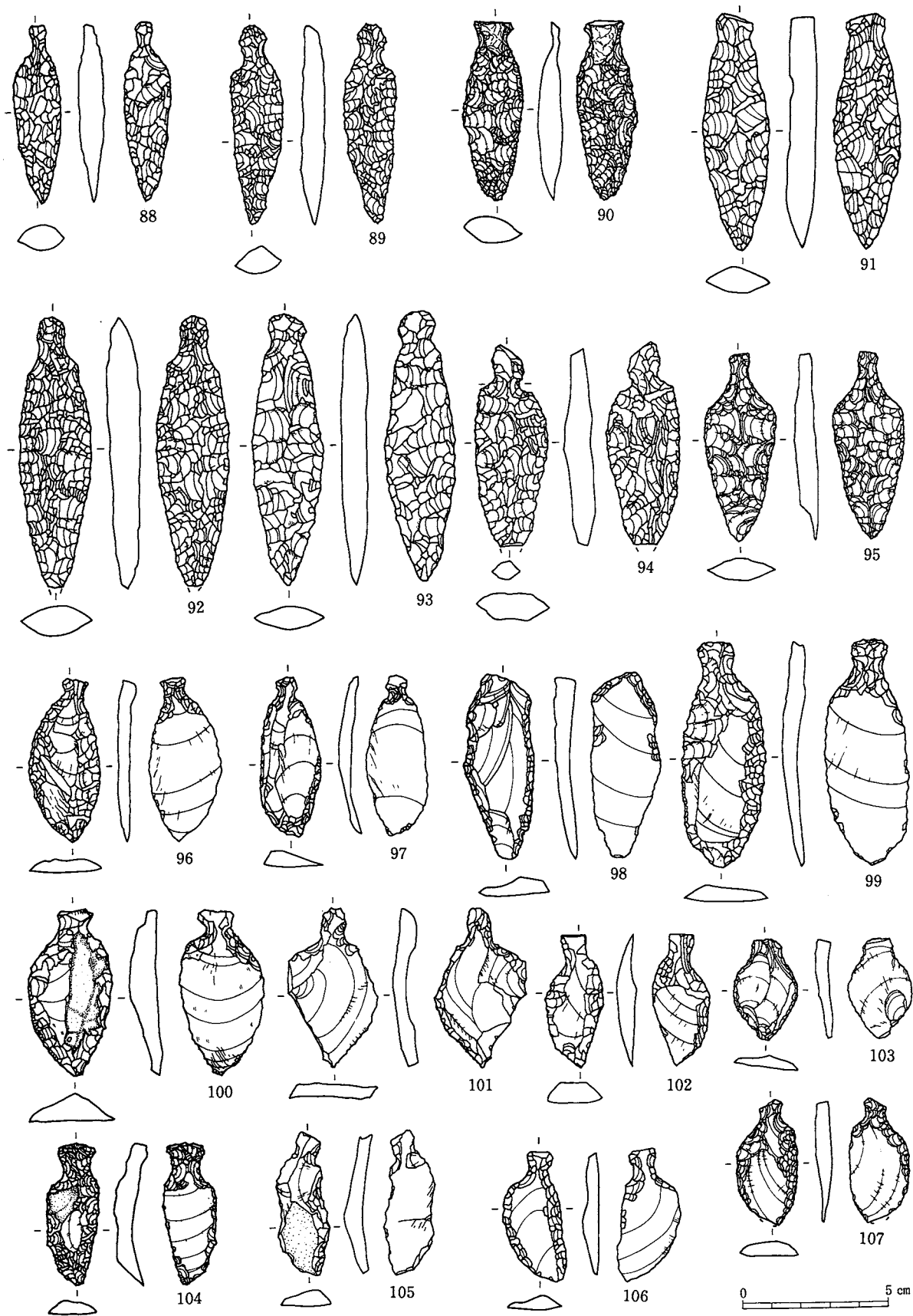
第92図 遺構外出土遺物 土器19



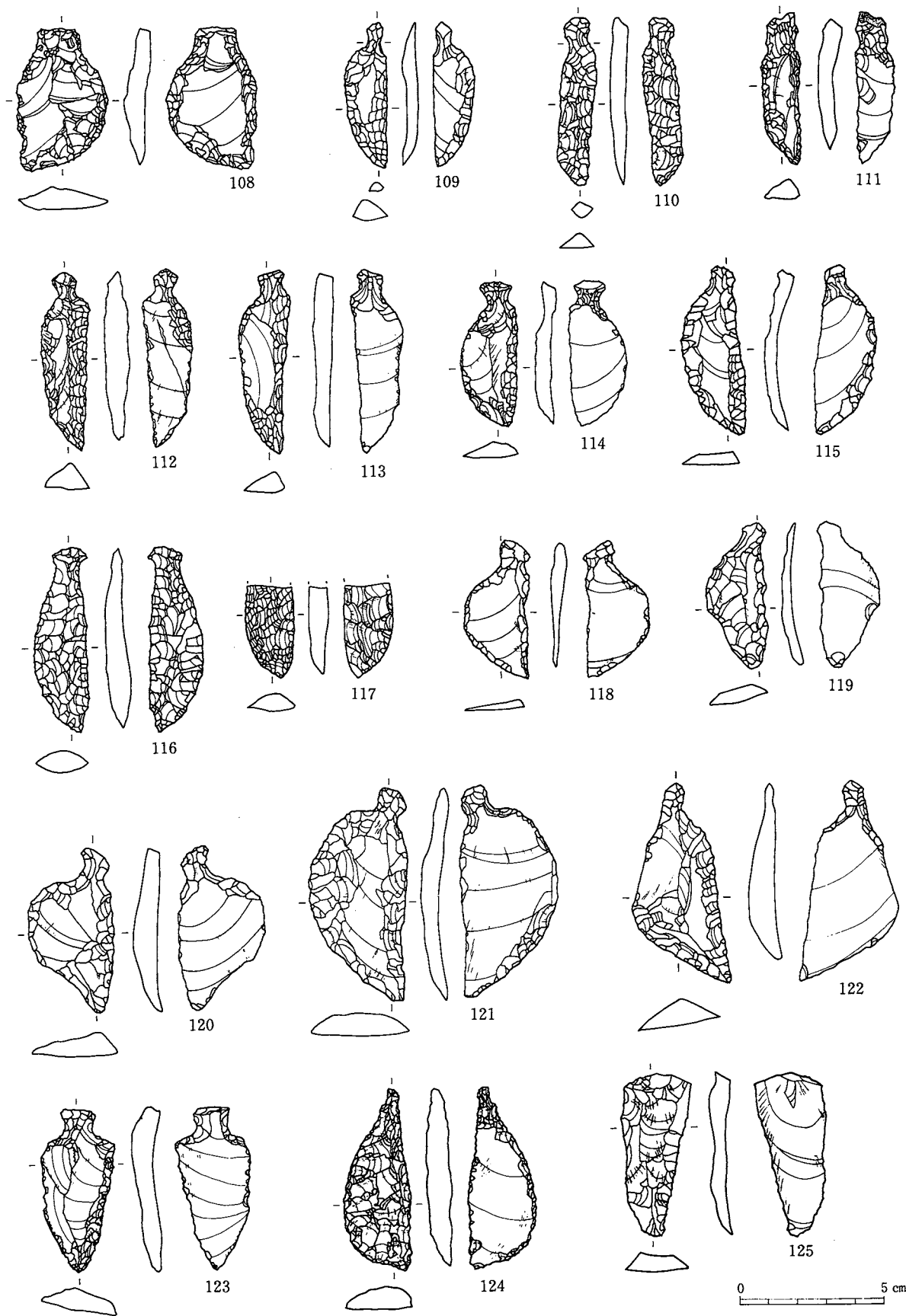
第93图 遺構外出土遺物 石器 1



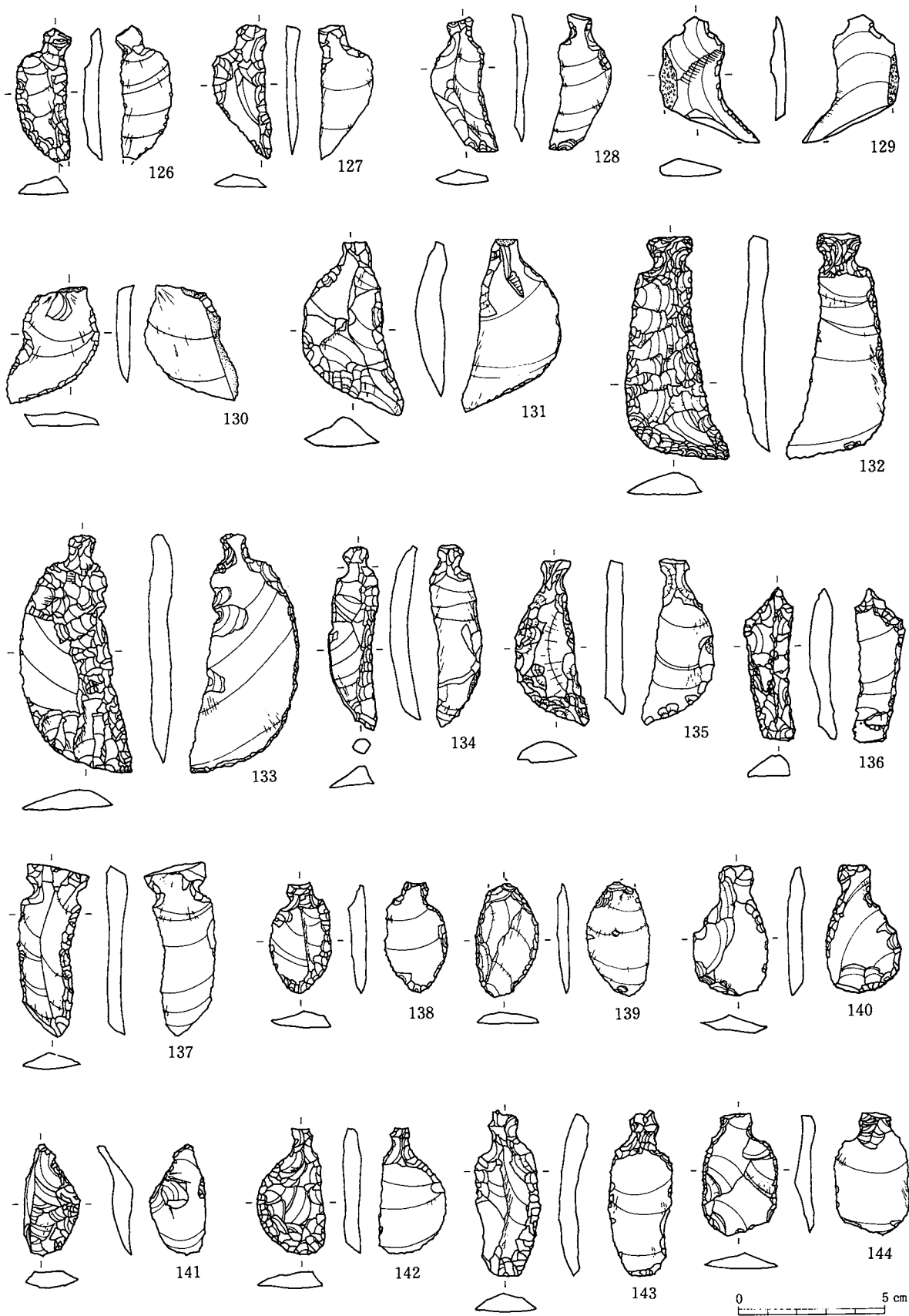
第94图 遺構外出土遺物 石器 2



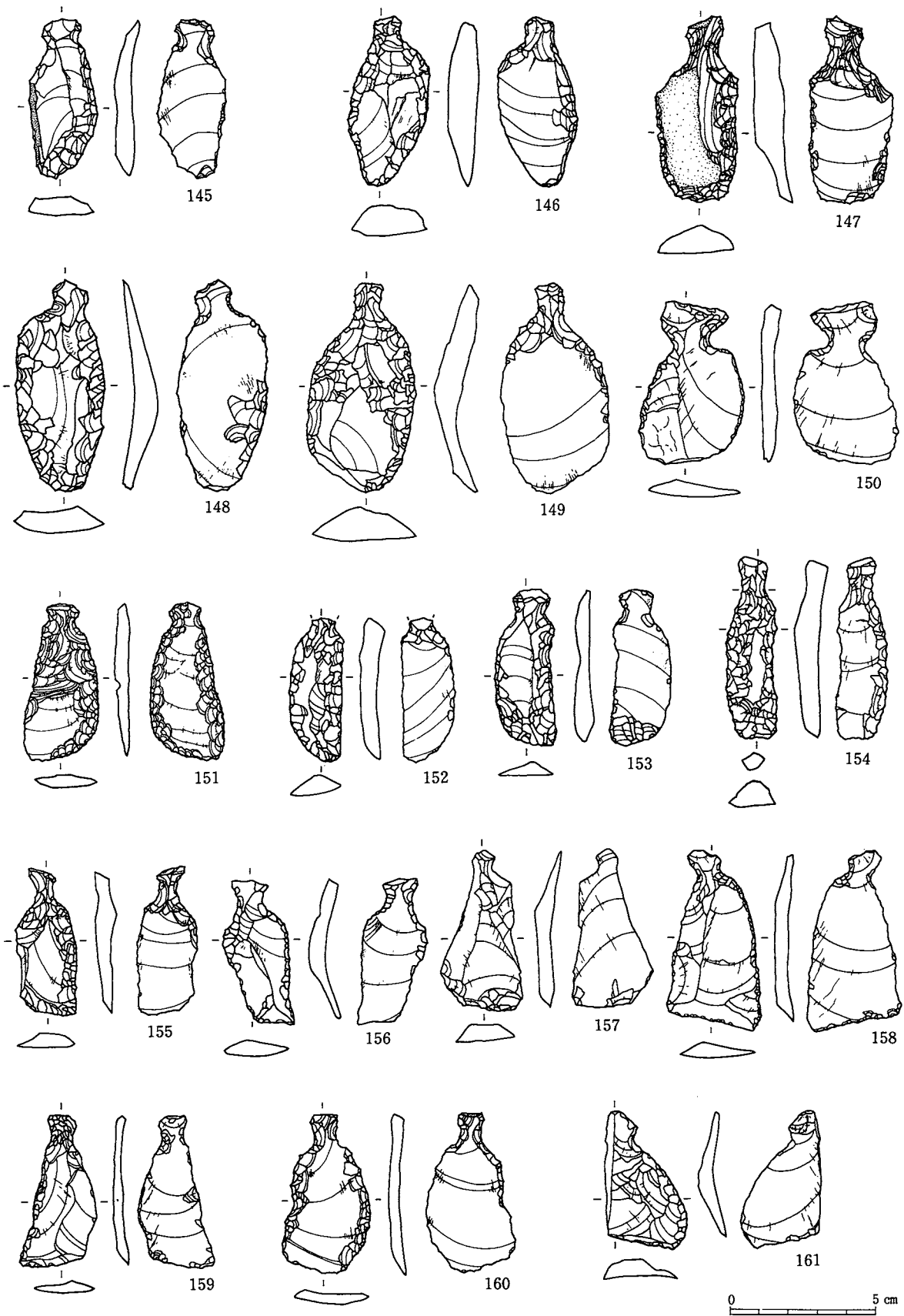
第95図 遺構外出土遺物 石器 3



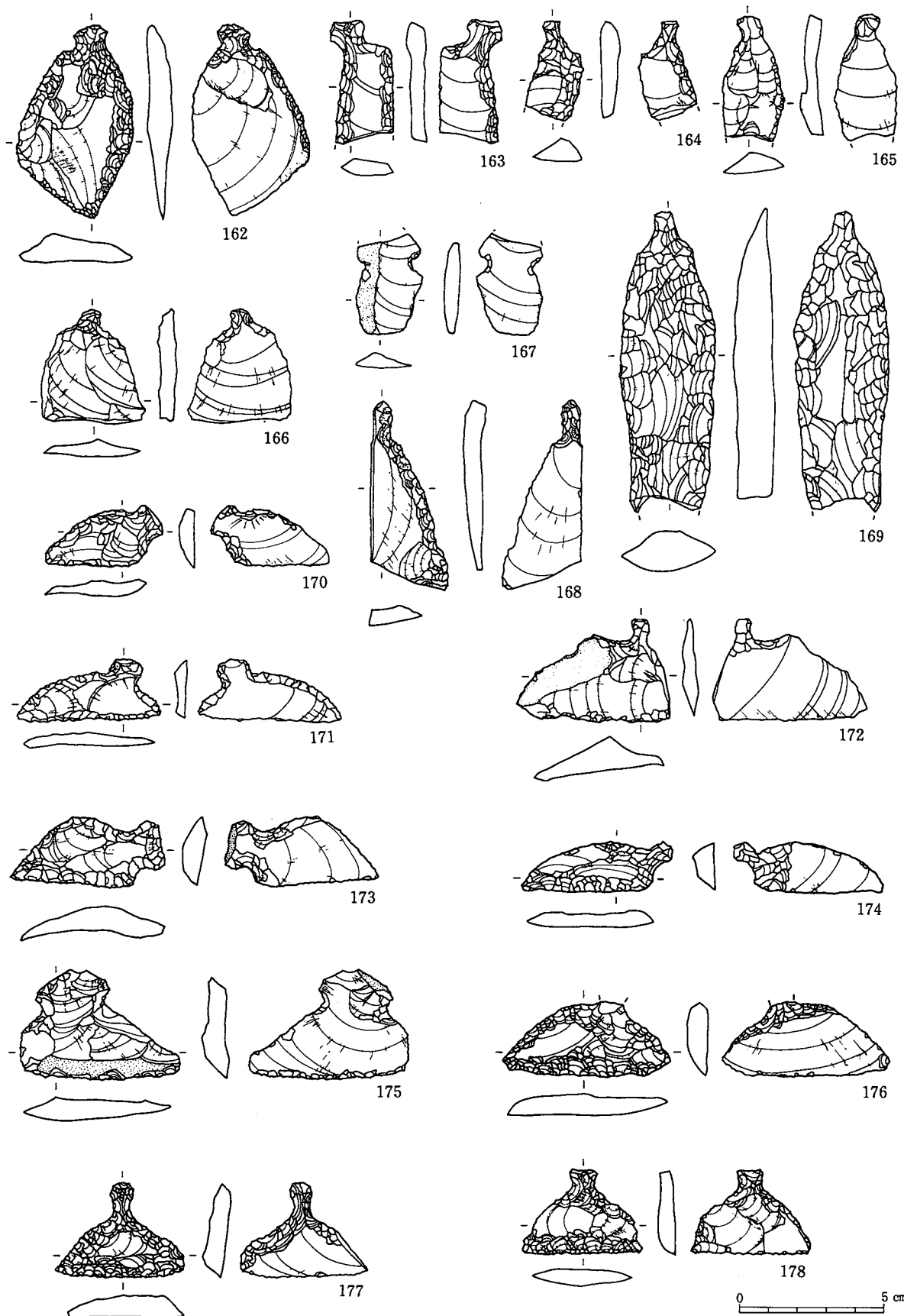
第96圖 遺構外出土遺物 石器 4



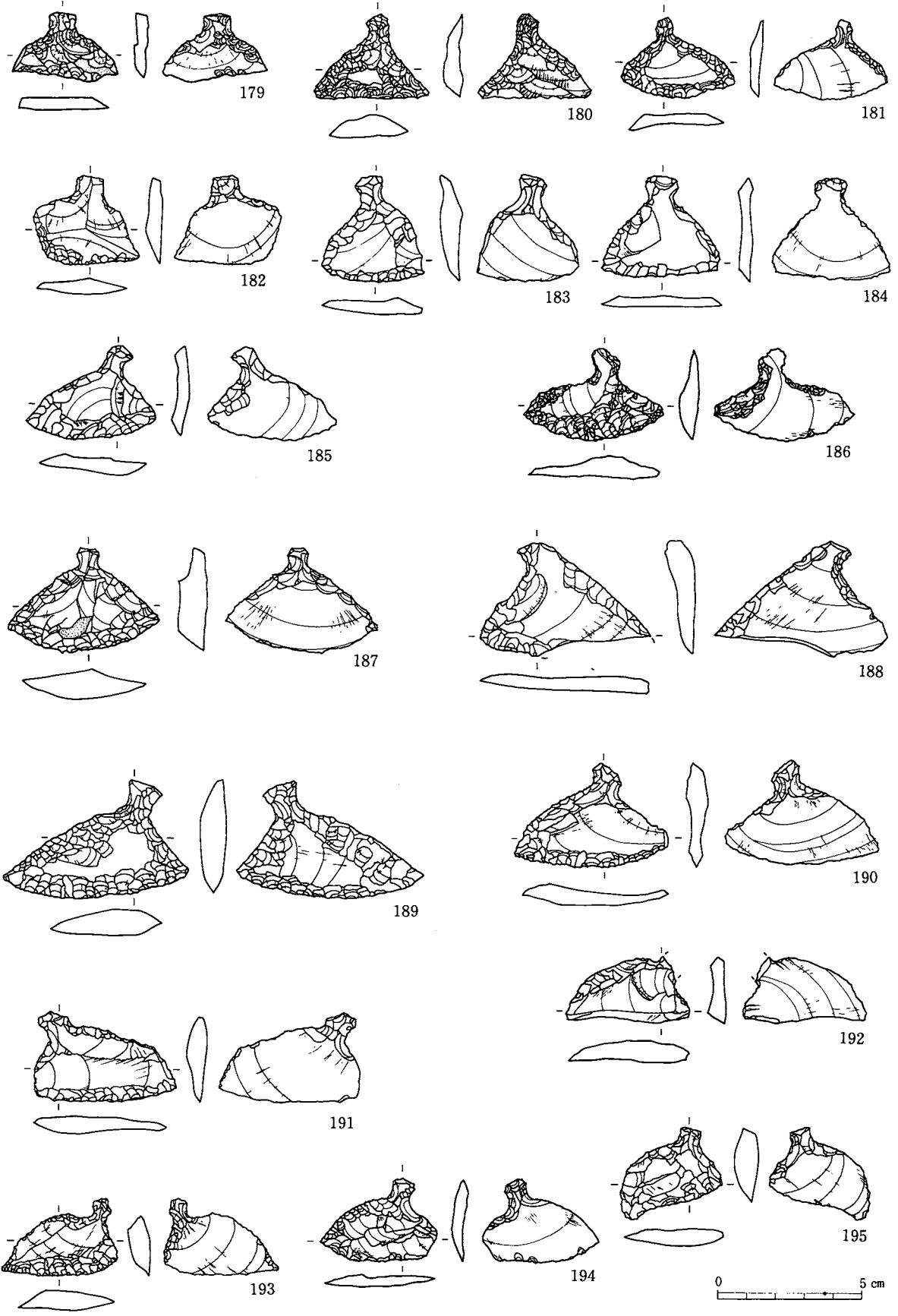
第97図 遺構外出土遺物 石器 5



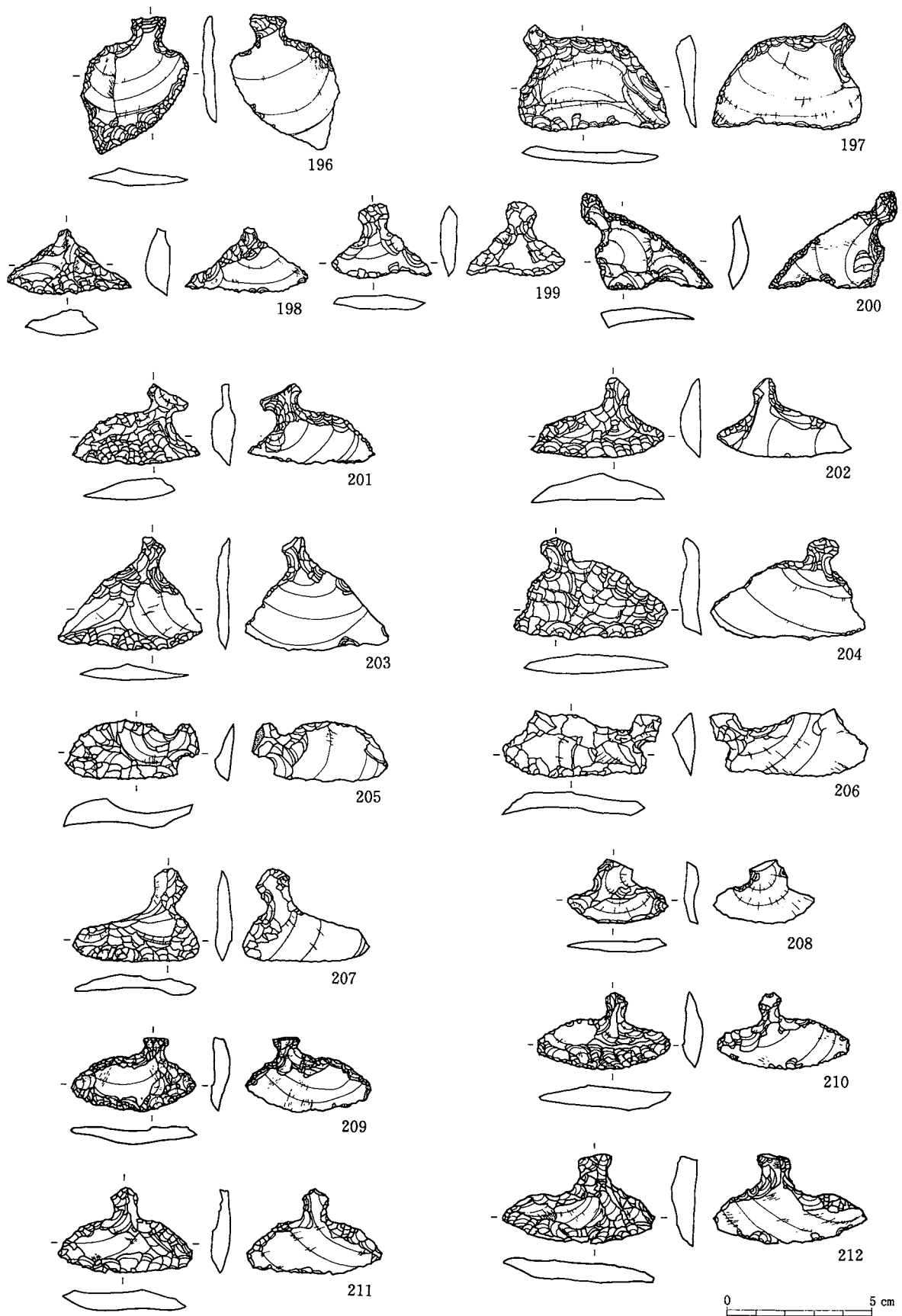
第98圖 遺構外出土遺物 石器 6



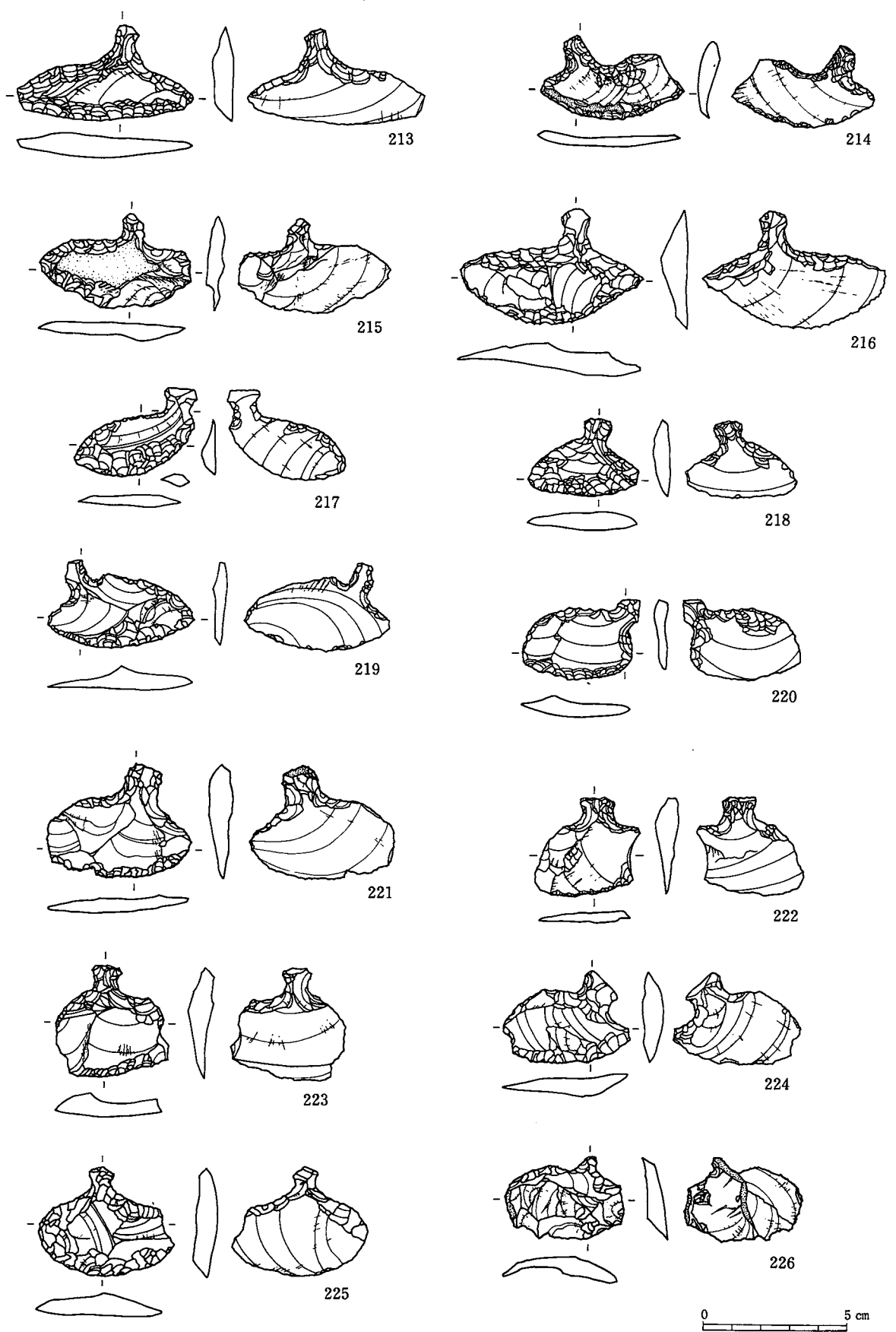
第99圖 遺構外出土遺物 石器 7



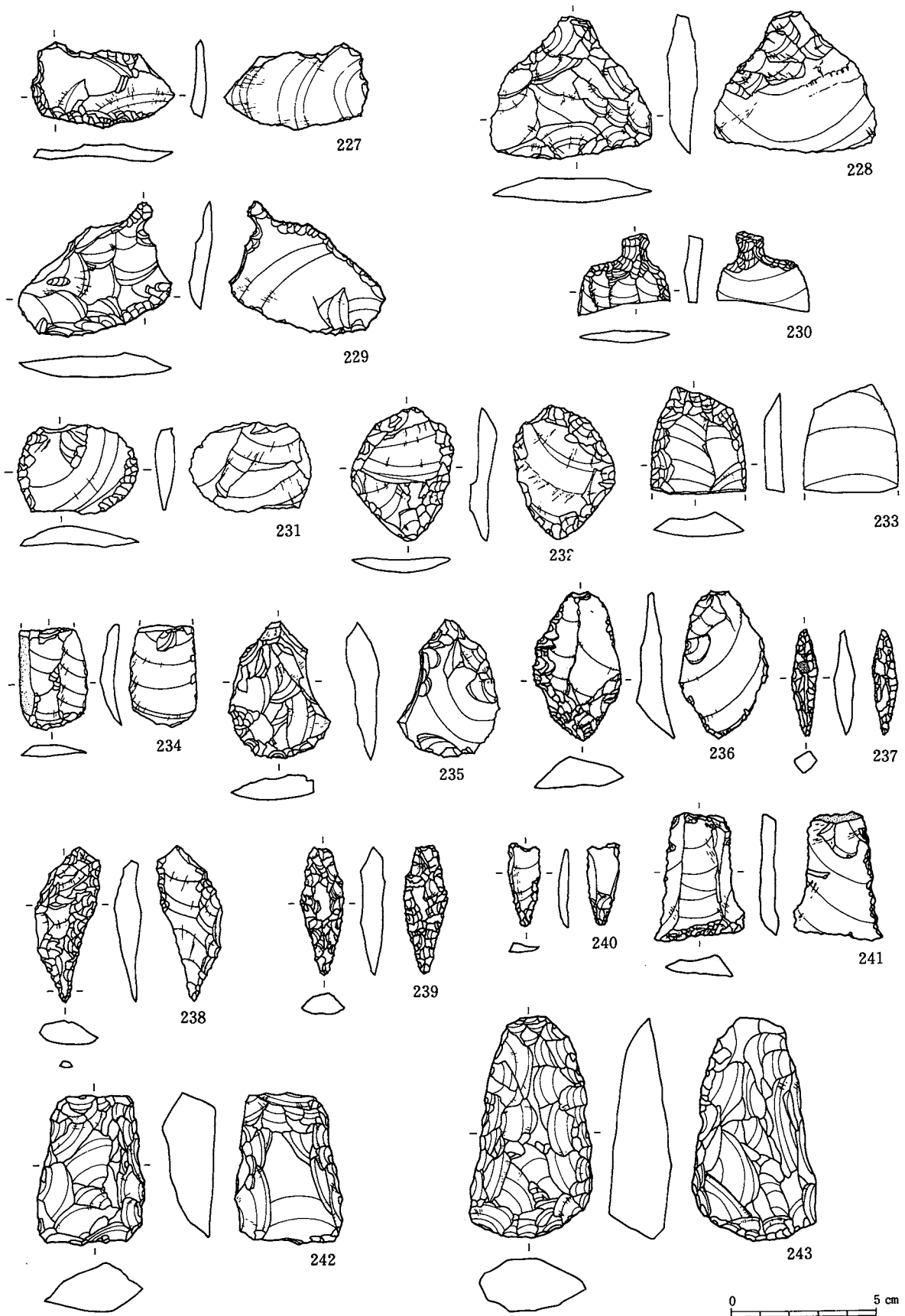
第100図 遺構外出土遺物 石器 8



第101図 遺構外出土遺物 石器 9



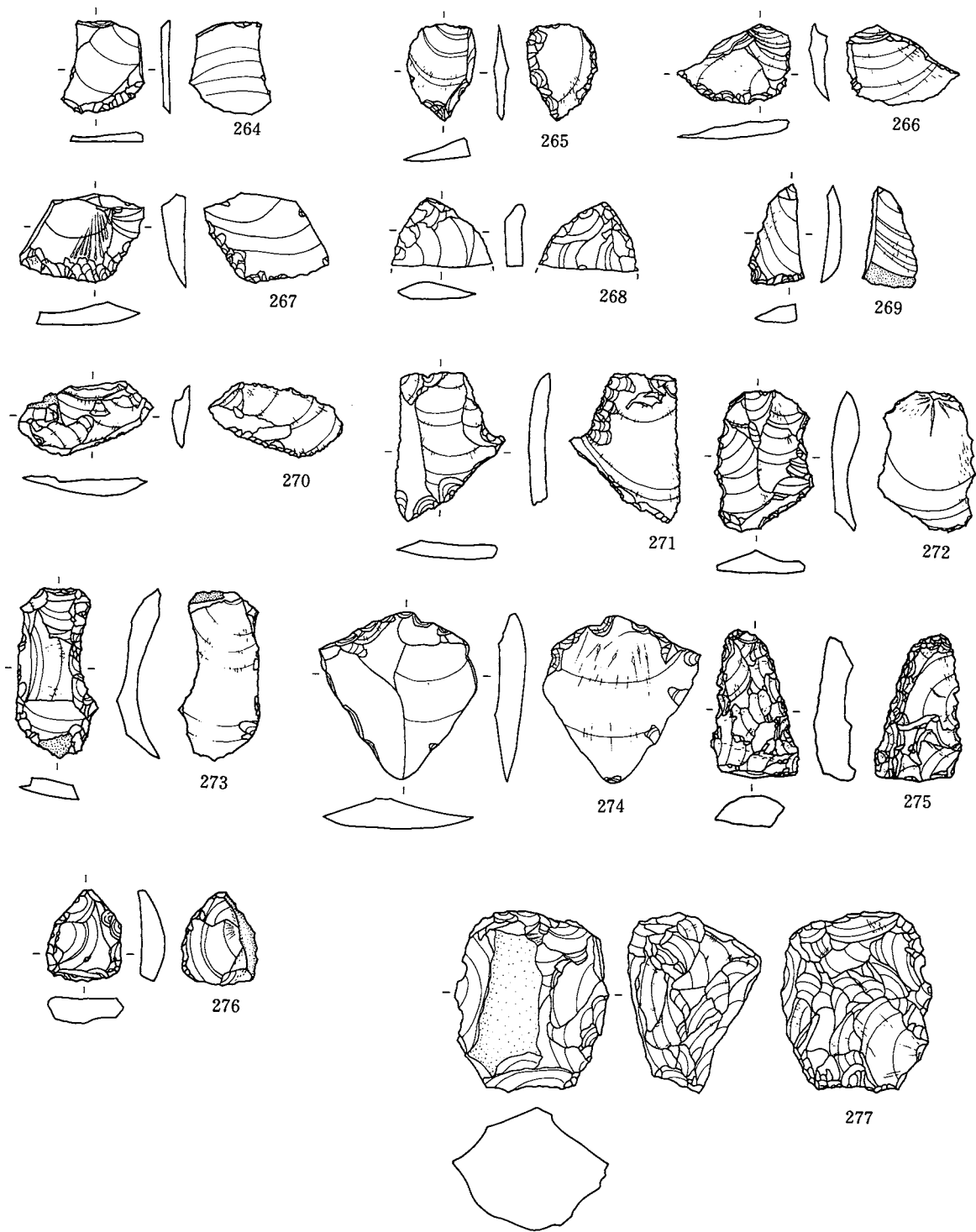
第102図 遺構外出土遺物 石器10



第103圖 遺構外出土遺物 石器11

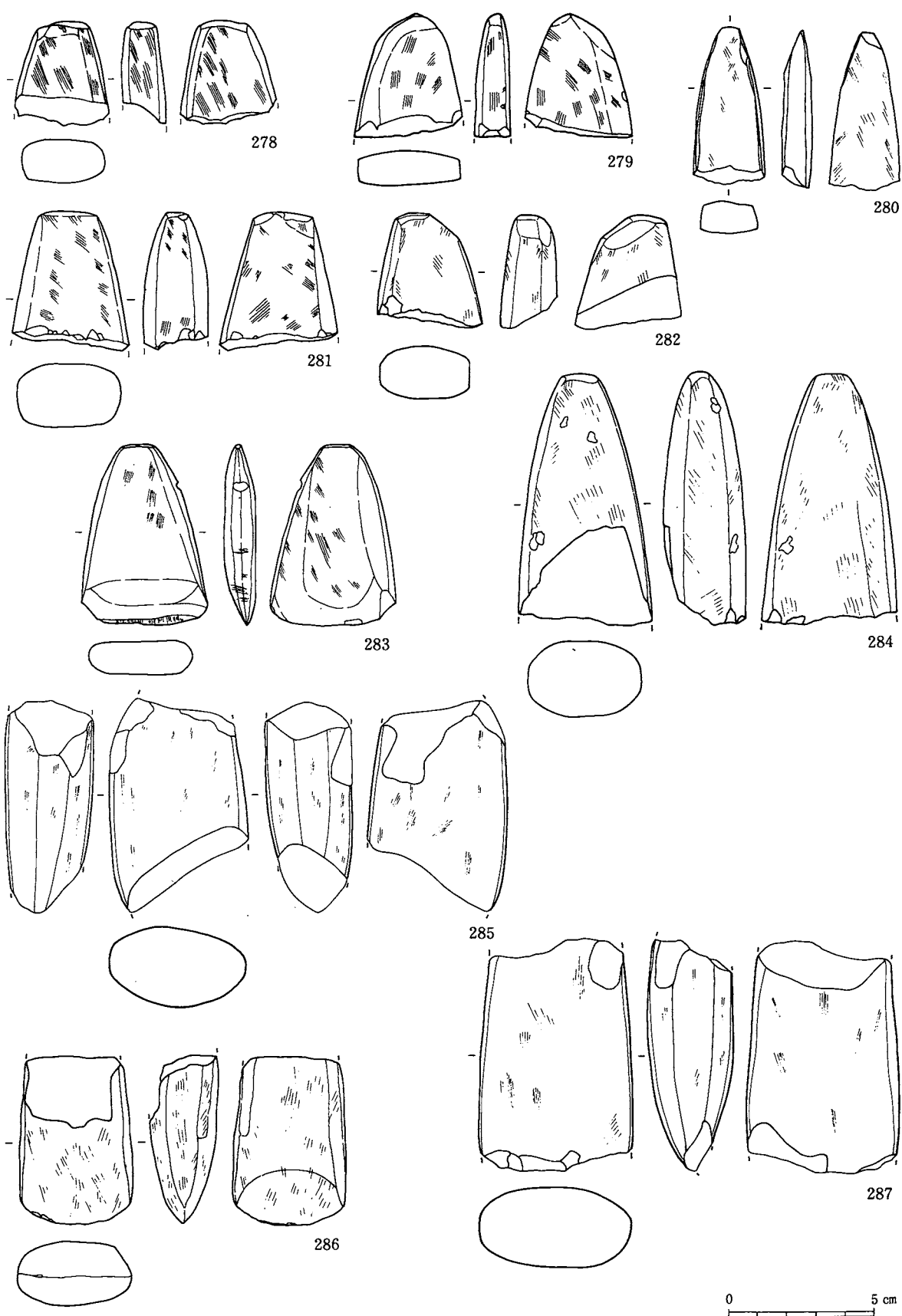


第104図 遺構外出土遺物 石器12

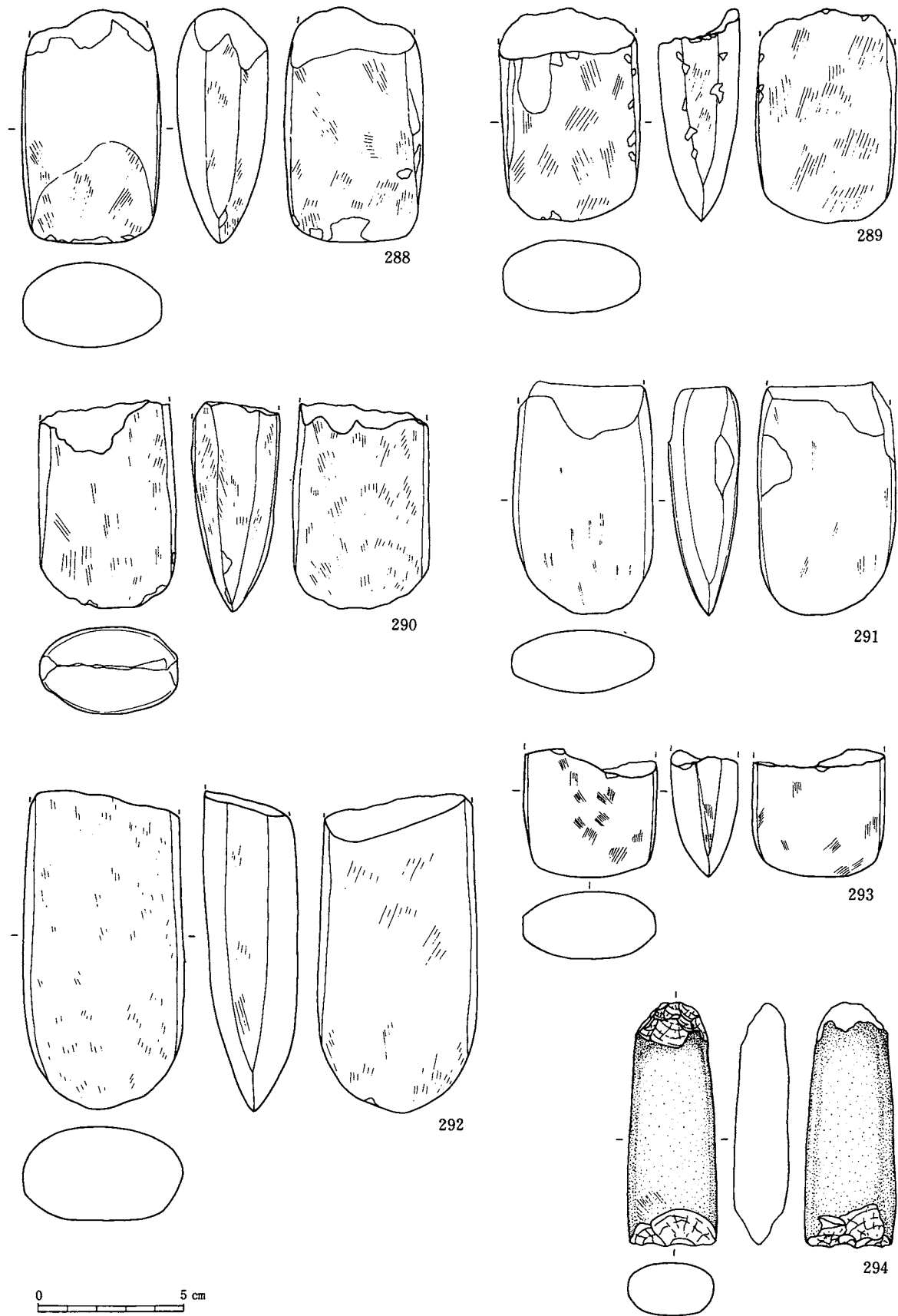


0 5 cm

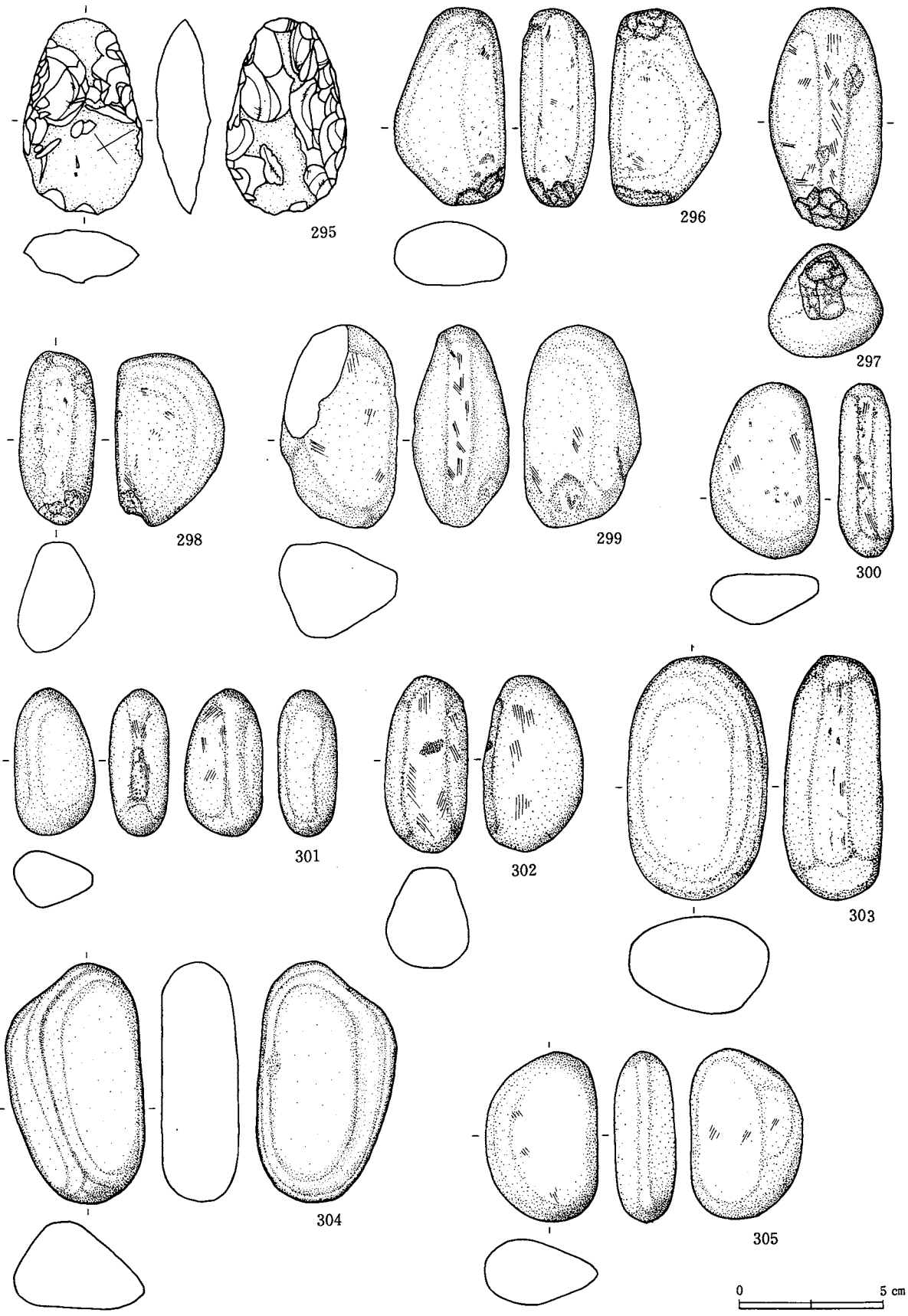
第105図 遺構外出土遺物 石器13



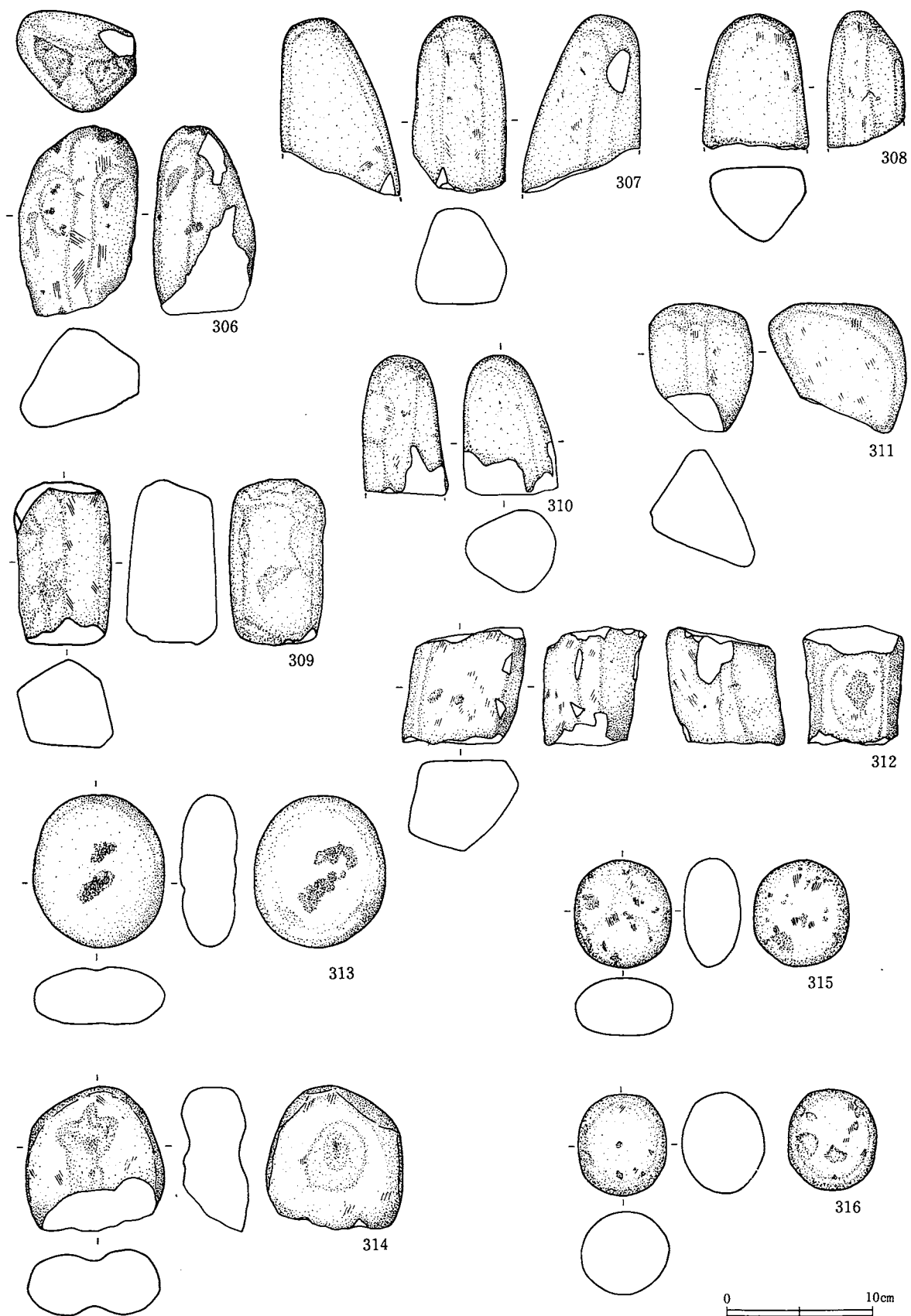
第106図 遺構外出土遺物 石器14



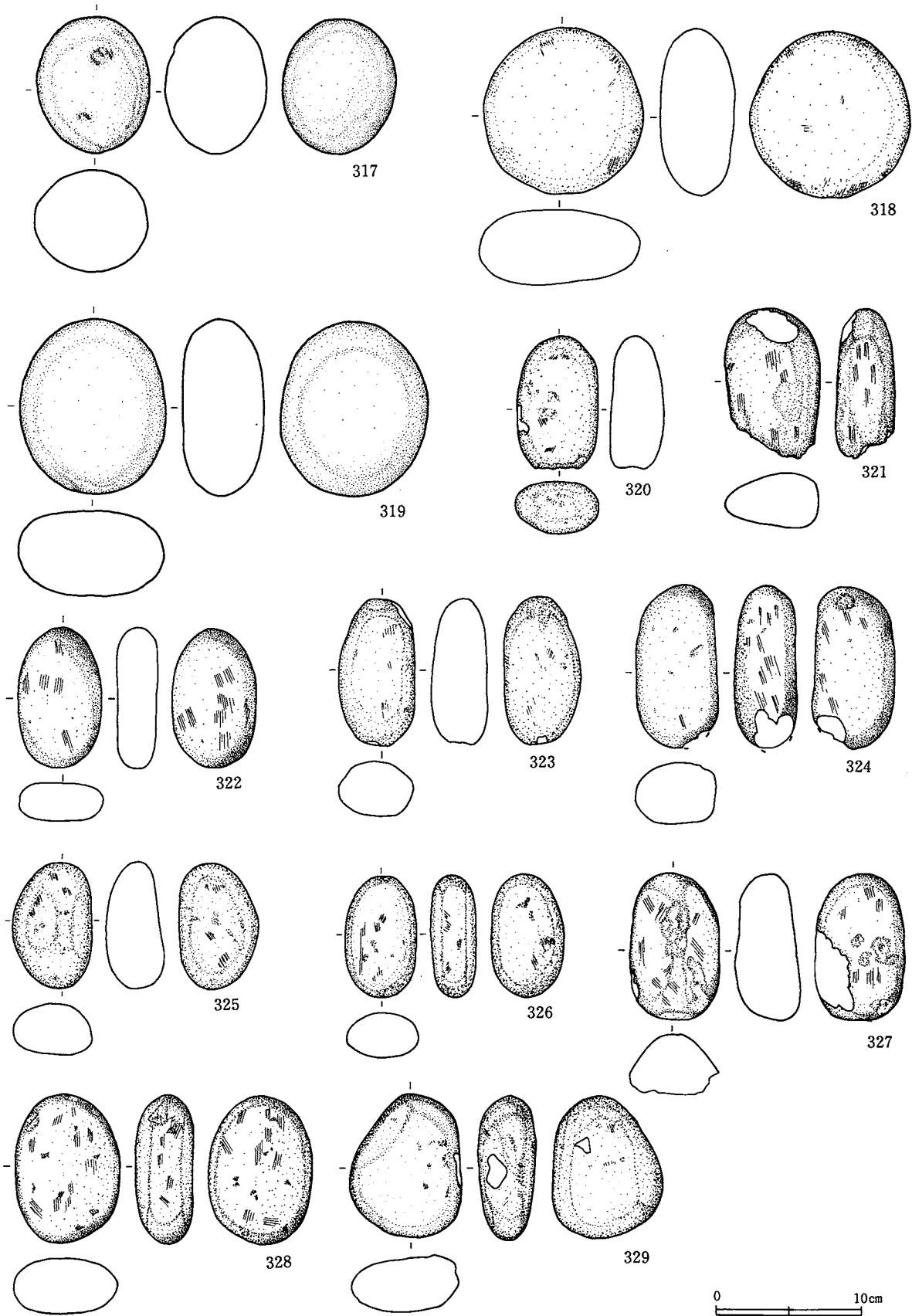
第107図 遺構外出土遺物 石器15



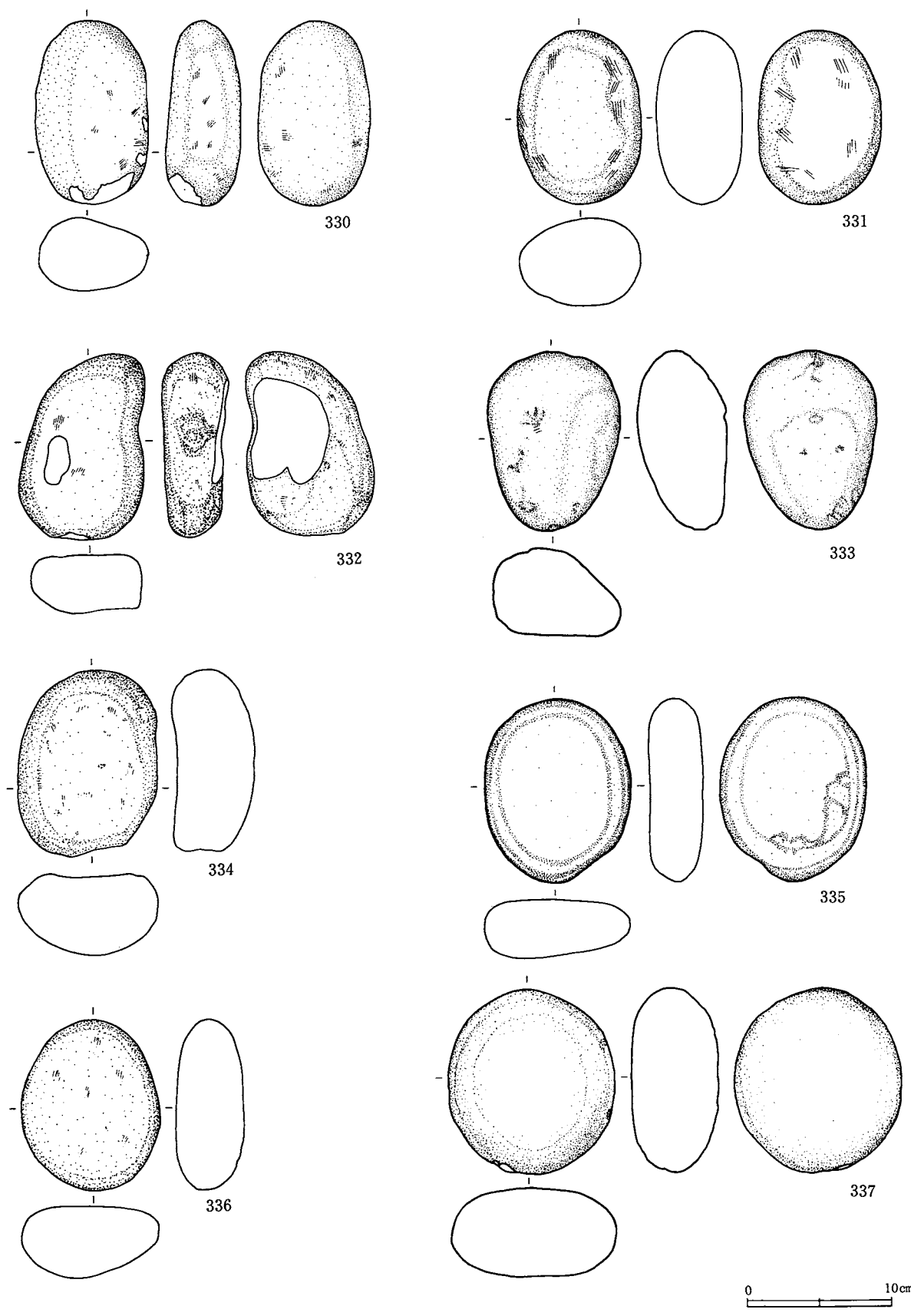
第108図 遺構外出土遺物 石器16



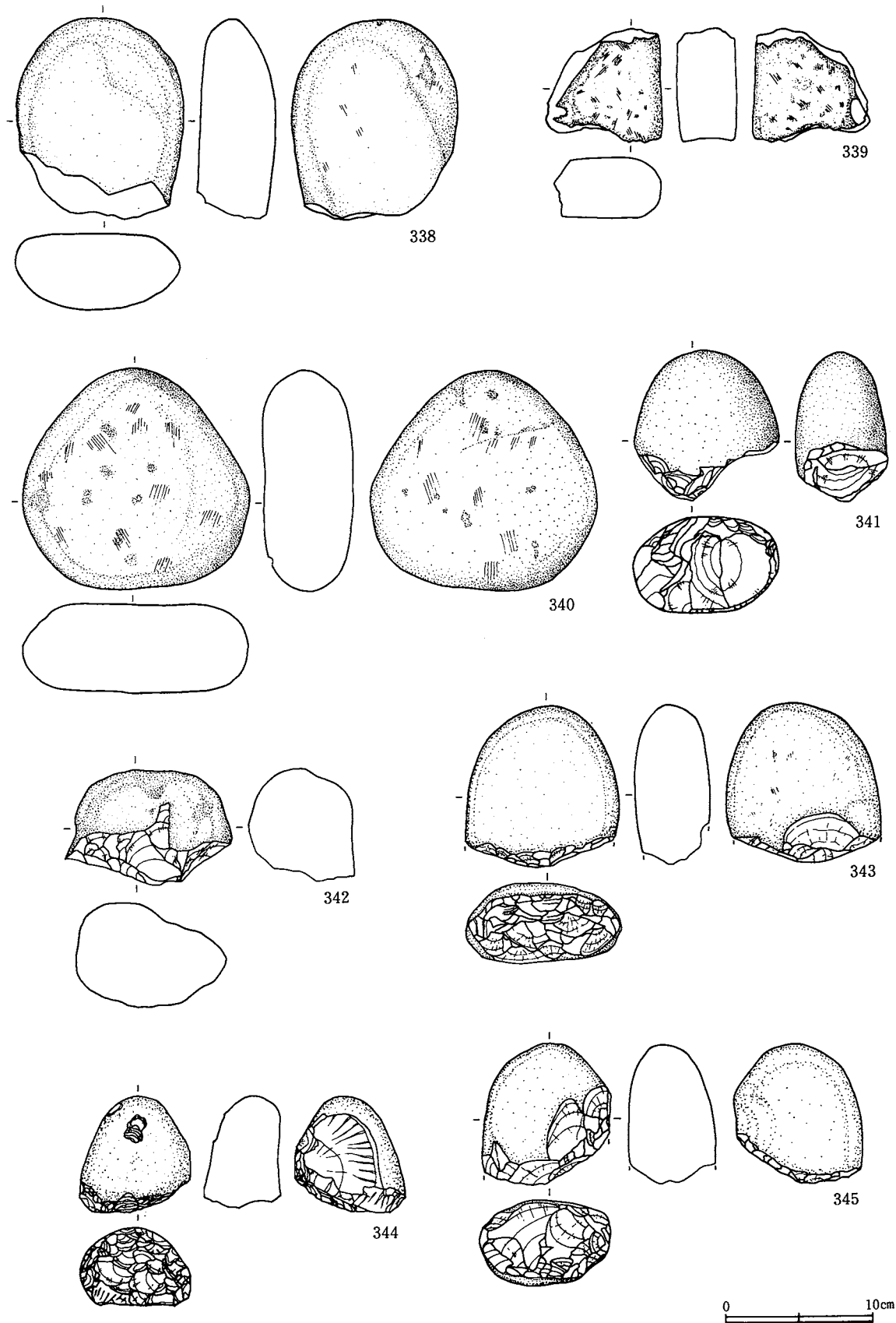
第109図 遺構外出土遺物 石器17



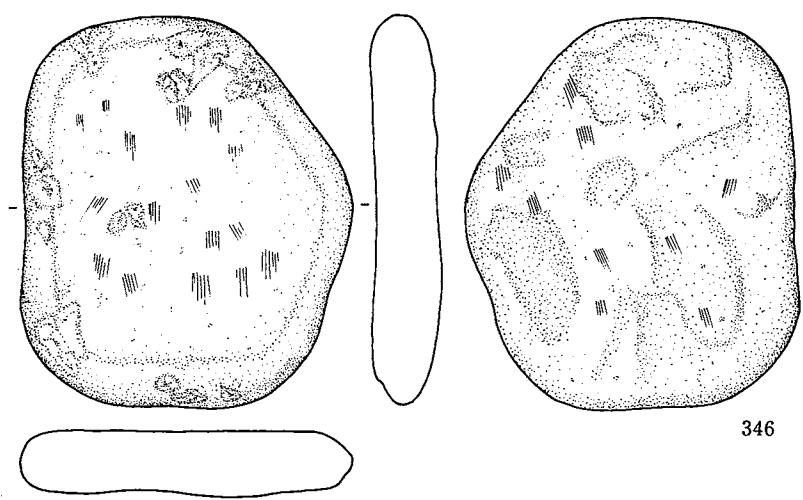
第110図 遺構外出土遺物 石器18



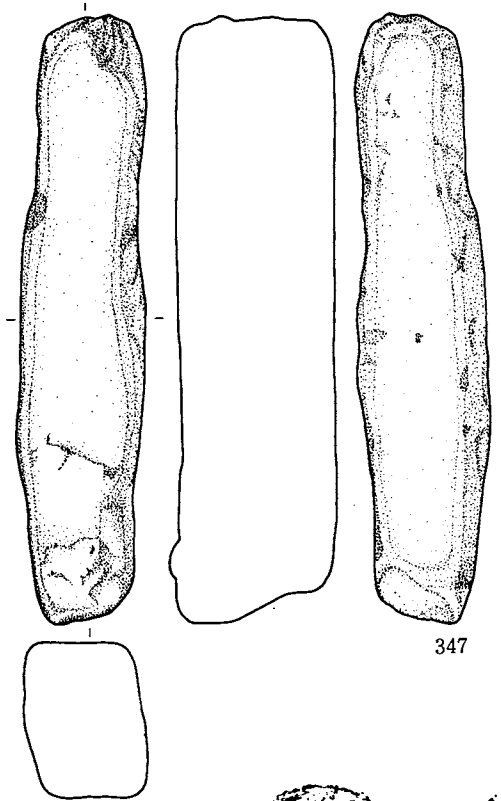
第111図 遺構外出土遺物 石器19



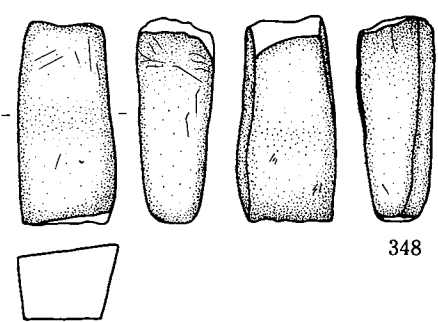
第112図 遺構外出土遺物 石器20



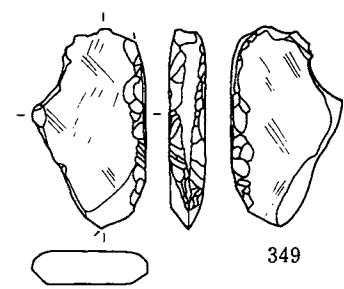
346



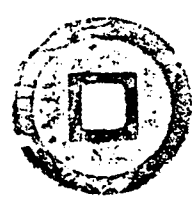
347



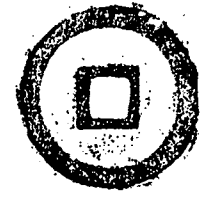
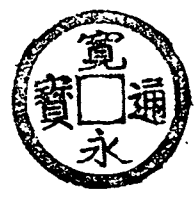
348



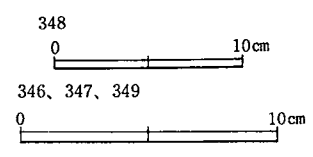
349



350



351



第113図 遺構外出土遺物 石器21、石製品、銭

第16表 遺構外出土遺物観察表(1)土器(縄文土器)

図号	出土地点	層位等	器種	文様、胎土等	分類
1	VIIA	I層	深鉢	細隆起線文 内面条痕文	I 1 a
2	VIIA	I層	深鉢	細隆起線文 内面条痕文	I 1 a
3	VIIA	I層	深鉢	細隆起線文 内面条痕文	I 1 a
4	VIIA	V層	深鉢	細隆起線文 内面条痕文	I 1 a
5	VIIA	V層	深鉢	細隆起線文 内面条痕文	I 1 a
6	VIIA 1 g	V層	深鉢	細隆起線文 内面条痕文	I 1 a
7	VIIA	IV層	深鉢	細隆起線文 内面条痕文	I 1 a
8	VIIA 3 e	V	深鉢	細隆起線文 内面条痕文 補修孔	I 1 a
9	VIIA	I層	深鉢	細隆起線文 内面条痕文	I 1 a
10	VIIA	V層	深鉢	細隆起線文 内面条痕文	I 1 a
11	VIIA 3 h	V層	深鉢	細隆起線文 内面条痕文	I 1 a
12	VIIA	IV層	深鉢	細隆起線文 内面条痕文	I 1 a
13	土捨て場	I a	深鉢	細隆起線文 内面条痕文 補修孔	I 1 a
14	VIIA 2 g	V層	深鉢	細隆起線文 浅い刺突	I 1 c
15	不明	不明	深鉢	細隆起線文 浅い刺突	I 1 c
16	VIB 0 b	IV層	深鉢	細隆起線文 内面に条痕文が施されるが顕著に表れない	I 1 b
17	VIIA 3 h	V層	深鉢	細隆起線文 内面に条痕文が施されるが顕著に表れない	I 1 b
18	VIIA 3 b	埋土	深鉢	細隆起線文 内面に条痕文が施されるが顕著に表れない	I 1 b
19	VII B 2 C	V層	深鉢	細隆起線文 内面に条痕文が施されるが顕著に表れない	I 1 b
20	VIA、VIIA	IV層	深鉢	細隆起線文 内面に条痕文が施されるが顕著に表れない	I 1 b
21	VIIA 1	V層	深鉢	細隆起線文 内面に条痕文が施されるが顕著に表れない	I 1 b
22	不明	不明	深鉢	内外面条痕文	I 2 a
23	VIA 9 I	V層	深鉢	内外面条痕文	I 2 a
24	VII 3 d	V層	深鉢	内外面条痕文	I 2 a
25	VIB 0 a	V層	深鉢	内外面条痕文	I 2 a
26	VII 1 a	V層	深鉢	内外面条痕文	I 2 a
27	VII 3 d	V層	深鉢	内外面条痕文	I 2 a
28	VIIA	IV層	深鉢	内外面条痕文	I 2 a
29	VIB 0 a	V層	深鉢	内外面条痕文	I 2 a
30	VIA 0 j	V層	深鉢	内外面条痕文	I 2 a
31	VIIA 3 j	VI層	深鉢	内外面条痕文 内面の条痕文が顕著でない	I 2 b
32	VIB 8 d	V層	深鉢	L R横回転、口唇部にも施文 口縁部のみ裏にもL R横回転 繊維多	II 1
33	VIIA 4 a	V層	深鉢	組縄Aか? 単節 L回り 尖底 繊維	II 2
34	VIB 8	IV層	深鉢	組縄Aか? 単節 L回り口唇部指頭状圧痕 繊維	II 2
35	VII C	IV層	深鉢	口唇部指頭状押圧 組縄A 単節L回り	II 2
36	VIIA 4 a	V層	深鉢	組縄A 単節 L回り口唇部指頭状or棒状工具圧痕 繊維多	II 2
37	VIB	IV層	深鉢	組縄A 単節 L回り口唇部指頭状圧痕 繊維	II 2
38	VIB 8 e	V層	深鉢	組縄A 単節 L回り口唇部棒状or小型の指頭状圧痕 繊維多	II 2
39	VIA 0 j	V層	深鉢	組縄A 単節 L回り口唇部指頭状圧痕 繊維多	II 2
40	VII B 1 C	V層	深鉢	組縄A L回り単節 金雲母混入 繊維	II 2
41	VIIA 4 a	V層	深鉢	組縄A 単節 L回り 繊維	II 2
42	VIIA 3 a	IV層	深鉢	組縄A 単節 L回り 繊維	II 2
43	VIIA 4 a	V層	深鉢	組縄A 単節 L回り 繊維	II 2
44	VIB e	V層	深鉢	組縄A 単節 L回り 口唇部外側7mm程無文帯 玉縁状 繊維	II 2
45	VIA 8 j	V層	深鉢	組縄Aか 単節か 口唇部外面刺突 繊維 L回り	II 2
46	VIIA 1 J	IV層	深鉢	組縄Aか 単節 L回り口唇部指突 繊維	II 2
47	VIIA	IV層	深鉢	単節L回りの組縄Aか 口唇部指頭	II 2
48	VIB 0 b	V層	深鉢	組縄B L回り 口唇部原体末端圧痕 繊維極多	II 2
49	VI	V層	深鉢	組縄B 単節 L回り口唇部斜め刺突 繊維	II 2
50	VIB 0 d	V層	深鉢	組縄B 単節 L回り口唇部爪形刺突施文に乱れ 繊維極多	II 2
51	VIB	IV層	深鉢	組縄B 単節 L回り口唇部斜め刺突 繊維多	II 2
52	VIB 8 d	V層	深鉢	組縄B 単節 L回り口唇部原体圧痕 繊維	II 2
53	VIIA	III b層	深鉢	組縄B 単節 L回り口唇部棒状工具or指頭状圧痕 繊維多	II 2
54	VIB 8 a	V層	深鉢	組縄B 単節 L回り 口唇部原体末端指突or押圧 繊維多	II 2
55	VIIA 4 a	V層	深鉢	組縄B 単節 L回り 繊維多 口縁部指頭状圧痕	II 2
56	VIB 7 d	V層	深鉢	組縄B 単節 L回り 口唇部原体圧痕 繊維多	II 2
57	VII B 1 a	V層	深鉢	組縄B 単節 L回り 指頭状圧痕 繊維多	II 2
59	T 3 東	VI層	深鉢	組縄B 単節 L回り口唇部原体末端圧痕 繊維	II 2

60	VIB 8 a	VII層	深	鉾	組縄Bか単節 L回り口唇部指頭状圧痕 繊維	II 2
61	VIA 3 a	V層	深	鉾	組縄B 単節 L回り 繊維多	II 2
62	VIA 3 a	V層	深	鉾	組縄 単節 L回り 繊維多	II 2
63	VIA 1 a	VII層	深	鉾	組縄B 単節 L回り 繊維多	II 2
64	VIB 8 e	V層	深	鉾	組縄B 単節 L回り 繊維多	II 2
65	VIA 2 h	V層	深	鉾	組縄B 単節 L回り 繊維	II 2
66	VIA	IV層	深	鉾	組縄B単節LR縦 繊維	II 2
67	VIA 1 j	IV層	深	鉾	単節 0段多条? LR 硬い原体か 繊維多	II 9
68	VIA 3 a	V層	深	鉾	組縄A 複節 L回り 口唇部斜め刺突 繊維	II 2
69	VIB 7 f	V層	深	鉾	組縄A 複節 L回り 口唇部指頭状圧痕 繊維	II 2
70	VIB 0 b	V層	深	鉾	組縄A 複節L回転か? 口唇部?に広い無文帯 繊維多	II 2
71	VIA 1 j	V層	深	鉾	組縄Aか? 複節 R回りか? 繊維	II 2
72	VIB	V層	深	鉾	組縄B 複節 L回り 口唇部原体圧痕 繊維多	II 2
73	VIB	IV層	深	鉾	組縄B L回り 複節 補修孔表→繊維含む	II 2
74	VIA 8 f	I a層	深	鉾	組縄B 複節 L回り口唇部棒の押圧 繊維多	II 2
75	VIB 7 C	V層	深	鉾	組縄B 複節 LL回り棒の押圧 繊維多	II 2
76	VIB 8 d	V層	深	鉾	組縄B 複節 L回り 繊維多 口唇部原体圧痕	II 2
77	VIB 8	IV層	深	鉾	組縄B L回り 口唇部原体押圧 繊維多	II 2
78	VIB 8 C	V層	深	鉾	組縄B L回り 口唇部指頭状圧痕 繊維	II 2
79	VIA 9 i	IV層	深	鉾	組縄B L回り 口唇部棒状工具?圧痕 繊維	II 2
80	VIB	IV層	深	鉾	組縄B 複節 L回り 口唇部刺穴 繊維	II 2
81	VIB	IV層	深	鉾	組縄B 複節 L回り 口唇部内側斜めに刺穴 繊維	II 2
82	VIB d	IV層	深	鉾	組縄Bか 複節 L回り 口唇部外側3mm程の無文帯 繊維	II 2
83	VIB	IV層	深	鉾	組縄Bか? 単節 L回り 繊維 口唇部外側に棒状工具で押圧	II 2
84	VIB 0 b	V層	深	鉾	組縄Bか? 複節 L回り 繊維	II 2
85	VIB C	V層	深	鉾	組縄B 複節 L回り 繊維	II 2
86	VIA 4 a	V層	深	鉾	組縄B 複節 L回り 繊維多	II 2
87	VIB 8 a	V層	深	鉾	組縄Bか?複節 L回り 繊維	II 2
88	VIB 1 b	V層	深	鉾	組縄B 複節 L回り 繊維	II 2
89	VIB	V層	深	鉾	組縄B 複節 L回り 繊維極多	II 2
90	VIB	IV層	深	鉾	組縄Bか? 複節 L回り 繊維含む	II 2
91	VIB 8 a c d	V層	深	鉾	組縄B 複節 L回り 繊維多	II 2
92	VIB	V層	深	鉾	組縄B 複節 L回り 繊維多	II 2
93	VIA 4 a	V層	深	鉾	組縄B 複節 L回り 繊維	II 2
94	VIA 4 e	V層	深	鉾	組縄B 複節 L回り 繊維	II 2
95	VIA 2 a	V層	深	八	組縄B 複節 L回り 繊維多	II 2
96	VIA 2 d	V層	深	鉾	組縄B 複節 L回り 繊維	II 2
97	VIA 4 e	V層	深	鉾	組縄B 複節 L回り+LR横回転 繊維	II 2
98	VIB 0 a	IV層	深	鉾	組紐?繊維	II 3
99	VIB 0 a	V層	深	鉾	組紐? 繊維	II 3
100	VIA 2 d	廃棄土	深	鉾	組紐か?横回転 繊維	II 3
101	VIB 0 c	V層	深	鉾	組紐? 繊維	II 3
102	VIA 2 I	V層	深	鉾	縄の束 LとR Rのみ0段多条か? 4本か 繊維	II 4
103	VIB 1 a	V層	深	鉾	縄の束 RとL Rのみ 0段多条 2本か4本 繊維	II 4
104	VIB 7 f	III b層	深	鉾	縄の束 RとL 0段多条(4条) 2本か4本 繊維多	II 4
105	VIB	IV層	深	鉾	縄の束 RとL 0段多条 4本か 繊維多	II 4
106	VIA 3 e f	V層	深	鉾	縄の束 RとL 0段多条(4条か) 2本か4本 繊維多	II 4
107	VIB 8 d	V層	深	鉾	縄の束 RとL 0段多条 繊維多	II 4
108	VIA 0 j	V層	深	鉾	LR前々段反燃り より戻しなし 口唇部原体圧痕 繊維	II 5
109	VI	V層	深	鉾	LR前々段反燃り より戻しなし 口唇部刺穴 繊維少	II 5
110	VIB 8 b	V層	深	鉾	LR前々段反燃り より戻しなしか 繊維多	II 5
111	VIB 0 C	IV層	深	鉾	LR前々段反燃り より戻しなしか あるいは組縄 繊維 補充孔	II 5
112	VIB	IV層	深	鉾	LR前々段反燃り より戻しなしか あるいは組縄 繊維	II 5
113	VIA 4 c	V層	深	鉾	LR前々段反燃り より戻しなし 繊維	II 5
114	VIB 7 b	V層	深	鉾	LR前々段反燃り より戻しなし 繊維多	II 5
115	VIB	V層	深	鉾	RL前々段反燃り より戻しなしかあるいは組縄 口唇部原体圧痕 繊維極多	II 5
116	VIA 0 j	V層	深	鉾	RL前々段反燃り より戻しなし 繊維	II 5
117	VIB h	IV層	深	鉾	RL前々段反燃りか 繊維多	II 6
118	VIB 8	IV層	深	鉾	前々段合燃りか LR(LR) 繊維	II 6
119	VIA 1 a	VII層	深	鉾	直前段反燃りか LLR 口唇部原体圧痕or回転 繊維	II 7

120	VIB	V層	深	鉢	前々段反撚か L R R 繊維多	II 8
121	VIB	埋土	深	鉢	前々段反撚か L R R 繊維多	II 8
122	VIB 8 C	埋土	深	鉢	前々段反撚か L R R 繊維多	II 8
123	VIB 8 e	V層	深	鉢	前々段反撚か L R R 口唇部原体回転 繊維多	II 8
124	VIC	V層	深	鉢	L R R 前々段反撚か 0段多条か 繊維	II 8
125	VIB 9 C	V層	深	鉢	口唇部上端に開いた端 L R横回転 繊維	II 9
126	VIB 2 a	V層	深	鉢	L R横 口縁部に原体の開いた端 口縁部原体回転 繊維	II 9
127	VIB、VII B	V層	深	鉢	L R横 口唇部刺突 繊維多	II 9
128	VIB 9 d	V層	深	鉢	R L横 0段多条 口唇部縁の側面圧痕(刻み状) 繊維多	II 9
129	VIB 8 d	V層	深	鉢	R L横 0段多条 口唇部原体回転 繊維	II 9
130	VIB 1 C	V層	深	鉢	L R横 口唇部原体回転 繊維多	II 9
131	VIA 3 h	V層	深	鉢	L R横 口唇部指頭状圧痕 繊維	II 9
132	VIB g	V層	深	鉢	L R横 口唇部指頭状圧痕 繊維多	II 9
133	VIB 9 C	V層	深	鉢	L R横 0段多条か 口唇部外側爪形圧痕 繊維多	II 9
134	VIB 9 b	V層	深	鉢	L R横 口唇部原体末端圧痕 繊維多	II 9
135	VIB 0 C	攪乱	深	鉢	極太原体 L R横 口唇部原体回転 繊維	II 9
136	VIB 9 b	V層	深	鉢	L R横 0段多条 口唇部外側爪形圧痕 繊維多	II 9
137	VIB 8 e	V層	深	鉢	R L横か 口唇部施文か 繊維多	II 9
138	VIB 1 b	埋土	深	鉢	L R横 0段多条 繊維多	II 9
139	VIA 3 g h	V層	深	鉢	L R横 0段多条 原体の端が口唇部外側にみえる 繊維	II 9
140	VIA 2 a	埋土	深	鉢	L R横 0段多条 繊維多	II 9
141	VIB 0 a	V層	深	鉢	L R横 繊維	II 9
142	VIA 3 b	埋土	深	鉢	R L横 補修孔 繊維	II 9
143	VIA 9 j	V層	深	鉢	R L横 0段多条 繊維	II 9
144	II B 4 h	床値	深	鉢	極太原体 L R横 繊維多	II 9
145	VIA 9 I	V層	深	鉢	L R横 底部施文 L R横 繊維多	II 9
146	VIA	IV層	深	鉢	L R 尖底	II 9
147	VIA	IV層	深	鉢	L R 繊維 尖底	II 9
148	VIB 1 b	V層	深	鉢	L R L横 口唇部原体回転 繊維多	II 10
149	VIB 8 e	V層	深	鉢	L R L横 口唇部原体回転 繊維多	II 10
150	VIB 8 C	V層	深	鉢	R L R横 口唇部原体回転 繊維多	II 10
151	VIB	IV層	深	鉢	R L R横 口唇部原体回転 繊維多	II 10
152	VIB	IV層	深	鉢	R L R横 口唇部外側に原体端刺突 繊維	II 10
153	VIB	IV層	深	鉢	R L R横 口唇部指頭状圧痕 繊維	II 10
154	VIA 1 a	VII層	深	鉢	0段多条の複節 R L R 繊維極多	II 10
155	VIA 1 a	VII層	深	鉢	R L R横 口唇部原体圧痕 繊維	II 10
156	VIA 3 j	V層	深	鉢	R L R横 口唇部斜め刺穴 繊維多 原体の端が口縁部にみえる	II 10
157	VIB 8 a	V層	深	鉢	L R横 0段多条 繊維多	II 10
158	VIA 0 j	V層	深	鉢	L R L横 繊維	II 10
159	VIA 2 b	IV層	深	鉢	0段多条の複節 R L R 繊維極多	II 10
160	VIB 8 a	IV層	深	鉢	L R L横 繊維多	II 10
161	VIA 2 I j	V層	深	鉢	R L R横 繊維	II 10
162	VIA	IV層	深	鉢	R L R 繊維多	II 10
163	VIB 8 b	V層	深	鉢	L R Lか 前々段の撚が不整 尖底 繊維	II 10
164	VIB 8 b	V層	深	鉢	結束のない羽状 0段多条 R L横+縦回転 繊維多	II 11
165	VIA 0 d	V層	深	鉢	結束のない羽状 L R横+縦回転 繊維多	II 11
166	VIB 8 b	V層	深	鉢	結束のない羽状 0段多条 R L+L R横 繊維多	II 11
167	VIA 1 a	VII層	深	鉢	結束のない羽状 L R横回転+L R縦回転+R L縦回転 繊維極多	II 11
168	VIA 3 I	V層	深	鉢	結束のない羽状 R L 0段多条横 L R 0段多条横	II 11
169	VIB 7 a	V層	深	鉢	結束のない羽状 R L横+縦回転 繊維多	II 11
170	VIB 9 d	V層	深	鉢	結束のない羽状 L R横+縦回転 繊維多 口唇部爪形か刺突	II 11
171	VIB 1 a	V層	深	鉢	結束のない羽状 0段多条 R L+L R横 繊維含む	II 11
172	VIB 9 a	V層	深	鉢	結束のない羽状 L R L横+縦回転 繊維多	II 11
173	VIA	IV層	深	鉢	結束のない羽状 L R+R L横 繊維	II 11
174	VIA 3 I	埋土	深	鉢	結束のない羽状 R L+L R 0段多条 横回転 繊維多	II 11
175	VIA	V層	深	鉢	結束のない羽状 R L R+L R L 繊維	II 11
176	VIB	IV層	深	鉢	結束のない羽状 L R L+R L R横 繊維	II 11
177	VIB	IV層	深	鉢	結束のない羽状 0段多条(3条か) R L R+L R L横回転	II 11
178	VIB 9 C	V層	深	鉢	結束のない羽状 R L R+L R L横 繊維多	II 11
179	土捨て場	I a層	深	鉢	結束のある羽状(L R+R L)横回転 繊維多	II 12

180	T 3 西	V層	深	鉞	結束ある羽状(RL+LR)横回転 繊維多	II12
181	VIB	V層	深	鉞	結束ある羽状(LR+RL)横回転 口唇部 爪形刺穴 繊維多	II12
182	VIA 3 h	V層	深	鉞	結束ある羽状(LR+RL)横回転 繊維	II12
183	VIB	V層	深	鉞	結束ある羽状(RL+LR)横回転口唇部原体回転 繊維極多	II12
184	VIA	IV層	深	鉞	結束ある羽状(RL+LR)横回転	II12
185	VIB 7 C	V層	深	鉞	結束ある羽状(LR+LR)横回転口唇部指頭状圧痕 繊維	II12
186	VIA 3 i	V層	深	鉞	繊細な結束ある羽状(RL+LR)横回転 繊維極多	II12
187	II B 4 h 住居跡	埋土	深	鉞	結束ある羽状(RL+LR)横回転 金髪母 繊維	II12
188	VIB 7 e	V層	深	鉞	結束ある羽状(RL+LR)横回転 繊維極多 口唇部原体回転	II12
189	VIB 0 b	III a 層	深	鉞	繊細な原体結束ある羽状(LR+RL)横回転 口唇部指頭状圧痕 繊維少	II12
190	VIB 9 a	V層	深	鉞	繊細な原体結束ある羽状(RL+LR)横回転 繊維	II12
191	VIA 1 a	IV層	深	鉞	結束ある羽状(LR+RL) 横回転 繊維多量	II12
192	VIB 0 b	V層	深	鉞	繊細な結束ある羽状(LR+RL)を上下を変えて横回転 繊維多	II12
193	VIB	V層	深	鉞	結束ある羽状(LR+RL) 0 段多条横回転 繊維	II12
194	VIB 9 d	V層	深	鉞	結束ある羽状 0 段多条(LR+RL)横回転 繊維多 口唇部原体圧痕	II12
195	VIA 0 d	V層	深	鉞	結束ある羽状(RL+LR)横回転 結束のみが目立つ5段 繊維	II12
196	VIA 2 j	V層	深	鉞	結束ある羽状 RL+LR 0 段多条 単節の羽状 繊維 底部施文	II12
197	VIA 2 g	V層	深	鉞	繊細な原体結束ある羽状(RL+LR)上下を変えて横回転 繊維多	II12
198	VIB 8 a	V層下位	深	鉞	ループ4段+組縄B 複節 L 回り 繊維多	II13
199	VIB 0 C	V層	深	鉞	ループ4段 組縄B 複節 L 回り 繊維多	II13
200	VIB 8 e	V層	深	鉞	ループ3段 前々段反捺LR 繊維	II13
201	VIA 2 j	V層	深	鉞	ループ3段 LR横 繊維多	II13
202	VIB	IV層	深	鉞	ループ3段 LR横唇部外側に原体末端刺突 繊維	II12
203	VIA 4 a	V層	深	鉞	ループ3段 LR横回転 繊維多	II13
204	VI	V層	深	鉞	ループ5段 LR横回転 繊維多	II13
205	VIB 1 C	V層	深	鉞	ループ5段? RL横回転 繊維多	II13
206	VIB 0 b	V層	深	鉞	ループ6段か RL横回転 0 段多条か 繊維多	II13
207	VIB	V層	深	鉞	ループ3段 RLR横回転 繊維	II13
208	VIB 8 b	V層	深	鉞	ループ4段 LRL横回転 繊維多	II13
209	VIB 8 a	VII層	深	鉞	ループ1段 LRL横回転 補修孔 繊維	II13
210	VIA 3 h	V層	深	鉞	ループ2段 LRL横回転 繊維少	II13
211	VIA 3 C	V層	深	鉞	ループ文くずれ 繊維	II13
212	VIB 8 a	VII層	深	鉞	ループ1段 LRL横回転 繊維多	II13
213	VIA 2 b	V層	深	鉞	ループ2段 LRL横回転 繊維	II13
214	VIB	V層	深	鉞	ループ7段か RL横回転 繊維多	II13
215	VIB 0 b	V層	深	鉞	ループ現存で3段 LRL横回転 繊維多	II13
216	VIB	V層	深	鉞	ループが体部に広がる(7段) RL横回転 繊維多	II13
217	VIA 2 j	V層	深	鉞	結束のない羽状 0 段多条RL+LR横回転 口縁部綾織り文 繊維	II14
218	VIB 9 b	V層	深	鉞	結束のない羽状 0 段多条RL+LR横回転山形口縁 口縁部綾織り文 繊維	II14
219	VIA 1 j	V層	深	鉞	結束のない羽状LR+RLR横回転 口縁部綾織り文 補修孔 繊維	II14
220	VIA 3	V層	深	鉞	口縁部文様帯に綾織り文+体部LR横 繊維	II14
221	VIB 9 a	V層	深	鉞	結束のない羽状 0 段多条LR+縦口縁部綾織り文 繊維多	II14
222	VIA、VIB	V層	深	鉞	口縁部文様帯に綾織り文+体部横RL 0 段多条 繊維	II14
223	VIB 8 b	V層	深	鉞	口縁部文様帯綾織り文+体部RL横 0 段多条か? 繊維多	II14
224	VIB 9 b	V層	深	鉞	口縁部文様帯綾織り文+体部LR 0 段多条横回転 繊維	II14
225	VI	IV層	深	鉞	口縁部文様帯に綾織り文+体部LRL横 繊維	II14
226	VIA 4 e	V層	深	鉞	口縁部文様帯のみか 綾織り文 繊維	II14
227	VIA 2 d	V層	深	鉞	口縁部文様帯のみか?綾織り文 繊維	II14
228	VIB 9 b	V層	深	鉞	口縁部文様帯のみか 綾織り文 補修孔 繊維	II14
229	VIB 9 a	V層	深	鉞	口縁部文様帯のみか?に綾織り文+LRか?繊維	II14
230	VIB	IV層	深	鉞	綾織り文 繊維	II14
231	VIA 2 j	V層	深	鉞	縁部綾織り文 山形口縁 繊維	II14
232	VIB 8 b	V層	深	鉞	綾織り文 ランダム 繊維	II14
233	VIB 8 d	V層	深	鉞	口縁部綾織り文 口唇部外側軸の圧痕 繊維多	II14
234	VIB 9 C	V層	深	鉞	口縁部綾織り文 LR 繊維多	II14
235	VIB	IV層	深	鉞	LR 0 段多条 結節綾織り文 繊維	II14
236	VIA 3	V層	深	鉞	口縁部に瓦状然糸 不整然糸に近い 繊維	II14
237	VIB 9 C	V層	深	鉞	口縁部綾織り文+RL横回転 口唇部外側軸の圧痕 繊維多	II14
238	VIA 3 d	V層	深	鉞	口縁部に縄の側面圧痕+組縄Bか? 複節 L 回り 繊維	II15
239	VIA 3 h	V層	深	鉞	口唇部縄の側面圧痕(もしかすると組縄B L 回り複節か)	II15

240	VIA 9 j	V層	深	鉢	直前段合燃か? R { $\frac{L}{R}$ →←RL { $\frac{R}{L}$ +0段多条LR横回転	II16
241	VII 4 d	V層	深	鉢	瓦状燃糸文 繊維	II14
242	VIB 9 b	V層	深	鉢	口縁部文様帯のみか? 不整燃糸 繊維	II14
243	VII B 1 a	V層	深	鉢	瓦状燃糸文 繊維	II14
244	II D 1 a	T II層	深	鉢	瓦状燃糸文 不整燃糸に近い 繊維	II18 a
245	VIA 3 h	V層	深	鉢	瓦状燃糸文 繊維	II18 a
247	VIA 2 d	V層	深	鉢	瓦状燃糸文 繊維	II18 a
248	VIB 8 a	III b層	深	鉢	口縁部 正燃燃糸 繊維多	II18 b
249	VIA II a	V層	深	鉢	口縁部正燃燃糸+RL縦か? 繊維	II18 b
250	VIA 4 e	埋土	深	鉢	口縁部正燃燃糸+LR横か? 繊維多	II18 b
251	VIB	V層	深	鉢	口縁部及び口唇部 正燃燃糸 繊維多	II18 b
252	VIA 0 I	V層	深	鉢	菱形 燃糸文R 繊維極多	II18 c
253	トレンテ西から2つ目	不明	深	鉢	菱形 燃糸文R 補修孔 繊維多	II18 c
254	VIB	V層	深	鉢	網目状燃糸文 補修孔 口唇部指頭状圧痕 繊維多	II18 d
255	VIB 7 8 d	IV層	深	鉢	網目状燃糸 繊維	II18 d
256	VIB 8 b	V層	深	鉢	網目状燃糸 ラングムに施文 繊維	II18 d
257	VIA	IV層	深	鉢	網目状燃糸文	II18 d
258	VII B	IV層	深	鉢	網目状燃糸文 繊維	II18 d
259	VIA 4 C	V層	深	鉢	正燃燃糸 繊維多	II18 e
260	VIB 8 b	V層	深	鉢	網目状燃糸 ラングムに施文 繊維	II18 d
261	VIB	V層	深	鉢	燃糸文 L 繊維をわずかに含む	II18 e
262	VIB 8 C	IV層	深	鉢	LR 綾織り文 胴部 繊維多	II17
263	VIB VII e	埋土	深	鉢	体部綾織り文 繊維	II17
264	VIB 8 f	V層	深	鉢	横位 綾織り文+LR 繊維をごくわずかに含む	II17
265	VIB 7 8 d	V層	深	鉢	LR横 綾織り文	II17
266	II c 3 d	T II層	深	鉢	沈線	III
267	c 3 d	T II層	深	鉢	粘土紐貼付 LR 0段多条か	III
268	VIB 8 a	III b層	深	鉢	RL縦 粘土紐貼付の口縁部隆帯と口縁部に間に刻目文	IV 1
269	VIA	IV層	深	鉢	RL横 綾織り文(縦)	IVか
270	VIA 0 I	V層	深	鉢	RL横 綾織り文	IV1か
271	VIB 0 a	V層	深	鉢	RL縦 綾織り文	IV1か
272	II c 2 a	T II層	深	鉢	LR斜め 沈線 交互刺突文	IV1
273	VIA 8 J	V層	深	鉢	RL縦 0段多条 粘土紐貼付	IV2 a
274	VIB	IV層	深	鉢	RL縦 0段多条 粘土紐貼付	IV2 a
275	VIB 8 d	V層	深	鉢	キャリバー型 口縁部LR横 粘土紐貼付の隆帯	IV2 a
276	VIB 9 b	V層	深	鉢	LR横 0段多条 粘土紐貼付の隆帯 波形の文	IV2 a
277	VIA	IV層	深	鉢	口縁部RLR横 胴部RLR縦 粘土紐貼付	IV2 a
278	VIB 7 a	III b層	深	鉢	キャリバー型 LR横 粘土紐貼付の隆帯	IV2 a
279	VIA 3 e f	V層	深	鉢	LR(0段多条か?)横 粘土紐貼付の隆帯	IV2 a
280	VIA 0 d	V層	深	鉢	キャリバー型 LR横 粘土紐貼付の隆帯	IV2 a
281	VIA 2 d	廃棄土	深	鉢	キャリバー型 口縁部RLR横 粘土紐貼付の隆帯	IV2 a
282	VIA 0 I	V層	深	鉢	RLか? 縦回転 粘土紐貼付の隆帯	IV2 a
283	VIB d	IV層	深	鉢	RL 0段多条 斜め 粘土紐貼付隆帯	IV2 a
284	VIB 9 C	V層	深	鉢	キャリバー型 口縁部RL横 体部RL縦 粘土紐貼付の隆帯	IV2 a
285	VIA	IV層	深	鉢	RL縦 施文後 隆帯貼付	IV2 a
286	VIB	IV層	深	鉢	RL 0段多条か? 縦 隆帯	IV2 a
287	VIA 8 I	III b層	深	鉢	全体にていねいな磨き 隆線	IV2 a
288	VIB	V層	深	鉢	RLR縦 沈線 口唇部隆帯と貼付 口唇上部に沈線	IV2 b
289	VIB	IV層	深	鉢	RL縦 沈線3本	IV2 b
290	VIB 8 C d	V層	深	鉢	RL縦 沈線文 波状口縁	IV2 b
291	VIB	V層	深	鉢	RL縦 沈線	IV2 b
292	VIA 0 I	攪乱	深	鉢	RL縦 沈線	IV2 b
293	VIA	IV層	深	鉢	RL縦 隆沈線	IV2 b
294	VIA	IV層	深	鉢	沈線	IV3 b
295	VIA 1 g	IV層	深	鉢	沈線 RL充填	IV3 b
296	VII B	IV層	深	鉢	RL縦 沈線による区画	IV2 b
297	VIB 0 a	IV層	深	鉢	LR縦 三本組の沈線	IV2 b
298	VIB	V層	深	鉢	RLR縦 3本単位沈線文	IV2 b
299	VIB	IV層	深	鉢	RLR縦 3本単位沈線文	IV2 b
300	VIB 8 d	IV層	深	鉢	RLR縦 沈線 波状沈線を伴う	IV2 b

301	VIB	IV層	深 鉾	口縁部 渦巻状(隆沈線)	IV2 c
302	不明		深 鉾	R L縦 渦巻状隆帯 (隆沈線)	IV2 c
303	VIB 8 b	IV層	深 鉾	波状口縁 地文なし ミガキ 隆沈線 すず状の付着物 波状口縁	IV2 c
304	不明	撥乱	深 鉾	渦巻状隆帯 隆沈線	IV2 c
305	VIA	IV層	深 鉾	R L R斜め回転 隆沈線	IV2 c
306	VIA 8 a b	IV層	深 鉾	R L R ?横 隆沈線 波状口縁	IV2 c
307	VIB	IV層	深 鉾	キャリバー型 口縁部 R L R横回転 隆沈線	IV2 c
308	VIB 8 d	V層	深 鉾	波状口縁 L R横 隆沈線	IV2 c
309	VIA	IV層	深 鉾	R L横 隆沈線	IV2 c
310	VIB	IV層	深 鉾	R L横 隆沈線 キャリバー	IV2 c
311	VIB d	IV層	深 鉾	L R 斜め 隆沈線	IV2 c
312	VIB 8 d	IV層	深 鉾	口縁部 L R横 体部 L R縦 隆沈線貼付	IV2 c
313	VIB 0 e	V層	深 鉾	キャリバー型 口縁部 R L横回転 隆沈線	IV2 c
314	VIA 9 1 j	IV層	深 鉾	口縁部無文帯 隆沈線がめぐる	IV2 c
315	T 3 西10W	V層	深 鉾	R L縦回転 隆沈線 ていねいなミガキ	IV2 c
316	VIB 0 b	V層	深 鉾	R L R縦 隆帯貼付後施文 隆帯上に沈線	IV2 c
317	VIB	V層	深 鉾	隆帯貼付後施文 R L R縦 隆沈線	IV2 c
318	VIB	IV層	深 鉾	凹状隆帯 口縁部無文 波状口縁 R L R縦回転	IV2 c
319	VIB C	V層	深 鉾	口縁部折り返し無文帯 隆沈線 L R縦回転	IV2 c
320	VIB 9 a	V層	深 鉾	隆沈線 口縁部 L R横 体部 L R縦	IV2 c
321	VIA 9 d	IV層	深 鉾	口縁部 L R横 体部 L R縦 隆沈線	IV2 c
322	VIB	IV層	深 鉾	R L R縦 施文後 隆沈線	IV2 c
323	VIC	V層	深 鉾	R L R横 隆沈線	IV2 c
324	VIA	IV層	深 鉾	R L縦 隆沈線	IV2 c
325	VIB	IV層	深 鉾	R L縦 波状凹状隆帯	IV2 c
326	VIA	IV層	深 鉾	R L縦 隆沈線 棘状	IV2 c
327	VIB	IV層	深 鉾	R L縦 施文後 隆沈線	IV2 c
328	VIB	IV層	深 鉾	R L横 隆沈線 波状口縁	IV2 c
329	VIA	IV層	深 鉾	隆帯に橋状把手	IV2 d
330	VIA、VIA	V層	深 鉾	橋状把手 R L縦 施文後粘土貼付 口縁部と体部の境に2本の隆帯 8 b	IV2 d
331	VIB	IV層	深 鉾	隆帯	IV2 d
332	VIB 0 a	V層	深 鉾	隆帯貼付 口縁部と体部境に2本の隆帯	IV2 d
333	VIB	IV層	深 鉾	隆帯に橋状把手 R L縦	IV2 d
334	VIA 3 d	IV層	深 鉾	隆帯によるわらび手状文及び区画 口縁部無文帯 R L施文後調整	IV3 a
335	VIB 1 c	V層	深 鉾	波状口縁 隆帯によるわらび手文 沈線で区画 R L	IV3 a
336	VIB 5 - 7 e	IV層	深 鉾	波状口縁 沈線による区画 わらび手文 L R縦	IV3 a
337	VIA 1 i	V層	深 鉾	口縁部が波型 隆帯によるわらび手文 区画 R L縦	IV3 a
338	VIA II a	V層	深 鉾	R L縦 浅い沈線 蕨手状文 波状口縁	IV3 a
339	VIB 8 a	IV層	深 鉾	R L横 隆沈線 蕨手状 波状口縁文	IV3 a
340	VIA	IV層	深 鉾	口縁部2重沈線による区画内に刺突 波状口縁	IV3 b
341	VIA	IV層	深 鉾	口縁部2重沈線による区画内に刺突	IV3 b
342	VIB	IV層	深 鉾	沈線 L R縦 蕨手状文	IV3 a
343	VIA 1 d	不明	深 鉾	沈線 刺突 蕨手状文	IV3 a
344	VIA	IV層	深 鉾	隆沈線による区画内に刺突波状口縁	IV3 b
345	VIB	IV層	深 鉾	刺突	IV3 b
346	VIA	IV層	深 鉾	沈線と施文で囲ませた区画内に刺突 R L横	IV3 b
347	VIA 3 b	V層	深 鉾	キャリバー形 隆沈線 L R縦	IV3 b
348	VIB 8 a	III b層	深 鉾	浅い沈線による区画 竹管状の刺突 波状口縁	IV3 b
349	VIA 4 b	V層	深 鉾	波状口縁 L R縦 浅い沈線	IV3 b
350	VI	IV層	深 鉾	隆沈線による区画 区画内刺突 波状口縁	IV3 b
351	VIB 9 d	IV層	深 鉾	波状口縁 沈線による区画 L R充填	IV3 b
352	VIA 1 a	V層	深 鉾	浅い沈線による区画 R L R縦	IV3 b
353	VIA 0 J	III a層	深 鉾	L R縦 沈線	IV3 b
354	VIB	IV層	深 鉾	沈線 L R縦	IV3 b
355	VIB 1 b	V層	深 鉾	沈線による区画 L R縦 磨り消しか	IV3 b
356	VIB 1 C	V層	深 鉾	沈線による区画 L R充填	IV3 b
357	VIA 1 d	IV層	深 鉾	L R 沈線による区画内を充填	IV3 b
358	VIA 3 e	V層	深 鉾	沈線による区画 R L R縦 施文後区画	IV3 b
359	VIB	IV層	深 鉾	沈線 R L R	IV3 b
360	VIA 9 h	IV層	深 鉾	L R縦 施文後沈線で区画し磨き	IV3 b

361	VIA 2 b	V層	深	鉢	沈線による区画 L R縦	IV3 b
362	VIA 9 i j	IV層	深	鉢	沈線による区画 口縁部に一条針状の工具による斜め方向からの刺突がめぐる	IV3 b
363	VIB 7 a	V層	深	鉢	沈線による区画 L R縦施文した後に区画 磨り消し	IV3 b
364	VIA	IV層	深	鉢	沈線による区画内 R L充填	IV3 b
365	VIA	IV層	深	鉢	R L縦 充填 沈線	IV3 b
366	VIA 9 h	IV層	深	鉢	R L斜め回転 施文後沈線で区画し区画外を磨き	IV3 b
367	VIA	IV層	深	鉢	キャリバー沈線による区画 L R縦	IV3 b
368	VIA 2 d	V層	深	鉢	R L R縦回転 施文後沈線で区画	IV3 b
369	VIA 9 a	不明	深	鉢	細い沈線 R L R縦	IV3 b
370	VIA 9 J	III b層	深	鉢	L R縦 沈線	IV3 b
371	VIC 8 b	V層	深	鉢	L R縦 沈線底部網代痕	IV3 b
372	VIB	IV層	深	鉢	沈線 L R	IV4 a
373	VIB	IV層	深	鉢	波状口縁 R L 0段多条縦 浅い沈線で区画 磨り消し	IV4 a
374	VIB	IV層	深	鉢	R L 0段多条か 沈線 ミガキ	IV4 a
375	VIB 1 C	V層	深	鉢	L R縦 浅い沈線による区画	IV4 a
376	VIB 9 b	V層	深	鉢	沈線による区画 R L縦施文沈線で区画 磨り消し	IV4 a
377	VIA	IV層	深	鉢	R L R縦 施文後 沈線	IV4 a
378	VIA	IV層	深	鉢	R L R縦 三日月状貼付	IV4 a
379	VIA 1 d	不明	ミニチュア		沈線による区画	IV4 a
380	VIC 1 b	V層	深	鉢	沈線による区画内にL R充填 無文帯に刺突	IV4 a
381	VIA 4 b	IV層	深	鉢	沈線による区画 浅い沈線の中に刺突	IV4 a
382	VIB 7 a	III b層	深	鉢	丸みをもつ波状口縁沈線による区画 沈線間に右方向から刺突	IV4 a
383	VIB	IV層	深	鉢	口縁部 沈線に添って円形の刺突	IV4 a
384	VIB 9 b	V層	深	鉢	隆沈線による区画 隆線は粘土紐貼付 隆線間に刺突	IV4 a
385	VIA 9 I j	IV層	深	鉢	充填縄文 L R縦 沈線 刺突	IV4 a
386	VIA 2 I	V層	深	鉢	充填縄文 R L縦 沈線 刺突	IV4 a
387	VIC	IV層	深	鉢	沈線による区画内に刺突	IV4 a
388	VIA	IV層	深	鉢	沈線に添って刺突	IV4 a
389	VIB	IV層	深	鉢	R L R縦回転 隆帯による区画後施文	IV4 b
390	VIB 8 b	V層	深	鉢	R L R縦～斜め 隆帯(断面 三角形)	IV4 b
391	VIB	IV層	深	鉢	隆帯(断面 三角形)	IV4 b
392	VIA 9 I j	IV層	深	鉢	隆帯で区画 R L横隆帯の断面は低い三角形	IV4 b
393	VIB	IV層	深	鉢	隆帯	IV4 b
394	VIB 0 b	V層	深	鉢	隆帯で区画 L R横隆帯の断面三角形 ベンガラ?付着	IV4 b
395	VIB 9 b	III a層	深	鉢	隆帯による区画 R L R縦	IV4 b
396	VIB	V層	深	鉢	隆帯で区画 R L横	IV4 b
397	VIA 3 b	IV	深	鉢	波状口縁 刺突	IV4 b
398	VIA	IV層	深	鉢	R L R 斜め回転 浅い沈線で区画充填縄文	IV4 a
399	VIA 1 e	攪乱	深	鉢	L R充填 沈線による区画	IV4 a
400	VIB 9 a	不明	台付	鉢	R L R斜め	IV5
401	VIB d	IV層	深	鉢	波状口縁 R L縦回転	IV5
402	VIB 0 b	V層	深	鉢	R L縦回転 口縁部隆帯	IV5
403	VIB	V層	深	鉢	口縁部横方向にミガキ 裏面に輪づみ痕が残る L(無節)縦 口唇部隆帯	IV5
404	VIB 9 C	V層	深	鉢	L R縦 口唇部折り返し	IV5
405	VIA	IV層	深	鉢	L R横 波状口縁	V
406	VIB 9 b	V層	深	鉢	口唇部やや外反 体部が膨らむ R L横回転	IV5
407	VIB	V層	深	鉢	口唇部やや外反 L R縦回転	IV5
408	VIA	IV層	深	鉢	口縁部やや外反 R L R縦回転	IV5
409	VIA 4 b	V層	深	鉢	口唇部外反 R L R縦回転	IV5
410	VIB 8 e 炭窯	埋土	深	鉢	R L縦 口唇部折り返し	IV5
411	VIB	V層	深	鉢	口唇部やや外反 R L縦回転	IV5
412	VIB 1 C	V層	深	鉢	L R縦 口唇部やや外反	IV5
413	VIA 1 g	V層	深	鉢	R L縦回転	IV5
414	VIA 0 i	V層	深	鉢	L R 0段多条 口唇部やや外反	IV5
415	VIB	IV層	深	鉢	R L縦	IV5
416	VIB 1 b	V層	深	鉢	L R縦絞線り文?	IV5
417	VIA 0 I	V層	深	鉢	L R縦 口縁部1.5cm程残して施文 粗製	IV5
418	VIA 9 h	IV層	深	鉢	R L横 口縁部1.5cm程残して施文 補修孔表裏からあける	IV5
419	VIA 4 d	V層	深	鉢	R L横回転	IV5
420	VIB 1 a	V層	深	鉢	L R縦回転 口縁部やや外反	IV5

421	VIB 3 a	V層	深鉢	RLR縦	口縁部やや外反	IV5
422	VIB	V層	深鉢	LR縦	口唇部わずかに外反	IV5
423	VIB 8 b	III b層	深鉢	LR縦	口唇部無文帯 粗製	IV5
424	VIB 1 b	V層	深鉢	捺糸文		IV5
425	VIA	IV層	深鉢	捺糸文		IV5
426	VIB	V層	深鉢	RLR縦		IV5
427	VIC	V層	深鉢	LR R前々段反捺(捺り戻し)かLR 0段多条		IV5
428	VIB 0 a	V層	深鉢	RL縦		IV5
429	VIC	V層	深鉢	L 無筋		IV5
430	VIB	IV層	深鉢	LR縦回転	底面 網代痕	IV5
431	VI	IV層	深鉢	LR縦	底面 笹状の圧痕	IV5
432	VIA	V層	深鉢	LR縦	底 木葉痕	IV5
433	VIA 2 C	IV層	深鉢	LR縦		IV5
434	VIA	IV層	深鉢	口縁部半載竹管	斜位に刺突	V
435	VIA	IV層	深鉢	捺糸Lをすり消している		V
436	VIB	IV層	深鉢	連鎖状貼付文		V
437	VIA d e	IV層	深鉢	LR横	沈線	V
438	VIA	IV層	深鉢	LR横	波状口縁	V
439	谷部	I a層	深鉢	沈線		V
440	VIA 4 c	V層	深鉢	刻み目、沈線		V
441	VIA 3 b	埋土	深鉢	刻み目、沈線		V
442	VIA	IV層	深鉢	沈線	ミガキ 補修孔	V
443	VIA 3 b	埋土	深鉢	沈線		V
444	VIA 3 h	V層	不明	把手		V
445	VIB 0 C	IV層	鉢	羊歯状文	RL	VI
446	不明	攪乱	台付鉢	RL 沈線	刺突	VI
447	II c 1 i	T II層	浅鉢	磨消縄文	LR	VI
448	II C 1 e	IV層	鉢	沈線	原体不明	VI
449	不明	攪乱	壺	外面ミガキ		VI

第17表 遺構外出土遺物観察表(2)土製品(縄文時代)

図版No	出土地点	層位等	種類	文様	その他
450	VIA 3 b	I a層	円盤状土製品	LR繊維を含む	早期末~前期前葉か
451	VIB d	IV層	円盤状土製品	LR	
452	VI	IV層	円盤状土製品	LR繊維を強くわずかに含む	早期末~前期前葉か

第18表 遺構外出土遺物観察表(3)土師器

図版No	出土位置	層位	器種	外面調整		内面調整		法 量			ロクロ使用	備 考
				口縁部	体部	口縁部	体部	口径	底径	器高		
453	II B 3 h	T II	甕	ヨコナデ	ハケ目	ヨコナデ	ハケ目 ヘラナデ	推17.2	7.0	残29.2	無	木葉痕
454	II B 3 h	T II	椀	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	10.5	5.3	7.4	有	内面及び外面口唇部黒色 底部~体部下唇ヘラケズリ
455	VIA 4 b	IV	杯	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	推15.3	-	-	有	内面黒色処理
456	VIA O i	IV	杯	-	ロクロナデ	-	ヘラミガキ	-	推6.6	-	有	回転糸切り無調整
457	VIA O i	IV	甕	-	ヘラケズリ	-	ハケ目	-	推19.2	-	無	
458	II C 2 a	T II	甕	-	ハケ目	-	ヘラナデ	-	7.9	-	無	胎土に砂粒を多く含む
459	II C 1 e-17フロッグ	不明	甕	-	ヘラケズリ	-	ヘラナデ	-	-	-	無	胎土に砂粒を多く含む

第19表 遺構外出土遺物観察表(4)須恵器

図版No	出土位置	層位	器種	外面調整		内面調整		法 量			ロクロ使用	備 考
				口縁部	体部	口縁部	体部	口径	底径	器高		
460	VIA	IV	甕	-	ヘラケズリ	-	ロクロナデ	-	-	-	有	体部破片
461	VIA	IV	甕	-	クダキ後 ロクロナデ	-	ロクロナデ	-	-	-	有	肩部
462	VIA	IV	甕	-	ヘラケズリ	-	ロクロナデ	-	-	-	有	体部破片

第20表 遺構外出土遺物観察表(5) 石器、石製品(縄文時代)

()内は残存値

図版No	出土地点	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	産地、生成年代	特徴	分類
1	VIC	X層	石鏃	1.5	1.3	0.3	0.3	粘板岩	北上山地古生界		OAA
2	VIA3j	IV層	石鏃	1.5	(1.3)	0.3	(0.4)	粘板岩	北上山地古生界	凹基 基部の一端欠	OAA
3	VIC	IX層	石鏃	1.9	1.4	0.3	0.5	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		OAA
4	VIA9i焼土付近	V層	石鏃	1.9	1.2	0.3	0.4	粘板岩	北上山地古生界	基部の一端欠	OAA
5	VIA3i	V層	石鏃	(1.7)	1.8	0.5	(1.1)	チャート質粘板岩	北上山地古生界	凹基	OAA
6	VIA2b	VII層	石鏃	1.6	1.7	0.5	0.8	泥灰質粘板岩	北上山地古生界	凹基	OAA
7	IIC1e	IV層	石鏃	2.3	1.9	0.5	1.2	チャート質粘板岩	北上山地古生界	凹基 基部の一端欠	OAA
8	VIA3d	V層	石鏃	2.1	1.9	0.5	0.9	粘板岩	北上山地古生界	凹基	OAA
9	VIB8b	V層	石鏃	(2.4)	1.6	0.3	(0.8)	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	先端部及び基部の一部欠損	OAA
10	VIA0j	IIIa層	石鏃	2.2	1.3	0.3	0.6	泥灰質粘板岩	北上山地古生界	凹基	OAA
11	VIA3i	V層	石鏃	2.5	1.6	0.5	1.1	粘板岩	北上山地古生界	凹基	OAA
12	VIB8c	V層	石鏃	(2.2)	1.7	0.7	(1.3)	粘板岩	北上山地古生界	先端一部欠損凹基	OAA
13	VIB3a	VIB3a住下	石鏃	2.4	1.9	0.5	1.6	粘板岩	北上山地古生界	浅い凹基 半製品か	OAb
14	VIB8a	VII層	石鏃	1.4	1.2	0.2	0.2	粘板岩	北上山地古生界	先端欠ごく浅い凹基	OAb
15	VIB8a	V層	石鏃	1.6	1.3	0.3	0.3	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	凹基	OAb
16	VIB	IX層	石鏃	1.8	1.2	0.3	0.3	流紋岩質細粒凝灰岩	北上山地古生界		OAb
17	VIA3b住居跡	埋土	石鏃	1.8	1.2	0.3	0.5	粘板岩	北上山地古生界	一部欠凹基	OAb
18	VIA3J	V層	石鏃	2.0	1.3	0.4	0.7	粘板岩	北上山地古生界	基部の一端欠浅い凹基	OAb
19	VIA、VIA	IV層	石鏃	2.1	1.5	0.3	0.7	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	凹基	OAb
20	VIB1b	V層	石鏃	(2.1)	1.4	0.4	(0.8)	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	先欠凹基	OAb
21	VIB8f	VI層	石鏃	2.4	1.4	0.6	1.1	粘板岩	北上山地古生界	浅い凹基	OAb
22	VIA3b住居跡	埋土	石鏃	2.0	2.2	0.4	0.6	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	凹基	OAb
23	II B4h住居跡柱穴P1	埋土上位	石鏃	(1.9)	1.4	0.3	(0.6)	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	凹基先端欠	OAb
24	VIA2i	V層	石鏃	2.2	1.4	0.3	0.6	流紋岩	北上山地古生界	浅い凹基一側縁欠損	OAb
25	VIA1f	V層	石鏃	2.2	1.5	0.3	0.7	凝灰質粘板岩	北上山地中生界	浅い凹基基部の一端欠	OAb
26	VIA	IV層	石鏃	2.3	1.3	0.3	0.9	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		OAb
27	VIC	IX層	石鏃	2.3	1.5	0.5	1.2	流紋岩質細粒凝灰岩	北上山地古生界		OAb
28	VIB0a	V層	石鏃	2.5	1.5	0.4	0.8	粘板岩	北上山地古生界	凹基	OAb
29	IIC3d	T I層	石鏃	3.4	1.7	0.4	1.8	粘板岩	北上山地古生界	凹基	OAb
30	VIA3b住居跡周溝	埋土	石鏃	2.5	1.5	0.3	0.9	泥灰質粘板岩	北上山地古生界	凹基	OAb
31	VIA4c	VI層	石鏃	2.4	1.5	0.4	0.9	粘板岩	北上山地古生界	凹基	OAb
32	IIC2h	T I層	石鏃	2.4	1.5	0.4	1.0	粘板岩	北上山地古生界	平基	OAb
33	VIB1a	V層	石鏃	2.7	1.5	0.4	1.0	粘板岩	北上山地古生界	凹基	OAb
34	VIA2b	IV層	石鏃	2.9	1.7	0.3	1.7	粘板岩	北上山地古生界	浅い凹基	OAb
35	VIA	IV層	石鏃	3.2	1.5	0.5	2.2	泥灰質粘板岩	北上山地古生界		OAb
36	VIB8a	V層	石鏃	1.8	1.2	0.2	0.5	粘板岩	北上山地古生界	先欠	OAb
37	VIA1b	攪乱	石鏃	1.8	1.3	0.3	0.6	粘板岩	北上山地古生界	浅い凹基	OAb
38	VIB8a	VII層	石鏃	2.2	1.4	0.2	0.7	粘板岩	北上山地古生界	ごく浅い凹基先端欠(わずか)	OAb
39	VIB9c	IIIa層	石鏃	2.1	1.3	0.2	0.6	泥灰質粘板岩	北上山地古生界		OAbか
40	VIA3i	V層	石鏃	2.1	(1.5)	0.5	(0.9)	粘板岩	北上山地古生界	浅い凹基	OAb
41	VIB8d	IV層	石鏃	2.2	1.3	0.6	1.3	泥灰質粘板岩	北上山地古生界	凹基ごく浅い	OAbか
42	VIA3b住居跡	埋土	石鏃	2.2	1.5		3	粘板岩	北上山地古生界	一部欠	OAbか
43	T3西5m	VI層	石鏃	2.1	1.5	0.2	0.6	泥灰質粘板岩	北上山地古生界		OAbか
44	表探	I a層	石鏃	1.6	1.3	0.3	0.6	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		OAb
45	VIA3j	V層	石鏃	1.9	1.4	0.4	0.7	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	浅い凹基	OAb
46	VIB8d	V層	石鏃	(2.0)	1.6	0.3	(0.8)	泥灰質粘板岩	北上山地古生界	先端部少し欠損浅い凹基	OAb
47	VIB9c	V層	石鏃	(2.2)	1.6	0.4	(1.1)	泥灰質粘板岩	北上山地古生界	先端欠一側縁欠平基	OAb
48	VIB0c	IIIb層	石鏃	2.1	1.6	0.3	0.8	粘板岩	北上山地古生界	凹基	OAb
49	VIA3b住居跡	埋土	石鏃	1.9	1.4	0.4	0.7	泥灰質粘板岩	北上山地古生界	浅い凹基 先端欠	OAb
50	VIA3b住居跡	埋土	石鏃	1.2	1.1	0.3	0.3	粘板岩	北上山地古生界	浅い凹基	OAb
51	VIA8g	V層	石鏃	1.3	1.3	0.7	0.4	泥灰質粘板岩	北上山地古生界	基部の一端欠	OAbか
52	VIB7f	IV層	石鏃	1.6	1.3	0.3	0.6	粘板岩	北上山地古生界	凹基タール状ごくわずか付着(基部)	OAb
53	VIB0b	V層	石鏃	1.5	1.3	0.2	0.4	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	基部の一端欠	OAbか
54	VIA1d	V層	石鏃	1.5	1.3	0.3	0.4	粘板岩	北上山地古生界	先端欠	OAb
55	VIB8d	V層	石鏃	2.5	2.4	0.6	3.0	粘板岩	北上山地古生界	浅い凹基	OAb
56	VIB7f	IV層	石鏃	1.4	1.2	0.3	0.4	泥灰質粘板岩	北上山地古生界	平基	OB
57	VIA	IV層	石鏃	1.4	1.2	0.3	0.5	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		OB

58	VIIA3b住居跡	埋土	石鉄	1.7	1.0	0.3	0.4	凝灰質粘板岩	北上山地中生界	平基 先端欠	OB
59	VIIA3g	V層	石鉄	1.7	1.3	0.3	0.5	粘板岩	北上山地古生界	基部の一端欠	OBか
60	VIIA1i	IV層	石鉄	2.0	1.5	0.6	(1.2)	粘板岩	北上山地古生界	一部欠	OBか
61	VIIA1f	V層	石鉄	2.1	1.4	0.3	0.7	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	平基基部の一端欠	OBか
62	VIB8a	IIIb層	石鉄	2.5	2.4	0.3	0.7	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	平基	OB
63	VIIA3g	V層	石鉄	(2.3)	1.5	0.3	(0.8)	石灰質粘板岩	北上山地古生界	先端欠損平基	OB
64	VIB2c	VI層	石鉄	2.3	1.5	3.5	0.8	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	平基	OB
65	VIA	IX層	石鉄	2.4	1.1	0.4	0.8	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		OB
66	VIC2f	IV層	石鉄	2.2	1.3	0.4	0.7	粘板岩	北上山地古生界	平基	OB
67	VIC	IV層	石鉄	3.0	1.1	0.4	1.4	粘板岩	北上山地古生界		OB
68	IIC4c	TI層	石鉄	3.2	1.7	0.7	2.7	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	平基	OB
69	VIIA0f	VI層	石鉄	2.4	1.7	0.3	1.3	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		OB
70	VIIA2i	IV層	石鉄	3.1	2.5	0.4	3.8	粘板岩	北上山地古生界	平基	OB
71	VIIA3b住居跡	埋土	石鉄	(2.3)	1.4	0.5	(1.8)	粘板岩	北上山地古生界	自然面残る先端わずかに欠凸基	OC
72	VIIA3h	V層	石鉄	2.4	1.9	0.9	1.8	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	基部欠凸基か	1か
73	不明	不明	石鉄	3.4	1.1	4.5	1.0	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	尖基鉄	1
74	VIB0c	IIIa層	石鉄	3.9	1.4	0.6	2.2	チャート質粘板岩	北上山地古生界	有基	1
75	VIA0d	V層	石鉄	(2.9)	1.1	0.4	(1.1)	粘板岩	北上山地古生界	基部欠線長	1
76	VIA	IV層	石鉄	4.1	1.2	0.6	2.1	チャート質粘板岩	北上山地古生界		1
77	VIB8c	V層	石鉄	2.4	1.7	0.3	0.7	チャート質粘板岩	北上山地古生界	半製品(加工途中か?)	2
78	VIB8d	攪乱	石鉄	2.9	1.6	0.2	1.6	粘板岩	北上山地古生界	基部欠損	2
79	VIIA1f	VI層	尖頭器	(2.6)	2.1	1.3	(7.5)	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	基部	
80	VIB0b	IV層	尖頭器	(4.4)	2.4	0.7	(8.3)	チャート質粘板岩	北上山地古生界	上半欠損	
81	VIB8ab,9ab	IV層	尖頭器	(5.6)	3.0	1.3	(18.4)	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	先端部のみ残	
82	VIA	IV層	尖頭器	5.5	1.8	1.0	7.2	流紋岩質細粒凝灰岩	北上山地古生界		
83	VIB8b	IV層	尖頭器	(9.1)	2.5	1.1	(21)	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	柄の部分のみ	
84	VIA	IV層	尖頭器	10.6	2.8	1.0	29.4	粘板岩	北上山地古生界		
85	VIB	IV層	石匙	6.0	1.2	0.6	5.2	流紋岩質細粒凝灰岩	北上山地古生界		A1aア
86	VIIA2b	V層	石匙	6.2	1.6	0.7	7.4	粘板岩	北上山地古生界		A1aア
87	VIIA3b住居跡	埋土	石匙	7.9	1.6	0.9	11.4	粘板岩	北上山地古生界	先端少し欠	A1aア
88	VIB9e	V層	石匙	6.2	1.7	0.9	8.0	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		A1aア
89	VIB8a	VI層	石匙	6.9	1.8	1.0	9.0	チャート質粘板岩	北上山地古生界		A1aア
90	VIA	IV層	石匙	6.2	2.0	1.0	11.8	粘板岩	北上山地古生界		A1aア
91	VIB0a	V層	石匙	8.2	2.3	1.1	17.9	チャート質粘板岩	北上山地古生界		A1aア
92	VIB8e	V層	石匙	(9.3)	2.5	1.2	(25.5)	粘板岩	北上山地古生界	先欠	A1aア
93	VIIA2b	IV層	石匙	9.4	2.5	0.9	17.2	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		A1aア
94	VIB9c	IV層	石匙	(7.0)	2.5	0.9	(16.4)	粘板岩	北上山地古生界	先端欠損	A1aア
95	VIA0h	V層	石匙	6.5	2.5	0.8	11.0	チャート質粘板岩	北上山地古生界		A1aア
96	VIB9c	V層	石匙	5.6	2.5	0.6	6.8	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		A1bア
97	VIB9b	V層	石匙	5.5	2.1	0.7	6.0	粘板岩	北上山地古生界	打点つまみと逆	A1bア
98	VIIA4b	V層	石匙	(6.4)	2.4	0.7	(9.5)	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	つまみ欠タール状付着物	A1bア
99	IIC2f	TII層	石匙	7.8	2.9	0.7	13.7	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	タール状付着物少量	A1bア
100	VIA	IV層	石匙	5.7	2.8	1.0	13.0	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		A1bア
101	VIB	IV層	石匙	5.5	3.1	0.4	8.2	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		A1bア
102	VIB8e	V層	石匙	4.6	2.1	0.6	5.7	粘板岩	北上山地古生界		A1bア
103	VIB9b	V層	石匙	3.6	2.2	0.8	4.3	石灰質粘板岩	北上山地古生界	打点はつまみと反対	A1bア
104	VIC	IX層	石匙	4.9	1.8	0.6	5.6	粘板岩	北上山地古生界		A1bア
105	VIIA2d	V層	石匙	5.0	1.8	0.6	5.6	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	タール状付着物	A1bア
106	VIB7c	V層	石匙	4.7	2.3	0.5	4.8	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	タール状付着物	A1bア
107	VIIA3i	V層	石匙	4.4	2.1	0.6	4.4	粘板岩	北上山地古生界	打点はつまみに直交	A1bア
108	VIB8a	V層	石匙	5.0	3.1	0.9	12.1	粘板岩	北上山地古生界		A1bア
109	VIB8a	V層	石匙	5.0	1.5	0.8	4.3	チャート	北上山地古生界		A1bイ
110	VIB0b	IV層	石匙	5.8	1.4	0.6	4.5	チャート質粘板岩	北上山地古生界		A1aイ
111	VIB8a	V層	石匙	5.7	1.4	0.9	6.1	チャート質粘板岩	北上山地古生界		A1bイ
112	VIB0a	V層	石匙	6.2	1.6	0.9	7.8	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	主につまみとその周辺にタール状付着物	A1bイ
113	VIB8d	V層	石匙	6.4	1.8	0.8	7.5	粘板岩	北上山地古生界	タール状付着物少量	A1bイ
114	VIB0a	V層	石匙	5.1	2.0	0.7	5.7	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		A1bイ
115	VIB8e	V層	石匙	5.9	2.2	1.1	6.9	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		A1bイ
116	VIB0a	V層	石匙	6.4	1.9	0.9	9.5	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		A1aイ
117	VIIA4c	V層	石匙	(3.2)	1.7	0.7	(3.9)	チャート質粘板岩	北上山地古生界	つまみ及び上半欠	A1aイ

118	VIB2b	V層	石匙	5.8	2.3	0.5	4.7	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		A1bイ
119	VIA3h	V層	石匙	5.1	2.1	0.7	6.6	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		A1bイ
120	VIA2i	V層	石匙	5.7	3.0	0.8	11.8	粘板岩	北上山地古生界		A1bイ
121	VIB0c	IV層	石匙	7.4	3.5	0.9	23.7	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		A1bイ
122	VIB0a	V層	石匙	7.0	3.5	1.1	16.6	粘板岩	北上山地古生界	タール状付着物	A1bイ
123	VIB	IV層	石匙	5.6	2.6	0.7	8.2	粘板岩	北上山地古生界		A1bイ
124	VIB	IV層	石匙	6.3	2.3	0.9	12.8	粘板岩	北上山地古生界		A1bイ
125	VIB8.d.e.f	V層	石匙?	5.6	2.5	0.7	7.2	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	つまみ欠損タール状付着物	A1bイか
126	VIB6f	IV層	石匙	4.6	2.0	0.6	4.1	粘板岩	北上山地古生界		A1bイ
127	VIA3b住居跡	埋土	石匙	4.5	2.0	0.5	3.5	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	タール状付着物	A1bイ
128	VIA3d	V層	石匙	4.7	2.1	0.5	4.4	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		A1bウ
129	VIB8a	V層	石匙	(4.4)	3.4	0.6	(5.2)	粘板岩	北上山地古生界	刃部欠損	A1bウ
130	VIB8.9.ab	IV層	石匙	(4.0)	3.2	0.5	(7.1)	粘板岩	北上山地古生界	半製品?	A1bウ
131	VIB7f	IV層	石匙	4.9	3.4	1.1	14.3	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		A1bウ
132	VIA	IV層	石匙	7.6	2.7	0.7	18.5	チャート質粘板岩	北上山地古生界		A1bウ
133	IIC4b	T1層	石匙	8.2	3.8	0.9	22.3	粘板岩	北上山地古生界		A1bウ
134	VIA9i	V層	石匙	8.3	1.8	1.0	7.3	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	自然面を残す	A1bウ
135	VIA	IV層	石匙	5.7	2.1	0.7	8.5	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		A1bウ
136	VIC	IX層	石匙	5.3	1.6	0.8	6.4	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		A1bウか
137	VIA3i	V層	石匙	6.0	2.5	0.7	8.5	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		A1bウ
138	VIA1b	V層	石匙	3.8	2.2	0.6	4.4	粘板岩	北上山地古生界		A2か
139	VIB7.8.d.e.f	V層	石匙	4.0	2.2	0.4	(4.6)	石灰質粘板岩	北上山地古生界	つまみ欠損	A2か
140	VIA2b	V層	石匙	4.5	2.6	0.6	7.2	粘板岩	北上山地古生界		A2
141	VIB8b	V層	石匙	3.7	1.9	1.1	(4.1)	チャート質粘板岩	北上山地古生界	片側欠損 打点はつまみとずれる	A2
142	VIA4a	V層	石匙	4.3	2.3	0.6	6.5	粘板岩	北上山地古生界		A2
143	VIB7a	V層	石匙	5.7	2.3	1.0	8.8	粘板岩	北上山地古生界		A2
144	VIB8b	V層	石匙	2.2	2.6	0.6	6.4	粘板岩	北上山地古生界		A2
145	VIB9a	V層上位	石匙	5.5	2.4	0.9	9.6	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	打点つまみと逆	A2
146	VIA1g	V層	石匙	5.8	2.8	1.1	15.7	粘板岩	北上山地古生界		A2
147	VIA3d	IV層	石匙	6.4	2.8	1.2	16.7	粘板岩	北上山地古生界		A2
148	VIB9b	V層	石匙	7.2	2.7	1.2	18.3	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	つまみ部分にタール状付着物 つまみと打点位置異なる	A2
149	VIB	V層	石匙	7.2	3.7	1.6	23.6	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		A2
150	VIB8b	V層	石匙	5.6	3.5	0.6	10.3	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		A2
151	VIA3h	V層	石匙	5.5	2.6	0.5	7.3	粘板岩	北上山地古生界	タール状付着物少量	A2
152	VIA8i	V層	石匙	(0.5)	1.9	0.9	(7.1)	チャート質粘板岩	北上山地古生界	つまみ欠	A2
153	VIB8c	V層	石匙	5.4	2.1	0.8	7.5	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		A2
154	VIA3j	V層	石匙	6.2	1.8	0.9	9.5	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	アスファルト付着	A2か
155	VIA9b	V層	石匙	5.1	2.1	0.7	6.3	粘板岩	北上山地古生界		A3
156	VIA1d	V層	石匙	5.0	2.5	1.1	5.5	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		A3
157	VIB8e	V層	石匙	5.5	2.9	0.9	8.7	粘板岩	北上山地古生界	粗製打点はつまみの反対側	A3か
158	VIB9b	V層	石匙	6.2	3.2	0.6	9.5	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	つまみ部分にタール状付着物	A3
159	VIA4a	V層	石匙	5.2	2.6	0.6	4.3	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		A3
160	VIB9d	V層	石匙	5.4	3.0	0.5	6.1	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		A3か
161	VIB8a	V層	石匙	4.8	2.8	1.0	8.8	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	つまみ列の部分に少量のタール状付着物 鋭縁欠損	A3か
162	VIA	IV層	石匙	6.7	4.0	1.0	21.5	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		A3か
163	VIB1b	V層	石匙	(4.3)	2.2	0.7	(6.6)	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	先欠	不明
164	VIB8a	V層	石匙	(4.4)	2.0	0.9	(4.4)	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	先欠	不明
165	VIB8c	V層	石匙	(5.1)	2.2	0.7	(5.7)	粘板岩	北上山地古生界	先端部欠損	不明
166	VIA8j	V層	石匙	4.0	3.6	0.6	7.9	粘板岩	北上山地古生界		A3
167	VIB1b	V層	石匙	(3.4)	2.4	0.5	(3.4)	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	粗製	A3
168	VIC	IX層	石匙	6.9	2.7	0.6	8.3	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		不明
169	VIB0c	V層	石匙?	10.4	3.3	1.4	52.1	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	先端欠損	不明
170	VIA2d	V層	石匙	4.1	2.2	0.8	4.6	石灰質粘板岩	北上山地古生界		B1a
171	VIB8e炭窯	埋土	石匙	2.1	5.0	0.4	4.6	粘板岩	北上山地古生界		B1a
172	VIA1d	V層	石匙	3.6	5.3	1.5	14.8	粘板岩	北上山地古生界		B1a
173	VIB7d	V層	石匙	5.3	2.7	1.1	9.4	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	タール状付着物	B1a
174	VIA7i	VII層	石匙	5.4	2.0	0.9	6.2	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		B1a
175	VIA3e	V層	石匙	3.9	5.5	0.9	12.6	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		B1a
176	VIA3g	V層	石匙	(2.7)	5.8	0.8	(9.5)	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	つまみ欠	B1a
177	VIB8b	V層	石匙	3.3	4.4	1.0	7.5	粘板岩	北上山地古生界		B1a

178	VIB	IV層	石匙	2.9	4.1	0.6	5.8	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		B1a
179	VIA	IV層	石匙	2.4	3.7	0.4	3.3	粘板岩	北上山地古生界		B1a
180	VIA	IV層	石匙	2.9	4.0	0.9	5.9	粘板岩	北上山地古生界		B1a
181	VIB8a	V層	石匙	2.8	4.0	0.6	3.9	粘板岩	北上山地古生界	打点つまみと反対の刃部	B1b
182	VIA3b住居跡	埋土	石匙	3.1	3.8	0.6	4.7	粘板岩	北上山地古生界		B1b
183	VIA0i,j	V層	石匙	3.8	3.6	0.8	7.8	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		B1bか
184	VIA3b住居跡	埋土	石匙	3.5	4.1	0.4	0.5	粘板岩	北上山地古生界		B1a
185	VIB2C	V層	石匙	3.1	4.5	0.6	7.1	粘板岩	北上山地古生界		B1b
186	VIA	IV層	石匙	3.2	4.9	0.7	6.5	粘板岩	北上山地古生界		B1b
187	VIB0a	V層	石匙	3.2	5.4	1.1	13.6	粘板岩	北上山地古生界		B1b
188	VIB8,9,c,d	V層	石匙	3.9	(6.0)	1.0	(12.1)	粘板岩	北上山地中生界	刃部欠損	B1bか
189	VIA8j	IIIb層	石匙	4.1	3.5	9.0	19.1	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	タール状付着物少量	B1b
190	VIA2b	IV層	石匙	3.5	5.3	0.7	3.5	粘板岩	北上山地古生界		B1b
191	VIB9c	V層	石匙	3.1	5.0	0.7	8.3	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		B1bか
192	VIB9d,e,f	V層	石匙	(4.3)	2.3	0.7	(6.6)	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	つまみ-部欠損打点つまみがずれる(つまみの反対側)	B1c
193	VIA2b	V層	石匙	3.3	2.1	0.1	5.9	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		B1cか
194	VIB6c	X層	石匙	3.0	4.0	0.5	4.6	流紋岩質細粒凝灰岩	北上山地古生界		B1cか
195	VIA1e-1住居跡	埋土	石匙	3.2	3.6	0.8	5.8	粘板岩	北上山地古生界		B1cか
196	VIA	IV層	石匙	5.1	3.5	0.5	7.7	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		B1c
197	VIB0f	V層	石匙	3.7	5.3	0.7	11.4	石灰質粘板岩	北上山地古生界		B1c
198	VIC1b	IX層	石匙	2.2	4.3	0.8	4.7	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		B1c
199	VIA2i	IV層	石匙	2.5	3.5	0.6	3.5	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	タール状付着物少量	B1c
200	VIB	IV層	石匙	5.4	2.6	0.7	5.2	粘板岩	北上山地古生界		B1c
201	VIB7f	VI層	石匙	2.8	4.4	0.8	6.3	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		B1c
202	VIA3h	V層	石匙	2.7	4.7	0.9	6.2	チャート質粘板岩	北上山地古生界	打点つまみと逆	B1c
203	VIB9a	V層	石匙	4.9	5.0	0.5	7.1	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		B1c
204	VIA0d	V層	石匙	3.5	5.3	0.6	11.3	粘板岩	北上山地古生界		B1cか
205	VIA3c	V層	石匙	4.7	2.3	0.8	7.9	細粒凝灰岩	北上山地古生界		B2a
206	VIA0e	V層	石匙	2.3	5.5	0.8	6.3	細粒凝灰岩	北上山地古生界	粗製	B2a
207	VIA3b住居跡	埋土	石匙	3.2	4.4	0.6	4.9	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	ひとつの先端部欠損	B2a
208	VIC	IX層	石匙	2.2	3.4	0.4	2.9	粘板岩	北上山地古生界		B2b
209	VIC	IV層	石匙	2.6	4.3	0.6	4.9	粘板岩	北上山地古生界		B2b
210	VIB	IV層	石匙	2.6	4.5	0.7	6.5	粘板岩	北上山地古生界		B2b
211	VIA3i	V層	石匙	3.0	4.7	0.8	6.7	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	刃部右端欠 打点つまみとやがずれる	B2b
212	VIC	IX層	石匙	3.0	5.2	0.8	9.3	粘板岩	北上山地古生界		B2b
213	VIA4a	V層	石匙	2.8	(6.6)	0.9	(9.1)	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	刃部左先端欠タール状付着物	B2b
214	VIB	IV層	石匙	3.1	5.0	0.6	6.2	粘板岩	北上山地古生界		B2b
215	VIA	IV層	石匙	3.4	5.4	0.6	7.9	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		B2b
216	VIA3i	V層	石匙	4.1	6.4	1.0	14.8	粘板岩	北上山地古生界		B2b
217	VIB0a	IV層	石匙	3.0	4.3	0.5	6.3	粘板岩	北上山地古生界	打点つまみと反対側 タール状付着物	B2b
218	VIB0a	V層	石匙	2.7	3.9	0.9	5.1	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		B2b
219	VIA3h	V層	石匙	3.0	5.0	0.8	8.0	粘板岩	北上山地古生界	打点がつまみと反対	B2b
220	VIB1c	V層	石匙	2.9	4.0	0.9	7.6	粘板岩	北上山地中生界		B2b
221	VIA3b	埋土	石匙	3.9	5.0	0.8	9.1	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	刃部の一部欠刃こぼれか	B2b
222	VIB1a	不明	石匙	3.4	(3.7)	0.8	(5.7)	粘板岩	北上山地古生界	一部欠	B2b
223	VIA2j	V層	石匙	3.9	4.0	0.9	9.6	チャート質粘板岩	北上山地古生界		B2b
224	VIB0c	V層	石匙	3.1	4.4	0.7	2.8	粘板岩	北上山地古生界		B2b
225	谷部	V層	石匙	3.8	4.7	0.8	10.7	粘板岩	北上山地古生界	打点がつまみに直交	B2b
226	VIA4c	V層	石匙か	2.9	4.1	0.9	6.8	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	粗製 打点がつまみと直交	B2b
227	VIB1c	V層	石匙	4.9	2.9	0.6	9.3	粘板岩	北上山地古生界	粗製 打点がつまみと少しずれる	B2b
228	VIB7c	V層	石匙	4.9	5.6	1.0	21.2	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	粗製	B2bか
229	VIA2j	V層	石匙	4.6	5.3	0.8	18.2	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	打点つまみと反対側	B3
230	VIA9j	V層	石匙	(2.8)	3.2	0.6	(3.4)	チャート質粘板岩	北上山地古生界	下半欠	不明
231	VIB2i	IV層	石匙か	(3.2)	4.2	0.7	(9.6)	チャート質粘板岩	北上山地古生界	石匙の可能性有 つまみ欠	不明
232	VIB7c	V層	石匙か掘器	4.6	3.5	0.6	10.0	粘板岩	北上山地古生界		
233	VIB1a	V層	掘器	3.7	3.3	0.8	9.6	粘板岩	北上山地古生界	上半欠損	
234	VIB8e	V層	掘器	3.5	2.4	0.7	5.6	細粒凝灰岩	北上山地古生界	一辺に調整	
235	VIA8i	IIIa層上	掘器	4.2	3.5	1.1	17.3	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	一部欠 最大厚部に磨痕あり	
236	VIB0b	IIIb層	掘器	5.1	3.1	1.1	14.4	粘板岩	北上山地古生界		
237	VIB9f	IV層	石匙	(3.6)	0.9	0.8	(1.8)	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	つまみなし	

238	VIB9c	V層	石筵	5.4	2.1	0.9	7.5	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	つまみ部分大	
239	VIIA1e土器集中部	V層	石筵	3.5	1.5	0.9	4.3	粘板岩	北上山地古生界	先端部欠 尖基	
240	VIIA2g	V層	石筵	1.2	2.7	0.3	1.1	粘板岩	北上山地古生界	先端部少し磨滅	
241	VIIc	IX層	石筵	4.4	3.1	0.7	9.6	粘板岩	北上山地古生界		
242	VIIA2j	V層	石筵	5.3	3.7	1.7	44.5	石灰質粘板岩	北上山地古生界		
243	VIIAhg	V層	石筵	6.5	4.3	2.2	69.0	粘板岩	北上山地古生界		
244	VIIA3d	VII層	石筵	9.8	4.3	1.7	64.0	細粒凝灰岩	北上山地古生界		
245	VIB9b	IIIa層	石筵	4.6	3.9	1.5	26.2	細粒凝灰岩	北上山地古生界		
246	VIB9d	V層	ビズ・エスキュー	3.1	3.8	0.7	8.6	粘板岩	北上山地古生界		
247	VIAId	V層	ビズ・エスキュー	2.3	2.5	0.7	4.0	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		
248	VIA0j	攪乱	ビズ・エスキュー	3.0	2.6	1.3	11.5	凝灰質粘板岩	北上山地中生界	自然面が残る	
249	VIC	IX層	不定形石器	3.1	1.3	3.5	1.6	粘板岩	北上山地古生界		1
250	VIB9b	V層	不定形	2.8	1.7	0.6	2.8	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	ハク片の1側縁に調整	1
251	VIIA2b	V層	剝片	2.8	1.5	0.4	1.9	粘板岩	北上山地古生界		1
252	VIAId	IIIb層	不定形	3.8	1.8	0.6	4.3	粘板岩	北上山地古生界	1側縁を加工	1
253	VIB7、8、d、e、f	V層	剝片	3.7	2.2	0.8	4.9	粘板岩	北上山地古生界	両側縁に使用痕	5
254	VIA8、fghij	土石流上	不定形	3.3	2.0	0.5	2.9	粘板岩	北上山地古生界	3側縁を調整	1
255	VIA0j-0iベルト	V層	不定形	3.9	2.3	0.7	4.3	粘板岩	北上山地古生界	木の葉状のハク片の側縁調整	1
256	VIB8、d、e、f	V層	不定形	3.8	1.5	0.5	2.6	チャート質粘板岩	北上山地古生界	石匙の可能性もある自然面あり	1
257	VIA0j	V層	不定形	4.7	3.4	0.5	15.6	赤褐色凝灰岩	北上山地古生界	1側縁を加工	1
258	VIA0i	V層	不定形	4.6	4.3	0.6	22.1	チャート質粘板岩	北上山地古生界	1側縁を加工	1
259	VIC	IX層	不定形石器	4.5	5.2	0.6	16.1	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		1
260	VIIA3b住居跡	埋土	剝片	(4.8)	2.9	0.5	(6.9)	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	両側縁に使用痕タール状付着物少量	5
261	VIIA2de、1de	IV層	不定形?	(4.2)	2.0	0.9	(6.0)	凝灰質粘板岩	北上山地中生界	上半欠損	2
262	VIA9j、VIB9a	IV層	不定形	2.8	2.5	0.7	3.7	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	1側縁を加工	2
263	VIB0b	V層	不定形	2.5	4.2	0.4	3.7	粘板岩	北上山地古生界	1側縁を加工	2
264	VIA7i	IIIb層	不定形	2.9	2.6	0.3	2.8	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	2側縁を加工	3
265	VIB8e	V層	不定形	2.0	2.1	0.8	2.3	粘板岩	北上山地古生界	ほぼ全周を加工	4
266	VIB9b	V層	不定形	2.5	3.5	0.6	4.3	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	1側縁を加工	4
267	VIAId	再堆積層	不定形	2.8	3.9	0.8	8.1	粘板岩	北上山地古生界	菱形のハク片の2側縁を加工	4
268	VIB7d	V層	不定形?	2.1	3.2	0.6	4.0	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	2側縁に刃部欠損	4
269	VIA9i	V層	不定形	3.1	1.7	0.6	2.2	粘板岩	北上山地古生界	2側縁を加工	4
270	VIA3i	V層	不定形	2.4	4.2	0.6	4.3	赤褐色凝灰岩	北上山地古生界		4
271	VIB0a	V層	不定形	4.7	3.5	0.5	9.9	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		4
272	VIB0b	V層	不定形	4.5	3.1	0.9	1134.0	チャート質粘板岩	北上山地古生界	ほぼ全側縁を加工	4
273	VIIA2b	Va層上	不定形	4.1	1.4	0.2	12.4	チャート質粘板岩	北上山地古生界	ほぼ全側縁を加工	4
274	Ic9h、207ブロック	TII層	剝片	5.3	4.7	0.8	19.8	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	1側縁に多くの打痕を有する	5
275	VIIc	IX層	尖頭器か	4.9	2.8	1.4	11.5	粘板岩	北上山地古生界		5
276	VIB	IV層	剝片	2.9	2.3	0.7	6.1	黒曜石	不詳		5
277	VIIA3i	V層	石核	5.6	4.9	4.2	112.0	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	自然面の残る残核	
278	VIIA	IV層	石斧	3.8	3.2	1.5	27.0	淡緑色凝灰岩	北上山地古生界		
279	VIIc	IX層	石斧	4.1	3.7	1.2	33.8	淡緑色凝灰岩	北上山地古生界		
280	VIA0j	IX層	磨製石斧	(5.4)	2.5	1.1	(26.8)	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	先欠	
281	VIIA	IV層	石斧	5.0	4.0	2.3	69.3	淡緑色凝灰岩	北上山地古生界		
282	VIA0j	攪乱	磨製石斧	(3.4)	3.6	1.8	(35.5)	細粒凝灰岩	北上山地古生界	基部のみ タール状付着物	
283	VIIA	IV層	石斧	6.2	4.3	1.1	50.0	玄武岩質凝灰岩	北上山地古生界		
284	VIB0b	V層	磨製石斧	8.8	4.7	2.8	155.0	緑色凝灰岩	北上山地古生界	刃部欠損	
285	VIIA1g	IV層	磨製石斧	(7.3)	4.9	3.0	(146.0)	緑色凝灰岩	北上山地古生界	基部刃部欠	
286	VIIA4a	IV	磨製石斧	(5.8)	3.9	2.0	(79.0)	輝石安山岩	周辺中生界	基部欠損 一部剝離刃部に褐色付着物	
287	VIAg、line	IIIb層	磨製石斧	(6.9)	4.2	1.7	(209.0)	緑色凝灰岩	北上山地古生界	基部 刃部欠損	
288	VIIA3j	V層	磨製石斧	8.0	4.8	3.3	190.0	緑色凝灰岩	北上山地古生界	基部欠損	
289	VIB2b	攪乱	磨製石斧	7.4	4.8	2.9	(136.0)	緑色凝灰岩	北上山地古生界	基部欠	
290	VIB1c	V層	磨製石斧	(7.2)	4.7	3	(165.0)	閃緑岩	周辺中生界	基部欠損	
291	VIA9j	IIIb層	磨製石斧	(7.9)	4.8	2.4	(159.0)	閃緑岩	周辺中生界	基部欠損	
292	VIIA9j	V層	磨製石斧	(11.0)	5.6	3.2	(329.0)	凝灰岩	北上山地古生界	基部欠損	
293	VIIA1d住居跡	埋土	石斧	4.3	4.6	2.3	77.0	凝灰岩	北上山地古生界		
294	VIIA2j	V層	磨製石斧	(12.6)	4.7	2.8	(280.0)	細粒流紋岩質凝灰岩	北上山地古生界	基部刃部側縁部タール状付着物 基部刃部剝離	
295	VIC	IX層	石斧	6.8	4.1	1.8	59.7	淡緑色凝灰岩	北上山地古生界		
296	VIB8a	VII層	磨石、敲石	(13.6)	7.7	4.4	(727.0)	半花崗岩	周辺中生界		
297	VIIA1j、VIAi、line	V層	磨石	15.4	7.7	7.6	1199.0	花崗閃緑岩	周辺中生界	両端に敲打痕有	

298	VIB0a	V層	磨石	11.9	5.3	7.5	712.0	凝灰岩	北上山地古生界	半円形 側面磨滅	
299	不明	I a層	磨石	13.9	8.1	8.1	875.0	花崗閃緑岩	周辺中生界		
300	VIB9a	V層	磨石	12	7.4	3.7	435.0	花崗閃緑岩	周辺中生界	側面を中心使用	
301	VIA3a	V層	磨石	10.2	5.3	3.9	290.0	泥灰質粘板岩	周辺中生界		
302	VIB1a	不明	磨石	12	5.7	6.7	672.0	半花崗岩	周辺中生界		
303	VIB9、8、0、e、f	V層	磨石	16.7	9.6	6.5	1645.0	半花崗岩	周辺中生界		
304	VIA	IV層	磨石	16.5	9.4	5.4	1133.5	花崗閃緑岩	山田・重茂中生界		
305	VIA2a	V層	磨石	11.7	7.8	4.5	535.0	半花崗岩	周辺中生界	側面の稜部を中心使用	
306	VIA3b住居跡	埋土	磨石、敲石	(13.0)	8.1	6.2	(871.0)	花崗閃緑岩	周辺中生界	欠損	
307	VIB0a	V層	磨石	(12.0)	8.0	6.7	(730.0)	花崗閃緑岩	周辺中生界	欠損	
308	VIB0a	V層	磨石	(9.3)	7.0	5.1	(452.0)	半花崗岩	周辺中生界	欠損	
309	VIC	IX層	磨石	11.2	6.2	5.9	745.0	凝灰質砂岩	三陸海岸古生界		
312	VIB0a	V層	磨石	(8.0)	8.4	6.0	(530.0)	流紋岩	中生界	ほとんどの面に条痕有	
313	VIB7、8、d、e、f	V層	凹石、磨石	8.9	10.5	3.9	556.0	花崗閃緑岩	周辺中生界	両面に凹み	
314	VIA2a	V層	凹石	(9.8)	9.6	4.5	(699.0)	閃緑岩	周辺中生界	両面に凹み	
315	IIC2a	TII層	磨石	7.3	6.7	3.9	278.0	花崗閃緑岩	周辺中生界		
316	VIA	IX層	磨石	6.9	6.1	5.7	340.0	花崗閃緑岩	山田・重茂中生界		
317	VIA	IV層	磨石	9.3	7.7	7.0	690.0	花崗閃緑岩	山田・重茂中生界		
318	VIA2e	V層	磨石	11.4	11.0	5.1	923.0	ディサイト	北上山地中生界	側縁も使用	
319	VIA5a	不明	磨石	12.0	10.2	5.7	1020.0	花崗閃緑岩	山田・重茂中生界		
320	VIB8a	IIIb層	磨石、敲石	9.1	5.6	3.6	285.0	花崗閃緑岩	周辺中生界		
321	VIA2j	V層	磨石	10.3	6.5	3.8	(360.0)	花崗閃緑岩	周辺中生界	欠損	
322	VIA2ij、3ij	V層	磨石	9.5	5.8	2.7	250.0	半花崗岩	周辺中生界		
323	VIB8e炭窯	埋土	磨石、敲石	(10.0)	5.3	4.0	(302.0)	花崗閃緑岩	周辺中生界	敲打痕有	
324	VIB0e	V層	磨石、敲石	11.1	5.6	4.3	420.0	花崗閃緑岩	周辺中生界		
325	VIB9a	攪乱	磨石	8.5	5.5	3.7	260.0	花崗閃緑岩	周辺中生界		
326	VIA8j	V層	磨石	8.3	4.8	3.1	192.0	花崗閃緑岩	周辺中生界		
327	VIA9h土器集中部	IV層	磨石	10.1	6.2	4.3	367.0	花崗閃緑岩	周辺中生界		
328	VIA0j	攪乱	磨石	10.3	7.1	3.9	433.0	花崗閃緑岩	周辺中生界		
329	VIAIg、f	IIIb層	磨石	9.8	8.7	3.7	402.0	花崗閃緑岩	周辺中生界		
330	VIB7d	V層	磨石、敲石	12.7	7.8	5.2	725.0	花崗閃緑岩	周辺中生界		
331	谷部T3西	VI層	磨石	11.9	8.5	5.1	915.0	花崗閃緑岩	周辺中生界		
332	VIB0e	V層	磨石	12.7	8.7	5.0	750.0	花崗閃緑岩	周辺中生界		
333	VIB	IV層	磨石	12.3	9.2	6.1	920.0	花崗閃緑岩	山田・重茂中生界		
334	VIB8a	VII層	磨石	(12.8)	9.7	5.6	(1010.0)	花崗閃緑岩	周辺中生界		
335	VIA	IV層	磨石	10.3	4.0	12.7	840.0	花崗閃緑岩	山田・重茂中生界		
336	VIB0e	V層	磨石	11.7	9.6	4.9	770.0	半花崗岩	周辺・中生界		
337	VIC	IX層	磨石	12.7	6.0	11.4	1132.0	花崗閃緑岩	山田・重茂中生界		
338	VIA	IV層	磨石	13.4	11.4	5.2	1125.0	花崗閃緑岩	山田・重茂中生界		
339	VIA	IV層	磨石	7.6	7.9	4.1	465.0	粘板岩	北上山地古生界		
340	VIB9、8、0、e、f	V層	磨石か	14.9	15.6	6.0	2159.0	花崗閃緑岩	周辺中生界		
341	VIB7d	不明	礫器	(10.0)	9.9	6.2	(880.0)	細粒流紋岩質凝灰岩	北上山地古生界		
342	不明	V層	礫器	(7.7)	11.4	7.0	(910.0)	粘板岩角礫岩	北上山地古生界		
343	VIA8j	IIIa層	礫器	(10.8)	10.4	5.3	(964.0)	細粒流紋岩質凝灰岩	北上山地古生界		
344	VIB8c	IV層	礫器	8.0	7.6	5.2	445.0	玄武岩質細粒凝灰岩	北上山地古生界		
345	VIB8a-bベルト	IV～V層	礫器	(9.6)	8.8	6.8	(720.0)	細粒流紋岩質凝灰岩	北上山地古生界		
346	VIA9h土器集中部	IV層	石皿	20.7	17.7	3.6	2547.0	花崗閃緑岩	北上山地中生界	主に縦方向の磨滅痕	
347	VIA5a	埋土	石棒	31.8	6.7	8.3	3420.0	凝灰質硬砂岩	北上山地古生界		
348	VIA	IX層	砥石	8.1	4.0	2.9	145.0	凝灰岩	硬砂岩	北上山地古生界	
349	VIA2b	VII層	石製品	4.0	1.8	0.9	23.8	細粒凝灰岩	北上山地古生界	半分欠損 磨製 刃部有	

第21表 銭

図録№	出土位置	層位	種類	材質・鋳造年代等
350	VIA	IV層	寛永通宝	銅銭 1期=古寛永(1636～1659年)
351	IIC3d	T I	寛永通宝	銅銭 1期=古寛永(1636～1659年)

第22表 鉄製品

図録№	出土位置	層位	種類	備考
352	不明	不明	不明	

VI ま と め

1. 遺構

(1) 縄文時代

住居跡

本遺跡で検出された縄文時代の住居跡は21棟であるが、そのうち中期末と考えられる住居跡は8棟、中期後葉から末葉と考えられる住居跡は5棟、中期後葉と考えられる住居跡は3棟、中期中葉から末葉までに位置づけられる住居跡は3棟である。また、前期前葉と考えられる住居跡が1棟検出されている。前期の住居は1棟のみなので、ここでは山ノ内III遺跡で検出された縄文時代中期の住居について、本遺跡より北へ約500m離れた位置の山ノ内II遺跡との比較を加えながら述べる。

【平面形】 斜面に構築されている住居がほとんどであるため、形の不明なものも多いが、円形か楕円形を呈すると思われる。円形を基調としながらもやや角ばっていると思われる住居はVIC0a-2住居跡、VIC3f住居跡の2棟のみである。

【規模】 規模のわかる18棟のうち最小の住居はVIB0j住居跡で2.38m、最大は6m前後と推定されるVIIA8i住居跡である。平均は4mから5m前後である。そのうち中期末と思われる8棟の平均は4.5mである。この数字は山ノ内II遺跡の該期の住居跡15棟の平均5.4mよりも1m近く小さい。また、山ノ内IIの住居跡は直径6m以上の住居が6棟、5mに満たない住居跡が5棟と住居の規模にばらつきがあるのに対し、本遺跡では平均値にまとまっている。

【床】 すべての住居が貼り床を持たない。斜面に構築されている住居は斜面下方に床がやや傾斜する傾向がある。床面に段を持つ住居が1棟ある。

【柱穴】 1基~21基までばらつきがある。柱穴のない住居跡もあるが、これは調査者の力不足で検出できなかったためと考えられる。

【炉】 地床炉1、石囲炉11、石組複式炉7である。石囲炉と石組みの複式炉は次のように分類した。

1 石囲炉

- ①円形を基調とするもの・・・VII B 2 a - 2 住居跡（以下「住」と略）、VII A 1 e - 1 住、VII B 0 b 住か、VII B 8 j 住、VIC 0 a - 1 住
- ②方形を基調とするもの・・・VIC 7 d 住か、VIC 0 b 住、VIC 7 a 住、VII C 1 b 住か、VII C 0 c 住
- ③不明のもの・・・VIB 0 j 住

2 石組み複式炉

- ①石組炉+石組炉・・・VII B 8 b 住、VII C 3 f 住
- ②石組炉+石組炉+石組炉・・・VII A 0 d 住、VII B 3 a 住か
- ③石組炉+石組炉+前庭部・・・VII A 8 i 住、VII B 2 a - 1 住か
- ④石組炉+石組炉+石組炉+前庭部・・・VIC 0 a - 2 住

時期が推定できるものから述べると、中期後葉の住居は地床炉1基、石囲炉1-①1基、1-

②1基である。1-①は埋設した板状の花崗岩が花卉のように上部がやや開く。中央に位置している。1-②は隣り合う2つの隅の石が長辺を炉の外側に向かって設置しているのが特徴的で、壁に寄る。炉の位置は前者が中央、後者が中央から斜面下位による。

中期末と思われる住居の炉は石囲炉5基、複式炉3基である。石囲炉は1-①が2基、1-②が2基、不明1基である。石は全周集せず、抜けているものがほとんどである。炉の位置はほぼ中央が3基、壁によるものが2基である。複式炉は3者3様で、2-①が埋設土器を伴う2-③が1基、2-④が1基、2分される石囲炉1基である。炉の位置はすべて壁に寄っている。壁に寄る炉

そのほかの中期後葉から末葉に位置づけられる住居の炉、あるいは中期中葉から末葉に位置づけられる住居の炉は石囲炉3基、複式炉4基である。石囲炉は1-①が3基、1-②が1基で、位置は中央が1基、壁によるものが2基である。1-①のうち1基は炉内部ではなく石組みのとなりに焼土が形成されるものである。複式炉は2-①で日の字形を呈するものが1基、2-②が2基、住居の半分が削平されているため、形態は不明であるがおそらく2-③に分類されるものが1基である。この2-③に分類される炉は斜面上方の壁に向かって開いている点斜面上方に開く炉が他と異なる。これらは壁が検出できなかったために住居の規模が不明な1基を除き、壁に寄って位置している。

本遺跡で検出された石組みの複式炉で前庭部をもつかある方向に向かって開く形をとるものは、斜面上方に向かって開く1例を除き、下方に向かって開くのが一般的である。

本遺跡の住居の炉については時期が確定できないものが多いため、時代による変遷を追うことは難しい。

【その他の施設】住居内土坑をもつ住居は2基である。周溝が検出された住居は3棟である。入口位置の入口と考えられるような施設は検出されていないが、雨水の流入の問題などを考えると本遺跡推定では立地条件などから斜面下方にあるのではないかと推測されるが、証明することはできなかった。

土坑

本遺跡で検出された縄文時代の土坑は11基である。時期が特定できないものが多いが、おそらく周辺の状況から縄文時代中期中葉から末葉の間におさまると考えられる。平面形は円形、あるいは長円形を基調としている。断面形態は皿状の土坑が3基、逆台形状が4基、筒形が1基、フラスコ状が3基である。規模は最小の長径が0.98m、最大が2.86mで、平均は1.83mである。

これらのうちフラスコ状土坑は、調査区東側の斜面に1基、北側の尾根上に2基検出されている。周辺には住居跡が多く検出されているが住居の数に対し、土坑数が極めて少ない。例えば、北へ400m離れた山ノ内II遺跡の場合、中期中葉～末葉の住居20棟に対し29基検出されている。また、北西へ約5.1km離れた大畑II遺跡の場合縄文時代中期後葉～末葉の住居15棟に対し、土坑34基検出されている。フラスコ状土坑

本遺跡の場合住居が多く検出される北側尾根上と東斜面の間が調査区外となっており、この部分の様相は不明なので、断定は避けたいが、周辺の遺跡と比較すると山ノ内III遺跡のフラスコ状土坑の検出状況は特徴的な様相を呈している。

フラスコ状土坑は貯蔵穴としての用途が想定されている(今村1988)。もし、そうだとすればこのような検出状況から察すると、山ノ内Ⅲ遺跡に住んでいた人々は土坑を掘って食料を貯蔵する必要のない居住形態—想定されるのは一時的あるいは季節的な居住など—をとっていたという可能性も考えられる。

焼土

37基のうち36基が調査区中央の谷筋斜面からまとめて検出されており、北側の尾根上にはなく、東側の斜面からは1基のみ検出された。時期は不明なものが多いが、中期の遺構のほかには前期の遺構も存在するようである。壁や柱穴を周辺に伴うものはなく、単独で使用されているらしい。焼土が検出されている区域は谷筋斜面の中でも縄文時代の住居跡や廃棄土が検出されている場所と重なっている。おそらくこの周辺は地形的に他に比して平坦であるとか、土石流に見まわれることの少ない場所であるとかの何らかの利便性があるのではないかと考えられる。調査の進行上、この周辺に傾斜方向に沿ったベルトを残すことは困難であったので、残念ながら確かめることができなかった。

その他の遺構

縄文時代の遺構にはそのほかに竪穴状遺構2、炉跡2、集石1、廃棄土2がある。

竪穴状遺構のうちⅦB 1 c 竪穴状遺構は埋土から前期の土器が数多く、詰まったように出土していることから最終的には捨て場のような使われ方をしたのではないかと考えられるが、復元できる土器がなく、ほとんど破片のみである。

ⅦA 2 d 廃棄土はⅦA 1 e-1、-2 住居跡に隣接しており、関連が予想される。ⅦB 9 b 廃棄土は焼土の項で述べた住居、焼土の密集地の斜面下方に位置していることからそれらとの関連が考えられる。

炉跡は住居に伴うものであろう。集石は1基のみであり、使用された石が酸化していることから火熱を受けている可能性があることだけを述べておく。

(2)古代(平安時代)

本遺跡で検出された平安時代の遺構は住居跡3棟、土坑2基、製鉄炉群(炉7基、土坑3基)、炭窯17基、炭置き場1か所、羽口捨て場1か所、焼土遺構4基である。製鉄に関連する遺構が多い。また、住居も工房を兼ねていたり、製鉄に関連する遺物が出土している。

分布は飛び地と調査区北の尾根上、中央の谷筋斜面である。

住居跡

餡状滓 3棟の住居跡のうち北側尾根上の1棟は炉を持つ住居である。出土した鉄滓は餡が冷えて固
椀形滓 まったような状態の部分と椀型滓のような部分を持っており、精錬鍛冶のための炉ではないかと考えられる。なお、この炉及び周辺からは鍛錬鍛冶を行う時に産出される鍛造剝片は出土していない。

炭窯、土坑 本住居跡の煙道は炭窯や土坑と切り合っていることからこれら遺構の構築時期には時間差がある。
と煙道路の

切り合い 新旧関係は以下のとおりである。

ⅦA 1 d 住居跡 旧→→新

| 不明

VIII A 1 e - 2 炭窯 旧→→→新 VIII A 1 e - 1 炭窯 旧→→→新 VIII A 1 e - 1 土坑

\ 不明 | 不明

VIII A 1 e - 2 土坑 旧→→→新

不明な点もあるが、例えばVIII A 1 e - 1 炭窯で焼かれた炭がどの施設のために使用されたのかという点を考えると、最も近い施設としてVIII A 1 d 住居跡の鍛冶炉がある。尾根上にはそれ以外に炭を使うような施設は検出されていない。西側の調査区外に存在する可能性もあるが、住居としての機能が終了後にも鍛冶炉が使用された可能性もある。

谷筋の住居は特に施設は持っていないが、住居内から羽口や鉄滓が出土することから工人や関連する人々が居住していた可能性も考えられる。また、飛び地の住居からは床面から塊状に砂鉄が出土することや、鉄滓の出土、住居に隣接する炭置き場の存在からおそらく製鉄炉を操業していた工人の住居と考えてよいのではないかと考えられる。また、塊状の砂鉄はその形態から袋状のものに入れて床面におかれたもので、袋が腐食し、砂鉄だけが検出されたものであろう。以上の 3 棟の住居は土器の年代観から 9 世紀末から 10 世紀中葉に位置づけられよう。

製鉄炉

本遺跡で検出された 7 基の炉を形態で次のように分類した。

- 1 類 炉が小型で、前庭部との境が明確でないもの（炉底の状況はあまり焼成は強くなかったのではないかと印象を受ける。）・・・ a 炉、b 炉
 - 2 類 炉が検出例のうちでは大きく、前庭部との境が明確で、いわばだるま型を呈するもの。（炉自体がしっかり作られている印象を受ける）・・・ d 炉、e 炉、g 炉
 - 3 類 どちらも言えない中間的な要素を持つ炉・・・ c 炉、f 炉（本類の 2 基の炉のうち炉の大きさのみから分類すれば c 炉は 1 類に、f 炉は 2 類に近いが他の要素が異なる。）
- なお、2 類の 3 基の炉からはほぼ同量の砂鉄が出土している。（第 51 図）

これらの炉から出土した鉄滓は製錬滓（付編 2、3 参照）と飴状を呈する鉄滓、椀型滓があるが、調査時の肉眼による観察でも、とりあげた土の洗浄を行っても鍛造剥片は出土していない。これらの結果から本炉群では製錬を行っており、さらに大鍛冶的な精錬も行っていた可能性がある。今回の調査では炉の形態と出土した砂鉄量から少なくとも 2 種類の炉が存在することがわかった。本炉群から出土する鉄滓がどの炉に帰属するものかを知ることは不可能であったため、これらの違いがどのような作業によるものかは不明であるが、今後検出例が増えるにつれて、解明していくものと考えられる。ちなみに山ノ内 II 遺跡では製鉄炉と考えられる炉のうち、どちらかという①類に属する炉、②類の炉がそれぞれ 1 基ずつ検出されている。これらの鉄滓との比較は今後の課題である。

炭窯

検出された 17 基の炭窯はおおよそ 2 つの形態に分類される。

- 1 類 比較的小型の小判状あるいは隅丸長方形を呈すると思われるグループ・・・ IIC 2 d - 小型の炭窯
1 炭窯、IIC 2 g 炭窯、VIII A 1 e - 1 炭窯、VIII A 1 e - 2 炭窯
- 2 類 大型で、草履型のような長円形、あるいは隅丸長方形を呈するグループ・・・上記を除く 13 基

以上のように2類の炭窯が圧倒的に多い。

そのほかの遺構は羽口捨て場、土坑、炭置き場、焼土があるが、それぞれ少ない検出数なので割愛する。

2. 遺物

本遺跡で出土した土器のうち最も多かったのは縄文土器であるが、その中では早期末から前期前葉の土器が最も多く、次いで中期の土器、後期の土器、晩期の土器である。

土器の分類については、V遺構外の出土遺物を参照されたい。

早期末から前期前葉に位置づけられる繊維を多く含む土器群はほとんどが遺構外であり、遺構に伴うものはごく少ない。この時期の土器はI層からVII層まで出土しているが、もっとも出土量が多いのはV層である。しかしV層には中期の土器も多く含まれており、VI層は斜面堆積の層のためかほとんど含まれず、VII層も早期末から前期前葉の土器が混在していて、層位的に包含されていない。これらの土器は二次的に堆積しているのであろう。

中期の土器は遺構内から出土したものもあるが、床直遺物は少量であり、遺構の時期が確定できるものは少ない。

後期、晩期の土器も出土量や出土状況から二次堆積によるものと考えられる。

古代の遺物については土師器、須恵器、鉄滓、羽口、鉄製品、砂鉄がある。

飛び地の遺構外から出土した453、454は奈良時代末から平安時代に属すると考えられる。

平安時代の土師器はほとんどが遺構内出土である。9C末～10世紀中葉くらいまでの所産と考えられる。II B 4 h 住居跡から検出された土器(462)は筒形の口縁部がやや開いたような器形と外面の輪積み痕が明瞭に残ることが、青森県沿岸部などで出土する製塩土器(北林1983)に極めて類似している。出土状況が、住居のカマド袖部と床面からということもあり、今回は可能性を述べるにとどめるが、今後沿岸部の発掘調査件数が増加するにつれ、出土例が増加していくことであろう。

鉄滓はII C 2 e 製鉄炉群から製錬滓と大鍛冶に伴うと考えられる鍛冶滓が出土しており、それらの作業が行われていたと考えられる。VIII A 1 d 住居跡から出土した鉄滓も大鍛冶に伴うものと推定される。なお、鍛造剥片は検出されていないことから、鍛錬鍛冶は行われていなかったとも考えられる。

II C 2 e 製鉄炉群出土の羽口は想定される装着角度が20～68°と様々である。行われた作業によって異なると考えられる。傾向を見いだすことはできなかった。吸気部まで残存している羽口は3点であったが、長さは20cm前後が2点、33cmが1点である。作業工程上で、先端が溶け、短くなっていくのだろうが、20cm前後までは使用されたものと考えられる。

VIII A 1 d 住居出土の羽口は破片のみであるが、装着角度は2点とも30°前後である。点数が少ないのであくまでも推定の域を出ないが、本住居で行われていた作業で、羽口はおおむねこの角度で装着されていたのであろう。

鉄製品は器種不明な小片4点のみの出土であり、製鉄関連の遺跡としては、出土数が少ない印象を受ける。鍛錬鍛冶を行っていないらしいことと関連するのかもしれない。(高橋佐知子)

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1980「長七谷地貝塚発掘調査報告書」(第57集)
- 秋田県教育委員会 1986「カウヤ遺跡第2次発掘調査報告書」(第136集)
- 岩手県教育委員会 1979大渡野遺跡「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書II」(第32集)
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1989「夏本遺跡発掘調査報告書」(第134集)
- 1995「大畑I・大畑II遺跡発掘調査報告書」(第218集)
- 1996「山ノ内II遺跡発掘調査報告書」(第249集)
- 岩手県立博物館 1990『北の鉄文化』
- 草間俊一 1974「崎山弁天遺跡発掘調査報告書」大槌町教育委員会
- 今村啓爾 1988「土坑性格論」『論争日本の考古学』第2巻
- 1989「群集貯蔵穴と打製石斧」『考古学と民族誌』
- 北林八州晴 1973「陸奥湾沿岸における土器製塩」『北奥古代文化』第5号
- 1983「第五章 古代」『青森県の考古学』青森大学出版局
- 佐々木清文 1990「岩手の製鉄遺跡(1)」『岩手県立博物館研究報告』第8号
- 1994「岩手の製鉄遺跡(2)」『紀要』XV (岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター)
- 八木光則 1989「古代斯波郡と爾薩体の土器様相」『北日本における律令期の土器様相』第18回古代城柵
官衙遺跡検討会資料
- 酒井宗孝 1987「岩手県北部における縄文中期後葉から後期前葉の住居」『紀要』VII (岩手県文化振興
事業団埋蔵文化財センター)
- 中村良幸 1982「複式炉について」『考古風土記』第7号
- 小原眞一 1993「柳上遺跡の炉」『紀要』XIII (岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター)

山田町山ノ内Ⅲ遺跡出土 砂鉄、木炭、鉄滓および炉壁の 分析・調査

川鉄テクノロジー株式会社

分析・評価センター

岡原 正明

伊藤 俊治

1. はじめに

岩手県埋蔵文化財センター殿で発掘調査されました、下閉伊郡山田町山の内Ⅲ遺跡出土の砂鉄、木炭、鉄滓および炉壁について、学術的な記録のために自然科学的な観点での調査のご依頼がありました。

その結果についてご報告いたします。

2. 調査項目および試験・検査方法

(1) 調査資料一覧および調査項目は次のとおりです。

資料 No.	種別	出土遺構	着磁度 1,300 G 径30mm	重量 g	成分 分析	工業 分析	X 線 回 析	組 織 写 真	E P M A	耐 火 度	発 熱 量	外 観 写 真
1	砂鉄 1	II 2 e - 219	—	31.4	○							○
2	砂鉄 2	II C 2 e 製鉄炉群 d 炉南西	—	31.5	○							○
3	砂鉄 3	II B 4 h 住居跡	—	43.4	○							○
4	砂鉄 4	II C 2 e 製鉄炉群 d 炉	—	82.5	○							○
5	木炭 1	II C 1 c 炭窯	—	62.3		○					○	○
6	木炭 2	I C O e 炭窯	—	36.6		○					○	○
7	木炭 3	II C 2 b 炭窯	—	35.9		○					○	○
8	木炭 4	IV B 8 f 炭窯	—	41.6		○					○	○
9	木炭 5	II C 2 g 炭窯	—	24.7		○					○	○
10	鉄滓 1	II C 2 e 製鉄炉群 b 炉	強	399.0	○		○	○				○

11	鉄滓 2	II C 2 e 製鉄炉群 b 炉	強	92.1	○		○	○					○
12	鉄滓 3	II C 2 e 製鉄炉群 f 炉前庭部	強	117.4	○		○	○					○
13	鉄滓 4	II C 2 e 製鉄炉群 d 炉	中	36.3	○		○	○					○
14	鉄滓 5	II C 2 e 製鉄炉群 d 炉	弱	87.4	○		○	○					○
15	鉄滓 6	II C 2 e 製鉄炉群 d 炉	中	361.5	○		○	○					○
16	鉄滓 7	II C 2 e 製鉄炉群 e 炉	中	118.8	○		○	○	○				○
17	鉄滓 8	II C 2 e 製鉄炉群 d 炉	弱	367.6	○		○	○					○
18	鉄滓 9	II C 2 e 製鉄炉群 g 炉	強	56.5	○		○	○					○
19	鉄滓10	II C 2 e 製鉄炉群 g 炉	中	402.0	○		○	○					○
20	鉄滓11	II C 2 e 製鉄炉群 g 炉	中一部強	632.1	○		○	○					○
21	鉄滓12	II C 2 e 製鉄炉群 b 炉	やや弱	240.9	○		○	○					○
22	鉄滓13	II C 2 e 製鉄炉群 2号土坑	弱一部強	158.0	○		○	○					○
23	羽口 1	II C 2 e 製鉄炉群 g 炉	付着滓強	174.8	○			○		○			○
24	炉壁 1	II C 2 e 製鉄炉群 d 炉	—	236.1	○			○		○			○
25	炉壁 2	II C 2 e 製鉄炉群 e 炉	—	391.8	○			○		○			○

(2) 重量計測と着磁度調査

計重は電子天秤を使用して行い、小数点1位で四捨五入してあります。また着磁度調査については、直径30mm・1300 Gauss (0.13 Tesla) のリング状フェライト磁石を使用し、官能検査により「強・やや強・中・やや弱・弱」の5ランクで個別調査結果の文中に表示しました。

(3) 外観の観察と写真撮影

上記各種試験用試料を採取する前に、試料の両面をmm単位まであるスケールを同時写し込みで撮影しました。また、試料採取時の特異部分についても撮影を行っております。

(4) 化学成分分析

化学成分分析はJISの分析法に準じて行いました。分析方法および分析結果は38、40頁の一覧表に示してありますので、ご参照下さい。

この調査は、化学成分から鉄を作るために使用した原料の推定と、生産工程のどの部分で発生した鉄滓かの判断用データを得るために行いました。また、羽口に使用されている粘土も特別に選択使用していたのかの判断用に分析しました。

分析項目は、砂鉄12項目、鉄滓18項目、炉壁12項目となっております。

(5) 工業分析

工業分析および化学分析（硫黄と燐）は、JISの分析法に準じて合計6項目行いました。工業分析法の概略は次のとおりであります。

- ①付着水 0.25mm以下に粉碎した試料を、40°Cで食塩飽和溶液と平衡な湿度下に6時間（水分）：保ったのち、これを基準として105～110°Cで1時間乾燥し、前後の重量差から求める。
- ②灰分：乾燥後の試料を空气中750°Cで加熱し灰化させる。試料に対する残留灰分の重量から求める。
- ③揮発分：空気を遮断して試料を950°Cで7分間加熱したときの減量を計り、百分率を計算しこの値から付着水分を除いて求める。
- ④固定炭素：固定炭素=100－[水分(%)＋灰分(%)＋揮発分(%)]で求める。

(6) 発熱量測定

試料1gを採取し非断熱式ポンプ熱量計に装入した後、酸素雰囲気中で燃焼させJISの方法に準じて発熱量を求めました。

(7) 顕微鏡組織写真

試料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨（鏡面仕上）します。その後、顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、熔融状況や介在物（鉱物）の存在状態等から加工状況や材質を判断します。鉄滓の場合にも同様に処理・観察をおこない、製鉄・鍛冶過程での状況を明らかにします。原則として100倍と400倍で撮影します。必要に応じ低倍率の実体顕微鏡による観察も行いました。

(8) X線回折測定

試料を粉碎して板状に成形し、X線を照射すると、試料に含まれている化合物の結晶の種類に応じて、それぞれの固有の反射（回折）されたX線が検出されることを利用して、試料中の未知の化合物を観察・固定するものです。

多くの種類の結晶についての標準データが整備されており、ほとんどの化合物が固定されます。装置の使用や測定条件、測定結果は60頁以降に添付してあります。

(9) EPMA（X線マイクロアナライザー）による観察

高速電子線を2μmφ程度に絞って、分析対象試料面に照射し、その微小部に存在する元素から発生する特性X線を測定するもので、金属鉄中の介在物や鉄滓の成分構成を視覚から確認するために、二次元の面分析を行いました。

(10) 耐火度試験

製鉄に使用された炉壁や羽口について、どの程度の耐火性のある粘土（耐火物）を使用していたのかを判断するために試験しました。この調査もJIS規格『耐火れんがの耐火度の試験方法』に準じて実施しました。

3. 調査および考察結果

試料の性格別ごとに調査および考察結果を述べます。

I. 砂鉄（資料1～4）

外観写真No.1～3に示した砂粒状のものと、No.4のように製鉄炉群d炉から出土した、焼結し粒子が相互に溶着した塊資料とがある。前三者は水洗されたもので、重量はそれぞれ31.4、31.5および43.5gであった。焼結塊資料の重量は82.5gであった。

化学成分分析の結果、この4資料の各成分値の間には殆ど差がなく平均で全鉄(T.Fe)は68.6%と高い含有率を示した。シリカ(SiO₂)、アルミナ(Al₂O₃)、カルシア(CaO)、マグネシア(MgO)等の鉱物性不純物も少なく合計しても高々1.65%であった。非常に純度の高い砂鉄といえる。砂鉄に含まれる特有の元素であるチタニウム(TiO₂:チタニアで表示)は0.54%と非常に少ない。バナジウム(V)の含有量は0.21%であった。

東北地方含チタン砂鉄調査委員会発行の『東北のチタン砂鉄資源』(1953)、98頁の“三陸海岸砂鉄分析表、によると、山田湾や船越湾の砂鉄成分も産地によって鉄やチタニウムの含有量が異なるが、今回の資料の分析値と較べてみると、下閉伊郡山田町北浜と船越湾南弁天島の値にもっとも似ていることが明らかになった。

第3表 三陸海岸砂鉄分析表

試料番号	採取場所	Fe%	TiO ₂ %	備考	
221	田老湾	田老浜	9.53	0.21	サンプラーによる
229	宮古湾	藤原浜	34.36	1.93	同上(黒砂部分のみ)
272	山田湾	熊ヶ崎西	8.92	0.22	サンプラーによる
268		山田町北浜	66.02	0.21	黒砂部分
244		大島	54.39	0.33	同上
246		同上	54.93	0.21	同上
248		小島	43.83	1.09	同上
249		同上	54.12	0.43	同上
242	船越湾	北弁天島	12.17	1.63	サンプラーによる
260		南弁天島	66.29	0.32	黒砂部分

資料4のT.Feの値は他の3つの資料のT.Feに較べやや低く、鉱物性不純物がやや高い。焼結のためか固化しているものの成分的にはそれほど差がなく、資料4の熱による化学的変化は特段認められない。

II. 木炭（資料No.5～9）

資料No.5～9の外観写真を17～21頁に示した。丁寧に軽く洗浄後水を切って秤量した。それぞれの重量は62.3、36.6、35.9、41.6および24.7gであった。

木炭の形状はいずれも端部から開始するので丸くなる筈である。したがって、この資料は炭焼き破碎された木炭といえる。

木炭の工業分析結果を240頁に示す。

大きく分けて木炭には樫の堅木を減量とした堅炭と櫨や松を原料とした軟炭とがある。双方の木炭とも灰分は1～3%、炭素量(≒固定炭素として)は80%前後である。しかし山の内Ⅲ遺跡から出土した木炭の灰分は10～17%で非常に高い。また固定炭素量は幅があるが44～56%と低い値を示している。炭焼きの過程で燃焼が進んで灰分が高くなったとも考えられるが、その時には木炭の温度が上昇し木炭中の揮発分は40%以下よりずっと低い値を示す筈であり、このような値が得られた真の原因については不明である。

資料に付着した土は水洗し取り除いたが、木炭の割れ目等に入った土等が充分除去出来なかったために灰分の値が高くなったのかも知れない。もし、そうだとすると揮発分が高く固定炭素が低いことは、炭焼きの温度が低いか焼成時間が短かったのかのいずれかといえる。

竜ヶ馬場遺跡から出土した木炭も、灰分が14.7%と高く、固定炭素は52.4%、揮発分は32.9%であった。山の内Ⅲ遺跡の資料No.6～8の灰分は10～12%とやや低いが、資料No.5および9は竜ヶ馬場遺跡のそれよりは高かった。揮発分は相対的にやや高く、固定炭素は資料No.7を除いてやや低い。

一般に木炭の発熱量は6,700～7,500cal/gといわれている。山の内Ⅲ遺跡出土の木炭の発熱量は4,850～5,490cal/gであり、灰分が高く固定炭素が低いいため発熱量が低くなるものと考えられる。なお、竜ヶ馬場遺跡の木炭の発熱量は4,850cal/gであり、これに較べるとやや高い値が得られている。

木炭中の、鉄の特性を低下させる硫黄や燐の元素は非常に少なく、良好な製鉄用還元剤および発熱材といえる。

Ⅲ. 鉄滓

(1) 資料No.10 鉄滓1

長さ130L×幅80Wmmの海綿状の溶解固化した凹凸の著しい塊である。木炭片の噛み込みや植物根の進入が認められる。メタルチュッカーでは金属鉄の存在は検出されなかった。着磁度は強い。重量は339.0gである。

化学成分分析結果では、T、Feが63.0%と、またウスタイト(FeO)も52.7%と非常に高い含有量を示した。造滓成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$)は反対に、10.0%と少ない。TiO₂は0.38%VHA0.076%であった。山田町地方の砂鉄に含まれるTiO₂の含有量が非常に低いことを考えると、炉内に残留していた炉内滓と考えられる。

鉄滓断面の顕微鏡観察では、一面に灰色白藓状のウスタイトのみが認められ、またX線回析ではウスタイト、マグネタイト($\text{Fe}_3\text{O}_4 = \text{FeO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3$)、ファイヤライト($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)のピークが認められる。

以上の結果を総合すると、この資料は砂鉄を原料とする、炉内残留していた製錬滓と思われる。

(2) 資料No.11 鉄滓 2

120L×50Wmmのやや湾曲し凹凸の激しい中央部が窪んだ偏平な塊である。錆化が進行しておりメタルチェッカーでは金属鉄の反応は認められない。着磁度は強い。重量は92.1gである。

化学成分分析によると、T.Feが55.0%と多いがFeOは21.6%と少ない。Fe₂O₃は54.0%と多く、鉄分の多くが酸化して第二鉄に変化しており、結合水 (C.W.) が5.37%含まれることを考えるとその大部分はオキシ水酸化鉄(FeOOH)の形で存在すると思われる。造滓成分は14.0%とやや少ない。TiO₂は1.48%、Vは0.26%でやや多かった。

鉄滓断面の顕微鏡による観察で、所々に点在する灰白色の偏平なウスタイト、灰色のまだら模様のおキシ水酸化鉄および淡い褐色の鉱物質の存在が認められる。また、鉄滓の中には丸い空孔が所々に存在する。

X線回折によると、ウスタイト、マグネタイトやファイヤライトのピークも検出されている。また、オキシ水酸化鉄(ゲーサイト： α -FeOOH、レピッドクロサイト： γ -FeOOH)の存在も確かめられた。

これらの結果を総合すると、この資料は砂鉄を原料とする製錬滓と思われる。

(3) 資料No.12 鉄滓 3

資料No.10に似た海綿状の溶融焼結した5個からなる資料である。着磁度が強く、全重量は117.4gである。なお、メタルチェッカーによる金属鉄の反応は認められない。

化学成分分析では、T.Feが58.5%と多いがFeOは28.9%とやや少ない。一方Fe₂O₃は51.3%と多く、鉄分の多くが酸化して第二鉄に変化しており、結合水 (C.W.) が3.60%含まれることを考えるとその大部分はオキシ水酸化鉄の形で存在すると思われる。造滓成分は11.6%とやや少ない。TiO₂は1.08%、Vは0.20%でやや多かった。

鉄滓断面の顕微鏡による観察で、灰白色繭状のウスタイトが一面に存在しているのが判る。この他にオキシ水酸化鉄や鉱物質と思われるものが認められる。また滓の中には空孔が数多く存在しており、滓表面の凹凸が形成された理由が推定できる。

X線回折によると、ウスタイト、ファイヤライトのほかゲーサイトのピークが検出されている。

これらの結果を統合すると、この資料は砂鉄を原料とする製錬滓と思われる。

(4) 資料No.13 鉄滓 4

大きさが65L×35Wmmの黒色で発泡痕のある、一部に酸化鉄が観察される塊である。また、底部に植物の繊維痕が存在する。着磁度は中程度で、重量は36.3gである。

化学成分分析の結果、T.Feは26.7%と非常に低くFeOも7.90%と少ない。しかし、相対的にFe₂O₃は28.9%と多く、鉄分の多くが酸化して第二鉄に変化しており、結合水(C.W.)が2.50%も含まれることを考えるとその大部分はオキシ水酸化鉄の形で存在するものと思われる。造滓成分は57.7%と非常に多い。この他炉壁などの粘土に含まれるナトリウム分(Na₂O)やカリウム分(K₂O)がそれぞれ1.66%、1.51%も存在することから、この滓は製錬初期の滓

と示唆される。TiO₂は0.64%、Vは0.078%であった。

鉄滓断面の低倍率の実体顕微鏡による組織観察から、上述のことが裏付けされる。実体顕微鏡の視野に白く見えるものは金属鉄である。そこで金属顕微鏡を用い球状の金属鉄の観察を行った。炭素の推定含有量が0.4%程度の比較的ゆっくり冷却された金属鉄と見受けられた。

X線回折ではサンプリング位置の関係上か、金属鉄は検出されなかった。マグネタイトとオキシ水酸化鉄、鉍物質のピークが観察された。

これらの結果を総合すると、この資料は砂鉄を原料とした、金属鉄を含む製錬滓と考えられる。

(5) 資料No.14 鉄滓 5

長さが70mmで一端の径が30mm他端の径が20mmの小枝状の資料である。黒色で流出痕のある緻密な鉄滓で、下部には床材の砂粒が付着している。着磁度は弱く、その重量は36.3gである。

化学成分分析の結果によると、T.Feは46.9%でFeOも55.2%と多い。造滓成分は34.6%と中程度である。しかし、Na₂やK₂Oがそれぞれ1.04%、0.82%も存在することから、この滓は製錬初期の比較的流動性のよい滓と示唆される。TiO₂は1.51%、Vは0.29%であった。

鉄滓断面の形態の実体顕微鏡による組織観察からも、粘性の低いガラス質で構成され、非常に綺麗な空孔が形成されている滓であると観察される。

X線回折の結果によると、ファイヤライトの強いピークその他ウスタイト、マグネタイトや鉍物質の存在が認められる。

これらの結果を総合すると、この鉄滓は砂鉄を原料とした流出製錬滓と言える。

(6) 資料No.15 鉄滓 6

大きさが130L×60Wmmの溶融、凝固し亀の甲羅のような割れ目のある資料である。緻密で重量感があり、付着土もなく清浄な塊である。着磁度は強く、重量は361.5gである。

化学成分分析の結果によると、T.Feは47.3%でFeOも55.6%と多い。造滓成分は34.0%と中程度である。TiO₂は1.74%、Vは0.33%であった。

資料断面の顕微鏡観察では、灰白色の樹枝状のマグネタイト、淡褐色の角張った板状のウルボスピネルや短冊状のファイヤライトの他、少量のウスタイトの結晶が認められる。比較的製錬の前段の鉄滓と思われ、かつ流動凝固した形状から流出滓といえる。

X線回折によればファイヤライトの強いピークに加え、ウスタイトやマグネタイトの存在が観察される。

これらの結果を総合すると、この鉄滓は砂鉄を原料とした流出製錬滓と言える。

(7) 資料No.16 鉄滓 7

大きさが90L×60Wmmの薄く凹凸の多い鉄滓で下部の突出部に金属鉄の反応がある。上面半分には酸化鉄の付着が著しく、植物繊維痕も多い。着磁度は中程度で、重量は118.8gである。

化学成分分析の結果によると、T.Feは37.1%でFeOも30.1%と少ない。またFe₂O₃は19.4%

と相対的に多く、鉄分の多くが酸化して第二鉄に変化しており、C.W.が1.89%も含まれることからその大部分はオキシ水酸化鉄の形で存在するものと思われる。造滓成分は44.2%と非常に多い。Na₂OやK₂Oがそれぞれ1.25%、1.09%存在することから、この滓は製錬初期の比較的流動性のよい滓と示唆される。TiO₂は1.70%、Vは0.26%であった。

低倍率の実体顕微鏡による観察から、鉄滓の中には小さな空孔が数多く点在しているが、マクロ的視点では一様な組織に見える。残念ながら金属鉄の存在は確認できなかった。高倍率の顕微鏡による観察で、ファイヤライトを主とし少量のマグネタイトやウルボスピネルの小さな結晶が認められる。

X線回折では、ファイヤライトや石英の強いピークの他にマグネタイト、オキシ水酸化鉄であるゲーサイトやレピッドクロサイトおよび鉱物質の存在が検出されている。

EPMAによる面分析で、マグネシウム(Mg)を少量含む鉄(Fe)、珪素(Si)と酸素(O)の化合物である短冊状のガイヤライト、Fe、Oとチタニウム(Ti)の化合物であるウルボスピネルの存在が観察される。ウスボスピネルにはバナジウム(V)が共存している。

これらの結果を総合すると、この鉄滓は砂鉄を原料とした製錬滓と言える。

(8) 資料No.17 鉄滓 8

大きさが135L×75Wmmの粗鬆で黒色の発泡した鉄滓で、ごま塩状の鉱物を噛み込んだ資料である。着磁度は弱く、重量は376.6gである。

鉄滓断面の顕微鏡観察では、一面に細かいファイヤライトの結晶が存在し、所々に少量のマグネタイトやウルボスピネルと推定される結晶が認められる。

化学成分分析の結果、T.Feは42.5%、FeOは48.8%であった。またFe₂O₃は6.3%と少ない。しかし造滓成分は40.6%と非常に多い。Na₂OやK₂Oがそれぞれ1.11%、1.03%存在することから、この滓は製錬初期の比較的流動性のよい滓と示唆される。なおTiO₂は1.56%、Vは0.30%であった。

X線回折では、強いファイヤライトのピークが、またウスタイト、マグネタイトのほか鉱物質の存在が検出されている。

これらの結果を総合すると、この鉄滓は砂鉄を原料とした製錬滓と言える。

(9) 資料No.18 鉄滓 9

大きさが50L×25Wmm前後の3個からなる資料である。錆化が進行し酸化鉄の発生が著しい。メタルチェッカーによる金属反応は認められなかった。着磁度は強く、合計の重量は56.5gである。

鉄滓断面の顕微鏡観察では、海綿状の灰白色の部分が数多く認められる。これは炉内で溶融までには至らないが、砂鉄が還元されて海綿状の金属鉄になったものが酸化・錆化してオキシ水酸化鉄になった部分と推定される。滓の部分にはファイヤライトおよび樹枝状のマグネタイトが観察される。

化学成分分析の結果、T.Feは35.8%と低く、FeOの19.0%に比べFe₂O₃が30.0%と非常に多い。鉄分の多くが酸化して第二鉄に変化しており、C.W.が2.83%も含まれることからその大

部分はオキシ水酸化鉄の形で存在するものと思われる。造滓成分は42.5%と非常に多い。また、 Na_2O や K_2O がそれぞれ1.33%、1.03%存在することから、この滓は比較的流動性のよい滓と示唆される。なお TiO_2 は1.89%、Vは0.12%であった。

X線回折の結果では、多量のファイヤライトの強いピークが認められたほか、オキシ水酸化鉄であるゲーサイトやレピッドクロサイトおよび弱いマグネタイトの存在ピークも検出されている。

これらの結果を総合すると、この鉄滓は砂鉄を原料とし、還元途中の海綿鉄がオキシ水酸化鉄に変化（錆化）した製錬滓と言える。

(10) 資料No.19 鉄滓10

大きさが135L×100Wmmのし餅状の流出滓と考えられる黒い資料である。表面は平滑であるが裏面はボツボツとあばた状を呈している。着磁度は中程度で、合計の重量は402.0gである。

鉄滓断面の顕微鏡観察では、短冊状のファイヤライト、樹枝状のマグネタイトと角状のウルボスピネルが認められる。

化学成分分析の結果、T.Feは47.3%、FeOは55.3%であった。造滓成分は34.9%とやや少ない。また、 Na_2O や K_2O がそれぞれ1.12%、0.83%存在することから、この滓は比較的流動性のよい滓と示唆される。なお TiO_2 は1.14%、Vは0.21%であった。

X線回折の結果では、ウスタイト、マグネタイトのほかにファイヤライトの強いピークが認められる。鉱物質も検出される。

これらの結果を総合すると、この鉄滓は砂鉄を原料とした流出製錬滓と言える。

(11) 資料No.20 鉄滓11

大きさが105L×90Wmmのごま塩状の炉材を噛み込んだ重量感のある鉄滓である。着磁度は中程度であるが一部に強い部分がある。重量は632.1gである。

鉄滓断面の顕微鏡観察では、灰白色繭型のウスタイトの大きな結晶とその間を埋めるようにファイヤライトの結晶が存在している。

化学成分分析の結果、T.Feは56.2%でFeOも63.4%と高い値を示した。造滓成分は20.2%と非常に少ない。 Na_2O や K_2O もそれぞれ0.54%、0.40%と低い。なお TiO_2 は2.79%と多く、Vは0.35%であった。精錬滓とも考えられるが、 TiO_2 の値が高いので炉内に残存していた製錬滓であろう。

X線回折の結果、マグネタイトとファイヤライトの強いピークに加え、マグネタイトのピークも検出された。

これらの結果を総合すると、この鉄滓は砂鉄を原料とした製錬滓と言える。

(12) 資料No.21 鉄滓12

大きさが120L×70Wmmの凹凸のある灰黒色で発泡痕のある資料である。底面には酸化鉄の付着や炉床材を巻き込んでいる。着磁度はやや弱く、重量は240.9gである。

鉄滓断面の低倍率の実体顕微鏡による観察では、大小の空孔が多く存在する比較的流動性の良い滓が凝固したものと認められる。白く光っているものは金属鉄である。高倍率の顕微鏡観察では、金属鉄はやや溶融が開始しはじめた状態で凝固している。この金属鉄は炭素がまだ殆ど含まれていない純鉄と思われる。

化学成分分析の結果では、金属鉄(M.Fe)は検出されなかった。T.Feは僅か10.8%であり、造滓成分は80.9%と非常に多い。Na₂OやK₂Oもそれぞれ3.47%、1.95%と極めて多い。炉壁に近い部分の滓ではないかと考えられる。なお、TiO₂は0.63%、Vは0.03%であった。

X線回折の結果、滓に含まれる化合物は大部分が鉱物質であり、僅かマグネタイトのピークが検出されたにすぎなかった。

これらの結果を総合すると、この鉄滓は砂鉄を原料とし、金属鉄粒を含むが製鉄初期の製錬滓と言える。

(13)資料No.22 鉄滓13

大きさが85L×65Wmmの資料No.21に似た、耐火物を噛み込んだ軽量発泡、粗鬆な資料である。上部には酸化鉄が附着している。着磁度は弱いが一歩強い箇所がある。しかし、メタルチェッカーによる金属鉄の反応はなかった。重量は158.0gである。

鉄滓断面の低倍率の実体顕微鏡による観察では、視野の上部は耐火物、中央は鉄滓であり、下部は金属鉄が酸化・錆化したオキシ水酸化鉄と認められる。

化学成分分析の結果、T.Feは僅か13.5%であり、その大部分はFe₂O₃で16.8%と相対的に多い。酸化して第二鉄に変化しており、C.W.が1.57%も含まれることからその大部分はオキシ水酸化鉄の形で存在するものと思われる。また、造滓成分は74.7%と非常に多い。Na₂OやK₂Oもそれぞれ2.57%、1.73%と極めて多い。炉壁に近いまたは炉底部の滓ではないかと考えられる。なお、TiO₂は0.73%、Vは0.054%であった。

X線回折の結果、滓に含まれる化合物は大部分が鉱物質であり、僅かにマグネタイト、オキシ水酸化鉄であるゲーサイトやレピッドクロサイトのピークが検出されたにすぎなかった。

これらの結果を総合すると、この鉄滓は砂鉄を原料とし、金属鉄の錆化物と一体となった製鉄炉壁または炉底部に近い製錬滓と考えられる。

鉄滓に関する考察結果の纏め

- (1)製鉄は砂鉄を鉄源としていた。
- (2)鉄滓は製錬滓が多く、製鉄の初期段階で流動性に富むものが多い。
- (3)鉄滓の工程上の分類は次のようになった。

製錬滓 (T.Fe が50%未満) ……………	{資料No.13~19、21、22}	9件
(内流出滓と判定されるもの	{資料No.14、15、19}	3件)
製錬滓 (T.Fe が50%以上) ……………	{資料No.10~12、20}	4件
	合 計	13件
内金属鉄の存在が確認されたもの	{資料No.13、21}	2件
内金属鉄が存在したが錆化したもの	{資料No.18、22}	2件

III. 耐火物

(1) 資料No.23 羽口 1

外径65mmの外面、内径30mmの内面が完全に被熱した羽口で、その先端半分は溶融鉄滓が固着している。ノ口の垂れの角度から30°で炉内に挿入されていたと考えられる。付着鉄滓部は強い着磁度を示した。重量は174.8gである。

低倍率の実体顕微鏡による滓が付着していない部分の観察で、黒い部分が被熱された箇所
で溶融はされていない。褐色部分は母材の耐火物（粘土）部分である。

耐火物の母材と付着物について化学成分分析を行った。その結果によると、母材のシリカ（SiO₂）が60.0%含有されるのに対しアルミナ（Al₂O₃）が25.4%と非常に多く、耐火性に優れた成分と考えられる。付着物部分でのT.Feは15.8%もの高い値を示すことから、鉄滓であるといえる。

羽口の母材粘土部分の耐火度試験結果によると、耐火温度は1,280°C強であった。当時の製鉄用耐火物としては耐火度が高く、材質を吟味して使用したと考えられる。

(2) 資料No.24 炉壁 1

溶融部が見受けられるスサ痕のある炉壁材である。溶融部は磁石に感応する。粘土内に白く細かい砂礫が観察される。重量は236.1gである。

低倍率の実体顕微鏡による炉壁断面の観察で、耐火物に含まれる鉱物質の粒子が認められる。

化学成分分析結果では、ガラス質のシリカが65.7%とやや多いが、アルミナも20.2%と高い値を示しかなりの耐火温度を有するものと推定される。

耐火度試験によると、耐火温度は1,280°C強であった。資料No.23～25といずれも高い耐火度を示し、使用する粘土の吟味を良くしているが、この製鉄遺跡の近傍に良質の粘土を産地する地域があるものと考えられる。

(3) 資料No.25 炉壁 2

溶融部が見受けられるスサ痕のある炉壁材である。溶融部の着磁度は弱い。重量は391.1gである。

低倍率の実体顕微鏡による炉壁断面の観察で、粒子が比較的細かく良く選別された粘土を使用している。

化学成分分析によると、シリカが61.8%とやや多いが、アルミナも20.2%と高い値を示しかなりの耐火温度を有するものと推定される。

耐火度試験によると、耐火温度は1,280°C弱であった。資料No.23～25といずれも高い耐火度を示し、使用する粘土の吟味を良くしているが、この製鉄遺跡の近傍に良質の粘土を算出する地域があるものと考えられる。

4. 参 考

- (1) 鉄滓の発生を鉄の生産工程から大きく分類すると、

- ①製錬滓 砂鉄や鉄鉱石を木炭等の炭素で還元して、酸素を取り除き、金属鉄を取り出す時に発生するもので、炉内滓や炉底滓および炉外流出滓などがある。
- ②製錬鍛冶滓 ①で出来た鉄塊から、さらに不純物を取り出して加工しやすい状態の鉄素材(大鍛冶滓)(鉄塊)にする時に生成するもので、成分的には①の製錬滓に近い。
- ③製錬鍛冶滓 ②で出来た鉄素材や製品の鉄を加熱・鍛打して、鉄製品を作っていく過程で(小鍛冶滓)生成する鉄滓で、その生成過程により、椀型鍛冶滓・鍛造剥片、粒状鉄滓(通称湯玉)等の形となる。
- ④鑄物滓 鉄を溶解し、鑄型に流し込んで鑄型を作る時に生成するもの。
等があります。

鉄は当初より再加工(いわゆるリサイクル)の可能な素材として利用されて来たと考えられるので、鍛冶湯には各所で生産された鉄が持ち込まれてきたと、考えるのが妥当であります。

素材である鉄や鉄塊がどこで生産されたものか、製鉄技術の進歩の状況等については、特定製鉄遺跡に付随する鍛冶工房や、製品としての鉄器類での追跡調査研究を進めて行く過程で更に解明されることを期待したいと思います。

(2) 鉄の分析結果について

分析結果表に記載されている全鉄分(Total Fe=T.Feと表示)の量と、その後に記載されている金属鉄(M.Fe)、酸化第一鉄(FeO)および酸化第二鉄(Fe₂O₃)との関係を簡単に述べると、後者の二つは酸化鉄(鉄と酸素の化合物)を示しており、それらの中の鉄(Fe)の量と金属鉄(M.Fe)を合計したものが前者の全鉄分(T.Fe)となります。

したがって、分析値を合計する場合には全鉄分を除外して集計する必要があります。

また、酸化鉄にはこの他にもいろいろな形態をしたものがあり、鉄滓中の鉄の成分量を見る場合には、全鉄分(T.Fe)が重要になります。

とくに水分との接触が多い鉄滓には、水分と酸化第二鉄とが結合したオキシ水酸化鉄(Fe₂O₃・H₂O=2FeOOH)が生成する。その時の鉄錆の形として、ゲーサイト[Goethite:α-FeOOH]、アコグナイト[Aka gonite:β-FeOOH]、レピッドクロサイト[Lepidocrocite:γ-FeOOH]の3種があり、生成環境や条件により変化します。

(3) 鉄滓の化合物について

鉄滓を構成する化合物は一般に次のようなものであり、顕微鏡写真およびX線回折の結果によると、原則としてこれらの存在がいずれかの組み合わせで認められます。なお、このほかにガラス質の化合物も存在します。

ウスタイト	: Wustaitite(FeO)	白色の繭玉又は葡萄の房状の結晶
ファイヤライト	: Fayalite(2FeO・SiO ₂)	褐色針状やレース状の長い結晶
マグネタイト	: Magnetite(Fe ₃ O ₄)	白色、多角盤状または樹枝状の結晶
ヘマタイト	: Hematite(α-Fe ₂ O ₃)	赤褐色～赤紫色
マグヘマイト	: Maghemite(γ-Fe ₂ O ₃)	赤紫色～黒紫色
ウルボスピネル	: Ulvospinel(2FeO・TiO ₂)	淡褐色、角尖状～六角形状結晶

- イルミナイト : Ilmenite ($\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) 短冊状
シュードブルッカイト : Pseudobrookite ($\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{TiO}_2$) 針状、板状
ゲーサイト : Gothite ($\alpha\text{-FeOOH}$) 黄赤色錆
アカゴナイト : Akagonite ($\beta\text{-FeOOH}$) 黄色錆
レピッドクロサイト : Lepidocrocite ($\gamma\text{-FeOOH}$) 橙赤色錆
ヘーシナイト : Hercynite ($\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$) ウスタイト中に多く析出。胡麻粒状

この他、石英=クォーツ (SiO_2)、ルーサイト (KAlSi_2O_7)、ドロマイト [$\text{CaMg}(\text{CO}_3)_2$]、ブラギオレーゼ [$(\text{Na,Ca})(\text{Al,Si})_4\text{O}_8$]等の粘土鉱物やガラス質のものがある。なお、色調は前記したものと若干異なることもあります。

試験報告書

1. 件名

X線回折による、遺跡出土品の定性分析

2. 試料記号

- ①No10~22 (山ノ内III遺跡…13本)
②Sawada-6~7 (沢田I遺跡……2本) 合計15本

3. 測定装置

理学電気株式会社製ガイガーフレックス (RAD-IIA型)

4. 測定条件

① 使用X線	Co-K α (波長=1.79021 Å)
② K β 線吸収フィルター	Fe
③ 管電圧・管電流	50 kV・35mA
④ スキャニング・スピード	2°/min
⑤ サンプリング・インターバル	0.020°
⑥ D. S. スリット	1°
⑦ R. S. スリット	0.3mm
⑧ S. S. スリット	1°
⑨ 検出器	シンチレーション・カウンター

5. 測定結果

同定された物質は、チャートに記入致しましたので、チャートを御参照下さい。

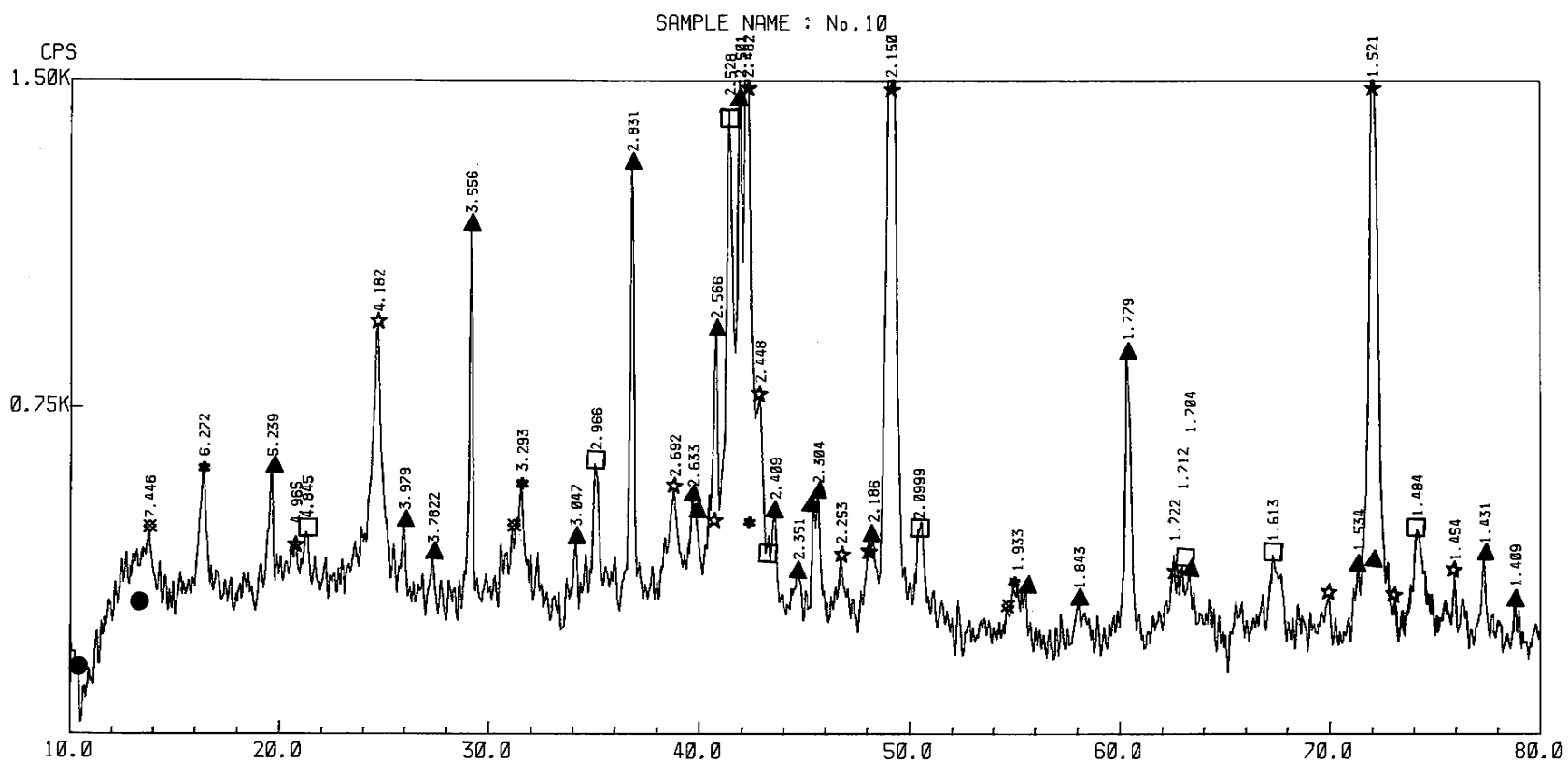
6. 測定者のコメント

- ①Sawada-6の試料につきましては、量が少ないので、ガラス製試料ホルダーを使用して測定致しました。
②●印のピークは、試料ホルダーからのものと思われます。

MEASUREMENT DATE : 95. 2.15
 FILE NAME : AH44100
 TARGET : Co
 VOL and CUR: 50KV 35mA
 SLITS : DS 1 RS .3 SS 1
 SCAN SPEED: 2 DEG/MIN.
 STEP/SAMPL.: .02 DEG
 PRESET TIME: 0 SEC
 SAMPLE NAME: No.10
 SAMPLE MEMO: G00369
 OPERATOR :

DATA DRAWING DATE : 02-16-1995
 SMOOTHING NO.: 11
 THRESH. INTEN.: 326 CPS
 2nd DERIV.: 88 CPS/(DEGxDEG)
 WIDTH: .09 DEG
 B.G. REDUCTION: EXECUTION
 OUTPUT FILE :

- ★ FeO (Wustite)
- ▲ Fe₂SiO₄ (Payalite)
- Fe₃O₄ (Magnetite)
- ☆ α-FeO(OH) (Goethite)
- * γ-FeO(OH) (Lepidocrocite)
- ※ β-FeO(OH) (Akaganeite)

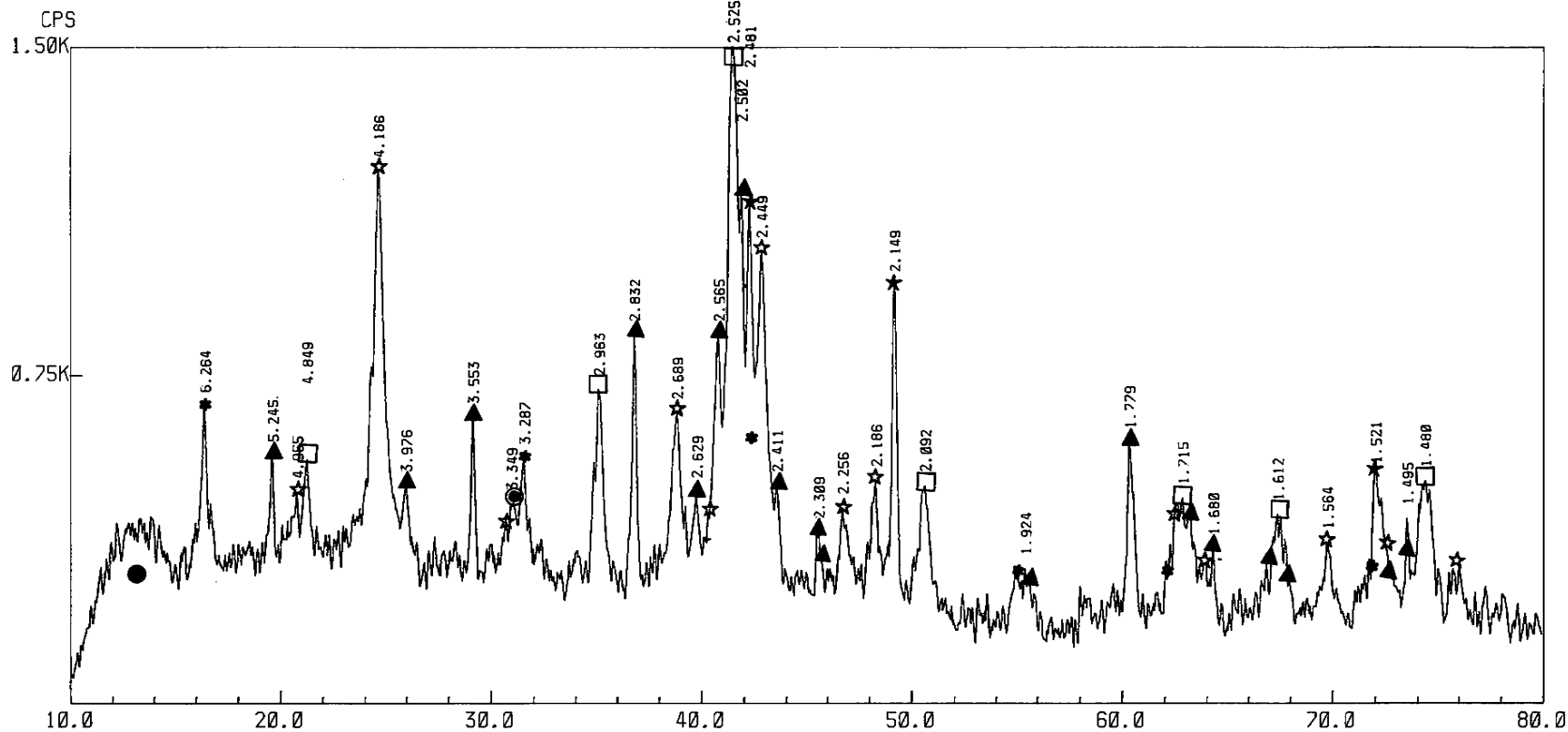


MEASUREMENT DATE : 95. 2.15
 FILE NAME : AH45100
 TARGET : Co
 VOL and CUR : 50KV 35mA
 SLITS : DS 1 RS .3 SS 1
 SCAN SPEED : 2 DEG/MIN.
 STEP/SAMPL. : .02 DEG
 PRESET TIME : 0 SEC
 SAMPLE NAME : No.11
 SAMPLE MEMO : G00369
 OPERATOR :

DATA DRAWING DATE : 02-16-1995
 SMOOTHING NO. : 11
 THRESH. INTEN. : 323 CPS
 2nd DERIV. : 88 CPS/(DEGxDEG)
 WIDTH : .09 DEG
 B.G. REDUCTION : EXECUTION
 OUTPUT FILE :

- Fe₃O₄ (Magnetite)
- ☆ α-FeO(OH) (Goethite)
- ▲ Fe₂SiO₄ (Fayalite)
- ★ FeO (Wustite)
- * γ-FeO(OH) (Lepidocrocite)
- SiO₂ (Quartz, low)

SAMPLE NAME : No.11

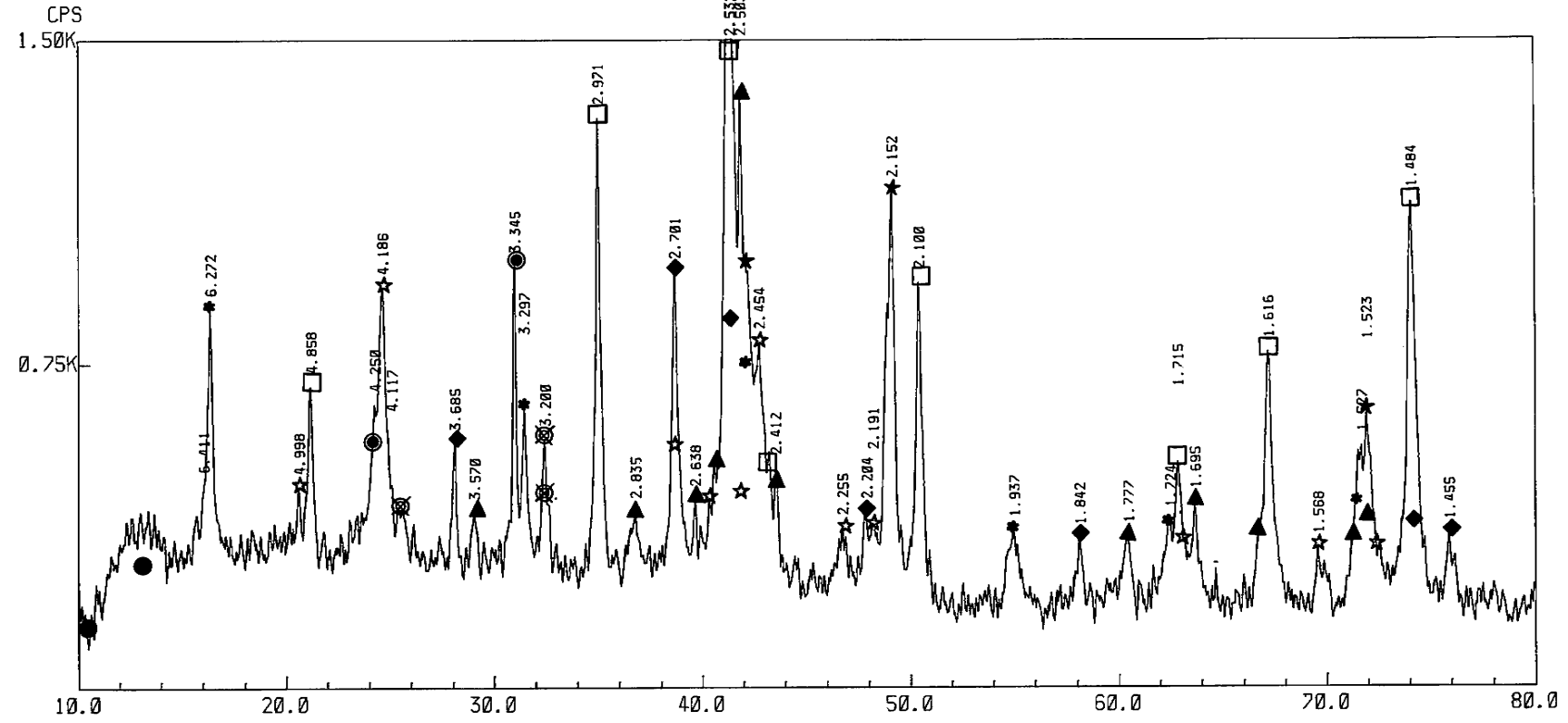


MEASUREMENT DATE : 95. 2.15
 FILE NAME : AH46100
 TARGET : Co
 VOL and CUR: 50KV 35mA
 SLITS : DS 1 RS .3 SS 1
 SCAN SPEED: 2 DEG/MIN.
 STEP/SAMPL.: .02 DEG
 PRESET TIME: 0 SEC
 SAMPLE NAME: No.12
 SAMPLE MEMO: G00369
 OPERATOR :

DATA DRAWING DATE : 02-16-1995
 SMOOTHING NO.: 11
 THRESH. INTEN.: 322 CPS
 2nd DERIV.: 88 CPS/(DEGxDEG)
 WIDTH: .09 DEG
 B.G.REDUCTION: EXECUTION
 OUTPUT FILE :

- Fe₂O₃ (Magnetite)
- ▲ Fe₂SiO₄ (Payalite)
- ★ FeO (Wustite)
- SiO₂ (Quartz, low)
- ◆ α-Fe₂O₃ (Hematite)
- ☆ α-FeO(OH) (Goethite)
- * γ-FeO(OH) (Lepidocrocite)
- ⊗ (Na, Ca)(Al, Si)₃O₆ (Plagioclase)

SAMPLE NAME : No.12

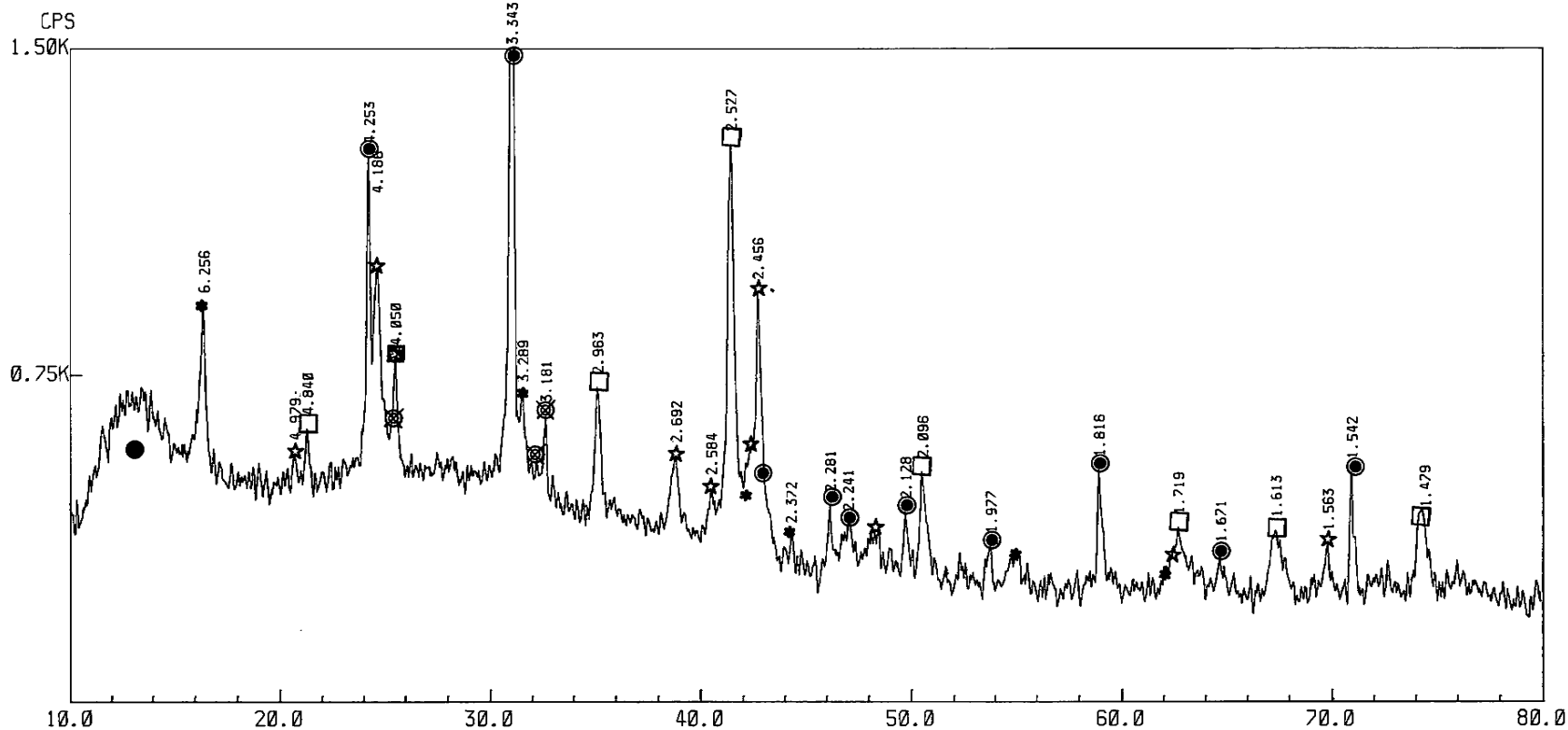


MEASUREMENT DATE : 95. 2.15
 FILE NAME : AH47100
 TARGET : Co
 VOL and CUR: 50KV 35mA
 SLITS : DS 1 RS .3 SS 1
 SCAN SPEED: 2 DEG/MIN.
 STEP/SAMPL.: .02 DEG
 PRESET TIME: 0 SEC
 SAMPLE NAME: No.13
 SAMPLE MEMO: G00369
 OPERATOR :

DATA DRAWING DATE : 02-16-1995
 SMOOTHING NO.: 11
 THRESH. INTEN.: 270 CPS
 2nd DERIV.: 88 CPS/(DEGxDEG)
 WIDTH: .09 DEG
 B.G. REDUCTION: EXECUTION
 OUTPUT FILE :

- SiO₂ (Quartz, low)
- Fe₃O₄ (Magnetite)
- ☆ α-FeO(OH) (Goethite)
- * γ-FeO(OH) (Lepidocrocite)
- SiO₂ (Cristobalite)
- ⊠ (Na, Ca)(Al, Si)₃O₈ (Plagioclase)?

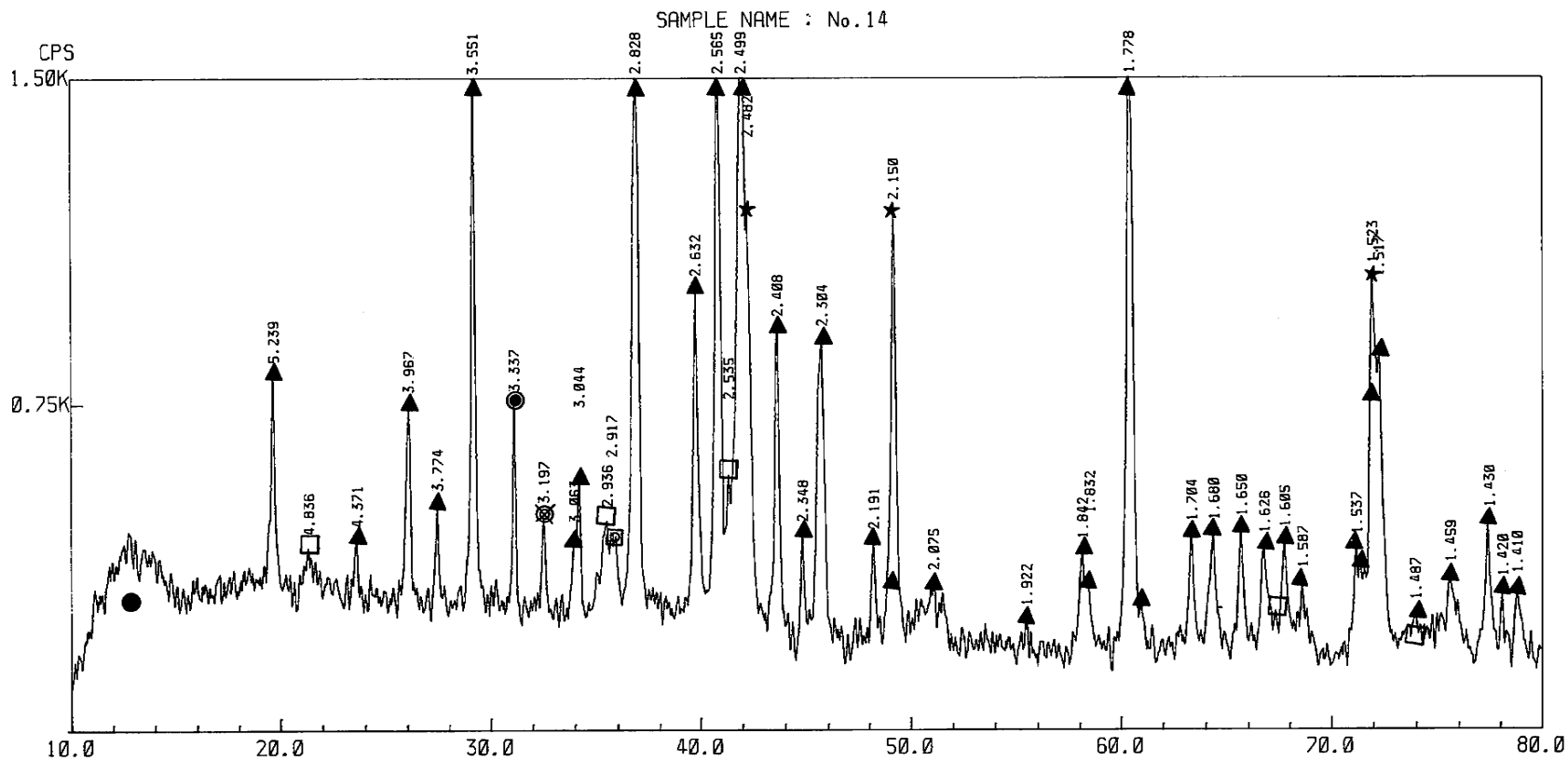
SAMPLE NAME : No.13



MEASUREMENT DATE : 95. 2.16
 FILE NAME : AH48100
 TARGET : Co
 VOL and CUR: 50KV 35mA
 SLITS : DS 1 RS .3 SS 1
 SCAN SPEED: 2 DEG/MIN.
 STEP/SAMPL.: .02 DEG
 PRESET TIME: 0 SEC
 SAMPLE NAME: No.14
 SAMPLE MEMO: G00369
 OPERATOR :

DATA DRAWING DATE : 02-16-1995
 SMOOTHING NO.: 11
 THRESH.INTEN.: 295 CPS
 2nd DERIV.: 88 CPS/(DEGxDEG)
 WIDTH: .09 DEG
 B.G.REDUCTION: EXECUTION
 OUTPUT FILE :

- ▲ Fe_2SiO_4 (Payalite)
- ★ FeO (Wustite)
- Fe_3O_4 (Magnetite)
- SiO_2 (Quartz, low)
- ⊗ $(Na, Ca)(Al, Si)_4O_{10}$ (Plagioclase)?
- ⊠ $CaMg(CO_3)_2$ (Dolomite)?

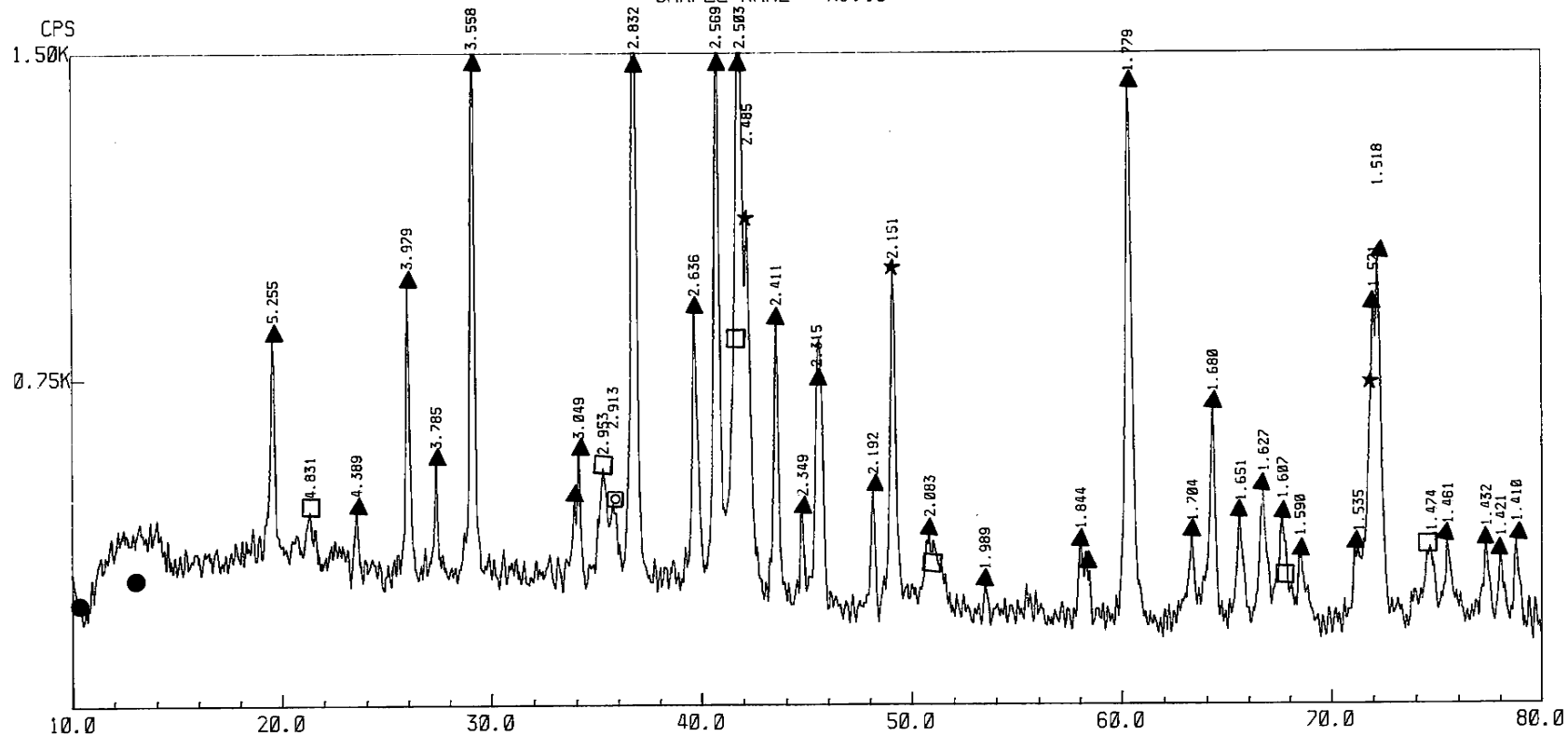


MEASUREMENT DATE : 95. 2.16
 FILE NAME : AH49100
 TARGET : Co
 VOL and CUR: 50KV 35mA
 SLITS : DS 1 RS .3 SS 1
 SCAN SPEED: 2 DEG/MIN.
 STEP/SAMPL.: .02 DEG
 PRESET TIME: 0 SEC
 SAMPLE NAME: No.15
 SAMPLE MEMO: G00369
 OPERATOR :

DATA DRAWING DATE : 02-16-1995
 SMOOTHING NO.: 11
 THRESH. INTEN.: 297 CPS
 2nd DERIV.: 88 CPS/(DEGxDEG)
 WIDTH: .09 DEG
 B.G. REDUCTION: EXECUTION
 OUTPUT FILE :

- ▲ Fe₂SiO₄ (Payalite)
- ★ FeO (Wustite)
- Fe₃O₄ (Magnetite)
- ⊗ CaMg(CO₃)₂ (Dolomite)?

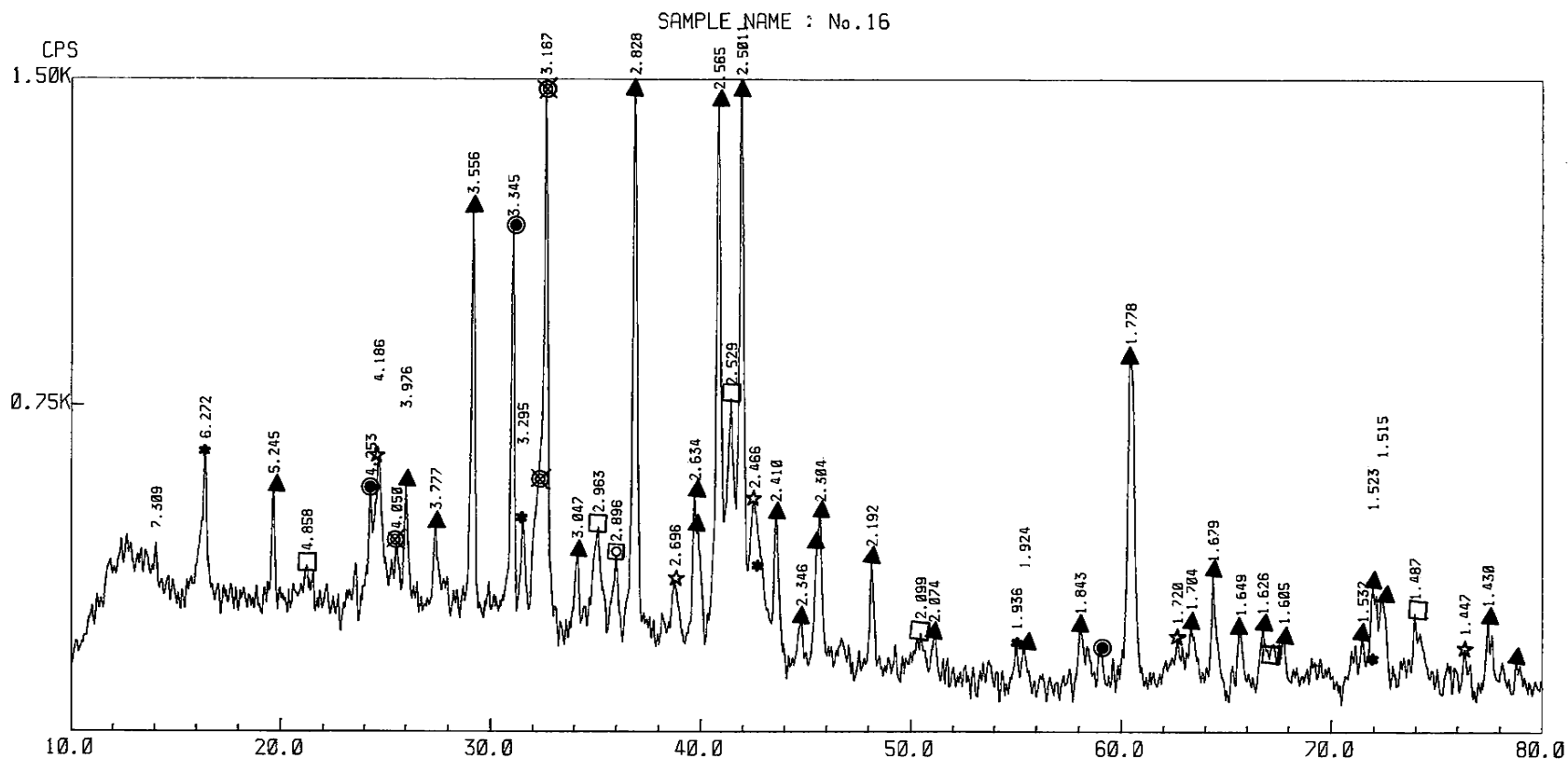
SAMPLE NAME : No.15



MEASUREMENT DATE : 95. 2.16
 FILE NAME : AHS0100
 TARGET : Co
 VOL and CUR: 50KV 35mA
 SLITS : 0S 1 RS .3 SS 1
 SCAN SPEED: 2 DEG/MIN.
 STEP/SAMPL.: .02 DEG
 PRESET TIME: 0 SEC
 SAMPLE NAME: No.16
 SAMPLE MEMO: G00369
 OPERATOR :

DATA DRAWING DATE : 02-16-1995
 SMOOTHING NO.: 11
 THRESH. INTEN.: 289 CPS
 2nd DERIV.: 88 CPS/(DEGxDEG)
 WIDTH: .09 DEG
 B. G. REDUCTION: EXECUTION
 OUTPUT FILE :

- ▲ Fe₂SiO₄ (Fayalite)
- SiO₂ (Quartz, low)
- Fe₃O₄ (Magnetite)
- * γ-FeO(OH) (Lepidocrocite)
- ☆ α-FeO(OH) (Goethite)
- ⊗ (Na, Ca)(Al, Si)₄O₈ (Plagioclase)
- ⊠ CaMg(CO₃)₂ (Dolomite)?

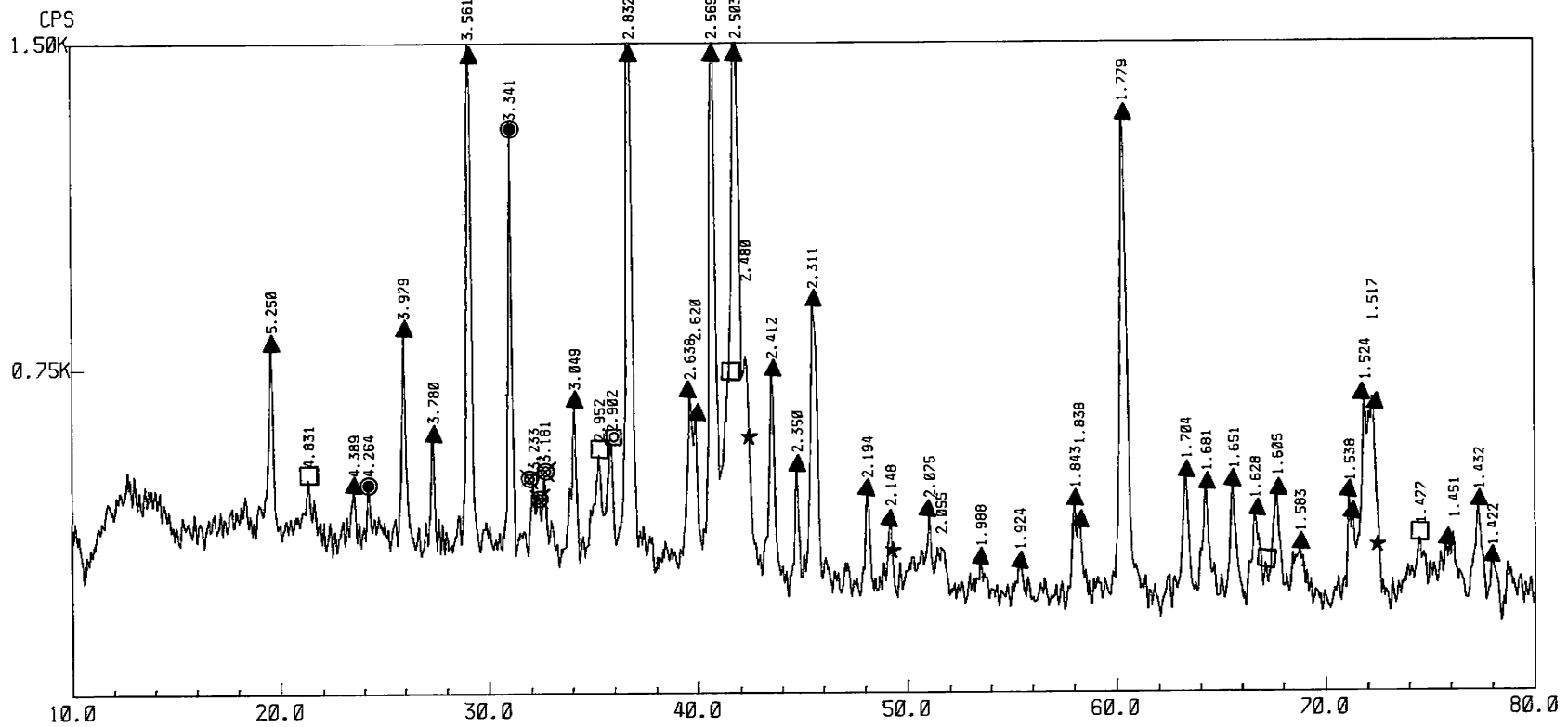


MEASUREMENT DATE : 95. 2.16
 FILE NAME : AHS1100
 TARGET : Co
 VOL and CUR: 50KV 35mA
 SLITS : DS 1 RS .3 SS 1
 SCAN SPEED: 2 DEG/MIN.
 STEP/SAMPL.: .02 DEG
 PRESET TIME: 0 SEC
 SAMPLE NAME: No.17
 SAMPLE MEMO: G00369
 OPERATOR :

DATA DRAWING DATE : 02-16-1995
 SMOOTHING NO.: 11
 THRESH. INTEN.: 290 CPS
 2nd DERIV.: 88 CPS/(DEGxDEG)
 WIDTH: .09 DEG
 B.G. REDUCTION: EXECUTION
 OUTPUT FILE :

- ▲ Fe₂SiO₄ (Fayalite)
- SiO₂ (Quartz, low)
- ★ FeO (Wustite)
- Fe₃O₄ (Magnetite)
- ⊗ (Na, Ca)(Al, Si)₃O₆ (Plagioclase)?
- ⊠ CaMg(CO₃)₂ (Dolomite)?

SAMPLE NAME : No.17

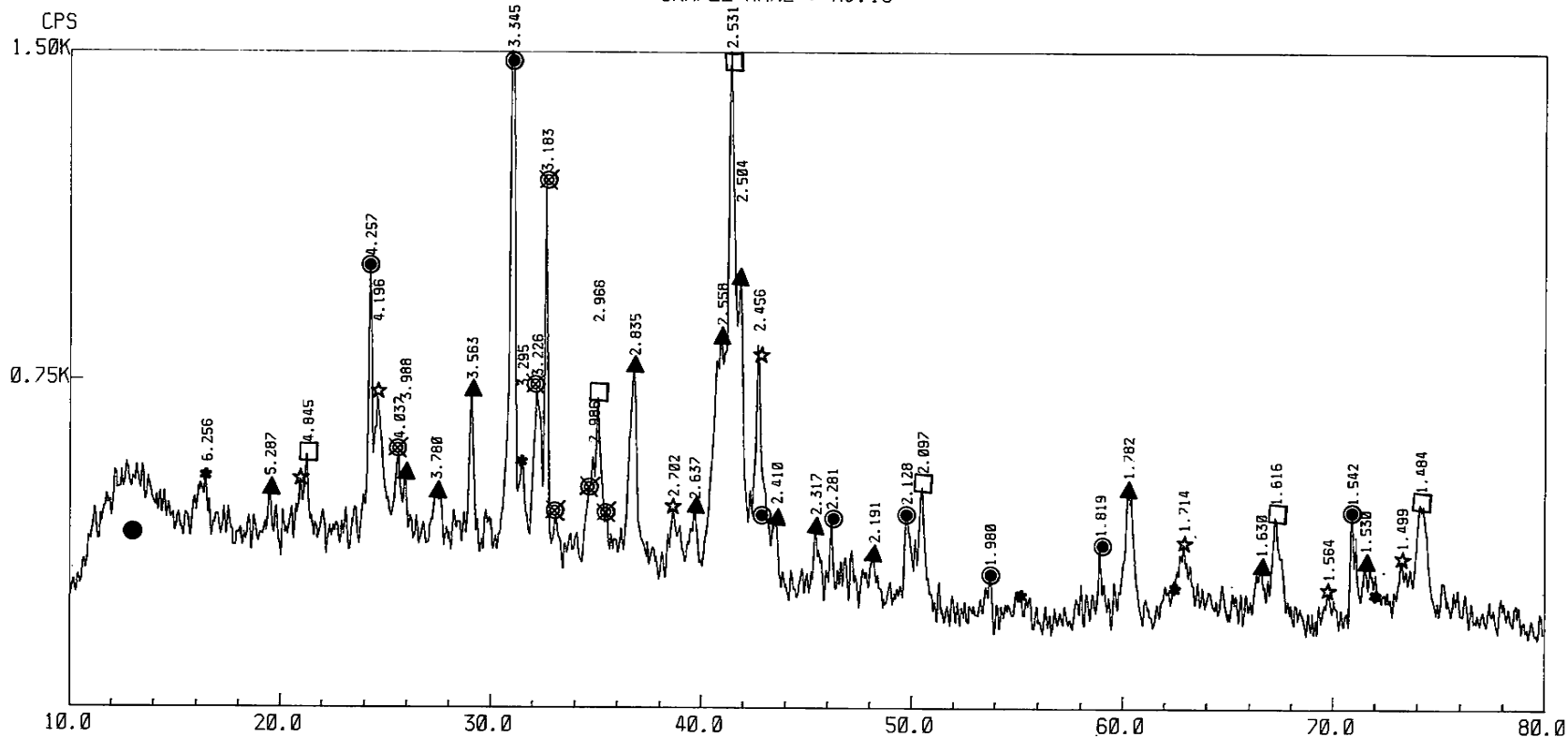


MEASUREMENT DATE : 95. 2.16
 FILE NAME : AH52100
 TARGET : Co
 VOL and CUR : 50KV 35mA
 SLITS : DS 1 RS .3 SS 1
 SCAN SPEED : 2 DEG/MIN.
 STEP/SAMPL. : .02 DEG
 PRESET TIME : 0 SEC
 SAMPLE NAME : No.18
 SAMPLE MEMO : G00369
 OPERATOR :

DATA DRAWING DATE : 02-16-1995
 SMOOTHING NO. : 11
 THRESH. INTEN. : 289 CPS
 2nd DERIV. : 88 CPS/(DEGxDEG)
 WIDTH : .09 DEG
 B.G. REDUCTION : EXECUTION
 OUTPUT FILE :

- SiO₂ (Quartz, low)
- Fe₃O₄ (Magnetite)
- ▲ Fe₂SiO₄ (Payalite)
- ☆ α-FeO(OH) (Goethite)
- * γ-FeO(OH) (Lepidocrocite)
- ⊗ (Na, Ca)(Al, Si)₃O₈ (Plagioclase)

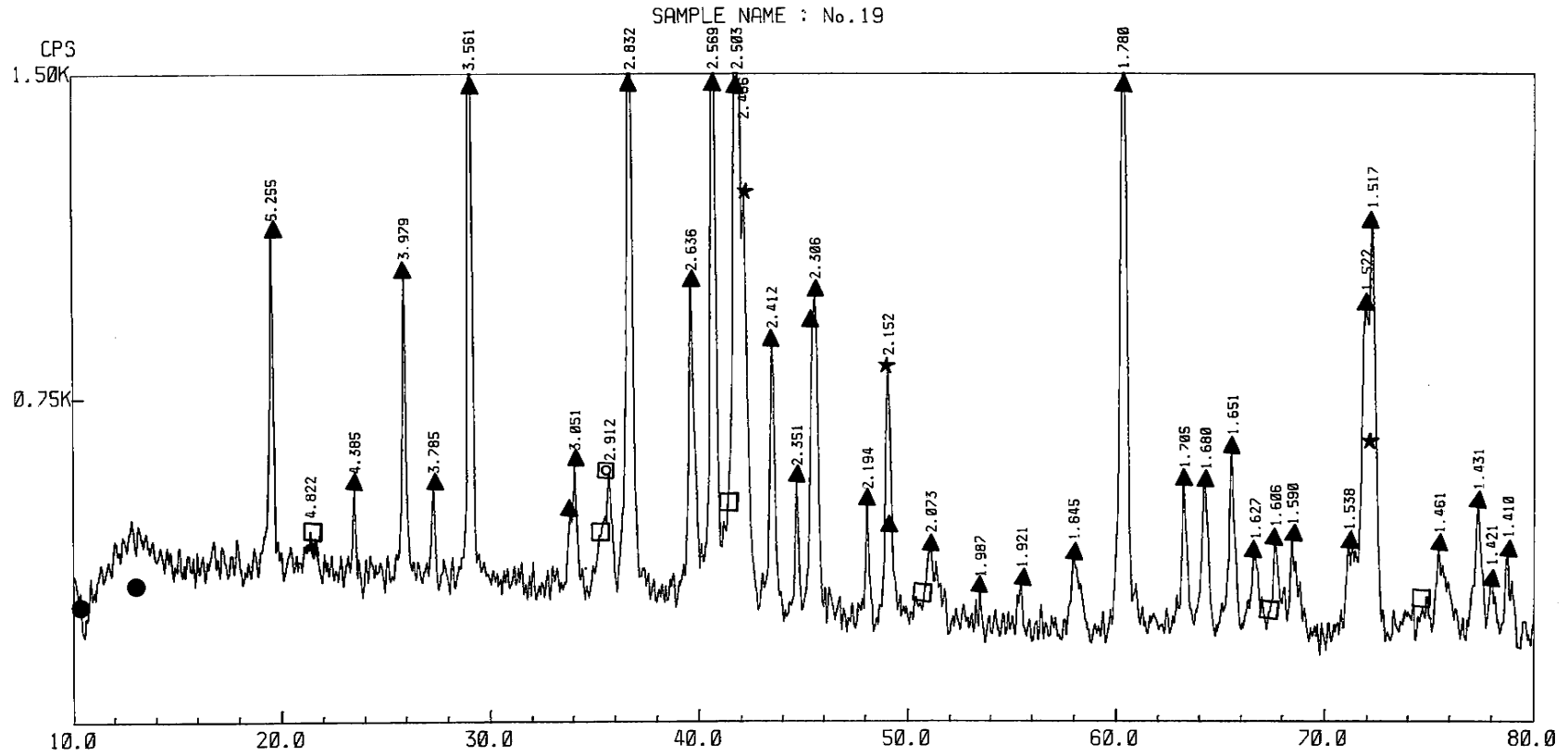
SAMPLE NAME : No.18



MEASUREMENT DATE : 95. 2.16
 FILE NAME : AHS3100
 TARGET : Co
 VOL and CUR: 50KV 35mA
 SLITS : DS 1 RS .3 SS 1
 SCAN SPEED: 2 DEG/MIN.
 STEP/SAMPL.: .02 DEG
 PRESET TIME: 0 SEC
 SAMPLE NAME: No.19
 SAMPLE MEMO: G00369
 OPERATOR :

DATA DRAWING DATE : 02-16-1995
 SMOOTHING NO.: 11
 THRESH. INTEN.: 300 CPS
 2nd DERIV.: 88 CPS/(DEGxDEG)
 WIDTH: .09 DEG
 B.G. REDUCTION: EXECUTION
 OUTPUT FILE :

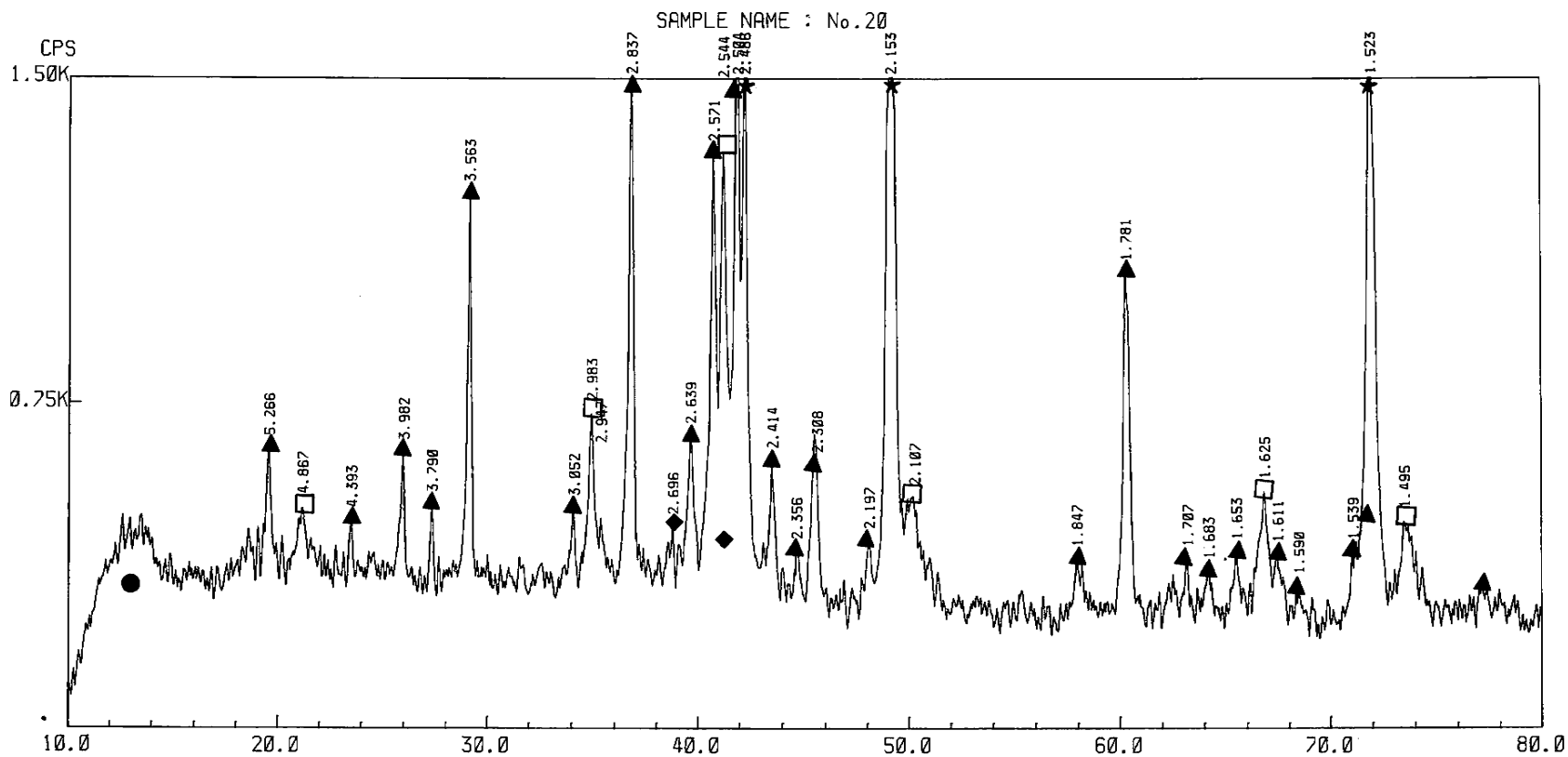
- ▲ Fe₂SiO₄ (Fayalite)
- ★ FeO (Wustite)
- Fe₃O₄ (Magnetite)
- ⊞ CaMg(CO₃)₂ (Dolomite)?



MEASUREMENT DATE : 95. 2.16
 FILE NAME : AH54100
 TARGET : Co
 VOL and CUR: 50KV 35mA
 SLITS : DS 1 RS .3 SS 1
 SCAN SPEED: 2 DEG/MIN.
 STEP/SAMPL.: .02 DEG
 PRESET TIME: 0 SEC
 SAMPLE NAME: No.20
 SAMPLE MEMO: G00369
 OPERATOR :

DATA DRAWING DATE : 02-16-1995
 SMOOTHING NO.: 11
 THRESH. INTEN.: 304 CPS
 2nd DERIV.: 80 CPS/(DEGxDEG)
 WIDTH: .09 DEG
 B.G. REDUCTION: EXECUTION
 OUTPUT FILE :

- ★ FeO (Wustite)
- ▲ Fe₂SiO₄ (Fayalite)
- Fe₃O₄ (Magnetite)
- ◆ α-Fe₂O₃ (Hematite)?

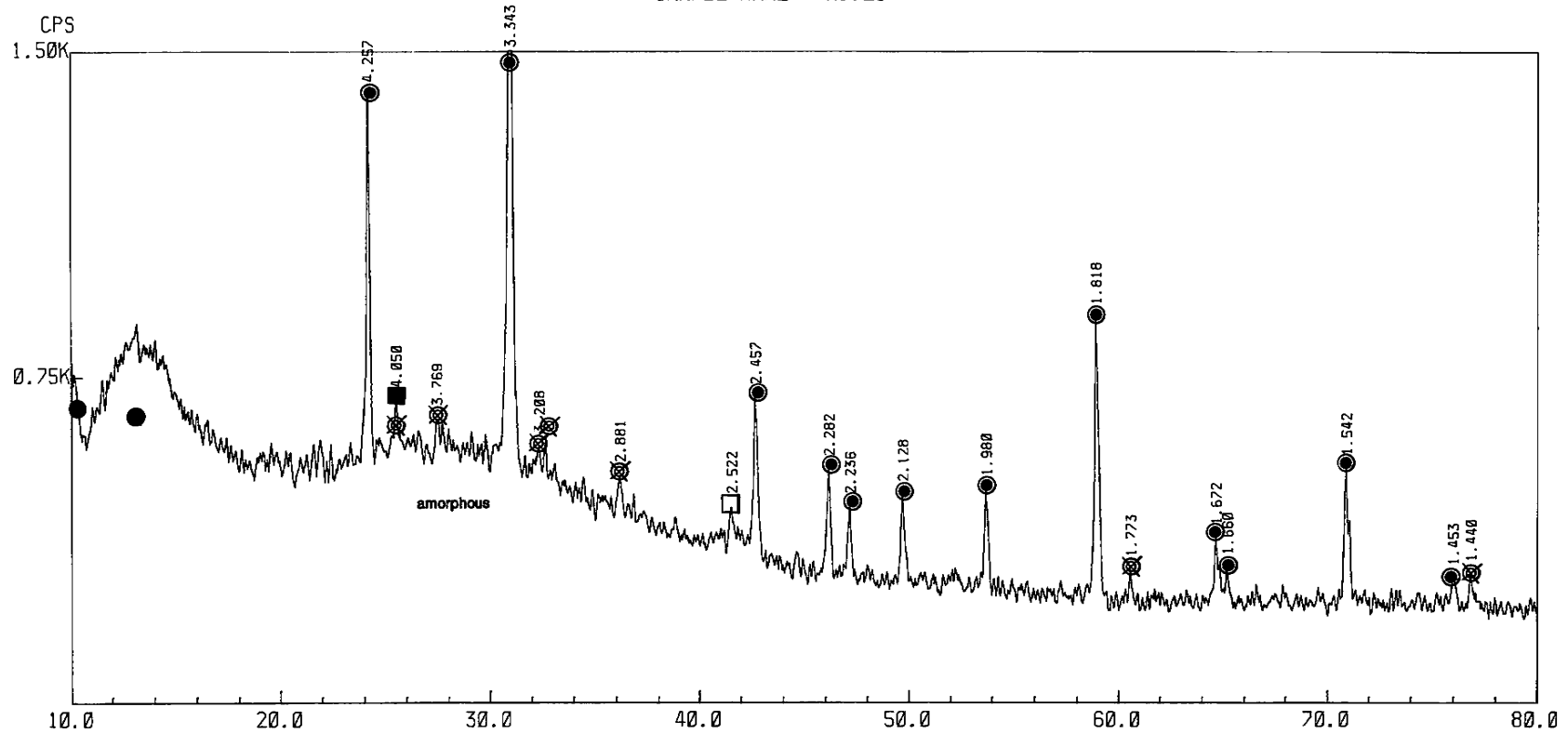


MEASUREMENT DATE : 95. 2.16
 FILE NAME : AH55100
 TARGET : Co
 VOL and CUR: 50KV 35mA
 SLITS : DS 1 RS .3 SS 1
 SCAN SPEED: 2 DEG/MIN.
 STEP/SAMPL.: .02 DEG
 PRESET TIME: 0 SEC
 SAMPLE NAME: No.21
 SAMPLE MEMO: G00369
 OPERATOR :

DATA DRAWING DATE : 02-16-1995
 SMOOTHING NO.: 11
 THRESH. INTEN.: 224 CPS
 2nd DERIV.: 88 CPS/(DEGxDEG)
 WIDTH: .09 DEG
 B.G. REDUCTION: EXECUTION
 OUTPUT FILE :

- SiO₂ (Quartz, low)
- SiO₂ (Cristobalite)?
- ⊗ (Na, Ca)(Al, Si)₄O₈ (Plagioclase)?
- Fe₃O₄ (Magnetite)?

SAMPLE NAME : No.21

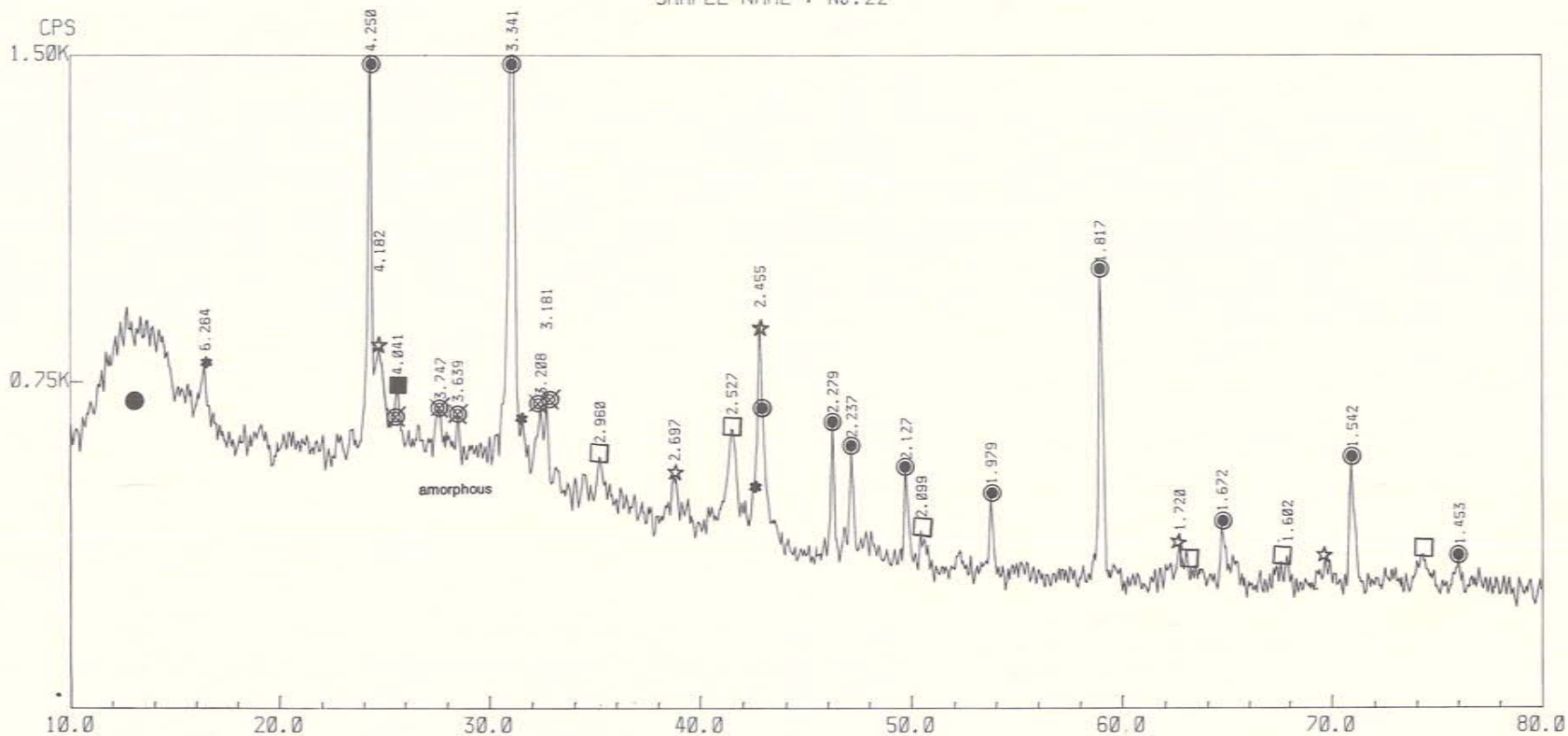


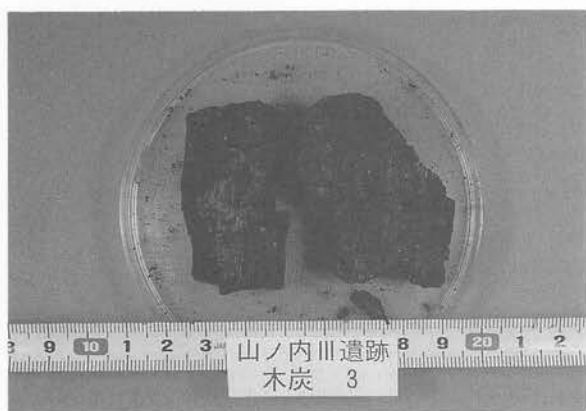
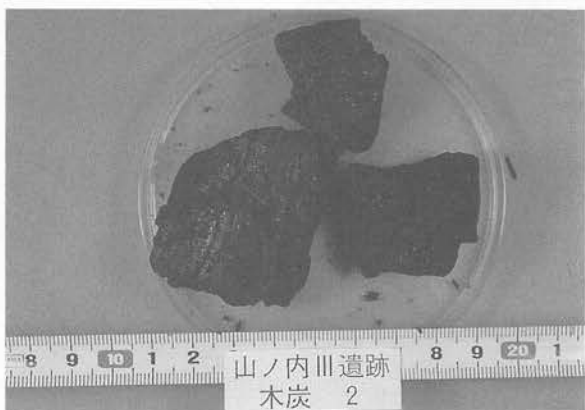
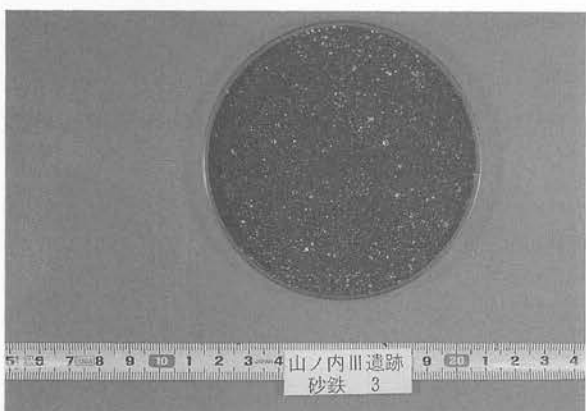
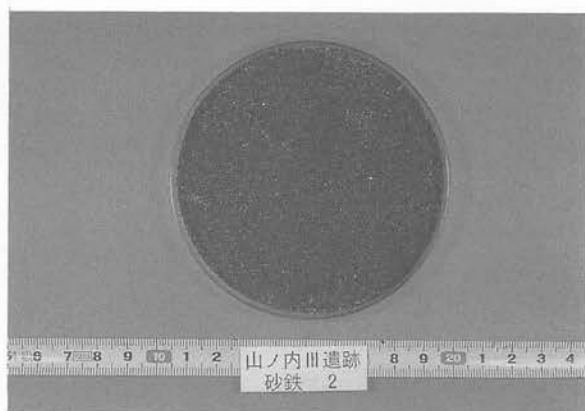
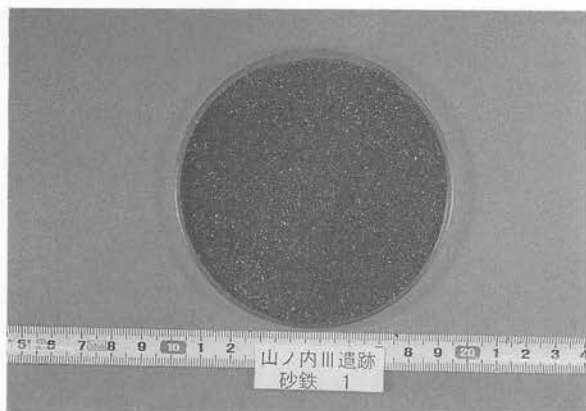
MEASUREMENT DATE : 95. 2.16
 FILE NAME : AHS6100
 TARGET : Co
 VOL and CUR : 50KV 35mA
 SLITS : DS 1 RS .3 SS 1
 SCAN SPEED : 2 DEG/MIN.
 STEP/SAMPL. : .02 DEG
 PRESET TIME : 0 SEC
 SAMPLE NAME : No.22
 SAMPLE MEMO : G00369
 OPERATOR :

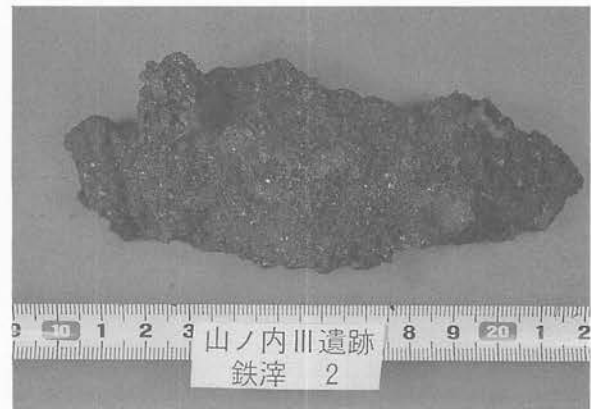
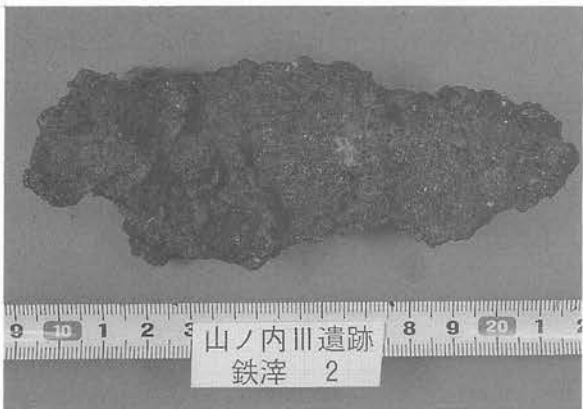
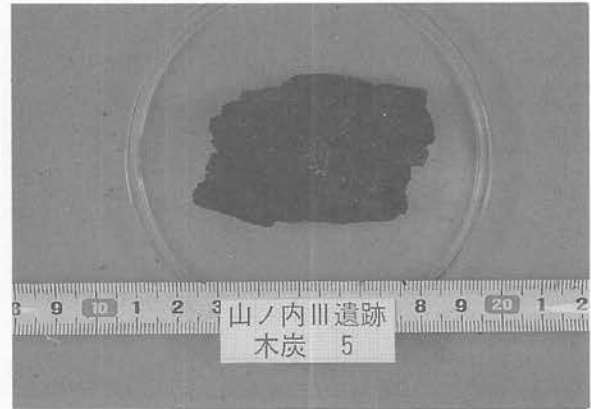
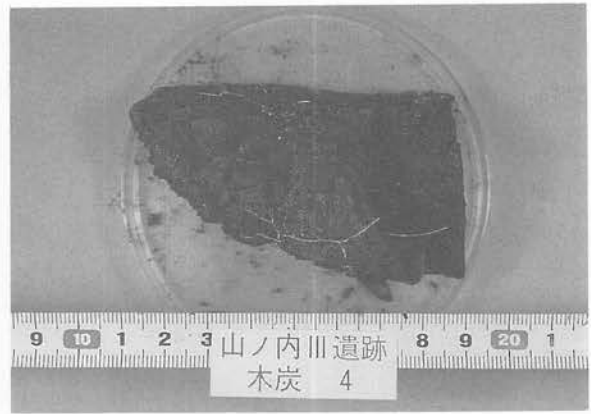
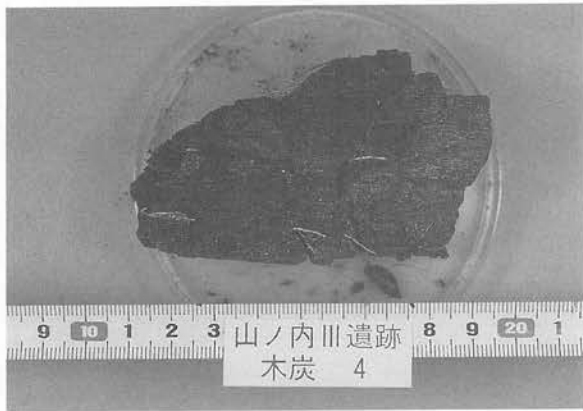
DATA DRAWING DATE : 02-16-1995
 SMOOTHING NO. : 11
 THRESH. INTEN. : 232 CPS
 2nd DERIV. : 88 CPS/(DEGxDEG)
 WIDTH : .09 DEG
 B.G. REDUCTION : EXECUTION
 OUTPUT FILE :

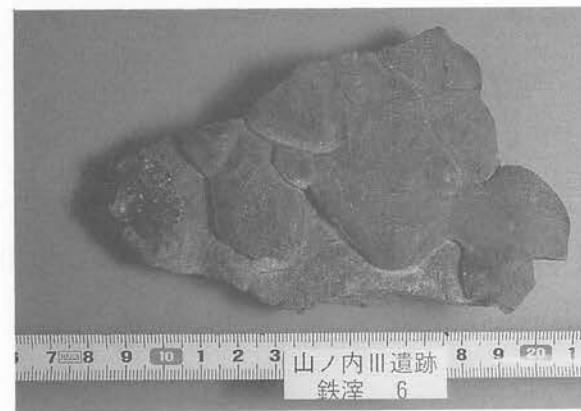
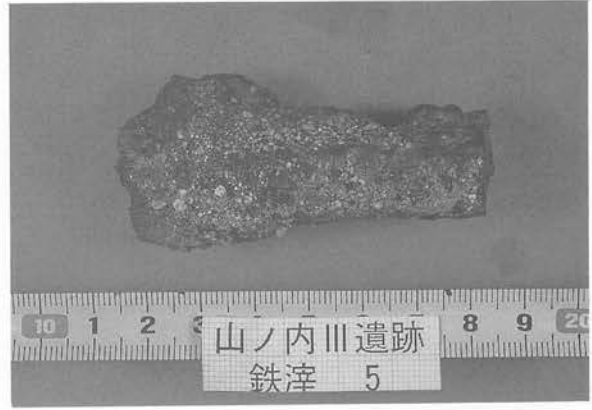
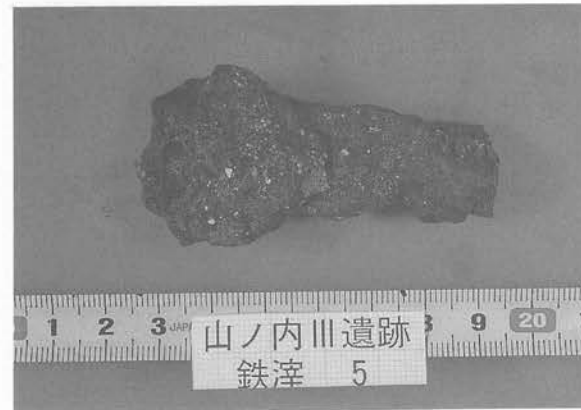
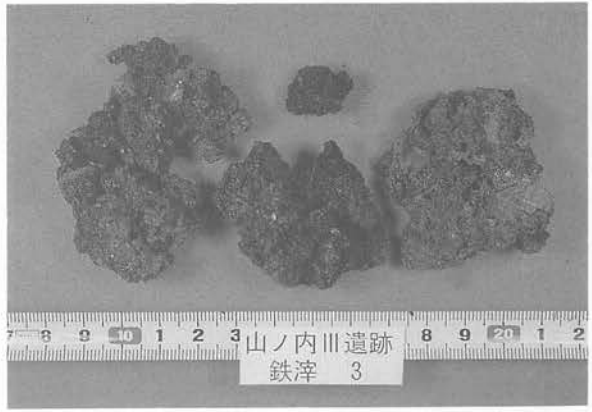
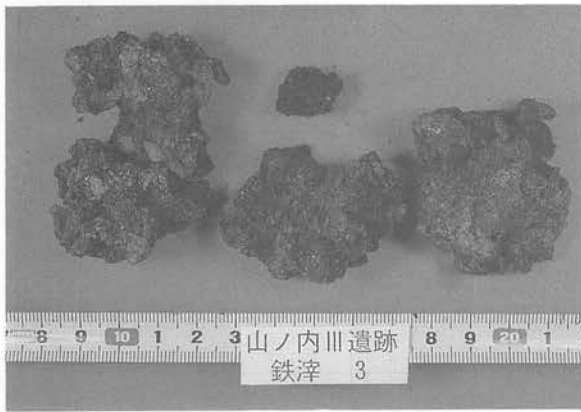
- SiO₂ (Quartz, low)
- ☆ α-FeO(OH) (Goethite)
- Fe₃O₄ (Magnetite)
- * γ-FeO(OH) (Lepidocrocite)
- ⊗ (Na, Ca)(Al, Si)₄O₈ (Plagioclase)
- SiO₂ (Cristobalite)?

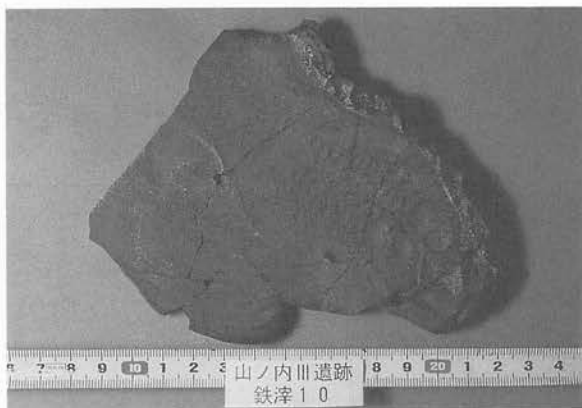
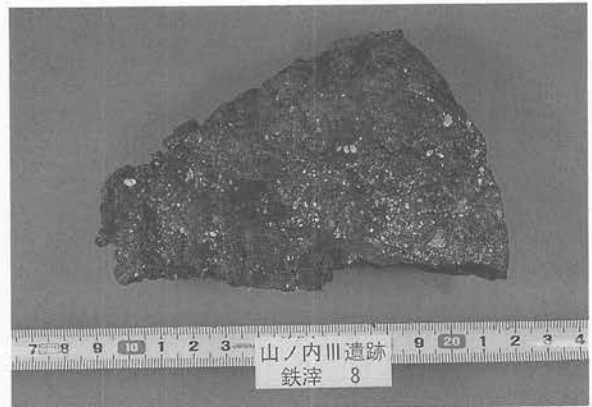
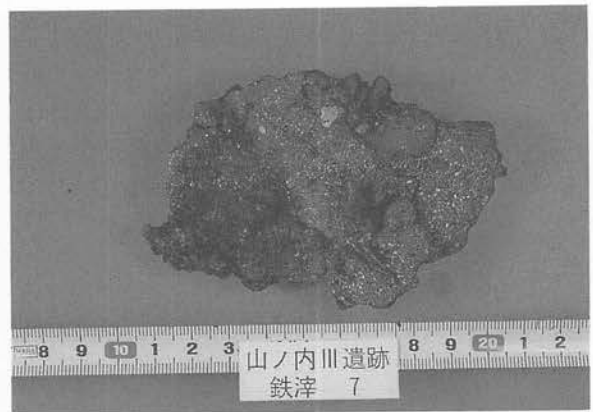
SAMPLE NAME : No.22

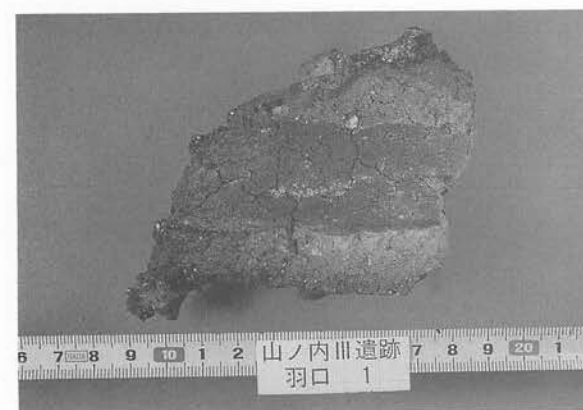
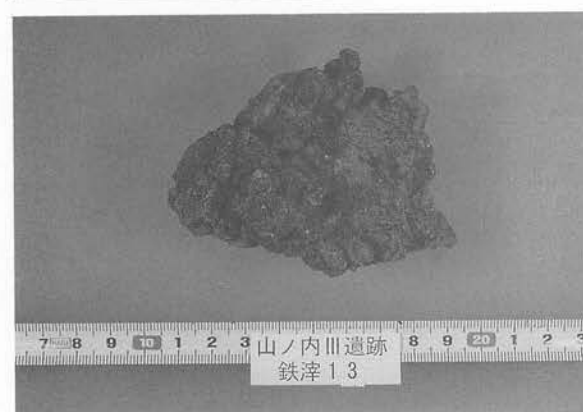
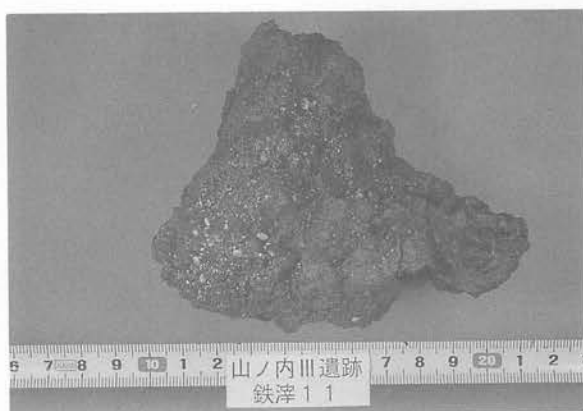
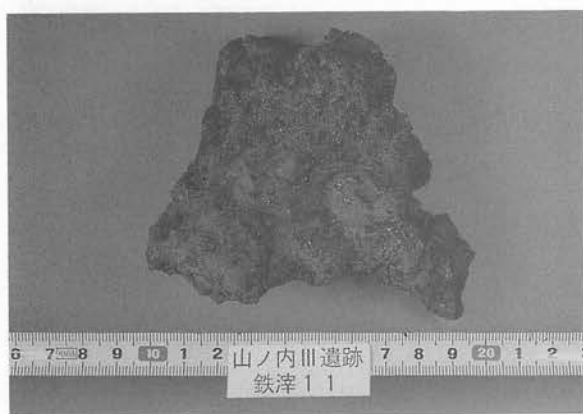














分析結果 (山ノ内III遺跡調査)

試料No.	単位 成分	% (m/m)						cal/g
		灰分	揮発分	固定C	付着水	S	P	発熱量
5		15.5	40.0	44.5	47.3	0.03	0.017	4850
6		10.4	40.8	51.2	18.0	0.02	0.004	5180
7		11.0	32.7	56.3	17.1	0.02	0.006	5260
8		11.6	42.3	46.1	18.0	0.02	0.004	5490
9		16.9	38.7	44.4	16.2	0.03	0.006	4900

【分析方法】 分析方法はJIS法に準拠し、以下の方法とした。
 灰分：重量法 S：燃焼-中和滴定法
 揮発分：重量法 P：ガラスビード蛍光X線分析法
 固定炭素：計算 発熱量：B型熱量計を使用
 付着水：熱乾燥法

分析結果 (山ノ内III遺跡調査)

粘土関係		単位：% (m/m)											
試料No.	成分	C	SiO ₂	MnO	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	TiO ₂	Na ₂ O	K ₂ O	T.Fe	C・W	Igloss
23	母材	0.17	60.0	0.12	25.4	0.41	0.84	1.04	0.70	1.63	5.90	0.99	1.28
23	固着物	0.065	50.7	0.17	19.4	1.16	0.72	0.95	1.30	2.42	15.8	0.23	0.80
24		0.070	65.7	0.10	21.8	1.19	0.58	0.52	2.12	1.98	3.52	0.41	0.44
25		0.31	61.8	0.09	20.2	0.90	0.29	0.57	1.70	1.73	3.97	2.55	3.99

【分析方法】 粘土の分析方法はJIS法に準拠し、以下の方法とした。
 C：燃焼-赤外線吸収法 SiO₂, MnO, Al₂O₃
 C・W：カールツフィッシャー法 CaO, MgO, TiO₂
 Igloss：重量法 Na₂O, K₂O, T, Fe }：ガラスビード蛍光X線分析法

分 析 結 果 (山ノ内III遺跡調査)

砂鉄関係

単位：%(m/m)

成分 試料No	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	TiO ₂	V	MnO	P ₂ O ₅	Na ₂ O	K ₂ O	T.Fe	C・W
1	0.53	0.08	0.62	<0.01	0.39	0.20	0.35	0.518	0.018	0.04	69.1	0.12
2	1.39	0.48	0.48	0.04	0.43	0.22	0.33	0.422	0.044	0.08	68.3	0.25
3	0.48	0.12	0.29	<0.01	0.39	0.20	0.34	0.303	0.016	0.04	69.3	0.11
4	1.28	0.33	0.46	0.04	0.96	0.22	0.37	0.384	0.053	0.05	67.6	0.21

【分析方法】 砂鉄等の分析方法はJIS法に準拠し、以下の方法とした。

$\left. \begin{array}{l} \text{SiO}_2, \text{Al}_2\text{O}_3, \text{CaO} \\ \text{MgO}, \text{TiO}_2, \text{MnO} \\ \text{P}_2\text{O}_5, \text{K}_2\text{O} \end{array} \right\} : \text{ガラスビード蛍光X線分析法}$	$\left. \begin{array}{l} \text{T.Fe} : \text{三塩化チタン還元-ニクロム酸カリウム滴定法} \\ \text{C} \cdot \text{W} : \text{カールフィッシャー法} \\ \text{Na}_2\text{O}, \text{V} : \text{原子吸光法} \end{array} \right\}$
---	--

分 析 結 果 (山ノ内III遺跡調査)

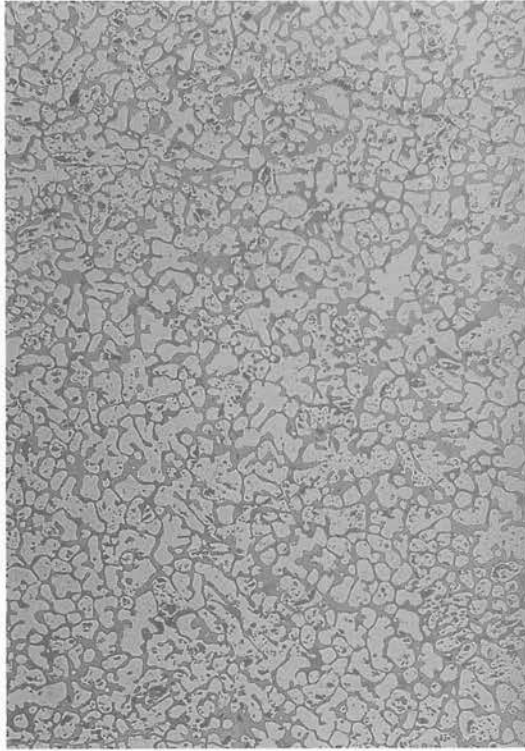
砂鉄関係

単位：%(m/m)

成分 試料No	T.Fe	M.Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	C・W	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	TiO ₂	MnO	P ₂ O ₅	Cr ₂ O ₃	Na ₂ O	K ₂ O	C	V	Cu
10	63.0	0.11	52.74	31.3	2.47	7.56	2.06	0.36	0.02	0.38	0.14	0.315	0.001	0.23	0.15	0.44	0.076	0.002
11	55.0	0.45	21.63	54.0	5.37	10.4	2.76	0.49	0.37	1.48	0.33	0.529	0.055	0.40	0.18	0.27	0.26	0.001
12	58.5	0.22	28.88	51.3	3.60	8.22	2.27	0.96	0.18	1.08	0.39	0.930	0.015	0.27	0.19	0.19	0.20	0.001
13	26.7	0.34	7.90	28.9	2.50	43.9	12.2	1.14	0.49	0.64	0.23	0.363	0.004	1.66	1.51	0.30	0.078	0.001
14	46.9	0.17	55.25	5.44	0.19	24.9	6.65	2.52	0.51	1.51	0.51	0.938	0.028	1.04	0.82	0.020	0.29	0.001
15	47.3	0.17	55.61	5.61	0.13	23.9	6.54	2.96	0.56	1.74	0.60	1.07	0.034	0.95	0.86	0.021	0.33	0.001
16	37.1	0.17	30.10	19.4	1.89	32.1	9.09	2.40	0.61	1.70	0.45	0.631	0.031	1.25	1.09	0.46	0.26	0.001
17	42.5	0.17	48.79	6.32	0.28	29.5	7.76	2.66	0.65	1.56	0.52	0.924	0.032	1.11	1.03	0.026	0.30	0.001
18	35.8	0.11	18.97	30.0	2.83	31.5	8.09	2.22	0.72	1.89	0.40	0.826	0.008	1.33	1.03	0.23	0.12	0.001
19	47.3	0.17	55.32	5.93	0.25	25.6	6.61	2.21	0.44	1.14	0.41	0.761	0.024	1.12	0.83	0.021	0.21	0.001
20	56.2	0.22	63.37	9.64	0.30	13.8	3.30	2.42	0.68	2.79	0.48	0.678	0.044	0.54	0.40	0.015	0.35	0.001
21	10.8	0.34	7.76	6.34	0.26	60.9	17.4	1.86	0.77	0.63	0.18	0.163	0.016	3.47	1.95	0.043	0.030	0.001
22	13.5	0.34	1.80	16.8	1.57	57.6	14.5	1.93	0.65	0.73	0.27	0.268	0.006	2.57	1.73	0.23	0.054	0.001

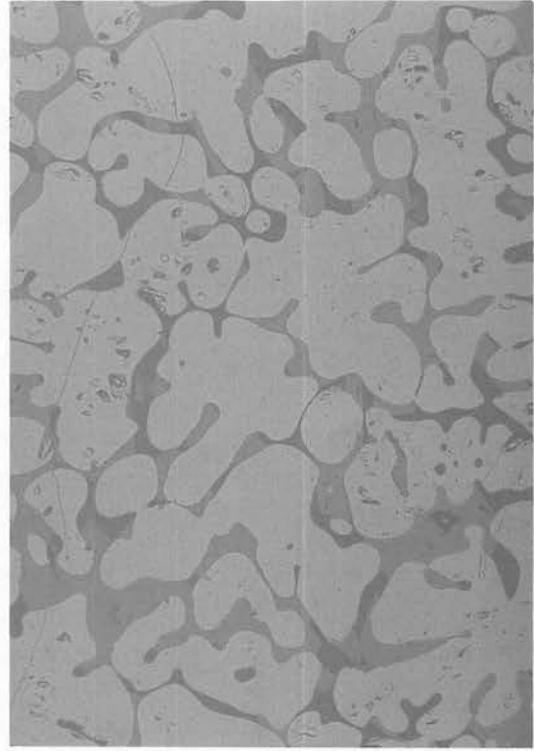
【分析方法】 鉄滓等の分析方法はJIS法に準拠し、以下の方法とした。

$\left. \begin{array}{l} \text{T.Fe} : \text{三塩化チタン還元-ニクロム酸カリウム滴定法} \\ \text{M.Fe} : \text{臭素メタノール分解-EDTA滴定法} \\ \text{FeO} : \text{ニクロム酸カリウム滴定法} \\ \text{Fe}_2\text{O}_3 : \text{計算} \\ \text{C} \cdot \text{W} : \text{カールフィッシャー法} \end{array} \right\}$	$\left. \begin{array}{l} \text{C} : \text{燃焼-赤外線吸収法} \\ \text{CaO}, \text{MgO} \\ \text{MnO}, \text{Cr}_2\text{O}_3 \\ \text{Na}_2\text{O}, \text{V}, \text{Cu} \end{array} \right\} : \text{ICP発光分光分析法}$	$\left. \begin{array}{l} \text{SiO}_2, \text{Al}_2\text{O}_3, \text{CaO} \\ \text{MgO}, \text{TiO}_2, \text{MnO} \\ \text{P}_2\text{O}_5, \text{K}_2\text{O} \end{array} \right\} : \text{ガラスビード蛍光X線分析法}$ <p>※CaO, MgO, MnOは含有率に応じ、ICP法又はX線法で分析しています。</p>
---	---	---

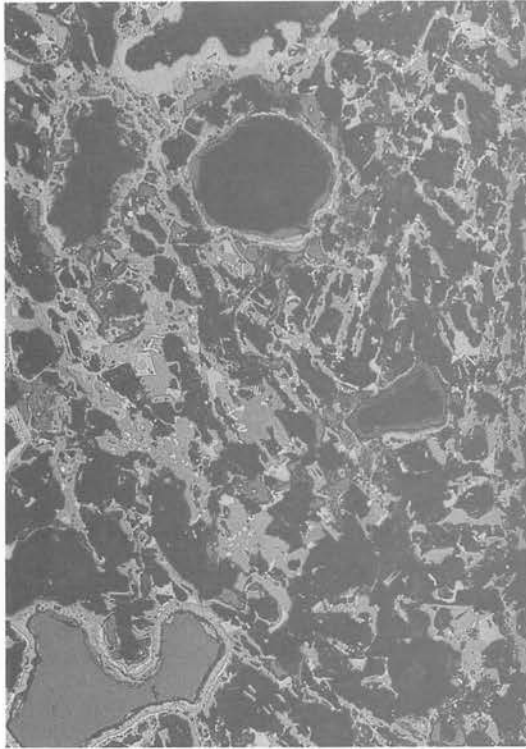


×75

顕微鏡写真 試料番号10 鉄滓1

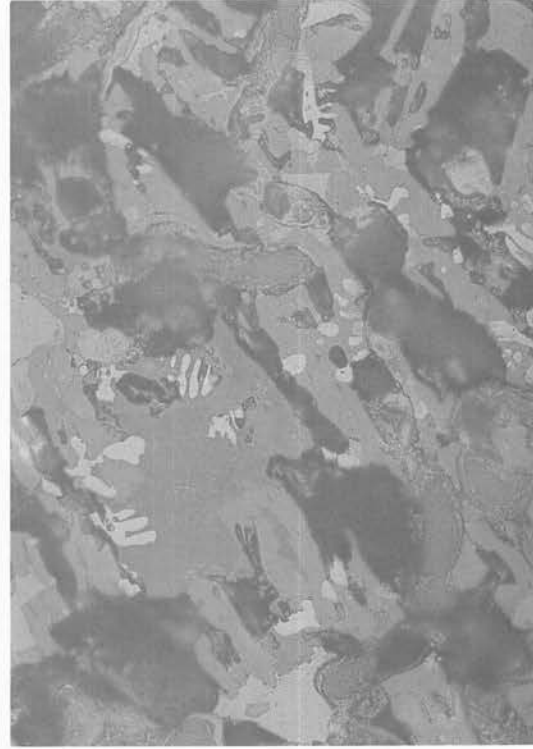


×300

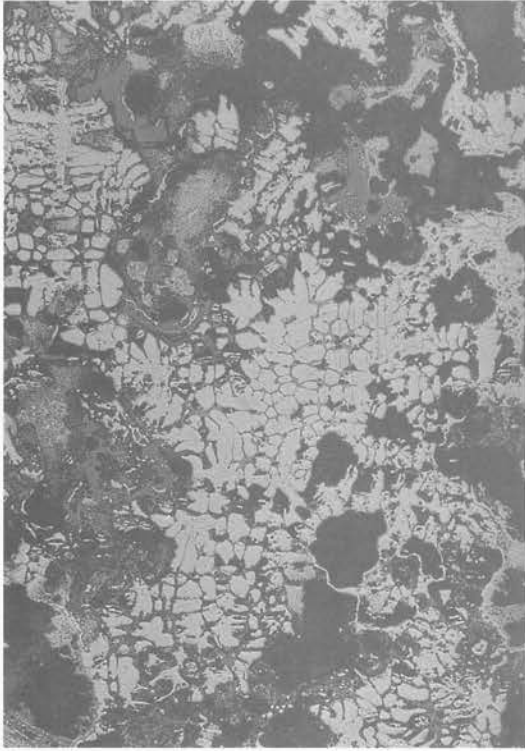


×75

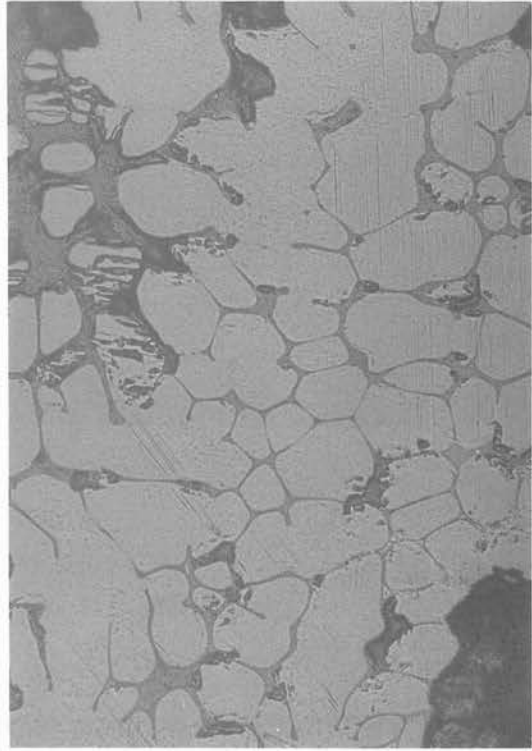
顕微鏡写真 試料番号11 鉄滓2



×300

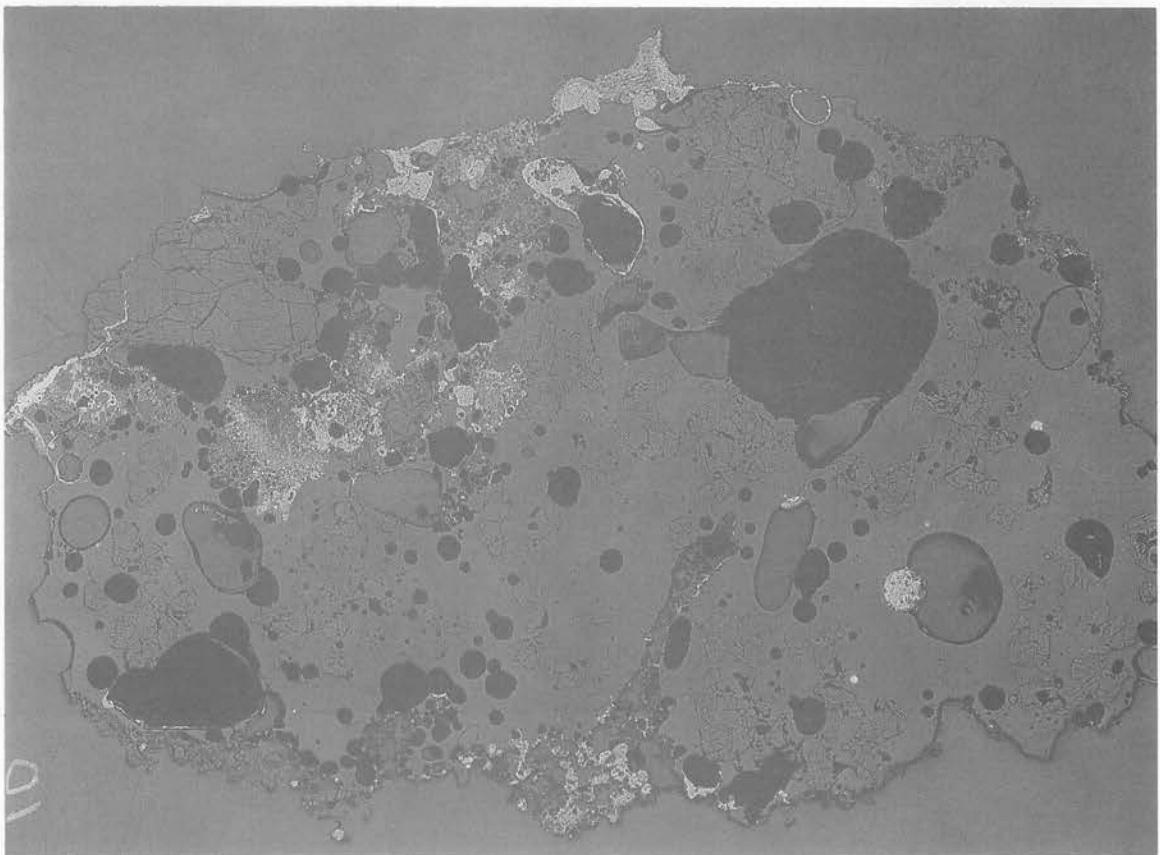


×75



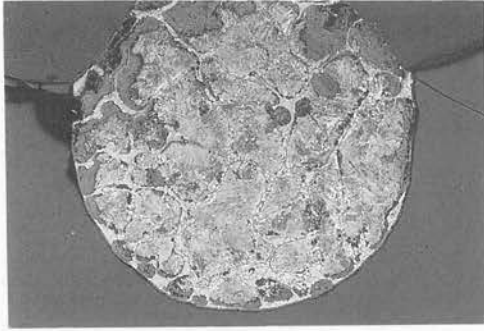
×300

顕微鏡写真 試料番号12 鉄滓3

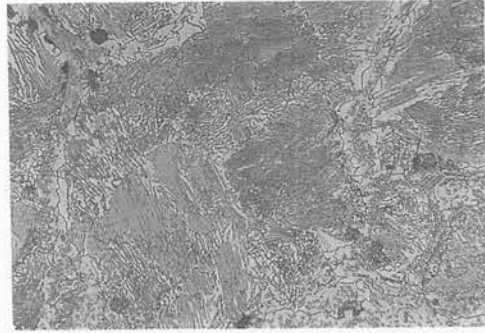


顕微鏡写真 試料番号13 鉄滓4

×10



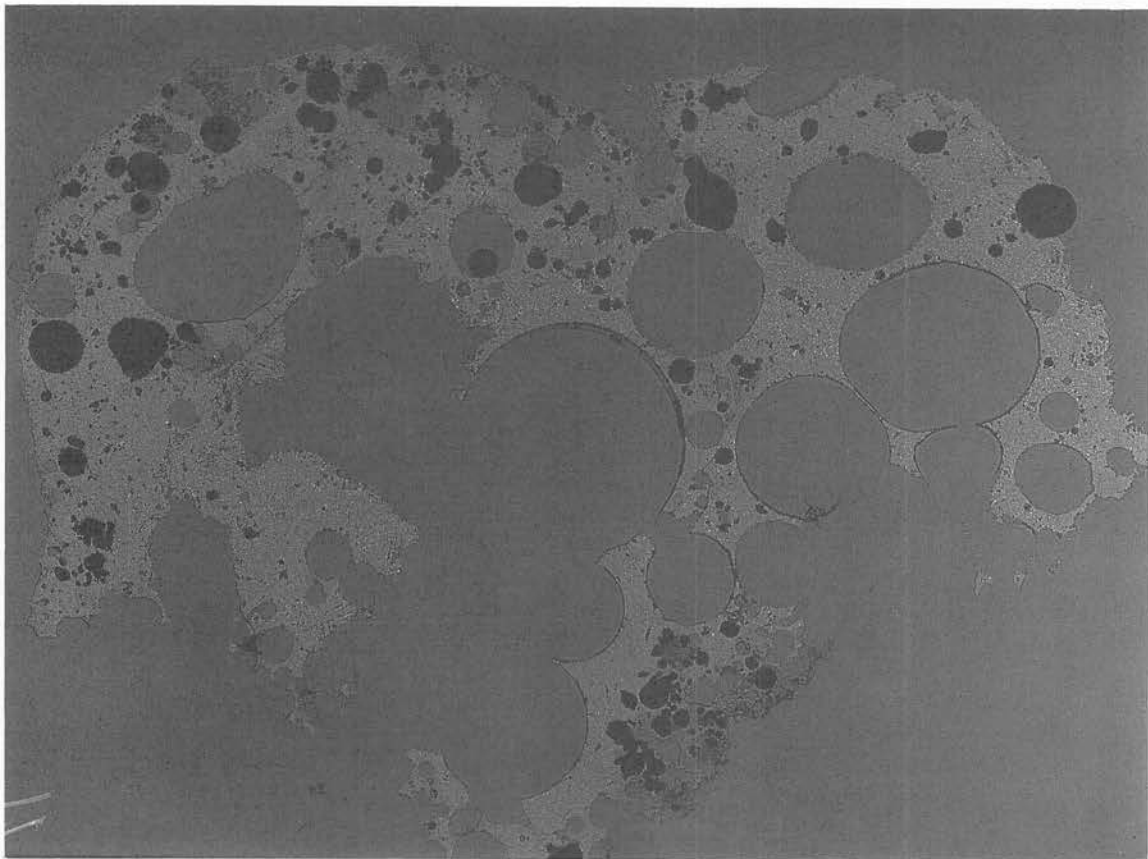
×75



×300

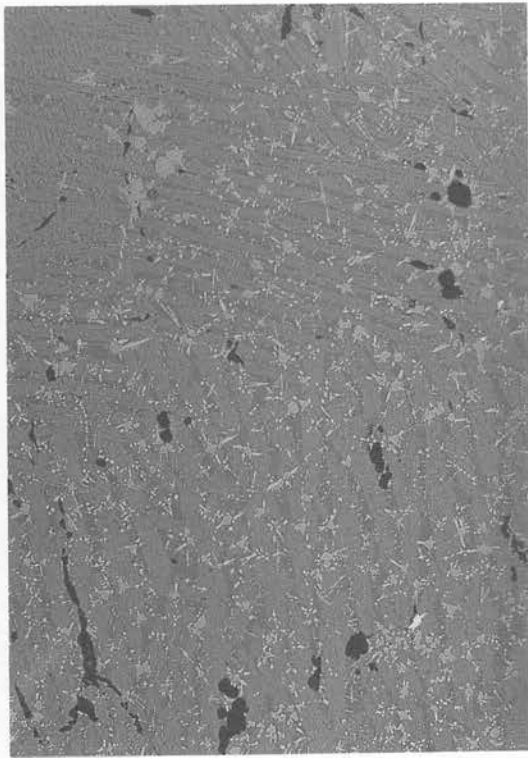
顕微鏡写真 試料番号13 鉄滓4

金属顕微鏡組織

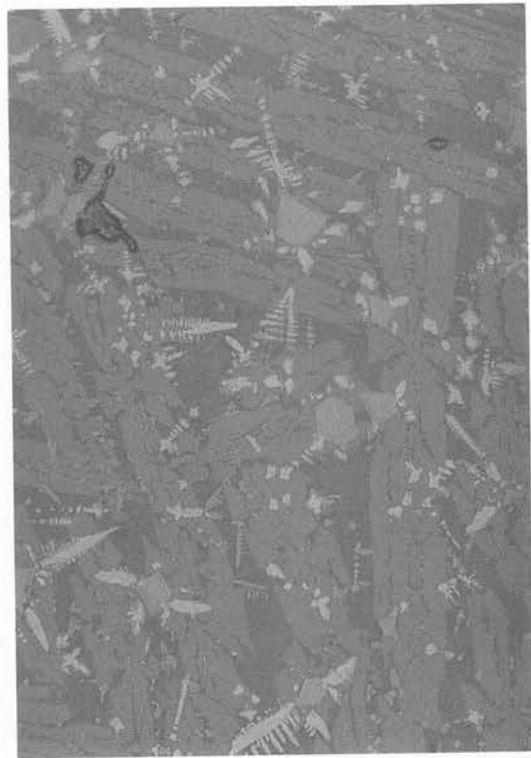


顕微鏡写真 試料番号14 鉄滓5

×10

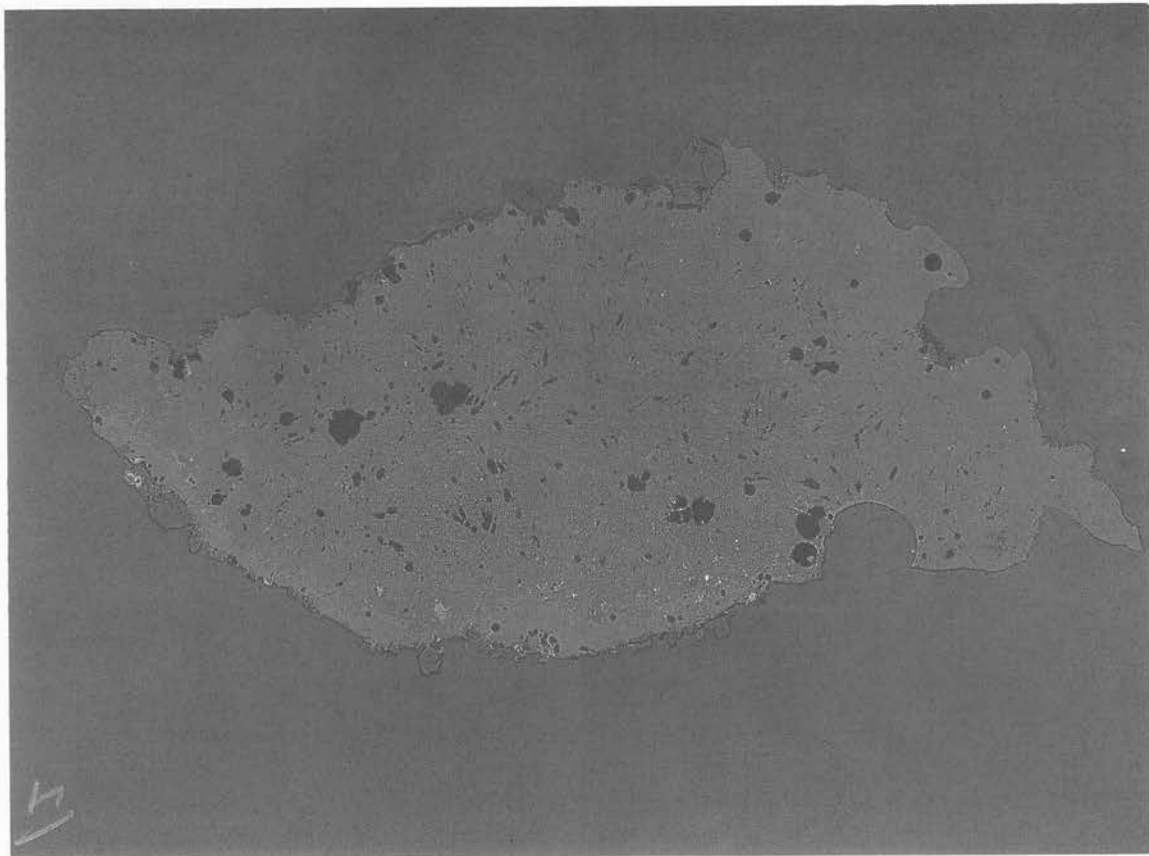


×75



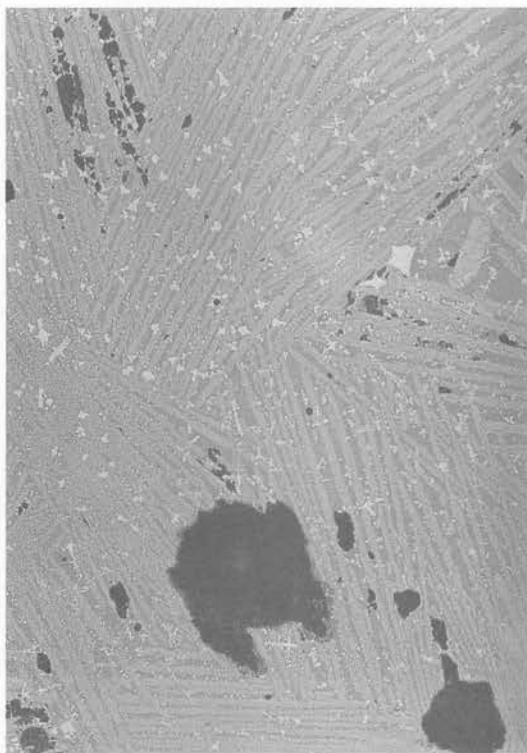
×300

顕微鏡写真 試料番号15 鉄滓6

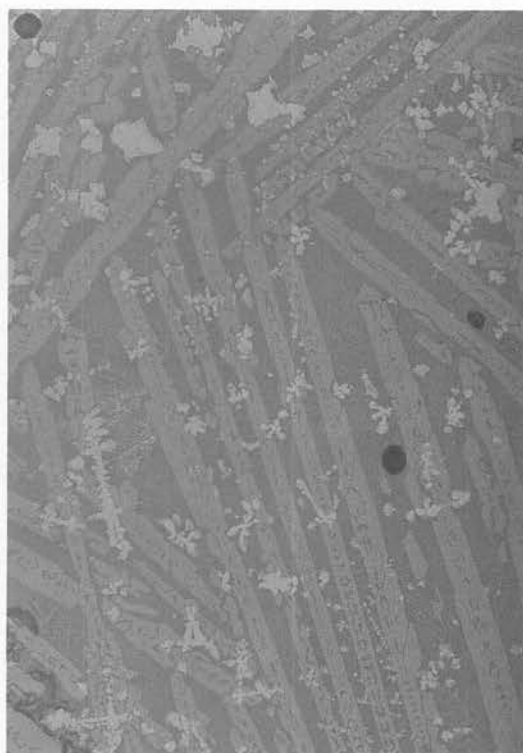


×10

顕微鏡写真 試料番号16 鉄滓7

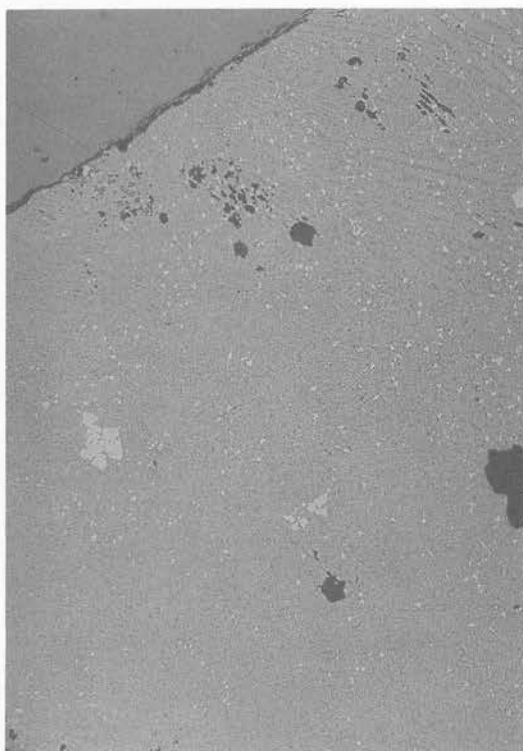


×75

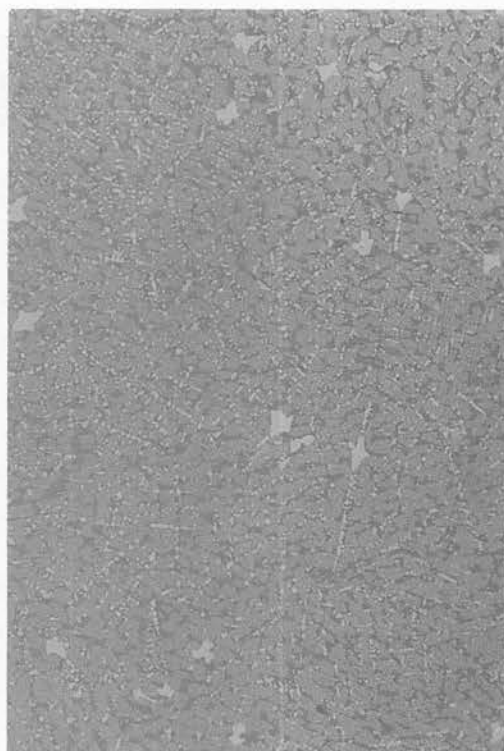


×300

顕微鏡写真 試料番号16 鉄滓7

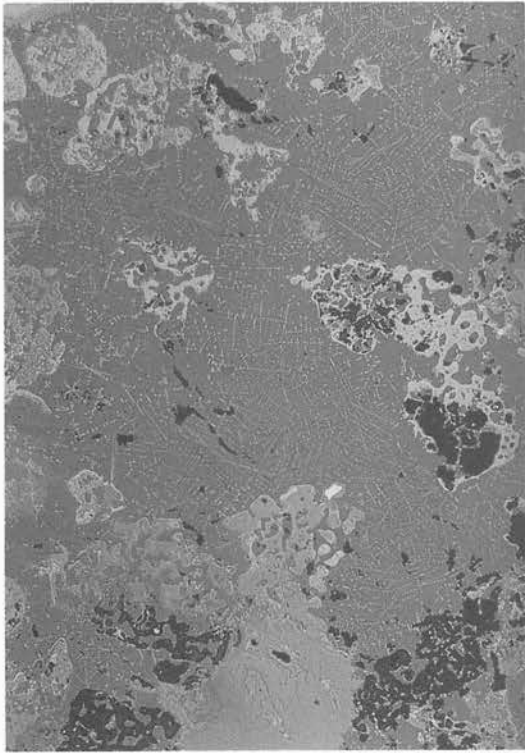


×75



×300

顕微鏡写真 試料番号17 鉄滓8

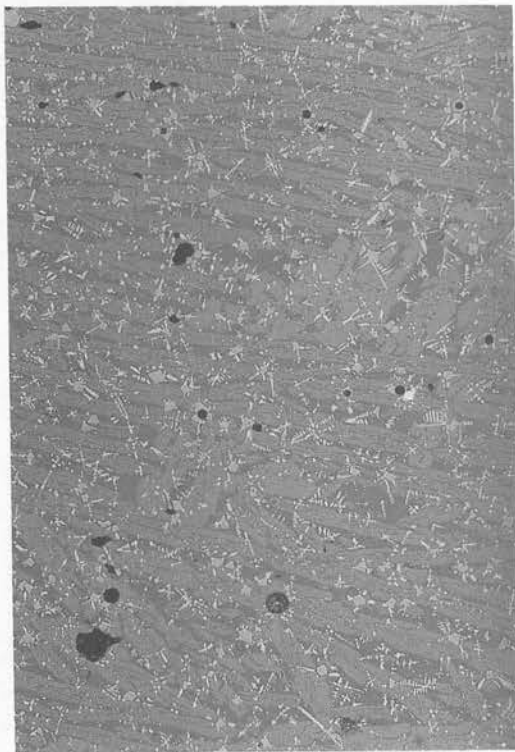


×75

顕微鏡写真 試料番号18 鉄滓9

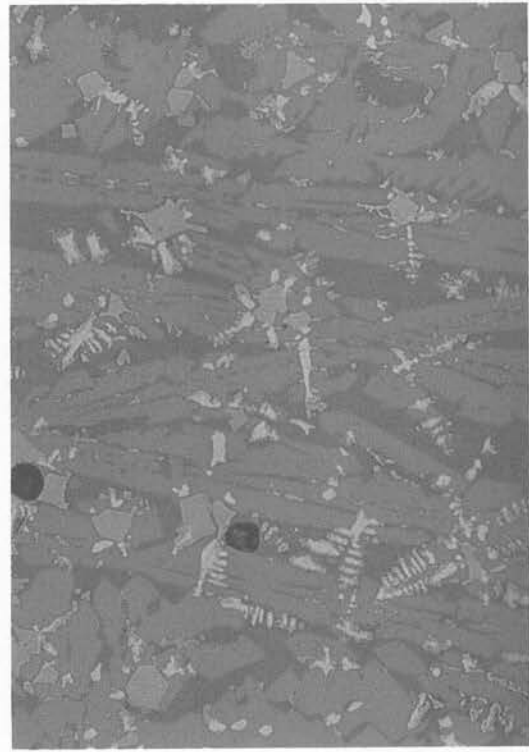


×300

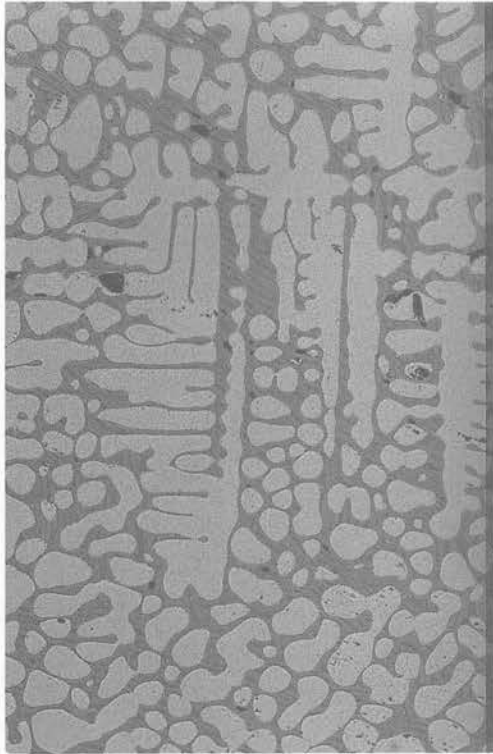


×75

顕微鏡写真 試料番号19 鉄滓10

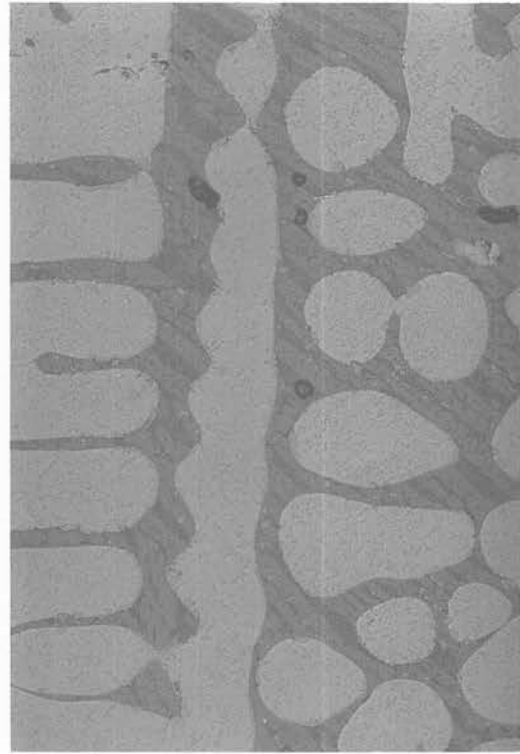


×300

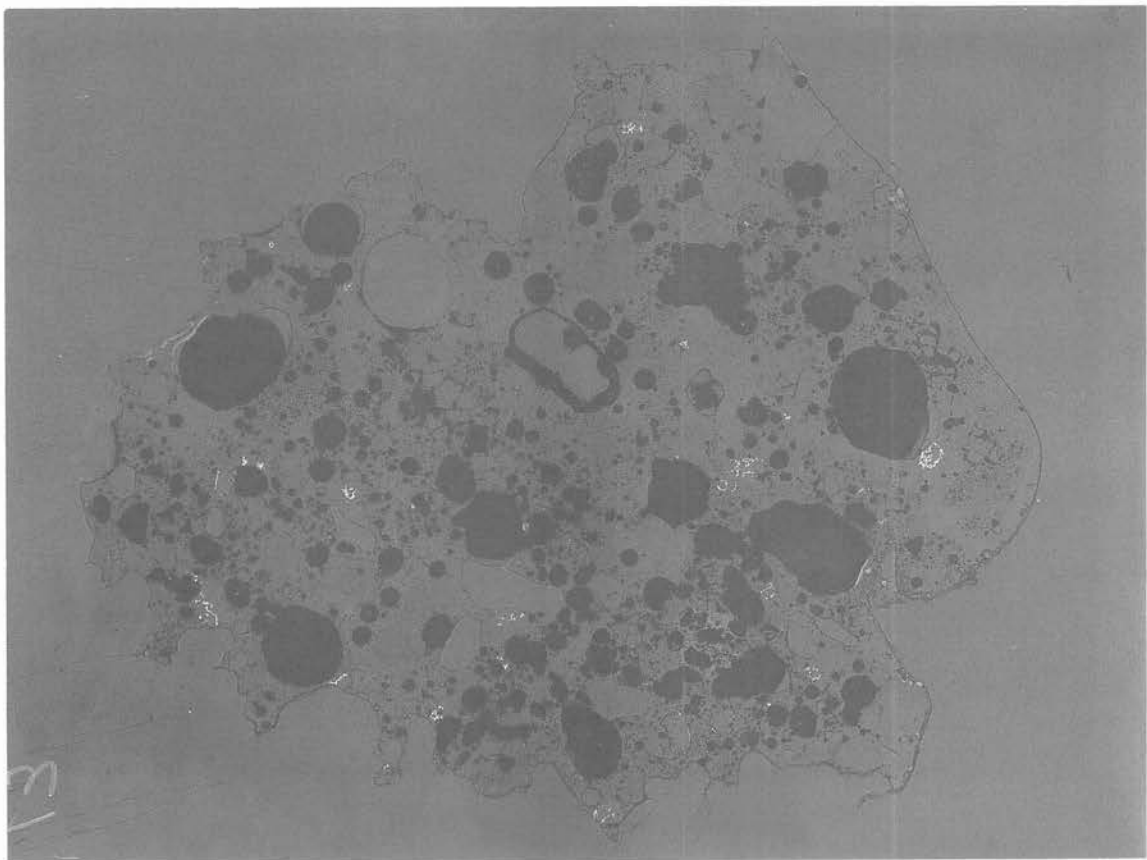


×75

顕微鏡写真 試料番号20 鉄滓11

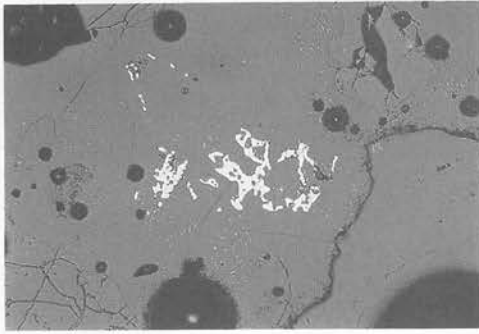


×300



顕微鏡写真 試料番号21 鉄滓12

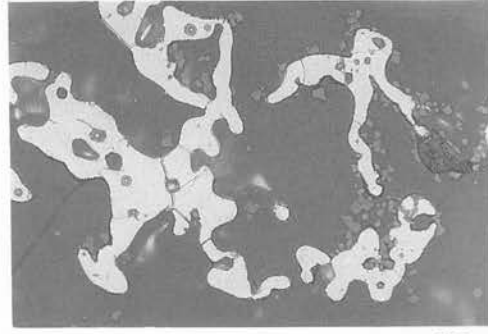
×10



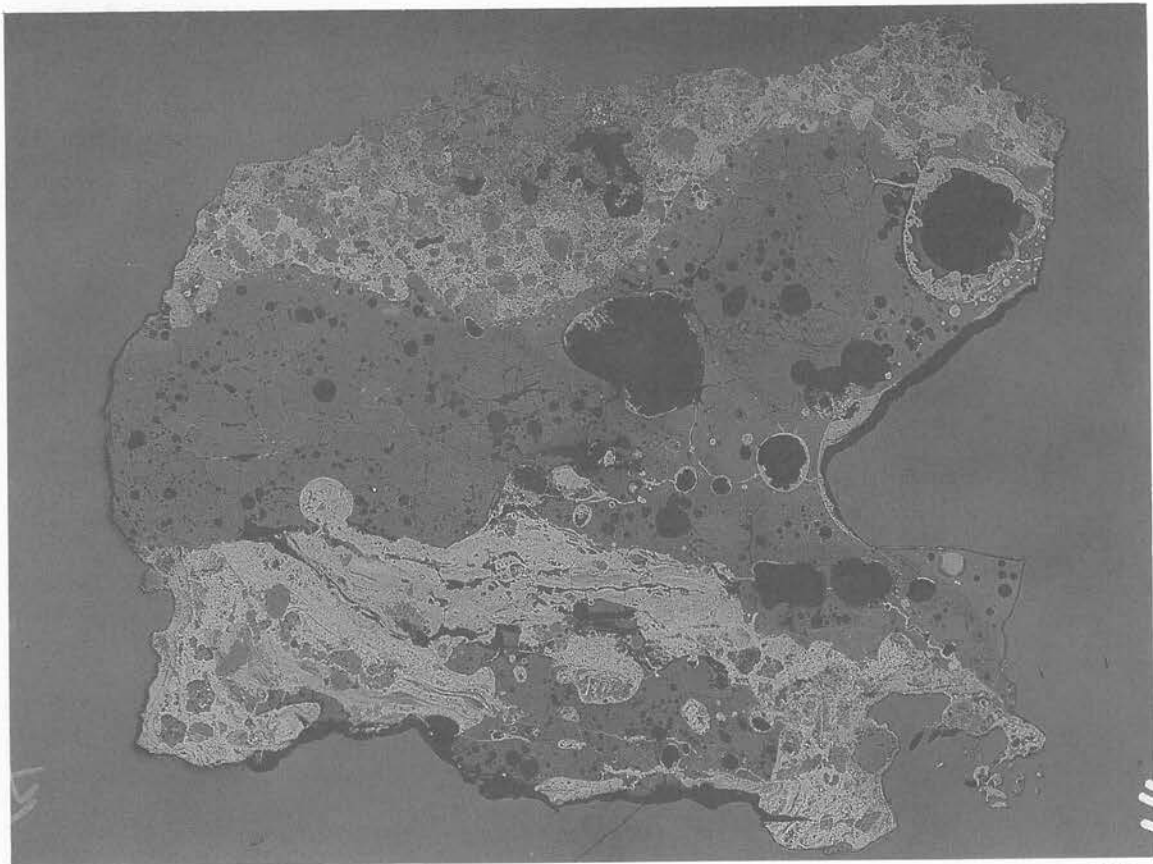
×75

顕微鏡写真 試料番号21 鉄滓12

金属顕微鏡組織

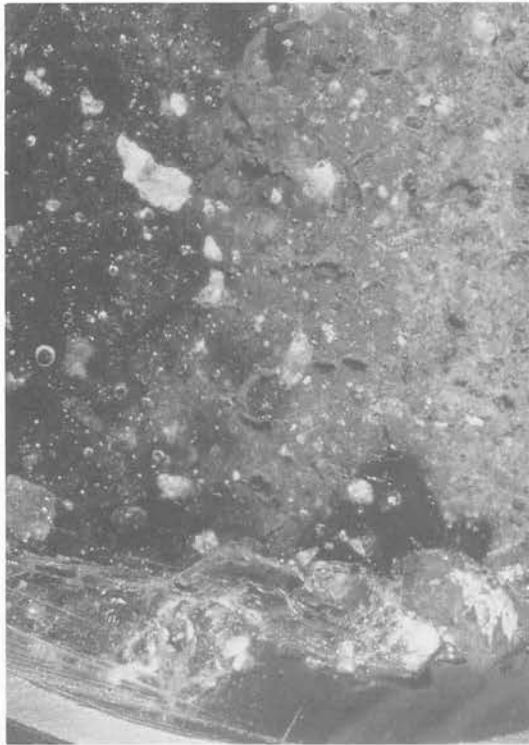


×300

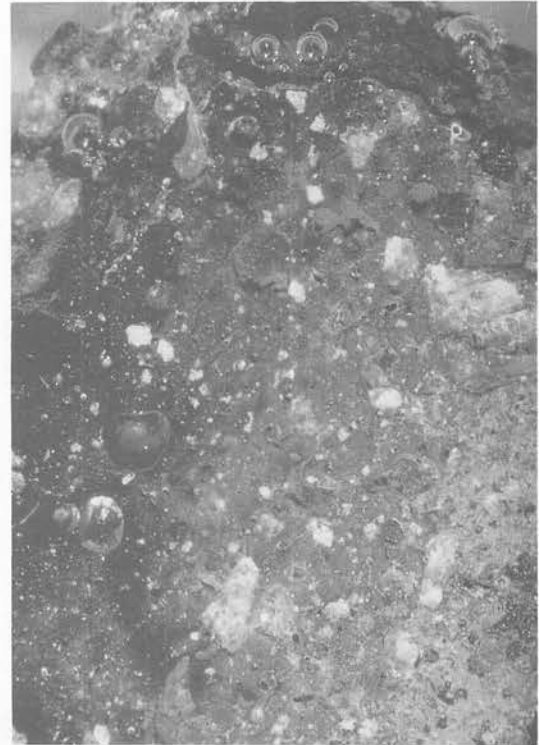


×10

顕微鏡写真 試料番号22 鉄滓13

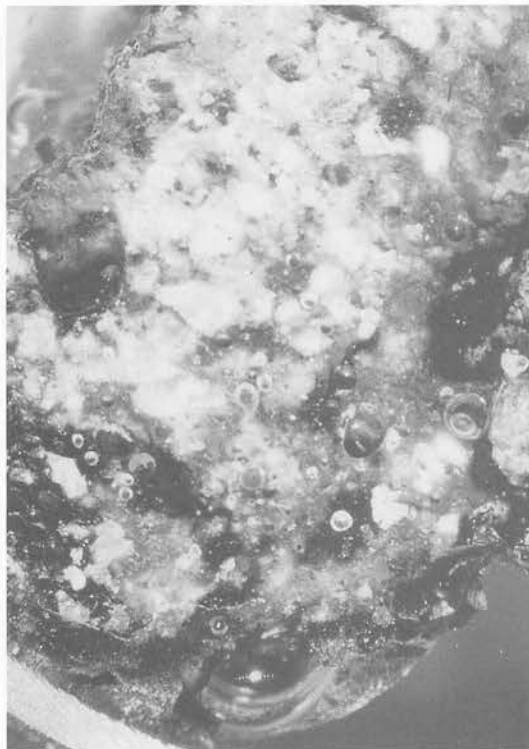


×7.5



×7.5

試料番号23 羽口 (実体顕微鏡写真)

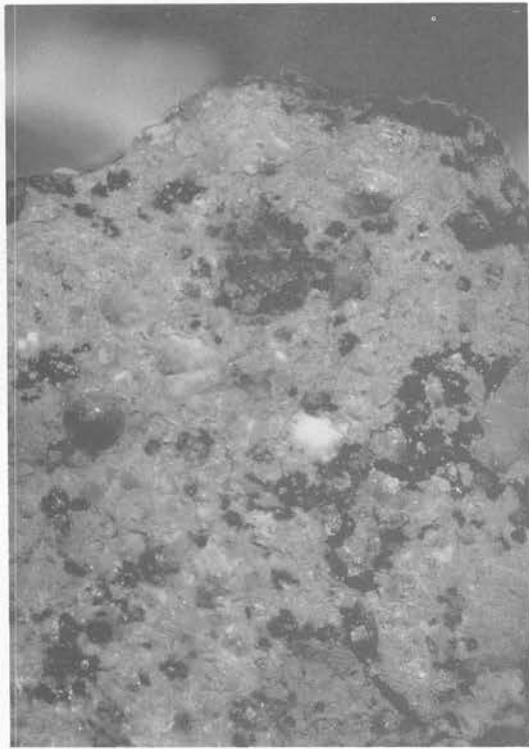


×7.5



×7.5

試料番号24 炉壁 1 (実体顕微鏡写真)

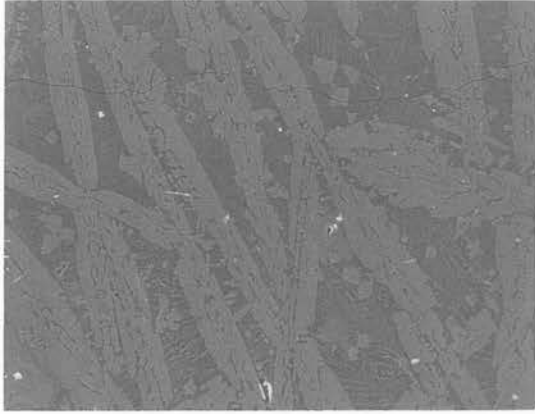


×7.5

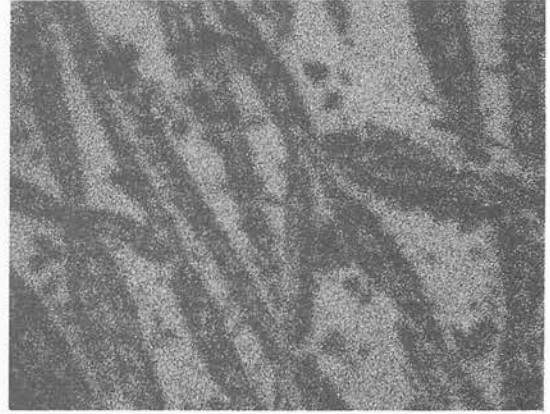
顕微鏡写真 試料番号25 炉壁 2 (実体顕微鏡写真)



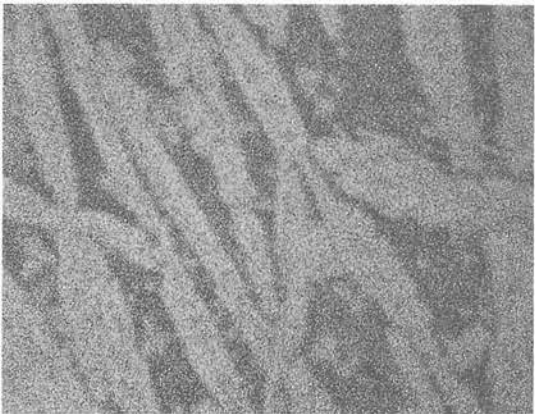
×7.5



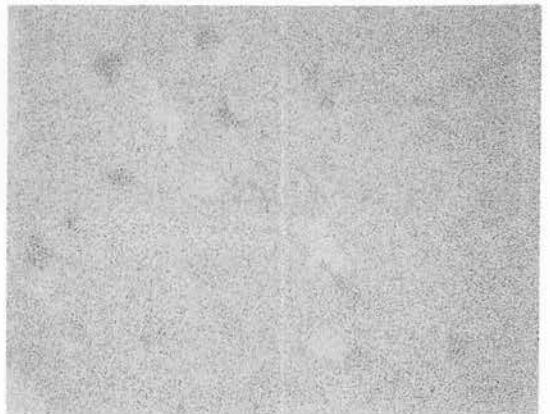
SE



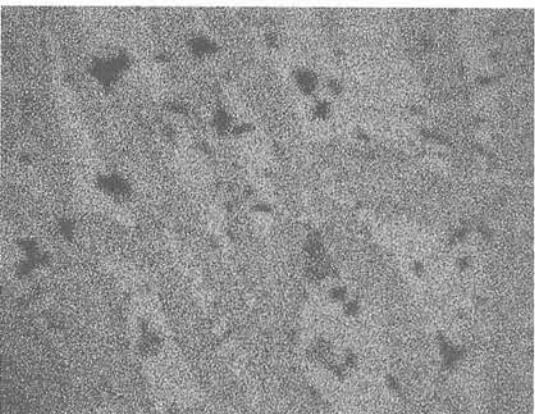
Ca



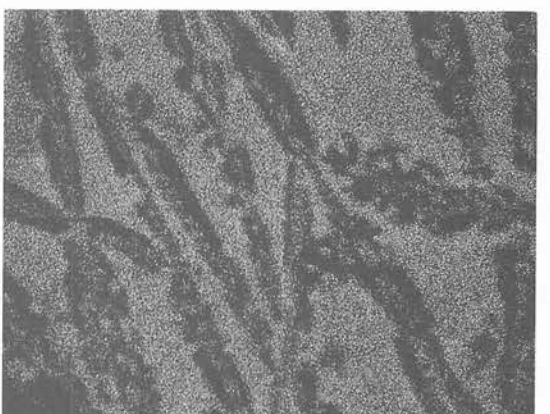
Fe



O



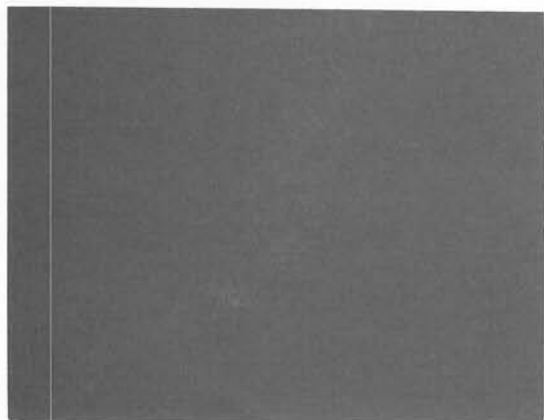
Si



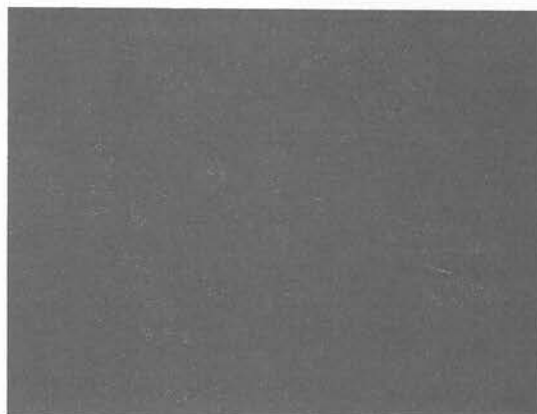
Al

ERMAによる面分析結果(1) 試料番号16 鉄滓7

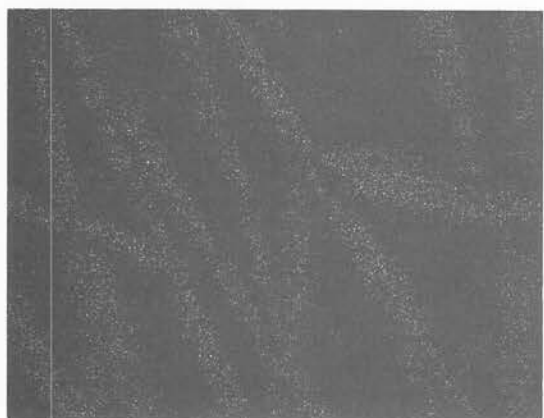
×300  25μm



S



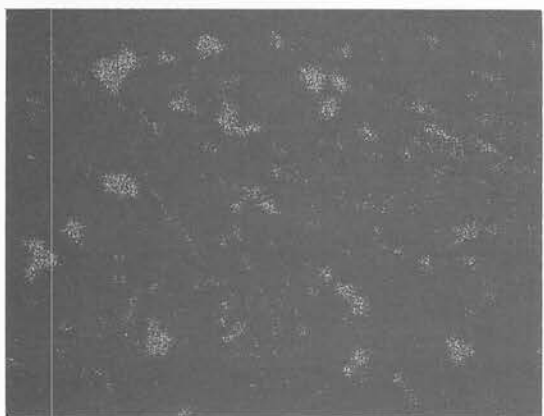
P



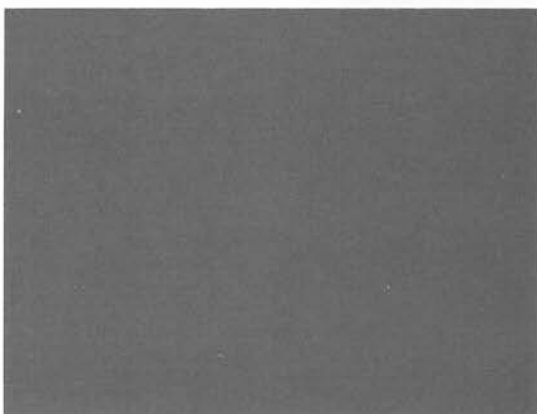
Mg



V



Ti



Cu

ERMAによる面分析結果(2) 試料番号16 鉄滓7

×300  25μm

耐火度試験結果〔山ノ内Ⅲ遺跡〕

試料番号	耐火度(SK)	色調	膨張	試験錐の状況
23 羽口1	9 ⁺	茶褐色	普通	普通
24 炉壁1	9 ⁺	茶褐色	普通	普通
24 炉壁2	9 ⁻	茶褐色	普通	普通
試験条件：酸素プロパン炉法				

ゼーゲルコーン温度比較表

温度(°C)	コーン番号	温度(°C)	コーン番号	温度(°C)	コーン番号	温度(°C)	コーン番号
600	022	940	08 a		3		23
650	021		08	1160	4 a	1580	26
670	020	960	07 a		4	1610	27
690	019		07	1180	5 a	1630	28
710	018	980	06 a		5	1650	29
730	017		06	1200	6 a	1670	30
750	016	1000	05 a		6	1690	31½
790	015 a		05	1230	7		31
	015	1020	04 a	1250	8	1710	32½
815	014 a		04	1280	9		32
	014	1040	03 a	1300	10	1730	33
835	013 a		03	1320	11	1750	34
	013	1060	02 a	1350	12	1770	35
855	012 a		02	1380	13	1790	36
	012	1080	01 a	1410	14	1825	37
880	011 a		01	1435	15	1850	38
	011	1100	1 a	1460	16	1880	39
900	010 a		1	1480	17	1920	40
	010	1120	2 a	1500	18	1960	41
920	09 a		2	1520	19	2000	42
	09	1140	3 a	1530	20		

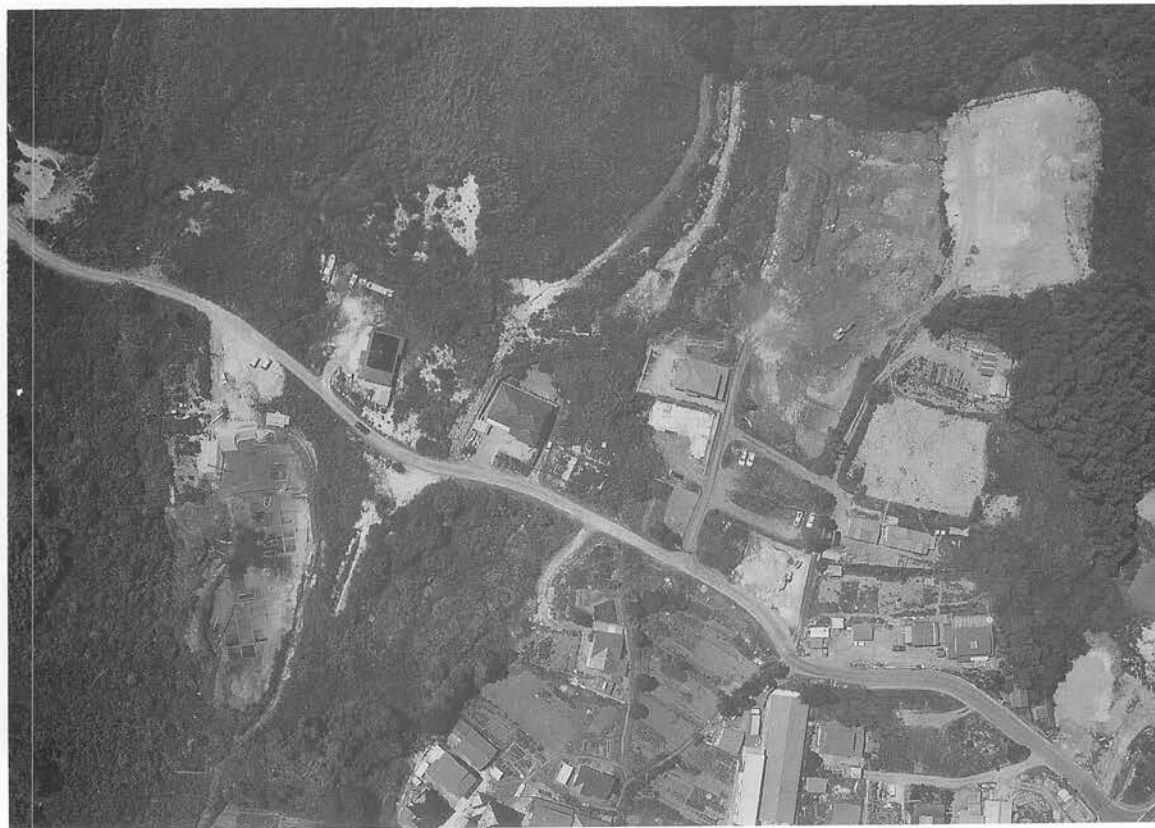
注；コーンでは正確な温度の測定はできない。

耐火度の数値を概略の温度で示す場合のみ上表の温度が使われる。

写 真 图 版



平成5年度調査



平成6年度調査

写真図版1 調査区全景（航空写真）



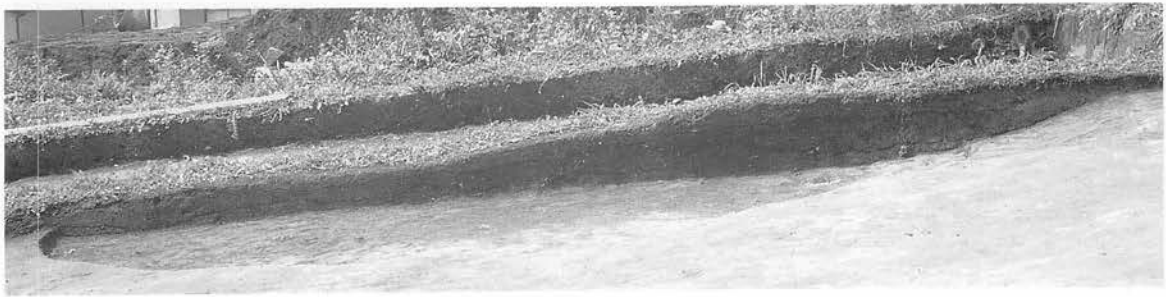
遺跡遠景（船越湾上空より）



遺跡土層



平面



断面



炉平面



炉断面

写真図版3 VIB 8 j 住居跡



平面



断面

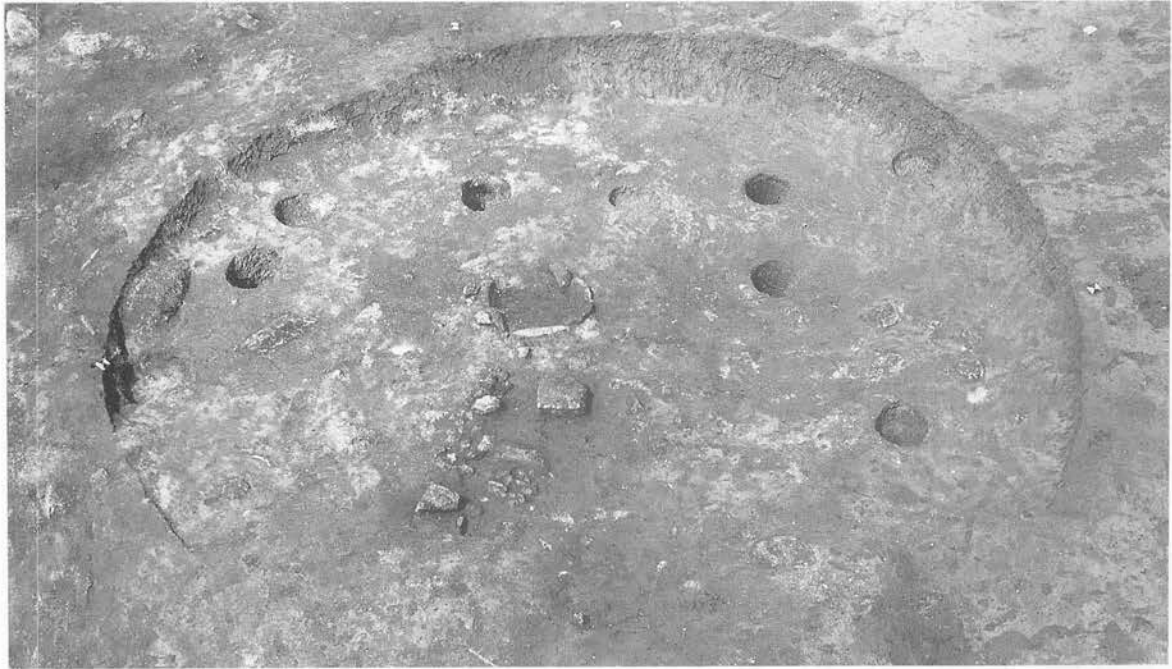


炉平面

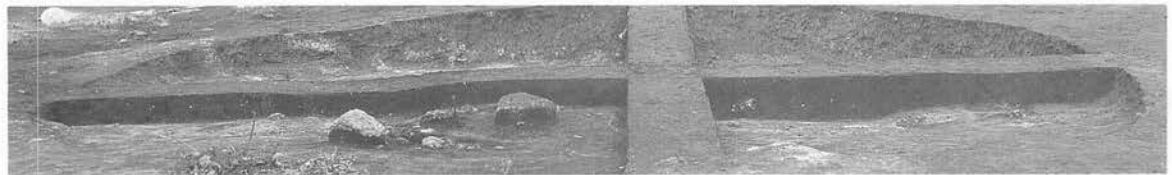


炉断面

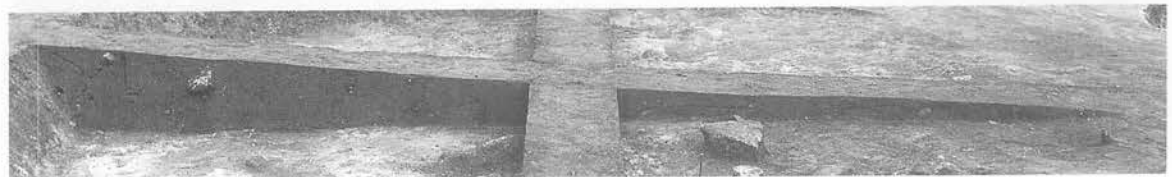
写真図版 4 VIB 0 j 住居跡



平面



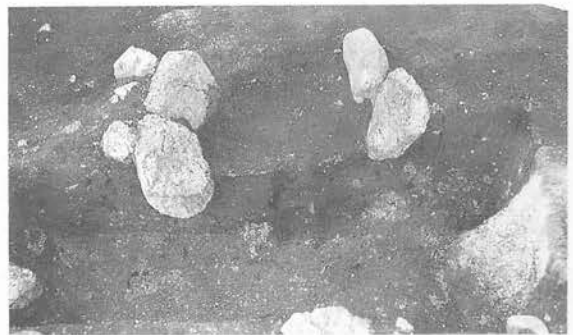
断面（南から北）



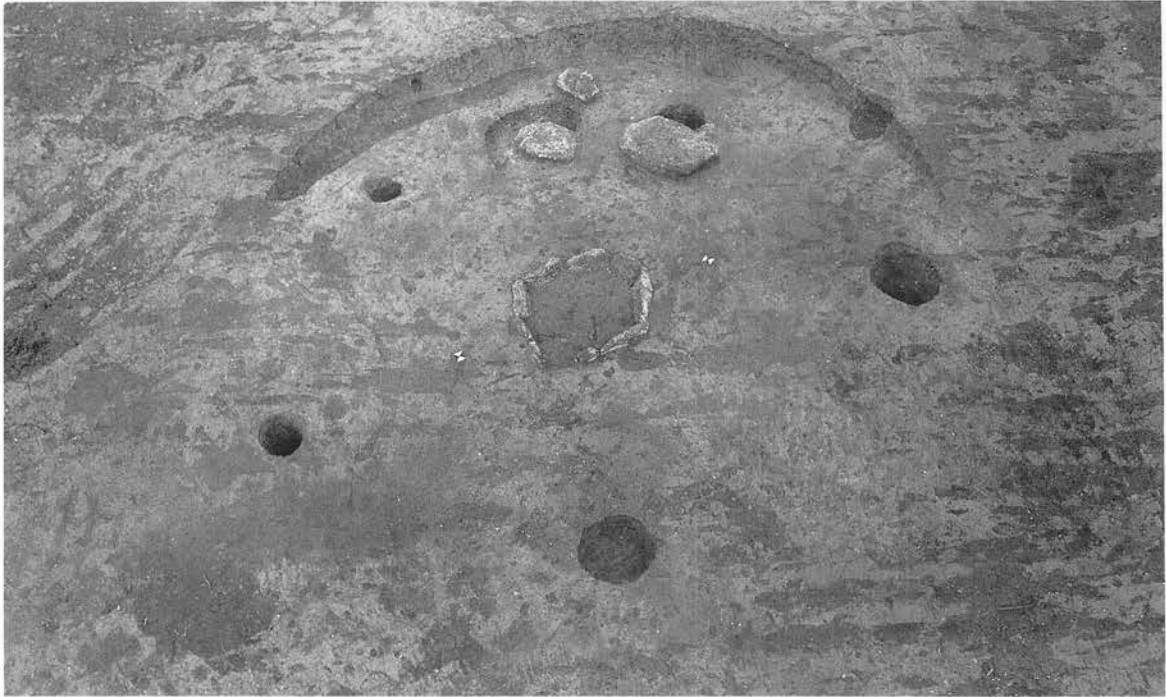
断面（西から東）



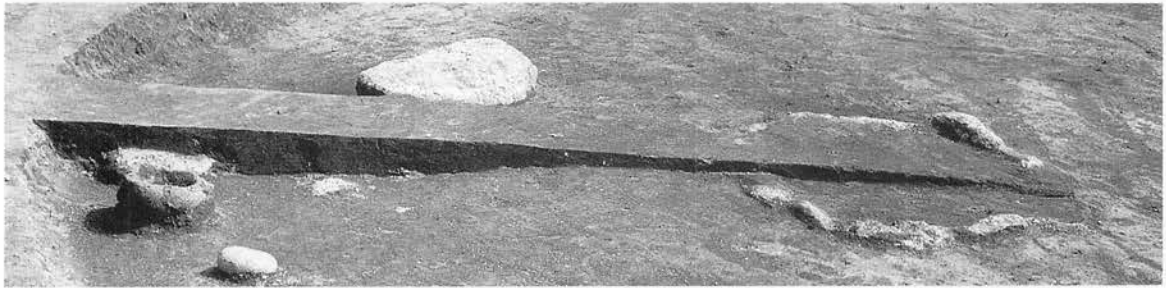
炉平面



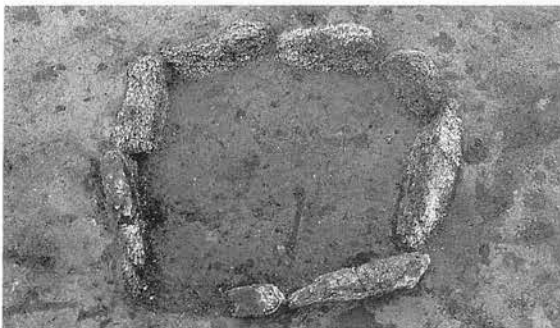
炉断面



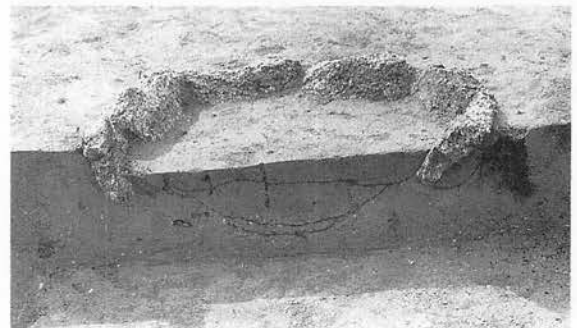
平面



断面



炉平面



炉断面

写真図版 6 VIC 7 d 住居跡



平面



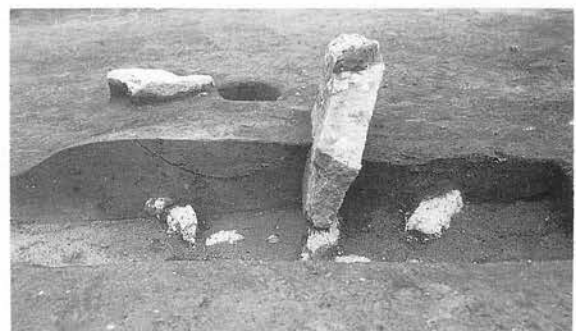
断面（北から南）



断面（西から東）

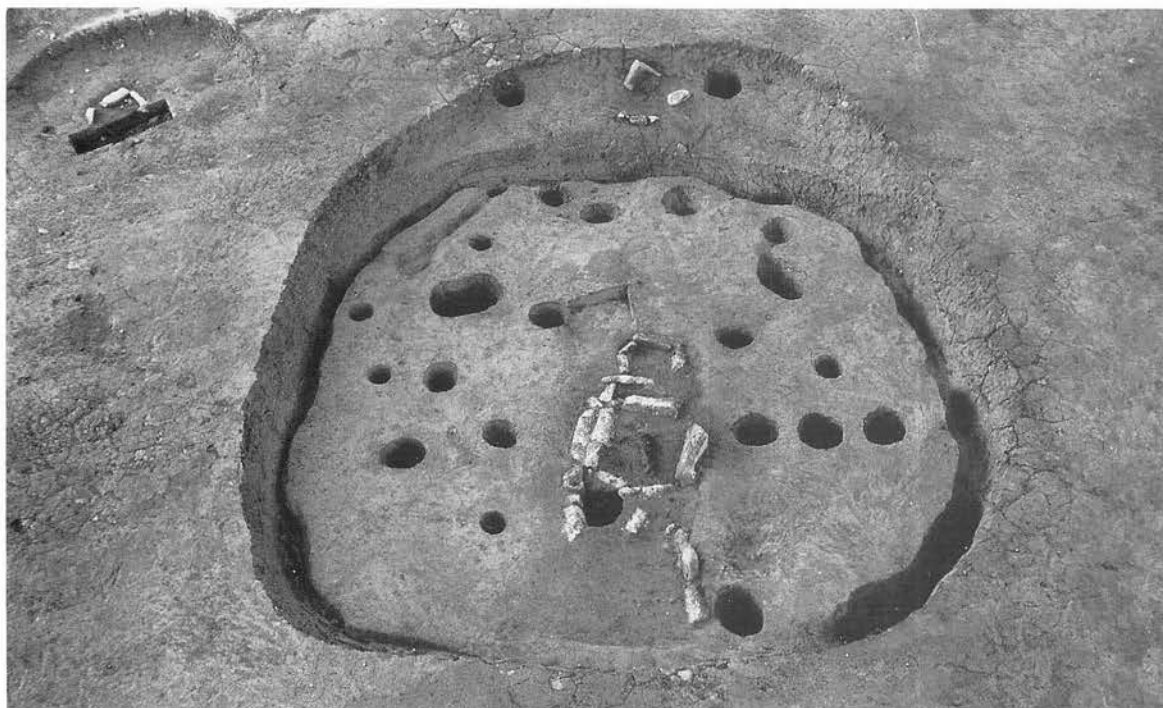


炉平面



炉断面

写真図版7 VIC 0 a - 1 住居跡



平面



断面



炉平面

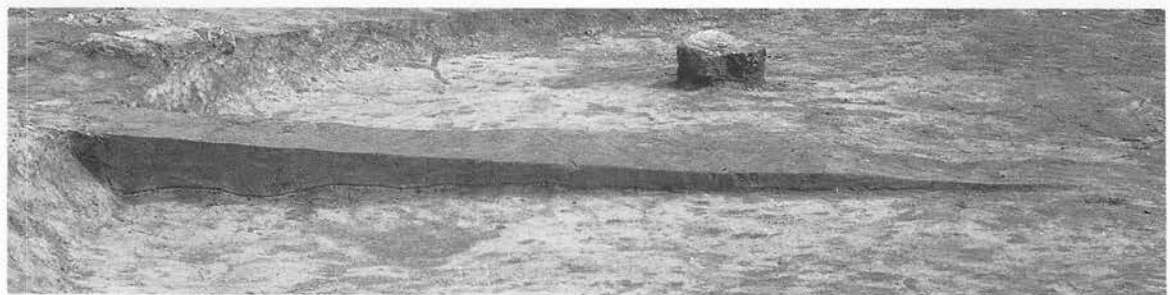


炉断面

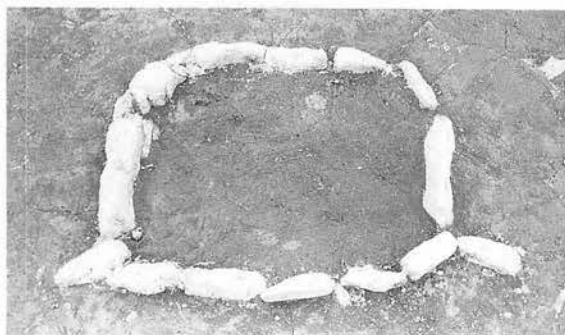
写真図版 8 VIC 0 a - 2 住居跡



平面



断面



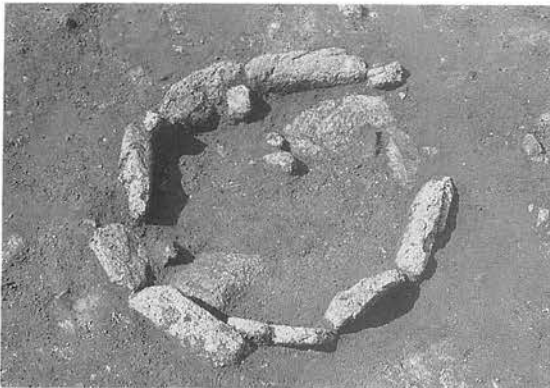
炉平面



炉断面



平面



石囲炉



炉石設置状況



炉断面

写真図版10 VIIA 1 e - 1 住居跡



平面



埋土断面



調査風景

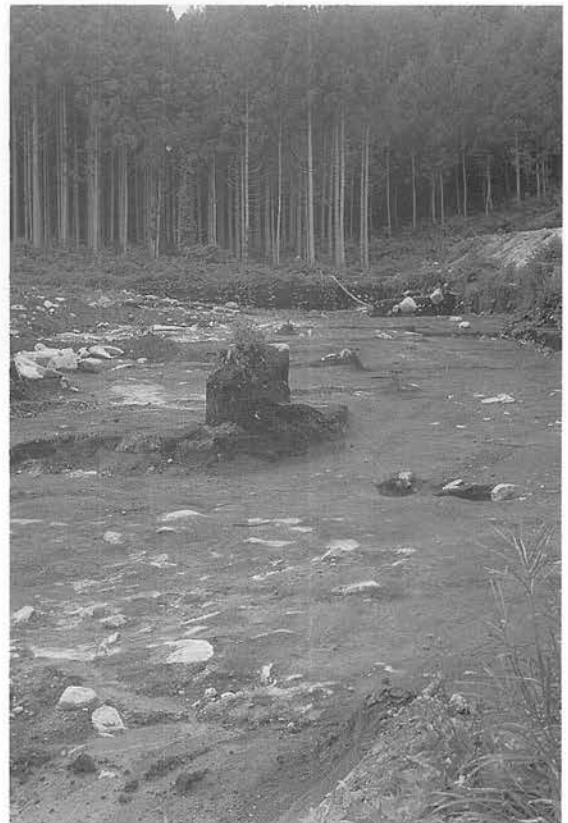
写真図版11 VII A 1 e - 2 住居跡



平面



炉断面



現場風景（調査区中央谷筋）

写真図版12 VII A 3 i 住居跡



平面



埋土断面



炉平面

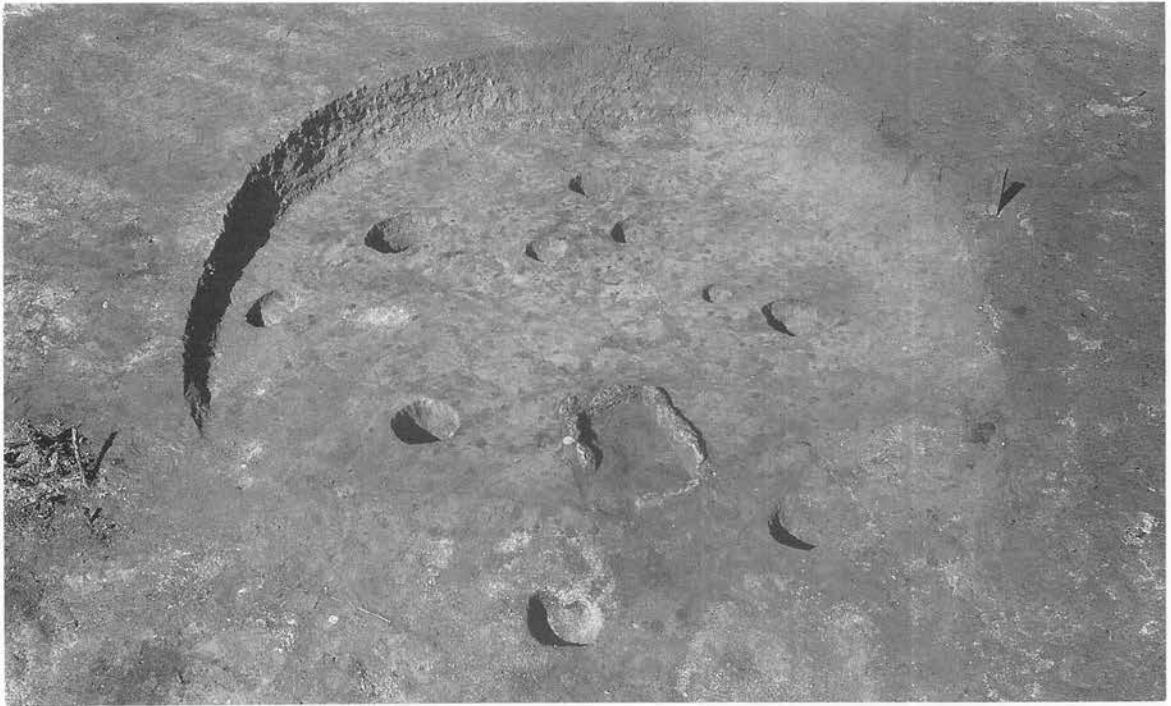


炉断面（北から南）



炉断面（西から東）

写真図版13 VII A 8 i 住居跡



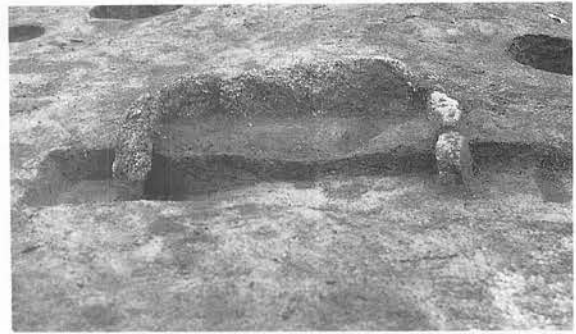
平面



埋土断面

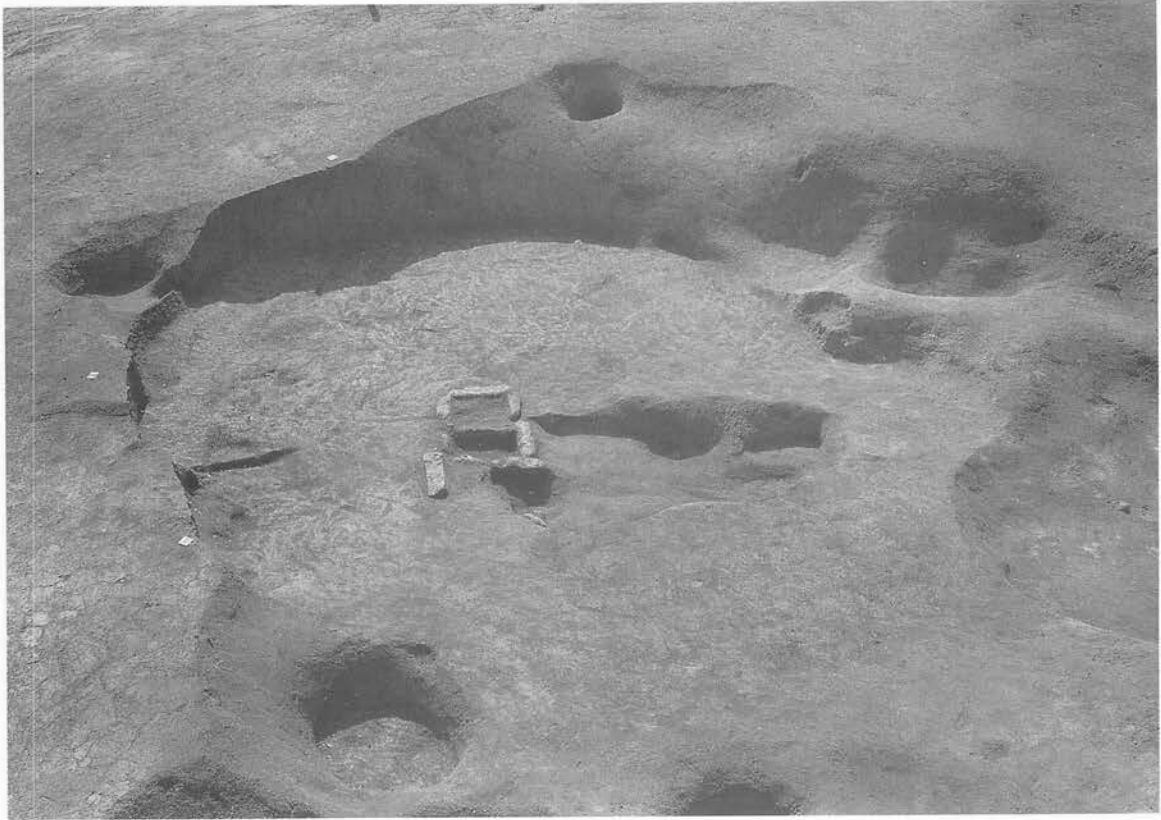


炉平面

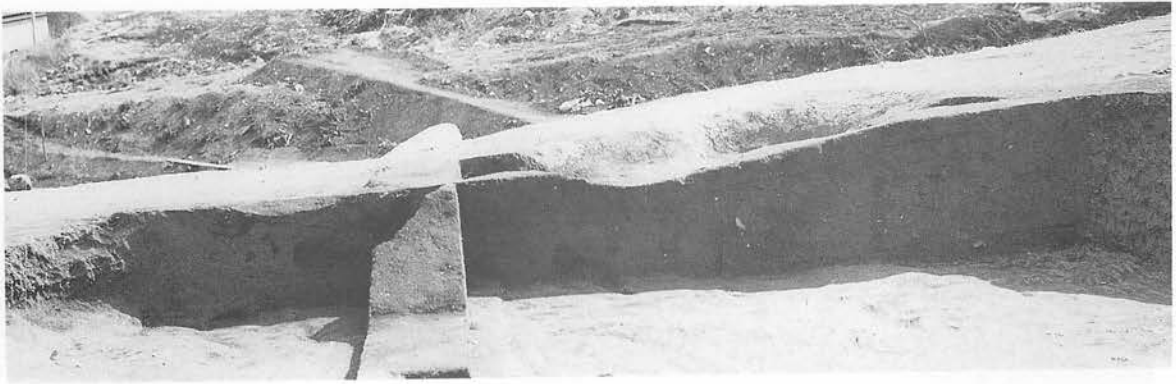


炉断面

写真図版14 VIIA 0 c 住居跡



平面



埋土断面



炉平面

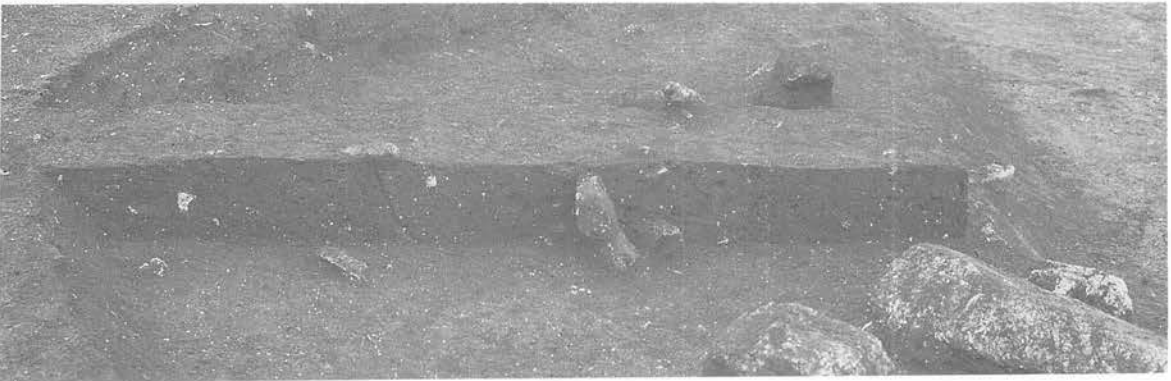


炉断面

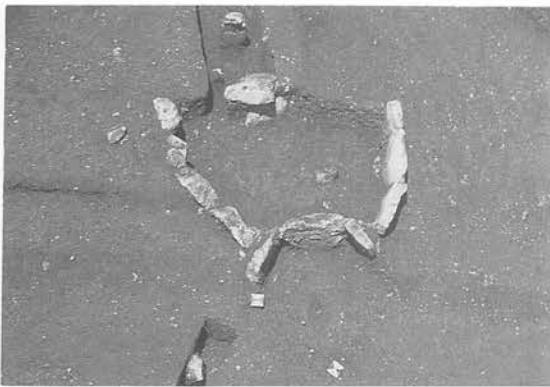
写真図版15 VII A 0 d 住居跡



平面



埋土断面



炉平面

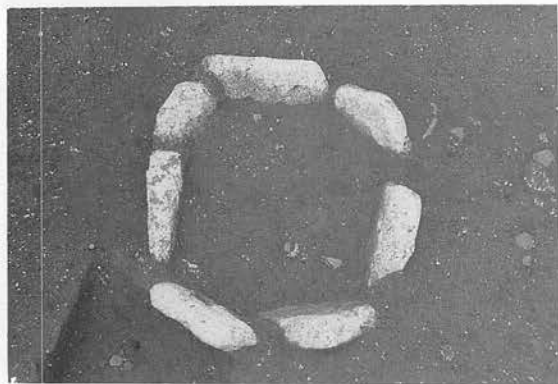


炉断面

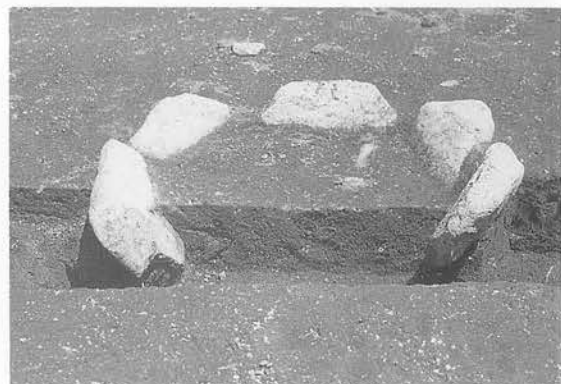
写真図版16 VII B 2 a - 1 住居跡



平面



炉平面



炉断面

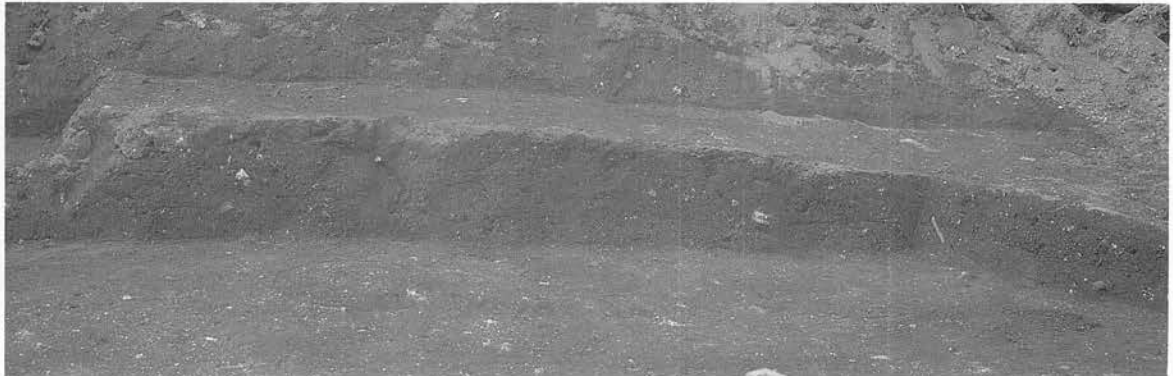


調査風景（飛び地）

写真図版17 VII B 2 a - 2 住居跡



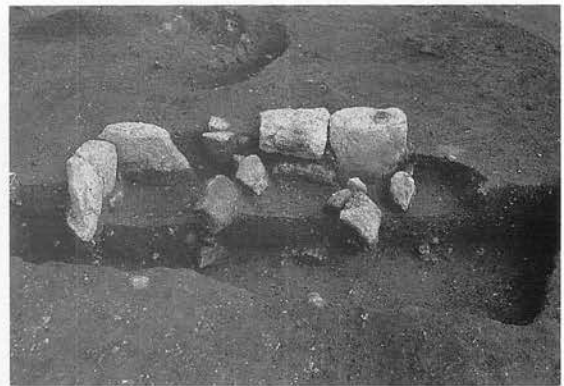
平面



埋土断面



炉平面

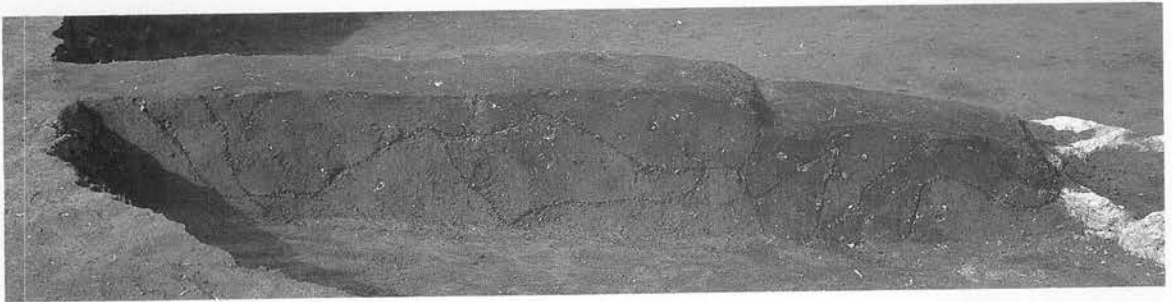


炉断面

写真図版18 VII B 3 a 住居跡



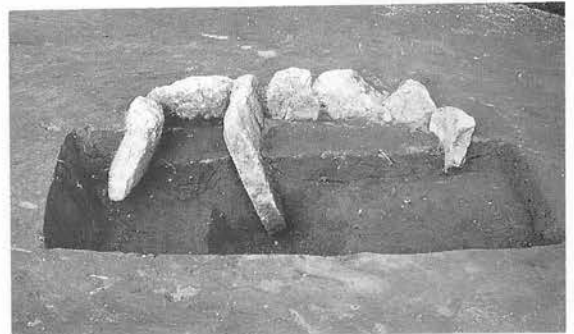
平面



断面

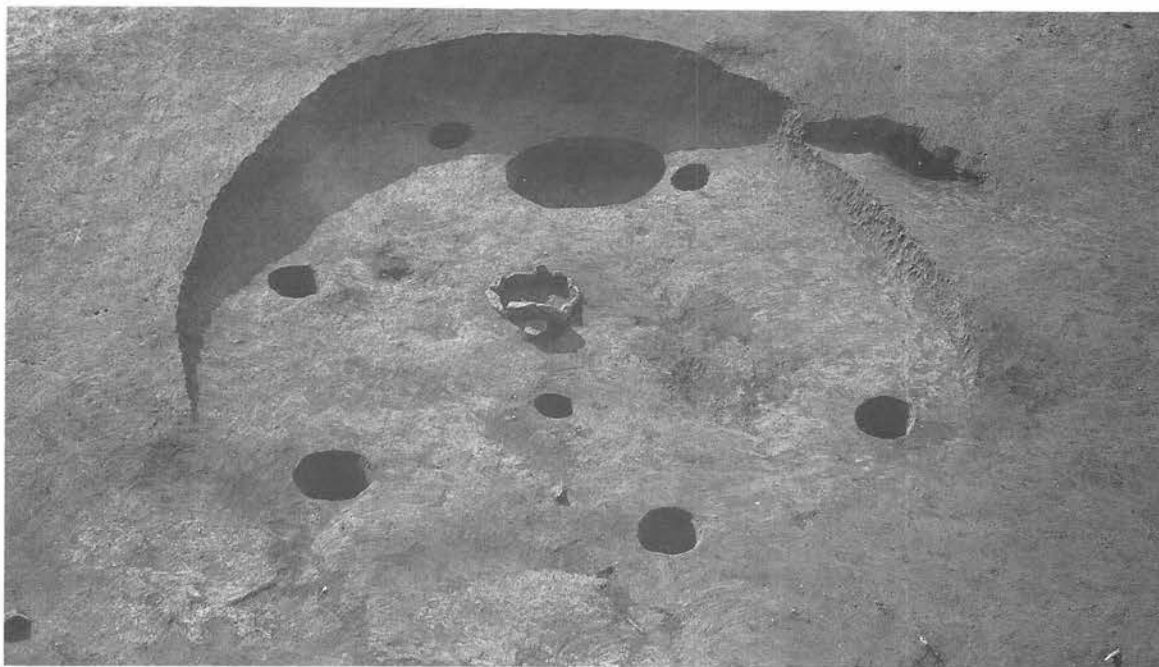


炉平面



炉断面

写真図版19 VII B 8 b 住居跡



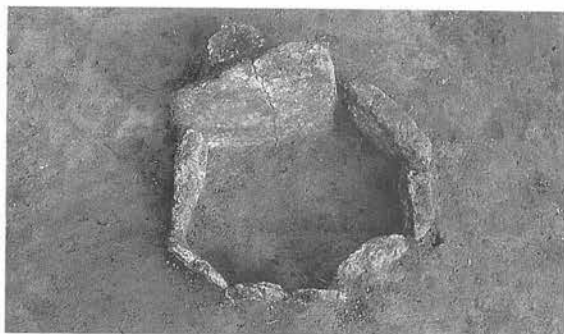
平面



断面（北から南）



断面（西から東）



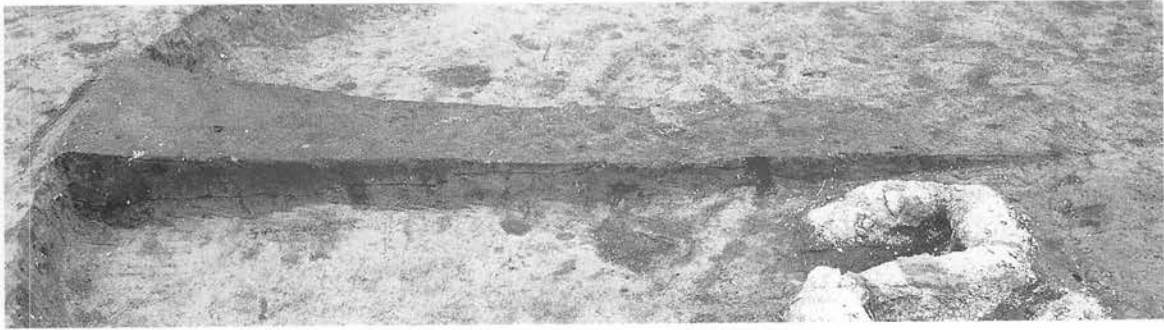
炉平面



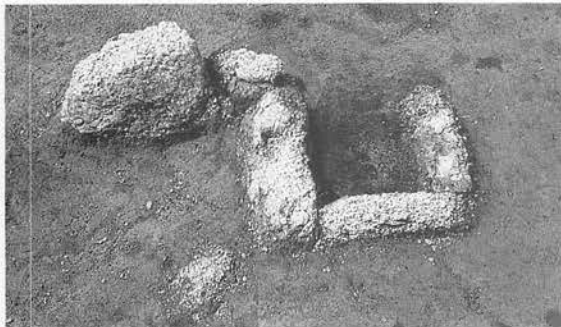
炉断面



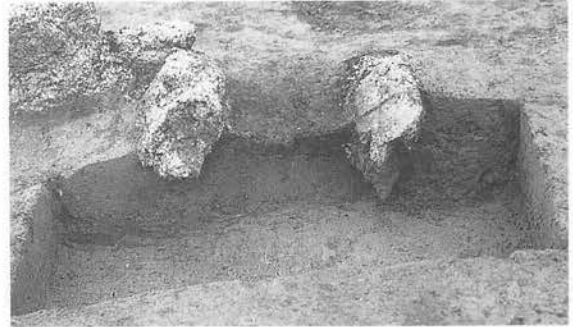
平面



断面

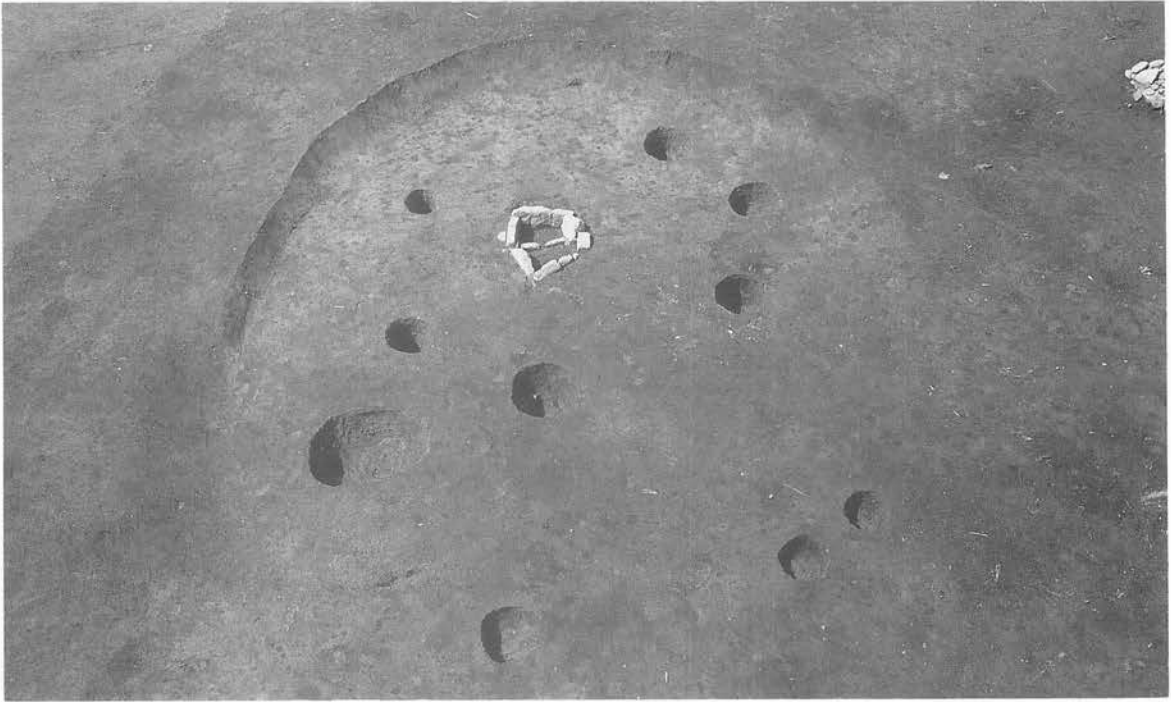


炉平面

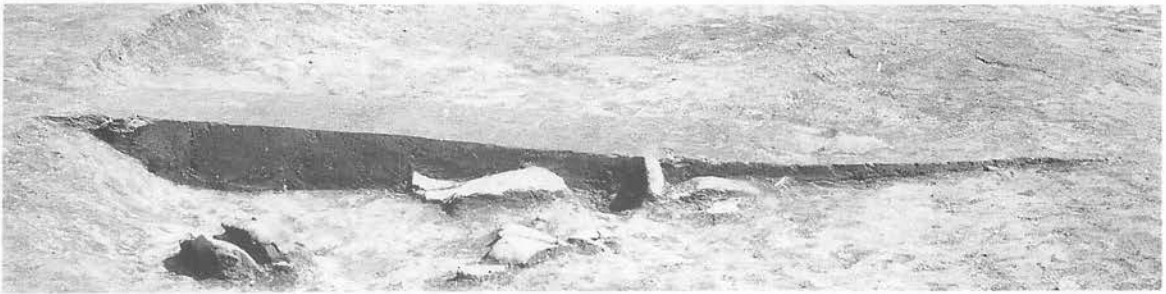


炉断面

写真図版21 VII C 1 b 住居跡



平面



断面



炉平面

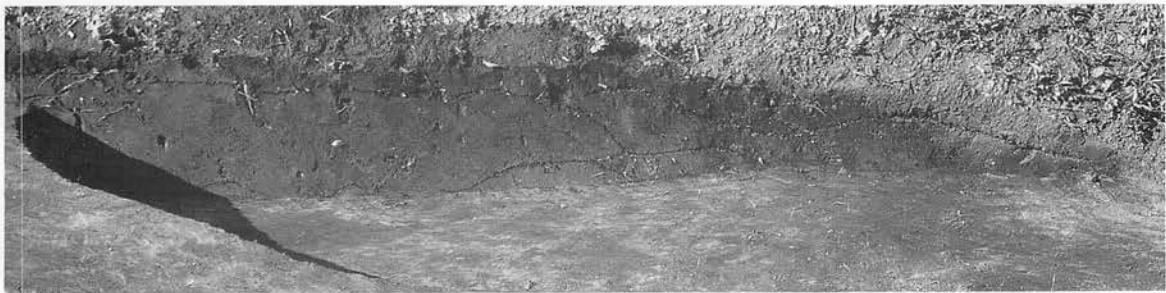


炉断面

写真図版22 VII C 3 f 住居跡



平面



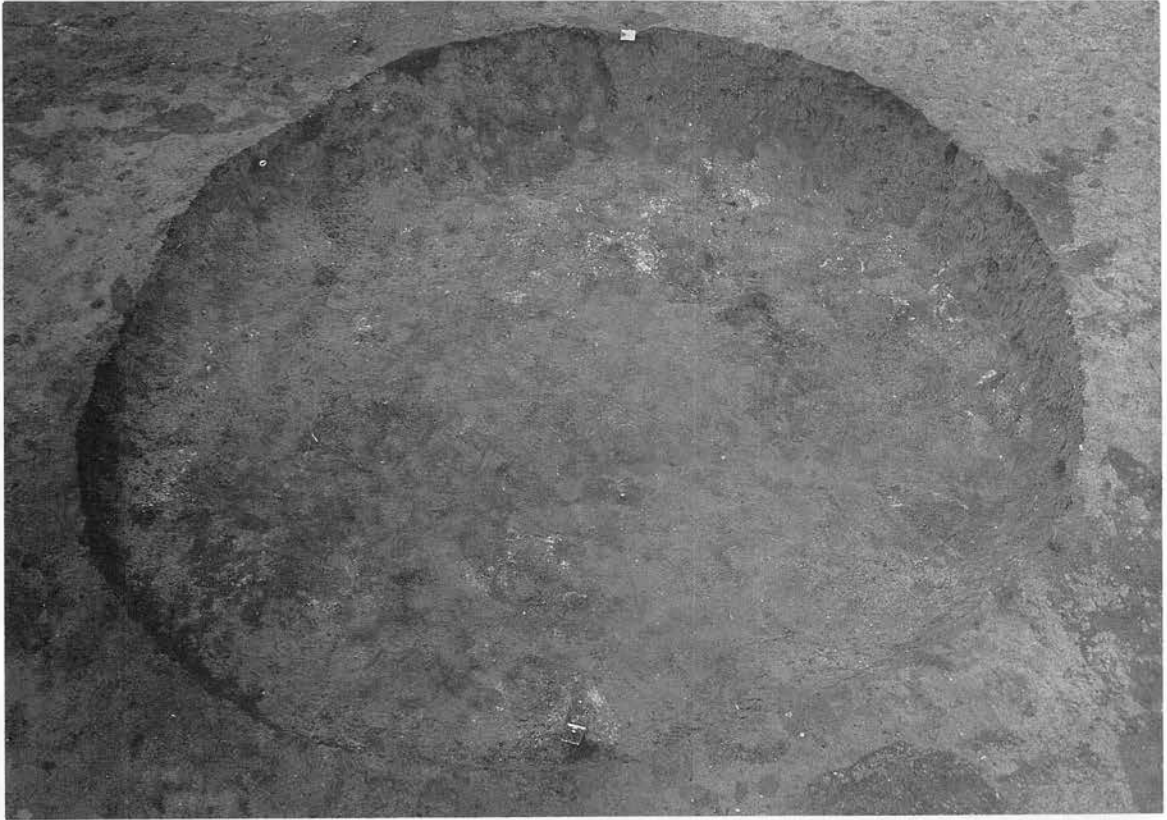
断面



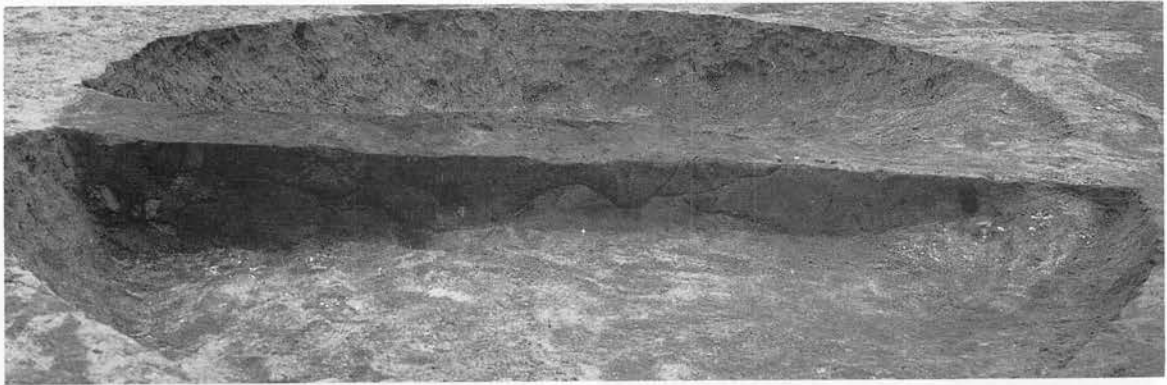
調査区北側尾根上の住居
より船越湾南側を望む



飛び地調査区



平面

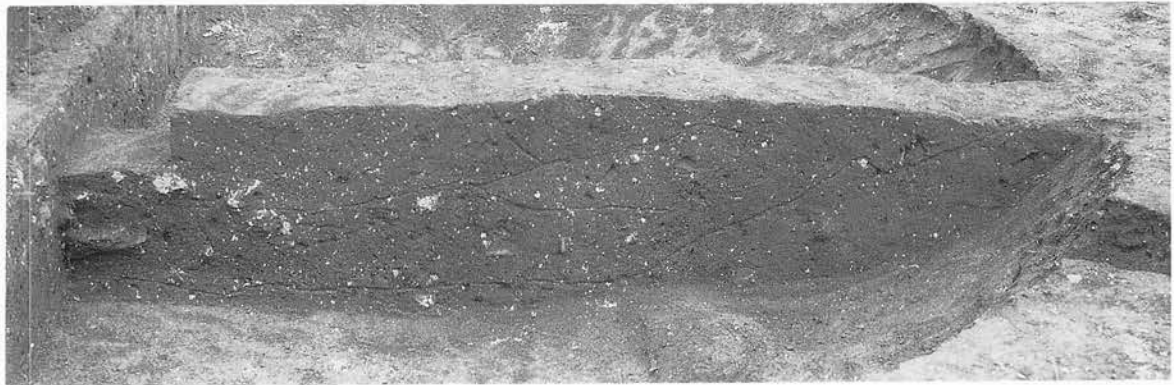


断面

写真図版24 VIC 7 b 豎穴状遺構



平面

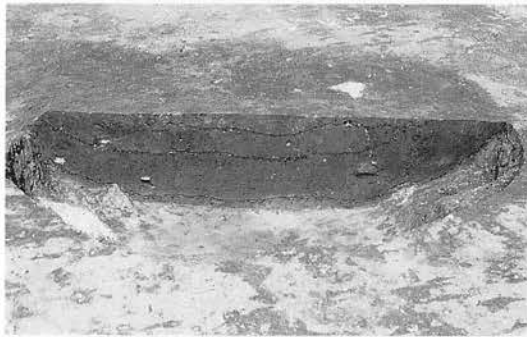


埋土断面 (B - B')



埋土断面 (A - A')

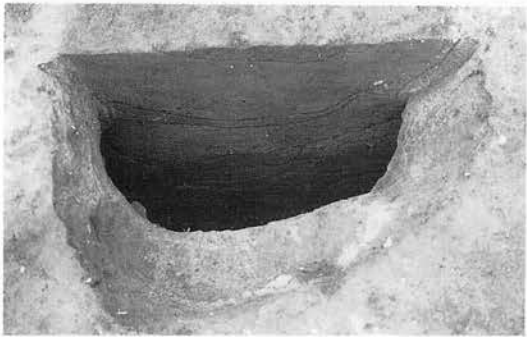
写真図版25 VII B 1 c 竖穴状遺構



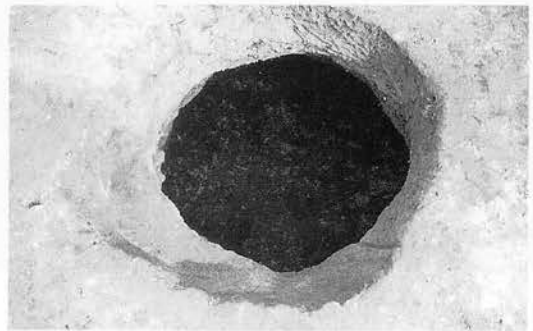
VIC9b 土坑断面



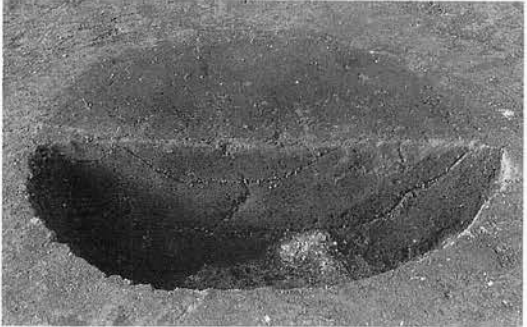
VIC9b 土坑平面



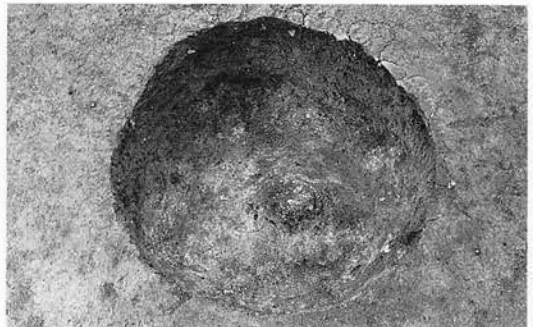
VIIA8i 土坑断面



VIIA8Ai 土坑平面



VIIA0f 土坑断面



VIIA0f 土坑平面



VIIA0i 土坑断面

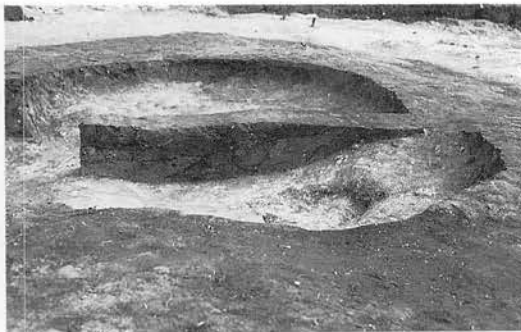
写真図版26 土坑(縄文時代)(1)



VII B7b-1 土坑断面



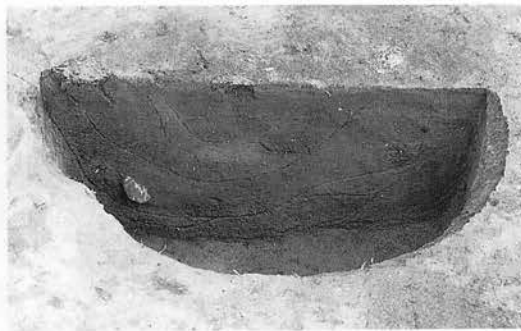
VII B7b-1 土坑平面



VII B7b-2 土坑断面



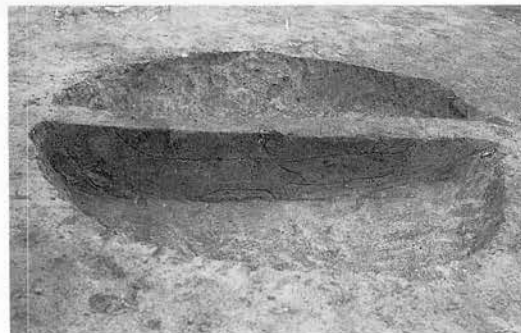
VII B7b-2 土坑平面



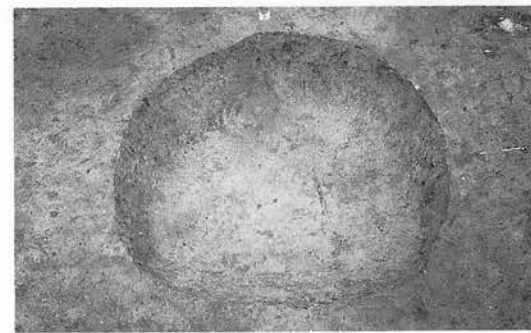
VII C1a 土坑断面



VII C1a 土坑平面

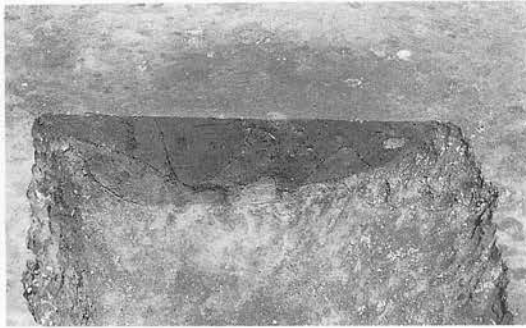


VII C1c 土坑断面

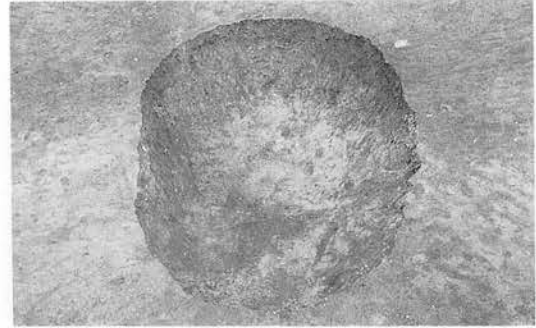


VII C1c 土坑平面

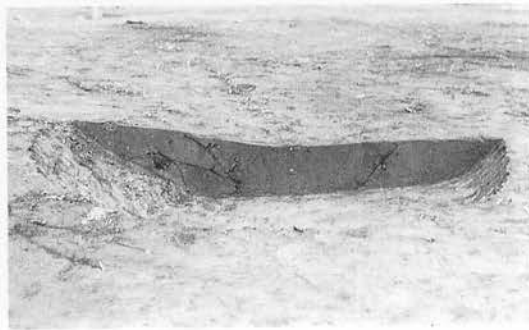
写真図版27 土坑(縄文時代)(2)



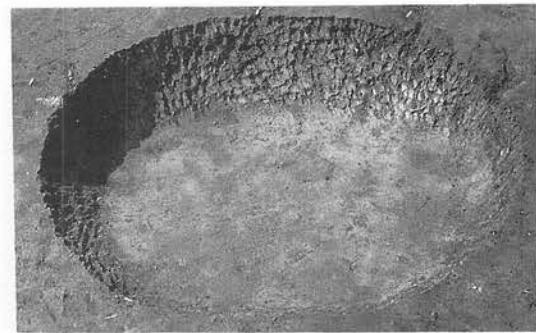
VIIIC1d 土坑断面



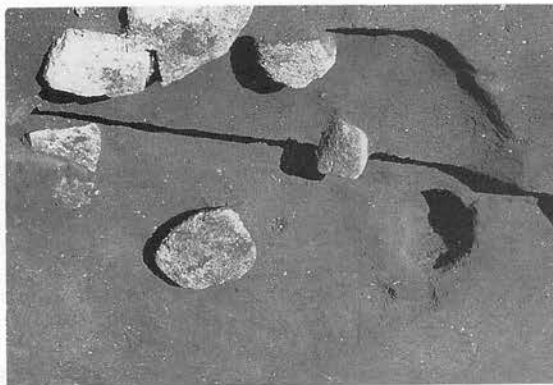
VIIIC1d 土坑平面



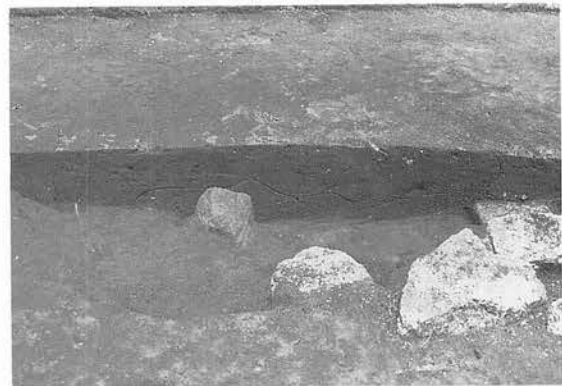
VIIIC3c 土坑断面



VIIIC3c 土坑平面

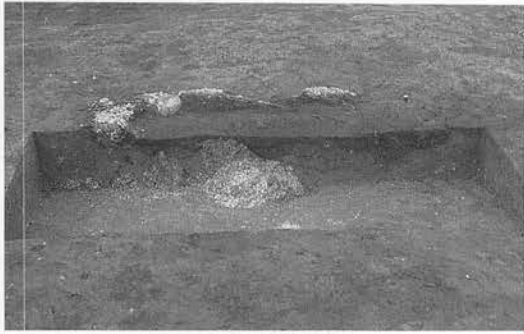


VIB0d 土坑断面

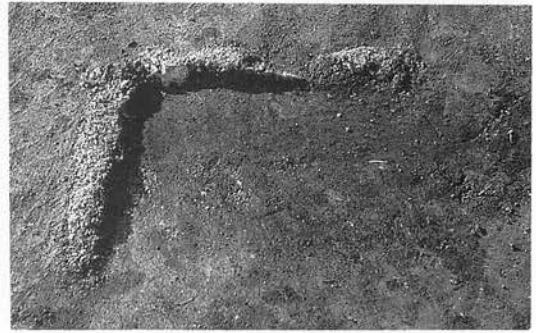


VIB0d 土坑平面

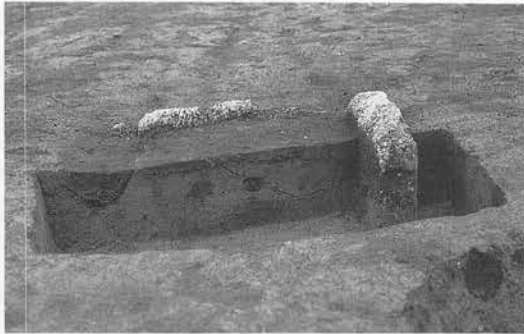
写真図版28 土坑(縄文時代)(3)



VIC7e 炉跡断面



VIC7e 炉跡平面



VIC0b 炉跡断面



VIC0b 炉跡平面



遺跡からみた船越湾
写真図版29 炉跡



VIIA1h 焼土遺構



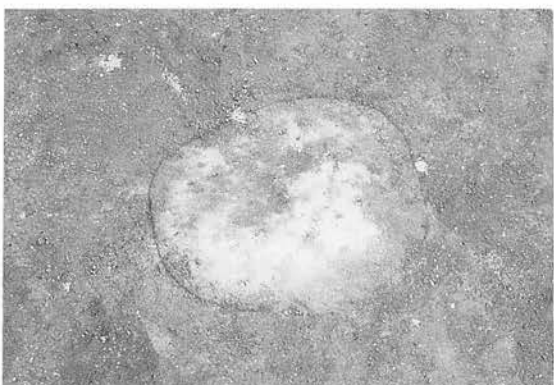
VIIA1h 焼土遺構



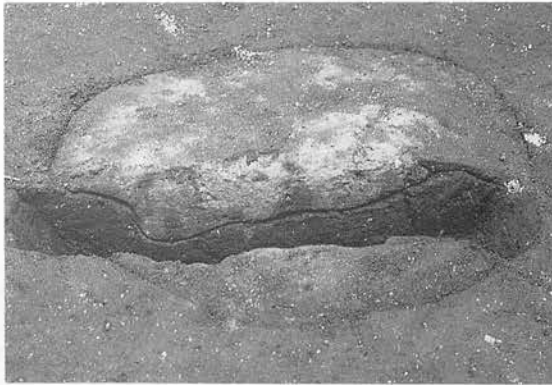
VIB9a-1 焼土遺構平面



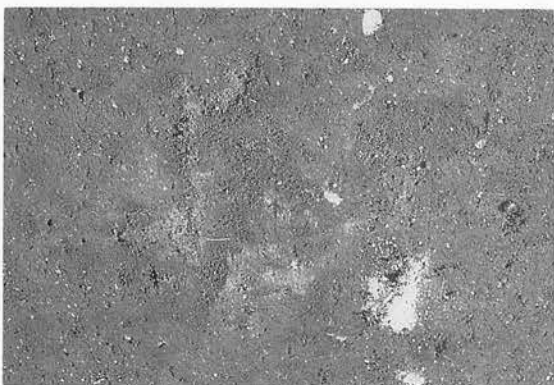
VIB9a-1 焼土遺構断面



VIB9b-1 焼土遺構平面



VIB9b-1 焼土遺構断面



VIB0a-1 焼土遺構平面



VIB0a-1 焼土遺構断面

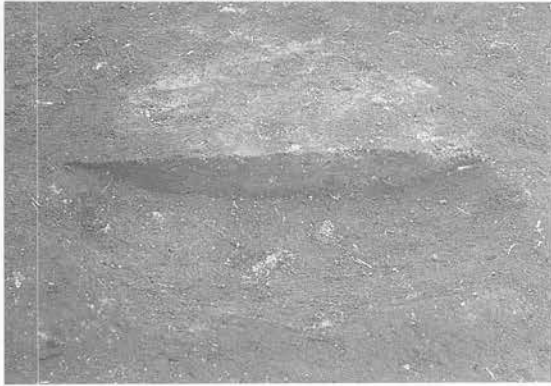
写真図版30 焼土遺構（縄文時代）(1)



VIB0c 焼土遺構平面



VIB0c 焼土遺構断面



VIIA1c 焼土遺構断面



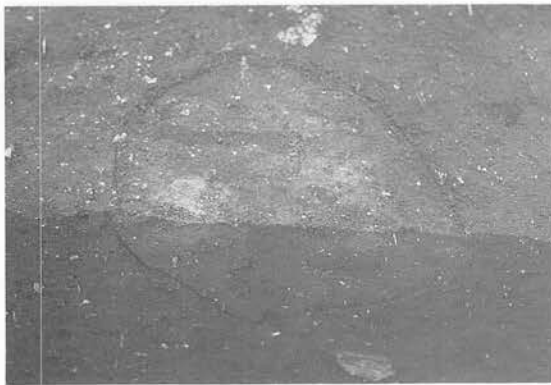
VIIA2j-4 焼土遺構断面



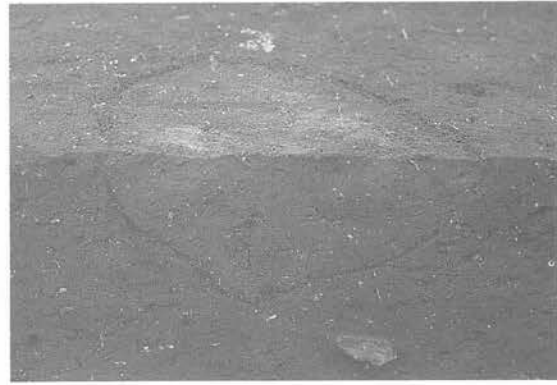
VIIA1j 焼土遺構平面



VIIA1j 焼土遺構断面



VIIA2i-1 焼土遺構平面



VIIA2i-1 焼土遺構断面

写真図版31 焼土遺構（縄文時代）(2)



VIIA2i-2、-3 焼土遺構平面



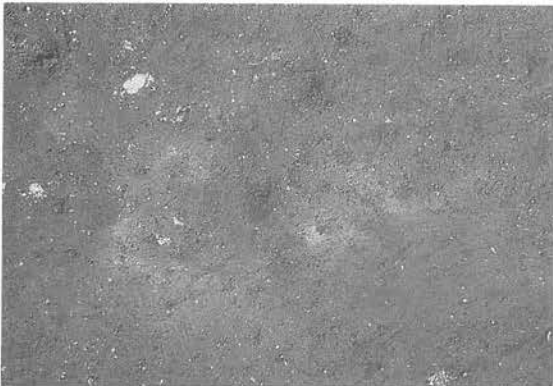
VIIA2i-2、-3 焼土遺構断面



VIIA2j-1 焼土遺構平面



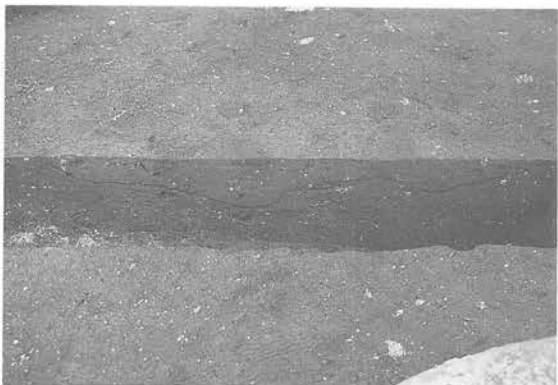
VIIA2j-1 焼土遺構断面



VIIA2j-3 焼土遺構平面



VIIA2j-3 焼土遺構断面

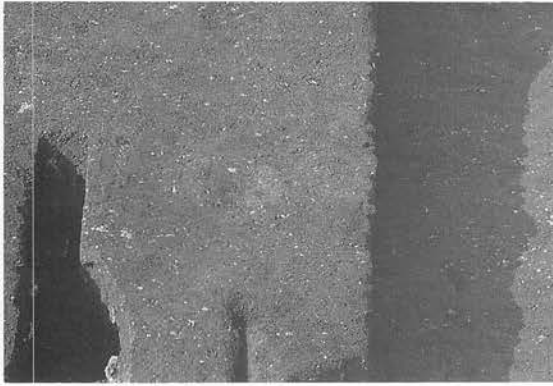


VIIA3g-1 焼土遺構断面



VIIA3h-1 焼土遺構断面

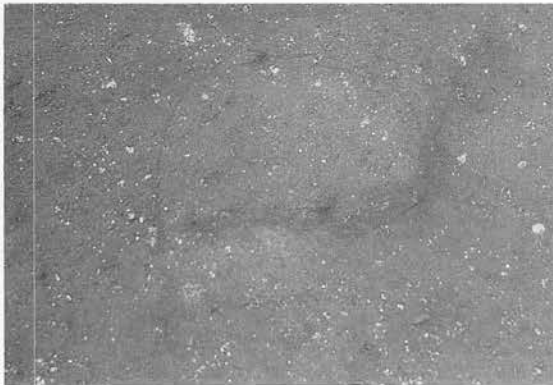
写真図版32 焼土遺構（縄文時代）(3)



VIIA3h-2 焼土遺構平面



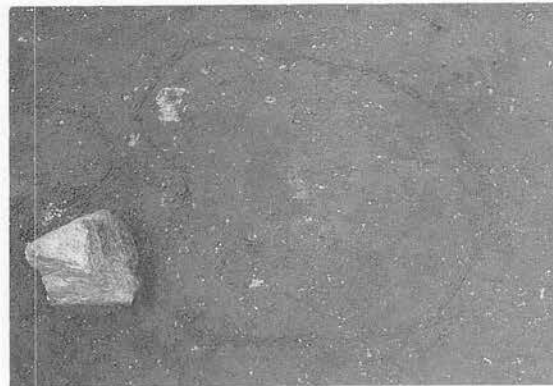
VIIA3h-2 焼土遺断面



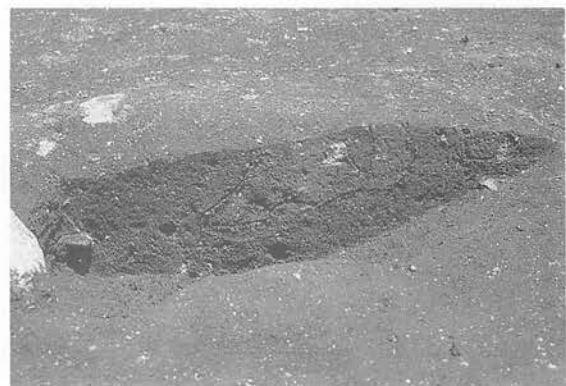
VIIA3i-1 焼土遺構平面



VIIA3i-1 焼土遺断面



VIIA3i-4 焼土遺構平面



VIIA3i-4 焼土遺断面



VIIA3i-5 焼土遺構平面

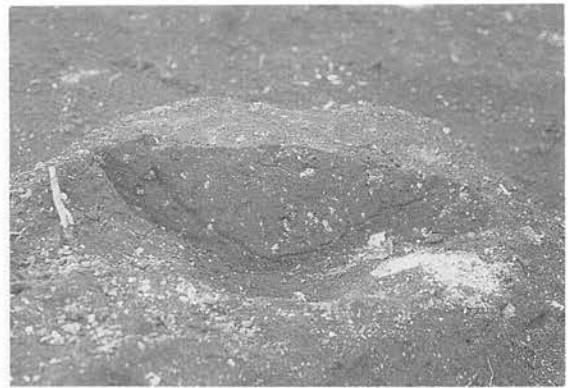


VIIA3i-5 焼土遺断面

写真図版33 焼土遺構（縄文時代）(4)



VIIA3i-6 焼土遺構断面



VIIA3i-7 焼土遺構断面



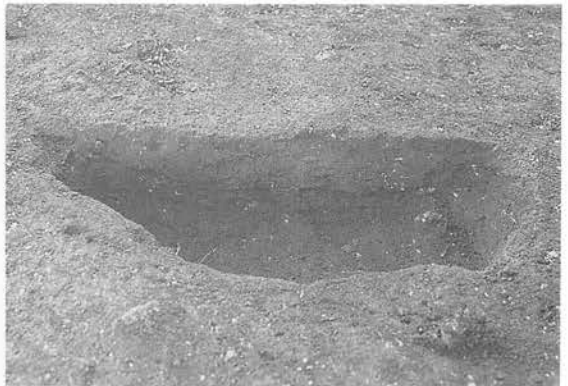
VIIA3j-1 焼土遺構断面



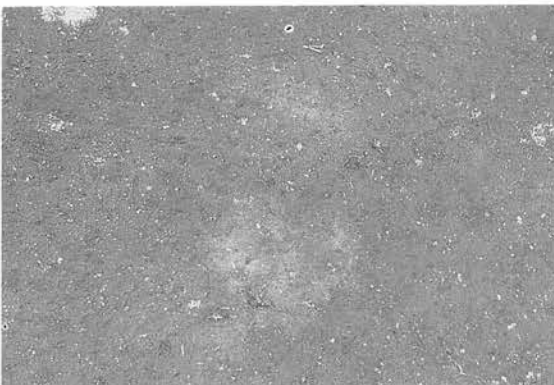
VIIA3j-2 焼土遺構断面



VIIA4d-1 焼土遺構断面



VIIB2b-5 焼土遺構断面



VIIB1a-4 焼土遺構平面



VIIB1a-4 焼土遺構断面

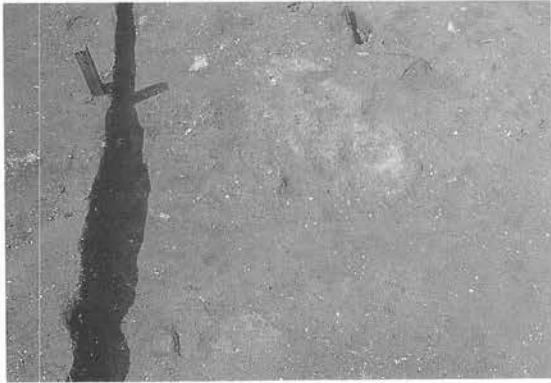
写真図版34 焼土遺構（縄文時代）(5)



VII B1a-5 焼土遺構平面



VII B1a-5 焼土遺構断面



VII B1c-1、-2 焼土遺構平面



VII B1c-2 焼土遺構断面



VII B1c-3 焼土遺構平面



VII B1c-3 焼土遺構断面



VII B2a 焼土遺構平面



VII B2a 焼土遺構断面



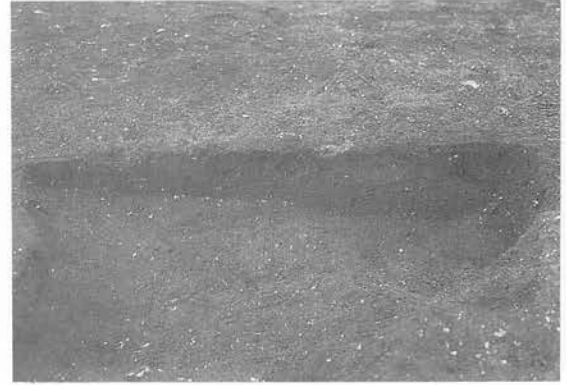
VII B2b-1 焼土遺構平面



VII B2b-1 焼土遺構断面



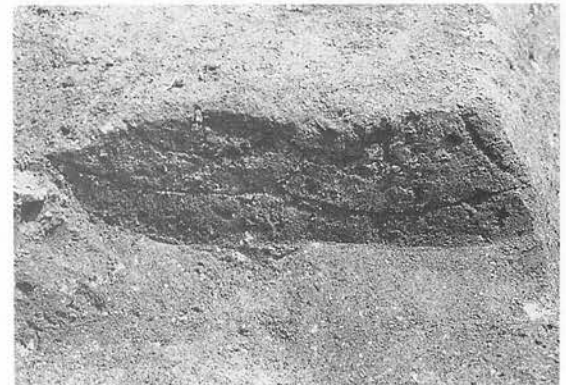
VII B2b-3、-4 焼土遺構平面



VII B2b-3 焼土遺構断面



VII B3a-1 焼土遺構平面



VII B3a-1 焼土遺構断面



VII B2b-4 焼土遺構断面





VII C3c 焼土遺構



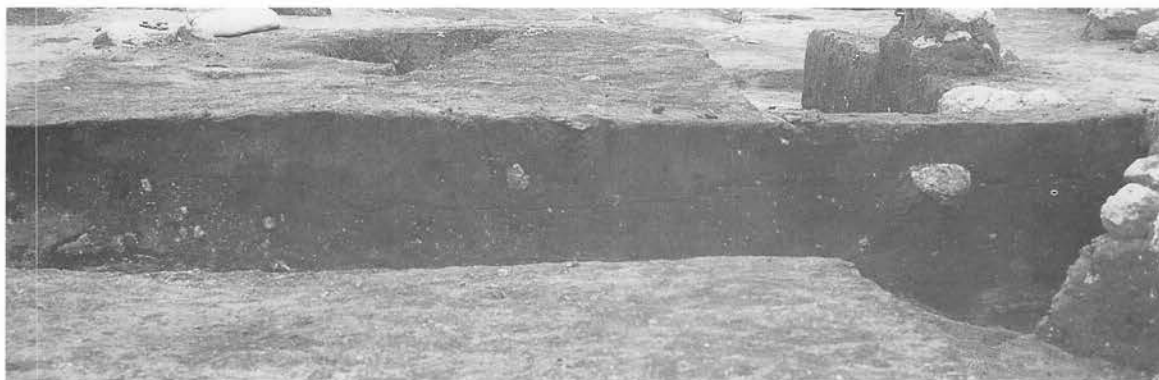
VII C3c 焼土遺構断面



VII B1d 集石



VII B1d 集石断面

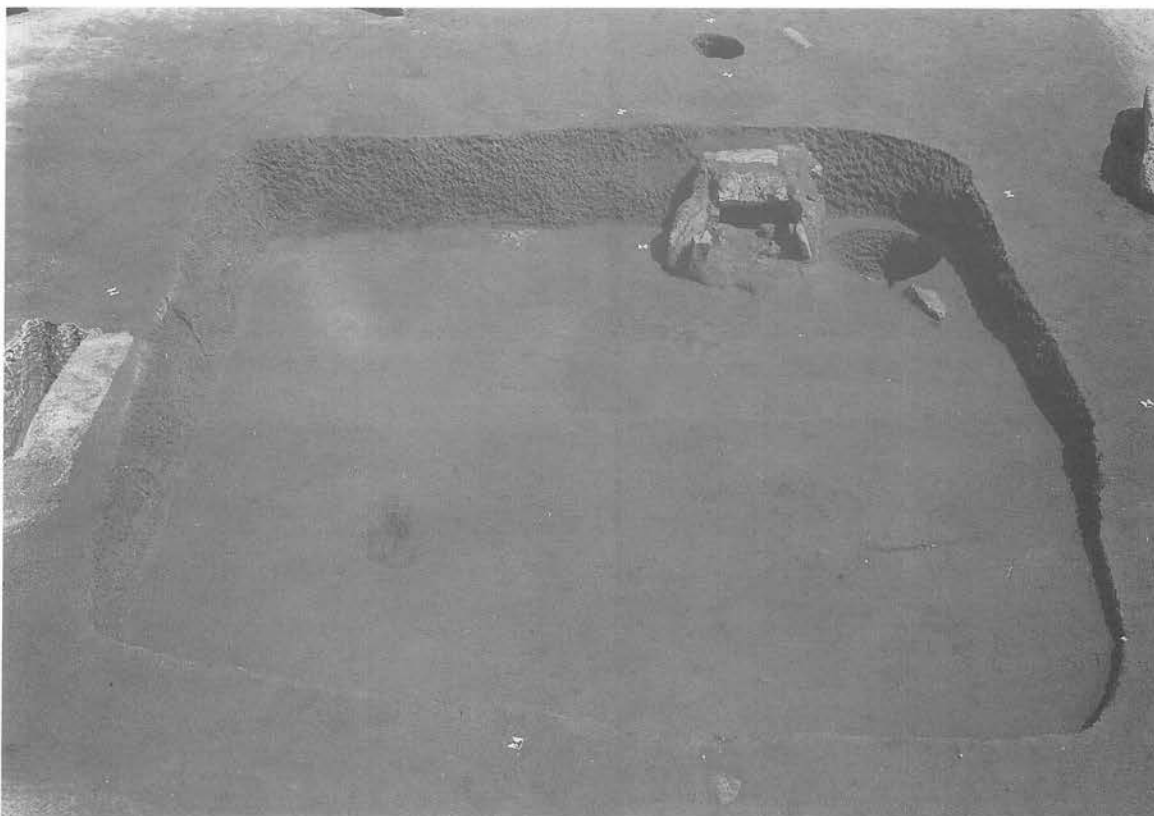


VII A2d 廃棄土断面 (A-A') 南側



VII A2d 廃棄土断面 (A-A') 北側

写真図版37 焼土遺構(縄文時代)(8)、VII B 1 d 集石、VII A 2 d 廃棄土



平面

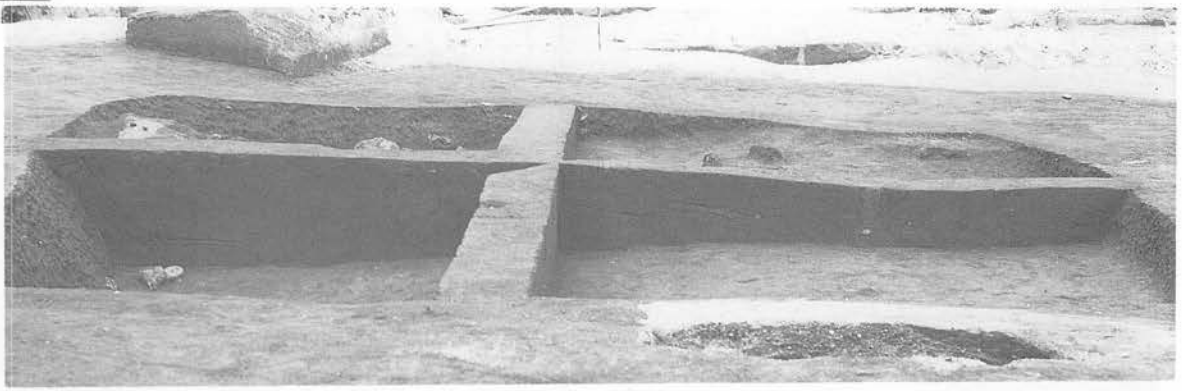


断面 (A-A')



断面 (A-A') 貼り床

写真図版38 II B 4 h 住居跡(1)



断面 (B-B')



遺物出土状況



砂鉄塊断面



カマド



砂鉄塊、砥石出土状況



カマド断面

写真図版39 II B 4 h 住居跡(2)



平面



カマド



カマド断面



住居内土坑

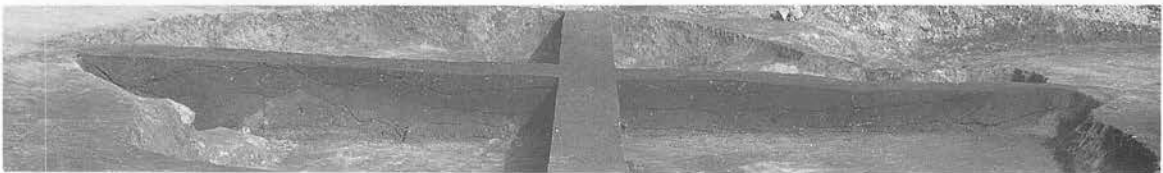
写真図版40 VII A 3 b 住居跡



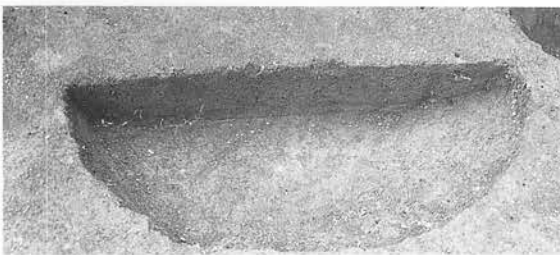
平面



断面 (A-A')



断面 (B-B')

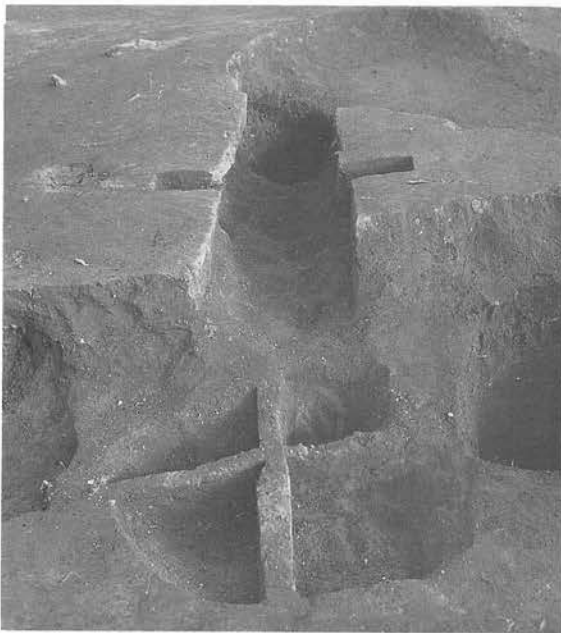


住居内土坑 3



住居内土坑 4

写真図版41 VIII A 1 d 住居跡(1)



カマド平面 (完掘)



カマド燃烧部断面



カマド煙道部断面



鍛冶炉平面 (検出)



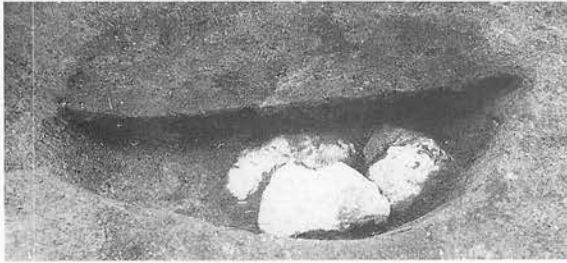
鍛冶炉平面 (完掘)



鍛冶炉断面



鍛冶炉半截



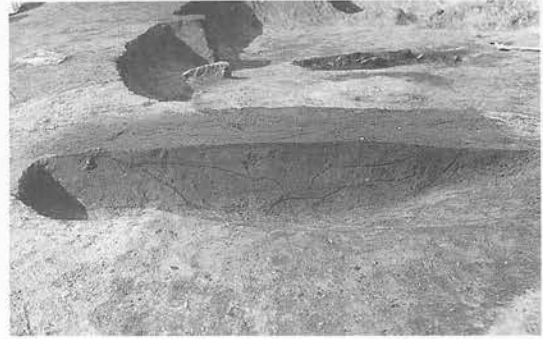
VIII A 1 d 住居内土坑 1



VIII A 1 d 住居内土坑 2



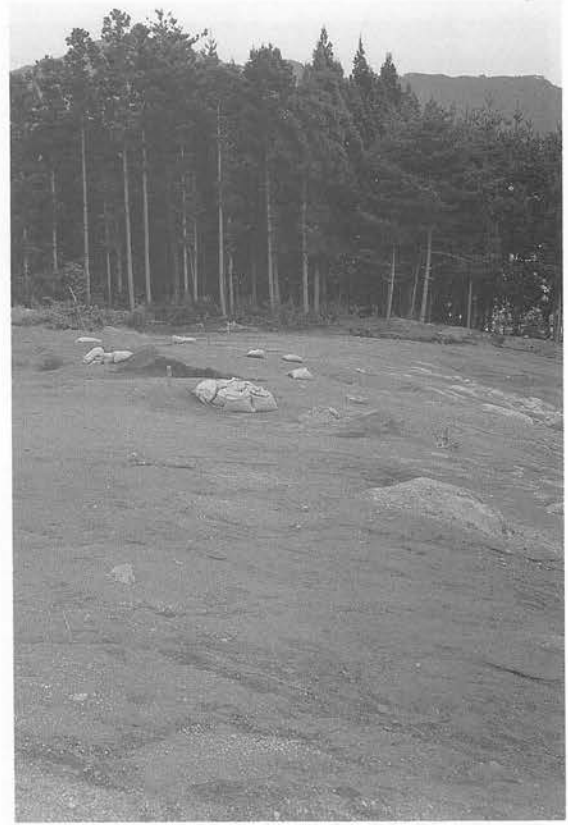
VIII A 1 e-1、-2 土坑



VIII A 1 e-1、-2 土坑断面



調査風景



調査区北側屋根

写真図版43 VIII A 1 d 住居跡(3)、土坑(古代)



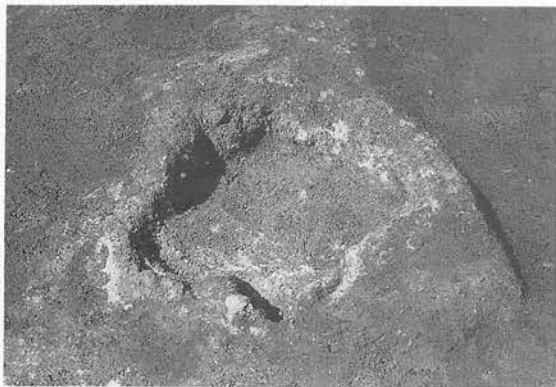
炉群検出状況



b炉



b炉断面



a炉

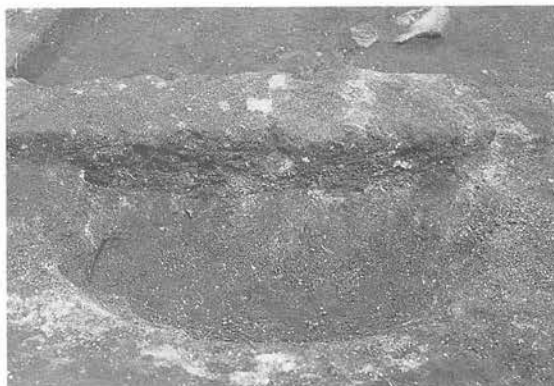


a炉断面

写真図版44 II C 2 e 製鉄炉群(1) a炉、b炉



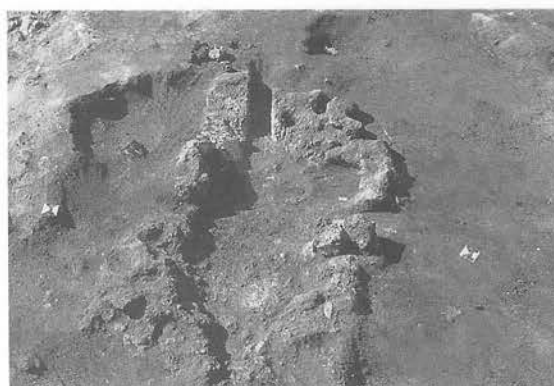
c 炉



c 炉埋土断面



c 炉掘り方断面



e 炉



e 炉埋土断面



e 炉掘り方断面



d 炉



d 炉断面

写真図版45 II C 2 e 製鉄炉群(2) c 炉、d 炉、e 炉



g 炉検出状況



g 炉



g 炉断面



f 炉炉底と前庭部断面



1号土坑



1号土坑断面



2号土坑



2号土坑断面

写真図版46 II C 2 e 製鉄炉群(3) f 炉、g 炉、1~2号土坑



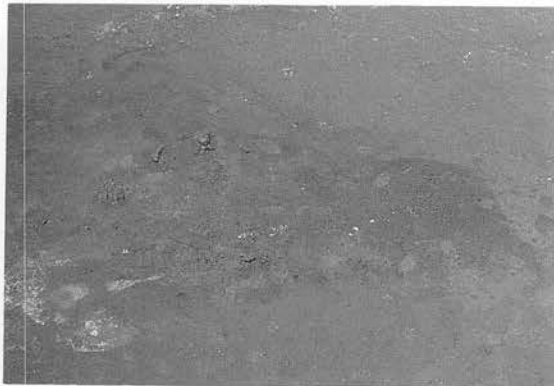
II C2e 製鉄炉群完掘



II C1e 羽口捨て場 1



II C1c 羽口捨て場 2



II B5h 炭置き場



II B3h グリット土師器出土状況



調査風景 (飛び地 I 区)



調査風景 (II B4h住居跡)

写真図版47 II C 2 e 製鉄炉群(4)羽口捨て場、炭置き場、遺構外遺物出土状況



I C0e 炭窯



I C0g 炭窯



断面



断面



II C1c 炭窯



II C1d 炭窯



断面



断面

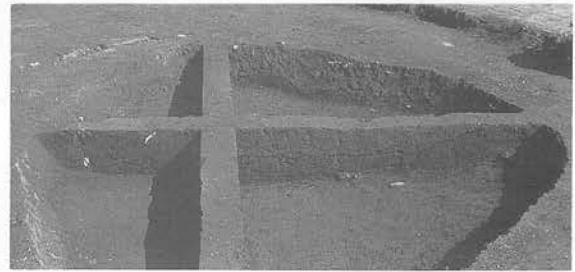
写真図版48 炭窯(1)



II C1f 炭窯



II C2c 炭窯断面



II C2c 炭窯断面



断面



II C2b 炭窯



II C2d-2 炭窯



断面

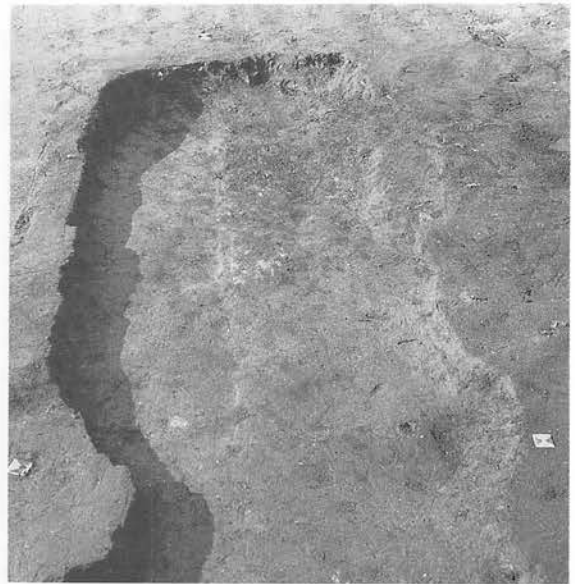


断面

写真図版49 炭窯(2)



II C2d-1 炭窯



II C3d 炭窯



II C2d-1 炭窯、II C3d 炭窯断面



II C2g 炭窯



II C3a 炭窯

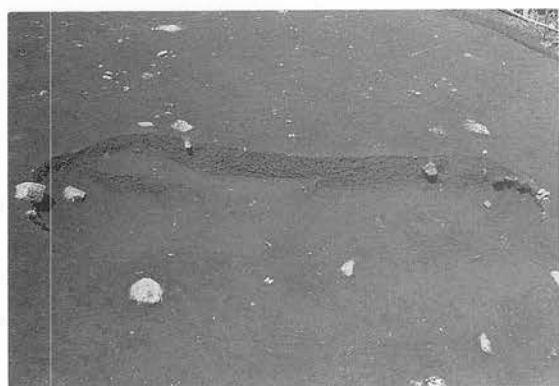


断面



断面

写真図版50 炭窯(3)



VI B8e 炭窯



VI B8f 炭窯



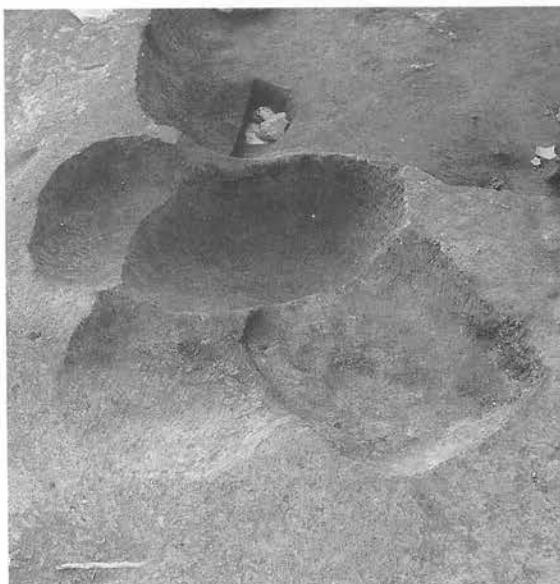
断面



断面



VI B9c 炭窯



VII A1e- 1、2 炭窯

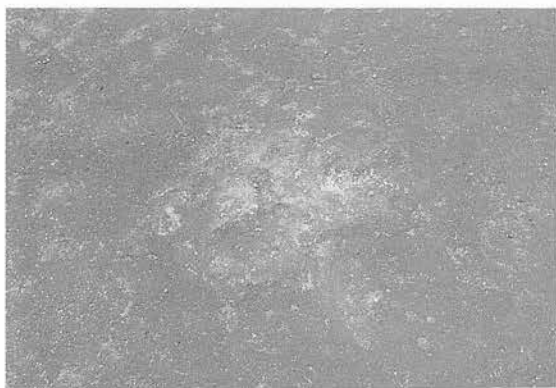


断面



断面

写真図版51 炭窯(4)



II B2g 焼土遺構



II B2g 焼土遺構断面



II C2f 焼土遺構



II C2f 焼土遺構断面



VII A1d 焼土遺構



飛び地 (I、II区) 完掘状況

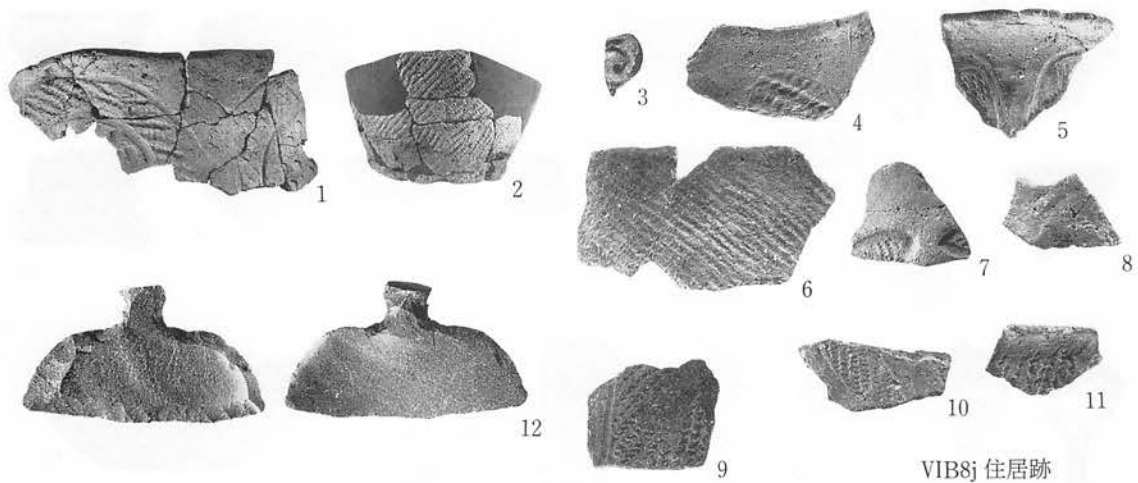


VII A2b 焼土遺構

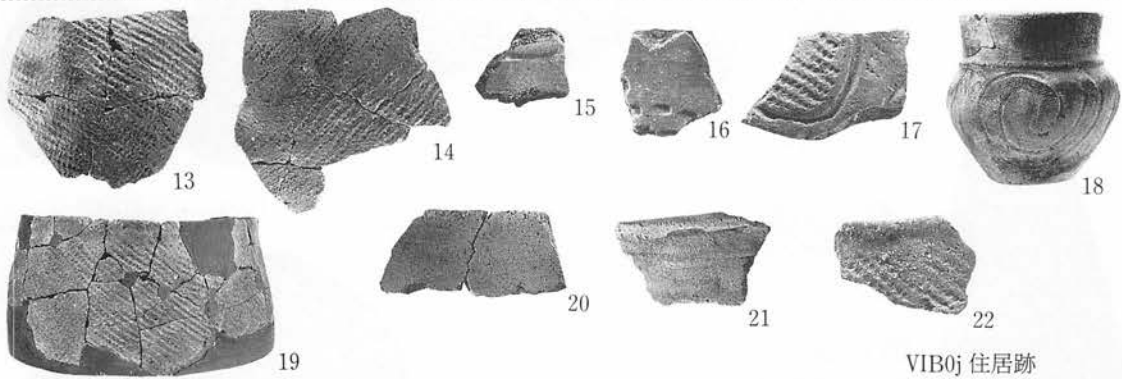


VII A2b 焼土遺構断面

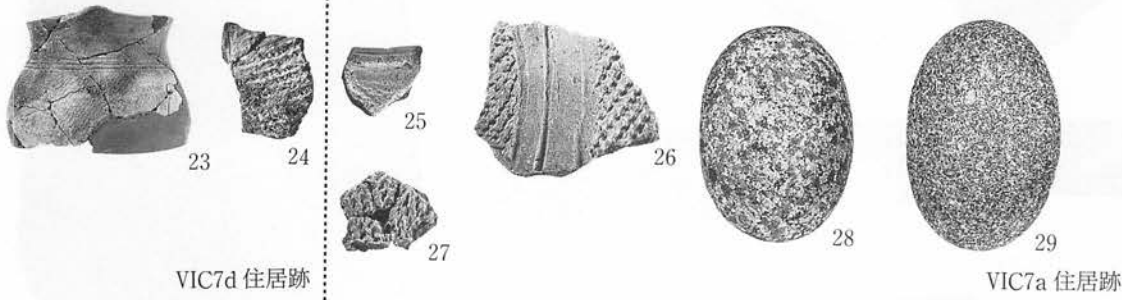
写真図版52 焼土遺構 (古代)



VIB8j 住居跡

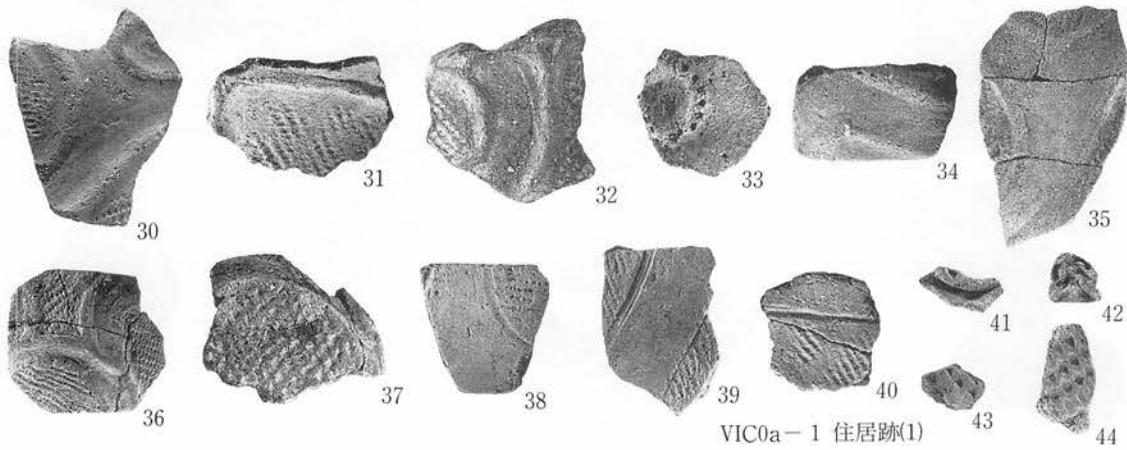


VIB0j 住居跡



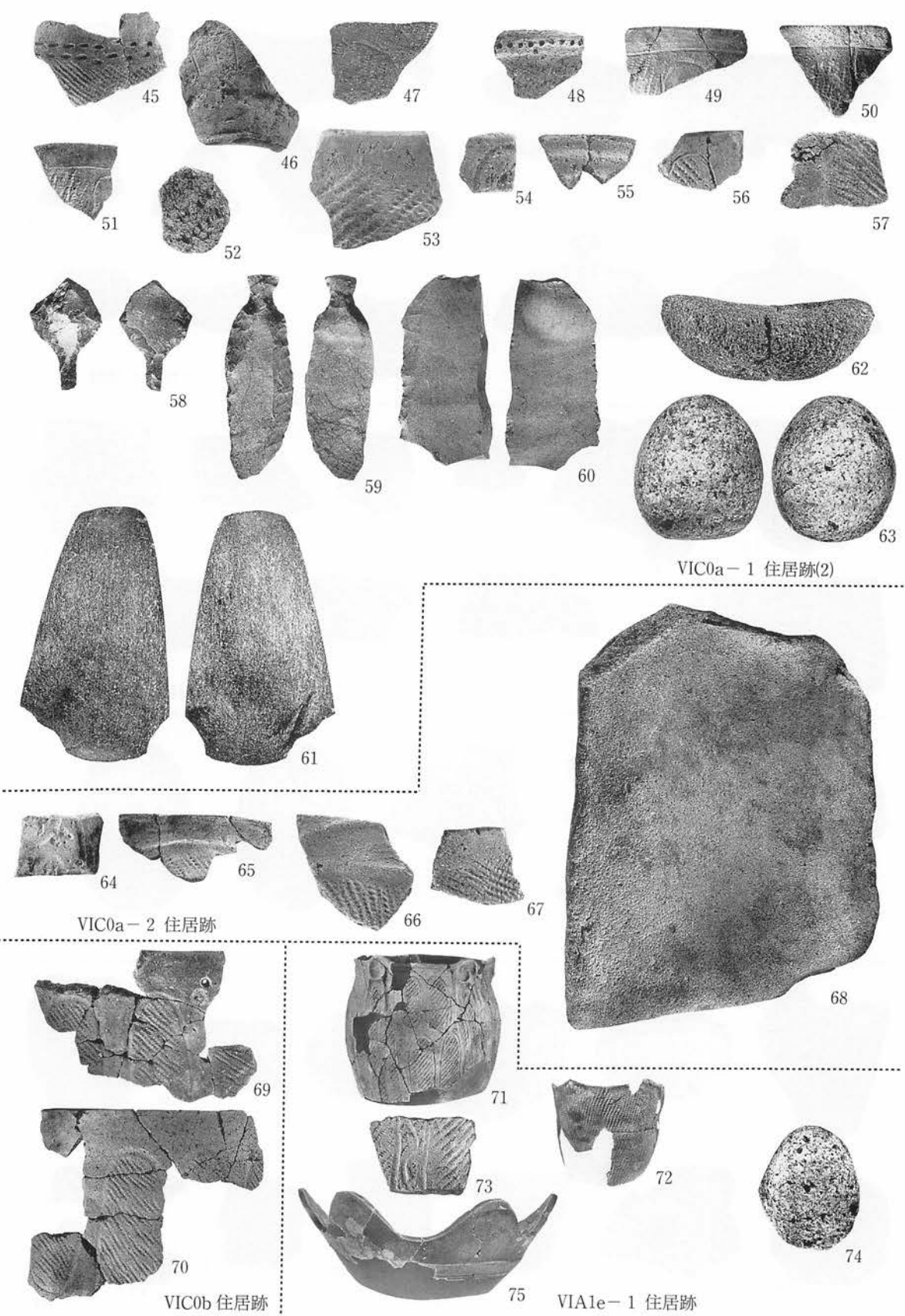
VIC7d 住居跡

VIC7a 住居跡

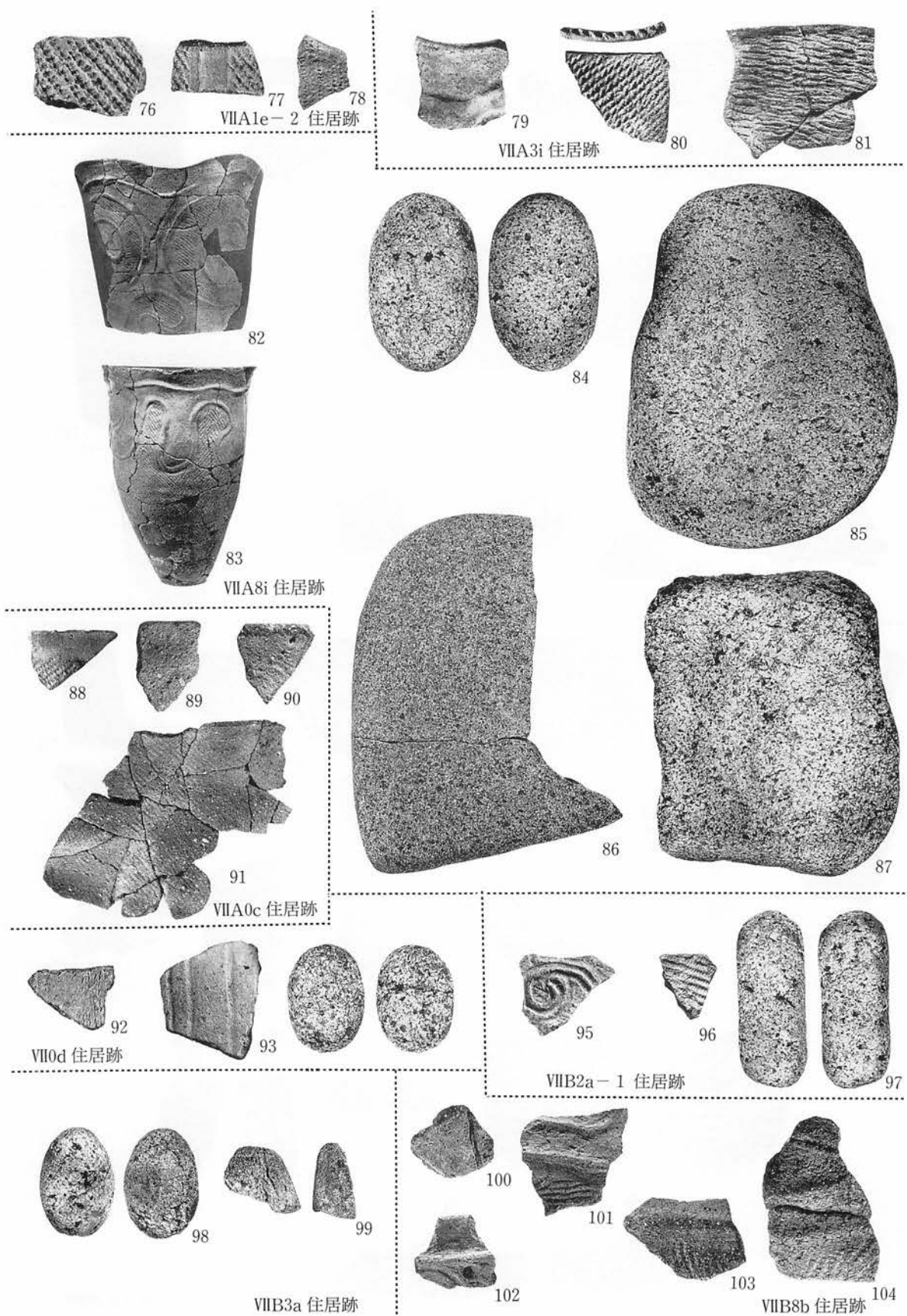


VIC0a-1 住居跡(1)

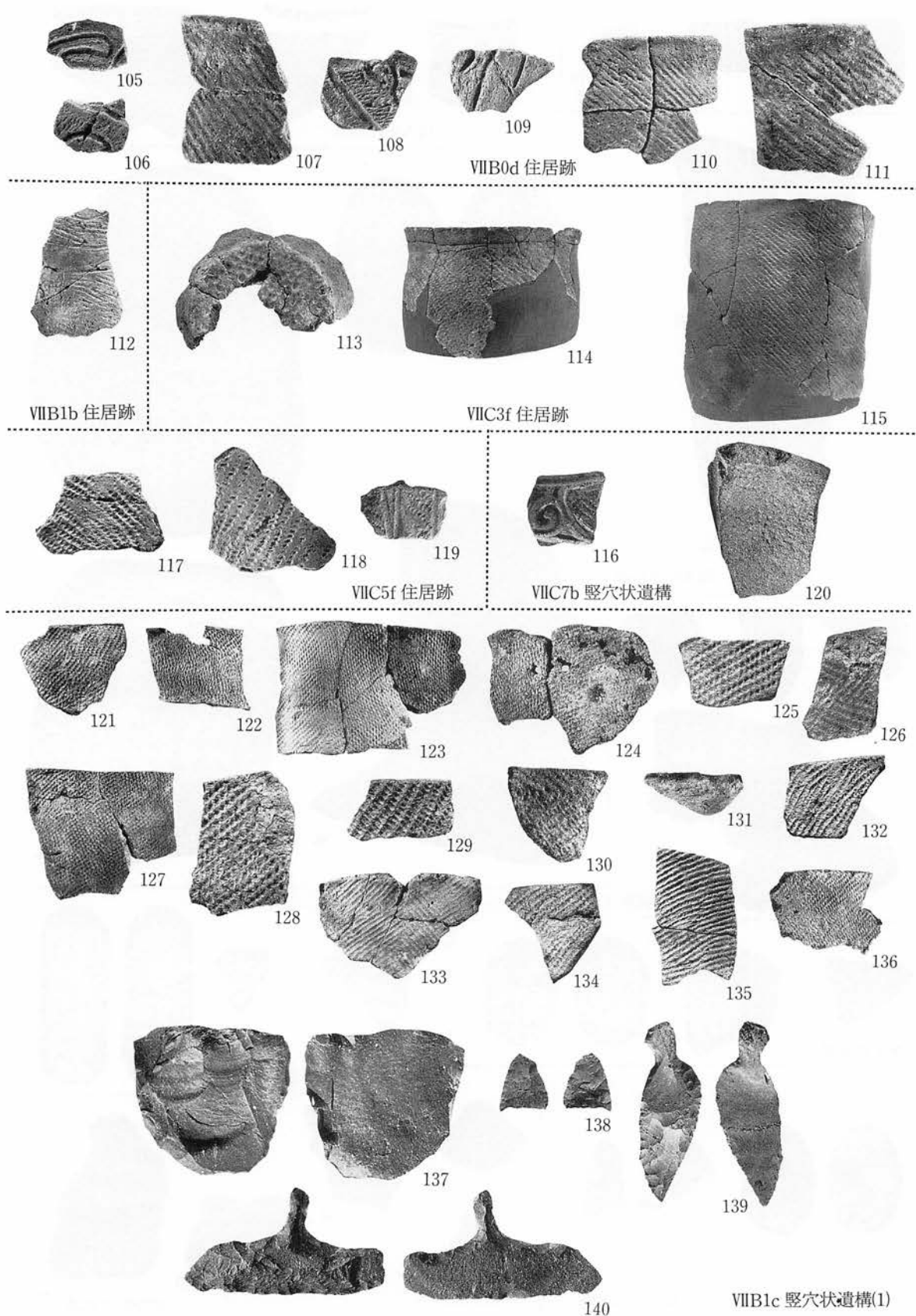
写真図版53 遺構内出土遺物 VIB 8 j 住居跡、VIB 0 j 住居跡、VIC 7 a 住居跡、VIC 7 d 住居跡、VIC 0 a - 1 住居跡(1)



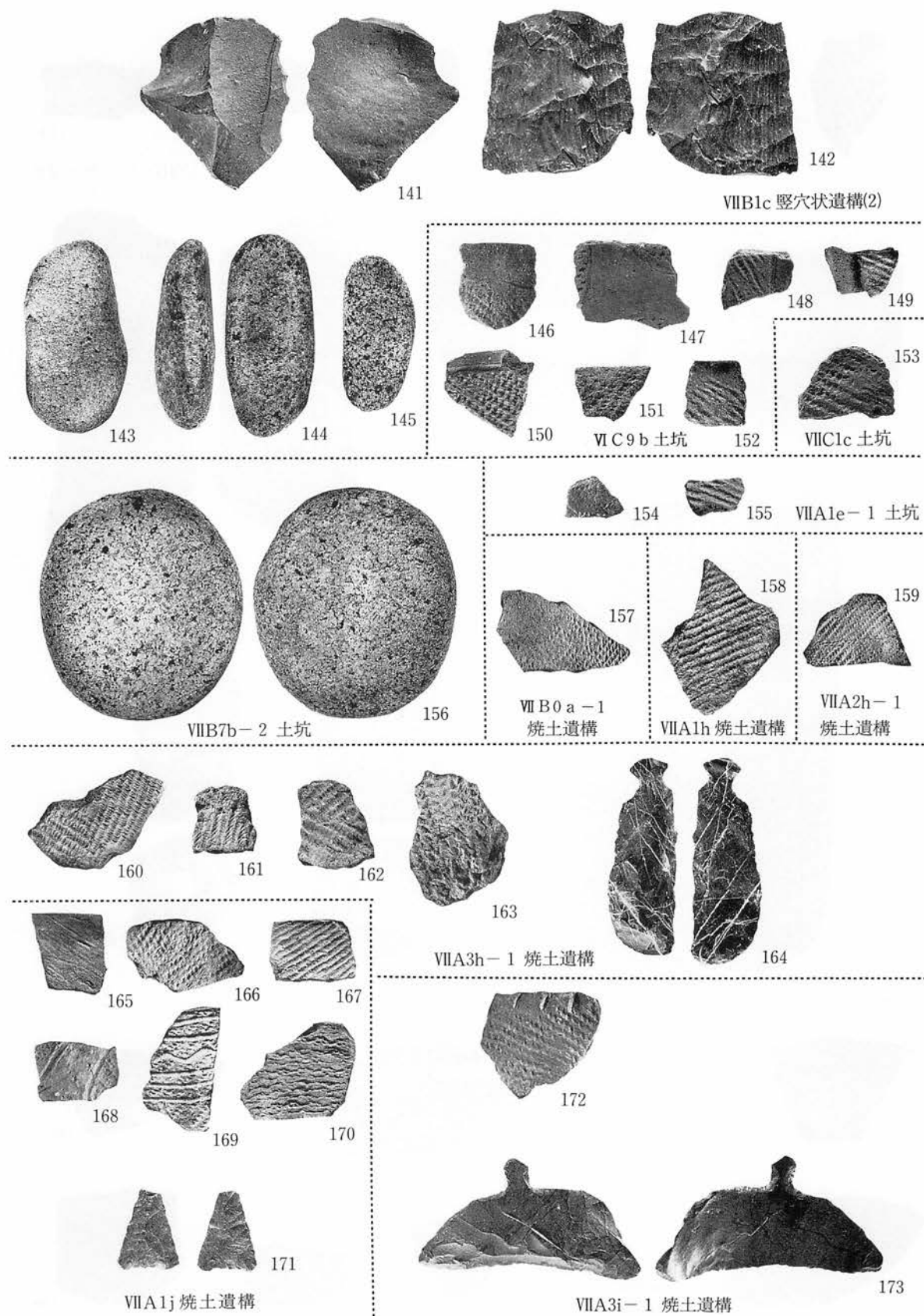
写真図版54 遺構内出土遺物 VIC0a-1住居跡(2)、VIC0a-2住居跡、VIC0b住居跡、VIA1e-1住居跡



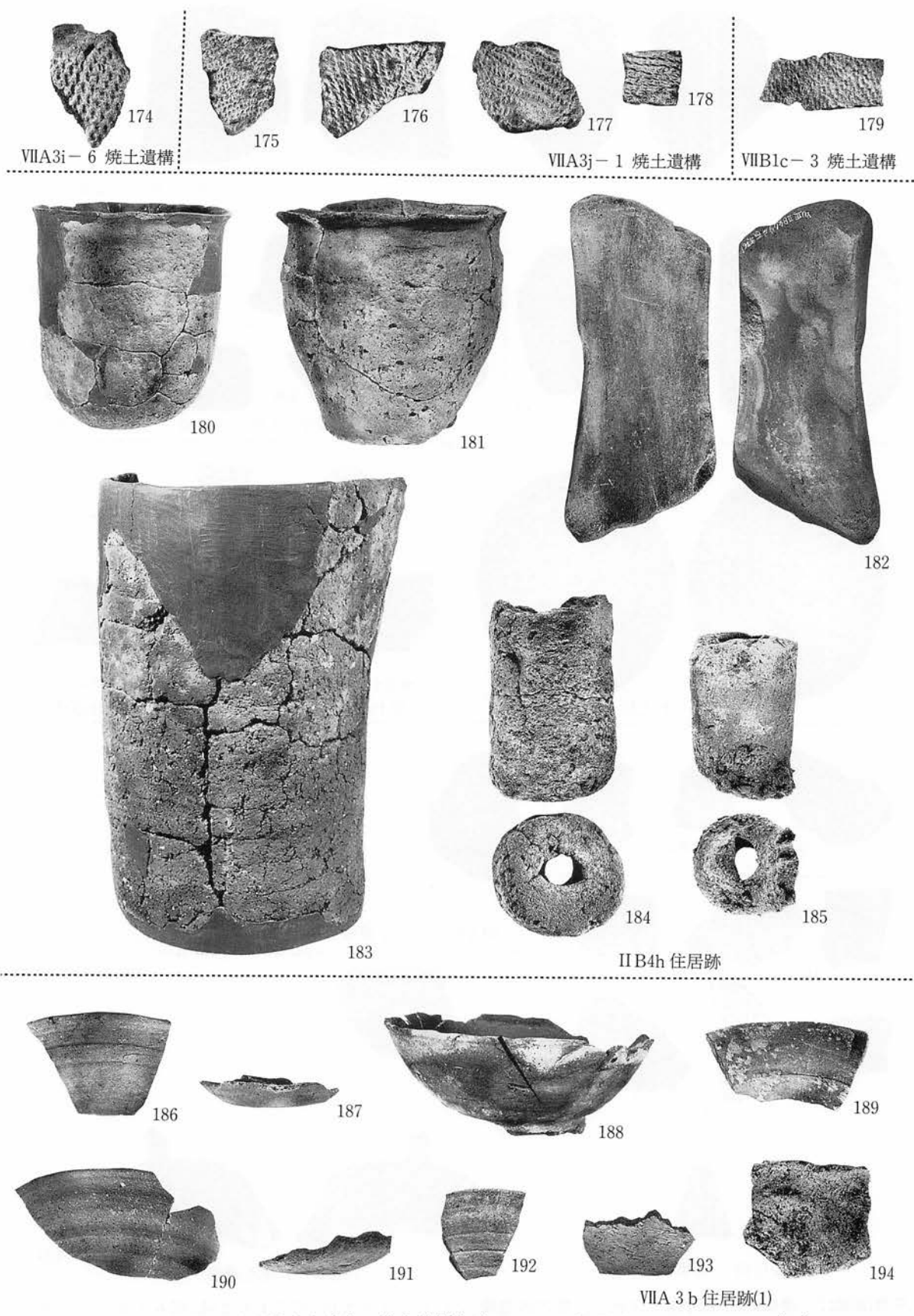
写真図版55 遺構内出土遺物 VIIA1e-2住居跡、VIIA3i住居跡、VIIA8i住居跡、VIIA0c住居跡、VIIA0d住居跡、VIIB2a-1住居跡、VIIB3a住居跡、VIIB8b住居跡



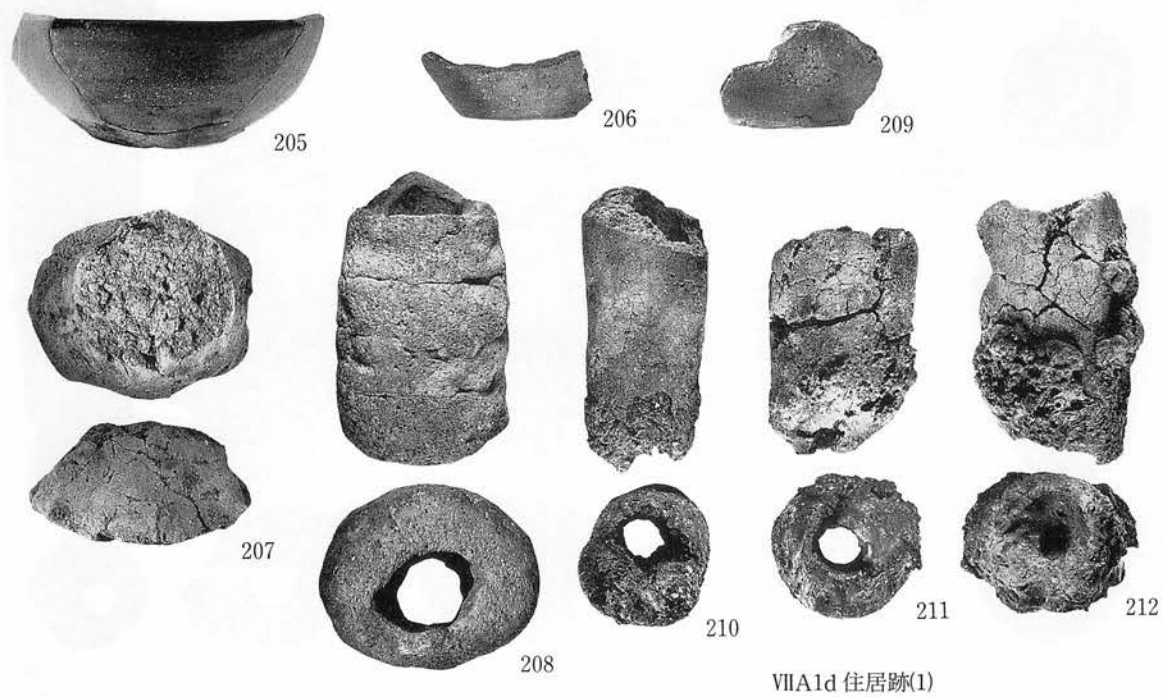
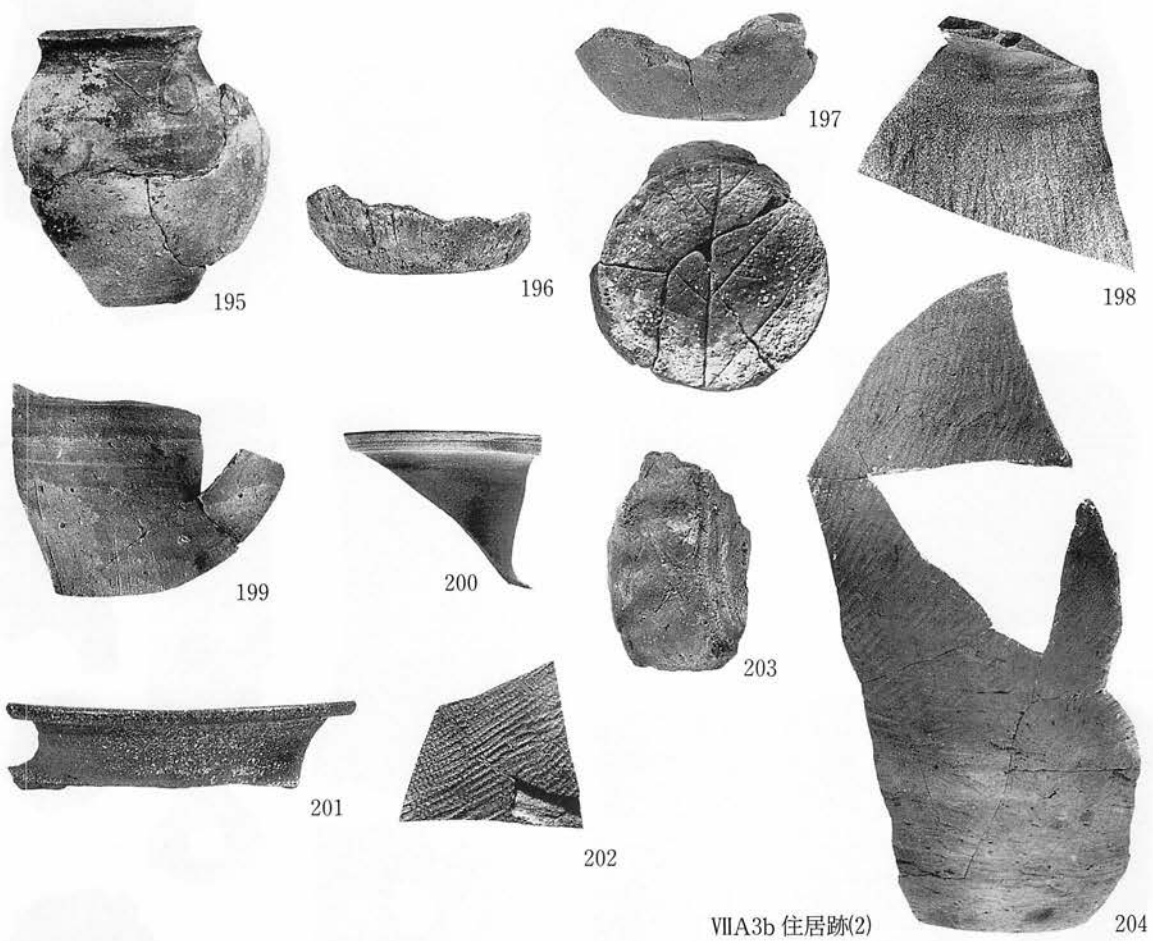
写真図版56 遺構内出土遺物 VII B 0 b 住居跡、VII C 1 b 住居跡、VII C 3 f 住居跡、VII C 5 f 住居跡、VII C 7 b 竪穴状遺構、VII B 1 c 竪穴状遺構(1)



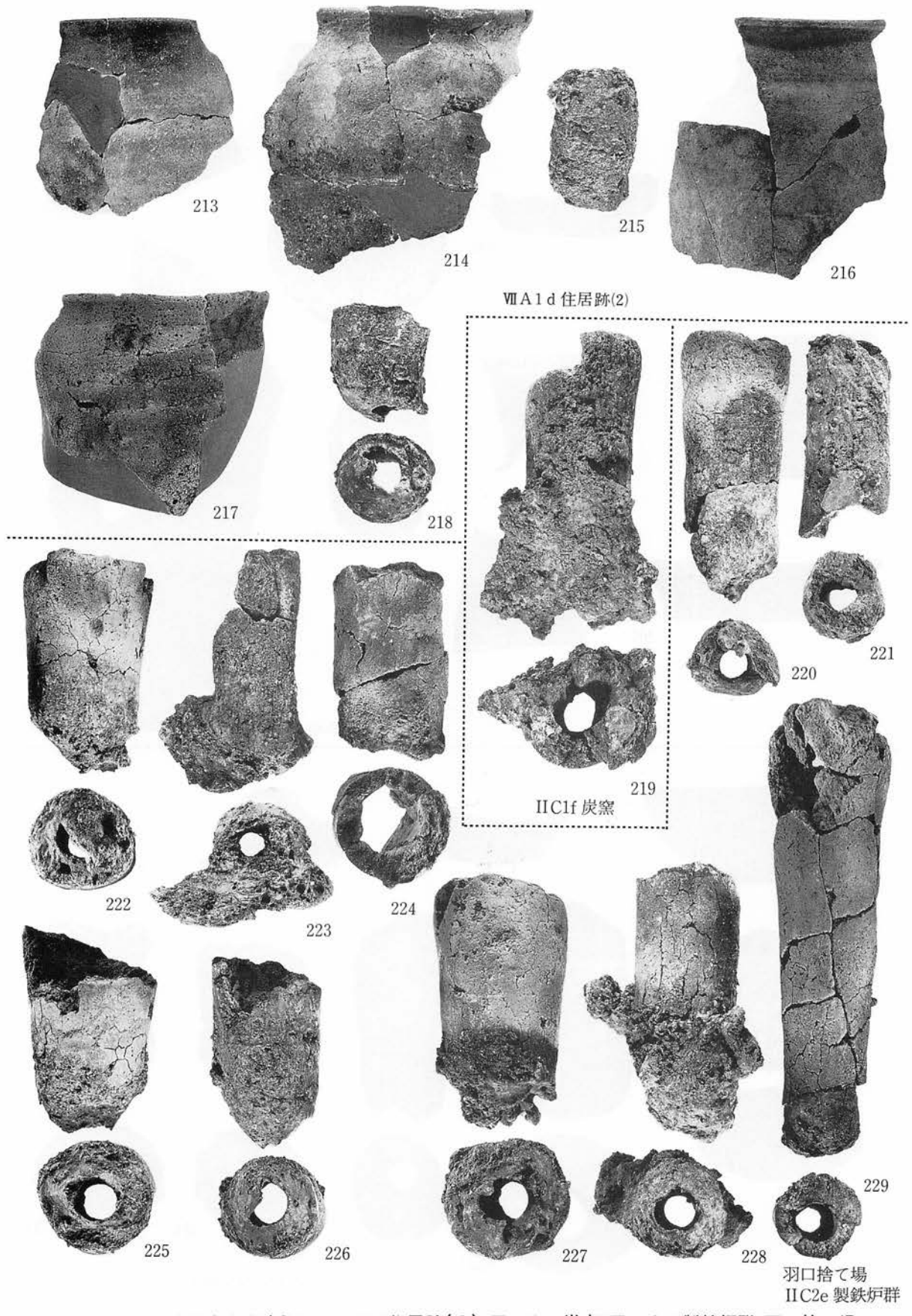
写真図版57 遺構内出土遺物 VII B 1 c 竖穴状遺構(2)、VIC 9 b 土坑、VIC 1 c 土坑、VII A 1 e - 1 土坑、VII A 1 e - 2 土坑、VII B 7 b - 2 土坑、烧土遺構(1)



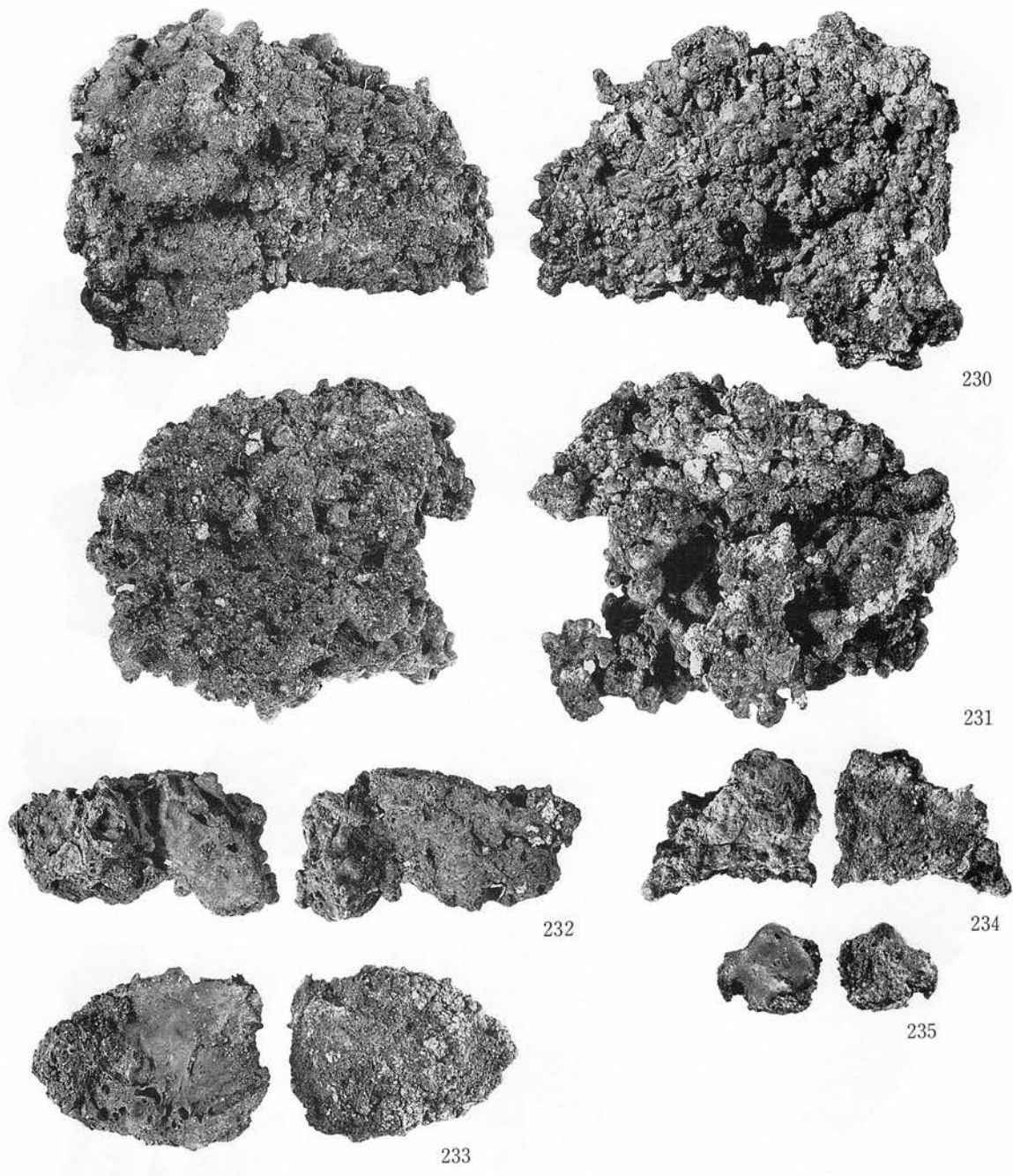
写真図版58 遺構内出土遺物 烧土遺構(2)、II B 4 h住居跡、VIIA 3 b住居跡(1)



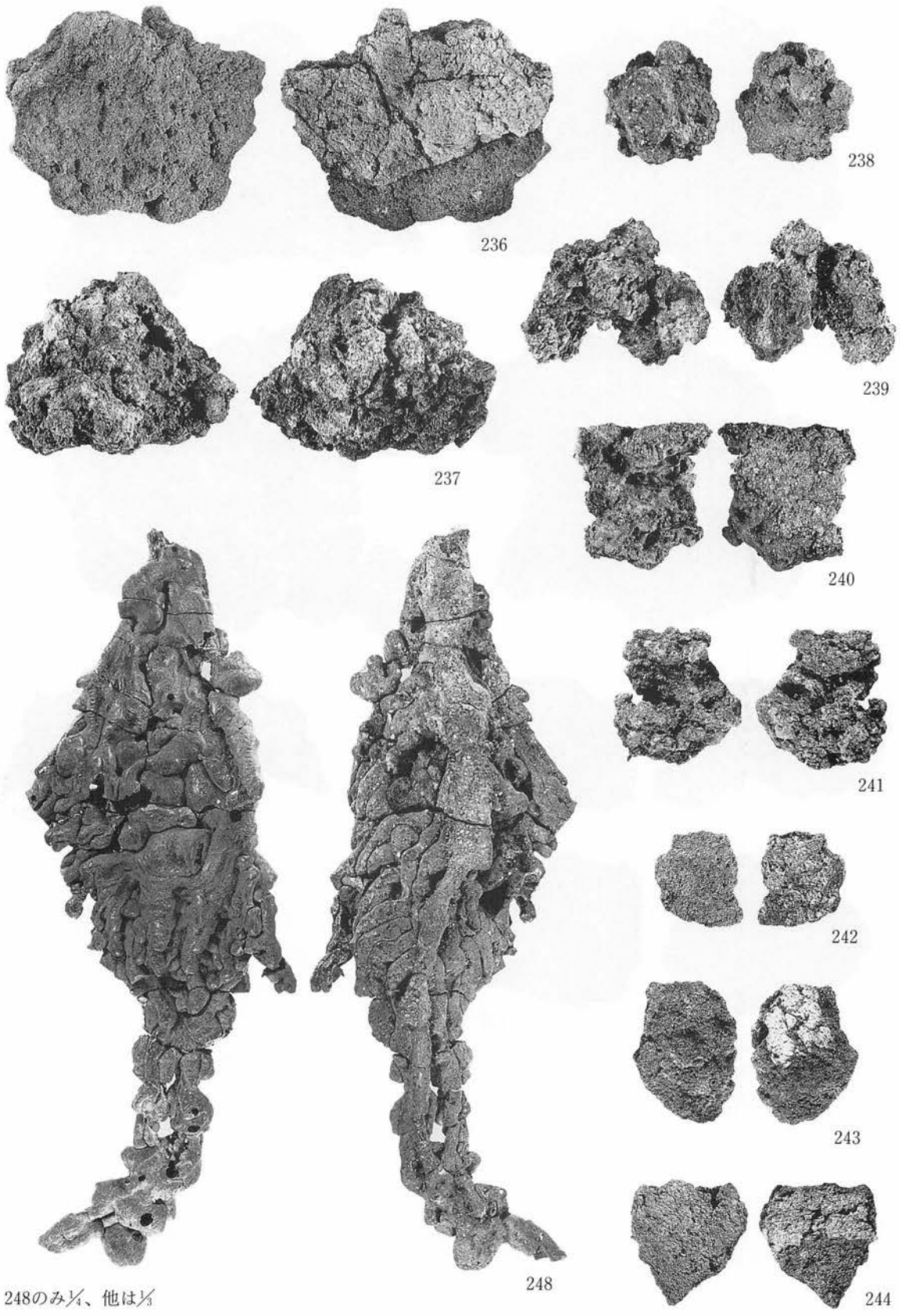
写真図版59 遺構内出土遺物 VIIA3b住居跡(2)、VIIA1d住居跡(1)



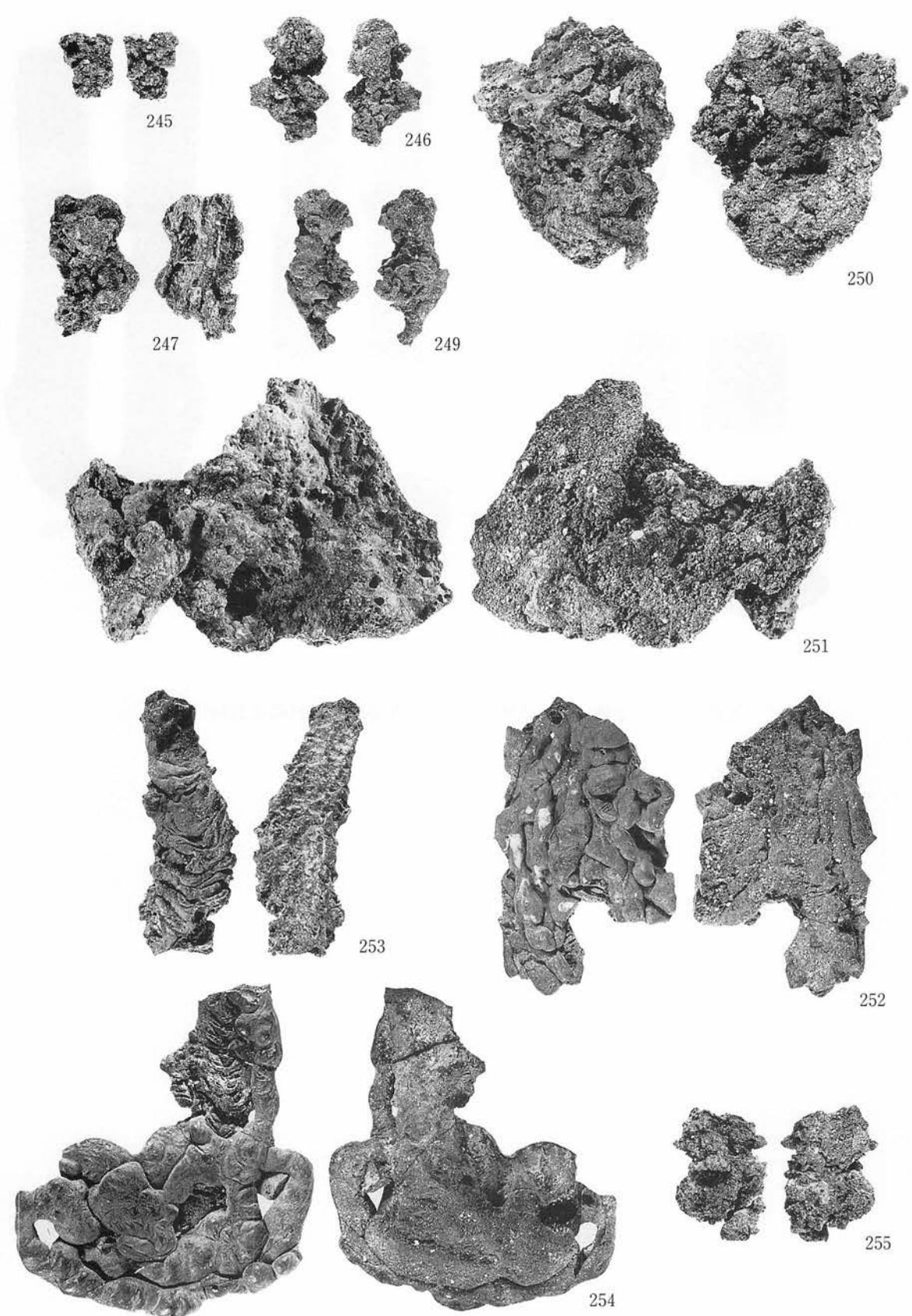
写真図版60 遺構内出土遺物 VII A 1 d 住居跡(2)、II C 1 f 炭窯、II C 2 e 製鉄炉群、羽口捨て場



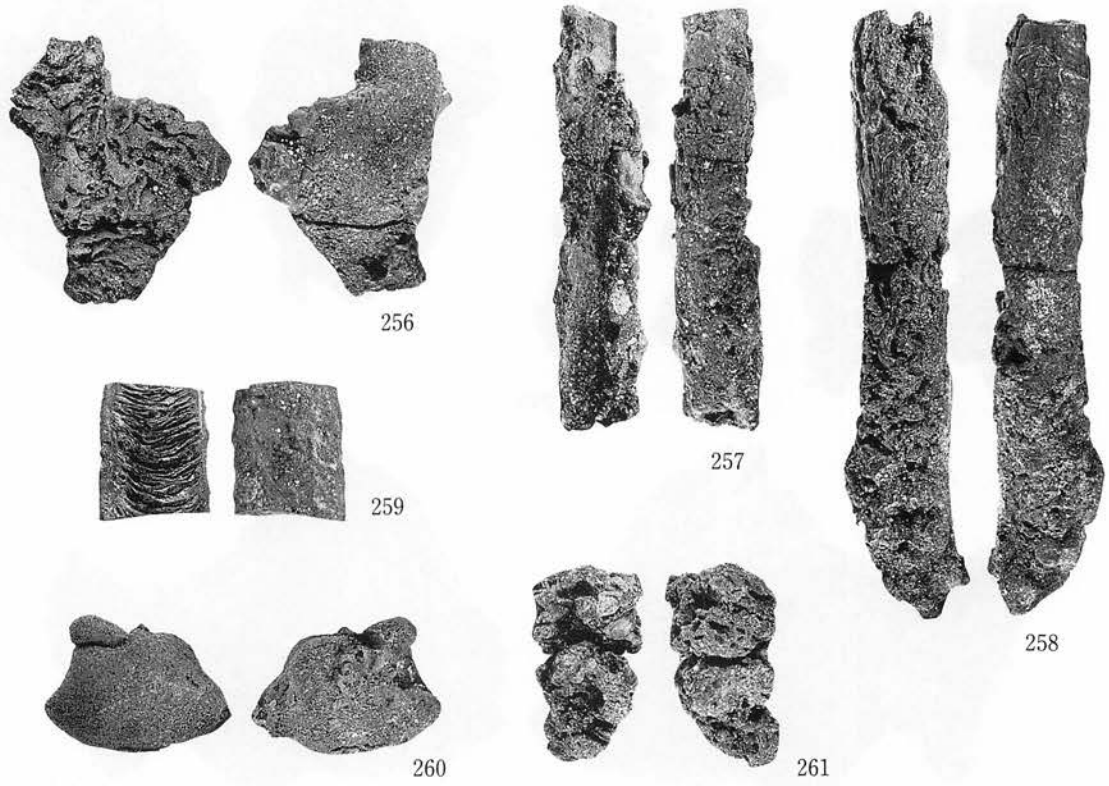
写真図版61 遺構内出土遺物 VIII A 1 d 住居跡(3)



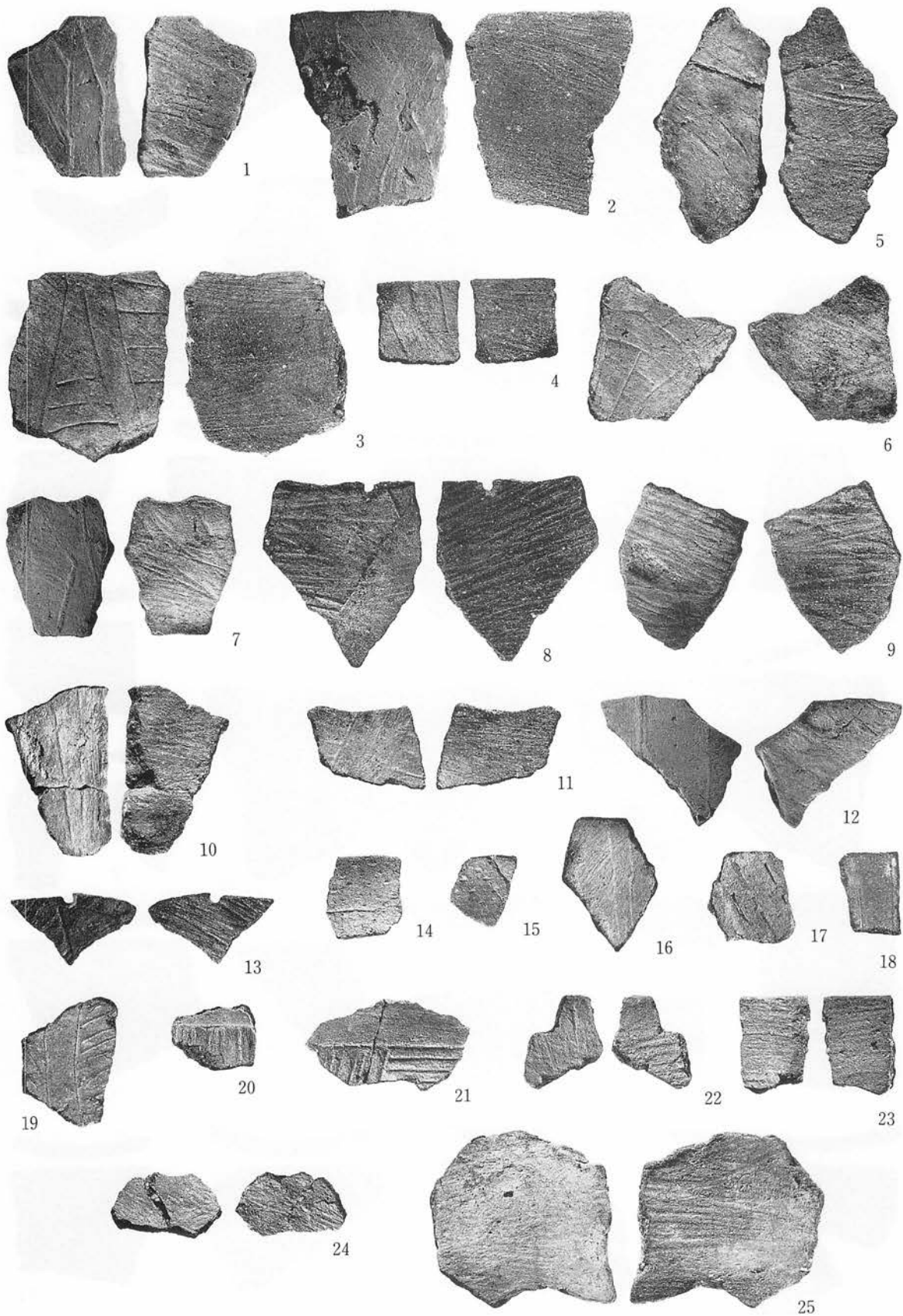
写真図版62 遺構内出土遺物 II C 2 e 製鉄炉群製鉄関連遺物(1)



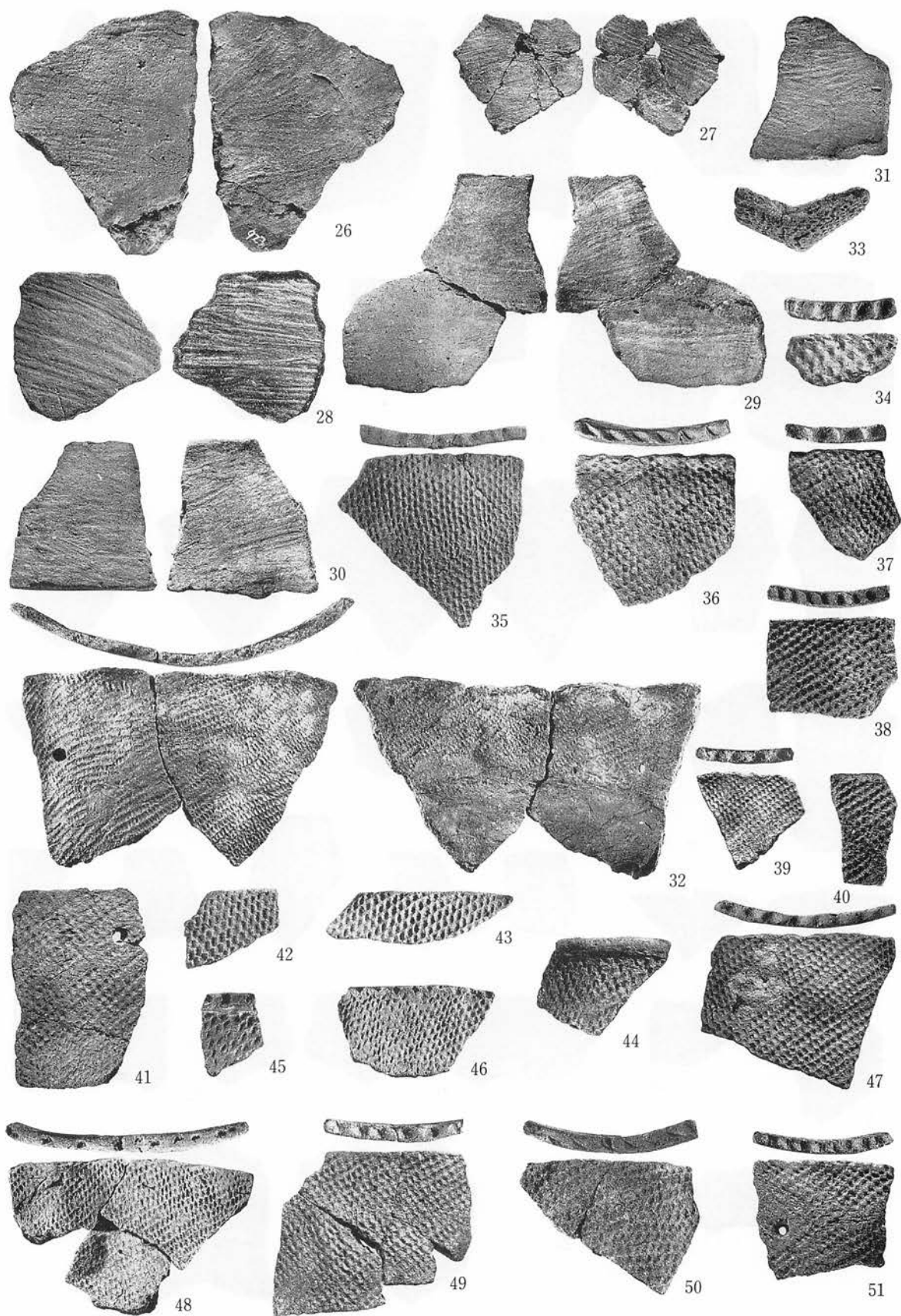
写真図版63 遺構内出土遺物 II C 2 e 製鉄炉群製鉄関連遺物(2)



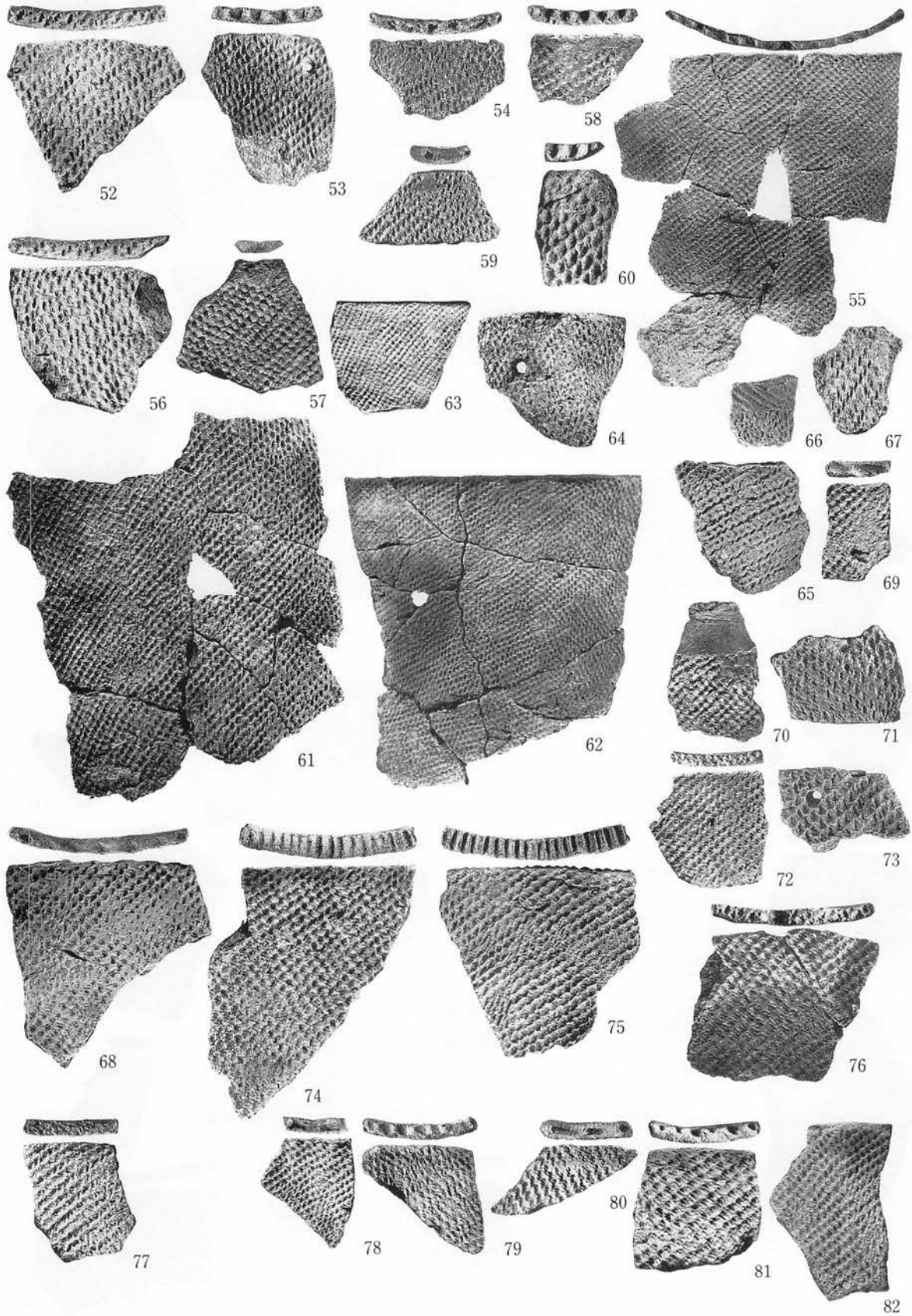
写真図版64 遺構内出土遺物 II C 2 e 製鉄炉群製鉄関連遺物(3)



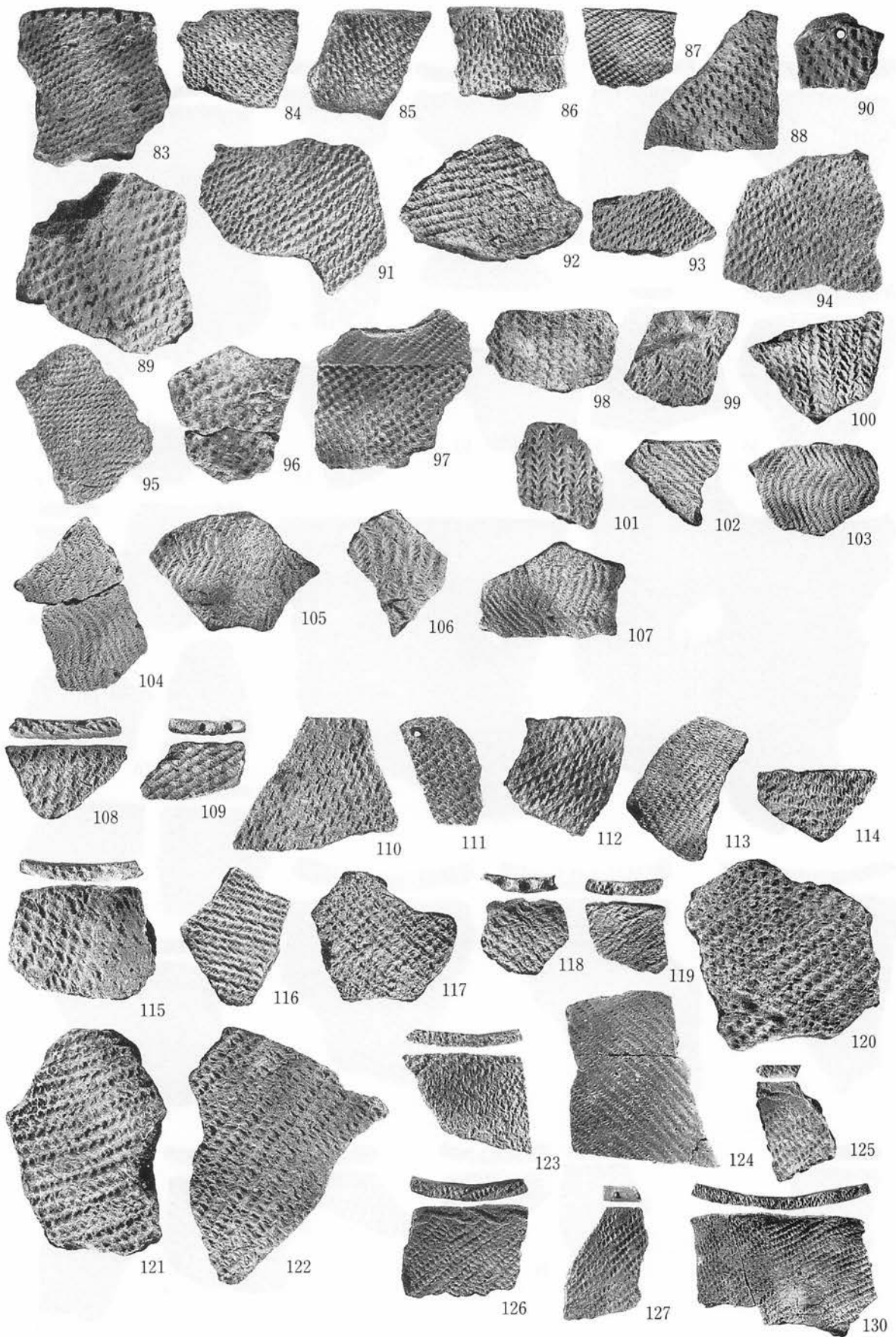
写真図版65 遺構外出土遺物 土器 1



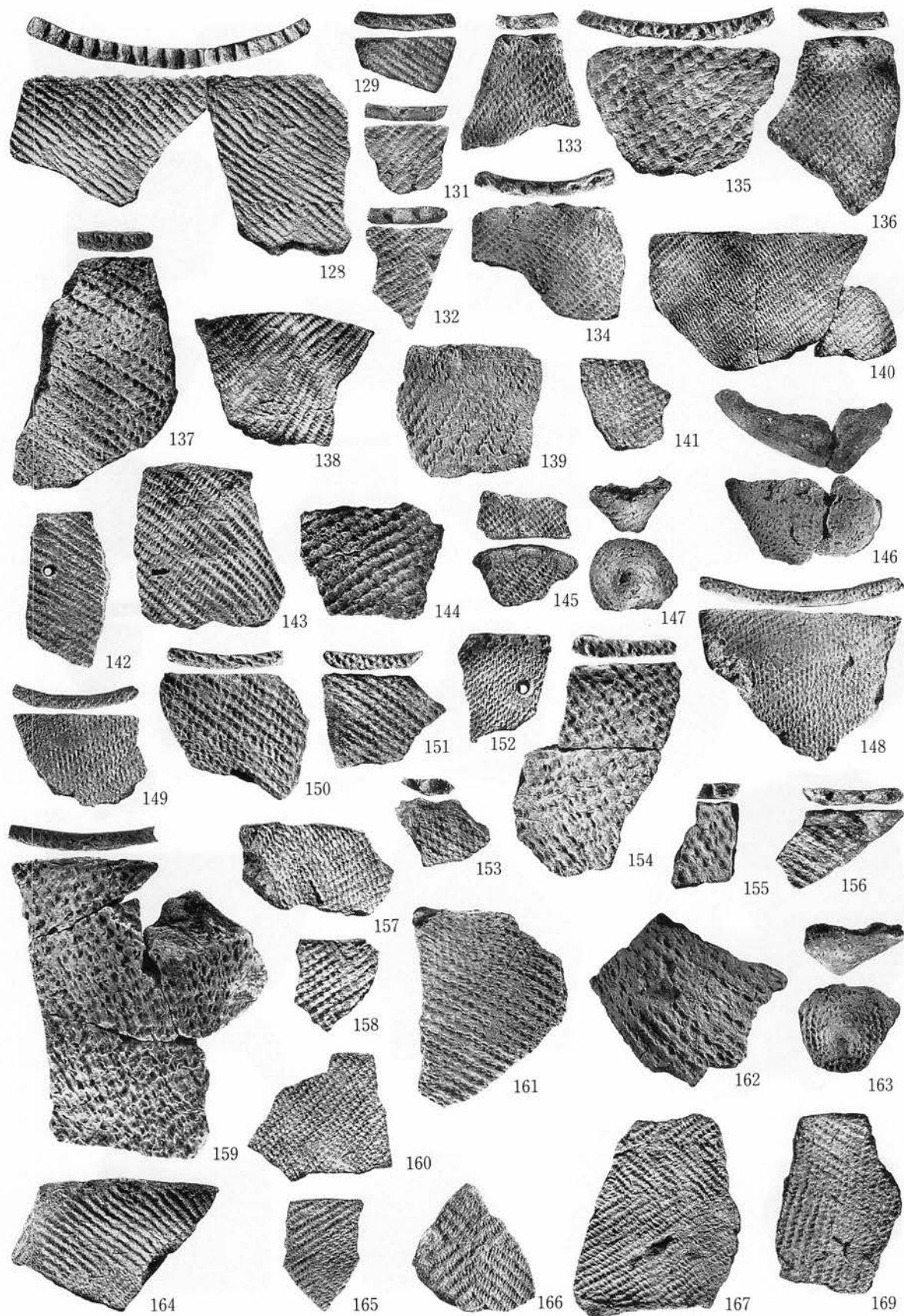
写真図版66 遺構外出土遺物 土器 2



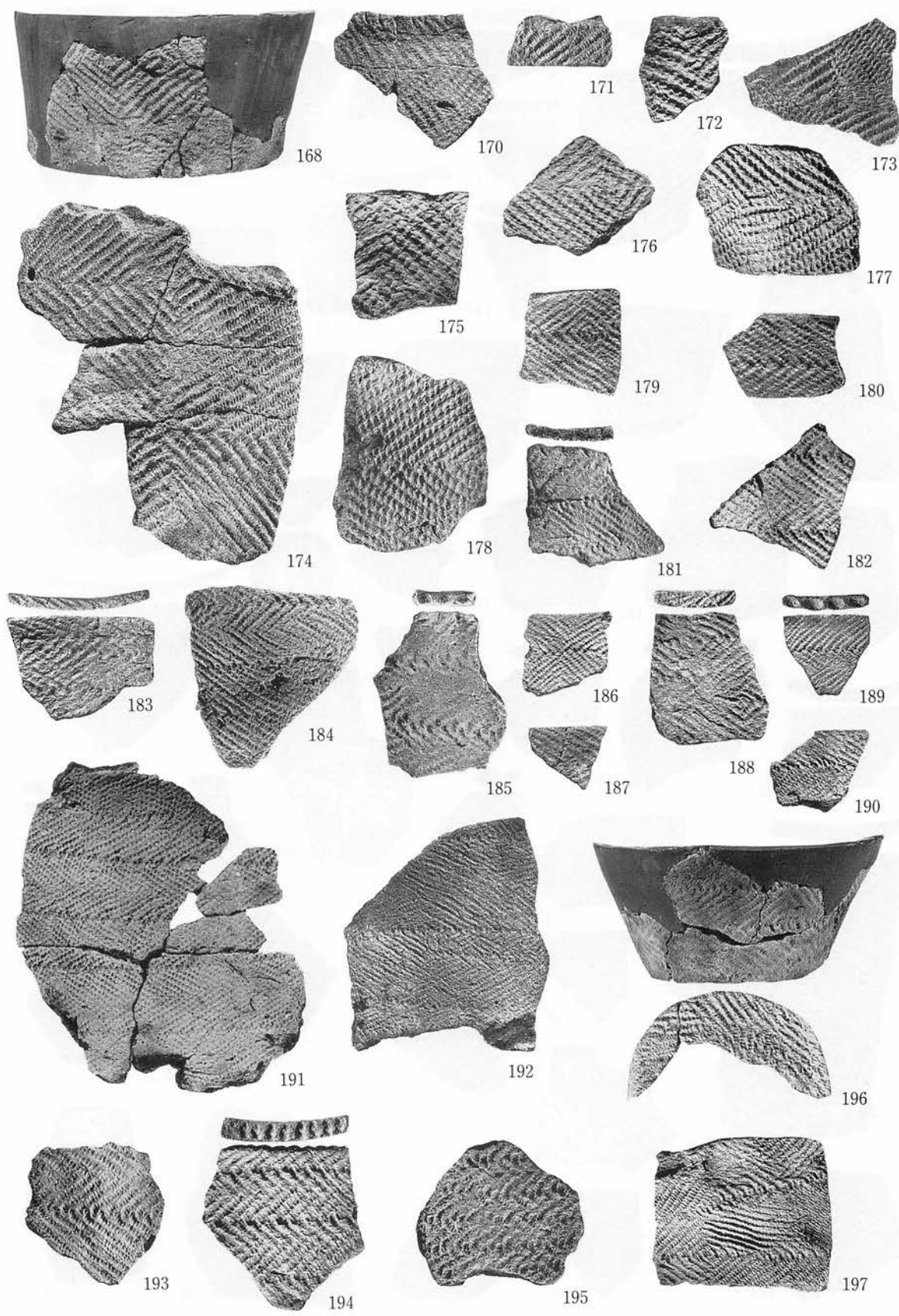
写真図版67 遺構外出土遺物 土器 3



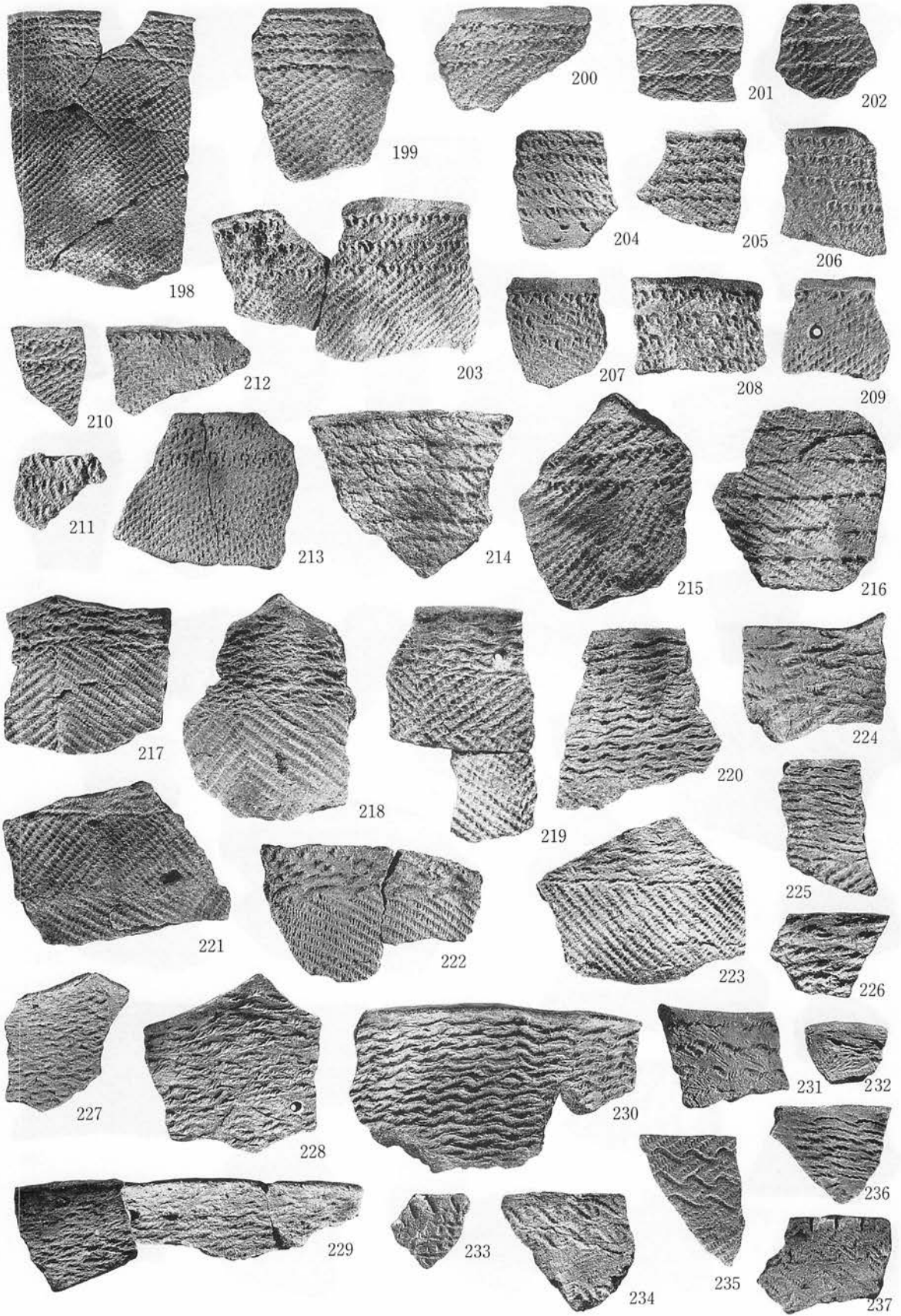
写真図版68 遺構外出土遺物 土器 4



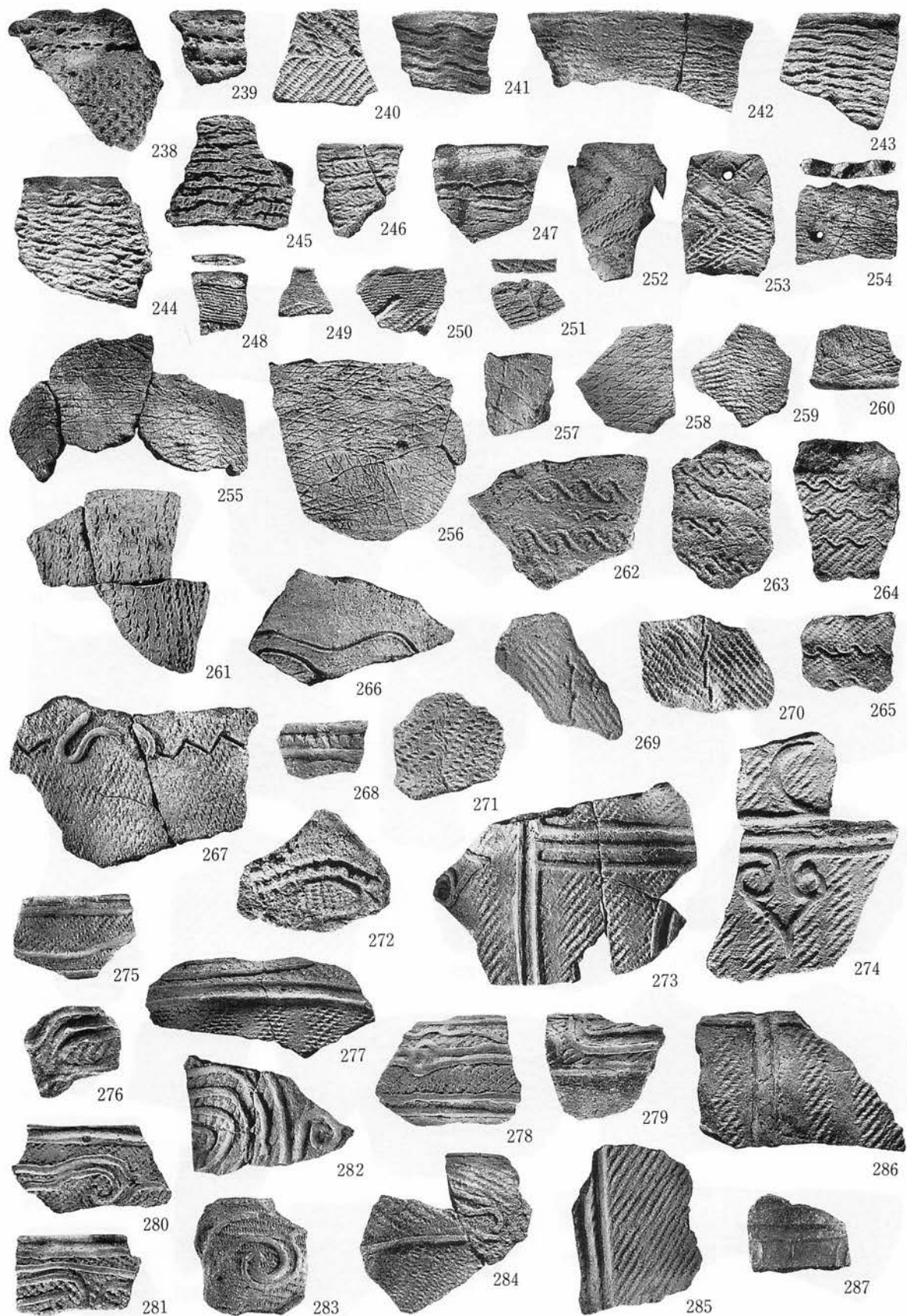
写真図版69 遺構外出土遺物 土器 5



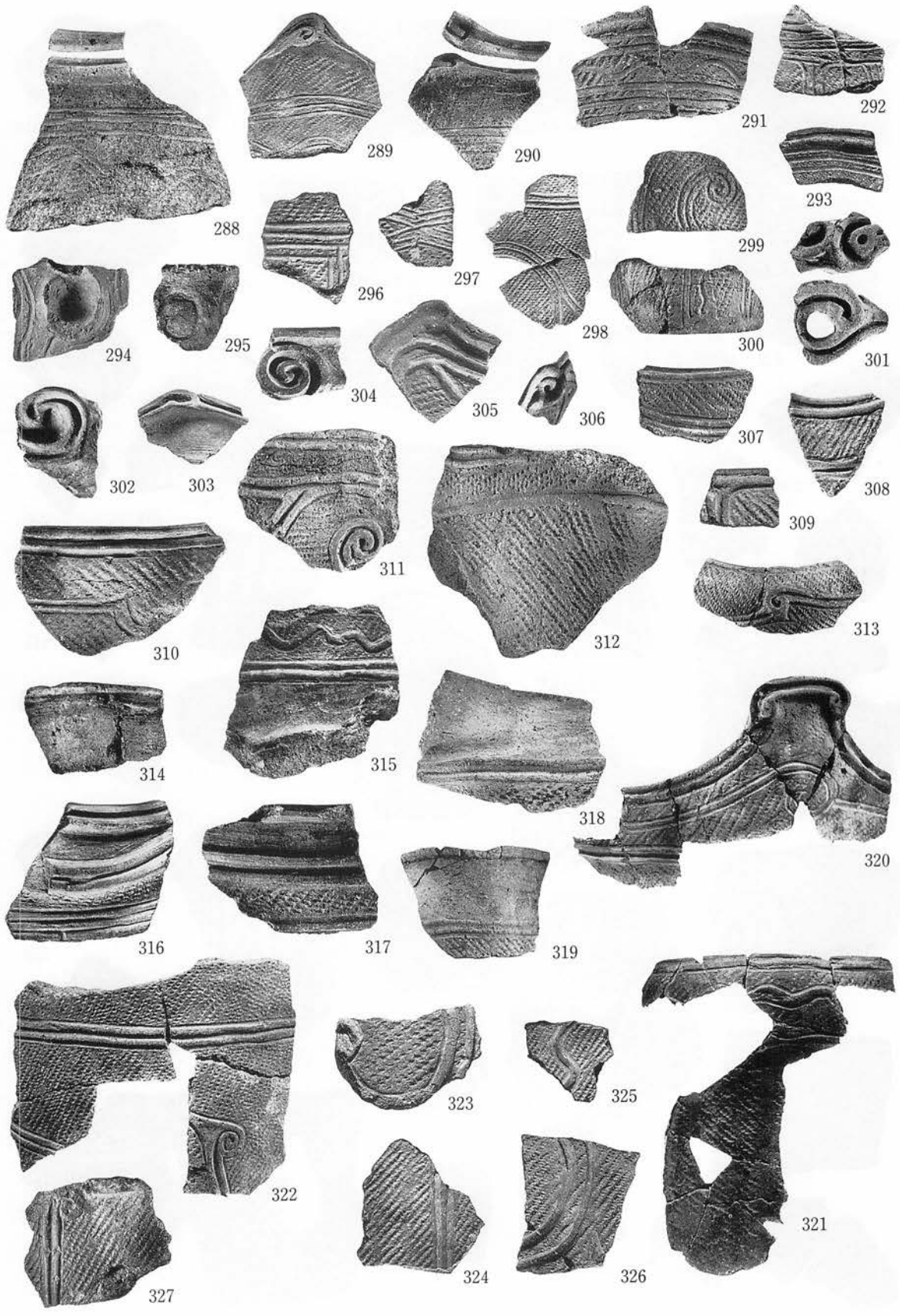
写真図版70 遺構外出土遺物 土器 6



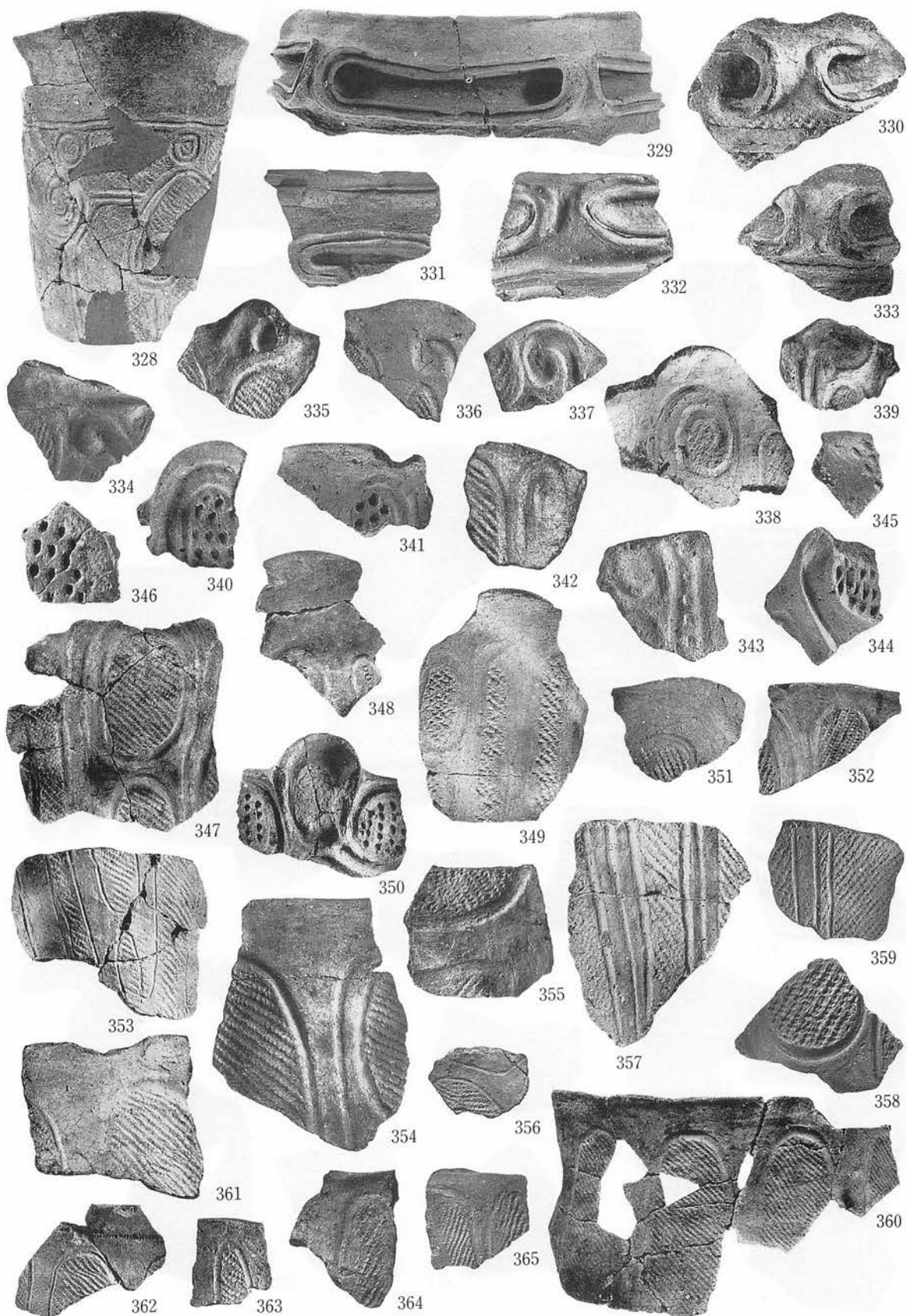
写真図版71 遺構外出土遺物 土器 7



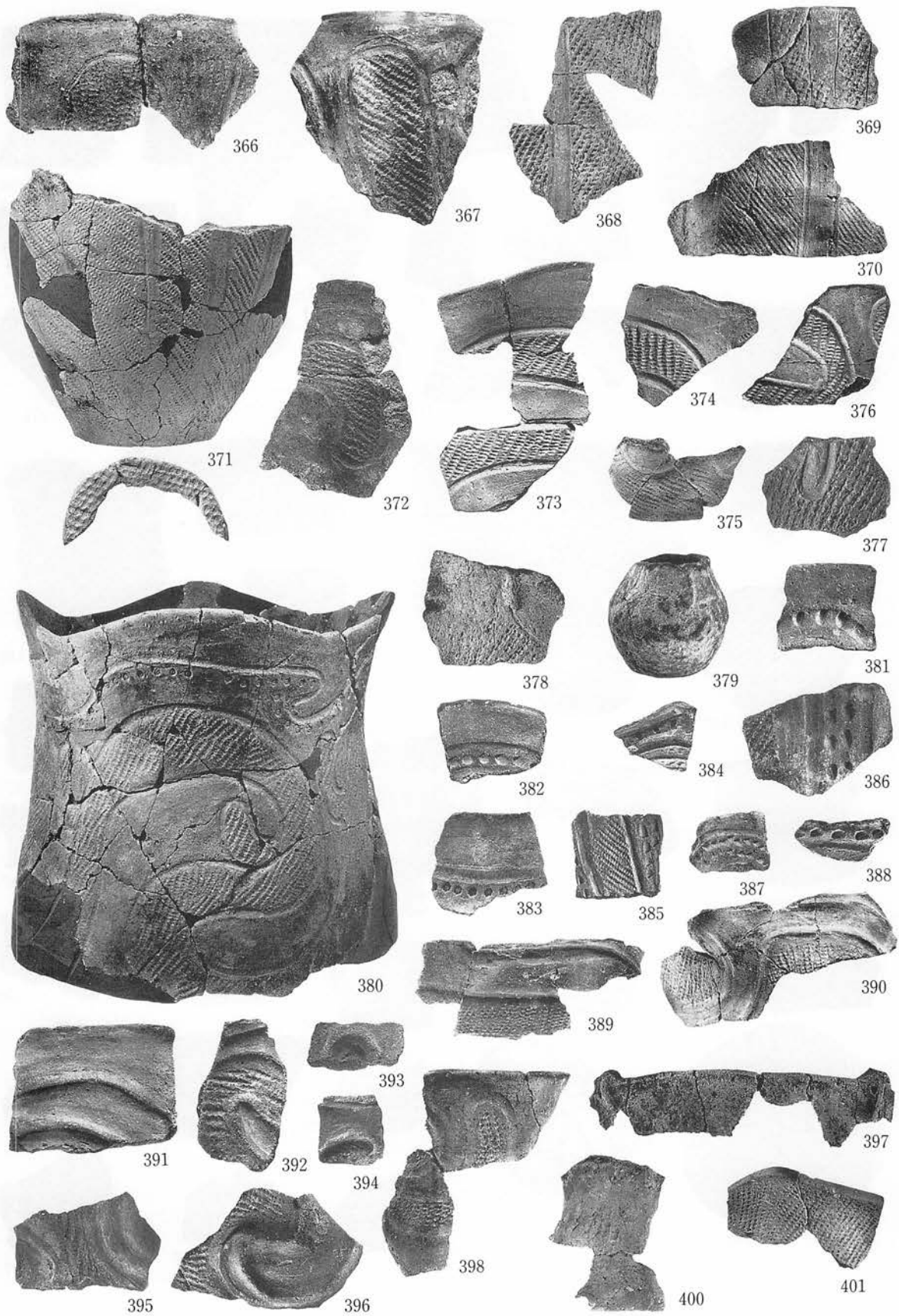
写真图版72 遺構外出土遺物 土器 8



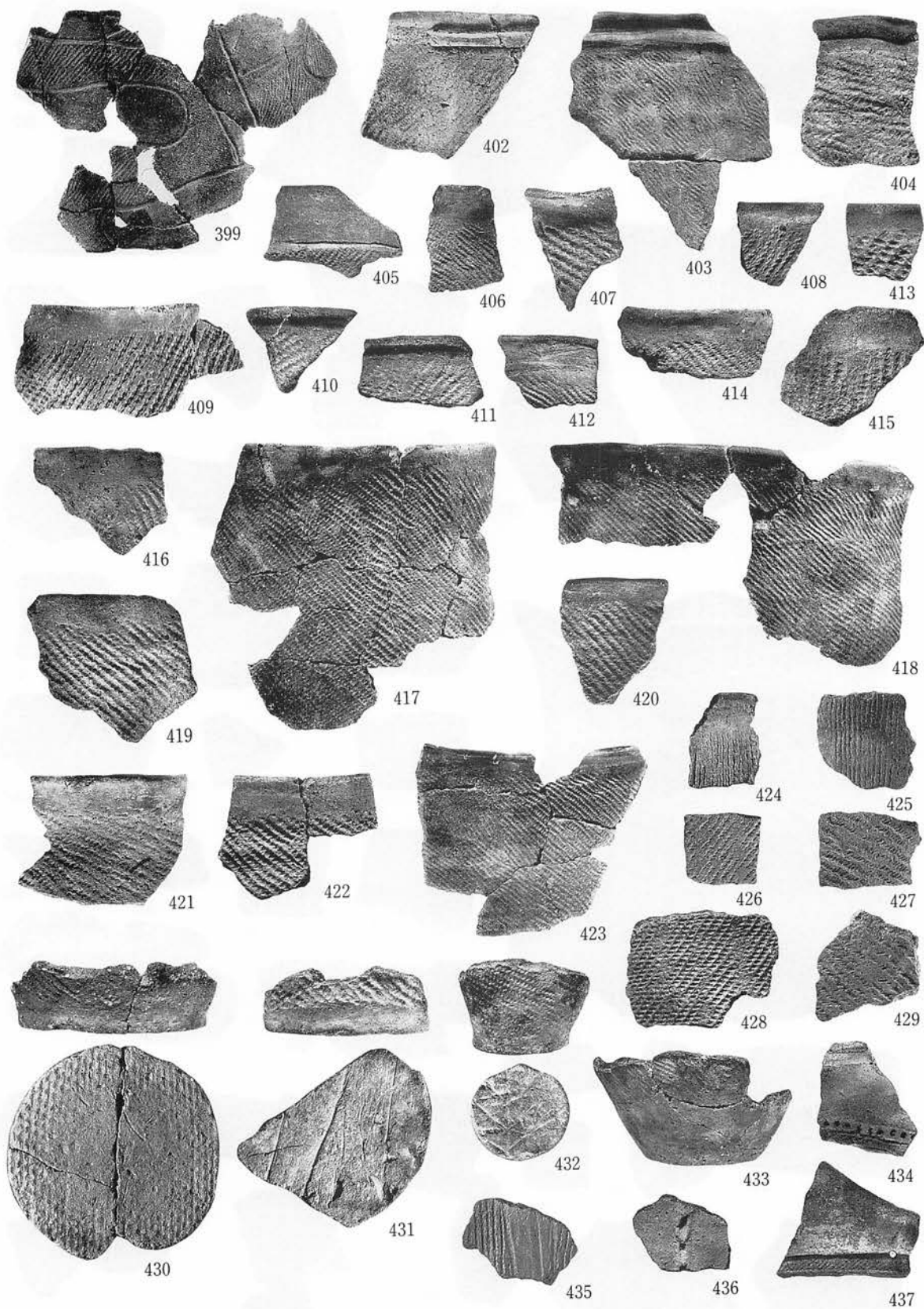
写真図版73 遺構外出土遺物 土器 9



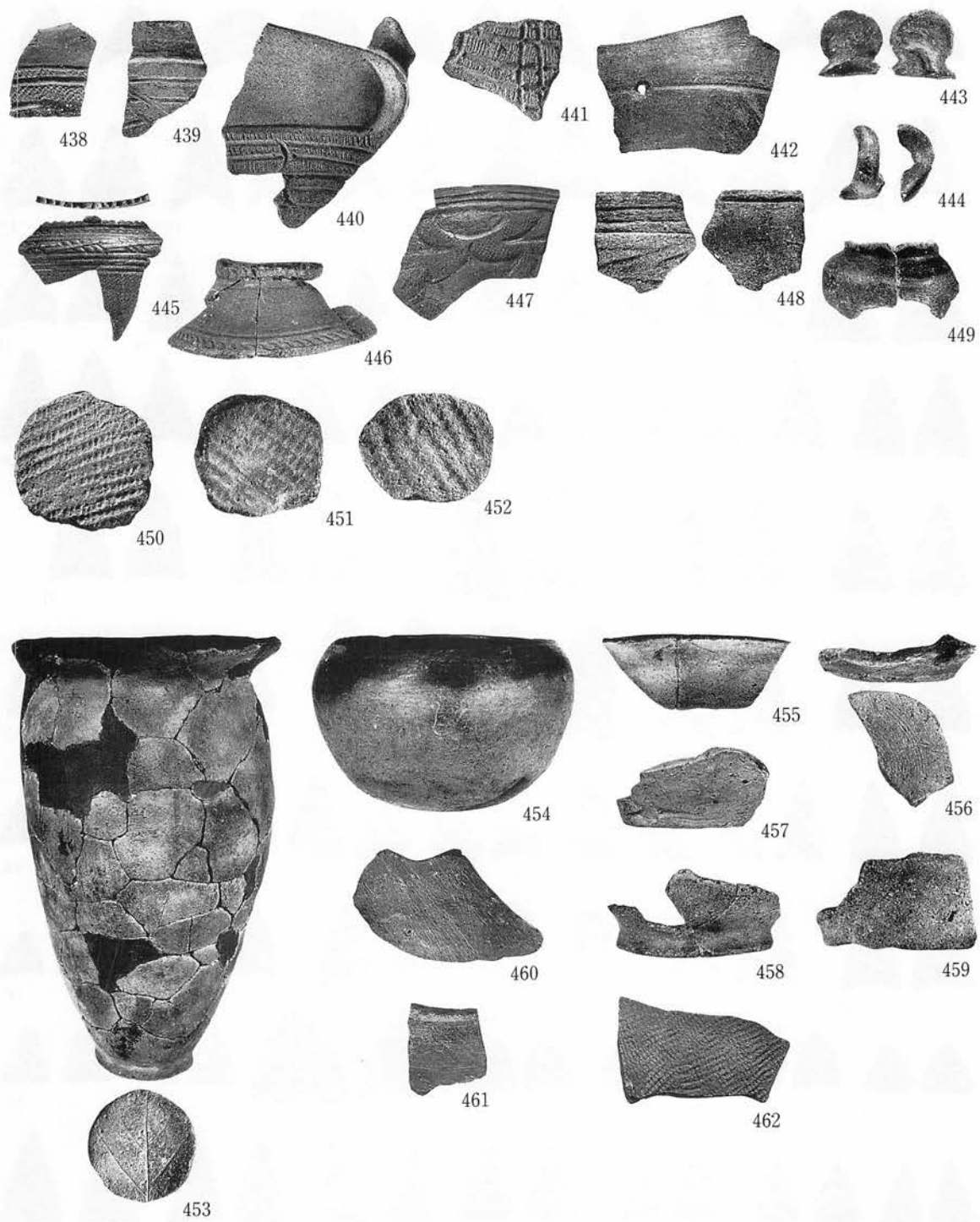
写真図版74 遺構外出土遺物 土器10



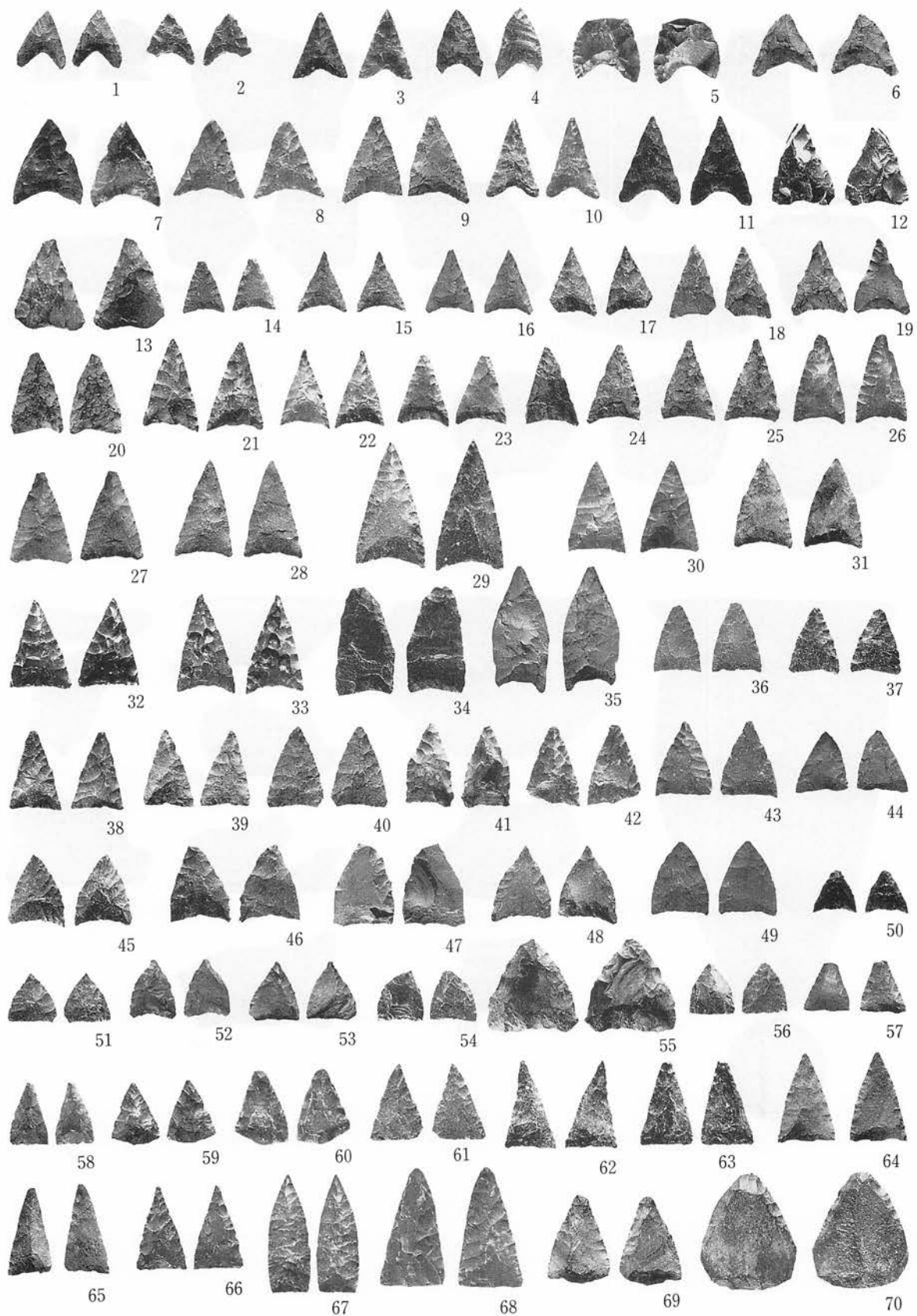
写真图版75 遺構外出土遺物 土器11



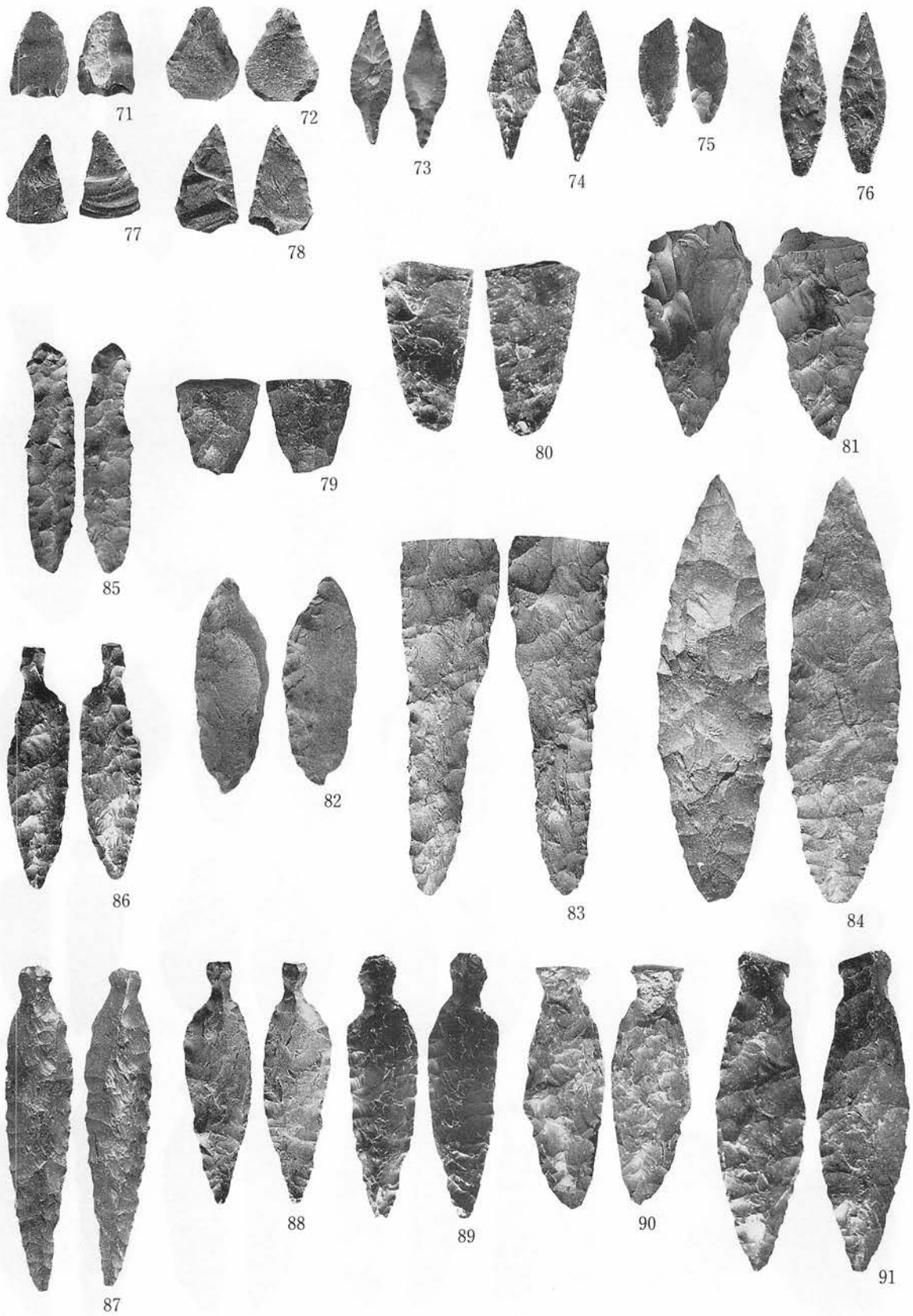
写真图版76 遺構外出土遺物 土器12



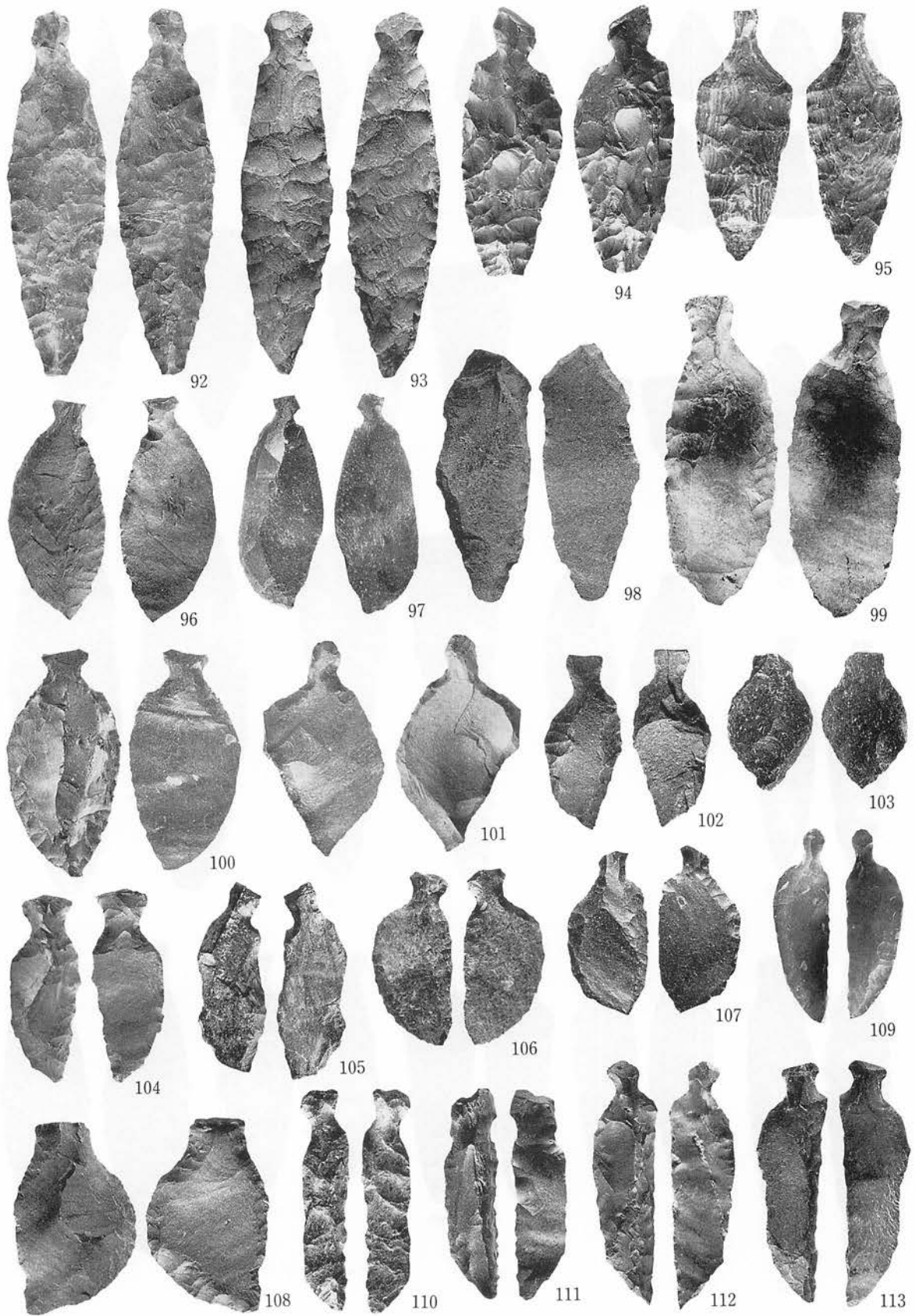
写真図版77 遺構外出土遺物 土器13、土製品



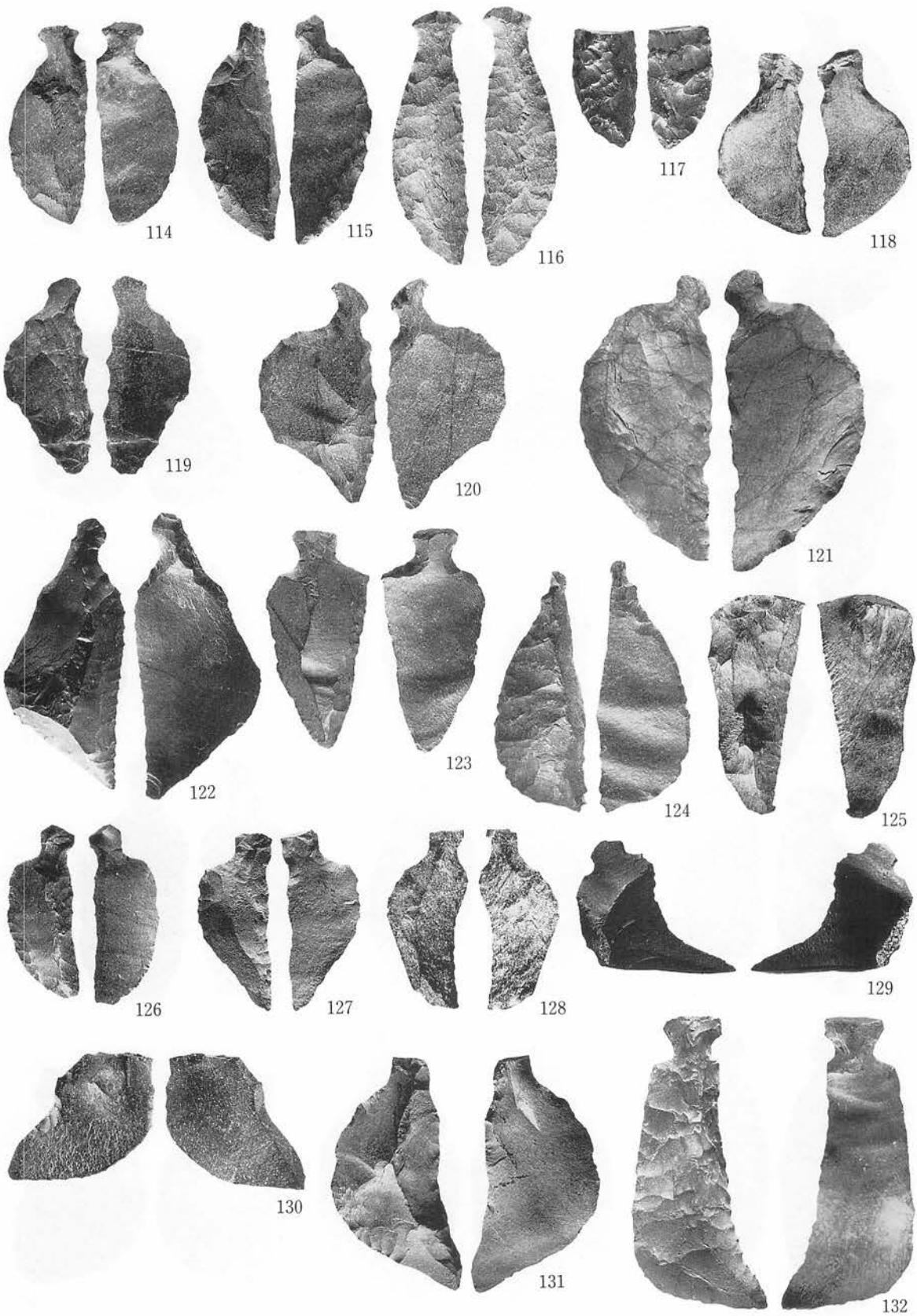
写真图版78 遺構外出土遺物 石器 1



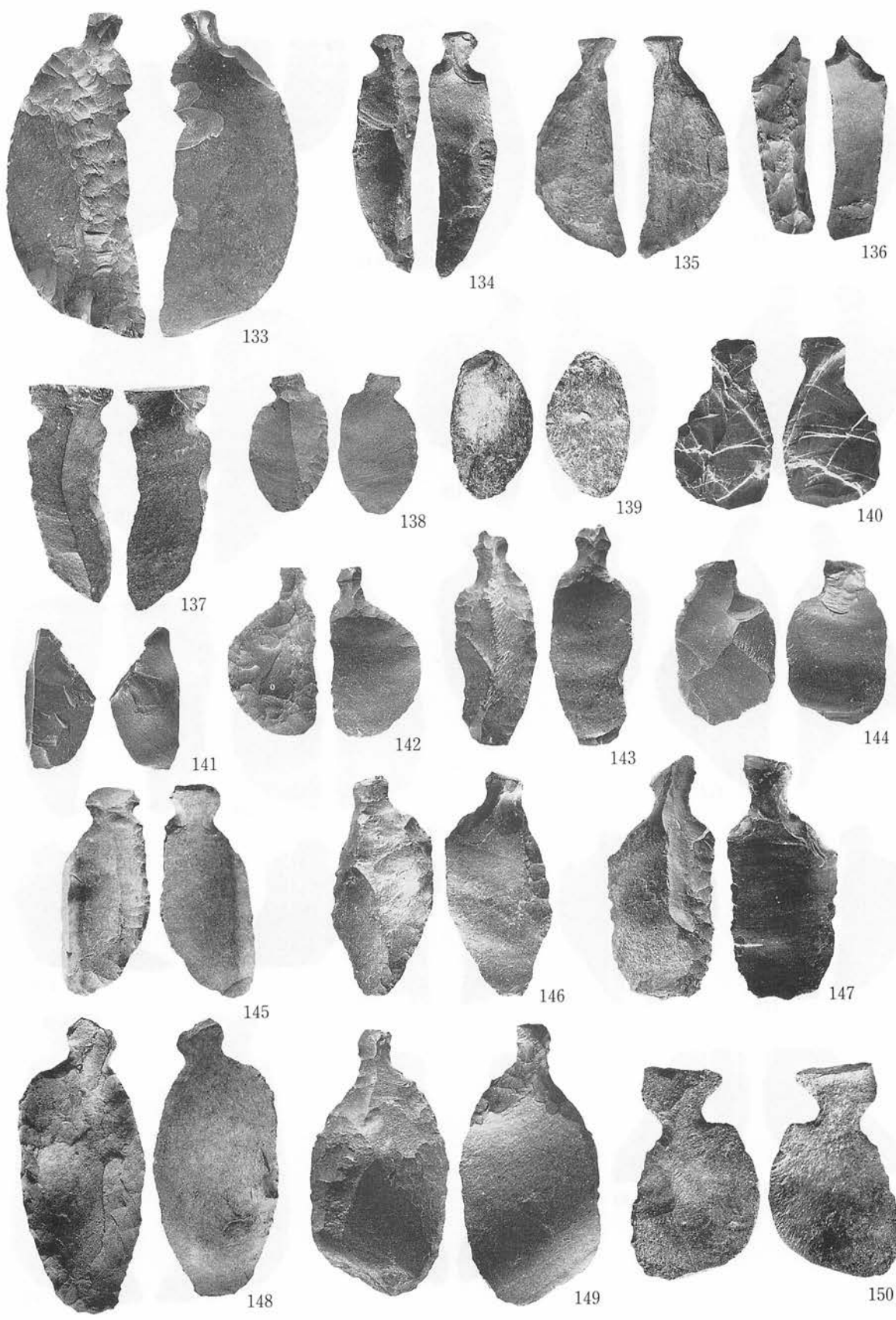
写真図版79 遺構外出土遺物 石器 2



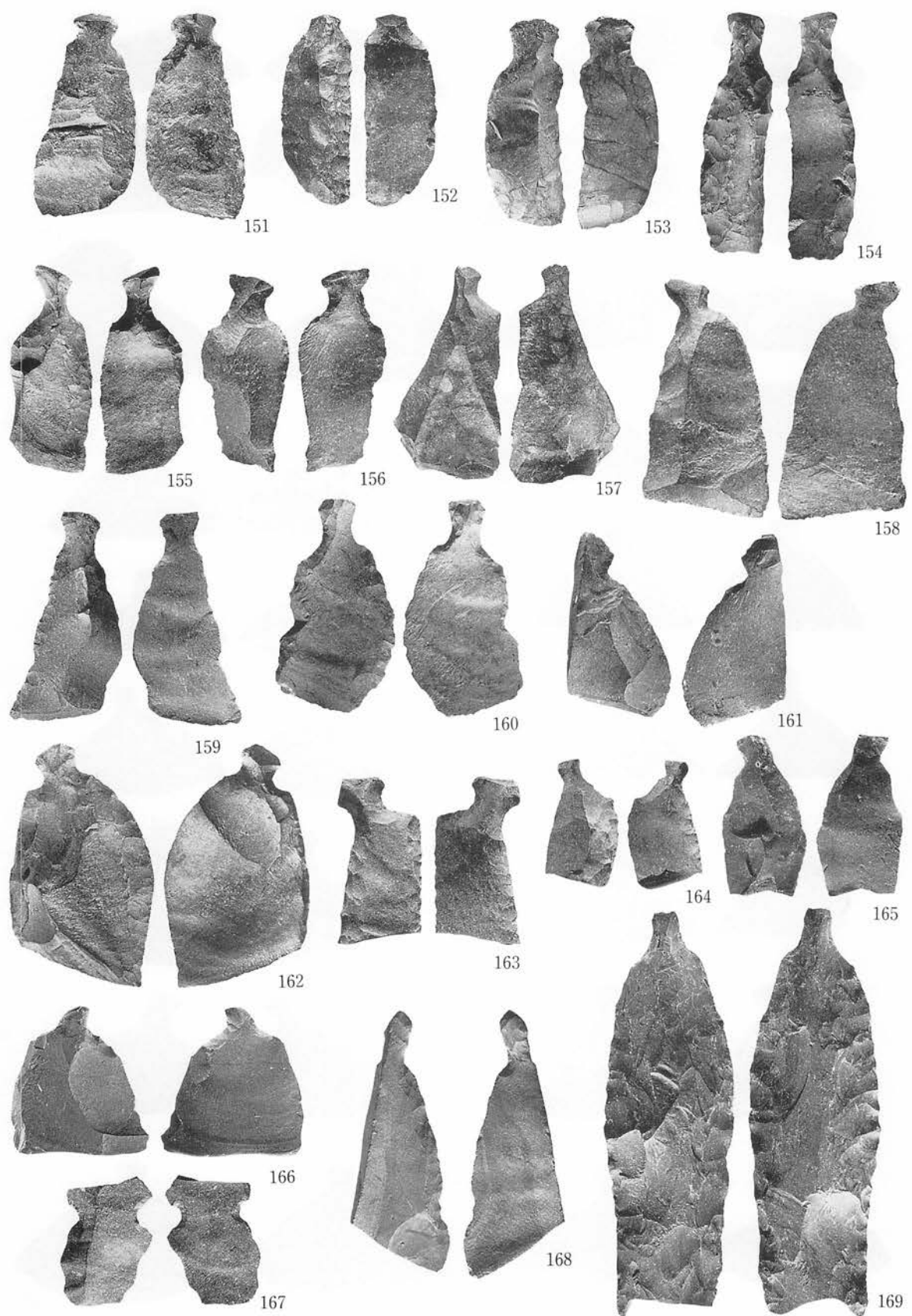
写真図版80 遺構外出土遺物 石器3



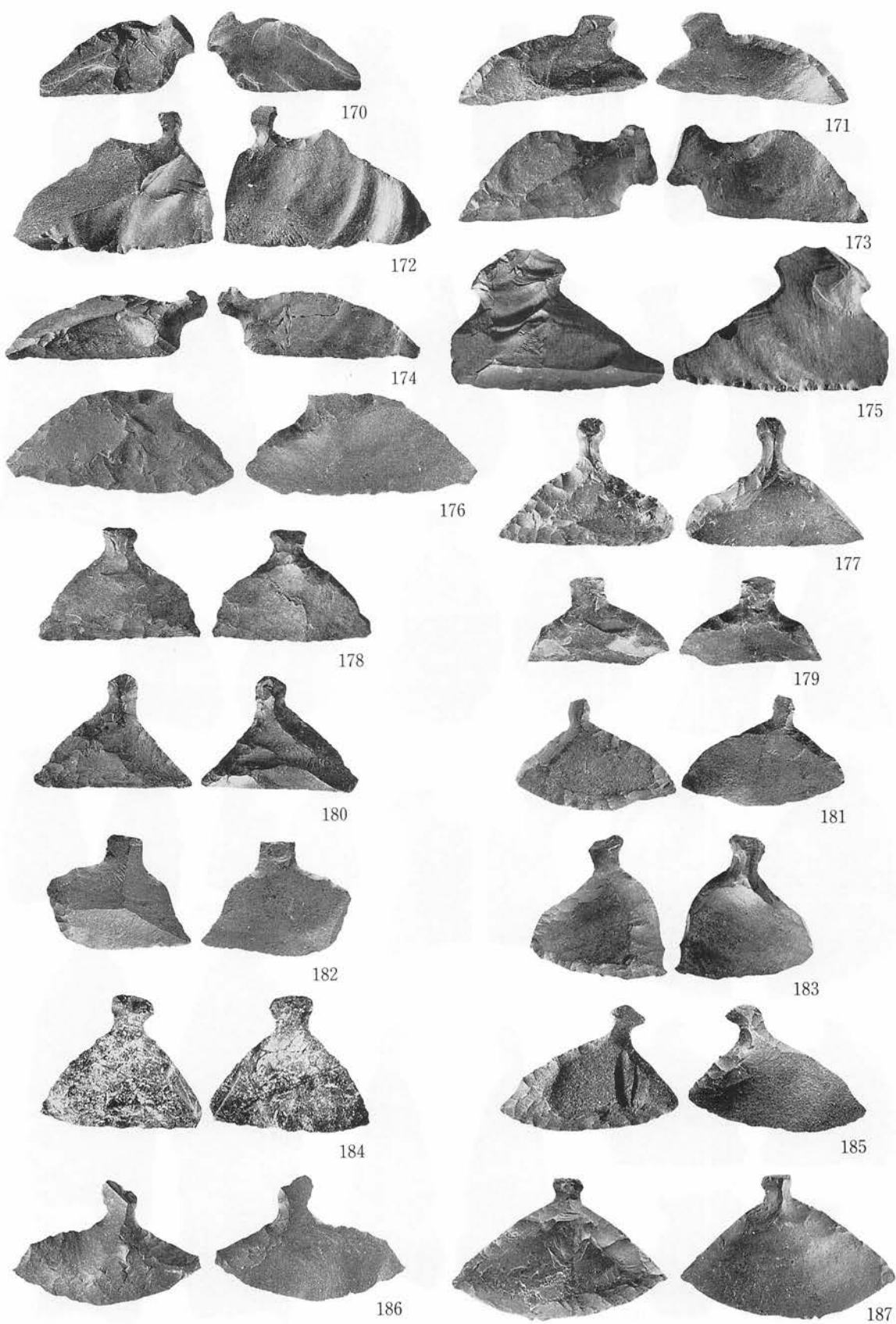
写真図版81 遺構外出土遺物 石器4



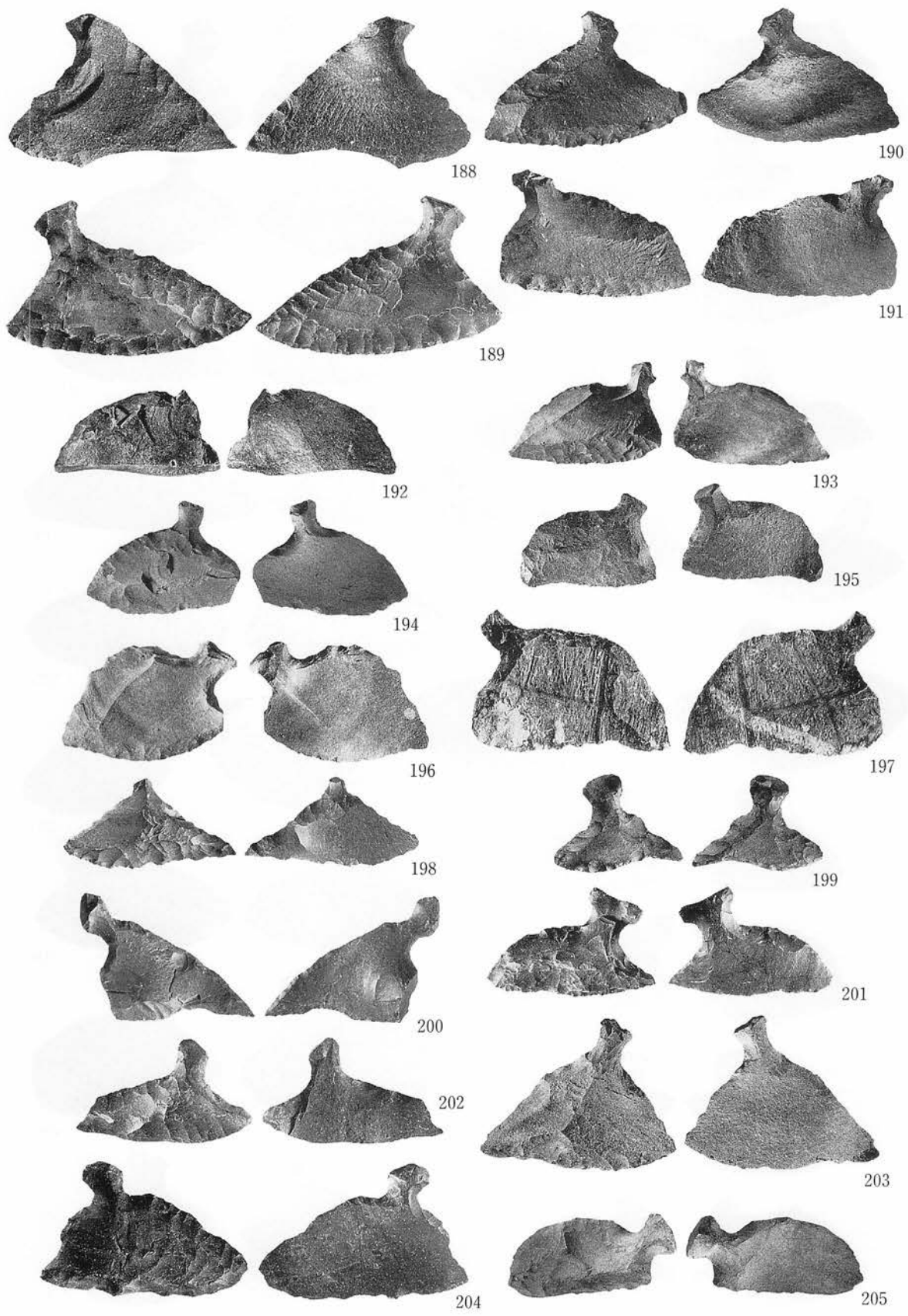
写真図版82 遺構外出土遺物 石器 5



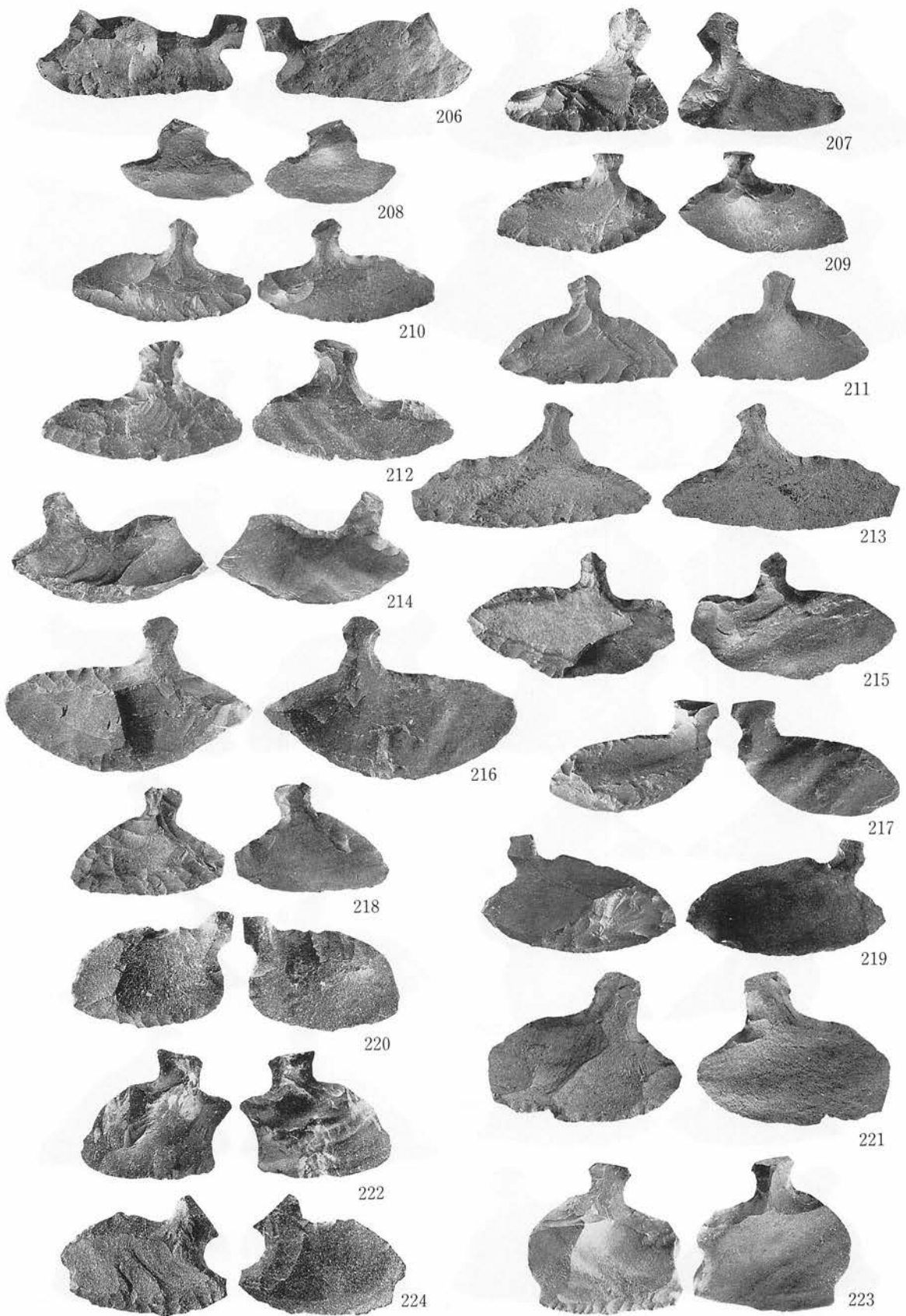
写真図版83 遺構外出土遺物 石器 6



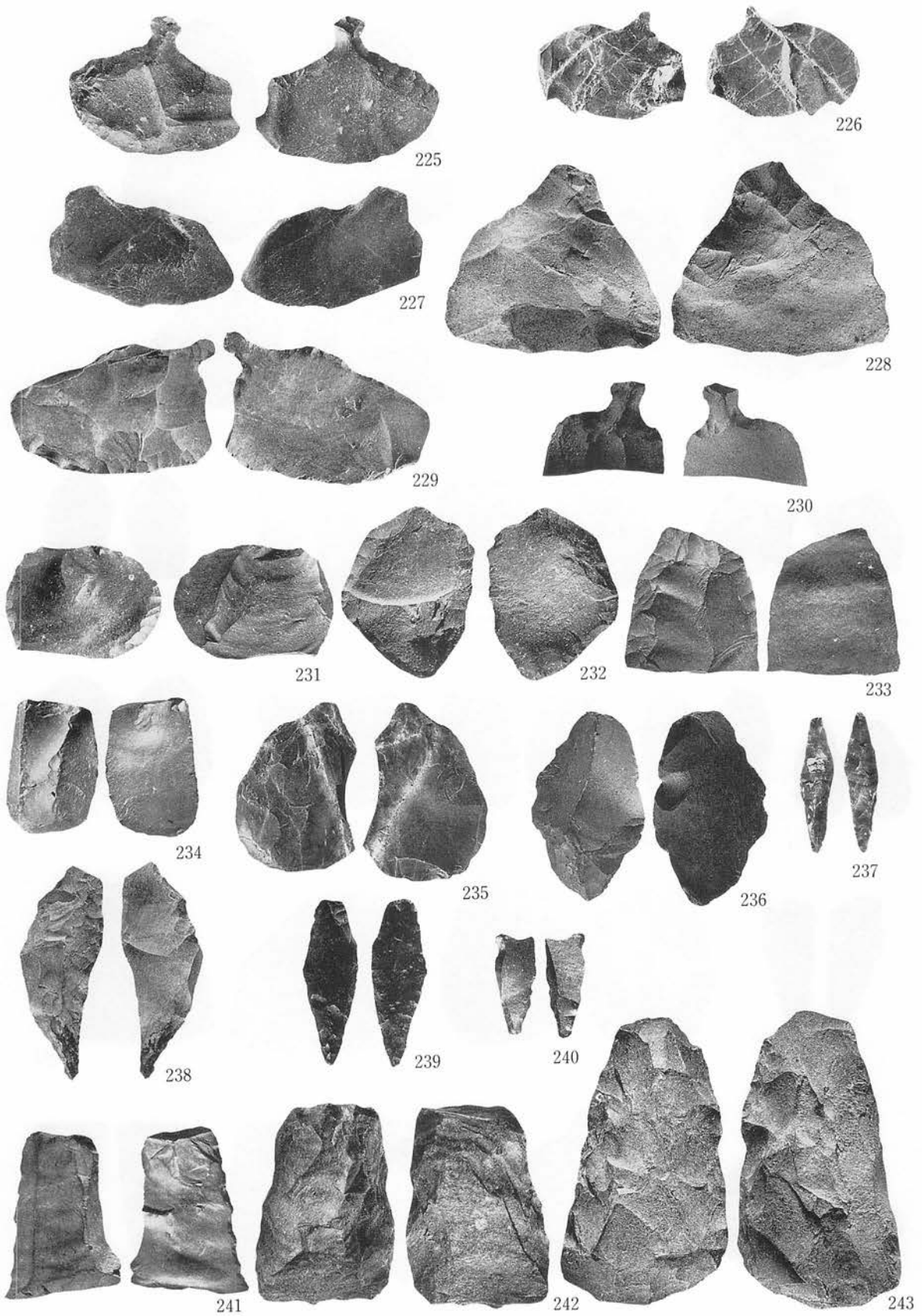
写真図版84 遺構外出土遺物 石器7



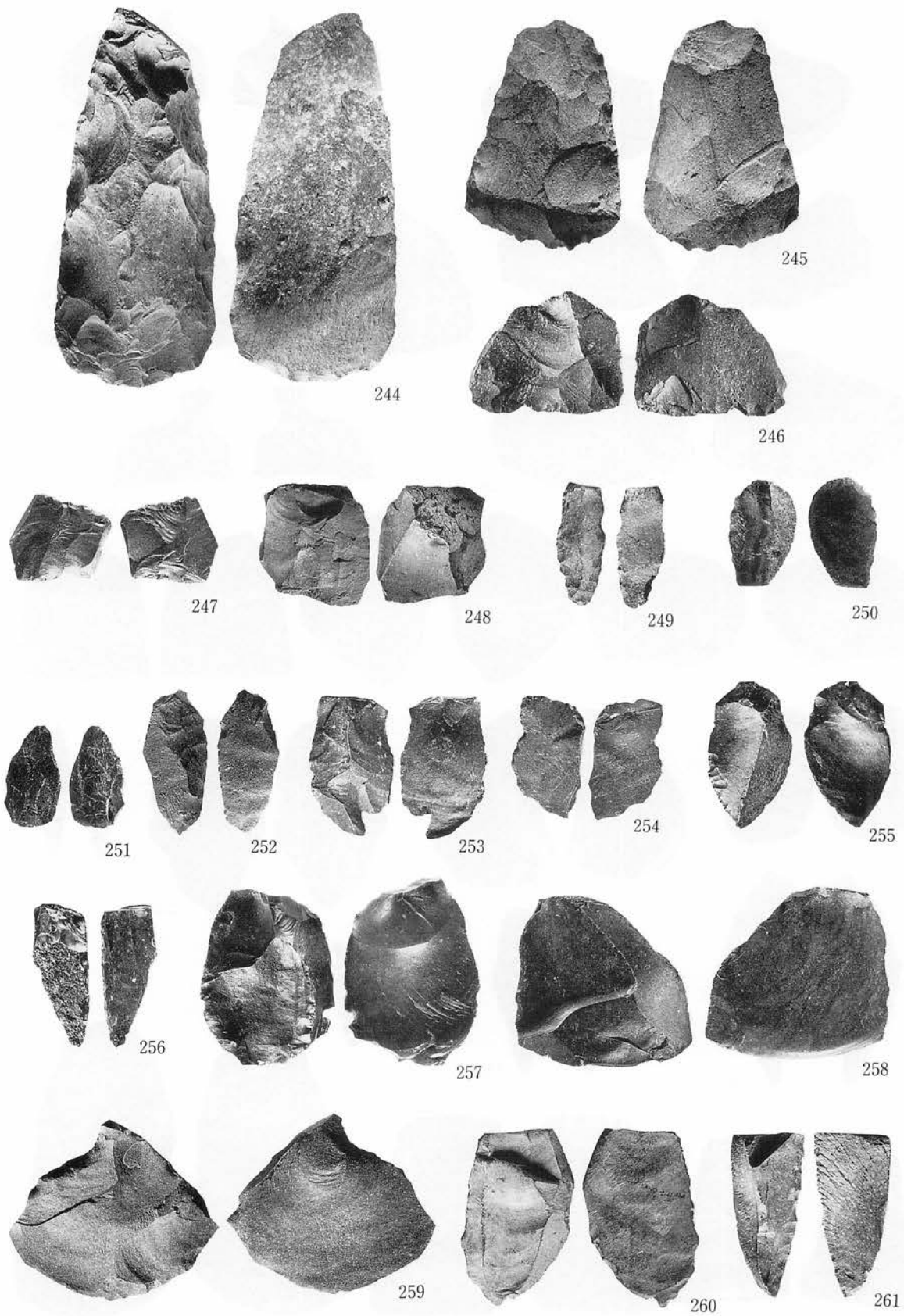
写真図版85 遺構外出土遺物 石器 8



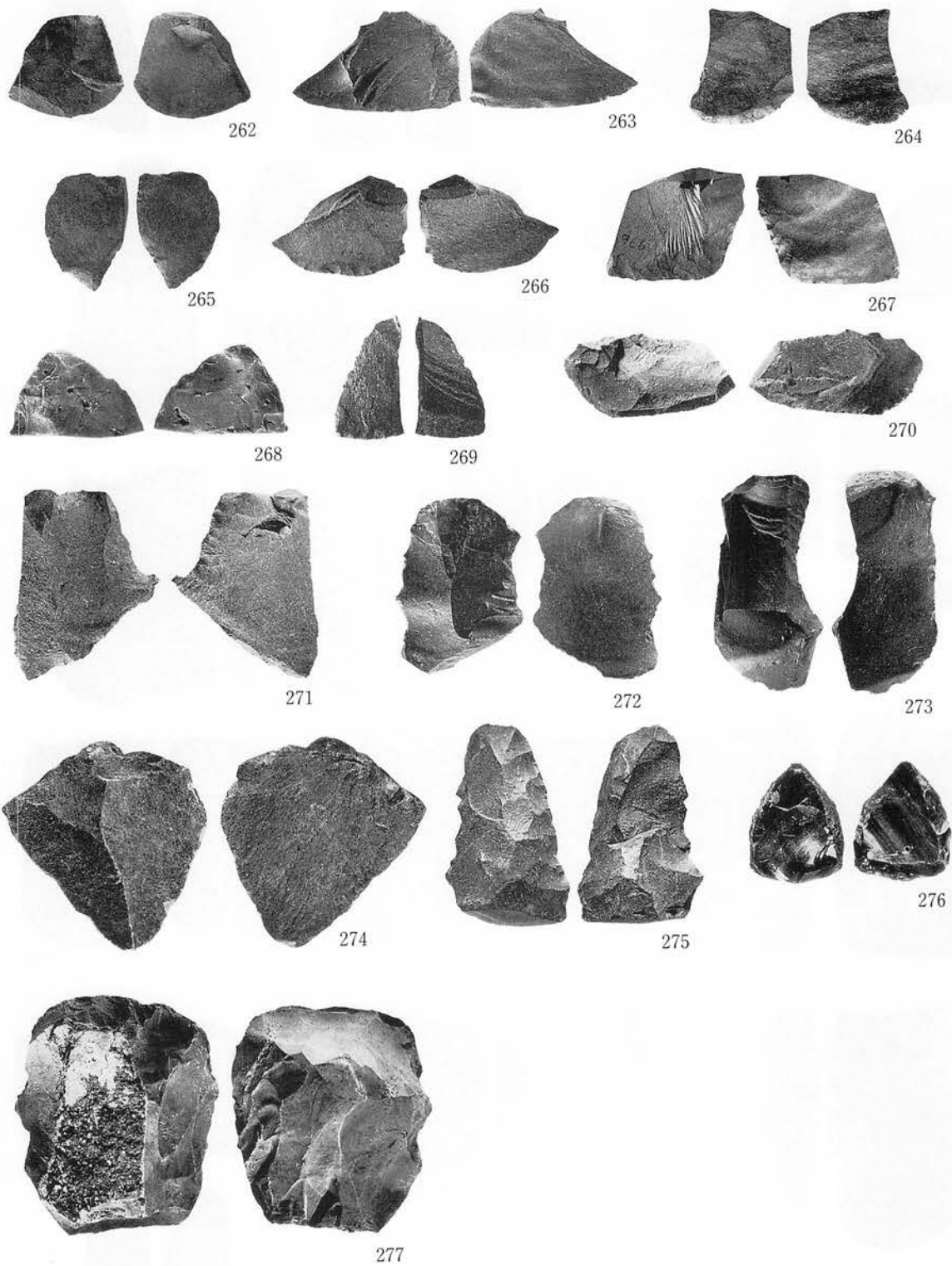
写真図版86 遺構外出土遺物 石器 9



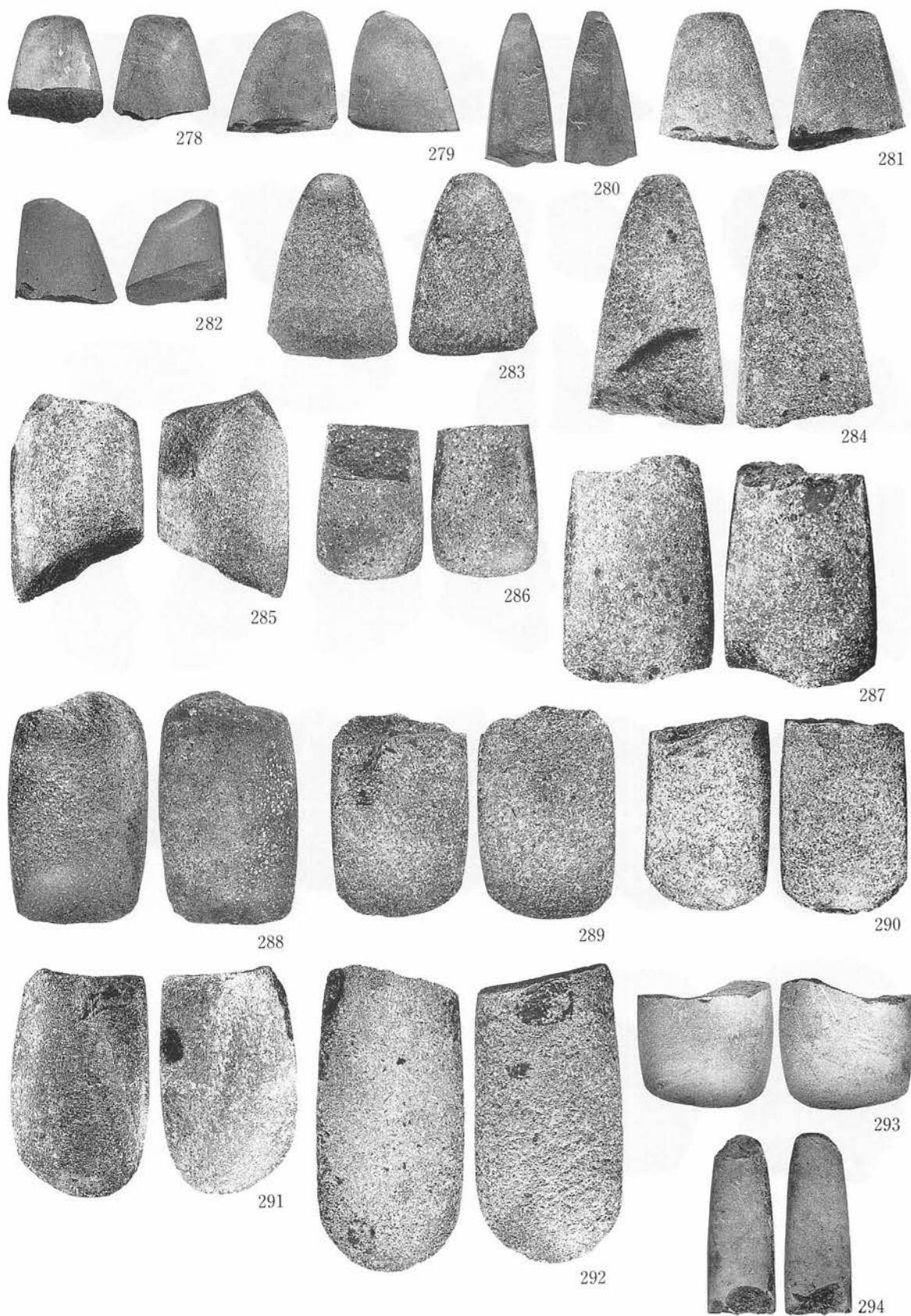
写真图版87 遺構外出土遺物 石器10



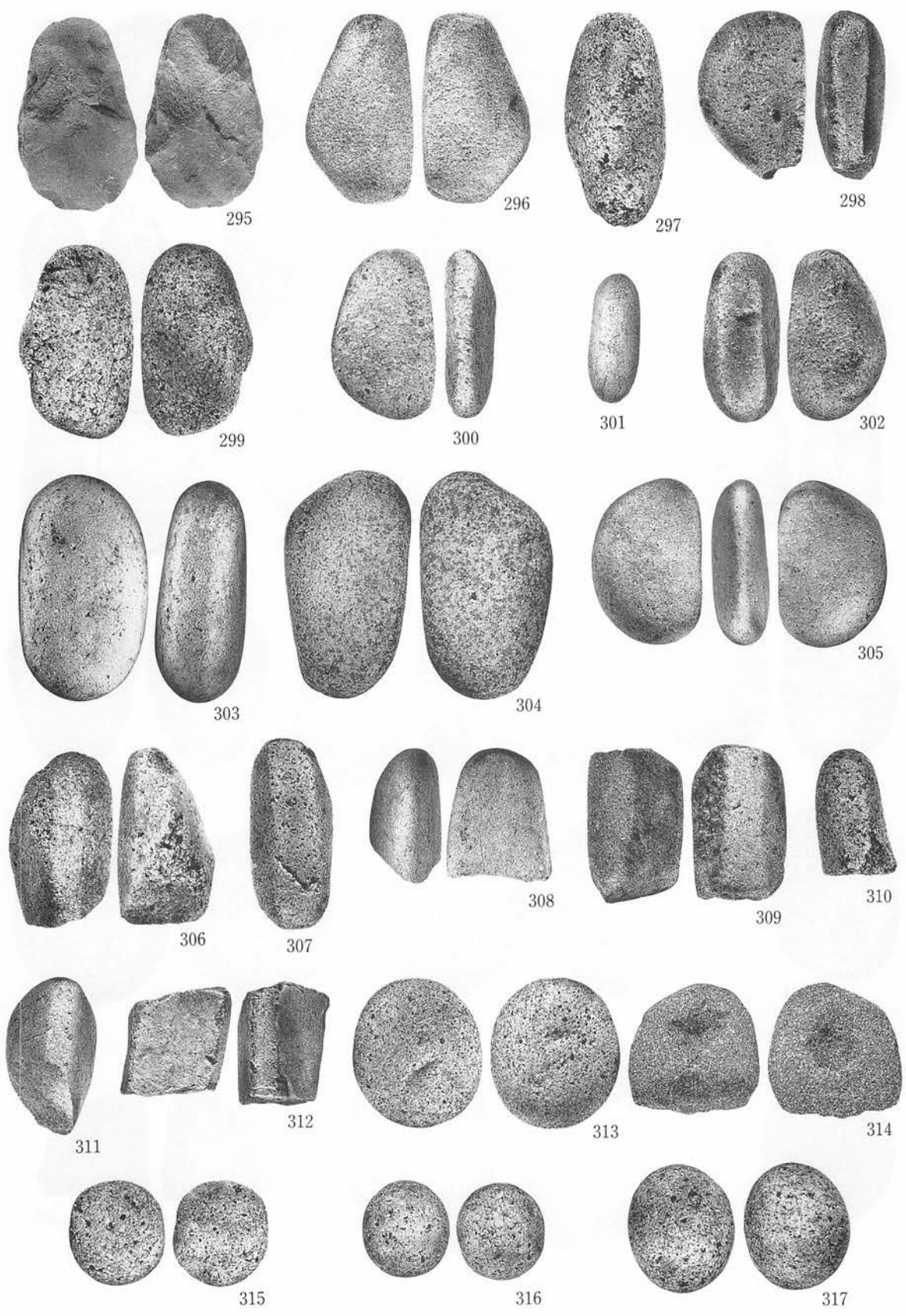
写真図版88 遺構外出土遺物 石器11



写真図版89 遺構外出土遺物 石器12



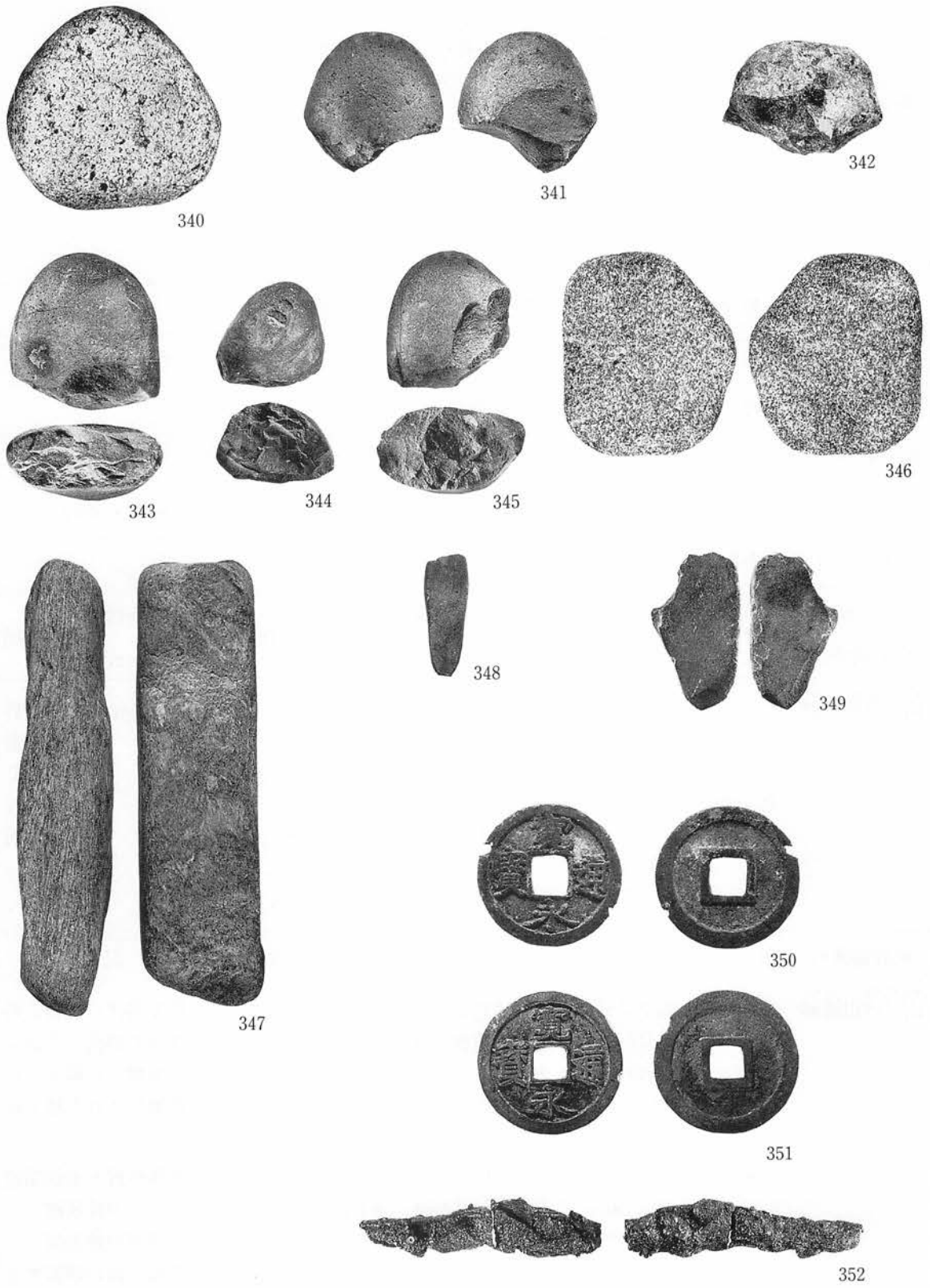
写真図版90 遺構外出土遺物 石器13



写真図版91 遺構外出土遺物 石器14



写真図版92 遺構外出土遺物 石器15



写真図版93 遺構外出土遺物 石器16、銭、鉄製品

報 告 書 抄 録

ふりがな	やまのうちのさんいせきほくつちようさほうこくしょ							
書名	山ノ内Ⅲ遺跡発掘調査報告書							
副書名	三陸縦貫自動車道(山田道路)関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第250集							
編著者名	神 敏明・高橋佐知子・工藤利幸							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019)638-9001・9002							
発行年月日	西暦 1997年3月 25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やまのうちのさんいせき 山ノ内Ⅲ遺跡	いわてけんしもへ 岩手県下閉 いぐんやまだまち 伊郡山田町 ふなてし 船越 ちわり 第2地割	03482	MG18-0281	39度 29分 11秒	141度 58分 21秒	1993.7.26 ～ 1993.10.28 1994.4.5 ～ 1994.8.12	9,000m ²	三陸縦貫 自動車道 (山田道路) 建設に伴 なう事前 調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
やまのうちのさんいせき 山ノ内Ⅲ遺跡	集 落	縄文時代 早期末～ 前期初頭 中期後葉 ～末葉	竪穴住居跡21棟 竪穴状遺構2基 土坑 11基 焼土遺構 37基	縄文土器 (早・前・中・後・晩期) 円盤状土製品 石器・石製品		縄文時代の尾根の鞍 部から斜面に広がる 集落域と谷筋から多 数検出された焼土群		
	生産遺跡	平安時代 (9C末～ 10C中葉)	竪穴住居跡3棟 土坑 2基 製鉄炉 8基 炭窯 17基 炭置き場1か所 焼土遺構 4基	土師器 須恵器 鉄滓、砂鉄、羽口 支脚		製鉄炉群と製鉄関連 の工人の住居跡 住居内の鍛冶炉 製塩土器に類似する 土器の出土		

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長	山 影 源 吉		
副 所 長	鷹 羽 康 造		
〔管 理 課〕			
管 理 課 長	澤 田 寛		
主 任	横 山 文 彦		
主 事	千 葉 勝 彦		
〔調 査 課〕			
調 査 課 長	小 田 野 哲 憲	文 化 財	羽 柴 直 人
課 長 補 佐	高 橋 與 右 衛 門	專 門 調 査 員	星 雅 之
〃	工 藤 利 幸	〃	高 木 晃
主 任 文 化 財	中 川 重 紀	〃	杉 沢 昭 太 郎
專 門 調 査 員	佐 々 木 清 文	〃	大 道 篤 史
〃	高 橋 義 介	〃	溜 浩 二 郎
〃	酒 井 宗 孝	〃	村 上 拓
〃	菊 池 人 見	〃	中 村 直 美
文 化 財	小 山 内 透	期 限 付	川 向 聖 子
專 門 調 査 員	高 橋 佐 知 子	專 門 職 員	佐 藤 良 和
〃	松 本 建 速	〃	篠 根 敬 志
〃	菊 地 榮 壽	〃	柴 田 慈 幸
〃	宮 本 節 子	〃	鈴 木 浩 二
〃	下 田 隆 衛	〃	鈴 木 聡
〃	濱 田 宏	〃	高 橋 実 央
〃	金 子 昭 彦	〃	千 葉 和 弘
〃	晴 山 雅 光	〃	平 澤 里 香
〃	木 戸 口 俊 子	〃	山 口 俊 規
〃	阿 部 勝 則	〃	山 下 浩 幸
〔資 料 課〕			
資 料 課 長	菊 池 強 一		
文 化 財	伊 藤 拓		
專 門 調 査 員			

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第250集

山ノ内Ⅲ遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道(山田道路)関連遺跡発掘調査

印刷 平成9年3月17日

発行 平成9年3月25日

発行 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県盛岡市下飯岡11-185

TEL (019) 638-9001

印刷 株式会社 杜陵印刷

〒020-01 盛岡市みたけ二丁目22-50

TEL (019) 641-8000(代)

© 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1997